

原町市埋蔵文化財調査報告書 第33集

蛭沢遺跡群・川内迫B遺跡群

—工場用地造成に伴う発掘調査報告—

2003年3月

日立建機株式会社土浦事業本部
福島県原町市教育委員会

蛭沢遺跡群・川内迫B遺跡群

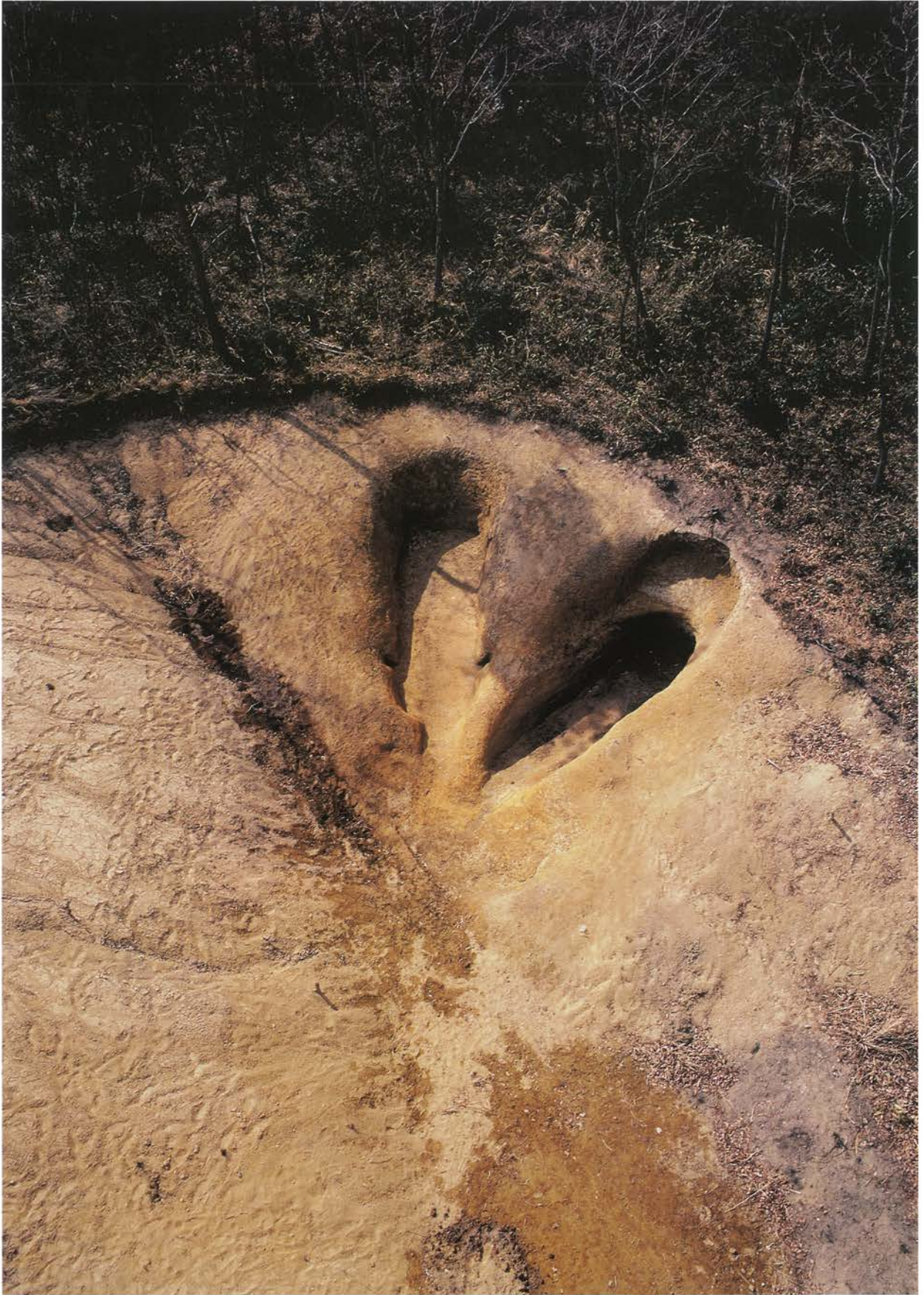
—工場用地造成に伴う発掘調査報告—

2003年3月

日立建機株式会社土浦事業本部
福島県原町市教育委員会



蛭沢遺跡群A地点全景



蛭沢遺跡群A地点木炭窯跡



蛭沢遺跡群A地点製鉄炉跡



1 川内迫B遺跡群C地点全景(1)



2 川内迫B遺跡群C地点全景(2)

序 文

文化財は、わが国の長い歴史の中で生まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民共有の財産であり、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものです。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字がまだなかった時代の人々の暮らしや、文字資料だけでは知ることができない生活の様子について、多くの情報を私たちに与えてくれます。

近年、当地には広範囲にわたり開発の波が押し寄せて来ております。一方、長い歴史の中で引き継がれてきた埋蔵文化財が一日にして失われてしまう危険性があります。このような状況の中、原町市教育委員会では埋蔵文化財の保護、保存に努めているわけですが、このたび原町市が誘致してまいりました日立建機株式会社土浦事業本部による原町工場造成に伴い発掘調査を実施いたしました。

当地方には、以前より多数の鉄滓の散布地が知られており、とりわけ、原町市金沢地区では、東北電力原町火力発電所建設に伴う発掘調査により、全国最大規模の古代の製鉄遺跡があったことが判明しております。今回の発掘調査によりまして、奈良・平安時代の製鉄炉跡など多数の遺構・遺物が発見され、貴重な成果を得ることができました。

本書はその内容を詳細に報告するものであり、今後、地域の歴史研究や文化財保護のために役立てていただければ幸いに存じます。

おわりに、調査に対し、特段の理解と協力をいただいた日立建機株式会社土浦事業本部、調査にあたり指導をいただきました福島県教育庁に対し深く感謝いたすとともに、調査に関係された各位に衷心より謝意を表します。

平成15年3月

原町市教育委員会
教育長 渡邊 光雄

例 言

1. 本書は、日立建機株式会社土浦事業本部の原町工場建設に伴い、平成4年度から平成9年度にかけて実施した蛭沢遺跡群・川内埒B遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡にかかる発掘調査のすべての経費は日立建機株式会社土浦事業本部の負担による。
3. 発掘調査は、原町市教育委員会が実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査主体 原町市教育委員会
 調査担当 生涯学習部文化課
 担当者 堀 耕平・齋藤直之

事務局体制

	平成4年度	平成5年度	平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度
教 育 長	渡部秀夫	渡部秀夫	渡部秀夫	渡部秀夫	井村 寛	千葉良則
教 育 次 長	千葉良則	千葉良則	中田幸夫	横山英夫		
部 長					中善寺敏行	中善寺敏行
次 長					佐藤禎一	佐藤一男
文 化 課 長	佐藤一男	佐藤一男	佐藤一男	佐藤一男	佐藤一男	大内 勝
主幹・課長補佐		鈴木吉久	鈴木吉久		高田 毅	高倉一夫
係 長	青田富雄			高田 毅		高田 毅
係 員	武田耕平	武田耕平	堀 耕平	木幡雅巳	木幡雅巳	木幡雅巳
	平田良親	齋藤直之	平田良親	鈴木文雄	鈴木文雄	鈴木文雄
		平田良親	齋藤直之	堀 耕平	堀 耕平	堀 耕平
			館岡るみ	館岡るみ	荒 淑人	荒 淑人
				館岡るみ	綱川裕子	
	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	
教 育 長	鈴木清身	鈴木清身	鈴木清身	鈴木清身	渡邊光雄	
部長・事務局長	佐藤一男	佐藤一男	木幡新一	木幡新一	石橋三男	
部長・理事			渡部紀佐夫	渡部紀佐夫		
次 長	渡部紀佐夫	阿部敏夫	阿部敏夫	阿部敏夫	佐藤 光	
文 化 課 長	阿部敏夫				坂下昌弘	
主 幹 補 佐	高倉一夫	高倉一夫	高倉一夫	高倉一夫	二谷 真	
係 長	小田幸夫	小田幸夫	小田幸夫	堀 耕平	堀 耕平	
	山家正勝	堀 耕平	堀 耕平			
係 員	木幡雅巳	山内茂樹	山内茂樹	渡辺芳信	渡辺芳信	
	鈴木文雄	鈴木文雄	鈴木文雄	二本松文雄	齋藤直之	
	堀 耕平	北山淑英	北山淑英	北山淑英	北山淑英	
	荒 淑人	荒 淑人	荒 淑人	荒 淑人	荒 淑人	
	綱川裕子	綱川裕子	藤木 海	藤木 海	藤木 海	
	小林美枝子	小林美枝子	小林美枝子	小林美枝子	小林美枝子	

4. 地形測量図作成及びトラス測量・基準杭の設置は、(株)日建に委託した。
5. 調査において実施した空中写真撮影は、新日本航空(株)に委託した。
6. 本報告書に掲載した遺構写真は堀耕平・齋藤直之・相良英樹が撮影し、遺物写真は齋藤直之が撮影した。

7. 本報告書に掲載した遺構の測量図は堀耕平・齋藤直之・相良英樹が作成した。
8. 本報告書に掲載した遺構測量図ならびに遺物整理および実測図作成・トレースは堀耕平・齋藤直之・荒淑人・藤木海の指示のもと、安達訓仁・久松舞子・佐藤裕太・岩谷こずえ・狭川麻子・新川幸子・古谷洋子・山本恵子・太田正子・寺内美智子・遠藤美恵子・野沢成子が行った。
9. 本報告書に掲載した文章は堀耕平の監修のもと、齋藤直之・荒淑人・藤木海が分担して執筆し、最終的な編集は荒、藤木が協議して行った。文末には執筆者の氏名を付し、文責を明らかとしている。
10. 本遺跡の調査、報告書作成に際しては次の機関及び個人からご指導、ご協力いただいた。
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター遺跡調査課・山武考古学研究所・鈴木 啓・玉川一郎・寺島文隆・木本元治・安田 稔・飯村 均・吉田秀亨・植村泰徳・市川一秋・長谷川一郎・大越直樹 (敬称略・順不同)
11. 調査にかかわる図面・写真・遺物等の資料は、原町市教育委員会が保管している。
12. 発掘調査の実施については、次の機関及び個人のご協力をいただいた。
日立原町電子工業株式会社
13. 発掘調査参加者は下記のとおりである。

[発掘作業]

青田猪一郎・秋山元吉・阿部定雄・荒川幸雄・稲村昭衛・池崎スエ子・宇佐見 實・大杉茂男・大野利雄・押野己之助・太田ミツ・片野雅子・菅野秀雄・菅野フクイ・加賀田勇一・栢本 充・北原 洋・木村 正・紺野昭義・木幡春江・佐々木先江・佐藤 徹・佐藤 整・佐藤幸子・佐藤敏雄・佐藤時雄・佐藤フクイ・佐久間三雄・佐藤 徹・相良英樹・雫石貞子・庄子輝一郎・新開光子・志賀セツ子・杉浦桂子・諏佐忠男・白石正男・末永富美子・高藤トヨ子・高橋菊松・館山利正・武山民男・武志正信・高野マツイ・平 音次郎・高田律子・玉木 清・高井孝子・但野八重子・鶴蒔秀子・西内みさ子・新館新男・新妻順子・西 幸吉・西 敏子・根本友彦・橋本颯子・橋本サツ子・林崎喜一・原田三郎・伏見芳子・藤田正司・堀内 武・松本武雄・松本セツ・松本ハツノ・真壁ヨシ子・門馬シヅイ・門馬孝枝・門馬 誠・門馬正光・山本国照・山田春雄・米津 豊・渡辺辰男

[測量作業]

佐藤 徳・平山智・岡田照美・水野真澄・紺野典郎

[整理作業]

狭川麻子・相良英樹・安達訓仁・岩谷こずえ・佐藤裕太・久松舞子・遠藤和子・遠藤美恵子・太田正子・新川幸子・寺内美智子・野沢成子・山本恵子・古谷洋子

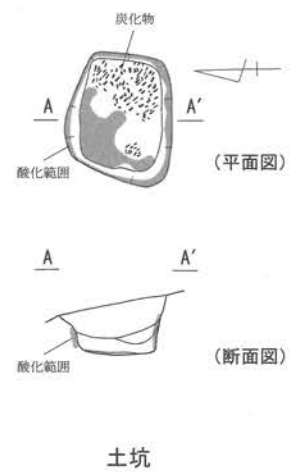
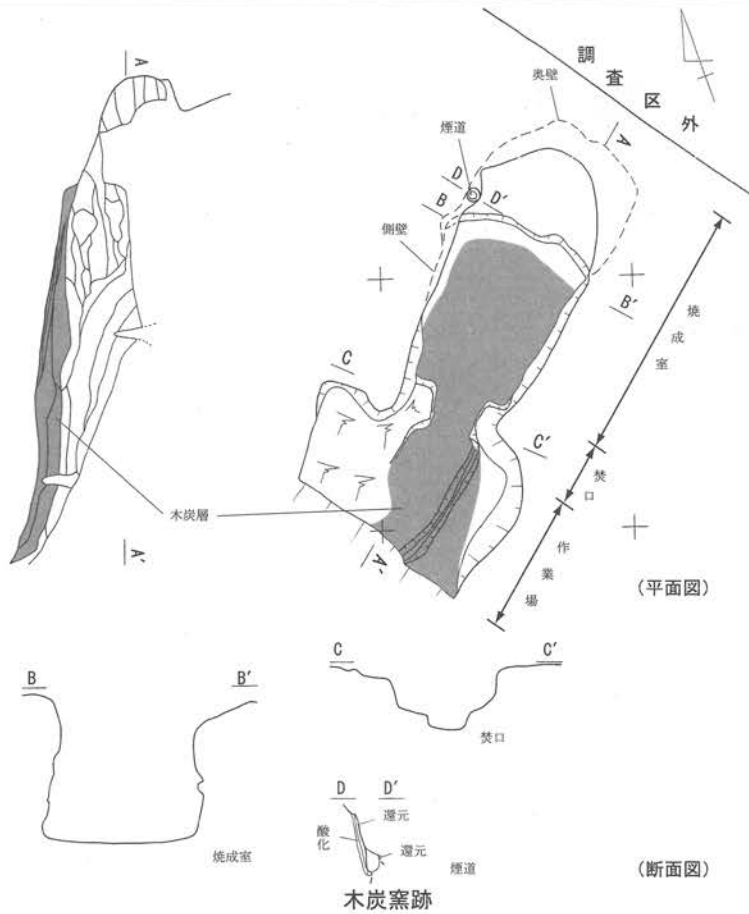
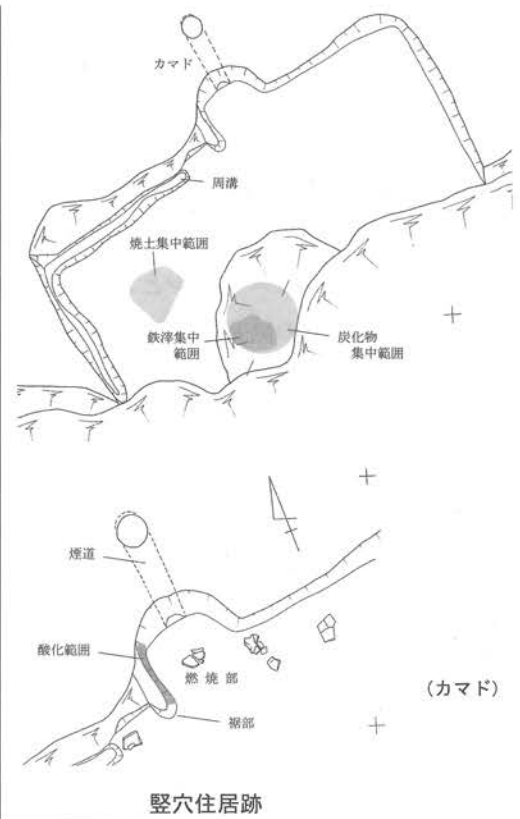
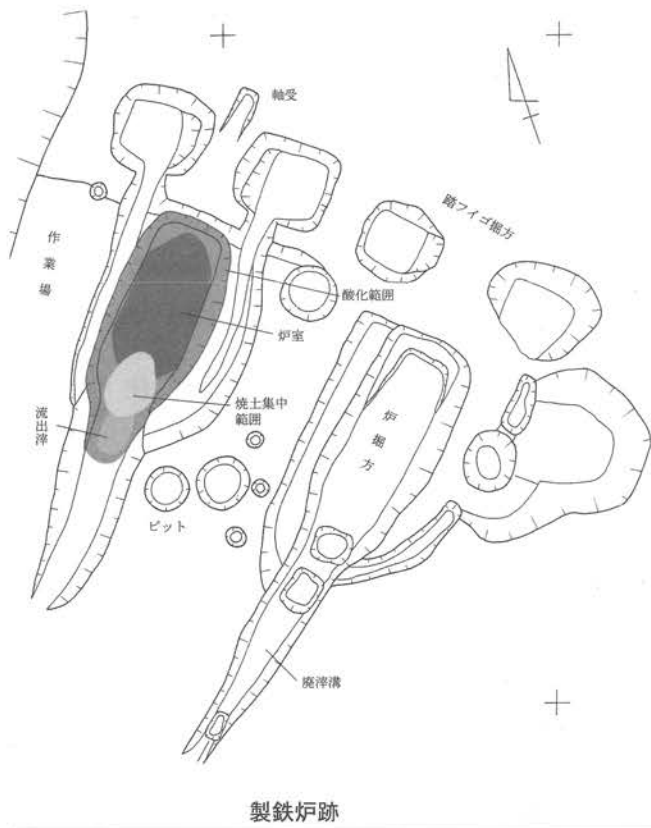
(順不同)

凡 例

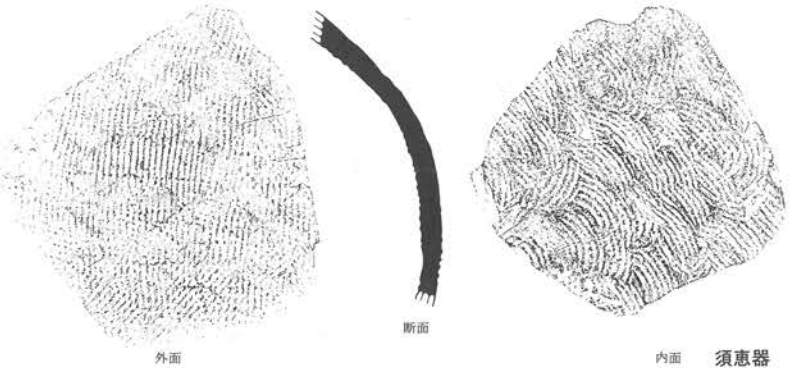
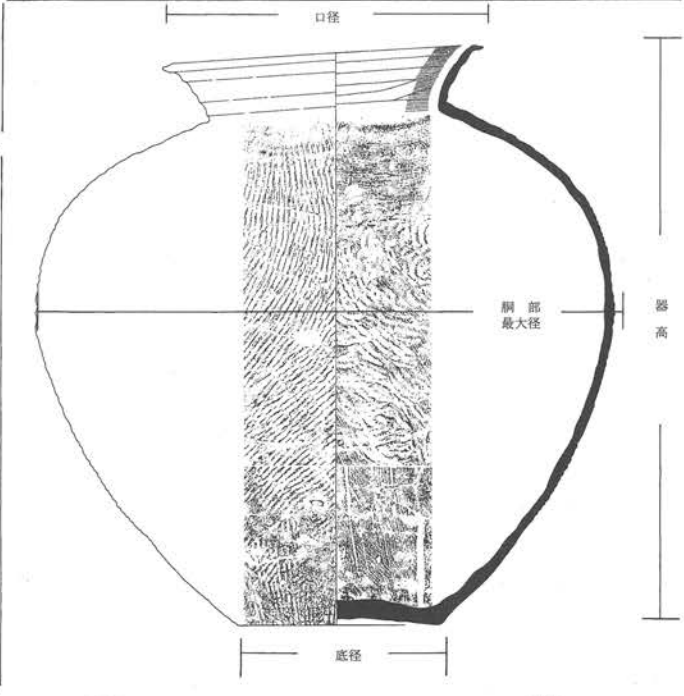
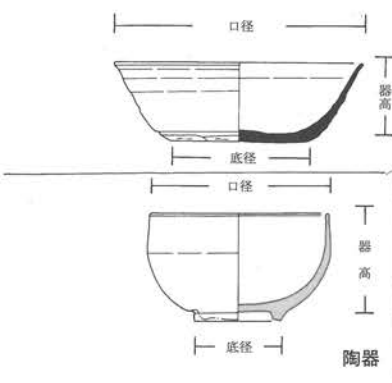
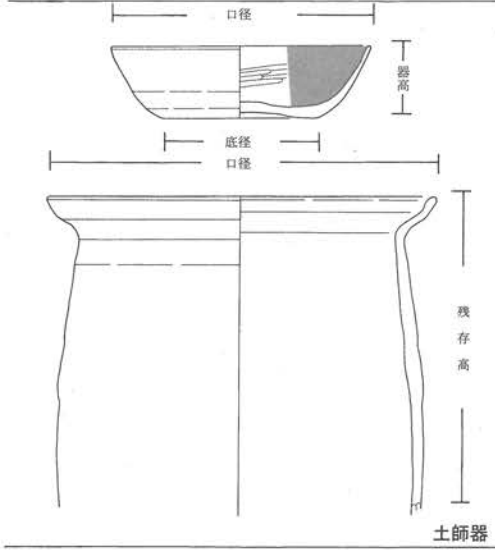
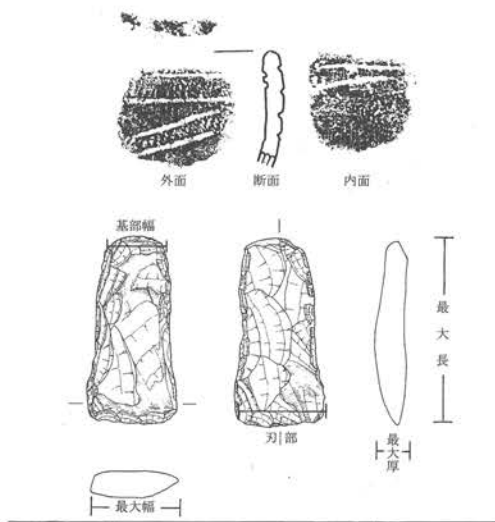
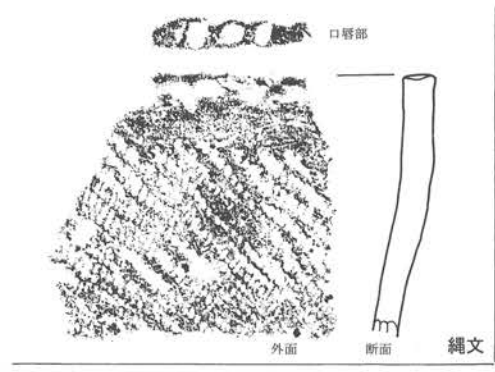
1. 位置図、地形図及び遺構実測図中の方位は座標北を示す。
2. 遺構断面図に記した標高は海拔標高を示す。
3. 挿図の縮尺はスケールとともに図中に示した。
4. 遺構は以下の略称及び略号を用いた。
製鉄炉：炉（SW）・木炭窯：窯（SC）・廃滓場：廃（SWH）・竪穴住居跡：住（SI）
土坑：土（SK）・トレンチ：T・ピット：P
5. 出土遺物の注記については以下の表記を用いた。
蛭沢遺跡群○地点：ヒルサワ○・川内迫○地点：カワウチサク○・製鉄炉：炉（SW）
木炭窯：窯（SC）・廃滓場：廃（SWH）・竪穴住居跡：住（SI）・土坑：土（SK）
トレンチ：T・ピット：P
6. 遺構内の傾斜部は∏の記号で表現し、相対的に緩傾斜の部分は予の記号で表記した。
7. 図中で使用したスクリーントーンは、以下の内容を示す。

遺 構：  焼土  酸化  還元  木炭  地山

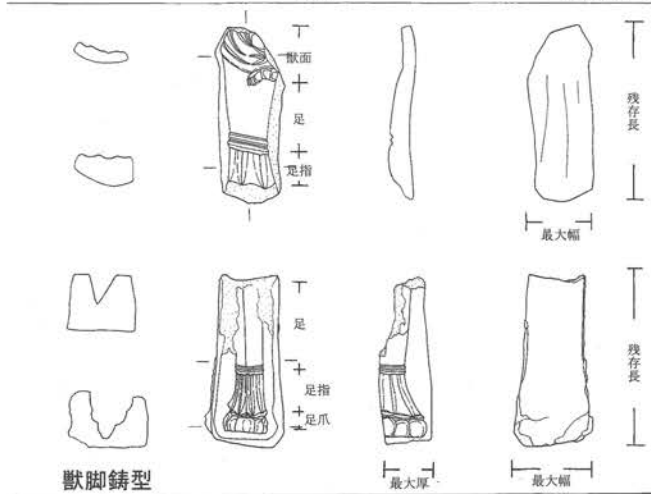
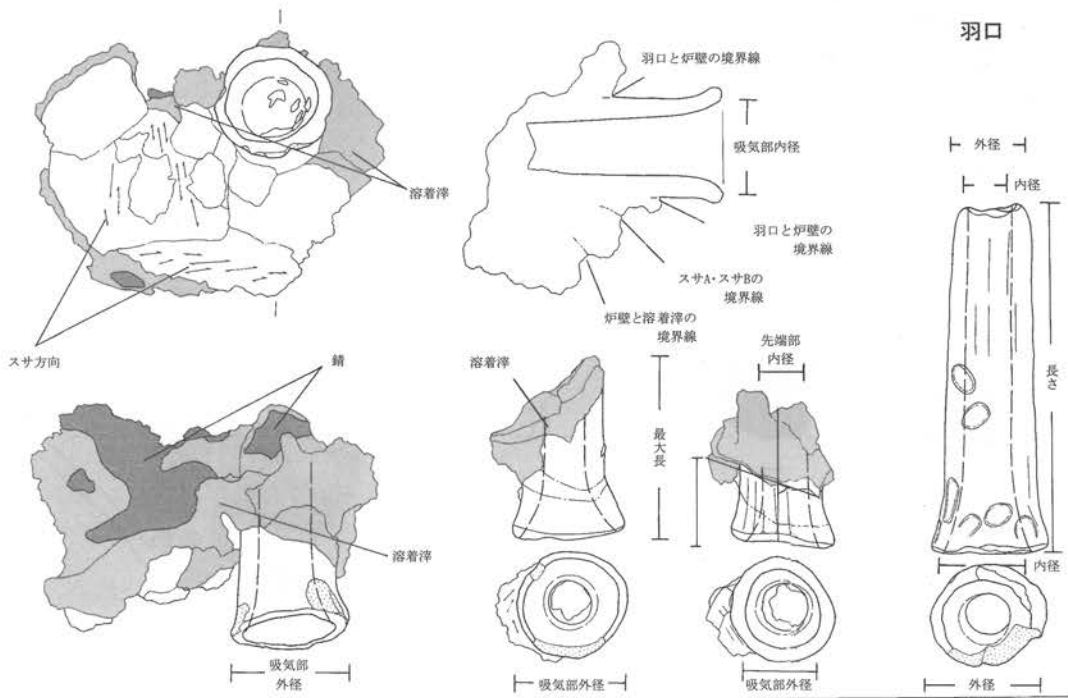
遺 物：  溶着  錆  須恵器  陶器  マネ土  内黒



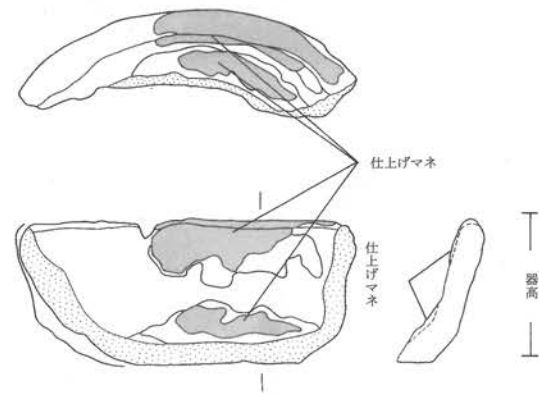
[遺物名称用例]



[遺物名称用例1]



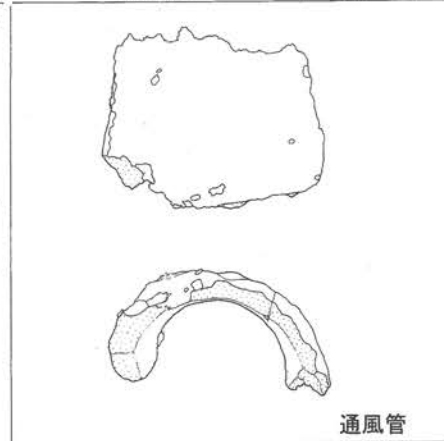
獸脚鑄型



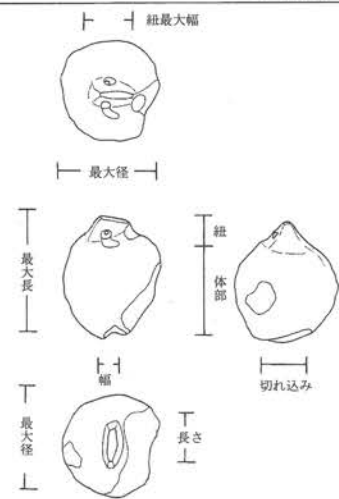
器物鑄型

[遺物名称用例 2]

羽口



通風管



土鈴

目 次

序 文	i
例 言	iii
凡 例	v
目 次	ix
挿図目次	xii
図版目次	xiv
表 目 次	xviii

序 編

第1章 原町市を取り巻く環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	5
第1項 旧石器時代	5
第2項 縄文時代	5
第3項 弥生時代	6
第4項 古墳時代	6
第5項 奈良・平安時代	8
第6項 中 世	9
第7項 近世・近代	10
第2章 遺跡周辺の環境	13
第1節 地理的環境	13
第2節 歴史的環境	14
第3章 調査経過	17
第1節 調査に至る経過	17
第2節 調査経過	17
第3節 調査の方法	19
第1項 試掘調査	19
第2項 発掘調査	19

第1編 試掘調査

第1章 試掘調査の概要	25
第1節 調査要項と調査経過	25
第1項 調査要項	25
第2項 調査経過	25
第2章 調査成果	26
第1節 検出された遺構と遺物	26
第1項 トレンチの設定	26
第2項 出土遺物	31
第3章 試掘調査のまとめ	51
第1節 調査地点の設定	51
第1項 蛭沢遺跡群	51
第2項 川内迫B遺跡群	51

第2編 蛭沢遺跡群A地点

第1章 遺跡群の概要	59
第2章 調査要項と調査経過	61
第1節 調査要項	61
第2節 調査経過	61
第3章 調査成果	63
第1節 蛭沢遺跡群A地点	63
第1項 A地点の立地	63
第2項 検出された遺構と遺物	64
第3項 蛭沢遺跡群のまとめ	136

第3編 川内迫B遺跡群

第1章 遺跡群の概要	143
第2章 調査要項と調査経過	145
第1節 調査要項	145
第2節 調査経過	145
第3章 調査成果	149
第1節 川内迫B遺跡群C地点	149
第1項 C地点の立地	149
第2項 検出された遺構と遺物	151
第3項 まとめ	184
第2節 川内迫B遺跡群D地点	189
第1項 D地点の立地	189
第2項 検出された遺構と遺物	191
第3項 まとめ	196
第3節 川内迫B遺跡群E地点	197
第1項 E地点の立地	197
第2項 検出された遺構と遺物	198
第3項 まとめ	205
第4節 川内迫B遺跡群G地点	206
第1項 G地点の立地	206
第2項 検出された遺構と遺物	207
第3項 まとめ	207
第5節 川内迫B遺跡群J地点	208
第1項 J地点の立地	208
第2項 検出された遺構と遺物	209
第3項 まとめ	215
第6節 川内迫B遺跡群K地点	216
第1項 K地点の立地	216
第2項 検出された遺構と遺物	218
第3項 まとめ	231
第7節 川内迫B遺跡群L地点	233
第1項 L地点の立地	233
第2項 検出された遺構と遺物	234
第3項 まとめ	238

第8節	川内迫B遺跡群M地点	239
第1項	M地点の立地	239
第2項	検出された遺構と遺物	240
第3項	まとめ	242
第9節	川内迫B遺跡群N地点	243
第1項	N地点の立地	243
第2項	検出された遺構と遺物	245
第3項	まとめ	248
第10節	川内迫B遺跡群のまとめ	249

第4編 総括

第1章	遺構について	255
第1節	製鉄関連遺構について	255
第1項	製鉄炉跡	255
第2項	木炭窯跡	256
第3項	竪穴住居跡	257
第4項	その他の遺構	258
第5項	製鉄関連遺構の年代	259
第2節	遺構群について	259
第1項	遺構の分布について	259
第2項	遺構群の構成について	260
第3項	竪形炉について	262
第3節	原町市の製鉄遺跡	
	—川内迫遺跡群・蛭沢遺跡群の歴史的評価—	263
第2章	遺物について	265
第1節	土器	265
第1項	縄文土器	265
第2項	弥生土器	265
第3項	土師器・須恵器	271
第2節	羽口	275
第1項	羽口の製作方法	275
第2項	羽口の分類	276
第3節	鋳型	281
第1項	獣脚鋳型	282
第3章	今後の課題	291
	報告書抄録	415
	奥付	

挿 図 目 次

序 編

図 1	原町市地質図	4	図 4	グリッド表示図	19
図 2	原町市内主要遺跡位置図	11	図 5	グリッド配置図	20
図 3	周辺遺跡位置図	16			

第 1 編 試 掘 調 査

図 6	蛭沢遺跡群・川内迫B遺跡群 トレンチ配置図	27	図 15	打製石器 (3)	42
図 7	出土遺物 (1)	32	図 16	打製石器 (4)	43
図 8	出土遺物 (2)	33	図 17	打製石器 (5)	44
図 9	出土遺物 (3)	35	図 18	打製石器 (6)	45
図 10	出土遺物 (4)	36	図 19	打製石器 (7)	46
図 11	出土遺物 (5)	38	図 20	打製石器 (8)	47
図 12	出土遺物 (6)	39	図 21	磨製石器 (1)	48
図 13	打製石器 (1)	40	図 22	磨製石器 (2)	49
図 14	打製石器 (2)	41	図 23	調査地点位置図	52

第 2 編 蛭沢遺跡群A地点

図 24	蛭沢遺跡群調査地点位置図	60	図 42	羽口 (8)	101
図 25	蛭沢遺跡群A地点遺構配置図	62	図 43	羽口 (9)	103
図 26	蛭沢遺跡群A地点位置図	63	図 44	羽口 (10)	105
図 27	1号製鉄炉跡	64	図 45	羽口 (11)	106
図 28	2号製鉄炉跡	66	図 46	羽口 (12)	108
図 29	3・4号製鉄炉跡	67	図 47	羽口 (13)	112
図 30	炉底滓 (1)	70	図 48	羽口 (14)	115
図 31	炉底滓 (2)	71	図 49	2号廃滓場	117
図 32	5・6号製鉄炉跡	73	図 50	1・2号木炭窯跡	119
図 33	5・6号製鉄炉跡断面	74	図 51	1・2号木炭窯跡土層断面	121
図 34	1号廃滓場	79	図 52	1号竪穴住居跡	123
図 35	羽口 (1)	82	図 53	土器埋設遺構	123
図 36	羽口 (2)	85	図 54	埋設土器	124
図 37	羽口 (3)	87	図 55	土坑 (1)	127
図 38	羽口 (4)	90	図 56	土坑 (2)	130
図 39	羽口 (5)	93	図 57	鉄製品	133
図 40	羽口 (6)	96	図 58	土鈴	134
図 41	羽口 (7)	98	図 59	遺構外出土遺物	135

第 3 編 川内迫B遺跡群

C地点

図 60	川内迫B遺跡群位置図	144	図 63	1・2号炉廃滓場	152
図 61	C地点位置図	149	図 64	獣脚鋳型 (1)	153
図 62	C地点遺構配置図	150	図 65	獣脚鋳型 (2)	154

図 66	獸脚鑄型 (3)	156	図 77	3号木炭窯跡	170
図 67	獸脚鑄型 (4)	157	図 78	1号竪穴住居跡出土遺物	171
図 68	獸脚鑄型 (5)	159	図 79	2号竪穴住居跡	173
図 69	器物鑄型 (1)	161	図 80	鉄鏃	174
図 70	器物鑄型 (2)	162	図 81	2号竪穴住居跡出土遺物	175
図 71	土師器・須恵器	163	図 82	3号竪穴住居跡	176
図 72	須恵器	164	図 83	4号竪穴住居跡	178
図 73	不明土製品 (1)	165	図 84	2・3号土坑	179
図 74	不明土製品 (2)	166	図 85	土坑断面図	181
図 75	不明土製品 (3)・鉄製品	167	図 86	性格不明遺構	183
図 76	羽口・通風管	168			
D地点					
図 87	D地点位置図	189	図 90	1号竪穴住居跡出土遺物	193
図 88	D地点遺構配置図	190	図 91	2号竪穴住居跡	194
図 89	1号竪穴住居跡	192	図 92	土坑	195
E地点					
図 93	E地点位置図	197	図 97	土坑 (1)	202
図 94	E地点遺構配置図	198	図 98	土坑 (2)	204
図 95	1号製鉄炉跡 (1)	199	図 99	遺構外出土遺物	205
図 96	1号製鉄炉跡 (2)	200			
G地点					
図 100	G地点位置図	206	図 101	遺構外出土遺物	207
J地点					
図 102	J地点位置図	208	図 105	1号木炭窯跡	212
図 103	調査区位置図	209	図 106	1~3号土坑	214
図 104	J地点遺構配置図	210	図 107	2号土坑出土遺物	215
K地点					
図 108	K地点位置図	216	図 115	2号竪穴住居跡	225
図 109	K地点遺構配置図	217	図 116	8号土坑	226
図 110	1区全体図	218	図 117	不明遺構A群全体図	227
図 111	1号木炭窯跡	220	図 118	不明遺構A群	228
図 112	3区全体図	221	図 119	不明遺構A群断面図	229
図 113	1号竪穴住居跡	223	図 120	不明遺構B群	230
図 114	1号竪穴住居跡出土遺物	224			
L地点					
図 121	L地点位置図	233	図 124	1号木炭窯跡	236
図 122	L地点遺構配置図	234	図 125	1号土坑	237
図 123	1号木炭窯跡位置図	235	図 126	1号土坑位置図	238
M地点					
図 127	M地点位置図	239	図 130	1号土坑位置図	241
図 128	1号土坑	240	図 131	2区位置図	242
図 129	1区位置図	240			
N地点					
図 132	N地点位置図	243	図 135	1~3号土坑	246
図 133	調査区位置図	244	図 136	2区遺構配置図	247
図 134	1区遺構配置図	245			

第4編 総括

図 137	蛭沢・川内迫B遺跡群 遺構分布図・・・261	図 140	弥生土器 (3)・・・270
図 138	弥生土器 (1)・・・268	図 141	獣脚鋳型 (1)・・・285
図 139	弥生土器 (2)・・・269	図 142	獣脚鋳型 (2)・・・286
		図 143	獣脚鋳型 (3)・・・287

図版目次

巻頭図版 1	蛭沢遺跡群A地点全景	巻頭図版 4	
巻頭図版 2	蛭沢遺跡群A地点木炭窯跡	1	川内迫B遺跡群C地点全景 (1)
巻頭図版 3	蛭沢遺跡群A地点製鉄炉跡	2	川内迫B遺跡群C地点全景 (2)

第1編 試掘調査

図版 1	試掘調査・・・295	3	22T (南から)
1	蛭沢遺跡群A地点	4	35T (南から)
2	川内迫B遺跡群C地点	5	38～42T (南から)
図版 2	試掘調査・・・296	6	39T (東から)
1	19T (東から)	7	40T (南から)
2	21T (東から)	8	42T (南西から)

第2編 蛭沢遺跡群A地点

図版 3	蛭沢遺跡群A地点・・・297	2	3号製鉄炉跡近景
1	1号製鉄炉跡遠景	図版 10	蛭沢遺跡群A地点・・・304
2	1号製鉄炉近景	1	3号製鉄炉跡炉内全景
3	1号製鉄炉跡土層断面 (1)	2	3号製鉄炉跡炉底滓検出状況
4	1号製鉄炉跡土層断面 (2)	図版 11	蛭沢遺跡群A地点・・・305
5	1号製鉄炉跡土層断面 (3)	1	4号製鉄炉跡ふいご部遠景
図版 4	蛭沢遺跡群A地点・・・298	2	4号製鉄炉跡ふいご部近景
1	1号製鉄炉跡全景	図版 12	蛭沢遺跡群A地点・・・306
2	1号製鉄炉跡炉内状況	1	4号製鉄炉跡ふいご内遺物出土状況
図版 5	蛭沢遺跡群A地点・・・299	2	4号製鉄炉跡ふいご外遺物出土状況
1	2号製鉄炉跡完掘状況 (1)	図版 13	蛭沢遺跡群A地点・・・307
2	2号製鉄炉跡完掘状況 (2)	1	4号製鉄炉跡ふいご内遺物出土状況
図版 6	蛭沢遺跡群A地点・・・300	2	4号製鉄炉跡ふいご外遺物出土状況
1	2号製鉄炉跡調査状況	図版 14	蛭沢遺跡群A地点・・・308
2	2号製鉄炉跡土層断面 (1)	1	4号製鉄炉跡土層断面 (1)
図版 7	蛭沢遺跡群A地点・・・301	2	4号製鉄炉跡土層断面 (2)
1	2号製鉄炉跡土層断面 (2)	3	4号製鉄炉跡土層断面 (3)
2	2号製鉄炉跡土層断面 (3)	4	4号製鉄炉跡土層断面 (4)
図版 8	蛭沢遺跡群A地点・・・302	5	4号製鉄炉跡土層断面 (5)
1	3・4号製鉄炉跡全景 (1)	6	4号製鉄炉跡土層断面 (6)
2	3・4号製鉄炉跡全景 (2)	7	4号製鉄炉跡土層断面 (7)
図版 9	蛭沢遺跡群A地点・・・303	8	4号製鉄炉跡土層断面 (8)
1	3・4号製鉄炉跡全景 (3)		

図版 15 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・309	図版 26 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・320
1 3～6号製鉄炉跡	1 1・2号木炭窯跡全景
2 5・6号製鉄炉跡	2 2号木炭窯跡全景
図版 16 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・310	図版 27 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・321
1 5・6号製鉄炉跡検出状況	1 2号木炭窯跡全景
2 5・6号製鉄炉跡調査状況	2 2号木炭窯跡焼成室土層断面
図版 17 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・311	図版 28 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・322
1 5号製鉄炉跡検出状況	1 2号木炭窯跡奥壁
2 5号製鉄炉跡完掘状況	2 2号木炭窯跡遺物出土状況
図版 18 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・312	図版 29 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・323
1 6号製鉄炉跡検出状況	1 1号竪穴住居跡全景
2 6号製鉄炉跡完掘状況	2 1号竪穴住居跡カマド土層断面
図版 19 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・313	図版 30 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・324
1 5号製鉄炉跡土層断面(1)	1 土器埋設遺構(1)
2 5号製鉄炉跡土層断面(2)	2 土器埋設遺構(2)
3 5号製鉄炉跡土層断面(3)	図版 31 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・325
4 5号製鉄炉跡土層断面(4)	1 廃滓場遠景(1)
5 6号製鉄炉跡土層断面(1)	2 廃滓場遠景(2)
6 6号製鉄炉跡土層断面(2)	図版 32 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・326
7 6号製鉄炉跡土層断面(3)	1 廃滓場遠景(3)
8 6号製鉄炉跡土層断面(4)	2 廃滓場近景(1)
図版 20 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・314	図版 33 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・327
1 1・2号木炭窯跡検出状況	1 廃滓場遠景(4)
2 1・2号木炭窯跡全景	2 廃滓場近景(2)
図版 21 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・315	図版 34 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・328
1 1・2号木炭窯跡調査状況	1 廃滓場近景(3)
2 1号木炭窯跡全景	2 廃滓場近景(4)
図版 22 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・316	図版 35 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・329
1 1号木炭窯跡作業場土層断面	1 廃滓場近景(5)
2 1号木炭窯跡焼成室土層断面	2 廃滓場近景(6)
図版 23 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・317	図版 36 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・330
1 1号木炭窯跡遺物出土状況	1 廃滓場近景(7)
2 1号木炭窯跡工具痕跡	2 廃滓場近景(8)
図版 24 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・318	図版 37 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・331
1 1号木炭窯跡完掘状況	1 廃滓場近景(9)
2 1号木炭窯跡完掘状況近景	2 廃滓場近景(10)
図版 25 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・319	図版 38 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・332
1 1号木炭窯跡完掘状況	1 廃滓場近景(11)
2 1号木炭窯跡土層断面(1)	2 廃滓場近景(12)
3 1号木炭窯跡土層断面(2)	図版 39 蛭沢遺跡群A地点・・・・・・・・・・333
4 1号木炭窯跡土層断面(3)	1 廃滓場近景(13)
5 1号木炭窯跡土層断面(4)	2 廃滓場近景(14)
6 1号木炭窯跡土層断面(5)	3 廃滓場近景(15)
7 1号木炭窯跡土層断面(6)	4 廃滓場近景(16)
8 1号木炭窯跡土層断面(7)	5 廃滓場近景(17)

第3編 川内迫B遺跡群

- 図版 40** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・334
 1 C地点調査前(1)
 2 C地点調査前(2)
 3 C地点調査前(3)
 4 C地点調査前(4)
 5 C地点調査前(5)
 6 C地点調査前(6)
- 図版 41** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・335
 1 C地点表土除去後(1)
 2 C地点表土除去後(2)
- 図版 42** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・336
 1 C地点表土除去後(3)
 2 C地点表土除去後(4)
 3 C地点表土除去後(5)
 4 C地点表土除去後(6)
 5 C地点表土除去後(7)
- 図版 43** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・337
 1 調査区全景(1)
 2 調査区全景(2)
- 図版 44** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・338
 1 1号製鉄炉跡(1)
 2 1号製鉄炉跡(2)
- 図版 45** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・339
 1 1号製鉄炉跡(3)
 2 1号製鉄炉跡(4)
- 図版 46** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・340
 1 2号製鉄炉跡全景
 2 2号製鉄炉跡ふいご部断面
- 図版 47** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・341
 1 1号廃滓場作業風景(1)
 2 1号廃滓場作業風景(2)
- 図版 48** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・342
 1 1号木炭窯跡
 2 1号木炭窯跡
- 図版 49** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・343
 1 1号木炭窯跡土層断面(1)
 2 1号木炭窯跡土層断面(2)
- 図版 50** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・344
 1 2号木炭窯跡検出状況
 2 2号木炭窯跡土層断面
- 図版 51** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・345
 1 2号木炭窯跡検出状況
 2 作業風景
- 図版 52** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・346
 1 3号木炭窯跡全景
 2 焚口付近遺物出土状況
- 3 3号木炭窯跡土層断面(1)
 4 3号木炭窯跡土層断面(2)
 5 3号木炭窯跡土層断面(3)
 6 3号木炭窯跡半截全景
- 図版 53** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・347
 1 1号竪穴住居跡
 2 1号竪穴住居跡
- 図版 54** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・348
 1 1号竪穴住居跡土層断面(1)
 2 1号竪穴住居跡土層断面(2)
- 図版 55** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・349
 1 2号竪穴住居跡
 2 2号竪穴住居跡カマド部
- 図版 56** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・350
 1 須恵器出土状況(1)
 2 須恵器出土状況(2)
 3 須恵器出土状況(3)
- 図版 57** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・351
 1 3号竪穴住居跡
 2 3号竪穴住居跡土層断面
- 図版 58** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・352
 1 3号竪穴住居跡カマド部近景
 2 3号竪穴住居跡カマド部近景
- 図版 59** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・353
 1 4号竪穴住居跡全景
 2 4号竪穴住居跡カマド部近景
- 図版 60** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・354
 1 4号竪穴住居跡鍛冶炉(1)
 2 4号竪穴住居跡鍛冶炉(2)
 3 4号竪穴住居跡土層断面
- 図版 61** 川内迫B遺跡群C地点・・・・・・355
 1 性格不明遺構(1)
 2 性格不明遺構(2)
 3 性格不明遺構土層断面(1)
 4 作業風景(1)
 5 性格不明遺構土層断面(2)
 6 作業風景(2)
- 図版 62** 川内迫B遺跡群D地点・・・・・・356
 1 表土除去後
 2 調査区全景
- 図版 63** 川内迫B遺跡群D地点・・・・・・357
 1 1号竪穴住居跡全景
 2 1号竪穴住居跡検出状況
- 図版 64** 川内迫B遺跡群D地点・・・・・・358
 1 1号竪穴住居跡土層断面
 2 1号竪穴住居跡全景

- 図版 65 川内迫B遺跡群D地点・・・・・・359
 1 1号竪穴住居跡壁周溝
 2 1号竪穴住居跡遺物出土状況
- 図版 66 川内迫B遺跡群D地点・・・・・・360
 1 1号竪穴住居跡カマド部近景
 2 1号竪穴住居跡全景
- 図版 67 川内迫B遺跡群D地点・・・・・・361
 1 2号竪穴住居跡全景
 2 2号竪穴住居跡検出状況
- 図版 68 川内迫B遺跡群D地点・・・・・・362
 1 2号竪穴住居跡土層断面
 2 2号竪穴住居跡全景
- 図版 69 川内迫B遺跡群D地点・・・・・・363
 1 2号竪穴住居跡カマド部近景
 2 2号竪穴住居跡カマド部調査後
- 図版 70 川内迫B遺跡群E地点・・・・・・364
 1 調査区全景
 2 1号製鉄炉跡全景
- 図版 71 川内迫B遺跡群E地点・・・・・・365
 1 1号製鉄炉跡ふいご部近景
 2 1号製鉄炉跡炉内近景
- 図版 72 川内迫B遺跡群E地点・・・・・・366
 1 土坑群全景
 2 11号土坑
- 図版 73 川内迫B遺跡群J地点・・・・・・367
 1 1号木炭窯跡確認状況
 2 1号木炭窯跡完掘状況
- 図版 74 川内迫B遺跡群J地点・・・・・・368
 1 1号木炭窯跡全景
 2 1号木炭窯跡煙道部近景
- 図版 75 川内迫B遺跡群J地点・・・・・・369
 1 1号木炭窯跡土層断面
 2 1号木炭窯跡操業面確認状況
- 図版 76 川内迫B遺跡群K地点・・・・・・370
 1 K地点調査前
 2 K地点遠景
- 図版 77 川内迫B遺跡群K地点・・・・・・371
 1 採掘坑跡(1)
 2 採掘坑跡(2)
- 図版 78 川内迫B遺跡群K地点・・・・・・372
 1 2号土坑
 2 2号土坑土層断面
- 図版 79 川内迫B遺跡群K地点・・・・・・373
 1 3号土坑
 2 2号土坑土層断面
- 図版 80 川内迫B遺跡群K地点・・・・・・374
 1 4号土坑(1)
 2 5号土坑(2)
 3 4号土坑土層断面(1)
 4 4号土坑土層断面(2)
 5 5号土坑
 6 6号土坑土層断面
- 図版 81 川内迫B遺跡群K地点・・・・・・375
 1 1号木炭窯跡検出状況
 2 1号木炭窯跡完掘状況
- 図版 82 川内迫B遺跡群K地点・・・・・・376
 1 1号木炭窯跡
 2 1号木炭窯跡土層断面(1)
 3 1号木炭窯跡土層断面(2)
 4 1号木炭窯跡(操業面確認)
 5 1号木炭窯跡(操業面確認)
- 図版 83 川内迫B遺跡群K地点・・・・・・378
 1 調査前
 2 1号竪穴住居跡完掘状況
 3 遺物出土状況(1)
 4 遺物出土状況(2)
 5 1号竪穴住居跡全景
- 図版 84 川内迫B遺跡群L地点・・・・・・378
 1 1号木炭窯跡全景
 2 1号木炭窯跡土層断面
- 図版 85 川内迫B遺跡群L地点・・・・・・379
 1 1号木炭窯跡操業面確認(1)
 2 1号木炭窯跡操業面確認(2)
- 図版 86 川内迫B遺跡群L地点・・・・・・380
 1 1号木炭窯跡煙道部
 2 1号木炭窯跡煙道部断面
- 図版 87 川内迫B遺跡群L地点・・・・・・381
 1 1号土坑検出状況
 2 1号土坑完掘状況

出土遺物

図版 88 出土遺物 (1) 382	図版 105 出土遺物 (18) 399
図版 89 出土遺物 (2) 383	図版 106 出土遺物 (19) 400
図版 90 出土遺物 (3) 384	図版 107 出土遺物 (20) 401
図版 91 出土遺物 (4) 385	図版 108 出土遺物 (21) 402
図版 92 出土遺物 (5) 386	図版 109 出土遺物 (22) 403
図版 93 出土遺物 (6) 387	図版 110 出土遺物 (23) 404
図版 94 出土遺物 (7) 388	図版 111 出土遺物 (24) 405
図版 95 出土遺物 (8) 389	図版 112 出土遺物 (25) 406
図版 96 出土遺物 (9) 390	図版 113 出土遺物 (26) 407
図版 97 出土遺物 (10) 391	図版 114 出土遺物 (27) 408
図版 98 出土遺物 (11) 392	図版 115 出土遺物 (28) 409
図版 99 出土遺物 (12) 393	図版 116 出土遺物 (29) 410
図版 100 出土遺物 (13) 394	図版 117 出土遺物 (30) 411
図版 101 出土遺物 (14) 395	図版 118 出土遺物 (31) 412
図版 102 出土遺物 (15) 396	図版 119 出土遺物 (32) 413
図版 103 出土遺物 (16) 397	図版 120 出土遺物 (33) 414
図版 104 出土遺物 (17) 398	図版 121 出土遺物 (34) 415

表 目 次

表 1 周辺遺跡一覧表 15	表 16 器物鑄型観察表 188
表 2 トレンチ一覧表 (1) 29	表 17 出土遺物観察表 (4) 193
表 3 トレンチ一覧表 (2) 30	表 18 出土遺物観察表 (5) 205
表 4 試掘調査出土土器観察表 (1) 54	表 19 出土遺物観察表 (6) 207
表 5 試掘調査出土土器観察表 (2) 55	表 20 出土遺物観察表 (7) 215
表 6 試掘調査出土石器観察表 55	表 21 出土遺物観察表 (8) 224
表 7 羽口観察表 (1) 137	表 22 出土土器比率 271
表 8 羽口観察表 (2) 138	表 23 羽口比率 277
表 9 羽口観察表 (3) 139	表 24 吸気部・先端部法量比較 278
表 10 土鈴観察表 140	表 25 最大長・吸気部法量比較 279
表 11 出土遺物観察表 (1) 140	表 26 最大長・先端部法量比較 279
表 12 出土遺物観察表 (2) 187	表 27 鑄型比率 281
表 13 出土遺物観察表 (3) 187	表 28 出土地点比率 282
表 14 獣脚鑄型観察表 187	表 29 獣脚鑄型分類比率 284
表 15 不明土製品観察表 187	表 30 調査完了 291

序 編

第1章 原町市を取り巻く環境

第1節 地理的環境

福島県原町市は、浜通り地方の阿武隈高地東縁部東部の低地帯北方、相馬地方のほぼ中央に位置しており、東は太平洋に面し、北は相馬郡鹿島町、南は小高町、西は飯舘村・双葉郡浪江町と境界を接している。人口は約 48,100 人、面積は約 198,49km² で、当地方の産業及び政治面での中核都市となっている。主要交通網は南北方向に縦走する JR 常磐線と国道 6 号であり、仙台方面や市内などへの通勤・通学手段として利用されている。

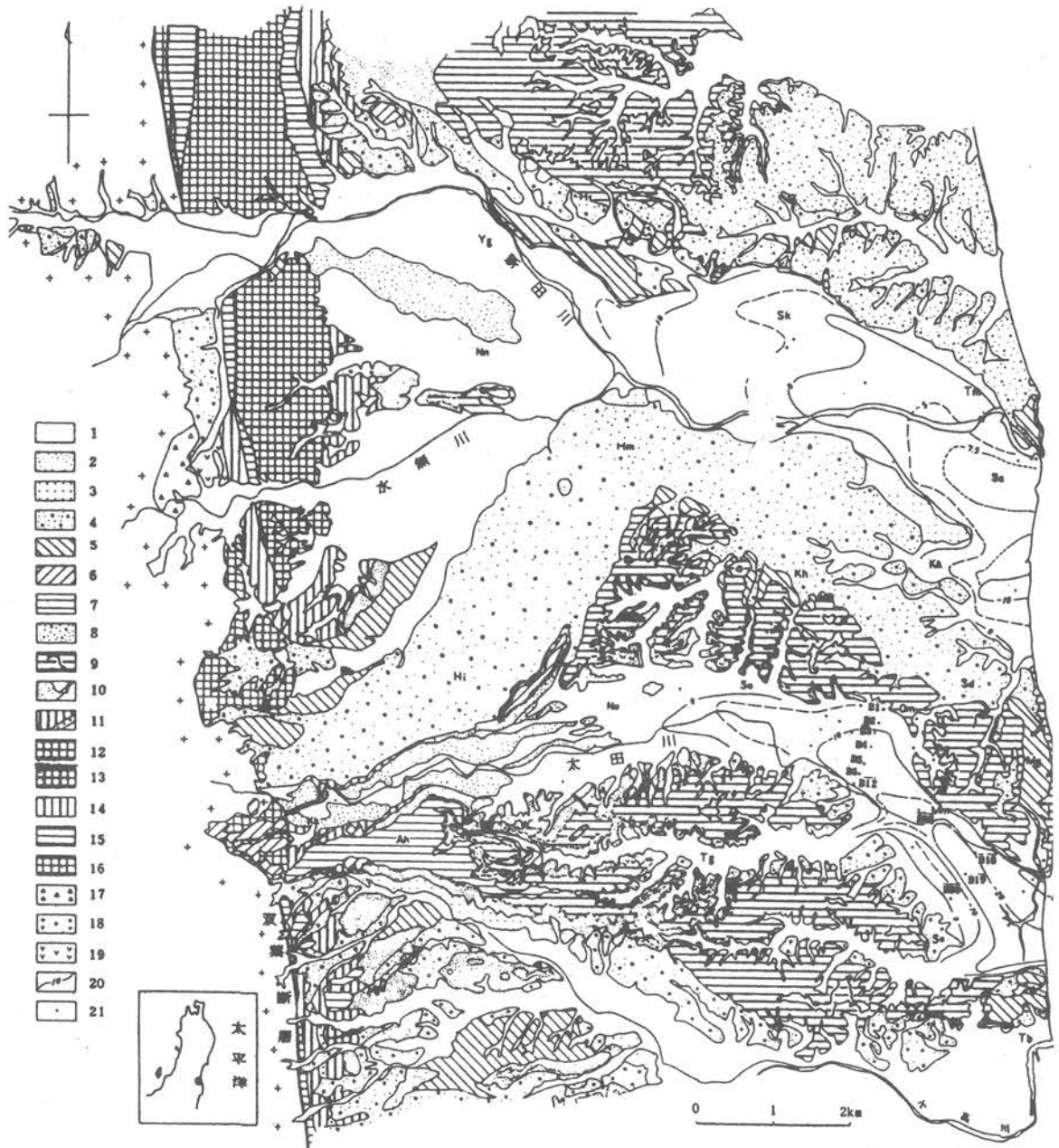
原町市の地形は、西部域を南北方向に縦走する阿武隈高地、そこから派生する相双丘陵・常磐丘陵と称される標高 100m 以下の低丘陵、及び丘陵間に開析された沖積平野とで構成されている。全体として阿武隈高地にかかる西側が高く、東部に向かうにつれて標高を下げている。阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯と双葉丘陵地域（岩沼-久之浜構造線）によって地質的に明瞭に区分され、低地帯もまた断層以東の相双丘陵地域と以南の常磐丘陵地域とに区分されている。阿武隈高地は東西約 50km・南北約 200km の規模を有し、古生代から新生代中頃新第三紀中新生に至る地質を有し、北上高地と並ぶ日本最古の地質構造を形成している。基盤層は古生代末期のアパラキア褶曲と中生代末期のララマイド褶曲に代表される二度に渡る世界的な造山運動の際に、古生層及び中生層に貫入した古期及び新期・最新期の花崗岩、変成岩類である。地形的には山頂がなだらかな隆起準平原を呈しており、原町市付近の標高は 500～600m 前後になっている。高地周辺では標高 100～150m 前後を測り、東延するにしたがって徐々に高度を下げ、海岸部では 20～30m を測る。

阿武隈高地裾部から東に派生している低丘陵は、新生代第三紀に形成された固結度の低い凝灰岩質砂岩で構成されており、双葉断層により、上層部の相双丘陵（滝の口層）と中・下層の常磐丘陵地域とに区分されている。第四紀洪積世における氷河期と間氷期の海水準変動により、丘陵上には海成及び河成の段丘が構成され、高位より順に第 1 段丘、第 2 段丘、と命名されている。原町市内では埋没段丘を含む 7 段丘の存在が知られており、特に第 1 段丘である畦原段丘と第 4 段丘である雲雀ヶ原扇状地が発達しているが、他は河川上流域沿いに小規模に分布する在り方を呈している。低丘陵の間には、各河川が樹枝状に開析した谷間に土壌が埋没した沖積平野が入り込んでいる。標高は 20m 以下であり、縄文時代前期を中心とする海進期には海岸部の大部分が海面下にあったと考えられており、大木 2a 式期の遺跡である萱浜の赤沼遺跡の調査では、海面を標高 6 m 前後に求めている（註 1）。現在では圃場整備が進み、一面の美田地帯が形成されている。

註 1 長島雄一 1983 『赤沼遺跡試掘調査報告書』 原町市教育委員会

《参考文献》

玉川一郎 1985 『国指定史跡桜井古墳範囲確認調査報告書』 原町市教育委員会



1: "沖積層", 2: 第6段丘構成層, 3: 第5段丘構成層, 4: 第4段丘構成層, 5: 第3段丘構成層, 6: 第2段丘構成層, 7: 第1段丘構成層, 8~11: 竜の口層, 8: 同c層(砂岩), 9: 同c層(シルト岩・京塚沢凝灰岩), 10: 同b層, 11: 同a層, 12~19: 基盤岩類, 12: 塩手層, 13: 小山田層, 14: 富沢層, 15: 中の沢層, 16: 栃窪層, 17: 古生層, 18: 花崗岩類, 19: 脈岩, 20: 竜の口層上面標高(m), 21: ボーリング地点と孔番, Ah: 畦原, Bb: 馬場, Hi: 雲雀ヶ原, Hm: 原町市街, Ht: 東高松, Ka: 菅浜, Kh: 北原, Kk: 片倉, Mg: 間形沢, Mm: 米々沢, Nn: 長野, No: 中太田, Om: 大甕, Sd: 峯, Se: 下江井, Sk: 下北高平, So: 下太田, Ss: 下渋佐, Tb: 塚原, Tg: 鶴谷, Tm: 館前, Yg: 横上

図1 原町市地質図

第2節 歴史的環境

この節では、これまでの原町市内における発掘調査の成果をもって、各時代の状況について概観する(図2)。

最近の原町市では、県営ほ場整備事業などの大規模開発が推進されており、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査により、従来不明であった弥生時代遺跡の在り方や、浜通り低地帯における律令期の政治動向を究明する一端となるような多大な成果が続々と報告されてきている。原町市では、これまでも分布調査や発掘調査を通じて遺跡の保存、活用に努めてきたが、今後増加の一途をたどるこれらの遺跡に対して、尚一層の保存、活用の努力が求められている。

また、平成7年(1995)には国指定重要無形民俗文化財「相馬野馬追」の繰り広げられる野馬追祭場地の東隣に「野馬追の里歴史民俗資料館」が建設された。平成10年度には「野馬追の里原町市立博物館」と名称変更され、当地方の歴史、民俗、自然における生涯、社会教育の場として活動している。

第1項 旧石器時代

原町市における旧石器時代の遺跡は現在のところ、石器が出土する散布地9ヶ所が知られている。立地条件を概観すると畦原A遺跡(1)、熊下遺跡(2)、袖原A遺跡(3)などは太田川流域の第1段丘面の畦原段丘上に所在し、陣ヶ崎A遺跡(4)、南町遺跡(5)、橋本町A遺跡(6)、桜井遺跡(7)などは第4段丘面の雲雀ヶ原扇状地に所在している(註1)。

第2項 縄文時代

縄文時代の遺跡は、早期末から前期初頭の住居跡の調査が行われた片倉の八重米坂A遺跡(8)、隣接する羽山B遺跡(9)などが阿武隈高地裾部に所在している(註2)。太田川を北に臨む第1段丘面に所在する片倉の畦原F遺跡(10)の調査では早期末から前期前葉の土坑3基が調査されている(註3)。平成12年(2000)に実施された上ノ内遺跡(11)の試掘調査では早期中葉の貝殻沈線文系土器が出土している(註4)。この時期は、高地寄りに立地する遺跡がある一方で海浜側の微高地上に所在する遺跡も知られている。前期初頭大木2a式の土器片が出土した萱浜の赤沼遺跡(12)(註5)や前期前半の土器片が多量に発見された雫の犬這遺跡(13)(註1)は雲雀ヶ原扇状地の先端部の微高地上に所在している。また新田川下流域の河岸段丘面に位置する桜井古墳(14)の調査でも大木2a式期から後期の三十稲葉式期までの土器片と挾状耳飾が出土しており(註6)、該期の古環境を知る上での貴重な成果を上げている。

中期の遺跡は、大木9～10式の土器片を多量に出土する押釜の前田遺跡(15)が阿武隈高地裾部の低位丘陵に立地しており(註1)、新田川流域の第3段丘面上に所在する上北高平の高松遺跡(16)周辺から西側の平坦面一帯は、末葉の大木8a～10式土器片を出土することで知られている(註1)。高松遺跡の東方約1km、同段丘面上に立地する植松A遺跡(17)では、昭和52年(1977)の宅地造成に伴う発掘調査により、大木10式期の複式炉を伴う竪穴住居跡1軒が市内で初めて調査されている。

後期から晩期の遺跡は、大洞B・BC・C1・C2・A・A¹式期に相当する土器片を出土した片倉の羽山遺跡(18)などが市内各地に所在している(註1)。平成8年(1996)の宅地造成に伴う高見町A遺跡(19)の発掘調査では晩期中葉の埋設土器を伴う石囲炉の竪穴住居跡1軒が調査されている(註7)。浜通り低地帯の海岸部には多くの貝塚が所在しているが、原町市では全く確認されておらず、現在まで空白地帯となっているが、今後発見される可能性を秘めている。

第3項 弥生時代

弥生時代の遺跡は、東北地方南部の標式土器として設定されている中期末葉の桜井式土器を出土する桜井遺跡(7)(註8)が知られていたが、最近の調査では、海岸部の丘陵の尾根部に小規模な集落を構成していた例や海浜寄りの低位丘陵中から土器や石庖丁が出土する例が報告されている(註9)。また、平成5年(1993)に調査された高見町A遺跡(19)からは弥生時代の後期に位置付けられる十王台式土器が出土し、その北限となる竪穴住居跡2軒が発見されている(註10)。平成8年(1996)に高平地区ほ場整備事業に伴う法幢寺跡(20)(註11)、国史跡桜井古墳(14)(註6)、同群上渋佐支群7号墳(21)(註12)の調査でも桜井式土器の土器棺がそれぞれ1基ずつ確認されている。

桜井式期以前についての調査例は非常に少ないが、平成9年度に実施された蛭沢・川内迫製鉄遺跡群(22)の調査では中期中葉の柵形囲式の土器片と、石庖丁を主とする石器群が出土している。これらの石器群のうち、特殊錐状石器は石庖丁の敲打による穿孔工具に想定され、川内迫型石器として提唱されている(註13)。

第4項 古墳時代

古墳は、前方後方墳として東北地方では第4位の規模を誇る国指定史跡の桜井古墳(14)が新田川南岸の河岸段丘上に所在しており、周辺の古墳と共に桜井古墳群上渋佐支群(21)、同高見町支群(23)を構成している。桜井古墳は平成10年度から3ヵ年かけて実施された史跡整備に伴う確認調査で、主軸長74.5mを測る大型の前方後方墳で、後方部3段築成、前方部無段の墳丘を有し、墳丘の周囲には大規模な周溝を備えた古墳であることが確認された。後方部墳頂平坦面からは2基の棺の痕跡が発見され、多量の底部穿孔二重口縁壺が出土している(註6)。

桜井古墳と同じ上渋佐支群に所在する7号墳(21)は一辺27.5mを計測する大型の方墳である。墳丘の周囲には不整形な周溝が巡り、墳頂平坦面からは2段墓坑と墓坑内に安置された組合式木棺が確認された。棺の内部から珠文鏡が出土しことは特筆すべき事柄である(註12)。平成8年(1996)の高平地区ほ場整備事業に伴う荒井前遺跡(24)の調査では方形周溝墓2基が発見され、周溝内からは塩釜式の大型の壺が出土している(註14)。

他に昭和42年(1967)に、中太田所在の与太郎内1号墳(25)、高見町1丁目所在の高見町1号墳(23)の発掘調査が行われている(註15)。与太郎内1号墳は墳丘主軸長41mを計測する前方後円墳であるが、発掘調査では埋葬施設を確認することができなかつたため、古墳の詳細に

については不明である。その後、平成13年度に東北学院大学考古学ゼミナールによって、当古墳群の地形測量が実施され、1号墳は墳丘主軸長39mを測る前方後円墳であること、2号墳は墳丘主軸長23mを測る前方後円墳であること、また1号墳の西側には直径15m前後の円墳が所在していることが明らかになった(註16)。

一方、昭和42年当時の高見町1号墳の調査では墳丘部の中央で粘土施設を伴う割竹形木棺の痕跡が確認され、古墳時代前期の築造であると考えられている(註15)。平成5年(1993)の高見町A遺跡の調査では、既に削平されてマウンドや埋葬施設は未発見であったが、外周直径約15m、幅約2mの円形の周溝が発見され、高見町2号墳(23)と命名された。この調査では塩釜式期の竪穴住居跡2軒が市内では初めて発見されており、この地域が弥生時代から古墳時代への変遷や古墳の出現過程について極めて重要であることを示している(註10)。高見町A遺跡は同時に桜井古墳群高見町支群としても重要な地域で、平成7年(1995)には市道予定区域とその西側の部分について調査が実施され、古墳8基、周溝を伴わない刳抜石棺3基、箱式石棺1基の他、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡21軒が確認されており、同古墳群の密度の高さをあらためて示している(註17)。平成8年度(1996)には個人宅地建設にかかる発掘調査で発見された18号墳(33)は、直径12mの円墳であり、地表下に設けられた竪穴の埋葬施設に割竹形木棺を安置していることが確認された。埋葬施設内には棺外埋葬として住居式期の3点の杯が副葬されており、後期の古墳であることが確認された(註18)。平成11年度(2000)には高見町A遺跡の確認調査が行われ、古墳7基、住居跡19軒が確認された。このうち15号墳は後期に築造された主軸長20mの前方後円墳であり、後円部中央に割竹形木棺を直葬し、棺内部からは副葬品として鉄製直刀1振、鉄鏃7点、鉈1点が出土している。(註19)。また12号墳は墳丘直径10mを計測する円墳で、墳丘中央部からは墳丘基底面から掘り込んだ竪穴状の墓坑が検出された。墓坑内には割竹形木棺を直葬したものと考えられ、副葬品として鉄製馬具(轡・鏡板)と両頭金具もしくは辻金具と思われる鉄製品が出土し、他の古墳とは異なる状況を呈していることが確認された(註20)。

平成8年(1996)には荷渡古墳群(26)、平成13年度(2001)には北山古墳群(27)の調査が実施されている。荷渡古墳群は山頂に築かれた3基の円墳で構成される古墳群である。いずれの埋葬施設も割竹形木棺の直葬であることが確認された(註21)。北山古墳群は荷渡古墳群と同一の丘陵頂部に築かれた古墳群であり、2基の前方後円墳と5基の円墳で構成される古墳群である。このうち2号墳は墳丘主軸長23m、4号墳は墳丘主軸長が20m前後の前方後円墳である。その他の古墳はいずれも直径15mの円墳で、1号墳は墳丘覆土下を竪穴状に掘り込んだ墓坑内に礫をつめた礫槨であること、3号墳は墳丘覆土中に構築された横穴式石室を有する古墳であると考えられる(註22)。この他、市内各地の丘陵上に古墳が築かれており、北泉の地藏堂古墳群(28)、江井の西谷地古墳群(29)、鶴谷の五治郎内古墳群(30)などが所在している。

終末期になると、当地方でも横穴が多く造られている。現在確認されている分布状況をみると、鹿島町との境に近い新田川北部の上北高平には北沢横穴群(31)、京塚沢横穴群(32)、新山前横穴群(33)、北泉に大磯横穴群(34)、地藏堂横穴群(35)、下北高平に北山横穴群(36)、太田

川北部の上太田には道内迫横穴群(37)、大甕には西迫東迫横穴群(38)、雫には坂下横穴群(39)、太田川南部の高には、昭和40年(1965)に調査された高林横穴群(40)(註23)などが河川流域の沖積平野を望む丘陵に所在しており、古墳の分布の在り方とほぼ合致している。また、中太田の中畑横穴群(41)、羽山横穴群(42)、上太田の新橋横穴群(43)は、雲雀ヶ原扇状地を望む丘陵に所在している。このうち、昭和48年(1973)に発掘調査が行なわれた国指定史跡の羽山横穴(1号)(42)は、玄室奥壁から天井にかけての範囲にベンガラと白色粘土によって人物・馬・白鹿・渦巻きなどの装飾画が描かれており、調査後に保存施設を建設して年間4回の一般公開を通して社会教育に役立てている(註23)。

平成13年度には北山古墳群と同一丘陵の腹部で確認された北山横穴群の発掘調査が行われ8基の横穴が確認された。羨道部から須恵器提瓶や石製紡錘車が出土している(註24)。

第5項 奈良・平安時代

奈良・平安の遺跡は、律令体制のもとに行方郡家跡である泉廃寺跡(44)や軍団跡に擬定される植松廃寺跡(45)が新田川北側の丘陵裾部に所在している。両遺跡についてはこれまで発掘調査による成果はなかったが、泉廃寺跡については、平成6年度(1994)、県史跡内の従来焼米が出土する地点から西側で、宅地新築に伴う試掘調査により、8～9世紀の掘立柱建物跡と礎石建物跡が検出されるとともに、掘立柱建物跡から礎石建物跡への変遷が確認された(註25)。平成7年度には県史跡の南東外側で、官衙的な色彩の強い一本柱列跡が2列発見され(註26)、平成8年度の第3次調査では掘立柱建物跡3棟、一本柱列2列が(註27)、第4次調査では掘込地業を伴う礎石建物跡とこれを囲む溝跡が検出され、正倉院を構成するものと推定された(註28)。第5次(註29)、第7次調査では泉廃寺跡南辺部の調査が行われ、運河状の溝跡と溝跡の東西に合計15棟の掘立柱建物跡が確認されている。平成11年から平成13年には県指定地東側隣接地で、複数時期の柱列と柱列に附属する建物跡で区画された区域内部に、コの字に配置された建物跡が検出され郡庁院であることが確認された。郡庁院には大きく三時期の変遷が認められ、Ⅰ期は院を区画する柱列と柱列に連結した前、後、両脇殿が配され、その中央やや北寄りに正殿が配置される。区画の中心軸は真北方向から東に偏する。Ⅱ期はⅠ期の配置を踏襲したまま院の中心軸を真北に向ける。またⅡ期は小時期に細分され四面に庇を伴う正殿が現れるのもⅡ期である。Ⅲ期は院の区画が最も大きくなる時期である。後殿・両脇殿は独立した形態をとり、中央には正殿が配置される。また院の南面には八脚門が付属することが明らかとされた(註32・33・34)。現在までの調査では郡家の初現は7世紀後半、廃絶は10世紀と考えられている。平成10年には遺跡の最も西側で行われた第8次調査では、柱列による区画施設と八脚門、区画施設内部に建てられた掘立柱建物跡が発見され、館院として位置付けられている(註35)。平成13年度には郡庁院と館院の間に位置する県指定地内で実施された第16次調査では、2時期の区画溝とその内部に造営された掘込地業が確認され、この県指定地を中心とする付近には溝で区画された正倉院が展開していることが明らかとなった。またこの区画溝の底面付近からは「大伴マ」と書かれた木簡が出土しており、この溝が「大伴氏」が「伴氏」に改名する823

年以前の年代が与えられたことは、この木簡が泉麿寺跡で初めて出土した木簡であることと同時に、正倉院における遺構変遷に時間軸を設けることができた点は大きな成果である（註36）。

このような継続的な発掘調査の成果により、泉麿寺跡が陸奥国行方郡家であることがほぼ確実となり、古代の地方官衙を考える上で大きな成果があがっている。

また、泉麿寺跡と植松麿寺跡の両遺跡からは布目瓦が出土しており、供給源として泉麿寺跡には大甕の京塚沢瓦窯跡（46）が（註37）、植松麿寺跡には昭和59年（1984）に国土館大学により発掘調査が行われた入道迫瓦窯跡（47）（註38）が考えられている。その他、馬場の滝ノ原窯跡（48）では平安時代の須恵器窯跡3基が調査され、杯、長頸瓶などが出土している。

また、海岸部の金沢丘陵の一带には大規模な金沢製鉄遺跡（49）が所在している。平成元年度（1989）から5年度までに、（財）福島県文化センター遺跡調査課により発掘調査が進められた結果、7世紀後半から9世紀の製鉄炉跡123基、木炭窯跡140基、竪穴住居跡121軒、鍛冶炉跡16基、掘立柱建物跡10棟など全国最大の調査数を誇り、内容においても古代の鉄生産に関する技術や社会的背景などを知る上で多大な成果が報告されている（註39・40・41・42）。

東北電力原町火力発電所（株）では、発電所敷地内に木炭窯と製鉄炉の保存施設を建設し、年4回の一般公開を行っている。

この時期になると、土師器や須恵器を出土する集落が増えるが調査例は少ない。変化としては新田川や太田川流域の河岸段丘の平坦面あるいは自然堤防上など、これまで遺跡が少なかった平野部の微高地にも多くの遺跡が立地している。特に延喜式内社の押雄神社、冠嶺神社を中心とする北長野一带、多珂神社、日祭神社を中心とする大甕一带、太田川中流域の上太田一带、桜井の河岸段丘面に多く所在しており、その後の呼称であるが、いわゆる野馬追原を取り囲むような立地構成をしている。平成12年（2000）に上太田ほ場整備事業に関連する試掘調査では町川原遺跡（50）で平安時代の集落跡が確認されている（註43）。また大甕地区ほ場整備事業に関連して平成2年（1990）に範囲確認調査が実施された米々沢の竹花A遺跡（51）では、奈良・平安時代の竪穴住居跡3軒が確認されており（註44）、平成10年（1999）の試掘調査では溝跡が発見されている（註45）。平成4年（1992）には上北高平の高松B遺跡（52）で奈良・平安時代と推定される竪穴住居跡2軒が試掘調査により発見されている。

第6項 中世

中世の遺構としては城館跡が挙げられるが、信田沢の内城のように現在では所在地不明のものや城館の構造が不明確のものも多い。その中でも、北泉の泉館跡（53）は中世山城の典型的な形態をとどめている。館主は相馬氏の一族泉氏の館跡といわれ、その重要性から市指定史跡となっている。他にも、牛越城跡（54）、大甕七館の一つである明神館跡（55）、奥州下向の際、最初に相馬氏の拠点となった別所館跡（現、太田神社）（56）などが比較的良好な中世山城の形態を残しながら所在している。一方、在地の領主の館跡も丘陵上や平野部の各地に点在しているが、発掘調査の手続きもなされないまま、部分的な破壊を受けているものもある（註46）。

中世村落遺跡の把握は難しいが、米々沢の谷地畑遺跡（57）はその可能性が高い。平成2年

に範囲確認調査が実施され、祥符元寶などの北宋銭が出土しており、中近世の遺跡と推定される（註47）。遺跡は奈良・平安時代の竹花A遺跡に隣接し、太田川北岸の自然堤防上に立地している。

中世末の館跡である泉平館跡（58）は、相馬一族の長、岡田氏の居城とされ、短期間に使用された館ではあるが、ほ場整備事業に伴い平成7年度に主郭から南側の発掘調査が実施された結果、小規模な畝堀を伴う堀跡と出入口が見つかった（註48）。この調査で堀跡から出土した木製の呪符は中世の信仰を知る上で貴重な資料である。

第7項 近世・近代

近世の遺構として、初頭期の慶長2年（1597）から同8年（1603）に相馬氏の居城として再整備されて使用された牛越城跡（54）や中期初頭の寛文6年（1666）以降に築かれた野馬土手（59）及び出入口となる木戸跡がある（註49）。野馬土手は、野馬追に欠かせない野生馬の保護に力を尽くしてきた結果、増殖した馬が畑の作物を荒らしたり、放散しないように雲雀ヶ原扇状地を囲むように、東西約10km、南北約2.6kmに築かれたものである。大部分は土塁であるが、石垣としていた所もある。平成5年には、小高町が菖蒲沢で石垣の野馬土手の一部分を調査しているが、現在ではほとんど消滅してしまっており、その保護が急がれる。昭和62年（1987）の桜井古墳史跡範囲内に所在する野馬土手の範囲確認調査（註49）及び、平成5年の牛来、歴史民俗資料館予定地における調査では、土手の規模と内側に溝を掘っていた状況が確認されている。木戸跡は、多い時で30数ヶ所が設けられていたといわれているが、現在その姿をとどめているものは市指定史跡の羽山岳の木戸跡（60）一ヶ所だけとなっている。

近世後半から近代にかけては奥州中村藩営の大規模なたたらとして馬場鉄山（61）があり、周辺の小規模なたたらとしては（財）福島県文化センター遺跡調査課により調査された馬場の五台山B遺跡（62）、片倉の羽山B遺跡（9）が阿武隈高地の山間部に遺されている。また、近年、泉の正福寺跡（63）の調査では火葬墓が検出され（註50）、泉の法幢寺跡（20）（註11）、北泉の地藏堂B遺跡（64）（註51）ではいわゆる鍋被りを含む土坑墓が調査され、近世の葬制、墓制に関する資料も蓄積されつつある。



图2 原町市内主要遺跡位置图

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

この節では蛭沢遺跡群、川内迫B遺跡群が立地している自然環境について簡単にまとめる。

蛭沢遺跡群、川内迫B遺跡群は福島県原町市中太田字川内迫、雫字蛭沢地内に所在し、原町市内を縦断するJR常磐線磐城太田駅から南西1.2kmの地点に位置している。川内迫B遺跡群が所在する中太田行政区は原町市のほぼ中心に位置し、蛭沢遺跡群が所在する雫行政区は中太田行政区の東側に隣接する行政区で海岸部までの広がりをもつ。

遺跡がのる地形は阿武隈高地から東に派生する標高30~40m前後の低位丘陵で、阿武隈高地周辺部では標高が高く、原町市内から海岸線に向かうにつれて徐々に標高を下げている。この丘陵は葉脈状に分布した緩傾斜面で構成されており、通称相双丘陵と称される。これらの阿武隈高地から派生する丘陵は、福島県相双地方の各地を横断するように幾重にもわたり形成されており、これらの丘陵に挟まれた谷部をその地域を代表する河川が流れている。

原町市内では最も北部にあたる丘陵には蛭沢遺跡群、川内迫B遺跡群とほぼ同時期の金沢製鉄遺跡群が展開する丘陵が位置し、その南側には阿武隈高地に水源を発する二級河川である新田川が流れている。新田川の下流域には新田川によって形成された沖積平野が広範囲に展開し、新田川流域に分布する遺跡群は新田川を望む丘陵部または河川によって形成された河岸段丘の縁辺に多く分布する傾向にある。

一方、蛭沢遺跡群、川内迫B遺跡群が展開する丘陵の南側にも二級河川である太田川が流れている。太田川もまた阿武隈高地に水源が求められ、丘陵の南側を緩やかに蛇行しながら東流し最終的には太平洋に達する。太田川下流域には太田川や、その支流である鶴江川、牛川などによって形成された沖積平野が広がるが、この沖積平野の左右にはさらに丘陵が位置していることから、平野部の幅は比較的狭い状況にある。この周辺に営まれた遺跡群はこれらの河川によって形成された丘陵の裾部や丘陵頂部にかけての範囲に多く所在する傾向にあり、河川によって形成された自然堤防上や河岸段丘の縁辺には、それほど多くの遺跡は築かれていない。

蛭沢遺跡群、川内迫B遺跡群が展開する丘陵に眼を向けると、阿武隈高地から東に向かって走る丘陵の主な尾根の左右に小規模な尾根と谷が形成されている。これらの小規模な尾根部と谷部は葉脈状に巡っており、非常に複雑な地形を構成している。さらに、東西に走る主丘陵の尾根筋と直交するように若干規模の小さくなる尾根が形成されており、その尾根から派生する小規模な尾根と谷は非常の細かな樹枝状を呈することとなる。遺跡群はこれらのもっとも単位が小さくなる尾根部と谷部をひとつのまとまりとして構成される傾向がある。

(荒)

第2節 歴史的環境

この節では、周辺に所在している周知の遺跡を含め、歴史的な環境を概観する（図3）。

原町市中太田地区周辺では、28箇所で埋蔵文化財が確認されている。確認されている埋蔵文化財は縄文時代1遺跡、弥生時代4遺跡、古墳時代8遺跡、奈良・平安時代11遺跡、中世2遺跡、その他複合遺跡が3遺跡となっている。

当地区で最も古い時代に位置付けられる遺跡は蛭沢遺跡群、川内迫B遺跡群から南東に約5kmの地点に所在する大久保遺跡（24）である。大久保遺跡は縄文、弥生、奈良、平安時代の複数の時期に渡って形成された散布地として登録されている。発掘調査は実施されていないために詳細な遺跡の内容については不明であるものの、表面採集により縄文土器、弥生土器などが採集されている。平成6年度の県営ほ場整備事業に伴う試掘調査では縄文土器、平安時代の掘立柱建物跡1棟、平安時代以降の掘立柱建物跡1棟が検出されたことから、各時代の集落を形成する複合遺跡であると考えられる。遺跡は丘陵の突端に位置し目前には太田川によって形成された沖積地が一望できる。

弥生時代の遺物が採集されている遺跡は4遺跡ある。小原遺跡（3）は蛭沢遺跡群、川内迫遺跡群の北西約1kmの地点に位置している。遺跡は蛭沢、川内迫両遺跡が展開する丘陵の西部で、丘陵を縦断する谷部によって形成された尾根の突端に位置し、標高は15m前後とさほど高い地点にはない。当遺跡からは表面採集によって弥生土器が採集されている点を考慮すれば弥生時代を中心とした時期の集落跡である可能性が指摘される。川内迫遺跡（4）は川内迫B遺跡の北西約0.5kmに地点に位置する遺跡である。遺跡は低位丘陵のほぼ中心部の高地に位置している。榊形冢式を中心とする弥生土器片が採集されていることから弥生時代中期を中心とした時期に形成された遺跡であると考えられる。高林遺跡（5）は蛭沢遺跡群、川内迫遺跡群の所在する丘陵の更に南側に展開する丘陵上に所在する遺跡である。遺跡の推定範囲は小規模であるものの、弥生土器片が採集されており、遺跡の内容としては小原遺跡や川内迫遺跡とほぼ同様のものと思われる。大光内遺跡（6）は丘陵の裾部に近い沖積地に築かれた遺跡である。表面採集では磨製石器が採集されており、榊形冢式期から桜井式期を中心とした時期の集落に関係する遺跡と推測されているが、現在では当地からは遺物の出土を確認することはできない。

古墳時代に比定される遺跡は8遺跡を数える。西迫東迫横穴墓群（7）、道内迫横穴墓群（8）は蛭沢遺跡群、川内迫遺跡群と同丘陵の南斜面に展開する。一方、南迫横穴墓群（10）、権現壇横穴墓群（13）は南側に位置する別丘陵の中腹に位置する。墳丘を有する古墳群としては五治郎内古墳群（11）、姫塚古墳（12）、別所古墳（9）がある。五治郎内古墳群は直径10m程度の墳丘5基で構成されており、この地域では珍しく古墳群を形成する。姫塚古墳、別所古墳は現在では墳丘の存在を認めることができず、古墳の詳細について知りうる情報はまったくない。西迫遺跡（14）は表面採集によって土師器が採集されている遺跡で、古墳時代を中心とした時期の集落遺跡である可能性があり、太田川流域の古墳時代を検討する上では重要な位置を占める遺跡と思われる。また、先述した大久保遺跡からは石製模造品が出土している。

奈良・平安時代に比定される遺跡は11遺跡を数える。まず製鉄に関連する遺跡としては蛭沢

遺跡群（1）、川内迫B遺跡群（2）、川内迫C遺跡（15）がある。いずれの遺跡も丘陵の頂部から中腹にかけての広範囲で鉄滓や羽口などが採集されており、非常に集中した範囲に位置していることが解かる。一方、塚田遺跡（16）、芦ノ坪遺跡（17）、古内遺跡（18）、板の上遺跡（19）、城ノ内遺跡（20）、竹花A遺跡（21）、東谷地遺跡（22）、石橋遺跡（23）、大久保遺跡（24）東原遺跡（25）の8遺跡は、川内迫B遺跡群、蛭沢遺跡群を中心としたその周辺地に所在する傾向がある。いずれの遺跡も太田川によって形成された沖積平野部もしくは丘陵の突端部の、比較的標高が低い場所に築かれており、同時期の製鉄遺跡とは対照的な分布状況を示している。これらの遺跡からは平安時代を中心とする土器片が採集されていることから、集落に代表される遺跡であると思われ、丘陵上に築かれた生産遺跡との関連が想定される遺跡である。ただし、塚田遺跡、舟橋遺跡、芦ノ坪遺跡は平成6年度実施した試掘調査では遺構、遺物は発見されなかった。

この地区では中世の館跡が所在している。図にはその所在が明らかとされる2遺跡を図示したが、この他に館跡の推定地が11箇所ある。別所館跡（26）、明神館跡（27）はいずれも沖積平野のなかに取り残されたような自然の独立丘陵上に位置しており、別所館跡は三浦氏及び相馬領主相馬重胤、明神館跡は相馬氏の分流岡田氏の館と伝えられている。

近世の遺跡は1遺跡と少なく谷地畑遺跡が該当する。谷地畑遺跡は発掘調査の結果、中世の渡来銭が出土し、また近世の陶磁器とともに鉄滓などが出土しており近世の小鍛冶に関連する遺跡であると考えられている。

以上、太田川流域における歴史的な環境について概観してきたが、当地では縄文時代から古墳時代にかけての遺跡の分布は非常に散発的で、新田川流域とは好対照の状況にある。一方、奈良・平安時代に遺跡については、丘陵を中心に築かれた製鉄関連遺跡を中心に集落が営まれた可能性があり、奈良・平安時代の生産遺跡と生産活動を行った人々の生活を明らかにすることができる可能性がある地域であると思われる。

また、中世になると多くの館跡が築かれるのも当地区の大きな特徴のひとつである。

(荒)

No.	遺跡名	時代	種別
1	蛭沢遺跡群	奈良・平安	製鉄
2	川内迫B遺跡	奈良・平安	製鉄
3	小原遺跡	弥生	散布地
4	川内迫遺跡	弥生	散布地
5	高林遺跡	弥生	散布地
6	大光内遺跡	弥生	散布地
7	西迫東迫横穴墓群	古墳	横穴墓
8	道内迫横穴墓群	古墳	横穴墓
9	別所古墳	古墳	古墳
10	南迫横穴墓群	古墳	横穴墓
11	五治郎内古墳群	古墳	古墳
12	姫塚古墳	古墳	古墳
13	権現壇横穴墓群	古墳	横穴墓
14	西迫遺跡	古墳	散布地

No.	遺跡名	時代	種別
15	川内迫C遺跡	奈良・平安	製鉄
16	塚田遺跡	奈良・平安	散布地
17	芦ノ坪遺跡	奈良・平安	散布地
18	古内遺跡	奈良・平安	散布地
19	板の上遺跡	奈良・平安	散布地
20	城ノ内遺跡	奈良・平安	散布地
21	竹花A遺跡	奈良・平安	集落
22	東谷地遺跡	平安	散布地
23	石橋遺跡	平安	窯跡
24	大久保遺跡	縄・弥・奈・平	集落
25	東原遺跡	奈・平・中・近	窯跡
26	別所館跡	中世	館跡
27	明神館跡	中世	城館跡
28	谷地畑遺跡	中世・近世	集落

表1 周辺遺跡一覧表

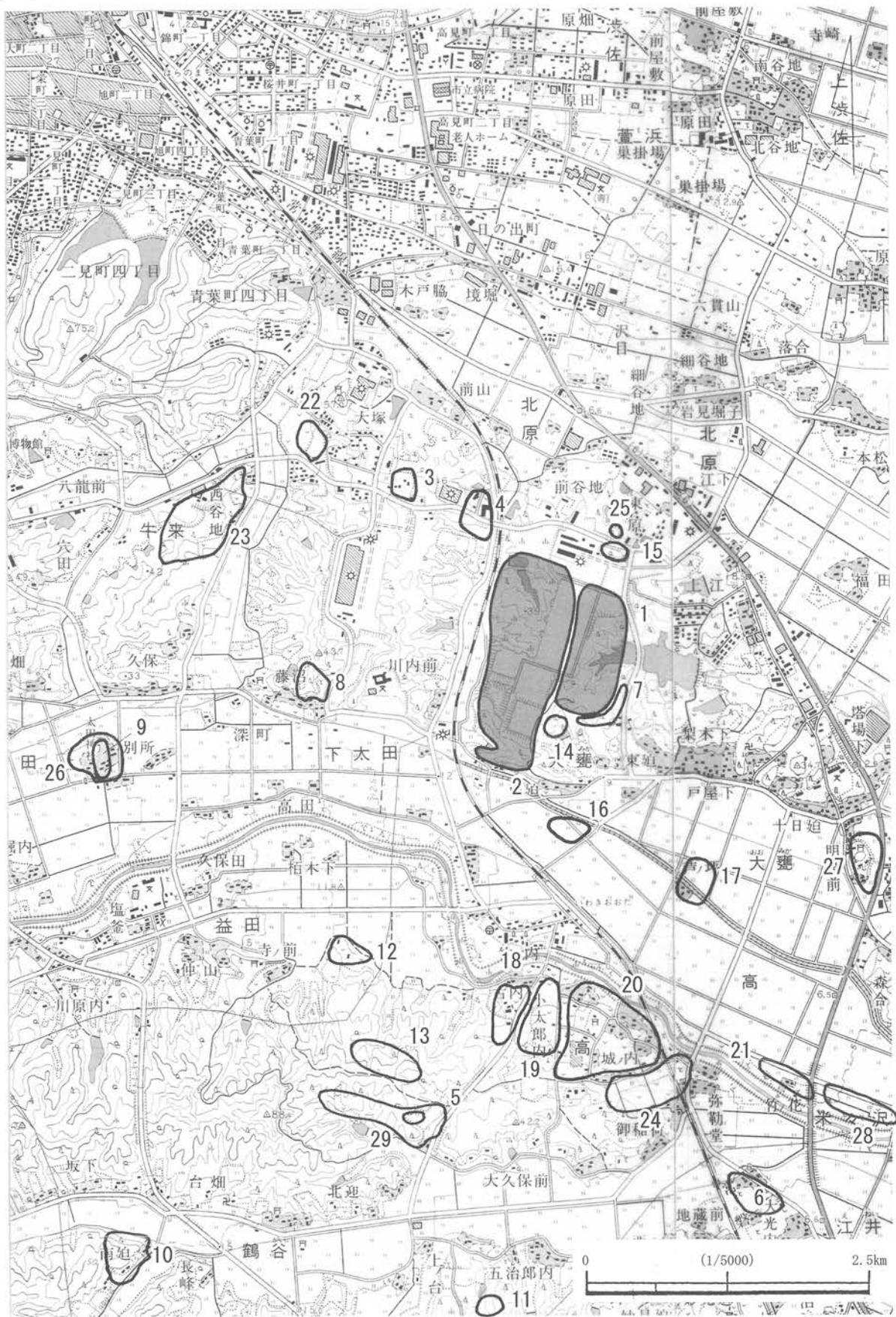


图3 周边遺跡位置图

第3章 調査経過

第1節 調査に至る経過

原町市では低迷する経済状況の中、優良企業の誘致を進めていたが、平成3年に茨城県土浦市に事業本部を持つ日立建機株式会社が大型の重機生産部門の工場を原町市に移す計画を決定した。場所は原町市下太田字川内迫及び雫字蛭沢地内で、面積は約44haに及ぶ広大な土地であり、造成面積は33haであった。

造成予定地の地形は、阿武隈丘陵から東に派生する低位丘陵で、当時原町市内では、金沢地区における火力発電所建設に伴い、福島県教育委員会が低位丘陵に散在する奈良・平安時代の製鉄遺跡群20haを実施していた。この調査成果は、これより先に相馬開発に伴い発掘調査された武井地区製鉄遺跡群とともに、当地方が古代において有数の製鉄地帯であったことを証明し、その規模は全国最大級であることが示された。

このような状況の中で持ち上がった蛭沢、川内迫地区における造成計画に際しては、当時の埋蔵文化財包蔵地台帳では造成予定地内に周知の遺跡は所在していなかったものの、金沢製鉄遺跡群と地形が共通しており、製鉄遺跡の存在が予想されたことから、平成4年から表面踏査を開始した。

現地表面踏査の結果、製鉄遺構に関連すると思われる廃滓場が3カ所で確認されたため、市教育委員会では、廃滓場について現状保存が困難な場合の発掘調査実施と廃滓場以外の遺跡の範囲を確認するための試掘調査の必要性を市当局及び事業者に伝えた。協議の結果、廃滓場が確認された箇所については早急に記録保存のための発掘調査を実施するとともに、平成4年度中に遺跡範囲の確認、および遺跡の内容を把握するための試掘調査を実施することとなった。試掘調査経費は市が負担し、本発掘調査及び試掘調査のための山林の下刈りは事業者が協力することで合意した。

(齋藤)

第2節 調査経過

試掘調査は造成予定範囲に、1×8mのトレンチを約1000カ所に設け、埋蔵文化財の有無、範囲、性格の把握に努めた。調査の結果、既確認箇所も含めると遺構、遺物の検出は16カ所となり、約46200㎡の範囲に古代の製鉄に関連する遺構が展開していることが確認された。

その後、確認された埋蔵文化財の取り扱いについての協議の結果、遺跡の現状保存は困難であると判断され、造成計画に合わせて記録保存のための発掘調査を実施することで合意された。調査経費は原測として事業者が負担すること合意を得た。

発掘調査は平成4年度から開始されたが、その後経済状況に好転の兆しが見られないことから、平成6年度には、事業の一時見合わせとともに発掘調査の中断について申し入れがあった。

その後、平成8年になり、事業者から市に対し、規模を縮小し、平成9年度完了の造成計画が示され、市教育委員会にも当該調査範囲14400㎡に係る発掘調査の実施要請があった。

調査経過

以下、事務手続きにかかる主な事項についてについて記する。

平成3年度	10月21日	日立建機株式会社土浦工場より埋蔵文化財の照会についての提出	
	11月2日	現地踏査実施	
	11月6日	埋蔵文化財調査照会について（回答）の提出	
平成4年度	5月14日	4原教文第60～961号にて遺跡の発見についての提出	
	5月20日	事業者より文化財保護法第57条2第1項による 埋蔵文化財発掘の届出についての提出	
	7月15日	発掘調査業務委託契約の締結	
	8月26日	日立建機株式会社所有重機使用にかかる覚書の締結	
	9月9日	福島県教育委員会教育長より遺跡の発見について（通知）、 および埋蔵文化財の発掘について（通知）	
	9月25日	都市計画法附則第4項（開発行為）に係る事前協議の開催	
	10月12日	4原教文第117～961号にて試掘調査の承諾について提出	
	3月5日	埋蔵文化財発掘調査業務委託変更契約の締結	
	平成5年度	4月5日	発掘調査業務委託契約の締結
		4月6日	発掘調査開始
5月		平成4年度分発掘調査概要報告書の提出	
2月22日		発掘調査業務委託契約の締結	
3月1日		日立建機より発掘調査中断の依頼	
3月25日		本調査休止。調査面積約11,900㎡	
平成6年度		5月27日	6原教文第88号にて平成5年度分発掘調査概要報告書の提出
	2月17日	埋蔵文化財発掘調査業務委託契約の締結	
平成7年度	12月25日	事業者から文化財保護法第57条2第1項による 埋蔵文化財発掘の届出についての提出	
	1月29日	文化財保護法第98条2第1項による 埋蔵文化財発掘調査の通知についての提出	
	2月5日	埋蔵文化財発掘調査業務委託契約締結	
	2月9日	福島県教育委員会教育長より埋蔵文化財の発掘について（通知）	
	3月18日	埋蔵文化財発掘調査業務委託解除契約締結	
	平成8年度	4月9日	埋蔵文化財発掘調査業務委託契約締結
		2月19日	事業者から文化財保護法第57条2第1項による 埋蔵文化財発掘の届出についての提出
		2月24日	文化財保護法第98条2第1項による 埋蔵文化財発掘の届出についての提出（川内迫B遺跡群）
		3月3日	文化財保護法第98条2第1項による 埋蔵文化財発掘調査の報告についての提出（蛭沢遺跡群） 福島県教育委員会教育長より 周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）
		3月24日	埋蔵文化財発掘調査業務委託変更契約締結
3月29日		福島県教育委員会教育長より 周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）	
平成9年度		4月10日	事業者から文化財保護法第57条2第1項による 埋蔵文化財発掘調査の届出の提出（川内迫B遺跡・蛭沢遺跡群）
		4月28日	文化財保護法第98条2第1項による 埋蔵文化財発掘調査の報告についての提出
	5月12日	福島県教育委員会教育長より 周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）	
	5月16日	平成8年度分埋蔵文化財発掘調査業務委託実績報告書の提出	

	5月23日	文化財保護法第98条2第1項による 埋蔵文化財発掘調査の報告についての提出
	6月2日	福島県教育委員会教育長より 周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）
平成11年度	6月25日	埋蔵文化財発掘調査業務委託契約締結
	2月4日	埋蔵文化財発掘調査業務委託変更契約締結
平成12年度	4月3日	埋蔵文化財発掘調査業務委託契約締結
平成13年度	4月2日	埋蔵文化財発掘調査業務委託契約締結
平成14年度	9月30日	埋蔵文化財発掘調査業務委託契約締結
	3月31日	埋蔵文化財発掘調査報告書の刊行

（齋藤）

第3節 調査の方法

第1項 試掘調査

試掘調査はトレンチ法を採用した。トレンチは1×8mの大きさを基本トレンチとし、地形にあわせて設けた。トレンチの掘り下げならびに遺構検出作業は表土除去の段階から人力作業で行った。トレンチ内から出土した遺物は出土トレンチならびに層位を記録して取り上げた。またトレンチの配置は設定した箇所を図上に記載し、トレンチ配置図を作成した。

また、試掘調査で遺構が検出されたトレンチについては随時調査区を拡張し、発掘調査に移行している。特に試掘調査で遺構が検出されたトレンチが集中した場合は、その後の面的に表土を除去し発掘調査に移行した。

第2項 発掘調査

グリッドの設定（図4）

発掘調査を始めるにあたって、蛭沢遺跡群、川内迫B遺跡群の両遺跡が立地する丘陵全体にグリッドを設定した。設定したグリッドは任意方向であったため、グリッドの南北線、東西線は公共座標の真南北線、真東西線とは対応しない。設定した調査グリッドの南北線は公共座標から求められる真南北線よりN17°Wを指す。

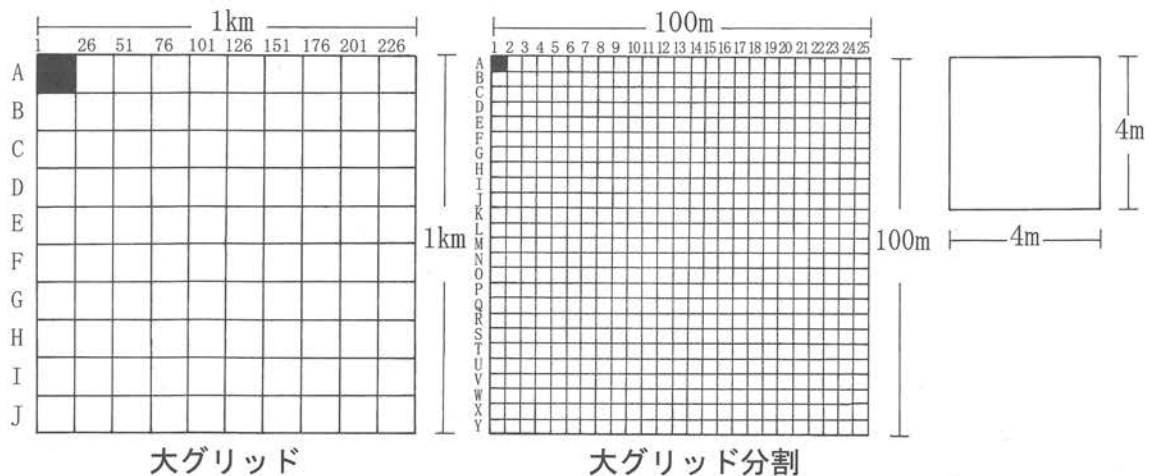


図4 グリッド表示図

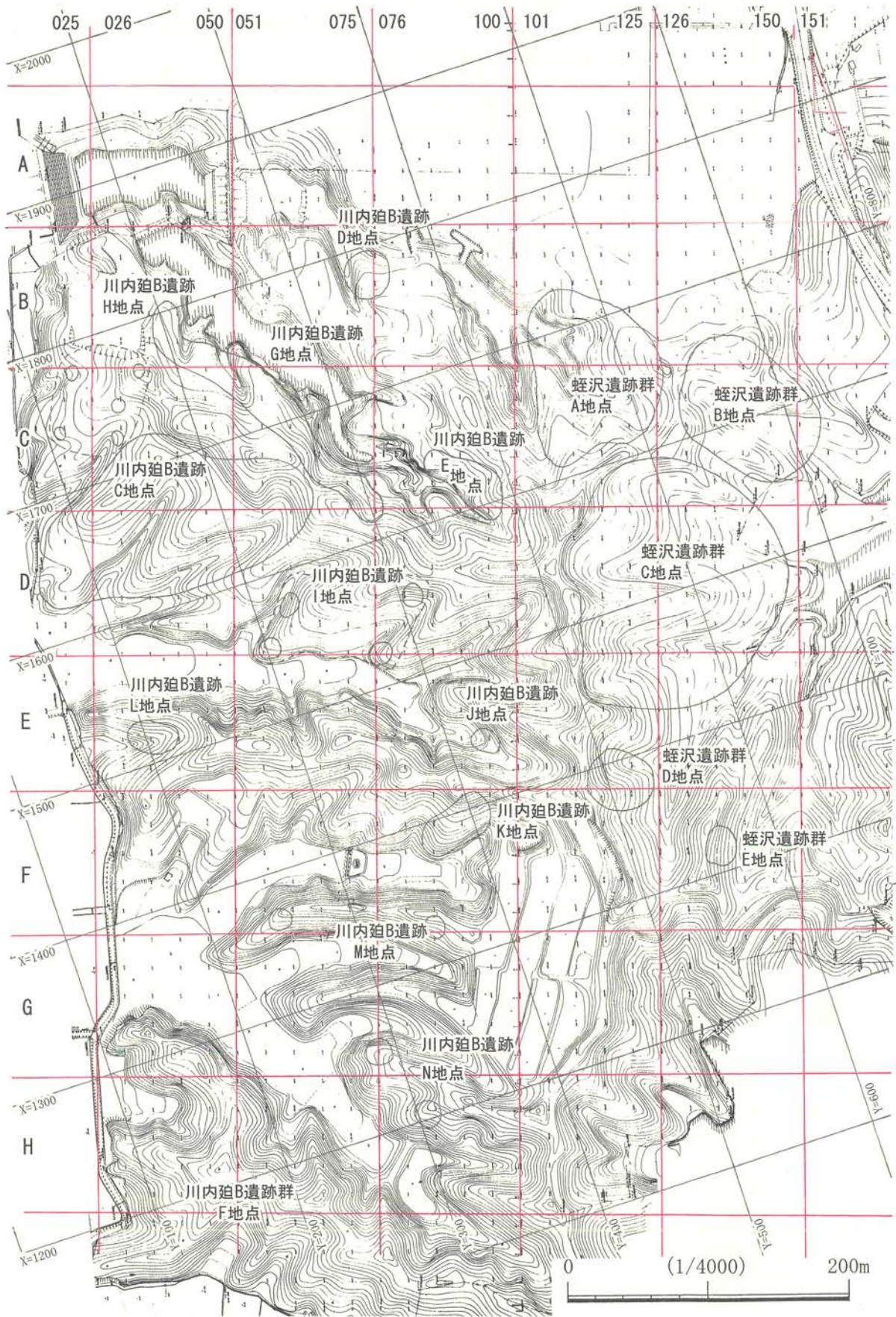


図5 グリット配置図

任意方向で設定したグリッドは100m四方の大グリッドと、それを25分割した一辺4m四方の小グリッドに細分される。大グリッドはX軸のみに設け100m進むごとにA・B・C…と標記する。X軸大グリッドは小グリッドに細分され、小グリッドもまたそれぞれをA・B・C…と呼称することとした。従って大グリッドA地区の北西角に位置する小グリッドはAAと標記されることとなる。Y軸は大グリッド分割をせず、小グリッドのみで標記し、4m南に進むごとに1・2・3…と標記される。従ってX軸のAA地点からY軸を東に4m進むごとにAA1、AA2、AA3…と標記される(図4・5)。

今回の発掘調査の対象となる遺跡は阿武隈高地から東に派生する低位丘陵の広範囲に分布しているため、発掘調査では調査区内に位置する小グリッドの交点に必要な応じて木製杭を埋設し、地形、遺構の測量ならびに遺構外から出土した遺物の取り上げに用いた。

なお、調査された遺構の位置を明示するために、上述のグリッドに局地座標を与えている。座標値は調査グリッドCZ-91をN・S・E・Wの各方位の原点0地点とし、北に移動するとN-1・2と移行し、南に移動するとS-1・2と変化する。また東西方向も同様である。掲載した挿図には、調査グリッド、もしくは局地座標値を明示し、遺構の位置を標記している。

調査方法

本調査では表土のみを重機によって排出し、遺構の検出、精査は人力で行った。各遺構の調査にあたっては土層観察用ベルトをもとに4分割法を基本として行い、土坑などの規模の小さい遺構は2分割法を用いた。分割法によって生じる区割りについては、遺構に向かって北西区画から東へA-B、南西区画から東へC-Dと付した。

遺物の取り上げは、基本的にはその位置・高さを記録し、4分割法の区割りも併用した。多量に出土する鉄滓については、発掘作業の中に組み込み、現場において水洗い、選別計測を行った後、土のう袋に収納した。

記録の作成

遺構の記録は遺跡内に設定したグリッド杭を用いた平板測量法を採用している。作成した測量図の縮尺は $S=1/20$ を基本とし、規模の小さい遺構及び遺構内の細部は $S=1/10$ 、遺構断面図は $S=1/20$ で作成した。遺跡全体図は $S=1/200$ である。

写真は、検出状況、土層堆積状況、遺物出土状況、完掘全景の各段階で行い、35mm判のモノクローム、リバーサルフィルム、カラーネガフィルム、ブローニー判で撮影を行った。なお、平成5年度にはラジコンヘリコプターによる空中写真を撮影している。

(齋藤・荒)

参考文献・引用文献

- 註1 1968 竹島国基他 「第1章 先史時代」『原町市史』福島県原町市
- 註2 1990 寺島文隆他 『原町火力発電所建設関連調査報告書』I 東北電力(株)・(財)福島県文化センター・福島県教育委員会
- 註3 1994 武田耕平 「畦原F遺跡」『県道相馬波江線付替え工事関連遺跡発掘調査報告書』福島県原町建設事務所・原町市教育委員会
- 註4 2000 荒 淑人 「上ノ内遺跡」『原町市内遺跡発掘調査報告書』5 原町市教育委員会
- 註5 1983 長島雄一 『赤沼遺跡試掘調査報告』原町市教育委員会
- 註6 2002 荒 淑人他 『国史跡 桜井古墳』原町市教育委員会
- 註7 1997 鈴木文雄 「高見町A遺跡」『原町市内遺跡発掘調査報告書』2 原町市教育委員会
- 註8 1992 竹島国基 『桜井』
- 註9 2000 荒 淑人 『荷渡古墳群』原町市教育委員会
- 註10 1995 辻 秀人他 『桜井高見町A遺跡発掘調査報告書』東北学院大学文学部考古学ゼミナール・原町市教育委員会
- 註11 2001 鈴木文雄 「法幢寺跡」『県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書』II 福島県相双農林事務所・原町市教育委員会
- 註12 2001 鈴木文雄・吉田陽一 『桜井古墳群上洪佐支群7号墳発掘調査報告書』原町市教育委員会
- 註13 1998 平岡和夫他 『川内迫B遺跡群F地区』『姪沢遺跡群C・D地区』日立建機(株)・原町市教育委員会・〔有〕山武考古学研究所
- 註14 2002 鈴木文雄 「荒井前遺跡」『県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書』III
福島県相双農林事務所・原町市教育委員会
- 註15 1969 竹島国基他 『原町市高見町1号墳・与太郎内1号墳調査報告書』原町市教育委員会
- 註16 2002 辻 秀人他 「与太郎内古墳群測量調査報告」『福島考古』第43号 福島県考古学会
- 註17 1995 鈴木文雄 「高見町A遺跡」『原町市内遺跡発掘調査報告書』1 原町市教育委員会
- 註18 1996 鈴木文雄 「高見町A遺跡」『原町市内遺跡発掘調査報告書』2 原町市教育委員会
- 註19 2000 佐藤裕太 『高見町A遺跡』(株)福建コンサルタント・原町市教育委員会
- 註20 2000 堀 耕平 「高見町A遺跡」『原町市内遺跡発掘調査報告書』5 原町市教育委員会
- 註21 1999 荒 淑人 『荷渡古墳群』原町市教育委員会
- 註22 2002 荒 淑人 「北山古墳群」『原町市内遺跡発掘調査報告書』7 原町市教育委員会
- 註23 1965 竹島国基 『原町市高林古墳群調査報告書』原町市教育委員会
- 註23 1974 渡辺一雄他 『羽山裝飾横穴調査概報』原町市教育委員会
- 註24 2002 二本松文雄 「北山横穴墓群」『原町市内遺跡発掘調査報告書』7 原町市教育委員会
- 註25 2002 堀 耕平他 『県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書』3
福島県相双農林事務所・原町市教育委員会
- 註26 1996 堀 耕平 「泉麿寺跡第2次調査」『原町市内遺跡発掘調査報告書』1 原町市教育委員会
- 註27 2002 堀耕平・藤木海 「泉麿寺跡第3次」調査『県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書』III
福島県相双農林事務所・原町市教育委員会
- 註28 1997 堀 耕平 「泉麿寺跡第4次調査」『原町市内遺跡発掘調査報告書』2 原町市教育委員会
- 註29 2002 荒 淑人 「泉麿寺跡第5次調査」『県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書』III
福島県相双農林事務所・原町市教育委員会
- 註30 2002 荒 淑人 「泉麿寺跡第7次調査」『県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書』III
福島県相双農林事務所・原町市教育委員会
- 註31 2002 鈴木文雄 「泉麿寺跡第7次 糠塚」『県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書』III
福島県相双農林事務所・原町市教育委員会
- 註32 2000 堀 耕平他 「泉麿寺跡第12・13次調査」『原町市内遺跡発掘調査報告書』5 原町市教育委員会
- 註33 2001 藤木 海 「泉麿寺跡第14次調査」『原町市内遺跡発掘調査報告書』6 原町市教育委員会
- 註34 2002 藤木 海 「泉麿寺跡第17次調査」『原町市内遺跡発掘調査報告書』7 原町市教育委員会
- 註35 1999 堀 耕平 「泉麿寺跡第8次調査」『原町市内遺跡発掘調査報告書』4 原町市教育委員会
- 註36 2002 荒 淑人 「泉麿寺跡第16次調査」『原町市内遺跡発掘調査報告書』7 原町市教育委員会
- 註37 1968 竹島国基他 「第2章 古墳時代」『原町市史』原町市
- 註38 1984 戸田有二 「福島県原町市 入道迫瓦窯跡」『考古学研究室発掘調査報告書』国士舘大学文学部考古学研究室
- 註39 1991 寺島文隆他 『原町火力発電所建設関連調査報告書』II 東北電力(株)・(財)福島県文化センター・福島県教育委員会
- 註40 1992 寺島文隆他 『原町火力発電所建設関連調査報告書』III 東北電力(株)・(財)福島県文化センター・福島県教育委員会
- 註41 1993 寺島文隆他 『原町火力発電所建設関連調査報告書』IV 東北電力(株)・(財)福島県文化センター・福島県教育委員会
- 註42 1994 寺島文隆他 『原町火力発電所建設関連調査報告書』V 東北電力(株)・(財)福島県文化センター・福島県教育委員会
- 註43 2001 堀 耕平 「町川原遺跡」『原町市内遺跡発掘調査報告書』6 原町市教育委員会
- 註44 1990 小野田義和 「竹花A遺跡」『原町市内遺跡詳細分布調査報告書』I 原町市教育委員会
- 註45 1999 堀 耕平 「竹花A遺跡」『原町市内遺跡発掘調査報告書』4 原町市教育委員会
- 註46 1968 「第4章 鎌倉室町時代」『原町市史』福島県原町市
- 註47 1990 小野田義和 「谷地畑遺跡」『原町市内遺跡詳細分布報告書』I 原町市教育委員会
- 註48 2001 堀 耕平・藤木海 「泉平館跡」『県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書』II
福島県相双農林事務所・原町市教育委員会
- 註49 1974 玉川一郎 『野馬土手範囲確認調査報告書』原町市教育委員会
- 註50 1999 鈴木文雄 「正福寺跡」『県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書』I
福島県相双農林事務所・原町市教育委員会
- 註51 1998 堀 耕平 「地藏堂B遺跡」『原町市内遺跡発掘調査報告書』2 原町市教育委員会

第1編 試掘調査

第1章 試掘調査の概要

第1節 調査要項と調査経過

第1項 調査要項

遺跡名 蛭沢遺跡群・川内迫遺跡群
 所在地 福島県原町市雫字蛭沢・下太田字川内迫
 対象面積 330000 m²
 調査面積 11900 m²
 調査期間 平成4年7月15日～平成6年3月25日
 調査主体 原町市教育委員会
 調査担当 原町市教育委員会文化課
 調査担当者 文化財主事 武田耕平・学芸員・齋藤直之

第2項 調査経過

確認調査は、日立建機株式会社より提出された当該地における「埋蔵文化財の有無について（照会）」の提出によって実施された現地踏査から平成4年7月から実施した試掘調査が主な内容となる。

平成4年に実施した現地踏査では蛭沢遺跡群の2箇所で廃滓場が確認されたが、他の地点では遺構の確認まではできなかったため、同年からトレンチを用いた試掘調査を開始した。

試掘調査は開発の対象となる丘陵のほぼ全域に1×8mの規模のトレンチを基本として設定した。トレンチは対象地の地形に合わせて適宜設定し、遺構が確認された箇所では調査区の拡張を行い本調査に移行した。

以下、主な内容について調査日誌をもとに記載する。

- 平成4年度 7月 蛭沢A遺跡から試掘調査開始。
- 10月 東側尾根に5本トレンチを設定。5Tより縄文土器の小片が出土。
 8Tから焼土・鉄滓出土。新たにトレンチを設定。64Tより弥生土器出土。
 蛭沢遺跡群の西部にトレンチ設定。46～58T 写真撮影。
- 11月 バックホーによる表土剥ぎ継続。土師器甕底部片出土。隣接するトレンチから炭窯検出。小型木炭焼成土坑2基検出。土坑3ヶ所検出。
- 12月 試掘再開。再踏査の結果、新たに3ヶ所で鉄滓確認。
- 1月 土坑確認。尾根西側で炭窯3基を確認。

(齋藤)

第2章 調査成果

第1節 検出された遺構と遺物

第1項 トレンチの設定 (図6)

まず、1T から 99T までのトレンチは両遺跡がのる丘陵の北東付近に設けた。この付近は丘陵から東に向かって舌状に張り出す大きな尾根を中心とした範囲で、トレンチは丘陵先端付近では等高線に対して平行に設け、遺構、遺物の確認を行った。このトレンチ群の中央付近には現地踏査によって確認された廃滓場が位置しており、製鉄に関連する遺構の存在が想定された。

100T から 199T までのトレンチは丘陵の北辺ほぼ中央付近の範囲に設けた。この付近は丘陵中心部から北西に延びる大規模な尾根が位置し、尾根の両側には大規模な谷が形成されている。トレンチはこの大規模な尾根の頂部から丘陵中腹にかけた範囲において地形等高線に対して平行に設け、遺構、遺物の確認を行った。調査では、明瞭な遺構が確認されたトレンチは存在せず、遺構、遺物の分布は非常に希薄であることが確認された。

200T から 299T までのトレンチは100Tからのトレンチを設けた丘陵尾根南側の谷を挟んだ南側に展開する尾根北斜面に設定した。トレンチは地形等高線に対して平行に設け、遺構、遺物の確認を行った。調査トレンチでは比較的遺構が集中する傾向がある。251・265・259・294・296・297Tでは木炭窯跡、288Tでは住居跡、その他9本のトレンチで土坑が検出されている。

300T から 399T は丘陵の北西部に設定した。この付近の地形は丘陵の西側から丘陵中心に向かって入り込む起伏の強い谷が位置しており、トレンチはこの谷の斜面ならびに北側の尾根を中心とした範囲に設けた。トレンチは谷内部においては等高線に直行するように設定し、尾根上部については等高線に対して直行するトレンチと平行するトレンチを適宜配し、遺構、遺物の確認を行った。調査の結果土坑状の遺構が検出されたトレンチが約20箇所、鉄滓や土師器が出土したトレンチが11箇所確認された。

400T から 499T は丘陵西辺中央から丘陵中心部にかけた範囲に設けた。この付近の地形は南側に存在する大規模な谷北側の丘陵斜面に位置しているが、この丘陵中腹の3箇所には小規模な谷が形成されており、トレンチはこの小規模な谷部の斜面において、等高線に対して平行になるように設定し、遺構、遺物の確認を行った。検出された遺構は木炭窯跡、住居跡、溝跡とともに多数の土坑が、約12本のトレンチで検出された。

500T から 599T は丘陵西辺中央部から丘陵の中心部にかけた範囲に設定した。この付近の地形は400Tまでのトレンチを設けた丘陵南側の谷を挟んだ、さらに南側に展開する丘陵尾根で、尾根斜面には小規模な谷が複数形成されている。トレンチは地形起伏の緩やかな西部付近では等高線に対して平行に設定したが、丘陵中心部付近の地形起伏が激しい部分では等高線に対して並行するトレンチと、直行するトレンチを混在させて設定した。調査では木炭窯跡と思われる遺構が3箇所のトレンチで検出され、その他9箇所のトレンチで土坑が確認されている。



図6 蛭沢遺跡群・川内迫B遺跡群トレンチ配置図

600T から 699T は丘陵南辺ほぼ中央から丘陵中心部にかけて範囲に設けた。この付近の地形は遺跡ののる丘陵が南に向かって張り出す大きな尾根を主とするが、尾根の中央部には平坦面が造成されており、尾根は分断されたような状況を呈している。主な尾根斜面には小規模な谷が位置し樹枝状に形成されている。トレンチは尾根の中央部の平坦部を除いた斜面地に地形等高線に対して平行するトレンチを設け、遺構、遺物の確認を行った。この付近は蛭沢遺跡群の東側に位置する西迫遺跡や西迫東迫横穴墓群が位置する地点で、横穴3基が確認されている。

700T から 799T を設けた場所は遺跡東辺に位置し、大きく3つの尾根からなる。トレンチは、この東に向かって張り出した3本の尾根に重点的に配し、遺構、遺物の確認を行った。西迫東迫横穴墓群に関連する遺構が3箇所、トレンチで確認された。また5箇所のトレンチでは鉄滓が出土しており製鉄炉の存在が想定された。

1000T からは丘陵北西部の舌状に張り出す側辺部に設定した。トレンチは地形等高線に平行に設け遺構・遺物の確認を行った結果、弥生土器と石庖丁に代表される石器群が出土している。

(齋藤・荒)

トレンチ	検出遺構	出土遺物	時代	地区	備考
205	土坑1			川内迫B遺跡群E地区	
215	土坑1			〃	
217	土坑1			〃	
218	土坑1			〃	
220	土坑2			〃	
228	溝2			?	
229	境界土塁か?				
251	炭窯?2			川内迫B遺跡群G地区	
256	土坑1			〃	
259	土坑1			〃	
263	土坑1			〃	
265	炭窯?1 土坑1			〃	
267	炭窯?1			〃	
287	土坑1			〃	
288	住居?1	土師器(杯)		〃	
289		土師器(甕)		〃	
294	炭窯2			〃	
296	炭窯1			〃	
297	炭窯1	土師器(甕)		〃	
301	土坑1			川内迫B遺跡群H地区	
303	土坑?1			〃	
304	土坑?1			〃	
307		土師器(甕)		〃	
308	土坑1	土師器(杯) 鉄		〃	
317	土坑1			〃	
323	土坑1			川内迫B遺跡群C地区	
328	土坑1	土師器(杯・甕)		〃	
329	土坑1	土師器(甕)		〃	
330	土坑1	土師器(甕)		〃	
342		土師器(甕) 須恵器(甕)		〃	
343	土坑1	土師器(甕)		〃	
345		土師器(杯)		〃	
351		鉄滓		〃	
373		鉄滓		〃	
374		鉄滓		〃	
375		鉄滓		〃	
376		鉄滓		〃	
377		鉄滓		〃	
381		土師器(杯)		〃	

表2 トレンチ一覧表(1)

調査の方法

トレンチ	検出遺構	出土遺物	時代	地区	備考
381		土師器(杯)		〃	
389		土師器(甕)		〃	
405	土坑1			〃	
407	土坑1			〃	
418	土坑1			〃	
427	土坑1			〃	
453	土坑1			川内迫B遺跡群I地区	
470	土坑1			〃	
475	土坑1 東西に凹み			〃	
479	溝1			〃	
489	炭窯1			〃	
490	炭窯1			〃	
491	土坑1			〃	
494	住居1			〃	
537	炭窯1			川内迫B遺跡群I地区	
548	土坑1			川内迫B遺跡群L地区	
549	土坑1			〃	
550	土坑1			〃	
566	土坑1			?	
567	土坑1			?	
573	土坑1			?	
576	土坑1 炭窯1			川内迫B遺跡群K地区	
577	土坑1			〃	
580	炭窯1	土師器		〃	
592	土坑1			川内迫B遺跡群M地区	
598	土坑1			〃	
619	土坑1			川内迫B遺跡群N地区	
633	土坑2			〃	
664・665	横穴?2	須恵器・土師器多	古墳時代	西迫遺跡	
666	横穴?1		〃	〃	
704	炉	滓		蛭沢遺跡群C地区	
709	炉?			〃	
710		滓		〃	
731	土坑1	土師器(杯)		蛭沢遺跡群E地区	
732		滓		〃	
747		須恵器	古墳時代	西迫東迫横穴墓群	
756		須恵器・土師器多	〃	〃	
760		須恵器・土師器	〃	〃	
1001		弥生土器多 石庖丁多	弥生時代	川内迫B遺跡群F地区	
1002		弥生土器多、石庖丁多	〃	〃	
1003		弥生土器多、石庖丁多	〃	〃	
1004		弥生土器多、石庖丁多	〃	〃	
1005		弥生土器多、石庖丁多	〃	〃	
1007		弥生土器少	〃	〃	
1009		弥生土器少	〃	〃	
1010		弥生土器少	〃	〃	
1012		弥生土器1	〃	〃	
1018		弥生土器1	〃	〃	

表3 トレンチ一覧表(2)

第2項 出土遺物

土器 (図7～図12：図版88～92)

試掘調査では縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、羽口が出土した。このうち図示した縄文土器は1点で、弥生土器76点、土師器3点、須恵器3点である。以下、出土土器について記載を行う。

縄文土器 (図7-1：図版88-6)

図7-1は1003Tから出土した口縁部資料である。口縁部の形態は平坦で口唇部にはキザミ目が施され、胴部文様帯は斜行する縄文を地文とし口縁部文様帯は無文である。胎土には繊維の混入が認められ、前期前葉大木1式または2式に比定される。

弥生土器 (図7-2～図11-77：図版88-7～92-82)

図7-2～図11-77は弥生土器である。出土した弥生土器は最終的に川内迫B遺跡群F地点とした範囲からの出土が多く、磨製石器がともなう。図7-2から36はすり消し縄文が施された壺・鉢に分類される資料であるが、破片資料のため器種、部位の特定が困難な資料も含まれている。すり消し縄文技法が用いられている破片資料は柵形囲式に相当し、出土量が多い。柵形囲式は大きく精製品と粗製品に大別される。2は直線的に外傾しながら口縁部にいたる。器種は鉢もしくは台付鉢である。文様の構成は地文となる縄文上から平行沈線による連続三角文を描き、平行沈線内部の縄文帯をすり消す。口縁部直下には沈線を1条、縄文帯の下部には2条の沈線を巡らし、すり消し縄文帯を区画する。3・4は口縁部直下にヘラ状工具による平行沈線を巡らし、その下部に連続三角文を描く。これらの沈線文は地文である縄文から施され、沈線文間の地文はすり消されている。5は鉢の胴部付近の破片である。器面の文様は地文である縄文帯に3条1組の平行沈線を巡らし、その内部にすり消し縄文を用いる。平行沈線文の構成は判別しがたいが、連続する円弧文の可能性もある。6は口縁部資料である。口唇部にはキザミ目を施す。器面の文様は口唇部直下に1条の沈線を巡らし、下部の平行沈線で描かれる連続三角文を区画する。連続三角文は地文の上から描かれ、沈線間の縄文はすり消されている。また内面にも2条の沈線が認められるが、文様構成は不明である。7には連続三角文とすり消し縄文が施される。内面には1条の沈線が巡る。8は胴部付近の破片であろう。平行沈線によって連続する三角文とすり消し縄文を見ることができる。9は壺の胴部付近の資料であると思われる。文様の構成は平行沈線によって連続する三角文を描くが、器面の摩滅が著しいため縄文原体は確認できない。10・11は地文の縄文帯に平行沈線によって文様を描く(変形工字文か)。平行沈線間の縄文はすり消され、陣場式、天神原式の可能性がある。12は柵形囲式の壺頸部付近の資料である。破片下部には1条の沈線が巡り下部の縄文帯と上部の無文帯を区画する。13・14は器種ならびに部位の特定はできないが、器面には斜行する縄文と1条の沈線を方形にめぐらす文様区画が認められる。沈線によって区画された文様帯内部の縄文は磨り消される。15は縄文を平行沈線によって区画し、その内部をミガキ手法によってすり消した文様構成を持つ。

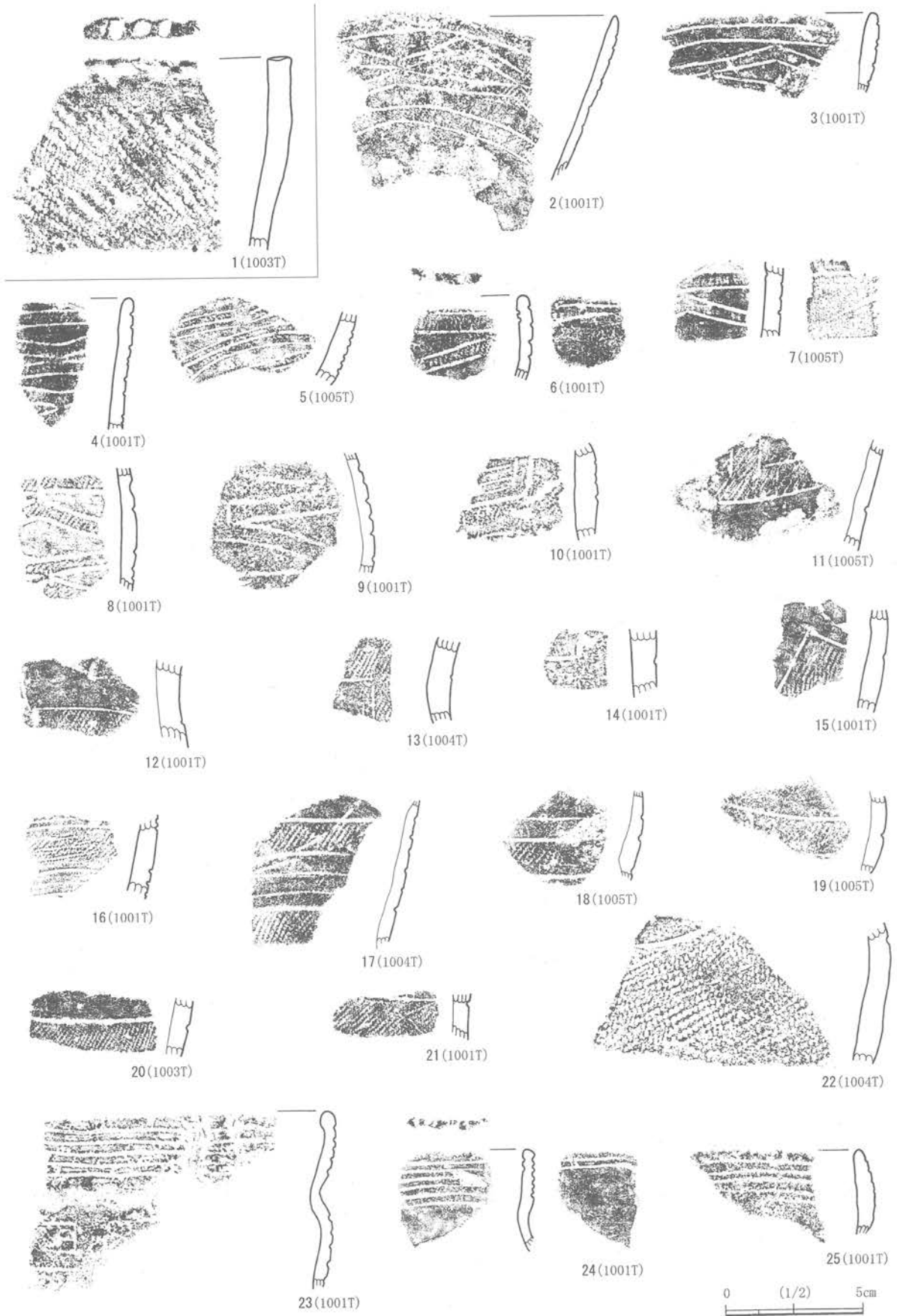


图7 出土遺物 (1)

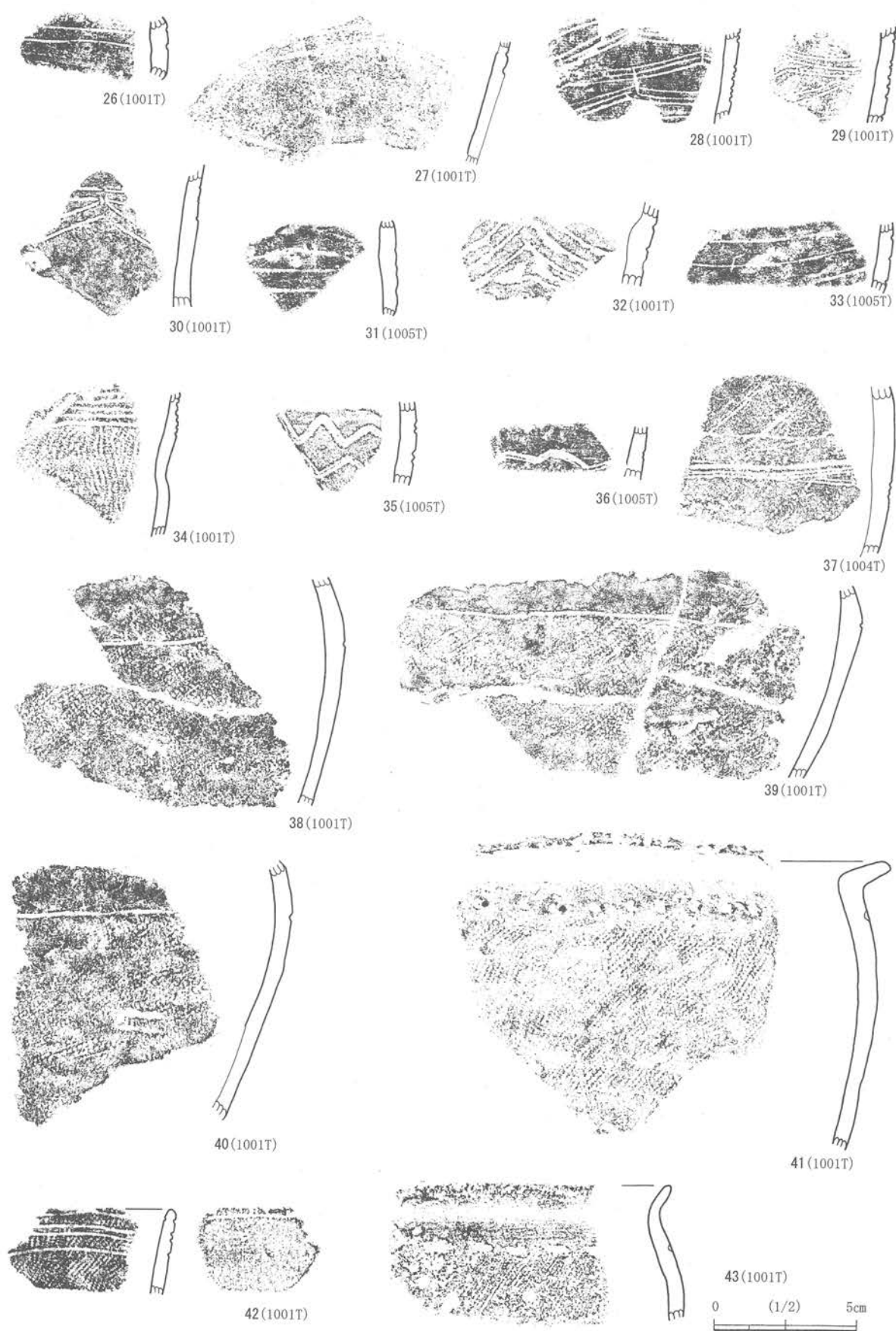


图8 出土遺物 (2)

文様の構成は判断しがたい。16は器面を横走する2条以上の沈線を上下2段に配置し、その内部には縄文が施される。文様は縄文を地文とし、沈線内部にはミガキが施される。

17は横位の沈線文とその上を円弧状に走る沈線によって文様が描かれる。文様は破片上部無文帯と縄文帯を区画する沈線1条、縄文帯下部には4条の沈線を巡らし、その内部はすり消し手法によって無文帯を形成する。その下部には縄文帯を描く。またこれらの文様の上を円弧状に走る沈線が1条巡る。18は器面を横走する3条の沈線と、沈線間には地文が残る。19は器面を円弧気味に横走する沈線1条が巡る。沈線は縄文帯と無文帯を区画する。20・21は器面を横走する沈線1条を配し、下部には細かな縄文を地文とし上部には無文帯を配する。22は、器面上部を円弧状に走る沈線によって無文帯と縄文帯を区画する。南御山式もしくは陣場式の壺胴部付近の可能性ある。23は壺の口縁部資料である。丸みの強い胴部は頸部付近で一端くびれ、さらに内湾する口縁部が付く。外面の文様構成は口縁部に横走する5条の沈線をめぐらす。頸部には文様は描かれず、胴部には4条の沈線が横位に施されるが地文ならびに文様構成は不明である。24は壺の口縁部資料である。口縁部外面には横走する沈線を6条巡らし、内面にも口唇部直下に2条の沈線が巡る。25は口縁部資料である。口縁部直下には5条の横位沈線が巡る。図8-26は胴部付近の破片である。器面にはへら状工具による横位沈線が巡る。27は器面の摩滅が著しく詳細は不明であるが、破片上部に2条の沈線が施される。28・29は3条1組の沈線で連続三角文を描く。30の文様は2条の沈線で連続三角文を描く。31はへら状工具によって横位方向の沈線を施すが、文様構成は不明である。32はへら状工具による重山形文を描いており陣場式の可能性ある。33は3条の平行沈線文を描くが、沈線文の幅が広い。34は破片上半に5条の沈線を巡らし、下半には縦走する縄文を施す。35~37は幅の狭い平行沈線文によって連続する山形文を描く。35は連続山形文を上下2段に配し、36は1段である。上記2資料は工具を止めることなく描かれている。37は壺の胴部上半と下半を区画する横位の沈線の上部には重山形文もしくは重菱文を描き、下半には斜行する縄文を施文する。桜井式の可能性が高い。38~40は壺の胴部下半の資料である。破片上部には横走する沈線によって上部文様帯と下部文様帯を区画している。上部の文様帯は不明であるが、下部には斜行縄文が施されている。いずれも桜井式であろう。

図8-41からは甕の資料である。球形に近い形態の胴部には短く外傾する口縁部がつく。口縁部と胴部が接する頸部付近には横走する列点文が1列巡る。列点文は粒の形状が円形のもの(41・45・46・47・48)と横長のもの(43・46)、列点がないもの(49・50)がある。また口唇部にキザミ目を施すもの(41・44・45・47)がある。42は縄文地文の上から横位沈線を施すが、すり消し技法は見られず、陣場式に比定されると思われる。図9-51は平坦に仕上げられた口唇部が特徴的な資料である。口唇部ならびに器面には縄文を施す。52は甕の胴部資料である。器面を斜行する細かな縄文が見られる。53は緩やかに内湾しながら立ち上がり、胴部の最大径は上半に位置する。この最大径を計測した地点から内湾が始まり頸部に到達するが、その距離は短い。口縁部は直線的に短く立ち上がる。器面ならびに口唇部には縄文が施されるが頸部には施文されない。51も本資料と類似する。54は器面上部に綾絡文が確認され、桜井式の甕の可

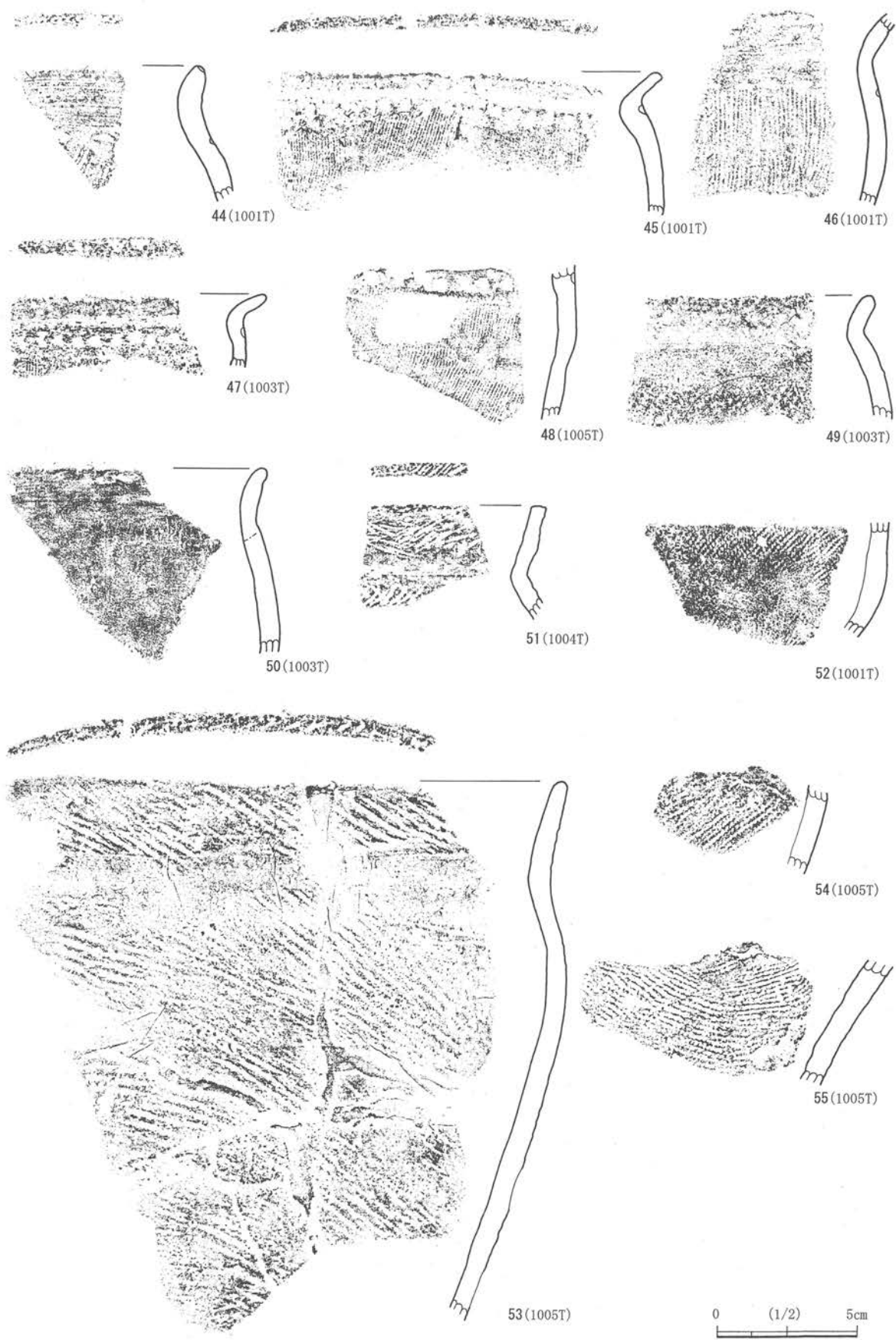


図9 出土遺物 (3)

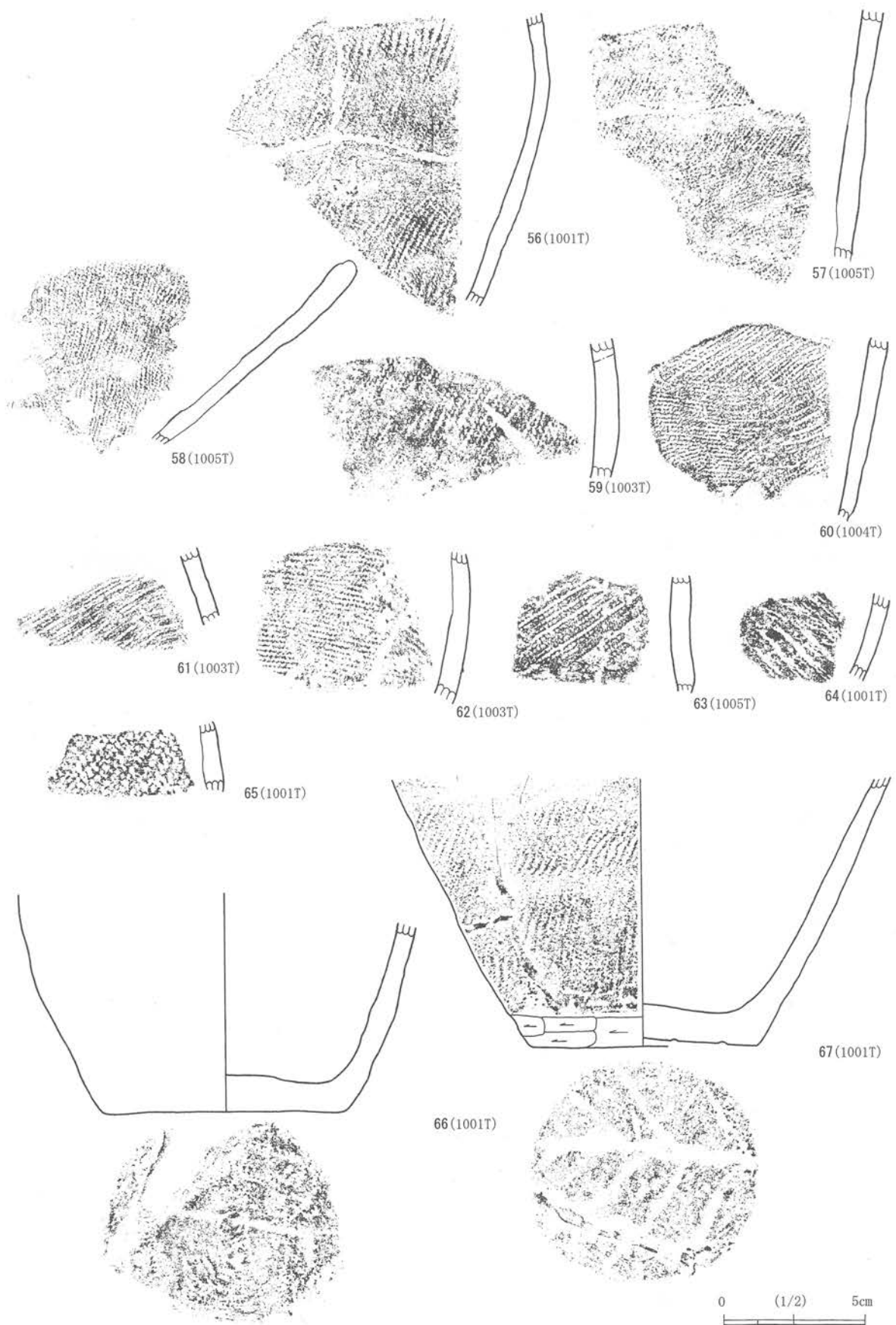


图10 出土遺物 (4)

能性がある。55は器面に横走する縄文が見られるが、いずれの資料とも類似せず、詳細は不詳である。図10-56~64は柵形囲式もしくは桜井式の甕胴部資料と見ている。器面には主として斜行する縄文が多く施文される。同図66~78は底部資料であるが、厳密な意味で器種の細別は困難である。66の底部は平坦で底面には木葉痕が観察される。文様は施されてなく柵形囲式の壺の可能性もある。67の底部はほぼ平坦で、底面には明瞭な木葉痕が観察される。器面の大部分に斜行する縄文が施文され、また不明瞭ではあるが底部側辺にはナデが施される。図11-68は底径8.9cmの底部資料で、底面には明瞭な木葉痕が観察される。平坦な底部からは外傾する胴部がのびる。69は底径9.8cmの底部資料である。器面には斜行する縄文が施され、施文後に底部側辺にナデを施す。器形では木葉痕が残る平坦な底部から直線的に外傾する胴部がのびる。器形の状況から壺の可能性もある。70~73は胴部の大半が欠損しており器種の断定はできない。いずれの資料も底部底面は平坦で、明瞭な木葉痕が観察される。74は底径5.0cmの底部資料である。施文の有無は確認できない。75は底径4.4cmの底部資料である。底面には明瞭な木葉痕が観察される。76の底面には布圧痕が見られる。77は底部から胴部にかけての資料である。底部は平坦で直径5.5cmに復元される。器面には斜行縄文が施される。

土師器・須恵器 (図11-78~図12-83:図版88-1~5・92-83)

図11-78は底径4.2cmの土師器であるが、残存する範囲では詳細を判断することはできない。

図12-79は501Tから出土した須恵器甕である。体部形状は欠損のため不明ではあるが、口縁端部は強く外反して収まる。口縁端部はロクロナデによって平坦に仕上げられ、下方に小さく張り出す。口縁部から頸部にかけての範囲にはロクロナデが施されるが、頸部から下までには達しない。肩部外面には平行タタキ板の痕跡残り、内面には青海波文状の当具痕が見られる。80は501Tから出土した須恵器甕の体部資料である。口縁部ならびに底部は欠損しているため全体の形状は不明である。体部下半の器形はやや内湾しながら直立気味に立ち上がり、体部上半に達する。体部上半に到達すると頸部に向かって強く屈曲し肩部を形成する。外面調整には平行タタキの後にロクロを使用した回転ヘラケズリを施す。また底部と接する付近には上方から下方に施したヘラケズリが観察される。内面には、体部付近に木目状に残した当具痕跡が観察される。肩部付近には横位のナデが施される。81は501Tから出土した須恵器の底部資料である。残存範囲が底部から体部下半にかけての範囲であるため器種の特定は困難であるが、長頸瓶の可能性が高い。高台部はやや内傾気味に立ち上がり底部に到達する。体部は底部から弱く内湾しながら上方に向かう。外面上半と内面にはロクロナデ施され、外面下半にはヘラケズリが認められる。82は731Tで出土した赤焼土器である。口径11.4cm、器高2.7cmである。底面は平坦で底面には回転糸切痕が残る。器形は平坦な底部と杯部中段で上方に向かって弱く屈曲する点が特徴的である。器面の調整は摩滅のために不明である。83は580Tで出土した土師器で、口縁部を中心とした資料である。下半が欠損しており器種の断定は困難であるが、内面にミガキと黒色処理が施されている点を見れば、鉢であろうか。器面調整には明瞭なロクロナデが残る。

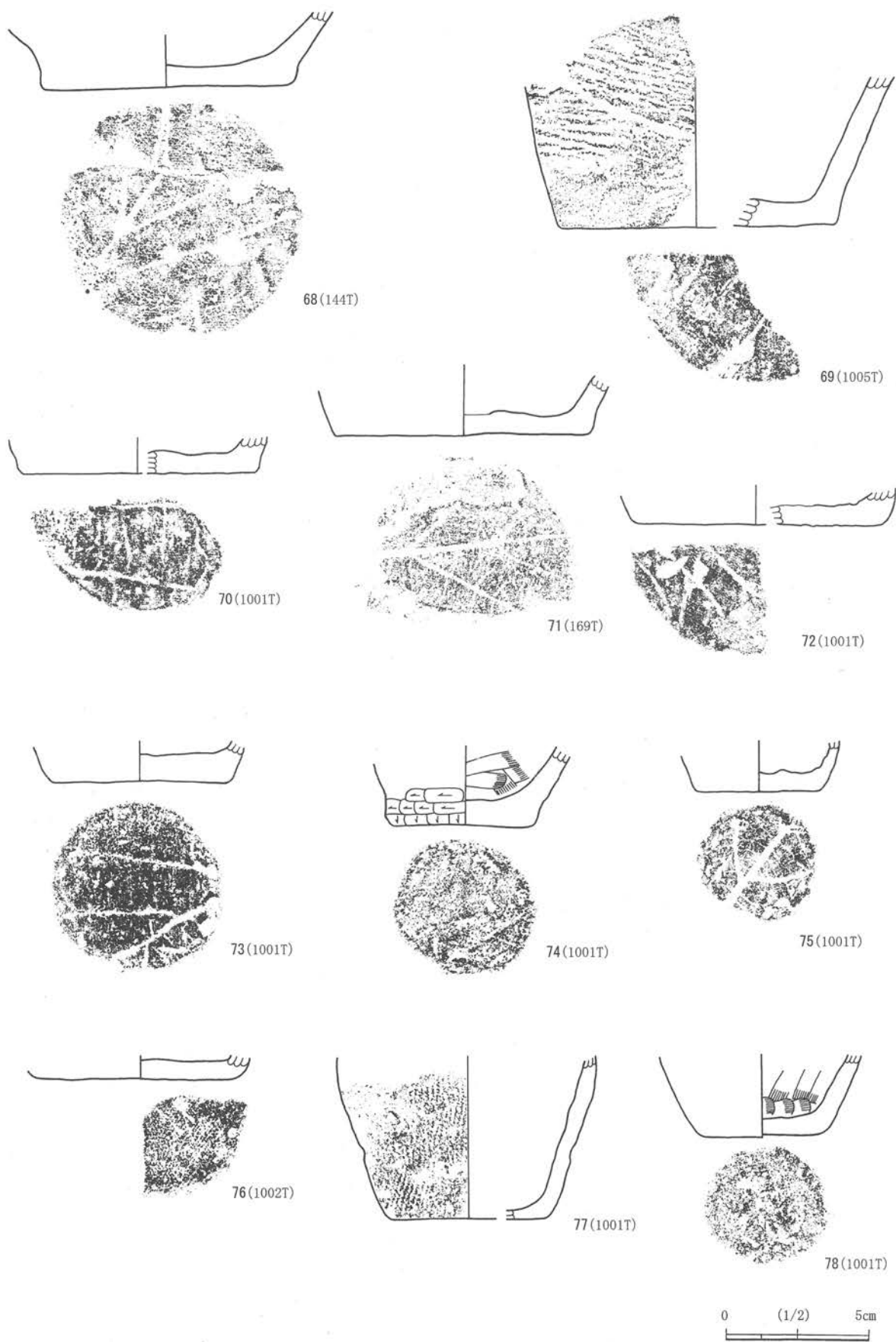


图11 出土遺物 (5)

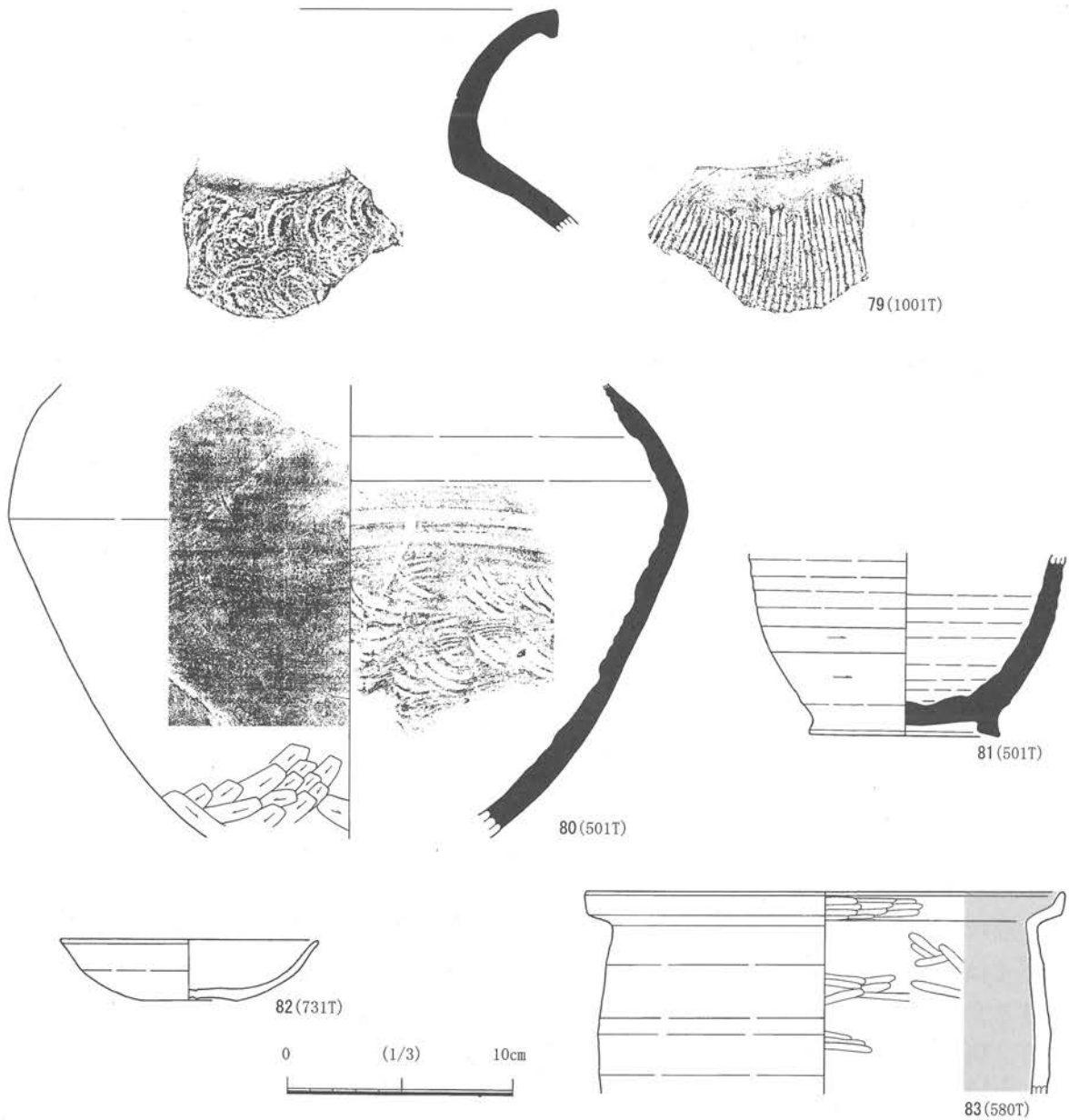


図12 出土遺物 (6)

石器(図 13～図 22:図版 93～100)

試掘調査では 1001T～1005T で石器が出土している。出土した石器群は大型蛤刃石斧 1 点、扁平片刃石斧 2 点、石庖丁未製品 1 点、石鋏 2 点、削器 2 点、石錐 1 点、2 次加工が施された剥片資料 4 点と剥片資料を掲載した。

打製石器(図 13-1～図 20-28:図版 93-1～98-28)

図 13-1 は 1005T から出土した石鋏である。剥片を素材として、その側辺部の加工により基部を形成する。刃部は表面から連続する細かな加撃により形成される。背面には自然面が大きく残る。石材は粘板岩である。図 14-2 は削器である。縦長の大型剥片を素材とし、背面全体に自然面を残す。刃部は剥片の側辺から底辺にかけての範囲において、両面から細かな加撃によ

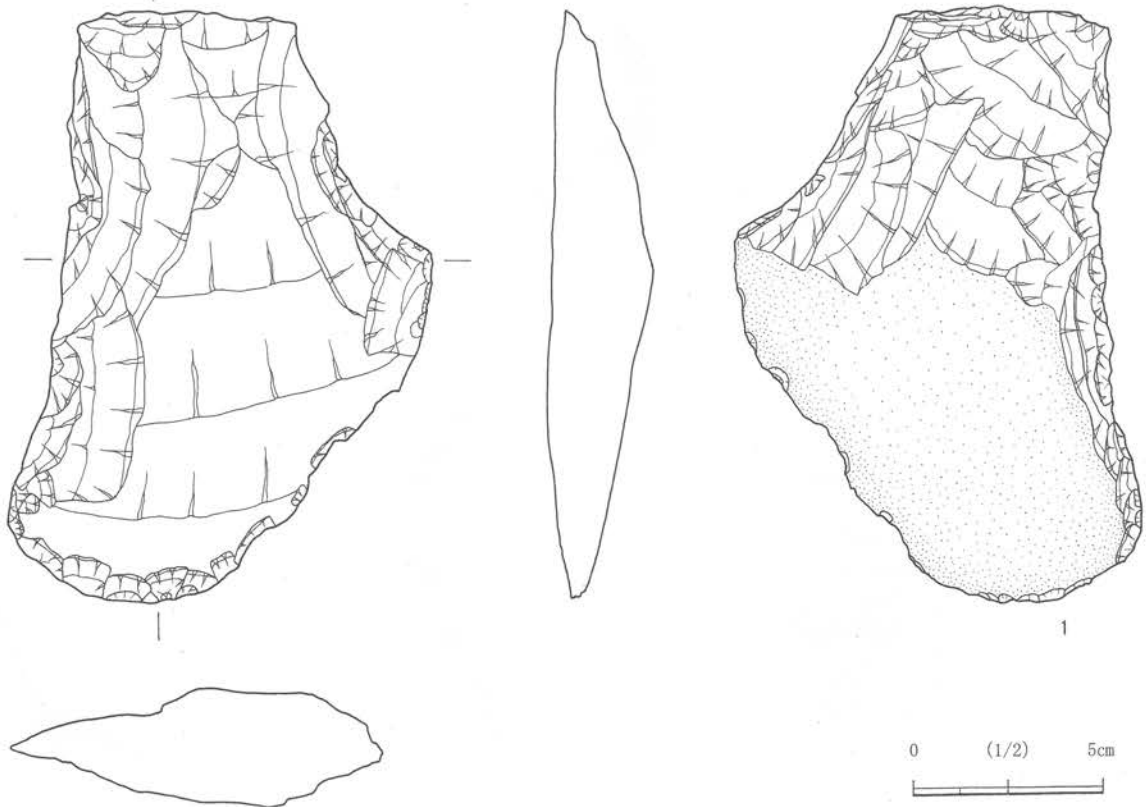


図13 打製石器 (1)

り形成される。石器材質は流紋岩である。3は縦長の剥片を素材とし、両側辺部の表面から連続する小さな加撃によって刃部を形成する。背面には自然面を大きく残す。上半部は欠損しており詳細は不明であるが、削器の可能性はある。石材は凝灰岩である。4は削器である。上部は欠損しており詳細は不明であるが、粘板岩の縦長剥片を素材とするものと思われる。刃部は側辺下端部から底辺部にかけての範囲に形成されている。側辺部の刃部は連続する小さな両面剥離によって形成され、底辺の刃部は背面からの連続する加撃によって形成されている。背面には大きく自然面が残る。5は流紋岩を素材とする石錐である。上半の基部は欠損している。両面からの細かな調整剥離が連続して施され、二等辺三角形、断面菱形の錐部が形成される。先端部には潰れが見られる。6・7は同一剥片を素材とする削器であり、接合関係にある資料である。6は縦長剥片の下半部を打ち欠き、残った上半部の両側辺部に連続する細かな加撃により刃部を形成する。背面には自然面を大きく残す。石材は流紋岩である。7は6と同一剥片を用いた流紋岩縦長剥片を素材とした削器である。6の素材獲得の際に打ち欠かれた剥片を素材とし、表面側辺と底辺に連続する加撃によって刃部を形成する。背面には大きく自然面を残す。なお、6と7の接合した状況を図15に図示した。図16-8~図17-11、図18-13~図20-28は2次加工のある剥片資料である。8は縦長の素材剥片の底辺に細かな調整剥離を施す。調整剥離は主として背面から行われており、横断面形は逆台形である。石材は流紋岩である。9は流紋岩を石材とする石器である。表面には剥片獲得際の大きな剥離が見られ、側辺に細かな調整剥離が見られる。背面には大きな剥離と側辺の所々に調整剥離が見られる。横断面形は台形

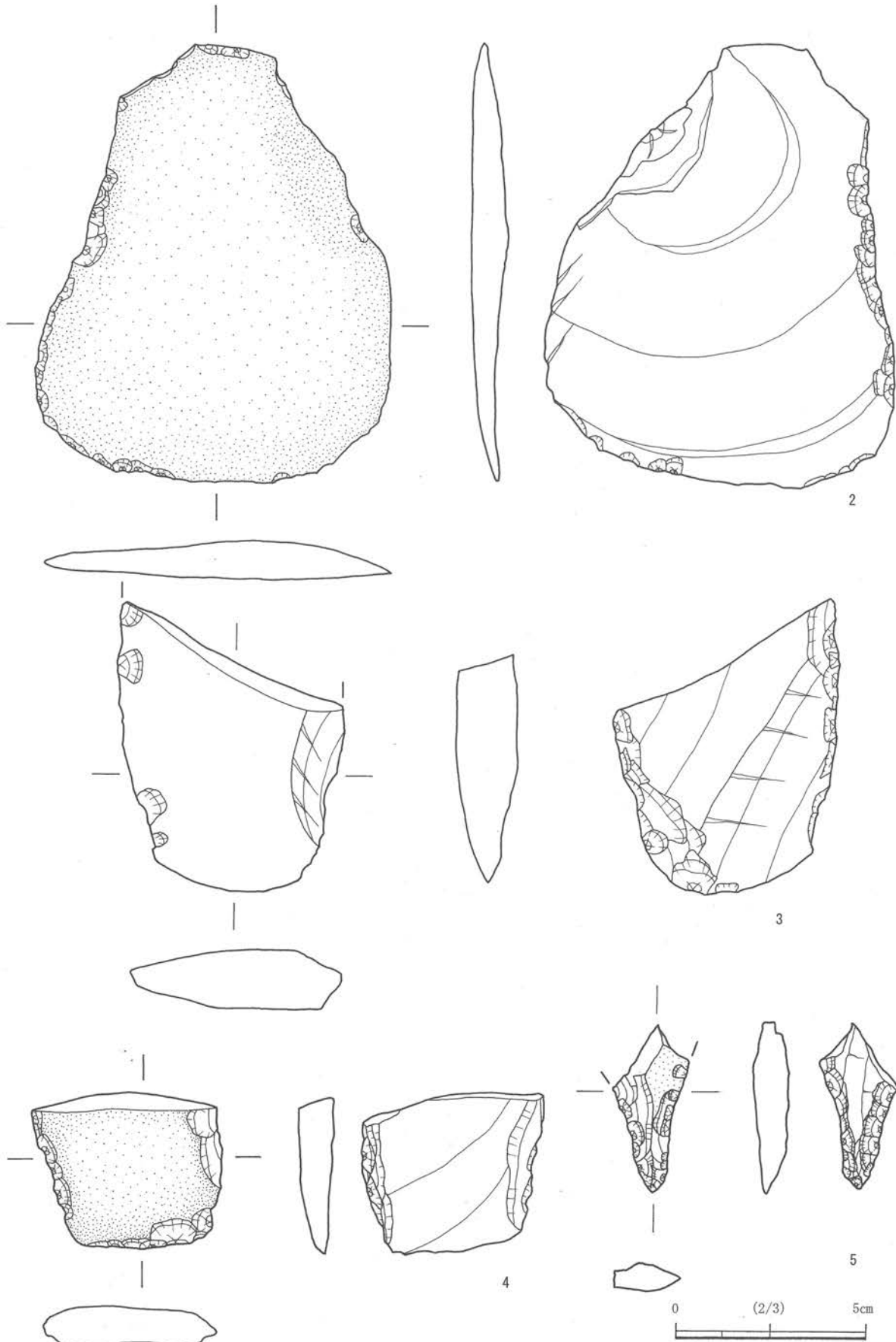


图14 打製石器 (2)

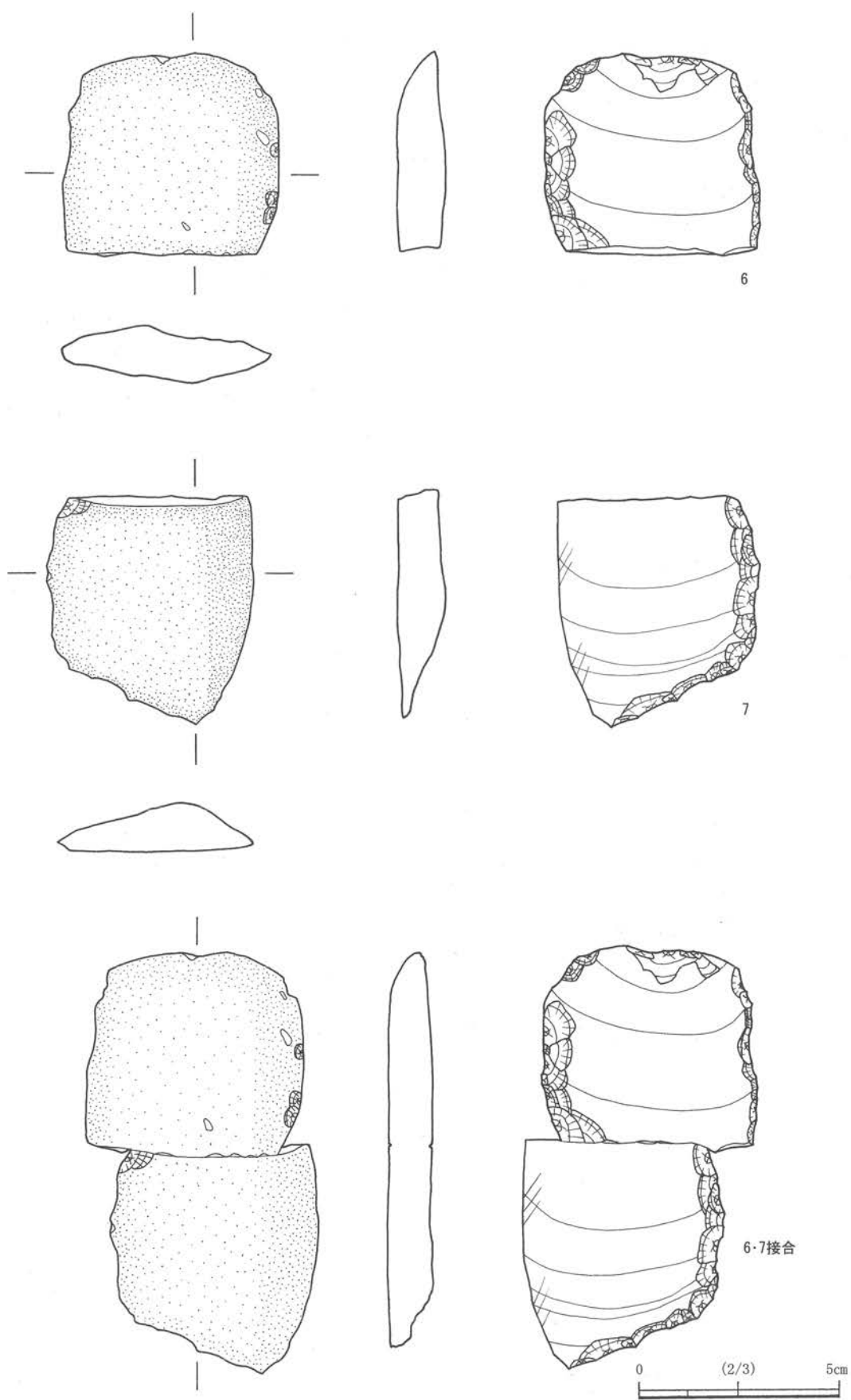


图15 打製石器 (3)

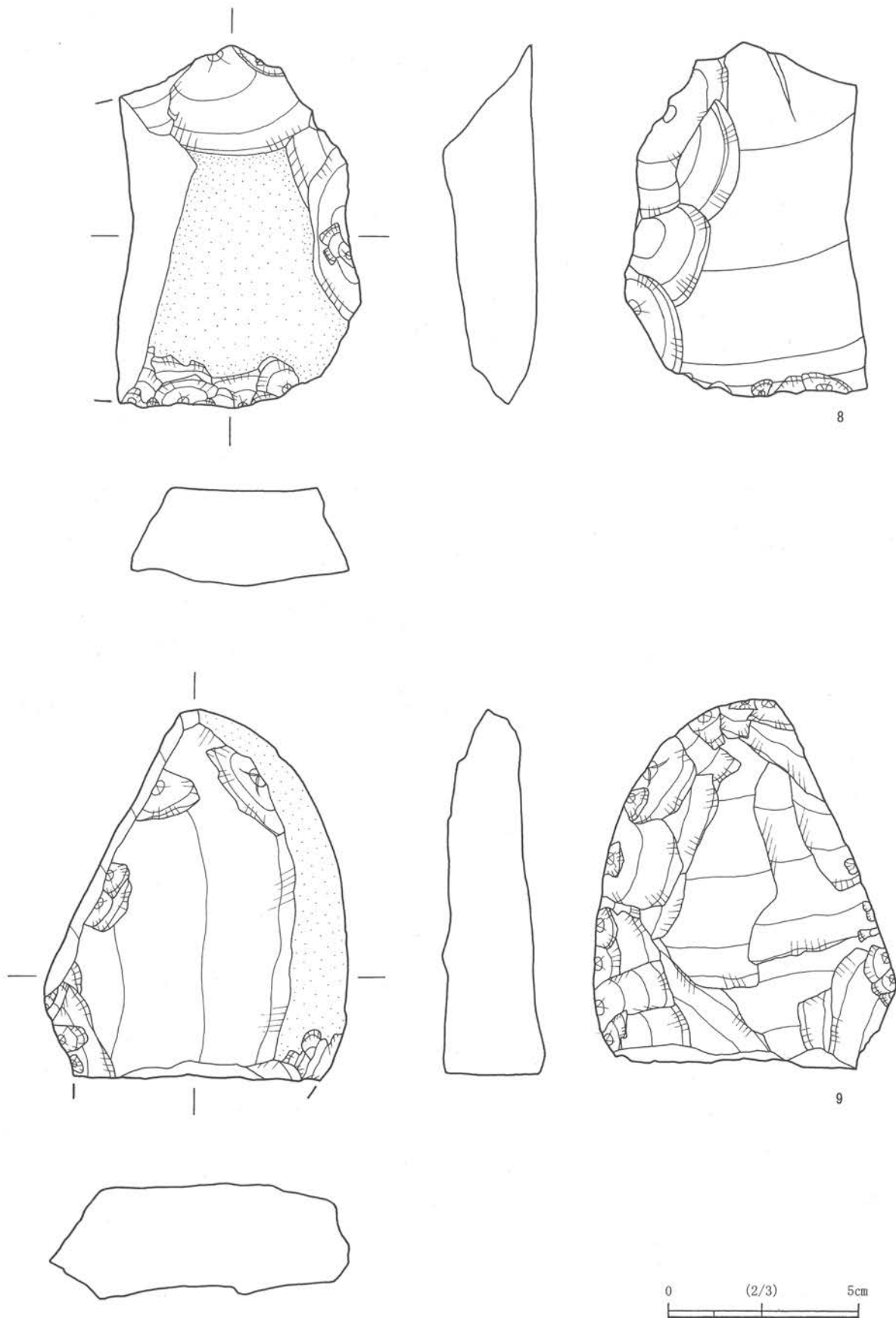


图16 打製石器 (4)

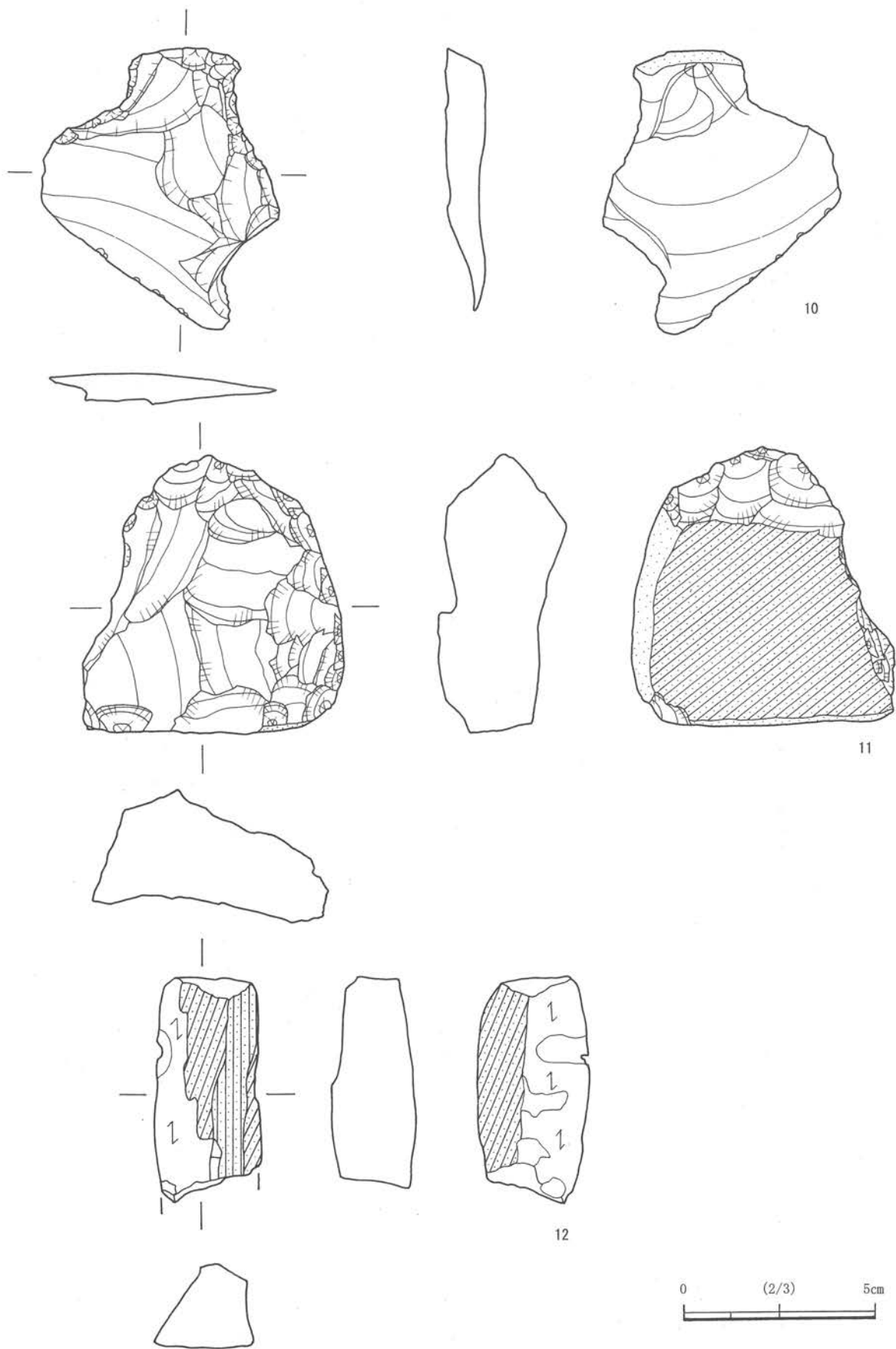


图17 打製石器 (5)

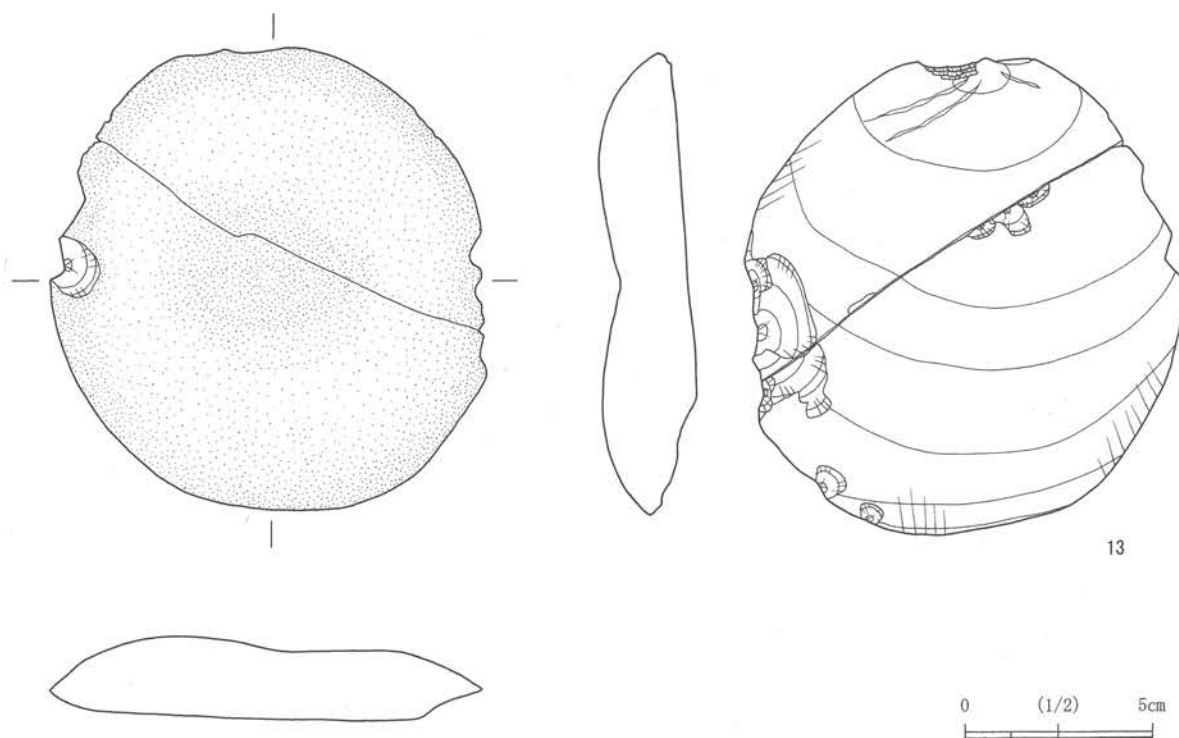


図18 打製石器 (6)

に近い。10は珪質頁岩を素材とした石器である。表裏両面に大きな剥離が見られ、石器上端の表面には左右から細かな調整剥離をおこない、抉りを形成している。石鋏の未完製品の可能性もある。11は2次加工のある剥片資料である。頁岩を素材とし下端部と側辺部には自然面が残る。2次加工は石器頂端部から側辺部にかけての範囲に見られ、加撃による細かな剥離が見られる。横断面形は台形に近い。12は珪化木である。13は2次加工のある剥片である。頂部には打点が残る、円形の剥片の左半部には細かな加撃を行っている。石材は頁岩である。14は2次加工のある剥片である。石材は凝灰岩である。縦長の剥片を素材とし、側辺部の一部には自然面が残る。2次加工は下端部に見られ、表面からの細かな調整剥離が施されている。15は珪質頁岩の剥片を用いた2次加工の見られる資料である。16は石英斑岩を素材とした2次加工の見られる剥片で、横長の剥片を素材とする。背面上部には素材獲得後の加撃による剥離が見られる。17は削器である。上端部には自然面が残る、下半部の左右に細かな調整剥離を加えることで刃部を形成している。石材はチャートの可能性がある。18は珪質頁岩の縦長剥片を用いた2次加工の見られる剥片資料である。上端部には自然面と打点が残る。2次加工は加撃による剥離が側辺部から下端部にかけての範囲に見られる。19は2次加工が見られる剥片である。縦長の剥片を素材とし側辺部に細かな調整剥離を行う。石材は珪質頁岩である。20は2次加工の見られる剥片資料である。横長の剥片を素材とする。石材は珪質頁岩である。側辺部には自然面と打点が残る。2次加工は側辺部から頂端部にかけての範囲に調整剥離が断続的に見られる。21はメノウを素材とした剥片である。表面には大きく自然面が残る、加撃による剥離が見られる。頂端部には打点が残る。22は珪質頁岩の剥片である。頂端部には自然面が残る、打点を確認する

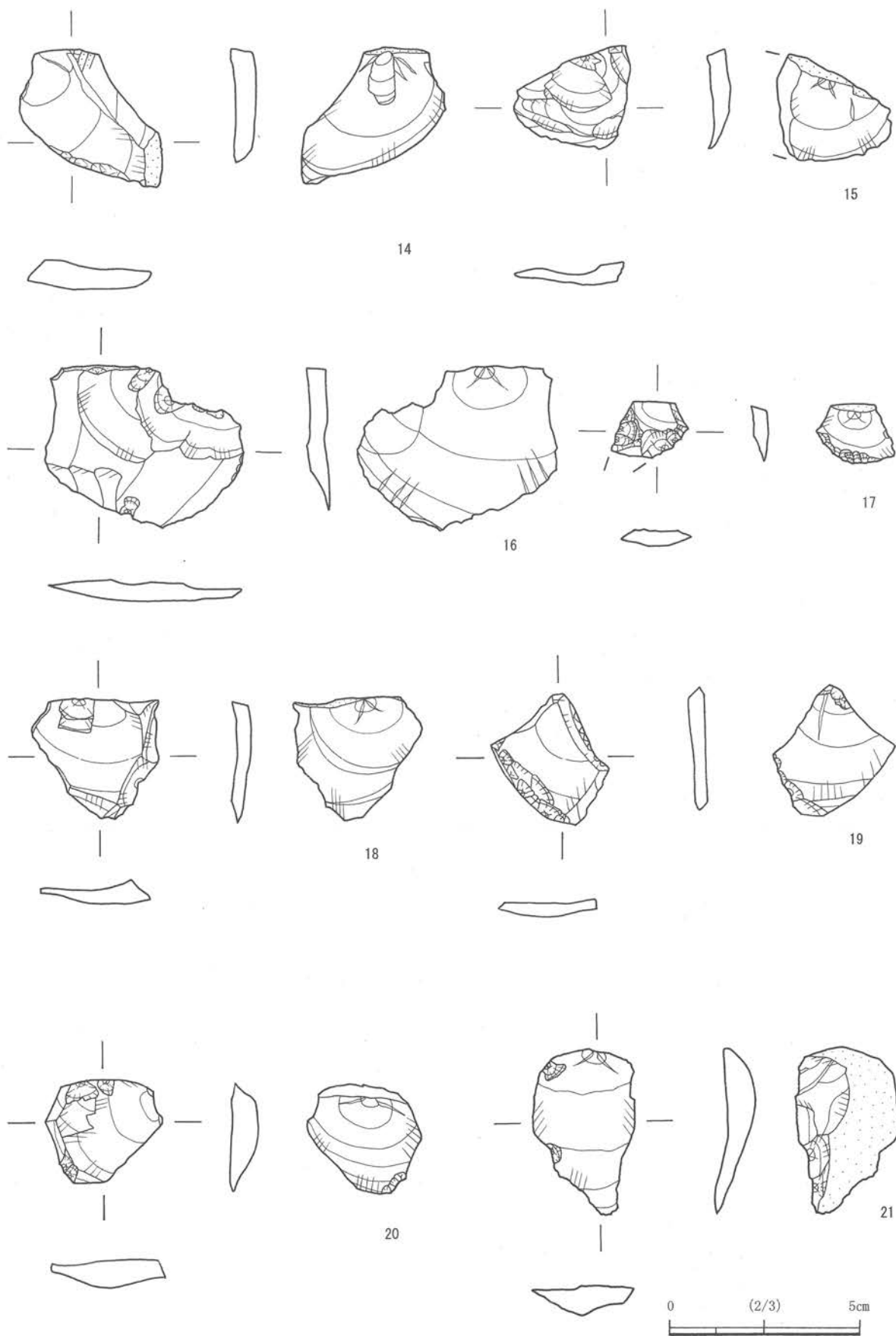


图19 打製石器 (7)

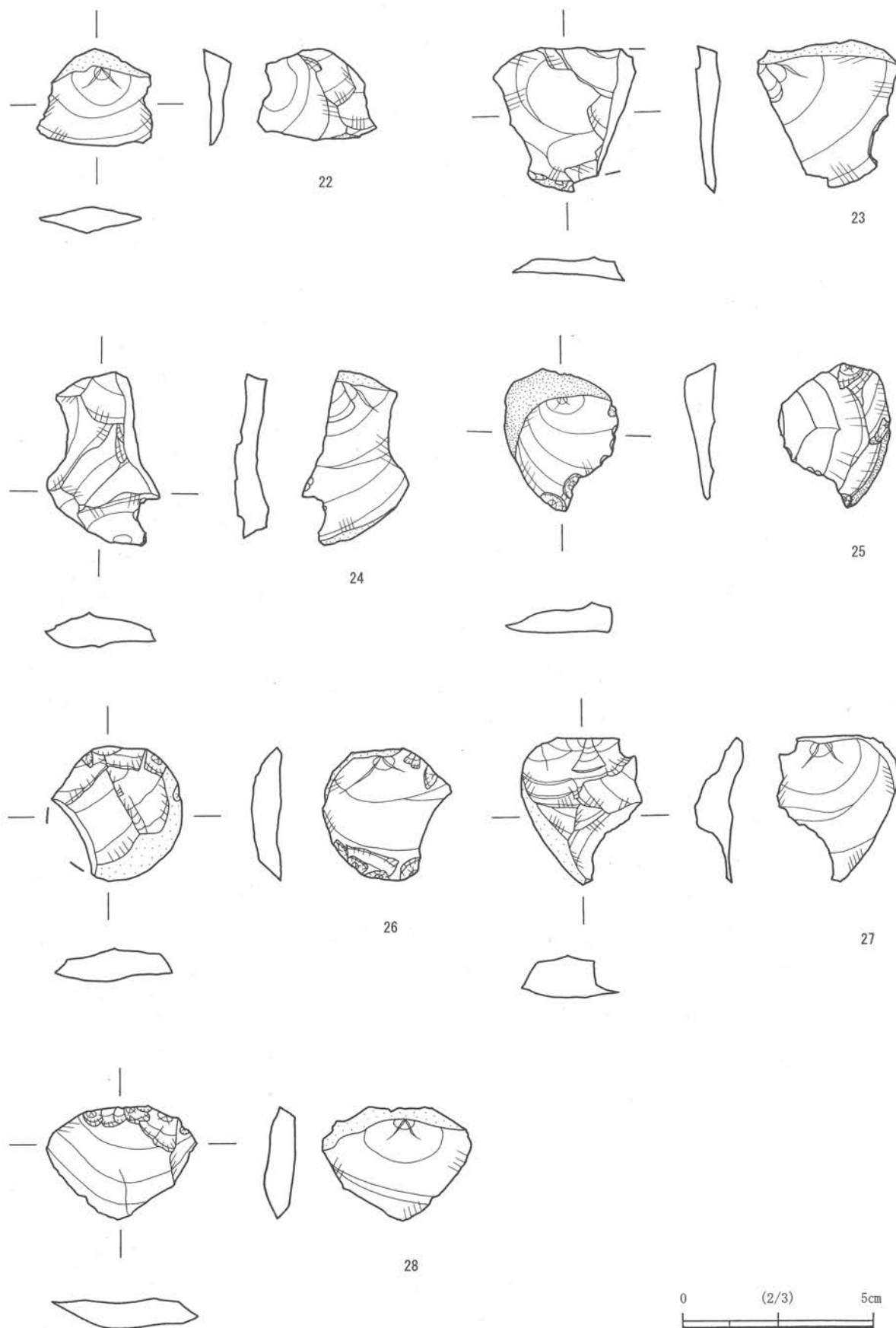


図20 打製石器 (8)

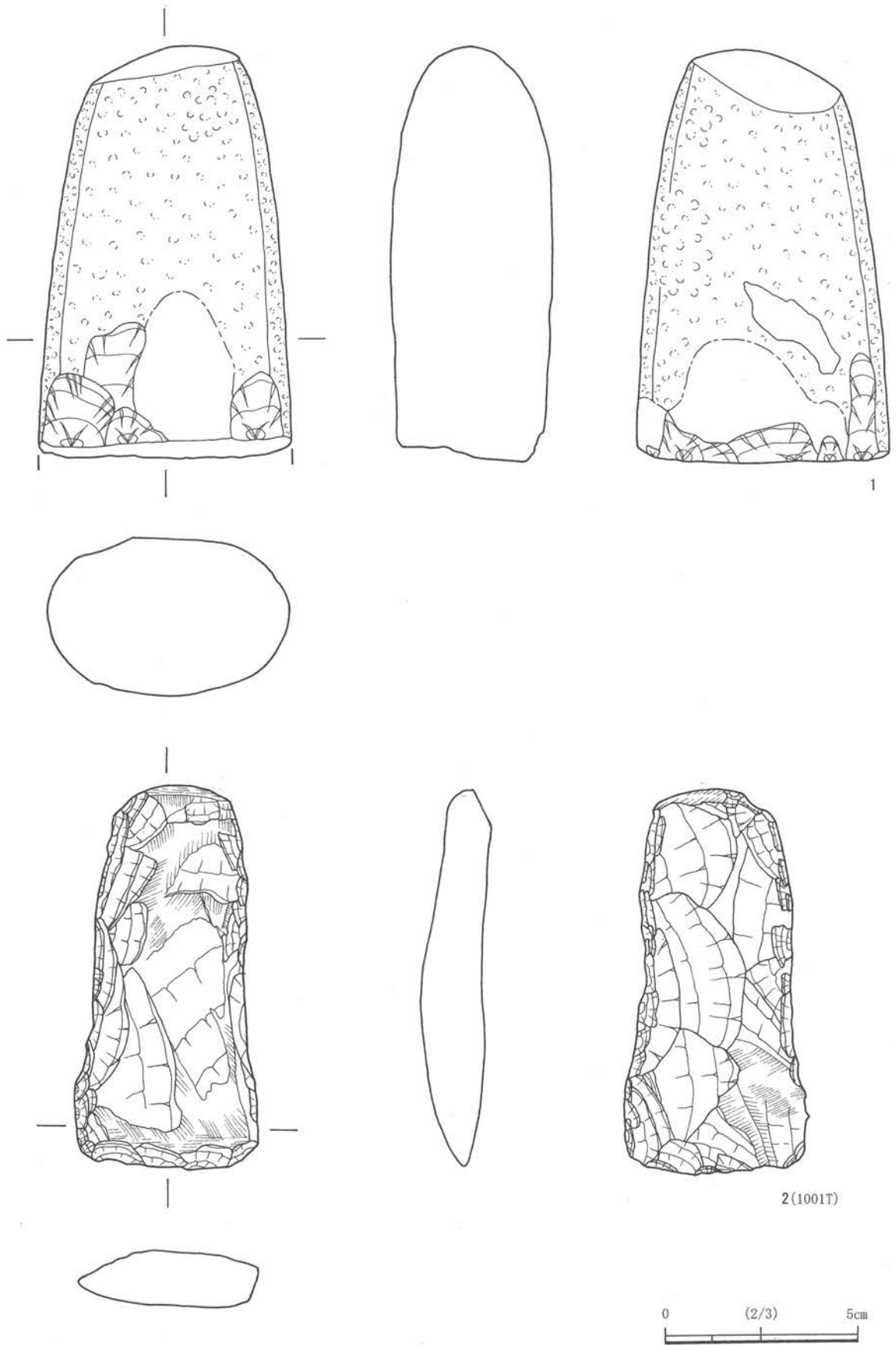


图21 磨製石器 (1)

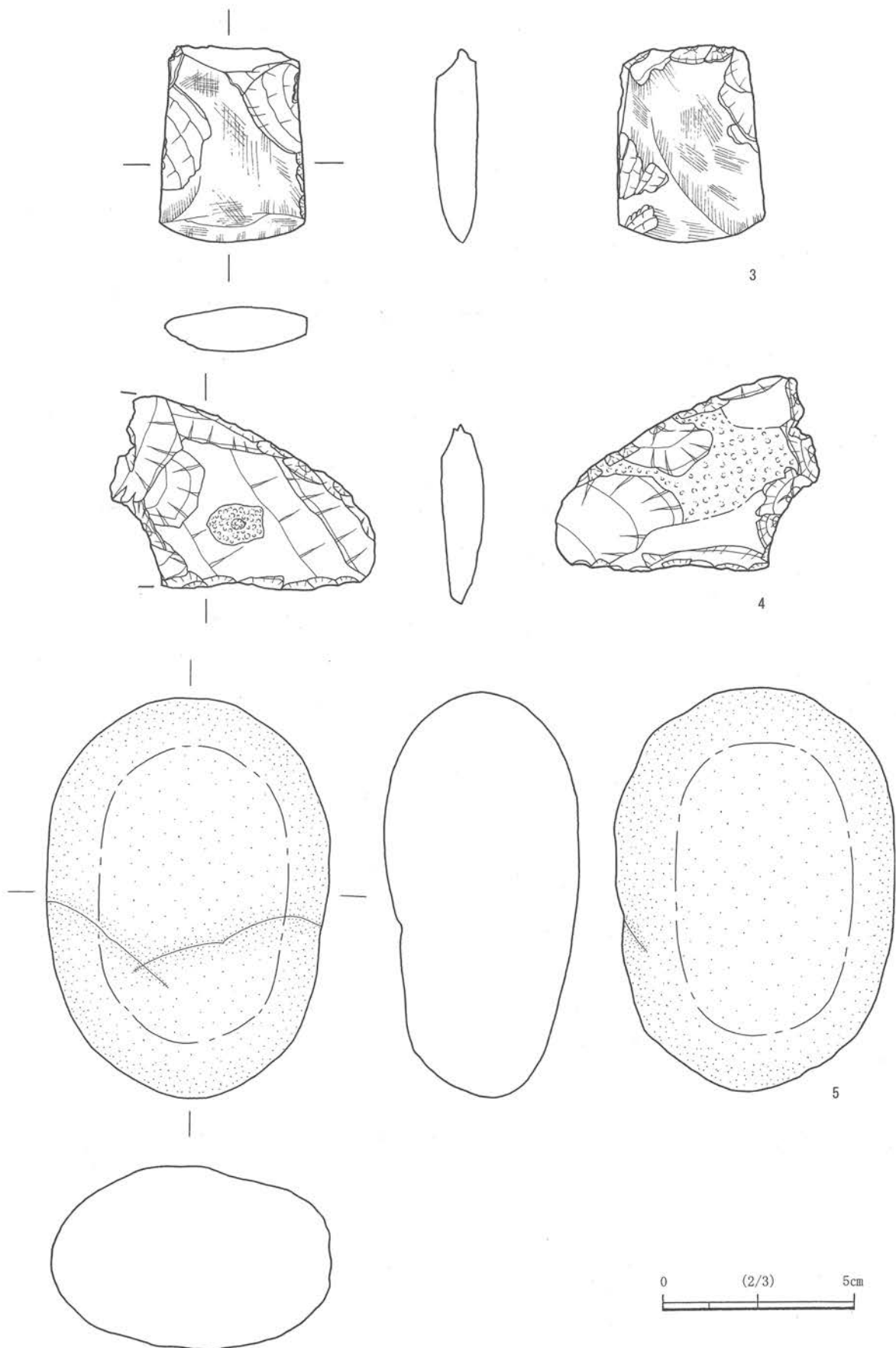


図22 磨製石器 (2)

ことができる。23・24は珪質頁岩の剥片である。25は珪質頁岩を素材とした2次加工の見られる剥片である。剥片は縦長のものを用いており、頂端部には自然面と打点を確認することができる。2次加工は側辺部に細かな調整剥離を連続して行っている。26は鉄石英の縦長剥片を素材とした2次加工の見られる剥片である。頂端部から側辺にかけた範囲には自然面と打点が残る。2次加工は底辺から左側辺にかけた範囲に連続する細かな調整剥離によって行われている。27・28は剥片である。27は珪質頁岩、28は鉄石英である。いずれも頂端部には自然面と打点を見ることができる。

磨製石器 (図21-1～図22-3：図版98-29～99-32)

1は太型蛤刃石斧である。石斧の残存する範囲は基部を中心とした範囲で刃部は欠損しているため詳細は不明である。器面全体に敲打痕跡がみられ、表面と基部の一部に研磨痕跡が見られる。欠損部には2次的な剥離や潰れが見られることから、欠損後に敲打器として再利用された可能性がある。

2は1001Tから出土した石斧である。器面には素材獲得の際の大きな剥離を残す。素材を獲得した後に器面全体に細かな敲打を施すことで器面の調整を行う。敲打調整後は刃部ならびに基部にかけた範囲に研磨を行う。ただし器面の研磨は一部に留まり、器面全体までは至らない。刃部は片面からの研磨によって整えられており、片刃を形成する。刃部先端には石斧使用の際の刃こぼれが見られる。基部幅2.8cm、刃部幅4.6cm、残存長9.8cmである。

3は1004Tから出土した扁平片刃石斧である。基部の大部分は欠損しており全体の形状、法量は不明である。器面の所々には敲打痕跡を確認することができる。また基部方向から刃部にかけた範囲には研磨を施す。刃部は丁寧な研磨を片方向から施すことによって片刃を作成している。刃部幅は3.8cmである。研磨は器面の側辺部にも施されている。

4は石庖丁の未製品もしくは製作段階における欠損品である。粘板岩を素材とし、器面には大きな剥離が残存する。上辺は半月状に外湾し、底辺は直線的である。石庖丁と考えた場合、半月状外湾刃の形状をもつものと推測され、残存範囲は石庖丁の左側端部を中心とした範囲であると推測される。器面には整形段階の敲打痕跡や調整段階の研磨、または紐通しの穿孔部などは見られないため、詳細は不詳である。

(荒)

第3章 試掘調査のまとめ

第1節 調査地点の設定

上述のように当開発に際して実施した試掘調査において、遺構や遺物が確認されたトレンチにはいくつかのまとまりがあることが明確となった。最後に調査地点の設定をおこない試掘調査のまとめとする。

第1項 蛭沢遺跡群

蛭沢遺跡群は、JR常磐線磐城太田駅から北西方向へ1.2kmに位置する。試掘調査では遺跡群が所在する範囲に300本近いトレンチを設けて遺構、遺物の確認を行った。その結果、A～E地点の5つの調査地点が設定された。まず、蛭沢遺跡群A地点から述べる。

A地点は蛭沢遺跡群の北辺中央部に位置する調査地点で、現地踏査の時点から大規模な廃滓場の存在が明らかになっていた地点である。廃滓場周辺に設けた調査区ではその他の遺構は確認することはできなかったが、製鉄作業に関連して形成される廃滓場が存在していることから周辺には製鉄炉等の遺構が存在している可能性は極めて高いと判断され、廃滓場が形成された尾根を含む約5600㎡を蛭沢遺跡群A地点として設定した。

B地点はA地点の東側に隣接する調査地点である。A地点が位置する丘陵の突端に位置し、A地点の廃滓場に関連する遺構の広がることが想定された。B地点の面積は4400㎡である。

C地点は遺跡群の中央部に位置する。調査地点の中央には大規模な廃滓場が確認されていたため、敢えてトレンチを設けずに、この廃滓場を中心とした谷部と廃滓場の南側の尾根上で確認された鉄滓の散布地点を含めた9200㎡を蛭沢遺跡群C地点として設定した。

D地点はC地点の南側に隣接する丘陵斜面に設定した。調査地点の面積は3200㎡である。

E地点は丘陵中心部から東に走る尾根の頂部に設けた調査地点である。遺構が確認されたトレンチはこの丘陵尾根全体の広範囲に広がっており、この尾根の100㎡をE地点として設けた。

第2項 川内迫B遺跡群

川内迫B遺跡群は、阿武隈高地から太平洋に向かって派生する標高40m前後の低位丘陵上に位置する。この丘陵には大小の谷が樹枝状に入り込み複雑な地形を形成している。このような丘陵の西半に川内迫B遺跡が展開する。

川内迫B遺跡群が所在する丘陵の試掘調査の結果、遺構・遺物の分布が合計12の地点に分かれることが確認された。これらの分布地点はアルファベットによって調査地点を表記しているが、川内迫B遺跡群A・B地点の両調査地点は、試掘調査以前の現地踏査の際に仮に付した調査地点名である。従って、試掘調査の結果で判明した調査地点との混同を避けるために、今回はC地点から調査地点を設けた。なお、川内迫A・B地点の両調査地点は、最終的にC地点に包括され、A・B地点は欠番となることを断っておく。



図23 調査地点位置図

川内迫B遺跡群C地点はトレンチ番号200～400Tによって調査が行われた地点に相当する。この地点は、現地踏査において廃滓場2箇所が確認されていた地点で、これらの廃滓場が形成された谷を中心に、遺構が検出されたトレンチを含む約13600㎡をC地点として捉えた。

D地点は丘陵中心部から北に向かつてのびる尾根上に設定した調査地点である。調査は100Tからのトレンチで調査を行った箇所で、非常に散発的な遺構の分布状況を持つ。D地点とした場所は尾根の突端に近く、調査区の面積は丘陵頂部から中腹にかけて約3000㎡となる。

E地点はC地点が展開する尾根とD地点が展開する尾根が接する場所で、両尾根間に形成された谷の最深部に位置する。調査では土坑が検出された、約300㎡がE地点として設定した。

F地点は川内迫B遺跡群では最も南西に位置する調査地点である。試掘調査では1000番代のトレンチによって調査が行われた。試掘の結果、弥生時代を中心とする遺物が出土した。F地点は他の調査地点とは独立するように立地しており、奈良・平安時代の遺構、遺物は確認されていない点が特徴である。F地点の面積は弥生時代の遺物が出土した範囲の約2000㎡である。

G地点はD地点が位置する尾根の南側に位置する尾根の北側斜面で設定した調査地点である。G地点が展開する尾根の南斜面には川内迫B遺跡群C・H地点が所在し、遺構の分布密度は高い状況にある。試掘調査は200Tからのトレンチによって行われ、木炭窯跡、竪穴住居跡、土坑が確認されている。調査地点の面積はこれらの遺構が確認された約5000㎡が該当する。当調査地点は尾根北斜面の全域におよび、南北に細長い地区設定になっている点が特徴的である。

川内迫B遺跡群H地点は遺跡群西部に位置し、主丘陵の西斜面にトレンチを設定し調査を行った結果、土坑3基、土師器甕、杯が検出され、約250㎡を調査面積とした。

川内迫B遺跡群I地点は遺跡群主丘陵中央部から西に向かう大規模な谷の北斜面にトレンチを設定した。その結果、木炭窯、住居、土坑4基が検出された約600㎡をI地点とした。当調査地点の遺構4箇所を確認されており、その分布はH地点同様に単発的な状況にある。

川内迫B遺跡群J地点は遺跡群東側に位置し、主丘陵を西に向かう大規模な谷の最深部においてトレンチで調査を行った結果、木炭窯が検出された100㎡をJ地点とした。

川内迫B遺跡群K地点はJ地点が所在する尾根の南斜面にトレンチを設定し調査を行った。調査の結果、木炭窯跡、土坑2基が検出され、約500㎡をK地点として設定した。

I地点とJ地点が展開する大規模な谷と尾根の頂部から中腹に展開する谷にトレンチを設定し調査を行った結果、土坑3基が検出された100㎡を川内迫B遺跡群L地点とした。

K地点が展開する開析地内の尾根3本のうち最も北に位置する尾根上にトレンチを設定し調査を行った結果、土坑2基が検出された100㎡を川内迫B遺跡群M地点とした。遺構の分布は尾根の突端部と尾根の最高部の計2箇所を確認された。両遺構は約80mの距離があるが、同一尾根に所在していることより総称してM地点とした。

M地点同様主丘陵西側において大規模に形成された開析地の中に位置する3本の尾根の最南部に位置する尾根上にトレンチを設定し、その結果土坑3基が検出された150㎡を川内迫B遺跡群N地点とした。

(荒)

試掘調査のまとめ

挿 図	出土地点	器 種	部 位	法量 (器厚)		文 様 ・ 調 整	備 考	図 版
				口径/	器高/底径			
7-1	1003T L I	深鉢	口縁部	0.9		外面:斜位縄文 内面:ナデ 口唇:キザミ		88-6
7-2	1005T L I	台付鉢	口縁部	0.4		外面:縦位捺糸文 縄文 ミガキ		88-7
7-3	1001T L I	壺	口縁部	0.5		外面:ヘラ描沈線文・ミガキ		88-8
7-4	1003T L I	鉢	口縁部	0.5		外面:縄文・横位沈線文 内面:ナデ		88-9
7-5	1005T L I	鉢	胴部	0.7		外面:ヘラ描沈線文 捺糸文 ミガキ		88-10
7-6	1001T L I	鉢	口縁部	0.6		外面:ヘラ描沈線文 ミガキ 縄文 内面:沈線		88-11
7-7	1005T L I	鉢	胴部	0.5		外面:三角文・沈線文・縄文 内面:ナデ		88-12
7-8	1001T L I	鉢	胴部	0.6		外面:ヘラ描沈線文 捺糸文 ミガキ		88-13
7-9	1001T L I	鉢	胴部	(0.4)		外面:縄文LR 綾絡文 内面:摩滅		88-14
7-10	1001T L I	壺	頸部	0.8		外面:ヘラ描沈線文 斜位縄文		88-15
7-11	1005T L I	壺	頸部	0.6		外面:ヘラ描沈線文 斜位縄文 ミガキ		88-16
7-12	1001T L I	壺	頸部	0.9		外面:ヘラ描沈線文 斜位縄文 ミガキ		88-17
7-13	1004T L I	壺	胴部	0.9		外面:ヘラ描沈線文 斜位縄文 ミガキ		88-18
7-14	1001T L I	壺	胴部	0.8		外面:縄文 ヘラ描沈線文		89-19
7-15	1001T L I	壺	胴部	0.7		外面:縄文・ヘラ描渦巻文・内面:ナデ		89-20
7-16	1001T L I	壺・鉢	胴部	0.7		外面:ヘラ描横位沈線文 斜位縄文		89-21
7-17	1004T L I	壺	胴部	0.5		外面:横位沈線文 ミガキ 斜位縄文		89-22
7-18	1005T L I	壺	胴部	0.7		外面:ヘラ描横位沈線文 縄文		89-23
7-19	1005T L I	壺	胴部	(0.5)		外面:ヘラ描横位沈線文 縄文		89-24
7-20	1003T L I	壺	胴部	0.6		外面:ヘラ描横位沈線 ミガキ 斜位縄文		89-25
7-21	1001T L I	壺	胴部	0.6		外面:ヘラ描き横位沈線 ミガキ 斜位縄文		89-26
7-22	1004T L I	深鉢か	胴部	0.8		外面:斜位縄文 ヘラ描き沈線文		89-27
7-23	1001T L I	鉢か	口縁部	0.4		外面:ヘラ描沈線文		89-28
7-24	1001T L I	鉢か	口縁部	0.5		外面:横位ヘラ描沈線文 内面:沈線文		89-29
7-25	1001T L I	鉢	口縁部	0.5		外面:縄文 内面:ナデ		89-30
8-26	1001T L I	鉢	胴部	0.7		外面:横位ヘラ描文 ミガキ		89-31
8-27	1001T L I	鉢	胴部	0.5		外面:横位平行沈線文 ナデ		89-32
8-28	1001T L I	鉢	胴部	0.6		外面:ヘラ描連続三角文 ミガキ		89-33
8-29	1001T L I	鉢	胴部	0.6		外面:ヘラ描連続三角文 ミガキ		89-34
8-30	1001T L I	鉢	胴部	0.7		外面:ヘラ描き山形文 縄文 ミガキ		89-35
8-31	1005T L I	壺	胴部	0.6		外面:ヘラ描沈線文		89-36
8-32	1001T L I	壺	胴部	0.9		外面:ヘラ描連続三角文 内面:ナデ		89-37
8-33	1005T L I	壺	胴部	0.4		外面:ヘラ描横位沈線文 ミガキ		89-38
8-34	1005T L I	壺	胴部	0.5		外面:横位沈線文 縦位捺糸		89-39
8-35	1005T L I	壺	胴部	0.7		外面:ヘラ描連続三角文		89-40
8-36	1005T L I	壺	胴部	0.6		外面:平行沈線連続山形文		89-41
8-37	1004T L I	壺	胴部	0.7		外面:横位平行沈線文 重三角文 縄文 (附加)		89-42
8-38	1001T L I	壺	胴部	0.7		外面:縄文 横位沈線文		90-43
8-39	1001T L I	壺	胴部	0.5		外面:縄文 沈線文 ミガキ 内面:ミガキ		90-44
8-40	1001T L I	壺	胴部	0.6		外面:縄文 沈線文 ミガキ 内面:ミガキ		90-45
8-41	1001T L I	壺か	口縁部	0.8		外面:斜位捺糸文		90-46
8-42	1001T L I	甕	口縁部	0.5		外面:縄文・連弧文 内面:ナデ・沈線文		90-47
8-43	1001T L I	甕	口縁部	0.6		外面:斜位捺糸 列点文 横ナデ		90-48
9-44	1001T L I	甕	口縁部	0.8		外面:斜位捺糸 横ナデ		90-49
9-45	1001T L I	甕	口縁部	0.8		外面:縦位捺糸 横ナデ 列点文 口唇:キザミ		90-50
9-46	1001T L I	甕	口縁部	0.6		外面:縦位捺糸 横ナデ 列点文		90-51
9-47	1003T L I	甕	口縁部	0.5		外面:縦位捺糸 列点文 横ナデ		90-52
9-48	1005T L I	甕	口縁部	0.7		外面:縦位捺糸 列点文		90-53
9-49	1003T L I	甕	口縁部	0.7		外面:斜位捺糸 横ナデ		90-54
9-50	1003T L I	甕	口縁部	0.6		外面:ナデ		90-55
9-51	1004T L I	甕	口縁部	0.6		外面:斜位縄文 口唇:縄文		90-56
9-52	1001T L I	甕	頸部	0.7		外面:斜位縄文 ナデ		90-57
9-53	1005T L I	甕	口縁部	0.8		外面:斜位捺糸		90-58
9-54	1004T L I	甕	頸部	0.8		外面:斜位捺糸 端部の結節		90-59
9-55	1005T L I	不明	不明	0.8		外面:縄文 内面:ナデ		90-60
10-56	1001T L I	壺	胴部	0.6		外面:縦位縄文		91-61
10-57	1005T L I	壺	胴部	0.8		外面:縦位・斜位縄文		91-62
10-58	1005T L I	壺	胴部	0.8		外面:縦位縄文		91-63
10-59	1003T L I	壺	胴部	0.9		外面:斜位縄文		91-64
10-60	1004T L I	甕	胴部	0.6		外面:縄文		91-65
10-61	1005T L I	不明	不明	0.6		外面:縄文		91-66

表4 試掘調査出土土器観察表(1)

挿 図	出土地点	器種	部 位	法 量 (器厚)		文 様 ・ 調 整	備 考	図 版
				口径/器高/底径				
10-62	1003T L I	甕	胴部	0.8		外面：横位縄文		91-67
10-63	1005T L I	甕	胴部	0.7		外面：縄文		91-68
10-64	1001T L I	甕	胴部	0.6		外面：斜位撚糸 内面：ナデ		91-69
10-65	1001T L I	壺	胴部	0.7		外面：縄文 内面：ナデ		91-70
10-66	1001T L I	甕か	底部	-/(7.7)/8.5		外面：不明 底面：木葉痕		91-71
10-67	1001T L I	甕か	底部	-/(9.5)/8.0		底面：木葉痕		91-72
11-68	144T L I	壺か	底部	-/2.6/8.6		底面：木葉痕		91-73
11-69	1005T L I	甕	底部	-/7.5/9.8		外面：斜位撚糸 底面：木葉痕		92-74
11-70	1001T L I	不明	底部	-/(1.2)/8.5		底面：木葉痕		92-76
11-71	169T L I	不明	底部	-/2.1/9.1		底面：木葉痕		92-75
11-72	1001T L I	不明	底部	-/(1.5)/8.6		外面：縄文 底面：木葉痕		92-77
11-73	1001T L I	不明	底部	-/1.4/6.2		底面：木葉痕		92-78
11-74	1001T L I	不明	底部	-/(2.8)/4.9		外面：ヘラケズリ 内面：ヘラナデ 底面：木葉痕		92-79
11-75	1001T L I	不明	底部	-/(1.9)/4.4		底面：木葉痕		92-80
11-76	1002T L I	不明	底部	-/(0.8)/7.0		底面：木葉痕		92-81
11-77	1001T L I	不明	底部	-/(5.9)/5.4		外面：縦位縄文		92-82
11-78	1001T L I	不明	底部	-/(2.9)/4.2		外面：不明 内面：ヘラナデ		92-83
12-79	不 明	甕	口縁部	1.4		外面：平行タタキ 内面：青海波文状当具痕		88-1
12-80	501T L I	甕	胴部	-/20.0/29.8		外面：平行タタキ ナデ ケズリ 内面：青海波文状当具痕		88-3
12-81	501T L I	壺	底部	-/8.1/8.4		外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ		88-2
12-82	731T L I	杯	完形	11.3/2.7/4.2		外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ		88-4
12-83	580T L I	鉢	口縁部	21.2/8.9/-		外面：ロクロナデ 内面：ミガキ 黒色処理		88-5

表5 試掘調査出土土器観察表 (2)

挿 図	器 種	出土地点	石 質	法 量		備 考	図 版
				長/幅/最大厚/重量(g)			
13-1	石 鋏	1005T L I	粘板岩	156/114/30/462			93-1
14-2	削 器	1001T L I	流紋岩	118/92/9.5/128			93-2
14-3	不 明	1003T L I	凝灰岩	75/60/16/			93-3
14-4	削 器	1001T L I	粘板岩	41/49.5/9.5/30.2			94-4
14-5	石 錐	1005T L I	流紋岩	44/18/9/6.2			94-5
15-6	削 器	1001T L I	流紋岩	51/55/7/46.0			94-6
15-7	削 器	1001T L I	流紋岩	57/51/11/46.2			94-7
16-8	剥 片	1003T L II	流紋岩	96/64/25/178		2次加工	94-8
16-9	剥 片	1003T L I	流紋岩	97/79/28/268		2次加工	95-9
17-10	剥 片	1003T L I	珪質頁岩	78/60/10/36		2次加工	95-10
17-11	剥 片	1005T L I	頁 岩	72/68/28/172		2次加工	95-11
17-12	不 明	118T L I	珪化木	58/28/22/45			96-12
18-13	剥 片	1001T L I	頁 岩	122.5/116/25/442		2次加工	96-13
19-14	剥 片	1001T L I	凝灰岩	36/37/8/7.7		2次加工	96-14
19-15	剥 片	1003T L I	珪質頁岩	32/31/6/4.1		2次加工	96-15
19-16	剥 片	1001T L I	石英斑岩	42/53/5/14.4		2次加工	96-16
19-17	削 器	1001T L I	チャート	20/20/4/1.6			96-17
19-18	剥 片	1001T L I	珪質頁岩	31/35/6/5.0			97-18
19-19	剥 片	1001T L I	珪質頁岩	34/32/3.5/4.1		2次加工	97-19
19-20	剥 片	1001T L I	珪質頁岩	26/31/7/6.9			97-20
19-21	剥 片	1001T L I	めのう	44/27/8/8.7			97-21
20-22	剥 片	1001T L I	珪質頁岩	25/30/7/3.8			97-22
20-23	剥 片	1001T L I	珪質頁岩	38/37/6/3.9			97-23
20-24	剥 片	1001T L I	珪質頁岩	45/30/9/9.6			97-24
20-25	剥 片	1003T L I	珪質頁岩	35/31/7.5/8.8		2次加工	97-25
20-26	剥 片	1001T L I	鉄石英	35/35/9/		2次加工	97-26
20-27	剥 片	1001T L I	珪質頁岩	38/31/11/			97-27
20-28	剥 片	1005T L I	鉄石英	30/40/7/			98-28
21-1	大型蛤刃石斧	1001T L I		106/65/42/460			98-29
21-2	扁平片刃石斧	1001T L I	粘板岩	97/47/15/129			98-30
22-3	扁平片刃石斧	1004T L I	粘板岩	51/37/12/33.4			98-31
22-4	石 庖 丁	1001T L I	粘板岩	49/69/11/42		未製品	98-32
22-5	敲 打 器	1001T L I		103/72/51/562			98-33

表6 試掘調査出土石器観察表

第2編 蛭沢遺跡群

第 1 章 遺跡群の概要

本遺跡群はJR常磐線磐城太田駅から北西方向へ約1.2km、牛川から北へ約1kmに位置する。遺跡群周辺の地形は、阿武隈高地に源を発する太田川がやや蛇行しながら太平洋に向けて東流し、河川沿いには沖積低地が開析されている。また沖積低地の南北には標高40m前後の緩傾斜な丘陵地が樹枝状に展開する。遺跡群は相双丘陵の東辺にあり、樹枝状に張り出した尾根と尾根に挟まれた谷部に展開する。

当開発計画に際して実施された試掘調査では、遺跡群内に約1000本のトレンチが設けられ遺構、遺物の確認が行われた。試掘調査の結果、合計90本のトレンチにおいて遺構・遺物が確認され、これらの遺構、遺物が確認されたトレンチは比較的まとまりが見とめられることから、そのまとまりをもって各地区を地点として設定した。

蛭沢遺跡群では、その遺構の分布状況から合計5箇所の地点が設定された。遺跡群の最も北側にはA地点が位置する。A地点は遺跡群の北側でも西寄りに位置し丘陵北斜面に開析された2本の谷と、この谷によって形成された小規模な尾根からなる場所である。A地点から東に約100mに地点にはB地点が位置する。

B地点は遺跡ののる丘陵中央に形成された沼地に向かって傾斜する斜面地に位置する調査地点である。調査区の中央には沼地に向かう1条の谷がのび、この谷によって形成された尾根斜面が南北に展開している。B地点の東側に位置するA地点とB地点の南側約150mの地点には本遺跡群で最大規模の遺構分布をもつC地点が位置する。

C地点はB地点と同様に調査地点の東側に形成された沼地に向かって傾斜する丘陵斜面に位置している。調査地点には3本の谷部と谷によって形成された2本の尾根が展開している。C地点の更に南側約150mの地点にはD地点が位置する。

D地点は遺跡ののる丘陵の中央部に位置し東側約250mの地点に位置する沼地に向かって開析された谷の最深部に位置している。D地区の南西には丘陵中部に平坦面がある。D地点の南東約90mの地点にはE地点が位置する。

E地点は他の調査地点と比較すると非常に遺構密度の低い調査地点であり、単一的な印象を受ける調査地点である。E地点は遺跡ののる丘陵頂部付近に位置し、他の調査地点と比較すると最も標高が高い地点に位置する。

E地点を過ぎると丘陵の標高は緩やかに降り始め、丘陵南斜面を構成しながら太田川によって形成された沖積平野へと到達する。

蛭沢遺跡群A地点の面積は5600㎡、以下B地点4400㎡、C地点9200㎡、D地点3200㎡、E地点100㎡である。

(荒)



図24 蛭沢遺跡群調査地点位置図

第2章 調査要項と調査経過

第1節 調査要項

遺跡名 蛭沢遺跡群
 所在地 福島県原町市雫字蛭沢地内
 調査面積 5600 m²
 実施期間 平成4年7月22日～平成14年3月25日
 調査主体 福島県原町市教育委員会
 調査担当 原町市教育委員会文化課
 調査担当者 文化財主事 堀 耕平・学芸員 齋藤直之

第2節 調査経過

平成4年度

- 7月：蛭沢遺跡群A地点試掘調査開始。調査面積で効率よく遺跡の範囲を限定するため、試掘トレンチは地形の傾斜に対して横長に設定。羽口・鉄滓が出土。本調査開始4×4mのグリッド設定。まず廃滓場の調査から開始。
- 8月：グリッドごとの掘り下げを続ける。羽口が大量に出土。土師器杯・甕が出土。廃滓場掘り下げ。21日バックホー表土剥ぎ開始。
- 9月：1～11号土坑検出。半割。遺跡西部で炭窯2基検出。表土除去。1・2号炭窯調査。12～16号土坑検出。半割。1～11号土坑セクション図作成。1号木炭窯跡掘り下げ。1～11号土坑完掘。2号木炭窯跡掘り下げ。
- 10月：1・2号木炭窯跡掘り下げ。蛭沢遺跡群A地点東沢の試掘開始。
- 11月：1・2号木炭窯跡セクション図作成。1・2号木炭窯跡掘り下げ。1・2号炭窯実測。斜面上部から精査。14・16・17号土坑掘り下げ。
- 12月：2号木炭窯跡完掘。1・2号木炭窯跡写真撮影。3号製鉄炉の炉底精査。4号製鉄炉廃滓場掘り下げ。5号製鉄炉セクション精査・作図・写真撮影。6号製鉄炉検出写真撮影。6号製鉄炉跡検出。2・4・5号製鉄炉精査。
- 1月：廃滓場掘り下げ。鉄製品出土。尾根西側で炭窯3基確認。廃滓場調査継続。1～6号製鉄炉調査継続。製鉄炉フイゴ部掘り下げ。
- 2月：2号製鉄遺構写真撮影。3～6号製鉄炉跡精査。鉄滓の分類。

平成5年度

4月：3・4号製鉄炉跡精査継続。1号作業場精査。5・6号精査。日建測量地形測量開始。

平成8年度 4月：調査再開。器材搬入・現場設営。遺構再検出作業。

平成9年度 2月：製鉄炉精査。

平成10～14年度：整理作業

(齋藤)

A地点の立地

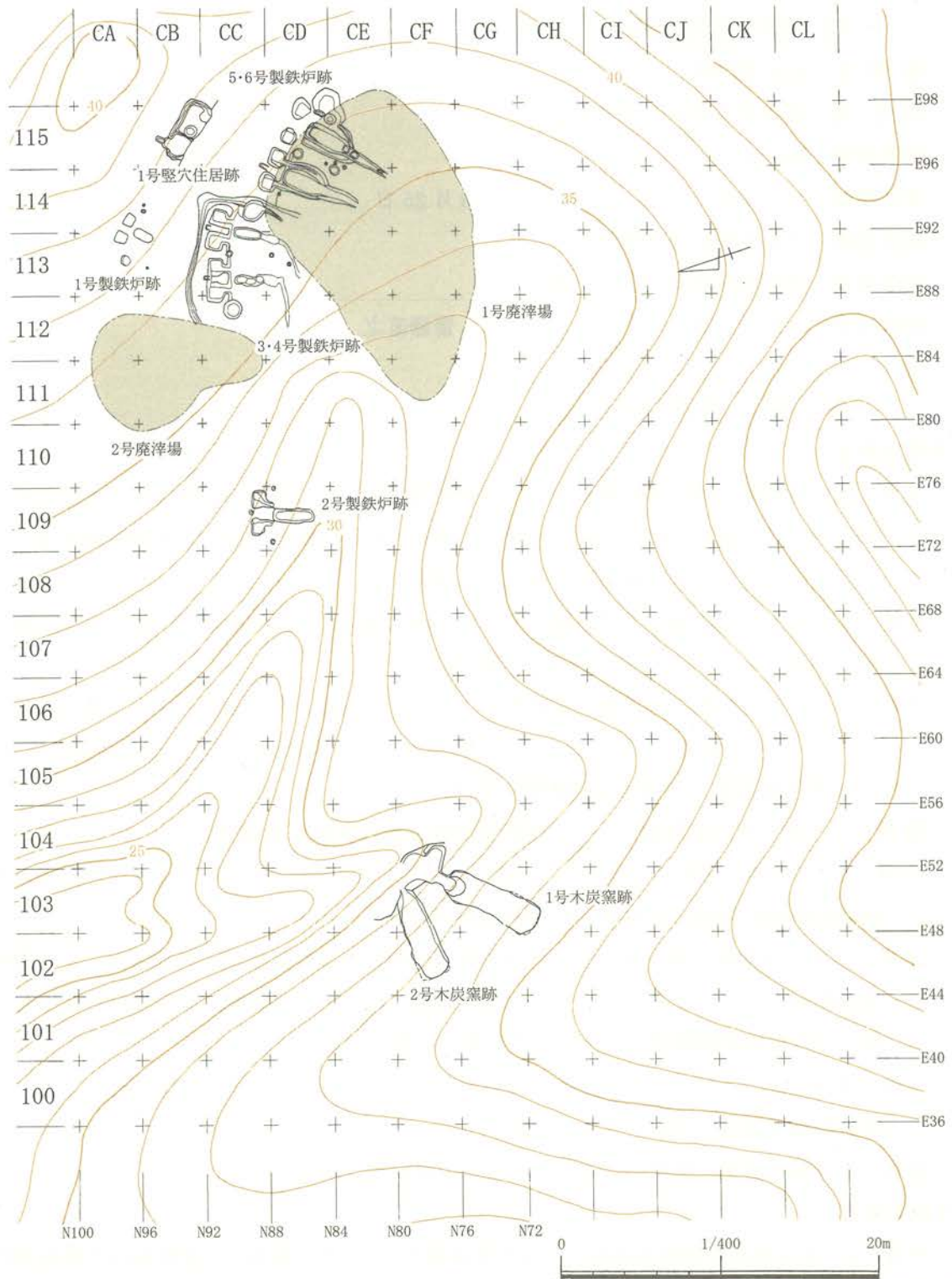


図25 蛭沢遺跡群A地点遺構配置図

第3章 調査成果

第1節 蛭沢遺跡群 A地点

第1項 A地点の立地 (図26)

蛭沢遺跡群A地点は、遺跡ののる丘陵北辺ほぼ中央に位置しており、調査グリッドCM76 からDZ130の範囲に展開する。調査地点内で最も標高が高い地点では40m、最も標高が低い地点では25mである。A地点の東側には蛭沢遺跡群B地点が位置し、南側には本遺跡群最大の規模を誇る蛭沢遺跡群C地点が位置する。A地点の遺跡の広がりには丘陵頂部から丘陵裾部にかけて約5600㎡である。A地点が展開する地域の地形は、遺跡群全体がのる主丘陵から北に向かって開析された小規模な2本の谷と、この谷に挟まれた比較的傾斜の緩い尾根で構成される。

(荒)

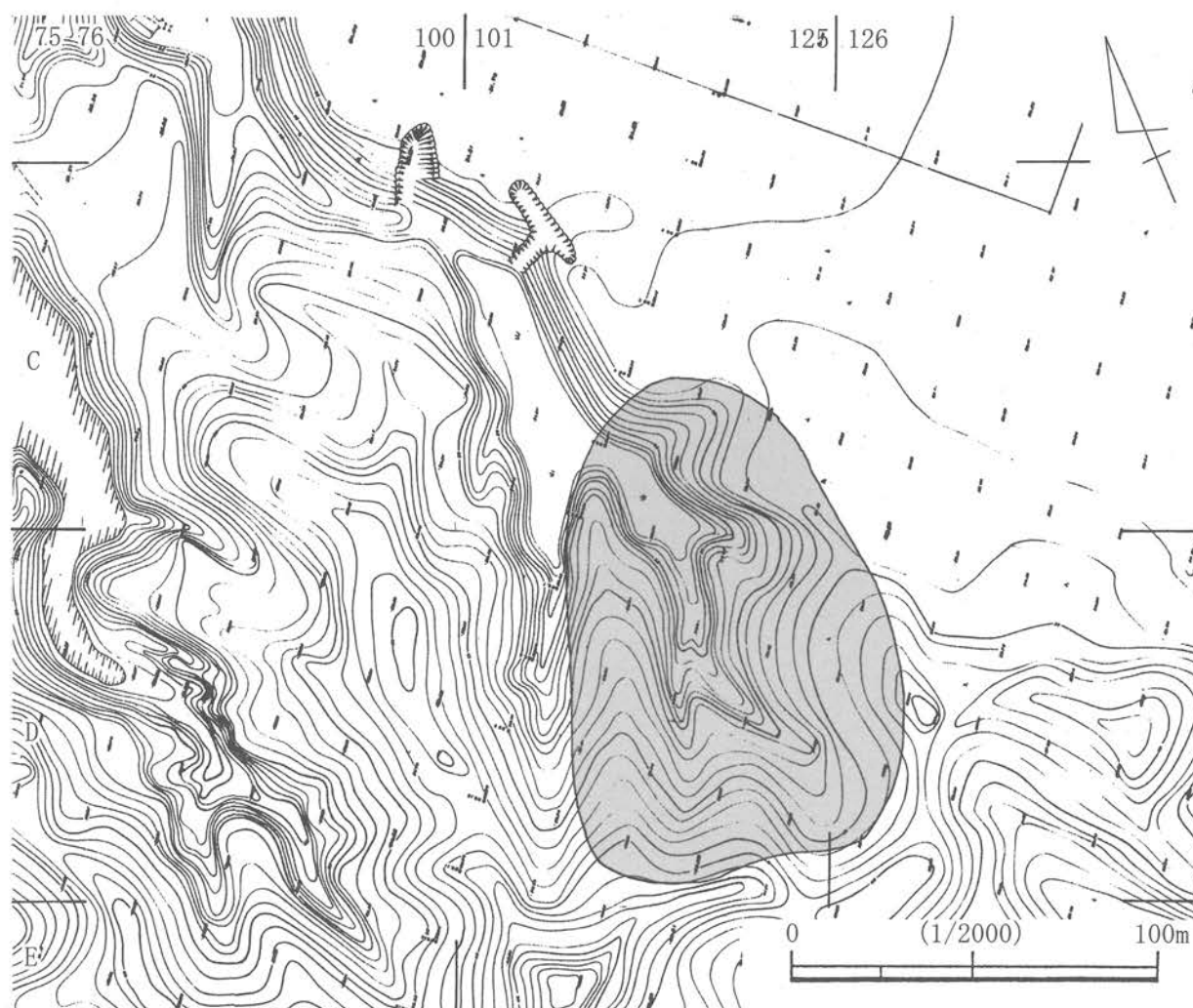


図26 蛭沢遺跡群A地点位置図

第2項 検出された遺構と遺物

1号製鉄炉跡

遺 構 (図27: 図版3・4)

1号製鉄炉跡が立地する地形は、北西方向から南東へ向かって入り込んだ開析谷の北側に発達した丘陵の南向斜面である。炉跡は標高38m付近に位置し、当調査区で検出された製鉄炉跡の中でも、最も標高が高い地点に立地している。本遺構の南側約6m、斜面下方の標高35m付近には3・4号製鉄炉跡、東側約8.5m付近には1号竪穴住居跡が位置する。

本製鉄炉跡は、踏みフイゴを伴う長方形箱形炉で、斜面に対して直行する方向に炉長辺が構築された縦置炉である。遺構は作業場・炉底・炉背部の踏みフイゴ掘方・ピットで構成される。不明瞭ながら斜面を削平した平場を造成し、西・北・東側に排水のための小溝を巡らす。

炉底は作業場の中央に位置する。作業場底面の地山がごく浅い皿状に掘り窪められ、その上に直接炉底が構築されている。斜面上位には炉底滓の一部が遺存し、下位には還元面が認められた。平面形は、長軸1.24m×短軸0.5mの長楕円形である。土層の検討では、炉底の直上に木炭を含む黒色土がレンズ状の堆積を示し、その上に作業場全面を覆う流入土と推定される暗褐色土が堆積している状況が観察された。なお、土層検討では操業回数の把握はできていない。

踏みフイゴ掘方は炉本体の上方0.7mに位置し、作業場の外側に設置されている。掘方は、踏み板を受けたと推定される方形の掘り込み2基が東西に並ぶ。壁は垂直に立ち上がるが、い

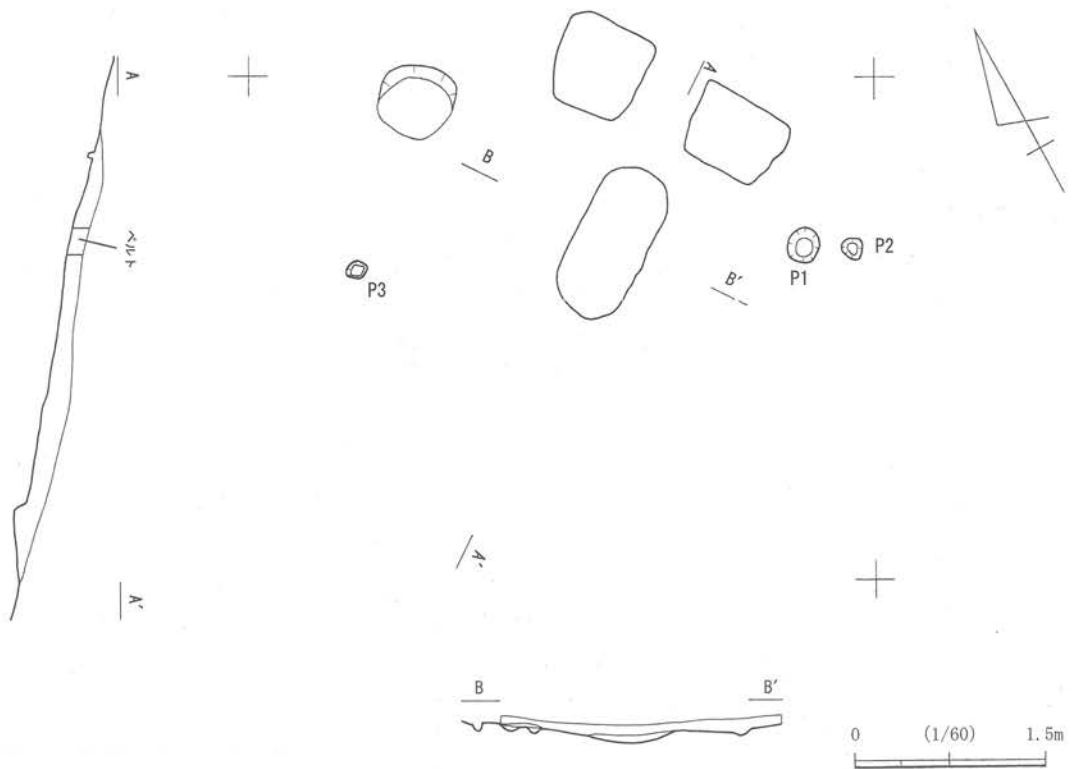


図27 1号製鉄炉跡

いずれも南へ向かって降る斜面に掘り込まれているため、斜面下位にあたる部分の壁は検出されなかった。掘方の北西コーナーから北東コーナーまでの規模は2.1mである。

炉底の東側約1.5mの位置にはピット2基(P1・2)、西側1.6mの位置にはピット1基(P3)を確認している。また、炉底の西1.6mの位置には径0.6mの円形の掘り込みを検出した。斜面に掘り込まれているため、南側壁は検出されなかった。木炭置場の可能性がある。

(藤木)

2号製鉄炉跡

遺 構 (図28: 図版5~7)

2号製鉄炉跡は、先に報告した1号製鉄炉跡や、後述する3~6号製鉄炉跡の南西側同一斜面、標高29m~30mの地点に立地しており、他の製鉄炉よりも低位置にある。

本製鉄炉跡は、踏みファイゴを伴う長方形箱形炉で、斜面に直行する方向に炉が構築された縦置炉である。遺構は炉掘方、炉背部の踏みファイゴ掘方、ピットで構成される。検出段階では、暗褐色土によって埋没した踏みファイゴ掘方と、焼土ブロックを含む黒色土による炉底のプランを検出したが、遺構上層部の遺存状況が悪いためか、作業場となるべき平坦面は確認されていない。プラン検出の後には、踏みファイゴ掘方については「千鳥形」に、炉底は「キの字形」に土層観察用のベルトを残し、底面まで掘り下げて土層の検討を行った。

踏みファイゴの掘方内に堆積した土層は暗褐色土の単層で、斜面上位からの自然流入土により埋没したものと考えられる。炉掘方内には、上層部に木炭主体の黒色土、下層部に焼土ブロック主体の暗赤褐色土が堆積している。また、斜面下位側には底面直上の一部に薄い木炭主体黒色土が堆積する。これらの層は、いずれも防湿を目的とした施設土と推定される。なお、焼け締りによる硬化面や還元面は確認されていない。

踏みファイゴ掘方の形状は、中央が掘り残されて幅1.2m×高さ0.3mの高まりがあり、その左右には踏み板を受けたと推定される平面方形の掘り込みが位置する。掘方規模は東西約7.0mである。踏み板の掘方は、斜面下方の炉本体に近い部分のコーナーが炉本体側へ向けて突出しており、踏みファイゴと炉本体に設置された羽口をつなぐ送風を目的とした通風溝であると考えられる。

炉掘方は、長軸3.82m×短軸1.31mを測り、平面形は楕円形である。施設土除去後の検出面からの深さは平均0.44mで、断面形はU字形である。底面や掘方壁に被熱の痕跡は認められなかった。

ピットは3基を確認した(P1~3)。いずれも平面円形で、P1は径46cm×深さ14cm、P2は径41cm×深さ11cm、P3は径44cm×深さ6cmである。炉跡中軸線上のP1は、踏みファイゴの軸木を据えた軸受けの可能性がある。P2・3は、規模がほぼ同じであること、中軸線から左右対照の位置に配されていることから、対になるものと考えられ何らかの施設に伴ったものと考えられる。

(藤木)

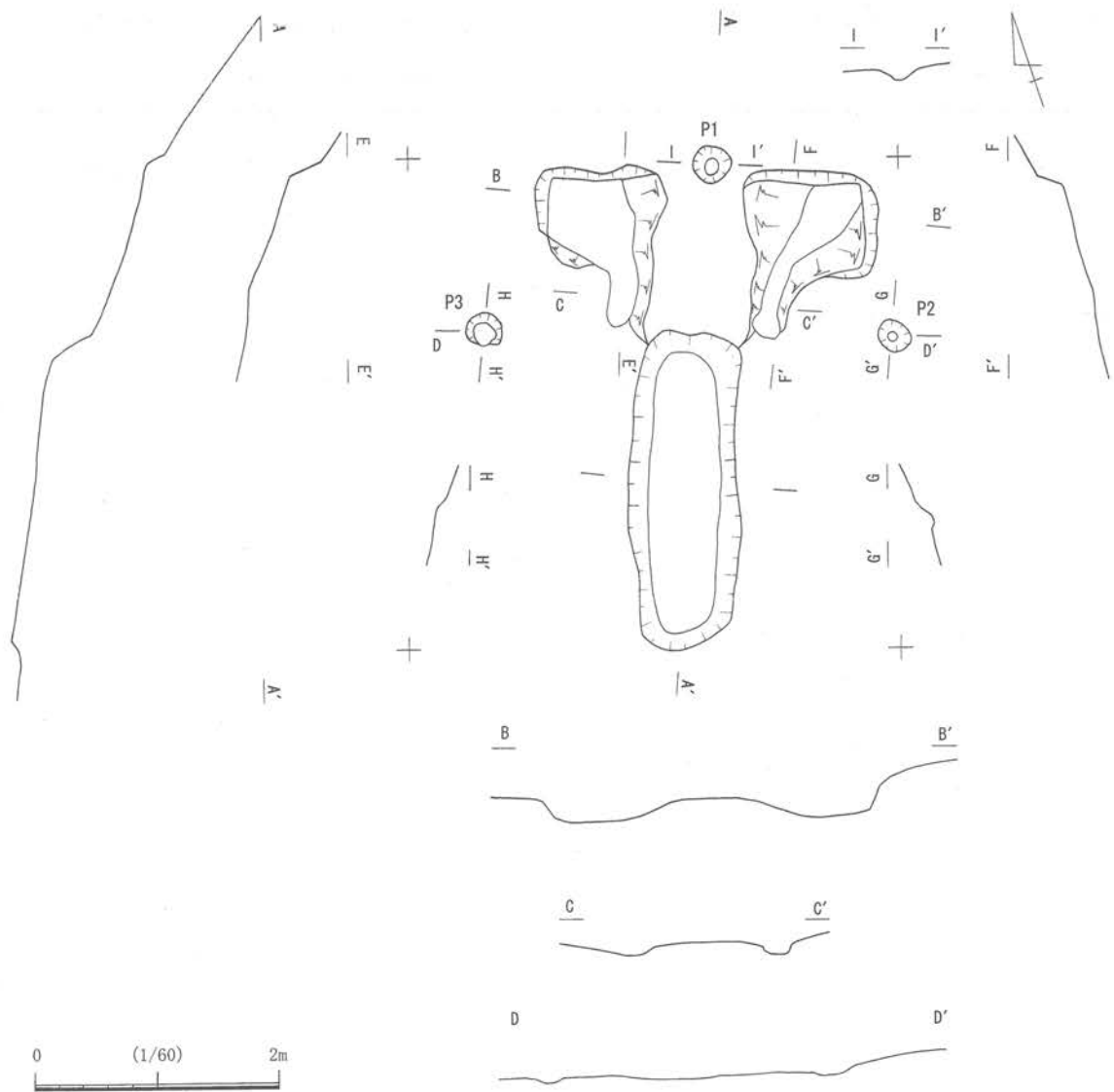


図28 2号製鉄炉跡

出土遺物 (図 58-4 : 図版 113-4)

図 58-4 は土鈴である。最大径 5.6 cm の鈴体部に、最大幅 4.0 cm、高さ 1.5 cm の紐が付く。紐の中央下部には直径 0.8 cm の孔が穿たれる。鈴体部の下部には長さ 2.7 cm、幅 0.8 cm の切れ込みが見られる。紐長辺と切れ込みの長辺方向は平行関係にあり、鈴体部内には土製の玉が確認される。

(荒)

3・4号製鉄炉跡

遺 構 (図 29 : 図版 8~14)

3・4号製鉄炉跡は2基が並置された製鉄炉跡で、先述した1・2号製鉄炉跡と、後述する5・6号製鉄炉跡と同一斜面上、標高30~32mの地点に立地している。この両製鉄炉跡は表面調査の際に丘陵斜面に貼りつくように形成された塚状の廃滓場(1号廃滓場)の西側で検出さ

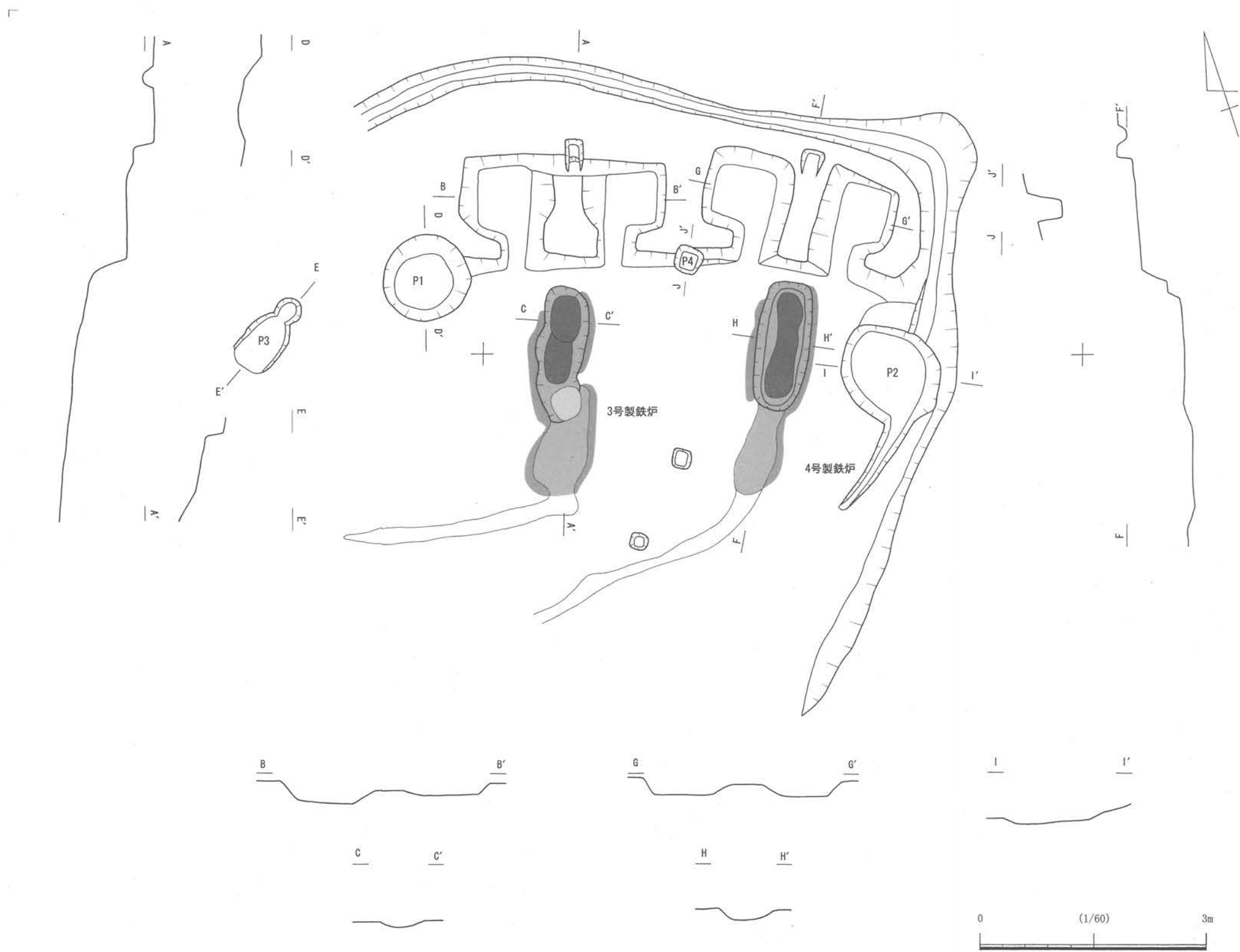


图29 3・4号製鉄炉跡

れた。本製鉄炉跡の北側約6mの斜面上位には1号製鉄炉跡が、西側約16mの地点には2号製鉄炉跡が位置する。また、本製鉄炉跡の南東側に接するように、同じく2基が並置された製鉄炉跡である5・6号製鉄炉跡が築かれている。

両製鉄炉は表土除去後の遺構検出段階で、暗褐色土による作業場、踏みフィゴのプラン、等高線に対して直行した炉本体部を覆う焼土、黒色土による上部堆積層、および斜面下位の廃滓場へ伸びる廃滓溝のプランを確認した。調査の結果、これらの遺構は踏みフィゴを伴い作業場を共有して2基が並列する長方形箱形炉で、炉本体部が斜面に対して直行する方向に構築された縦置炉であることが明らかとなった。

遺構は作業場、炉掘方、廃滓溝、炉背部の踏みフィゴ掘方、ピットで構成される。以下、斜面下位から向かって左を3号製鉄炉跡、右を4号製鉄炉跡と称し、遺構の構造について述べる。

作業場には踏みフィゴが位置する斜面上位と炉本体が位置する斜面下位との間に40cm前後の段差が見られ、その段差を境界として大きく上部作業場にわかれる。

3号製鉄炉跡では、作業場内に堆積した自然流入土を除去すると、炉本体が位置する部分の直上に焼土、炭化物を多量に含む土層が確認された。この炉跡上部の堆積層を、土層観察用ベルトを残して掘り下げると、還元して焼け締まった黒灰色の還元粘土範囲が確認され、最終操業段階の炉底として判断した。確認された炉底は長軸1.82m×短軸0.64mの不整長楕円形である。炉底の斜面下位側には接するように不整形の窪みがあり、窪みの内部には炉内から排出された流出滓が遺存していた。炉底とこれに接する不整形の窪み周囲では、地山が強く酸化している。流出滓が溜まった窪みからは、斜面下位へ向かって、幅16~68cmの小規模な溝が伸びている。溝内部の地山が黒色の還元状態を示していることから、廃滓溝と考えられる。廃滓溝は流出滓が溜まった窪みから南側へ向かって約1.1m伸び、さらに西へ向きを変えて3.2m伸びる。

先述したように、作業場底面は段差により上部作業場と下部作業場とに分かれ、踏みフィゴ掘方は上部作業場に設置されている。踏みフィゴ掘方は、検出段階において東西2.73m×南北1.5mの長方形のプランとして確認された。覆土は暗褐色土で、斜面上位からの流入土によって埋没したものと思われる。踏みフィゴ掘方の掘り上がりの形状は、長方形の掘り込みの底面中央に幅42cm×高さ20cmほどの高まりが掘り残され、左右が一段低く方形に掘り窪められている。上部作業場が踏み板全体の大きさに合わせて大きく掘り込まれ、さらに踏み板の両端を受けるために左右が低く掘り込まれたものと思われる。また、この一段低く掘り窪められた部分からは炉本体が位置する下部作業場へ続く幅58cmの溝が伸びている。溝底面は踏みフィゴ掘方の底面から連続して付設されており、上部作業場と下部作業場とを分ける段差の部分は途切れており、下部作業場では検出されなかった。この溝は、フィゴから炉壁に装着された羽口へと送風を行うための送風溝の機能をもつものと考えられる。掘方の北壁中央には、軸木を据えたと推定される箱状の軸受けが突出している。

4号製鉄炉跡は、作業場内に堆積した自然流入土を除去すると、炉本体の位置する部分の直上に焼土・炭化物を多量に含む土層が確認された。この炉跡上部の堆積層を、土層観察用のべ

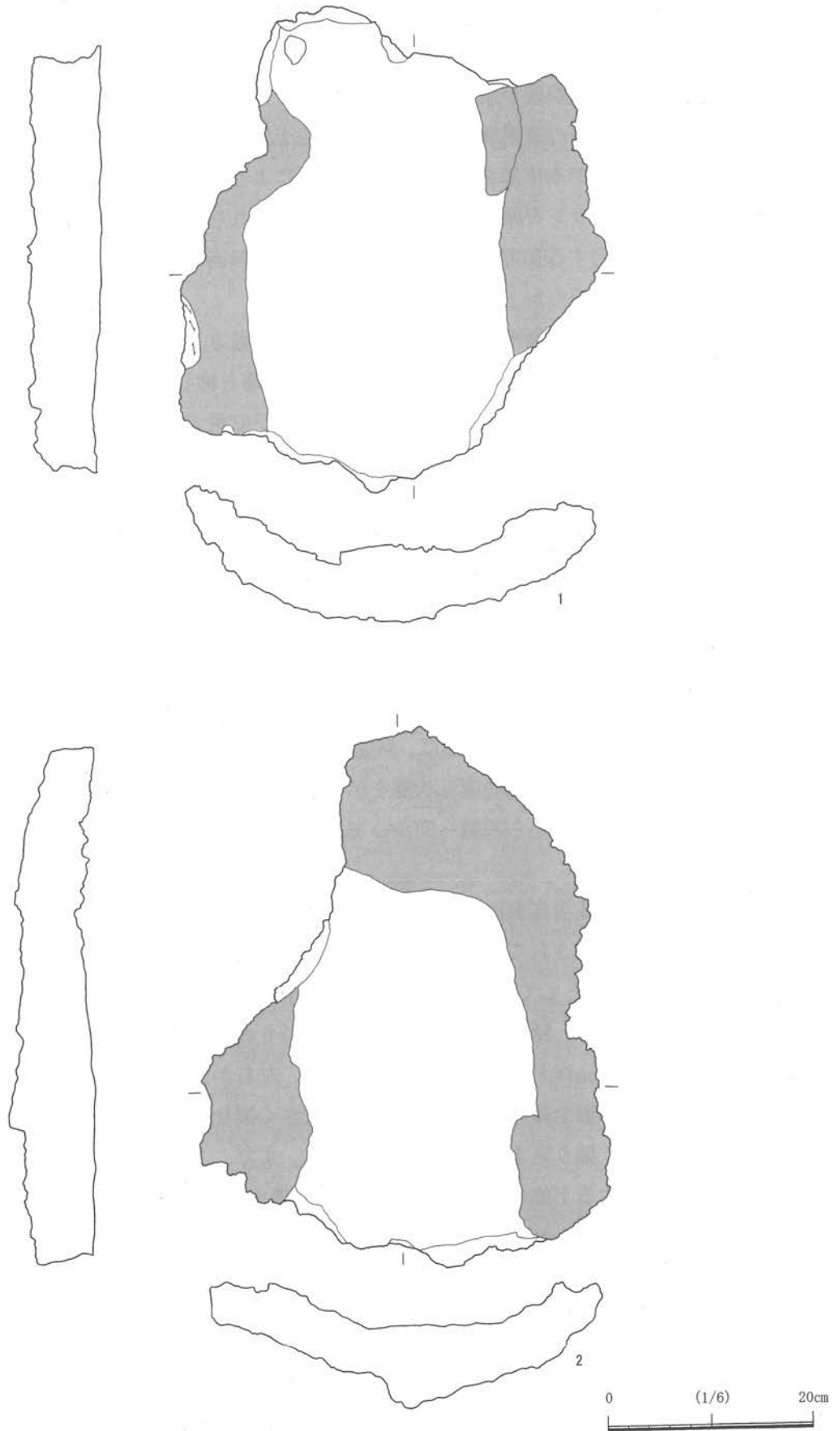


图30 炉底滓 (1)

ルトを残して掘り下げると、長軸 1.7m×短軸 0.72mの長楕円形の範囲に残る炉底滓が検出された。炉底滓の下部には、還元して硬く焼け締まった黒灰色の粘土による炉底が遺存しており、炉底周囲の地山は強く酸化している。炉底の斜面下位には廃滓溝が伸び、炉内から排出された流出滓が遺存していた。廃滓溝は、3号製鉄炉跡と同様に内部の地山が黒色の還元状態を示す。廃滓溝は炉底の下端から南側へ向かって約 1.5mまで伸び、さらに緩やかにカーブしながら南西に向きを変え、約 3mまで伸びる。

踏みフイゴ掘方は炉底の北約 1mに位置し、斜面上位の上部作業場に掘り込まれている。検出段階では東西 2.58m×南北 1.42mの長方形のプランとして確認された。覆土は暗褐色土で、斜面上位からの流入土と推定される。これを除去すると、掘方内部や掘り込みの肩の部分から、多数の使用済みフイゴ羽口や鉄滓が出土した。踏みフイゴ掘方の掘り上がりの形状は、3号製

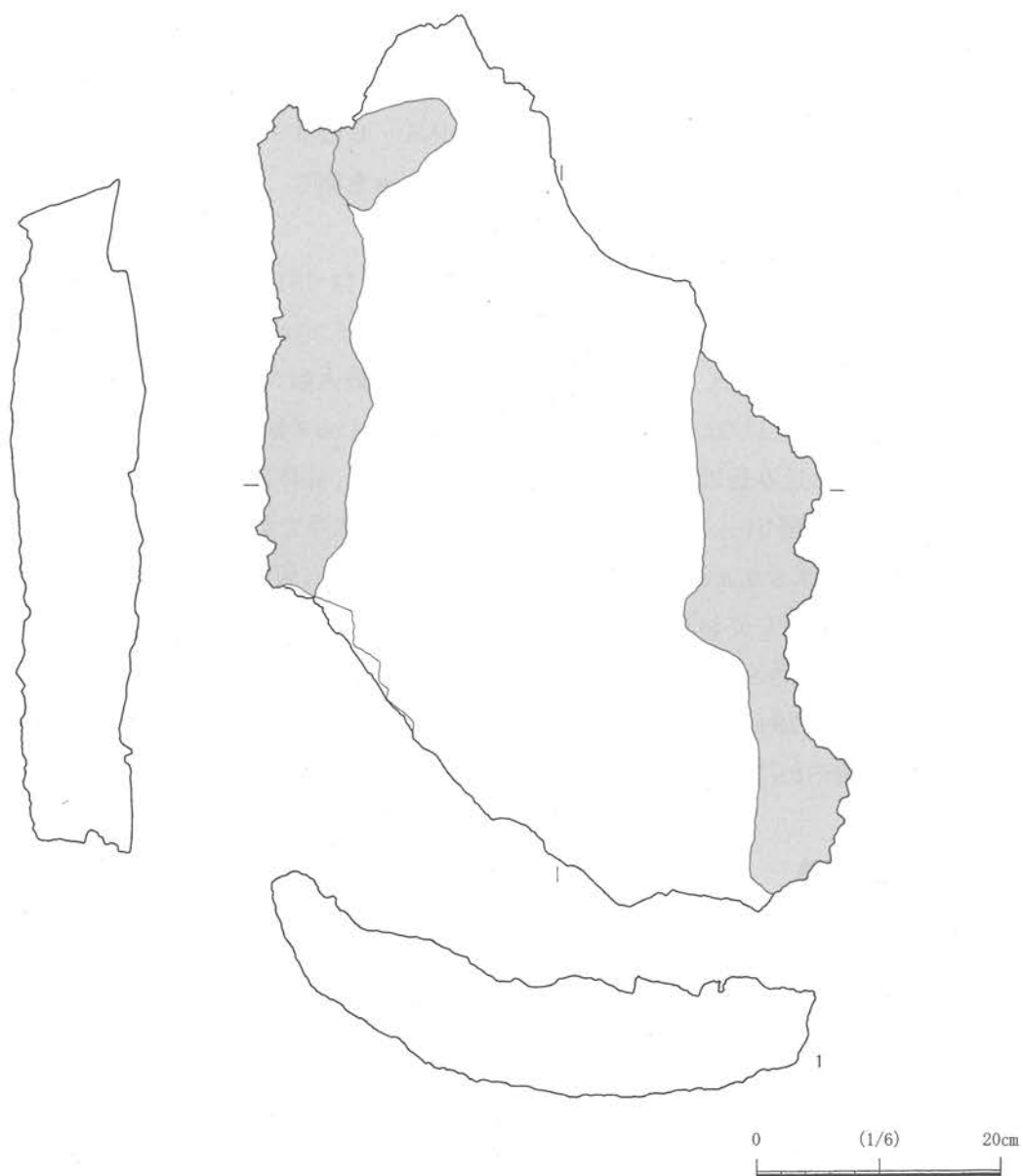


図31 炉底滓 (2)

鉄炉跡に伴うものとはほぼ同様で、長方形の掘り込みの底面中央に幅 88 cm×高さ 18 cm前後の高まりが掘り残され、左右が一段低く方形に掘り窪められている。この一段低く掘り窪められた部分からは炉本体が位置する下部作業場へ続く幅 62 cm前後の溝が伸びている。溝底面は踏みファイゴ掘方の底面から連続して付設され、上部作業場と下部作業場とを分ける段差の部分で途切れる。掘方の北壁中央には、軸木を据えたと推定される箱状の軸受けが突出している。

ピットは6基を検出した(P1～6)。P1は、3号製鉄炉跡の踏みファイゴの南西側、上部作業場と下部作業場にまたがって掘り込まれた円形の掘り込みである。径 1.6m×深さ 25 cmを測る。P2は、4号製鉄炉跡の東側 1.5m、作業場東辺に接して掘り込まれた円形のピットである。径 1.7m×深さ 0.11mを測る。南側壁からは幅 12～28 cmの溝が斜面下方へ向かって 1.3mほど伸びている。P3は、3号製鉄炉跡の西約 4 mに位置する。掘り込みは円形に掘り込まれた部分と、斜面下方へ向かって開く部分からなる。長軸 1.1m×深さ 0.22mを測る。覆土は焼土を主体とする赤褐色土で、使用済み羽口が1点出土している。P4は3号製鉄炉跡と4号製鉄炉跡との中間、上部作業場と下部作業場とを分ける段差の部分に掘り込まれている。長軸 39 cm×短軸 35 cmの方形で、深さは 48 cmである。P5・6は3・4号製鉄炉跡の間に位置する方形ピットである。P5は一辺 26 cm、P6は一辺 24 cmを測る。

(藤木)

出土遺物 (図 30-1・2. 31-1. 58-2 : 図版 100-1・2. 111-181. 113-2)

図 58-2 は完全な形で出土した土鈴である。最大径は 5.0 cm である。球状の鈴体部上端には、つまみ出しによる紐が付く。紐の形状は短い舌状で、最大幅 3.8 cm×高さ 2.0 cm、断面形は三角形である。紐には孔はない。鈴体部の下部には長さ 2.4 cm×幅 0.6 cmの切れ込みが見られる。鈴体部下部の切れ込み長辺と紐の長辺は平行関係にある。鈴体部内には土製の玉が確認される。

図 30-1・2、図 31-1 は炉跡底面から出土した炉底滓である。図 30-1 は残存長 47.1 cm×残存幅 42 cm×厚さ 6.4 cm である。縦断面形は扁平で左右両側辺部は強い錆が発生している。横断面形は緩く湾曲しており、炉底断面の形状を知ることができる。同図-2 は残存長 54 cm×最大幅 39.5 cm×厚さ 8.4 cm である。炉底滓の頂部から右側辺と、左側辺には強い錆が発生している。図 31-1 は 73 cm×45.4 cm×厚さ 10.4 cm である。上記 2 資料と同様に滓の縦断面は扁平で、横断面は緩やかに湾曲する。滓の左右両側端部には強い錆が発生している。

(荒)

5・6号製鉄炉跡

遺構 (図 32. 33・図版 15～19)

5・6号製鉄炉跡は、先述した1～4号製鉄炉跡と同一斜面上、標高 30～32mの地点に立地し、3・4号製鉄炉跡の東側に接する位置にある。3・4号製鉄炉跡と同様、2基が並列して構築された製鉄炉跡である。1号廃滓場の下層で検出された製鉄炉のプランは、1号廃滓場の掘り下げをおこない、廃滓場底面を確認した時点で検出されたが、明確な作業場のプランは確認されず、暗褐色土による踏みファイゴのプラン、等高線に対して直行する方向に設置された炉本体部を覆う焼土、黒色土による上部堆積層、および斜面下位の廃滓場へ伸びる廃滓溝中に堆積した

焼土・暗褐色土によるプランが確認された。

調査の結果、これらの遺構は、踏みフイゴを伴い作業場を共有して2基が並列する長方形箱形炉で、斜面に対して直行する方向に構築された縦置炉であることが明らかとなった。

遺構は、作業場、炉掘方、廃滓溝、炉背部の踏みフイゴ掘方、ピットで構成される。以下、斜面下位から向かって左を5号製鉄炉跡、右を6号製鉄炉跡と称し、本遺構を構成する各施設について述べる。

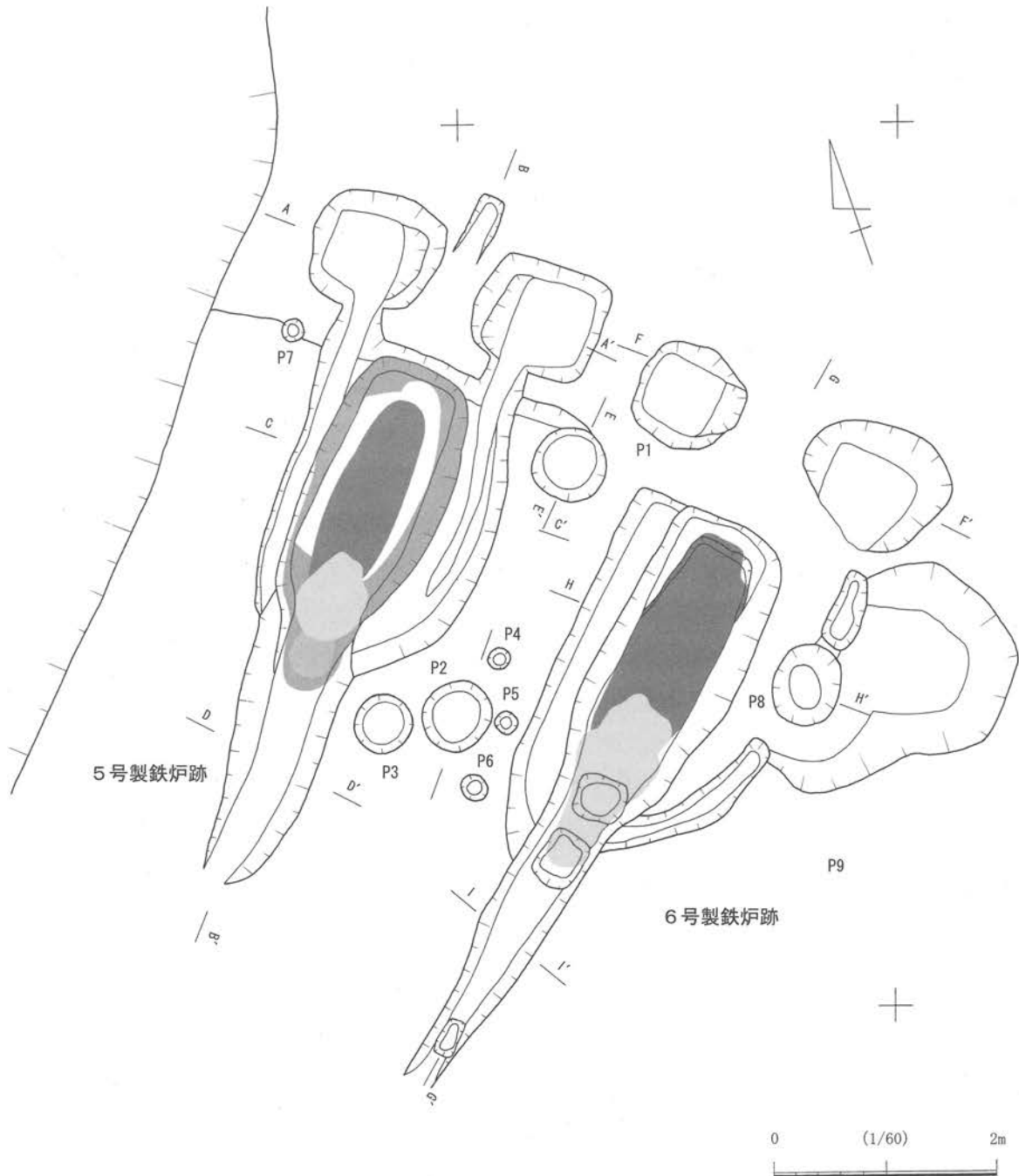


図32 5・6号製鉄炉跡

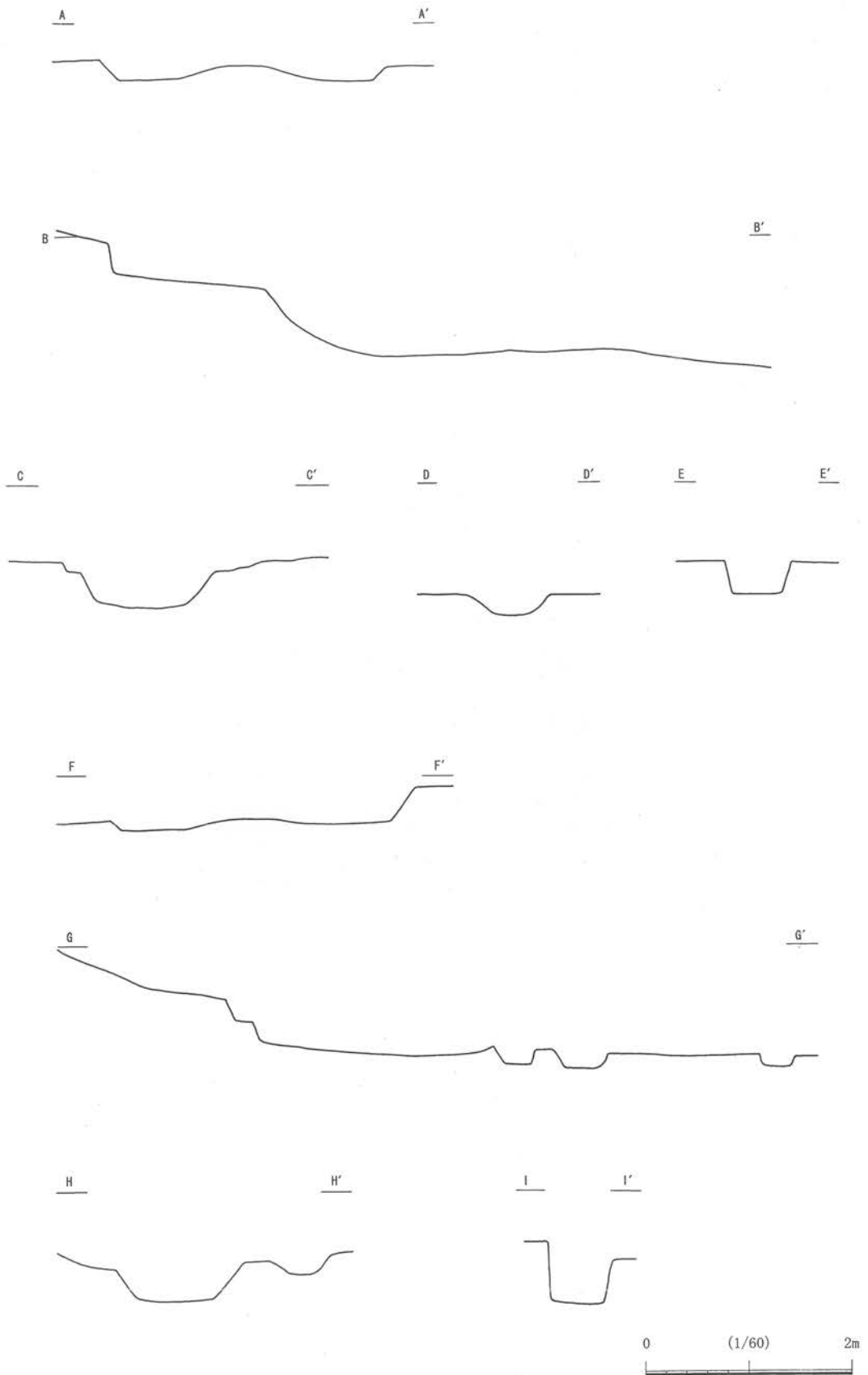


図33 5・6号製鉄炉跡断面

作業場は、炉本体部の周囲が削平された平場である。炉本体部が位置する部分と、斜面上位の踏みフイゴ掘方が位置する部分との間には高さ 45 cmほどの段差があり、この段差より上位は緩やかな斜面となっている。踏みフイゴ掘方は、炉本体部周辺に作業場を造り出した際、斜面上位側に形成された緩やかな法面に掘り込まれたものとも考えられる。

5号製鉄炉跡は、遺構検出段階では炉跡上部に堆積した焼土・黒色土のプラン、およびそこから斜面下位側へ向かって溝状に伸びる焼土ブロック主体層のプランが確認された。これを操業廃棄後に堆積した炉底上部の堆積層および廃滓溝のプランと判断し、土層観察用のベルトを残して掘り下げを行った。掘り下げの結果、下層から還元して焼け締まった黒灰色の還元粘土範囲が確認され、これを最終操業段階の炉底と判断した。炉底は舳先を斜面上位側に向けた船底形で、長軸 3.0m×幅 0.89mの規模である。また、炉底の下端に接して鉄滓集中範囲が確認され、炉内から排出された流出滓と判断した。流出滓が溜まった部分から斜面下方へ向かって、最大幅 89 cm×深さ 20 cmの廃滓溝が約 2.3m伸びる。黒灰色の還元粘土である炉底の下層には、灰白色粘土の薄い堆積層が認められ、その下層に灰褐色粘土層が確認された。炉掘方は、長軸 3.15m×短軸 1.25mの胴張り隅丸長方形である。深さは 40 cm前後で、断面形は皿状である。掘方内は、底面・壁ともに強く被熱しているため、掘方が作られた際に空焚きが行われたものと推定される。なお、流出滓が溜まった部分にも若干の被熱が認められるが、廃滓溝内までは及んでいない。

踏みフイゴ掘方は炉底の北約 1 mの位置に掘り込まれている。検出段階では東西に並ぶ方形の掘り込みとして確認した。覆土は暗褐色土で、西側（向かって左側）の掘り込みは焼土を多く含む。掘り上がりの形状は、東西 1.2m×南北 94 cm×深さ 25 cmの方形の掘り込みが約 50 cmの間隔をあけて東西に2つが並び、両者間の地山は掘り残されている。掘り込みの壁は、四辺のうち炉の中軸に近い側の壁それぞれが緩やかな傾斜をもち、斜面上位側、下位側および外側にあたる部分は垂直に掘り込まれている。底面は平坦である。東西に並ぶ掘り込みは、踏みフイゴの踏み板を受けた掘方と考えられる。斜面下位側の壁からは、炉本体部が位置する斜面下位側へ向かって幅 40 cm前後の溝がそれぞれ伸びており、送風溝と考えられる。溝底面は踏みフイゴ掘方の底面から連続し、炉本体が位置する作業場内では炉掘方の側壁に接するように伸びるが、炉掘方の下端では途切れる。また、地山が掘り残された踏みフイゴ掘方中央部の部分には、軸木を据えたと推定される箱状の軸受けが掘り込まれている。

6号製鉄炉跡は、先述した作業場内において、遺構検出段階で炉跡上部に堆積した焼土、黒色土による船底形のプラン、およびそこから斜面下位側へ向かって溝状に伸びる焼土ブロック主体層による廃滓溝のプランとして確認された。これらの堆積土を炉跡の最終段階の操業に伴う上部堆積層と判断し、土層観察用ベルトを残して掘り下げを行った結果、その下層から、還元して焼け締まった黒灰色の還元粘土範囲が確認され、これを最終操業段階の炉底と判断した。炉底は、長軸 2.36m×短軸 0.8mの長楕円形である。また、炉底の下端部付近では、焼土が集中する範囲が確認された。焼土層は鉄滓やフイゴ羽口を含み、一部は炉底下端を覆う。炉掘方は、斜面上位側の辺と両側辺が直線的な隅丸長方形であるが、斜面下位側はそのまま廃滓溝へ

と接続する。規模は長軸 3.2m×短軸 1.28m×深さ 0.3mで、断面形は皿状ないしU字形である。斜面上位側の底面に一部段が認められる。炉掘方から廃滓溝へと移行する部分には、小規模なピット2基が掘り込まれている。廃滓溝は幅 0.6m×深さ 0.5mで、斜面下方へ向かって約 2.2m伸びている。掘方内は全面に被熱が認められるが、中央部が特に強く被熱している。

踏みフイゴ掘方は、炉本体の北約 1mの位置に掘り込まれている。検出段階では東西に並ぶ方形の掘り込みとして確認した。掘り上がりの形状は、踏み板を受けたと推定される方形の掘り込みが約 0.7mの間隔をあけて東西に2基並び、両者間の地山は掘り残されている。斜面下位側から向かって左側の掘り込みは東西 0.98m×南北 0.96mの方形で、壁は四辺のうち炉の中軸に近い側の壁は緩やかな傾斜をもち、斜面上位側、下位側および外側にあたる部分は垂直に掘り込まれている。底面は平坦である。向かって右側の掘り込みでは、斜面下位側の壁は検出されなかったが、底面の形状から、やはり方形を基調としたものと考えられる。なお、炉掘方の左側壁に接して幅 0.4mほどのテラス状の掘り込みが認められた。また、炉右側の作業場においても、緩くカーブし下端で炉掘方へ接続する幅 34cmほどの溝が認められた。これらは踏みフイゴから炉壁に装着されたフイゴ羽口へと送風を行うための送風溝を意図した掘り込みと推定されるが、いずれも炉掘方の上端付近で途切れ、踏みフイゴ掘方までは連続しない。

その他の遺構としては、9基のピットを検出した。このうちP1は径 66cm×深さ 35cmの円形のピットで、覆土は暗褐色土である。P2は径 66cm、P3は径 54cmの円形で、どちらも覆土は焼土ブロックを主体とする暗赤褐色土である。P4は径 20cm、P5は径 20cm、P6は径 22cm、P7は径 22cmと比較的小規模な円形のピットである。6号製鉄炉跡の炉跡東側に位置するP8は径 74cmの円形で、通風溝と重なる位置に掘り込まれており、本遺構に伴う時期かは不明である。P9は6号製鉄炉跡の東側に位置する土坑状の掘り込みである。先述したように、本製鉄炉跡では、炉本体部周辺の一定の範囲が削平されて作業場となっているが、P9はその外側の斜面に掘り込まれており、作業場のある西側へ向かって開く形態となっている。

(藤木)

1号廃滓場

遺 構 (図 34 : 図版 31~39)

1号廃滓場が立地する地形は、北西方向から大きく入り込んだ開析谷の先端に形成された谷頭付近であり、谷の東側に発達した丘陵の西向き斜面、標高 29~35mの地点に位置している。先述した3~6号製鉄炉跡のうち、3・4号製鉄炉跡は同一斜面の上位側、5・6号製鉄炉は本廃滓層の下層に位置する。

表面調査の際に、丘陵斜面に貼りつくように形成された塚状の高まりとして残る廃滓場を確認していたため、発掘調査では手掘りにより表土除去を行った。廃滓層の掘り込み調査に際しては、地形や斜面上位の炉跡の位置を考慮して土層観察用のベルトを設定し、ベルトを境にA~Fの6地区に分割して掘り下げ、遺物は地区ごとに取り上げた。

先述したように本遺構は、斜面上位に形成された3~6号製鉄炉跡の操業に伴う廃滓場であ

るが、廃滓層を平面的に捉え、個々の炉跡に対応させることはできなかつたため、ここでは主に土層の堆積状況について記述することとする。

土層は、廃滓層の範囲に縦横に設定したセクションベルトで観察した。ベルトは、東西に長い廃滓場の長軸に合わせて縦断するセクション(西からA-A'(以下Aライン)、B-B'(以下Bライン)、C-C'(以下Cライン))、廃滓範囲の西寄りを南北方向に横断するD-D'(以下Dライン)、東寄り南半部を横断するE-E'(以下Eライン)、北半部のF-F'(以下Fライン)に分かれる。これらの各セクションにより観察された土層は互いに連続するものであるが、連続する同一の層であっても、部分によって細分が可能な場合や、鉄滓や土砂の混入状況、混入する滓の大きさなどが異なる場合がある。

廃滓層を東西に縦断するCラインでは、堆積層を1~25層に分層でき、比較的細かい層の堆積を把握することができる。

大きくは1~6・17~20層、7・8・12~15層、21・22層、23~25層というように、堆積の単位を捉えることができる。

1~6、17~20層は、鉄滓主体層、暗褐色土主体層、粘土主体層に分かれ、間に薄い木炭層がレンズ状に堆積している。このうち最も下位に位置する20層と、その上層に薄い木炭層を挟んで堆積した19層は地山相当の粘土層であり、製鉄炉の構築時の排土と考えられる。その上部には、製鉄炉の操業に伴う廃棄物堆積層と推定される鉄滓主体層(1・3・6・17~18層)および鉄滓を多く含む暗褐色土主体層(2・4層)が堆積している。17層と4層との間にも薄い木炭層が挟まる。この木炭層の成因については不明であるが、B・Fラインにも見られ、製鉄炉跡の操業における何らかの工程に伴って生じた木炭の堆積層と推測される。また、4・6層の間に挟まってレンズ状に薄く堆積する5層は、地山相当の粘土層であり、少量の堆積であることから、製鉄炉の小規模な改修に伴う排土と考えられる。以上の層は、連続する堆積状況を示しており、下層に位置する7・21層との間に明らかな摂理面がある。

7・8・10層は、いずれも焼土主体の層で、鉄滓は少量が混入しているに過ぎない。その下には、粘土と鉄滓の混合土である12・13層が堆積している。14層は炉壁主体の層である。

21層は炭化物と焼土主体の層で、4号製鉄炉付近から連続するFライン5層に対応する。先述した22層は焼土主体の暗赤褐色土で、炭・粘土・鉄滓を含む。

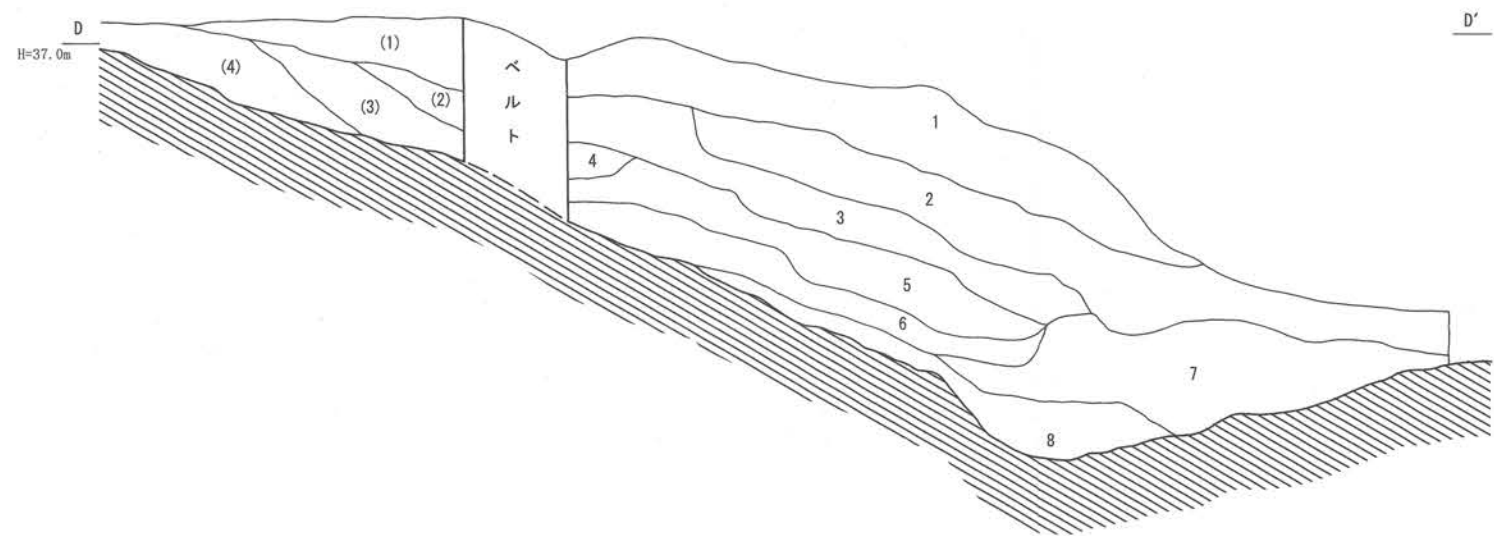
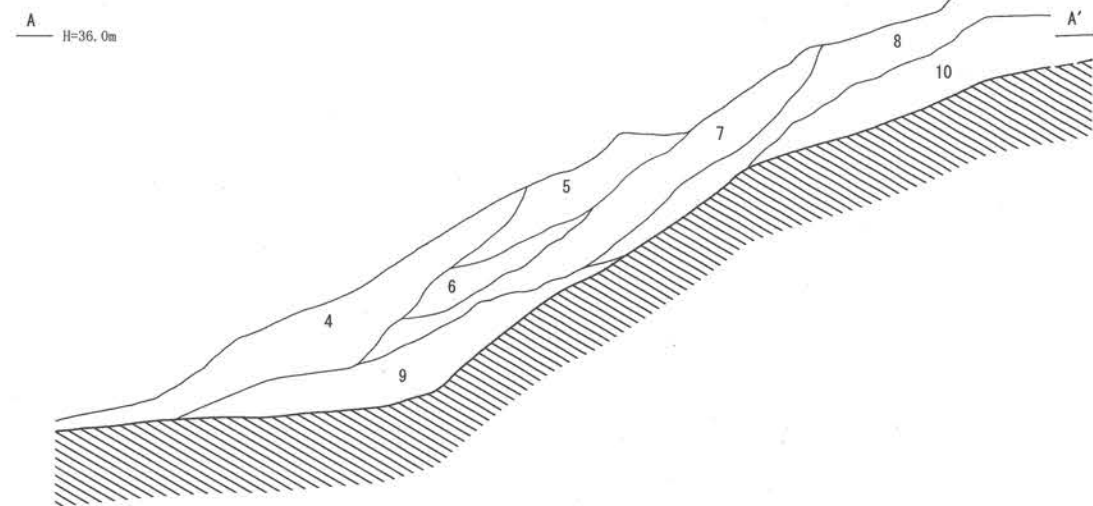
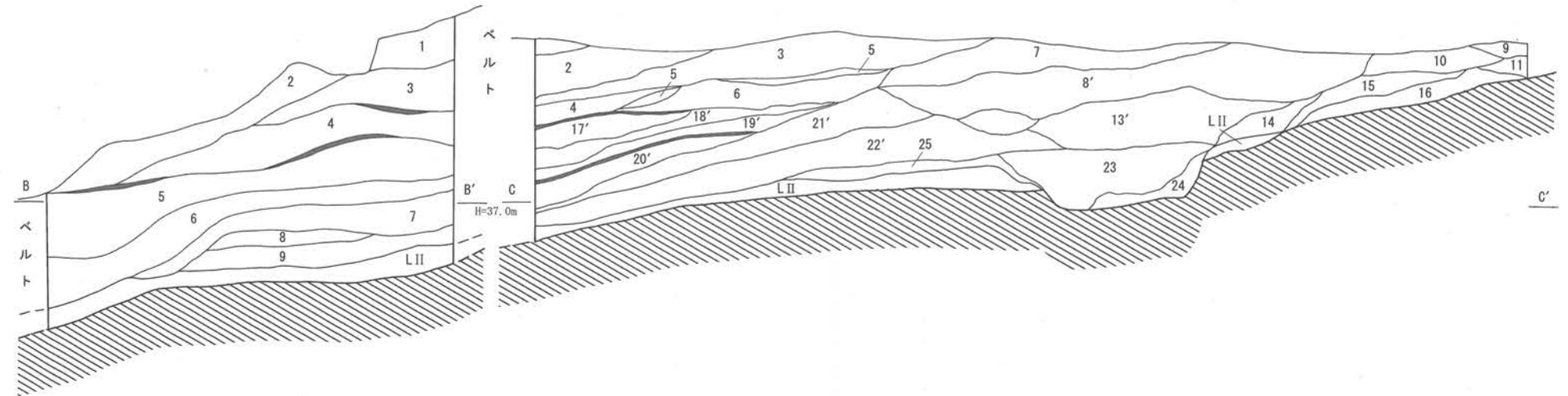
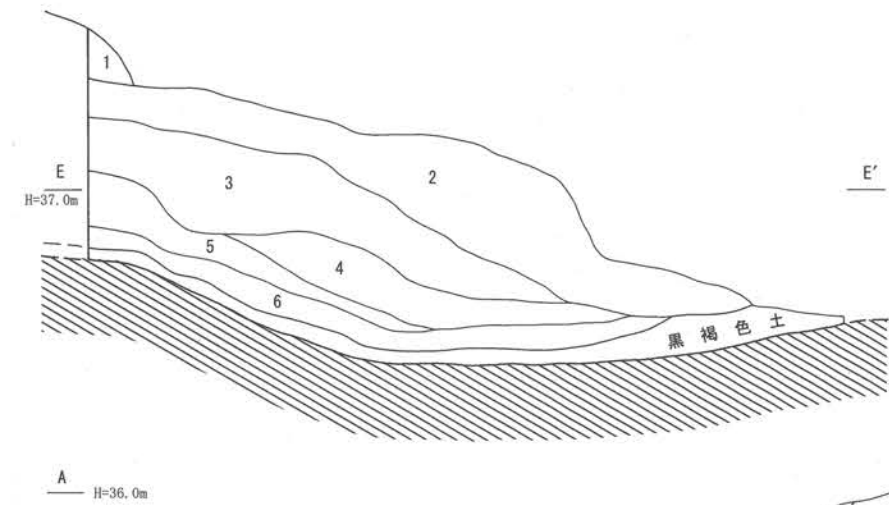
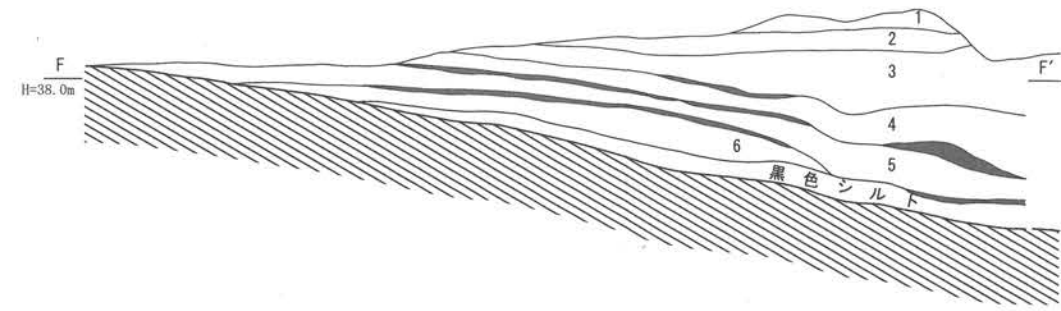
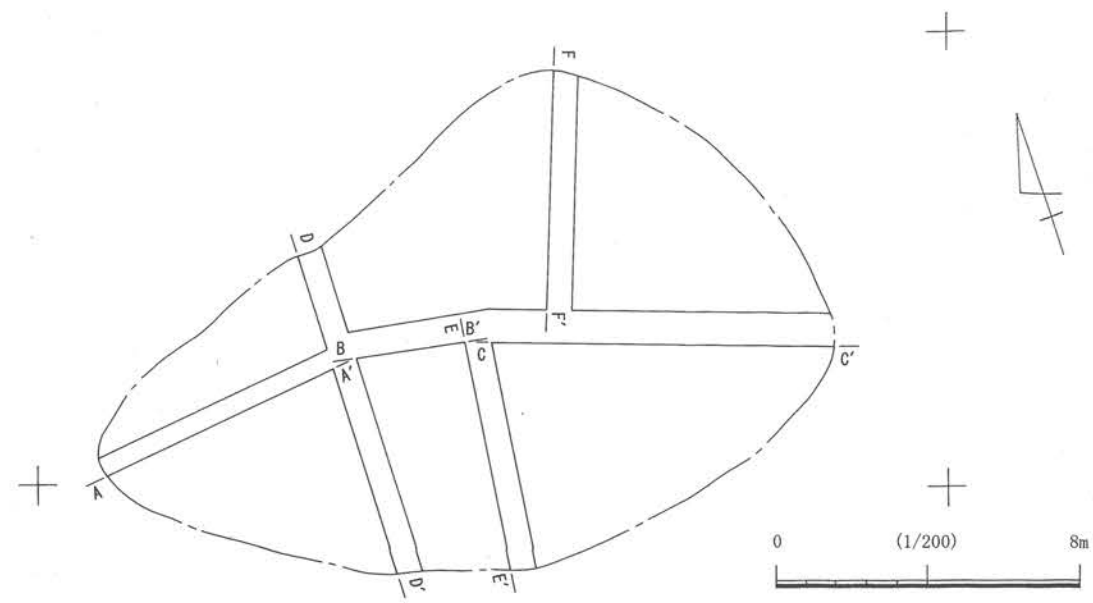
Cライン中央部には、土坑状の落ち込みが見られ、鉄滓・炉壁を含む焼土主体の23層、粘土主体の24層が落ち込み内に堆積している。

A・Bラインは、Cラインに連続する斜面下位側のセクションである。観察された土層は、Cライン1~6、17~20層とした鉄滓主体層、暗褐色土主体層、粘土主体層が斜面下位側へ向かって流出した状況を示しており、いずれも製鉄炉操業時の廃棄物堆積層や、構築時排土と考えられる。全体としてみれば、斜面上位のCラインに比べると層の細かい堆積は示さない。また、鉄滓の混じる暗褐色土主体の層が多く、純粋な鉄滓層は見られないことから、炉内から排出された鉄滓層が、斜面下位側へ流出していく過程の中で土砂と混ざり合ったことによって形成されたと考えられる。また、斜面下位に位置する土層の方が、拳大ほどの大型の滓や炉壁を

含む傾向にある。なお、Bラインでは、構築時排土と推定されるCライン19・20層に連続する7層が確認できるが、その下層に位置するBライン8・9層は鉄滓主体層であり、7層に伴う炉構築以前に、製鉄炉の操業があったことを示す。

Fラインは、Cラインよりも斜面上位に位置しているため、4号製鉄炉付近からの排滓層の堆積状況が観察できる。1・3層は鉄滓層、2・4層は地山相当の粘土主体層で、製鉄炉の操業に伴う廃滓層と、製鉄炉に関連する施設の構築、改修に伴うと推定される廃土が互層になっている。また、5層は焼土・炭を多量に含む黒褐色土層で、Cライン21層に対応する。最下層の6層は粘土ブロックを含む暗褐色土である。この粘土ブロックは製鉄炉構築時に生じたものであろう。なお、3～6層の間にはそれぞれ木炭層が薄く堆積している。Dラインは廃滓範囲を南北方向に横断するセクションである。上層部には拳大ないし比較的大型の滓を含む暗褐色土、茶褐色土廃棄物堆積層が見られ、下層部に構築時排土と推定される粘土主体層が堆積している。粘土主体層にも比較的大型の滓が含まれる。

A-A'	B-B'
1 黄褐色土 鉄滓含	1 こぶし大滓
2 暗褐色土 鉄滓大 焼土粒状 炭多	2 暗褐色土 こぶし大滓入る
3 黄褐色粘土 焼土・炭細	3 暗褐色土 焼土多
4 暗褐色土 鉄滓こぶし大～大	4 暗褐色土 焼土多
5 暗褐色土 鉄滓・炉壁・炭大含	5 暗褐色土 粘土・こぶし大滓
6 黄褐色土 炉壁・炭・焼土含	6 暗褐色土 粘土多
7 暗褐色土 炉壁こぶし大 炭・焼土粒状	7 粘土
8 茶褐色土・黄褐色土混合土 炉壁 鉄滓大	8 サビのある細かい滓
9 暗褐色土茶褐色土混合土 鉄滓こぶし大 炭・焼土含	9 大きい滓
10 暗褐色土黄褐色土混合土 炉壁 炭大	
C-C'	
1 鉄滓 小石～こぶし大 流出滓	15 黄褐色粘土層
2 暗褐色土 小鉄滓 焼土 炭	16 鉄滓層 サビあり
3 鉄滓 細かくサビが多い	17 混粘土鉄滓層 細かくサビが多い
4 暗褐色土 小鉄滓 焼土 炭	18 鉄滓 細かくサビが多い 炭多
5 粘土層	19 粘土層 炭・焼土混ざる
6 混木炭鉄滓層 小石大でサビのあるもの	20 粘土層
7 赤褐色土層 焼土多 炭少	21 炭と赤褐色土層の互層
8 暗褐色土層 焼土多 炭7層より多	22 赤褐色土層 焼土多 炭・粘土・鉄滓含
9 鉄滓 小石大でサビのあるもの	23 暗赤褐色土 鉄滓・炉壁含
10 暗赤褐色土層 焼土多 鉄滓少	24 粘土層 炉壁含
11 混粘土鉄滓層 滓はサビあり	25 粘土層 焼土含
12 混粘土鉄滓層 流出滓	26 暗褐色土 焼土・炭含
13 混粘土赤褐色土層 炭少・焼土粒多	27 黒褐色土 炭少
14 炉壁層	
D-D'	E-E'
1 暗褐色土 鉄滓こぶし大 焼土粒状 炭細	1 暗褐色土 こぶし大滓入る
2 茶褐色土 鉄滓 焼土粒状 炭大	2 暗褐色土 焼土多
3 暗褐色土 鉄滓大 焼土粒状 炭多	3 暗褐色土 焼土多
4 黄褐色粘土 鉄滓こぶし大 焼土細 炭細	4 炉壁・鉄滓
5 茶褐色土 鉄滓 焼土 炭細	5 粘土
6 黄褐色土茶褐色土混合土 鉄滓大 炉壁 焼土 炭細	6 暗褐色土 焼土・炭・粘土多
7 暗褐色土 鉄滓大 炉壁大	
8 黄褐色粘土 鉄滓こぶし大 炉壁	
F-F'	
1 鉄滓 流出滓	4 粘土層
2 粘土層	5 黒褐色土層 焼土・炭多
3 鉄滓 (サビ)	6 暗褐色土層 粘土ブロック多



■ = 木炭層

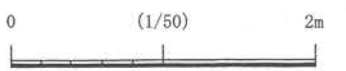


図34 1号廃滓場

Eラインは廃滓範囲の南半を南北に横断するセクションである。上層部は暗褐色土で1層には拳大の滓、2・3層には焼土が多量に含まれる。下位に堆積した4層は炉壁、鉄滓主体の層である。5層は粘土主体の層で、構築時の排土と考えられる。

先述したように、平面から廃滓層を斜面上位の製鉄炉跡それぞれに対応させることは不可能であった。断面観察によっても、各製鉄炉の作業単位は峻別することは困難である。ただし、Fラインは、4号製鉄炉跡付近から廃滓場へと連続するセクションであり、5号製鉄炉を覆っていること、これらの土層は3・4号製鉄炉の構築時廃土および廃棄物堆積層と考えられる。これらの下層に位置し明確な摂理面を形成するCライン7・8・12～15層、21・22層、23～25層は、5・6号製鉄炉の作業に伴う廃滓場と推定される。

21層以下、およびBライン8層以下は、3・4号製鉄炉の構築時廃土の下層に位置し、3・4号製鉄炉構築以前、すなわち5・6号製鉄炉跡の作業に伴う可能性が高い。

(藤木)

出土遺物 (図 35-1 ~ 48-180 : 図版 101-1 ~ 111-180)

出土した羽口のうち図示したものは180点である。図示した羽口の大半は蛭沢A遺跡群A地区1号廃滓場からの出土である。先述したが1号廃滓場の上部には3～6号製鉄炉の4基の製鉄炉が構築されており、廃滓場の数は製鉄炉の数とは対応しない。従って1号廃滓場は3～6号製鉄炉の各製鉄炉によって形成された可能性が高い。つまり1号廃滓場から出土した羽口には3～6号製鉄炉の各製鉄炉跡で使用された羽口が混入している可能性が高い。

図 35-1 は吸気部内径約 7.0 cm、先端内径 4.2 cm、最大長 14.8 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く。羽口の内面形はほぼ円筒形であるが、吸気部から約 3.5 cm 付近で強く開くために断面形はラップ形となる。先端部には溶着滓が見られる。

同図 2 は吸気部内径 6.9 cm、先端内径 3.0 cm、最大長 13.2 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって強く開き、断面形はハの字形となる。内面形状は先端部から吸気部に向かって緩やかに開き、さらに吸気部から約 3 cm 付近で強く開くためにラップ形となる。先端部には溶着滓が見られる。

同図 3 は吸気部内径 5.2 cm、先端径 3.6 cm、最大長 10.0 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって開き、内面形状は吸気部から約 2 cm 付近で強く開くためにラップ形となる。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。炉壁材にはスサの混入が認められ、板状に整えられた炉壁の上面に羽口を据え、羽口上面にはスサ入り粘土を充填する様子が観察される。

同図 4 は吸気部内径 5.1 cm、先端内径 3.2 cm、最大長 10.3 cm である。羽口外形は先端から緩やかに開いて吸気部に向かうために断面形はハの字となるが円筒形に近い。内面形状は先端部付近では円筒形であるが、吸気部付近から約 3.5 cm 付近で外方に強く開くためにラップ形となる。外面には多量の溶着滓が付着しており、炉壁も確認される。残存している炉壁はスサ入り粘土で羽口上部を被っている。

同図 5 は吸気部内径 4.5 cm、先端内径約 3.0 cm、最大長 15.0 cm である。羽口外形は先端から直線的に開いて吸気部へ向かう。一部には外方に強く開く部分。内面の形状は先端部から直線

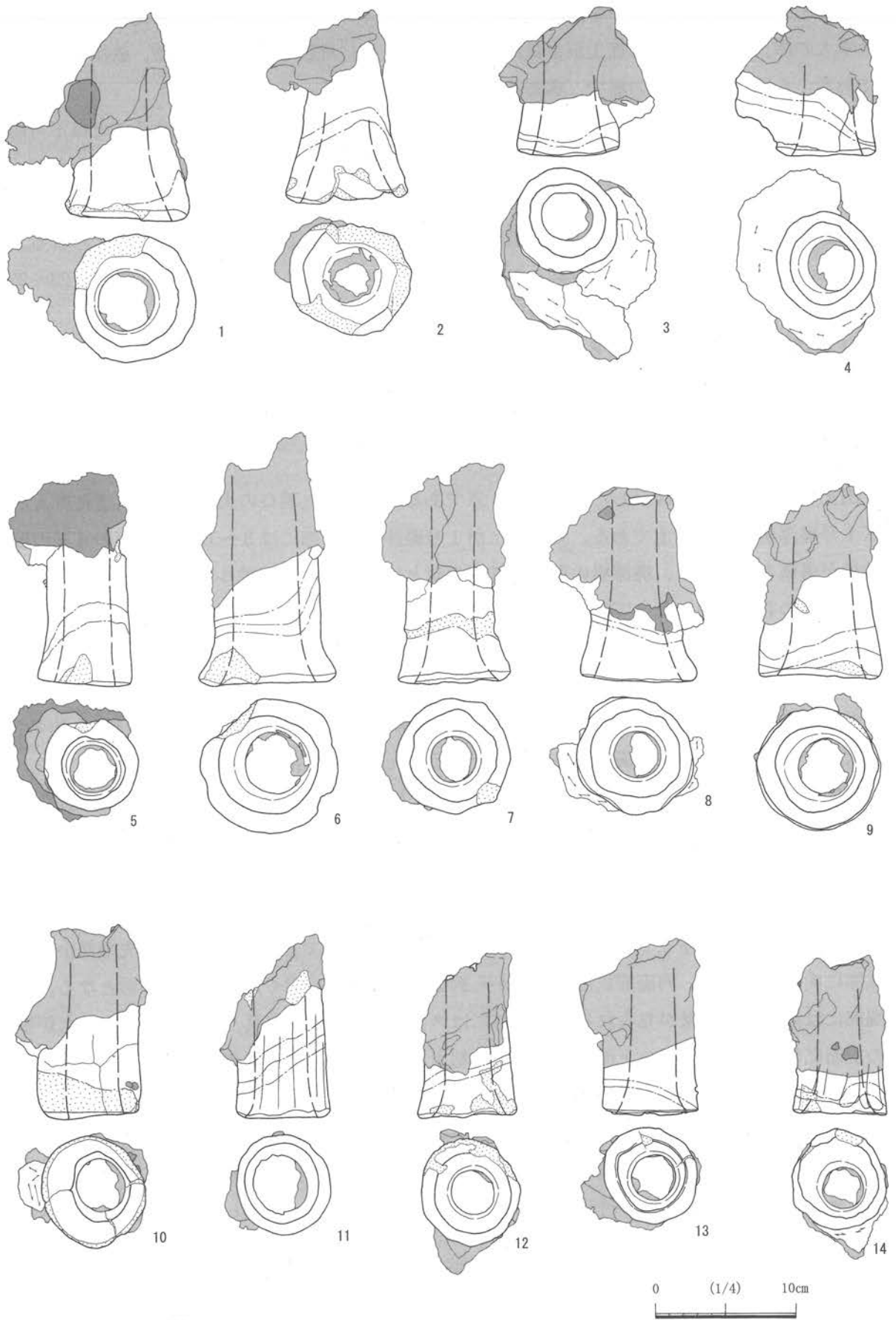


图35 羽口 (1)

的に吸気部に向かう円筒形である。外面の先端部付近には多量の溶着滓が残存し、溶着滓からは多量の鉄錆が発生している。

同図6は吸気部内径7.0 cm、先端部内径4.5 cm、最大長17.6 cmである。羽口外形は先端部からハの字に開いて吸気部に向かい、吸気部から約2.5 cm付近で強く開くためにラップ形となる。内面形状は外形と同様に先端部からハの字に開いて吸気部へ向かい、吸気部から約2 cm付近で強く開くため断面形はラップ形となる。先端部外面には鉄滓の溶着が見られる。

同図7は吸気部内径6.2 cm、先端部内径は2.9 cm、最大長15.2 cmである。羽口外形は先端部からハの字に開いて吸気部へ向かい、吸気部から約3.5 cm付近で強く開くために断面形はラップ形となる。内面形状は先端部付近では円筒形であるが、吸気部から2.5 cm付近で外方に向かって開くためにラップ形となる。先端部外面には鉄錆を含む溶着滓が見られる。

同図8は吸気部内径6.5 cm、先端部内径は3.5 cm、最大長13.6 cmである。羽口外形は先端部から吸気部に向かって弱く開き、吸気部から2.5 cm付近で強く開くために断面形はラップ形となる。内面形状も先端部から弱く開いて吸気部に向かい、吸気部から2.5 cm付近で強く開くために断面形はラップ形となる。先端部には溶着滓が見られ、所々に鉄錆が発生している。当資料の大きな特徴は胎土にある。他の資料は比較的混入物の少ない良質の粘土を用いているのに対して、当資料の羽口胎土には5mm前後の粒子の粗い砂が混入している。

同図9は吸気部内径6.3 cm、先端部内径4.0 cm、最大長13.4 cmである。羽口外形は先端部からハの字に開いて吸気部に到達する。内面形状は先端部から緩やかに開きながら吸気部に向かい、吸気部から約2.7 cmで強く開くために断面形はラップ形となる。先端部の外面には溶着滓が付着しており、所々には鉄錆が見られる。

同図10は吸気部内径4.7 cmの歪んだ円形、先端部内径3.7 cmの楕円形である。最大長は13.0 cmである。羽口外形ならびに内形ともに先端部から吸気部に向かってハの字に開く。先端部には多量の溶着滓が付着している。また当資料の特徴は羽口の厚さが一定ではない点にある。

同図11は吸気部内径5.3 cm、先端部内径3.7 cm、最大長12.7 cmである。羽口外形は先端部からほぼ円筒形に近い形状で吸気部に到達し、外面には縦方向のケズリが施されるため器面に稜が形成されている点は特徴的である。内面形状は、先端部からほぼ円筒形のまま吸気部に向かい吸気部から1.7 cm付近で弱く開く。先端部には溶着滓が見られる。

同図12は吸気部内径5.7 cm、先端内径3.3 cm、最大長11.5 cmである。羽口外形は先端部から弱く開きながら吸気部へ向かう。断面形は吸気部の一部では強く開く部分もあり不均整なラップ形となる。内面形状は先端部から円筒形のまま吸気部に向かい吸気部から2.0 cm付近で開きが強くなるため、断面形はラップ形となる。先端部には溶着滓が見られる。

同図13は吸気部内径5.1 cm、先端部内径2.8 cm、最大長12.0 cmである。羽口外形は先端部から吸気部に到達するまで大きく変換しない円筒形である。外面には縦方向のケズリが施されている。内面形状は円筒形で吸気部から1.7 cm付近で弱く開くために断面形はラップ形となる。先端部には溶着滓が見られる。

同図14は吸気部内径5.5 cm、先端内径3.5 cm、最大長11.4 cmである。羽口外形は先端部か

ら吸気部に向かってハの字に開く。内面形状は吸気部から 2.5 cm 付近で開くために断面形はラッパ形となる。先端部には溶着滓が見られる。

図 36-15 は吸気部内径 4.9 cm、先端部内径 3.0 cm、最大長 10.5 cm である。羽口外形は吸気部付近では開き気味であるものの円筒形と分類した。内面形状では先端部付近では円筒形で吸気部から 1.7 cm 付近で開くため断面形はラッパ形となる。先端部には溶着滓が見られる。

同図 16 は吸気部内径 5.4 cm、先端部内径 3.2 cm、最大長 9.5 cm である。羽口外形は吸気部に向かって強くハの字に開く。内面形状は先端部付近では円筒形であるが、吸気部から 1.7 cm 付近で弱く開くためラッパ形となる。先端部外面には溶着滓が付着する。また吸気部付近には炉壁が残存している。

同図 17 は吸気部内径 5.2 cm、先端部内径 3.7 cm、最大長 7.2 cm である。羽口外形はハの字に開いたまま吸気部に到達する。内面形状はハの字に開きながら吸気部へ向かい、吸気部から 1.7 cm 付近で弱く開くためにラッパ形となる。先端部には鉄滓が付着し、炉壁が残存している。

同図 18 は吸気部内径 6.0 cm、先端部内径 3.3 cm、最大長 8.0 cm である。羽口外形は先端部から強くハの字に開いて吸気部に向かい、吸気部端部付近では強く外反するため断面形はラッパ形となる。器面には縦方向のケズリ若しくはナデが施される。内面形状は外形同様にハの字に開いて吸気部に向かい、吸気部から 2.2 cm 付近で強く開くために断面形はラッパ形となる。先端部には多量の溶着滓が見られ、炉壁が残存する。

同図 19 は吸気部内径 4.9 cm、先端部内径 3.5 cm、最大長 12.1 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって弱く開く。内面も同様に、内外面ともに断面形はハの字形となる。外面には縦方向のケズリが施される。先端部には溶着滓と炉壁が残存している。

同図 20 は吸気部内径 5.9 cm である。先端部内径は溶着滓により正確な値を求められないが 3.0 cm 以上であると思われる。最大長も溶着滓の影響で正確な値ではないものの 11.5 cm 前後である。羽口外形は先端部から直線的に吸気部に向かって開くために断面形はハの字となり、内面形状は吸気部から 2.2 cm 付近で強く開くためにラッパ形となる。先端部外面には鉄滓が溶着し、炉壁が残存する。なお、当資料の特徴は、吸気部端部にスタレ状の圧痕が認められる。

同図 21 は吸気部内径 5.7 cm の歪んだ円形、先端部内径は 3.2 cm の円形である。最大長は 8.9 cm である。羽口の外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く。外面には縦方向のナデが施される。内面形状は先端部から弱く開きながら吸気部に到達し、吸気部から 2.2 cm 付近で強く開くために断面形はラッパ形となる。先端部には溶着滓と炉壁が残存している。

同図 22 は吸気部内径 6.4 cm、先端部内径 3.8 cm、最大長 13.0 cm である。羽口外形は円筒形に近い形状を有するが吸気部付近で弱く外反するためラッパ形となる。内面についても同様に、先端部付近は円筒形であるが吸気部から約 1.4 cm で外反するために断面形状はラッパ形となる。先端部には溶着滓が付着する。

同図 23 は吸気部内径 4.5 cm の楕円形、先端部内径 3.1 cm、最大長は 11.5 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字、内面形状も先端部から吸気部に向かってハの字の開く。外面には溶着滓が見られる。当資料の特徴に吸気部端部の器厚が一定でない点がある。

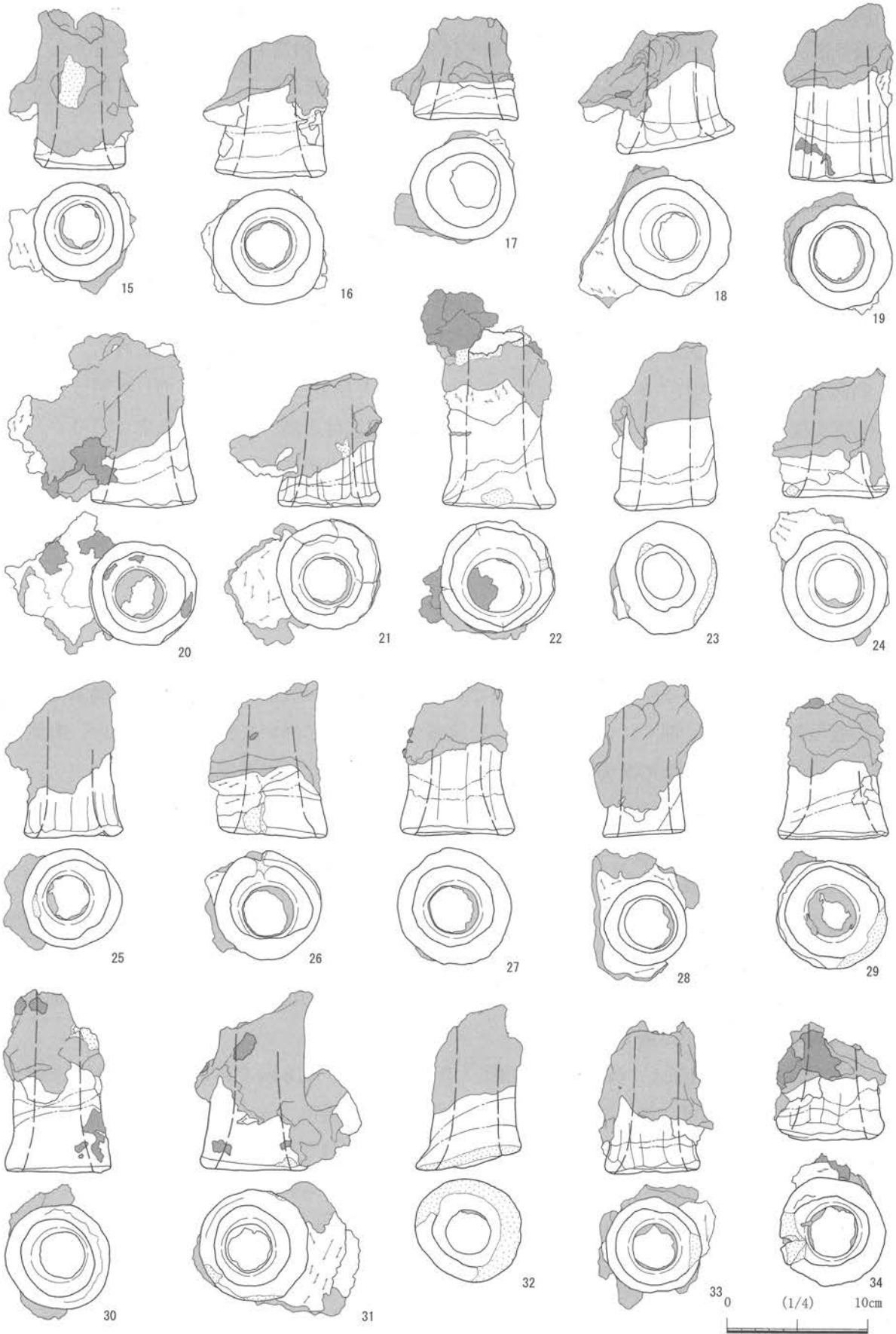


图36 羽口 (2)

同図 24 は吸気部内径 5.7 cm、先端部内径 3.2 cm、最大長 8.5 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く。内面形状では先端部付近は円筒形であるが、吸気部から 2.1 cm 付近の横位ナデにより強く外反するために断面形はラップ形となる。先端部には鉄滓の溶着が著しく炉壁が残存する。

同図 25 は吸気部内径 5.7 cm、先端部内径 3.0 cm、最大長 10.7 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く。内面形状は先端部から吸気部上部までは円筒形で、吸気部から 1.9 cm 付近で弱く開くために断面形はラップ形となる。先端部には溶着滓が付着する。

同図 26 は吸気部内径 5.6 cm、先端部内径 3.4 cm、最大長 10.8 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く。内面形状は先端部から弱く開いて吸気部に向かい、吸気部付近で強く開くため断面形はラップ形となる。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 27 は吸気部内径 5.8 cm、先端部内径 3.7 cm、最大長 10.5 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く。内面形状では先端部付近は円筒形で吸気部に近づくと弱く開くために断面形はラップ形となる。吸気部外面は縦位ナデによって整えられ、先端部には溶着滓が付着する。

同図 28 は吸気部内径 4.1 cm、先端部内径 3.7 cm、最大長 10.8 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く。内面形状も先端部から直線的に開いて吸気部に到達する。外面には多量の溶着滓と炉壁が残存する。

同図 29 は吸気部内径 6.3 cm である。先端部内径は溶着滓のため正確な値を求めることはできないが 2.7 cm 以上である。最大長は 9.1 cm である。外面形状は先端部から円筒形に吸気部に向かい吸気部付近で弱く開く。内面形状は、先端部から緩やかに開いて吸気部に向かい、吸気部端部では強く外反するため断面形はラップ形となる。先端部には溶着滓が付着する。

同図 30 は吸気部内径 5.5 cm、先端部内径 3.0 cm、最大長 13.0 cm である。羽口外形は先端部から直線的に開いて吸気部に向かう。内面形状は先端部から弱く開いて吸気部に向かい、吸気部から 2.5 cm 付近で強く開くために断面形はラップ形となる。外面には溶着滓が見られる。

同図 31 は吸気部内径 5.4 cm、先端部内径 3.2 cm、最大長 12.2 cm である。羽口外形は先端部から直線的に吸気部に到達するために断面形はハの字形となる。内面形状は吸気部に向かってハの字に開き、吸気部から 2.0 cm 付近で強く開くために断面形はラップ形となる。先端部の外面には溶着滓と炉壁が付着している。

同図 32 は吸気部内径 4.7 cm、先端部内径 3.0 cm、最大長 10.8 cm である。羽口外形は先端付近では円筒形であるが、吸気部付近で強く開くために断面形はラップ形となる。内面形状も先端部付近では円筒形で、吸気部付近で強く開くため断面形はラップ形である。先端部には溶着滓が見られる。

同図 33 は吸気部内径 5.3 cm、先端部内径 3.2 cm、最大長 10.2 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く。内面形状は先端部から吸気部に向かって弱く開いて吸気部端部に到達する。先端部に溶着滓が見られる。

同図 34 は吸気部内径 4.7 cm、先端部内径 3.7 cm、最大長 6.6 cm である。羽口外形は先端部か



図37 羽口 (3)

ら直線的に開いて吸気部に向かうために断面形はハの字となる。内面形状は先端部から弱く開いて吸気部に向かい、吸気部から 1.9 cm 付近で強く開くために断面形はラッパ形となる。先端部には溶着滓が見られる。

図 37-35 は吸気部内径 5.3 cm、先端部内径 3.1 cm、最大長 11.4 cm である。羽口外形は先端部から緩やかに開いて吸気部に向かうために断面形はハの字形となる。内面形状も同様に先端部から吸気部に向かってハの字に開く。先端部には溶着滓が見られる。

同図 36 は吸気部内径 6.3 cm、先端部内径 3.6 cm、最大長 11.5 cm である。羽口外形は吸気部から直線的に開くため断面形はラッパ形となる。内面形状は先端部付近では円筒形で吸気部付近から開くために断面形がラッパ形となる。先端部には溶着滓が見られる。

同図 37 は吸気部内径 5.5 cm、先端部内径 3.1 cm、最大長 8.7 cm である。羽口外形は先端部から直線的に開いて吸気部に向かうために断面形はハの字形に近い円筒形となる。内面形状は吸気部付近では円筒形であるが、吸気部付近で弱く開くために断面形はラッパ形となる。先端部には溶着滓が見られる。

同図 38 は吸気部内径 6.0 cm、先端部内径 3.4 cm、最大長 12.2 cm である。羽口外形は吸気部に向かって弱く開き、吸気部付近で強く開くために断面形はラッパ形となる。内面形状は先端部付近では円筒形で、吸気部から 2.1 cm 付近で開きが強くなるために断面形はラッパ形となる。先端部外面には溶着滓が見られる。

同図 39 は吸気部内径 5.3 cm、先端部内径 3.7 cm、最大長 10.9 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く。内面形状は先端部では円筒形であるが吸気部から 1.5 cm で屈曲が変化するために短く開くラッパ形となる。当資料の形態的な特徴は先端部付近の器厚と吸気部付近の器厚に大きな差が認められる点にある。先端部外面には溶着滓が見られる。

同図 40 は吸気部内径 5.6 cm、先端部内径 2.8 cm、最大長 11.8 cm である。羽口外形は先端部から緩やかに開いて吸気部に向かうために断面形はハの字となる。外面には縦位ナデが施される。内面形状は先端部付近では円筒形、吸気部付近で強く開くために断面形はラッパ形となる。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 41 は吸気部内径 5.5 cm、先端部内径 3.6 cm、最大長 10.2 cm である。羽口外形は先端部から直線的に吸気部へ到達するために断面形はハの字となる。外面には縦位ナデが施され、ナデが終了する吸気部端部では弱く外反する。内面形状では先端部付近は円筒形で、吸気部から 1.7 cm で強く開くために断面形はラッパ形となる。先端部には溶着滓と炉壁が残存している。また当資料の特徴の一つに吸気部端部に棒状の圧痕が残る点がある。

同図 42 は吸気部内径 5.8 cm、先端部内径 3.3 cm、最大長 10.8 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって徐々に開き、吸気部端部では強く外反するために断面形はラッパ形となる。内面形状は先端部付近では円筒形で、吸気部から 1.5 cm 付近で強く開くために断面形はラッパ形となる。外面には縦位ナデが施され、吸気部内面には横位ナデ、外面にはケズリが施される。先端部外面には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 43 は吸気部内径 5.8 cm、先端部内径 3.4 cm、最大長 10.4 cm である。羽口外形は先端部

から緩やかにハの字に開き、吸気部端部で強く外反するために断面形はラップ形となる。内面形状は、先端部から吸気部までは円筒形を保持し、吸気部から2 cm付近で強く外反するために断面形はラップ形となる。外面には縦位ナデが施される。内面には吸気部付近に横位のナデが施される。先端部には溶着滓が付着している。

同図 44 は吸気部内径 5.5 cm であるが、先端部には多量の溶着滓が付着しており正確な値は不明である。計測可能な範囲から先端部内径 3 cm 前後、最大長 10.7 cm 前後であると思われる。形状についても溶着滓の影響により判然とし難いが、外形は先端部方向から吸気部に向かって直線的に開くと思われ、内形では先端部付近は円筒形、吸気部付近で弱く開くためにラップ形と思われる。先端部には溶着滓が見られる。

同図 45 は吸気部内径 5.9 cm の歪んだ円形、先端部内径 3.6 cm の円形である。最大長 9.6 cm である。羽口外形はハの字に開いて吸気部に向かい、吸気部に到達する手前で強く外反するために断面形はラップ形となる。内面形状も先端部からハの字に開いて吸気部へ向かい、吸気部手前で弱く開くために断面形はラップ形となる。吸気部外面は縦位ナデが施される。先端部には溶着滓が付着している。

同図 46 は吸気部内径 5.9 cm、先端部内径 2.9 cm、最大長 12.1 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって直線的に開き、内面形状は先端部から緩やかに開きながら吸気部に向かい、吸気部から 1.7 cm で強く開くために断面形はラップ形となる。吸気部外面には縦位ナデ、内面には横位ナデが施されている。先端部外面には溶着滓との炉壁が見られる。

同図 47 は吸気部内径 4.6 cm、先端部内径 3.3 cm、最大長 9.0 cm である。羽口外形は先端部から直線的にハの字に開いて吸気部に到達する。内面形状も先端部からハの字に開いて吸気部に到達する。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 48 は吸気部内径 5.9 cm、先端部内径 3.3 cm、最大長 11.5 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開き、吸気部端部で弱く開く。内面形状は吸気部付近では円筒形で、吸気部に向かって弱く開くために断面形はラップ形となる。先端部には多量の溶着滓と炉壁が付着する。残存している炉壁は羽口と炉壁が接合する左側辺で、多量のスサが混入する。

同図 49 は吸気部内径 5.3 cm、先端部内径 3.3 cm、最大長 8.2 cm である。羽口外形は先端部から直線的にハの字に開き吸気部に到達する。内面形状は先端部から吸気部に向かってハの字に開き、吸気部端部で弱く開くために断面形はラップ形となる。先端部には溶着滓が見られる。

同図 50 は吸気部内径 4.4 cm、先端内径 3.3 cm、最大長 10.3 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開き、吸気部端部で外方に弱く開く。内面形状は先端部から吸気部まで円筒形を保つ。吸気部にはヘラナデが施される。先端部には溶着滓が見られる。

同図 51 は吸気部内径 4.2 cm、先端部内径 3.1 cm、最大長 9.0 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって直線的に開くもので、内面の形状も同様である。吸気部内面には横位ナデが施されている。先端部には溶着滓が見られる。

同図 52 は吸気部内径 6.3 cm、先端部内径 3.5 cm、最大長 9.3 cm である。羽口外形は先端部からハの字に開いて吸気部に向かう。内面形状は先端部からハの字に開いて吸気部に向かい、吸



图38 羽口 (4)

気部から 1.5 cm 付近で強く開く。先端部には溶着滓と炉壁が付着している。

同図 53 は吸気部内径 6.1 cm、先端部内径 3.7 cm、最大長 8.1 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって直線的に開く形状を持つ。内面形状は先端部から吸気部に向かって大きく開き断面形はラッパ形となる。先端部には溶着滓が見られる。

同図 54 は吸気部内径 3.7 cm、先端部内径 3.2 cm、最大長 8.0 cm である。羽口外形は先端部からハの字に開いて吸気部に達する。内面形状も先端部から吸気部の到達するまで大きな変化は見られないまま吸気部突端に到達するために断面形はハの字となる。先端部には溶着滓が付く。

図 38-55 は吸気部内径 5.0 cm の楕円形、先端部内径 3.3 cm、最大長 8.3 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く形状であるが歪みが激しい。内面形状は先端部から直線的に吸気部に向かう形状で断面形はハの字となる。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 56 は吸気部内径 5.9 cm、先端部内径 3.0 cm、最大長 11.1 cm である。羽口外形は円筒形を保ち、内面形状は先端部付近では円筒形で吸気部から 1.5 cm 付近で弱く開くために断面形はラッパ形となる。吸気部外面には縦位ナデ、端部にはヘラケズリが施されている。先端部には溶着滓が見られる。

同図 57 は吸気部内径 6.2 cm の楕円形、先端部内径は 3.5 cm である。羽口外形は先端部から弱く開いて吸気部に向かい、吸気部から 2.5 cm 付近で強く開くために断面形はラッパ形となる。内面形状では先端部は円筒形を保ち、吸気部付近で強く開くために断面形態がラッパ形となる。器面の調整については判断し難いが、吸気部突端に付いてはヘラ状工具によってケズリを施している可能性がある。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 58 は吸気部内径 6.2 cm、先端部内径 3.3 cm、最大長 11.3 cm である。羽口外形は先端部からハの字に開いて吸気部に到達する。内面形状では先端部付近は円筒形を保持し、吸気部で強く開くために断面形はラッパ形となる。外面には溶着滓見られる。

同図 59 は吸気部内径 4.5 cm、先端部内径 3.6 cm、最大長 12.0 cm である。羽口外形は円筒形に近い形状を有する。内面形状は先端部から吸気部に向かって弱く開いて吸気部突端に到達する。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 60 は吸気部内径 6.4 cm、先端部内径 3.1 cm、最大長 11.8 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く。内面形状では先端部付近は円筒形で、吸気部から 1.6 cm 付近で強く開くためにラッパ形となる。吸気部内面には縦位ナデ、横位ナデが見られる。先端部には溶着滓が見られる。

同図 61 は吸気部内径 6.2 cm、先端部内径 3.0 cm、最大長 14.3 cm である。羽口外形では先端部は細く、緩やかに開いて吸気部に向かい、吸気部端部から約 3.0 cm で強く開くために断面形はラッパ形となる。内面形状では先端部付近は円筒形で、吸気部端部から 2.5 cm 付近で強く開くために断面形はラッパ形となる。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 62 は吸気部内径 5.7 cm であるが、先端部には溶着滓が付着しているため、最大長、先端部径を知ることはできない。羽口外形は先端部からハの字に開いて吸気部に到達するものと思われる。内面形状では先端部付近は円筒形で、吸気部から 1.7 cm 付近で強く開くために断面形

はラップ形となる。内面には縦位ナデが施されている。先端部には溶着滓が見られる。

同図 63 は吸気部内径 7.4 cm、先端部内径 3.9 cm、最大長 14.2 cm である。羽口外形は先端部から大きくハの字に開いて吸気部端部に到達する。内面形状は先端部からハの字に開いて吸気部に向かい、吸気部から 2.1 cm 付近で強く開くために断面形はラップ形となる。吸気部内面にはケズリもしくはナデの可能性はある。先端部外面には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 64 は吸気部内径 5.8 cm、先端部内径 3.4 cm、最大長 9.8 cm である。外面には溶着滓が見られ、器形全体を確認することはできないが、先端部から吸気部に向かってハの字に開く形状であると思われる、内面形状については先端部からハの字に開いて吸気部に向かい吸気部突端から約 1.7 cm 付近で強く開くために断面形はラップ形となる。吸気部外面には縦位の線条痕が認められる。線条痕にはヘラ状工具の端部によって形成された深い線条痕が形成されていることから、ヘラ状工具によるナデの痕跡であると思われる。先端部には溶着滓が残存しており、吸気部に近いところには炉壁が残存している。

同図 65 は吸気部内径 5.1 cm であるが、先端部には溶着滓が付着しているため先端部内径ならびに最大長は計測できない。羽口外形は先端部からハの字に開きながら羽口中央まで進み、そこから大きく膨らみながら吸気部端部へ到達する。外面には縦位ナデが施される。内面形状は先端部から吸気部に向かってハの字に開いて吸気部突端に到達する。当資料の大きな特徴は先端部を被う溶着滓と、吸気部突端の器厚の厚さにある。先端部外面の溶着滓には錆が見られ、吸気部端部の器厚は最大厚 2.0 cm である。

同図 66 は吸気部内径 5.3 cm、先端部内径 3.8 cm、最大長 8.2 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって直線的にハの字に開き、内面形状も先端部から吸気部に向かってハの字に開く。吸気部の外面には指頭圧痕が観察される。吸気部端部にはケズリと思われる調整痕が観察される。先端部の外面には左右に大きく張り出した溶着滓が残存し、炉壁が残存する。

同図 67 は吸気部内径 5.7 cm、先端部内径 3.7 cm、最大長 9.7 cm である。羽口外形は先端部からハの字に開いて吸気部に向かい、吸気部端部から約 2.2 cm 付近で強く開くため、断面形はラップ形となる。内面形状は先端部から吸気部までは円筒形で、吸気部から約 1.8 cm の付近で強く開くために断面形はラップ形となる。吸気部外面には縦位ナデが施される。当資料は吸気部端部の器厚が不均一な点の特徴である。先端部には溶着滓が見られる。

同図 68 は吸気部内径 4.8 cm、先端部内径 3.0 cm、最大長 10.2 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く。内面形状では先端部付近は弱くハの字に開くが円筒形に近い形状で吸気部から 1.7 cm 付近で強く開くため、断面形はラップ形である。吸気部外面には縦位ナデ、内面には横位ナデが施される。当資料の大きな特徴としては、比較的規模の大きな炉壁が残存している点にある。残存している炉壁は炉壁に羽口を装着した際に羽口の下部にあたる部分であると思われる。炉壁の内側に当たる地点には多量の鉄滓が溶着しており、溶着滓の表面に錆が発生している。

同図 69 は吸気部内径 5.8 cm、先端部内径 3.3 cm、最大長 11.1 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって弱く開くが開き具合は強くない。内面形状では先端部付近は円筒形で吸

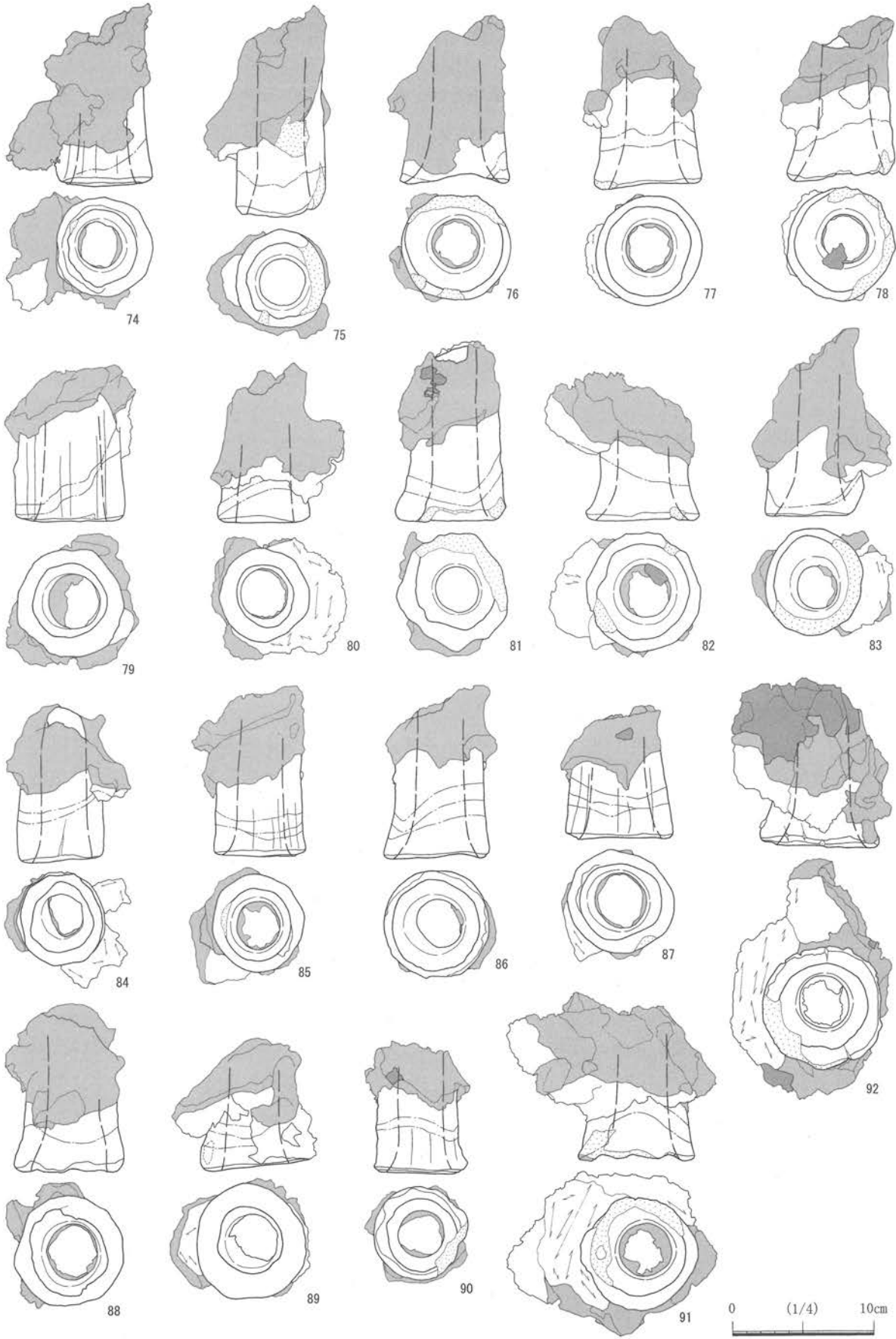


图39 羽口 (5)

気部から 1.4 cm 付近で強く開くために断面形はラップ形となる。吸気部外面には縦位ナデが施される。先端部には溶着滓が見られる。

同図 70 は吸気部内径 6.3 cm、先端部内径 3.8 cm、最大長 9.3 cm である。羽口外形は、先端部からハの字に開いて吸気部に到達する。内面形状は先端部から吸気部に向かって弱く外反して吸気部端部到達する。先端部には鉄滓の溶着が見られる。当資料は吸気部端部の器厚が 0.8 cm と薄い点が特徴である。

同図 71 は吸気部内径 5.5 cm、先端部内径 3.1 cm、最大長 9.7 cm である。羽口外形は先端部から弱く開いて吸気部に向かい、吸気部から約 2.2 cm 付近で開き具合が強く変化するために断面形はラップ形となる。内面形状も同様で、先端部付近は円筒形に近く形状を保つが、吸気部から約 1.7 cm 付近で開きが強く変化するために断面はラップ形となる。先端部には溶着滓が見られる。

同図 72 は吸気部内径 6.3 cm、先端部内径 3.6 cm、最大長 9.2 cm である。羽口外形は縦位ナデにより外反気味であるが、先端部からハの字に開いて吸気部に到達する。内面形状は、先端部からハの字に開き、吸気部から 2.3 cm 付近で開き強く変化するために断面形はラップ形となる。吸気部内面には横位ナデが施される。先端部には溶着滓が見られる。

同図 73 は吸気部内径 7.0 cm、先端部内径 3.3 cm、最大長 9.8 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開き、吸気部端部では強く外反する。内面形状は先端部付近では大きく変化しない円筒形で、吸気部から 1.7 cm 付近では開きが強く変化するために断面形はラップ形となる。先端部には溶着滓と炉壁が残存している。

図 39-74 は吸気部内径 5.4 cm、先端部内径 3.2 cm、最大長 10.2 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開き、内面形状では先端部付近は円筒形であるが、吸気部に向かって開くため断面形はラップ形となる。吸気部外面には縦位ナデ、吸気部には横位ナデが施される。先端部には溶着滓と炉壁が観察される。

同図 75 は吸気部内径 5.0 cm、先端部内径 3.3 cm、最大長 13.4 cm である。羽口外形は先端部から緩やかに開きながら吸気部に向かうが円筒形に近い。内面形状では先端部付近は円筒形の形状をもつが、吸気部から約 2 cm 付近で強く開くために断面形はラップ形となる。先端部には溶着滓が見られる。

同図 76 は吸気部内径 6.5 cm、先端部内径 2.7 cm、最大長 11.9 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く。内面形状は、先端部から吸気部に向かってハの字に開き、吸気部から約 2.4 cm 付近で開きが強くなるために断面形はラップ形となる。吸気部の外面には縦位ナデが施され、内面には横位ナデが施される。先端部には溶着滓が見られる。

同図 77 は吸気部内径 6.1 cm、先端部内径 3.2 cm、最大長 11.9 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く形状で、内面形状は先端部付近では円筒形で吸気部から約 2.1 cm 付近で強く開きが変わるため、断面形はラップ形となる。吸気部には溶着滓が見られる。

同図 78 は吸気部内径 6.1 cm、先端部内径 3.9 cm、最大長 11.2 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く形状で、吸気部に近づくと反りが強くなる。内面形状は先

端部付近では円筒形で、吸気部に近づくと吸気部の開きが強くなるために、断面形状はラッパ形となる。外面には溶着滓が見られる。

同図 79 は吸気部内径 5.4 cm、先端部内径 4.5 cm、最大長 10.4 cm である。羽口外形は先端部から吸気部まで円筒形を保ち、内面形状も円筒形である。吸気部の外面には縦位ナデが施される。先端部には溶着滓が見られる。

同図 80 は吸気部内径 3.9 cm、先端部内径 3.5 cm、最大長 10.0 cm である。羽口外形は先端部から大きな変化が見られない円筒形、内面形状も先端部から吸気部にかけて範囲には大きな変化が見られない円筒形である。吸気部の外面には指頭圧痕が残り、器面の調整は縦位ナデである。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。炉壁は羽口下部のブロック状炉壁と羽口の左右に充填された部分と推測される。

同図 81 は吸気部内径 5.9 cm、先端部内径 3.2 cm、最大長 12.7 cm である。羽口外形は先端部から大きくハの字に開いて吸気部へ向かう。内面形状は先端部から吸気部に向かってハの字に開き、吸気部端部から 1.3 cm 付近で強く開くために断面形はラッパ形となる。内外面ともに器面の摩滅が著しいため、調整方法を判別することは困難であるが、ヘラナデによる調整が施されている可能性が考えられる。先端部には溶着滓が見られる。

同図 82 は吸気部内径 6.2 cm、先端部内径 3.4 cm、最大長 9.2 cm である。羽口外形は先端部から大きくハの字に開き、吸気部で最大径である。内面形状はハの字に開き、吸気部付近で更に開くために断面形はラッパ形となる。吸気部の外面には縦位のヘラナデが見られ、内面には横位ナデが施される。先端部には溶着滓が付着し、炉壁も見られる。

同図 83 は吸気部内径 5.4 cm、先端部内径 2.8 cm、最大長 12.2 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く。内面形状では先端部付近は円筒形であるが、吸気部から 2.5 cm 付近で強く開くために断面形はラッパ形となる。先端部には溶着滓と吸気部付近には炉壁が残存している。

同図 84 は吸気部内径 4.5 cm、先端部内径 3.2 cm、最大長 10.9 cm である。羽口外形は先端部から開きながら吸気部に向うが円筒形に近い形状をもつ。内面形状についても同様で、先端部から大きな変化点を持たないまま吸気部に到達する。先端部の溶着滓が見られ、吸気部付近には炉壁が残存している。

同図 85 は吸気部内径 4.6 cm、先端部内径 3.0 cm、最大長 11.5 cm である。羽口外形は先端部から直線的に開きながら吸気部に到達し、内面形状は先端部付近では円筒形であるが吸気部から 2.0 cm 付近から開くために断面形はラッパ形となる。吸気部には縦位ナデが施され、内面には横位ナデが施される。先端部には溶着滓が見られる。

同図 86 は吸気部内径 6.0 cm、先端部内径 3.4 cm、最大長 11.5 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって緩やかに開くが、吸気部端部で強く開くために断面形はラッパ形となる。内面形状は外面同様で、吸気部付近は円筒形で吸気部から 1.5 cm 付近で開きが強くなるために断面形はラッパ形となる。吸気部には縦位ナデが施されている。先端部には溶着滓が見られる。

同図 87 は吸気部内径 5.9 cm、先端部内径 3.9 cm、最大長 8.9 cm である。羽口外形は先端部が

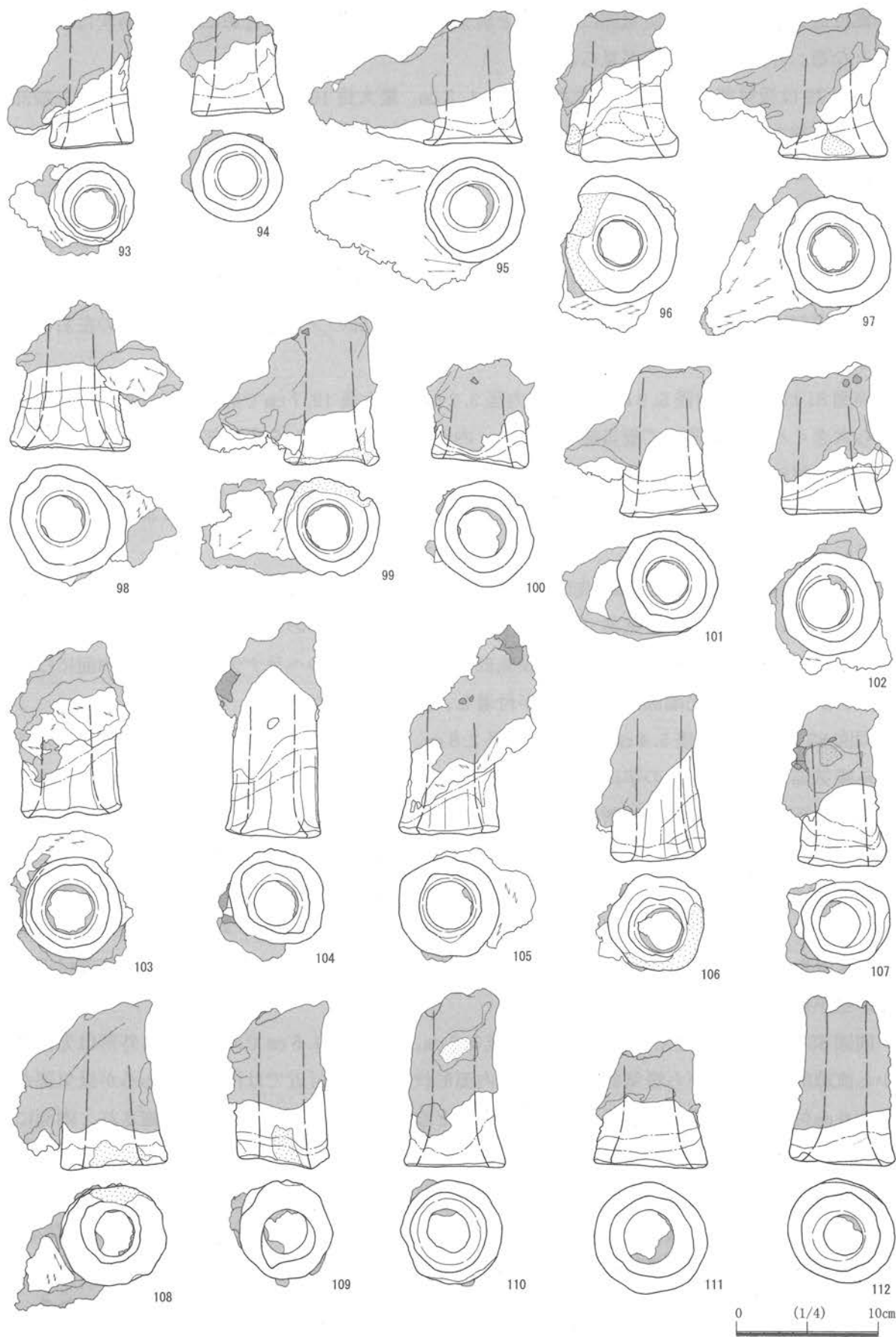


图40 羽口 (6)

ら吸気部に向かって直線的にハの字に開く。内面の形状は外面同様で先端部からハの字に開いてのびるが、吸気部突端で弱く外反する。ただし、外反する長さは非常に短いため断面形はラッパ形にはならない。先端部には溶着滓が見られる。吸気部には縦位ナデが施されている。

同図 88 は吸気部内径 5.7 cm、先端部内径 4.0 cm、最大長 11.4 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く。内面形状は先端部からハの字に開いて吸気部に向かい、吸気部突端から 2.4 cm 付近で弱く開くために断面形はラッパ形となる。先端部の外面には多量の溶着滓が見られる。

同図 89 は吸気部内径 4.6 cm、先端部内径 3.0 cm、最大長 8.3 cm である。羽口外形は先端部から直線的にハの字に開いて吸気部に到達する。内面形状は先端部からハの字に開いて吸気部に到達する。吸気部にはナデが施されるが断続的である。先端部の外面には溶着滓が見られる。

同図 90 は吸気部内径 5.0 cm、先端部内径 3.2 cm、最大長 9.3 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって開き、吸気部で強く開く。内面形状では先端部付近は整った円筒形で吸気部突端から約 1.5 cm 付近を境に強く開くために、断面形はラッパ形である。吸気部には縦位ナデが施され、内面には横位ナデが施される。先端部には溶着滓が見られる。

図 39-91 は吸気部内径 6.8 cm、先端部内径 3.3 cm である。最大長は先端部に多量に付着した溶着滓の影響で計測することは困難であるが、10.8 cm 以内である。羽口外形も溶着滓の影響から不明であるが、先端部から直線的にハの字に開いて吸気部へ到達するものと推測される。内面形状では吸気部付近は円筒形を保持し、吸気部付近で弱く開くため断面形状はラッパ形となる。先端部の外面には多量の溶着滓と炉壁が見られる。観察される炉壁は羽口を炉壁に装着した状況を正位置とすると羽口左側部分である。炉壁の表面には縦方向に混入したスサを観察することができる。スサ入り粘土は羽口の下端まから連続するように左半まで到達する。羽口上部には別工程で施された粘土が充填されており、スサ入りの炉壁とは明らかに異なる。以上の観察から、羽口は炉壁を構築するスサ粘土に羽口の左右が隠れる部分まで埋設された後、上部にスサの混入が少ない別の粘土を充填することで炉壁に装着されたものと考えられる。

同図 92 は吸気部内径 6.2 cm であるが、先端部には多量の溶着滓が残存しており、先端部内径ならびに最大長を計測することはできない。羽口外形は溶着滓の影響により推測であるが、先端部から緩やかに開いて吸気部へ向かい、吸気部に到達する手前で強く開くものと推測される。内面形状は先端部付近では整った円筒形で、吸気部に向かうと強く開くため、断面形はラッパ形となる。吸気部の外面には縦位ナデ、内面には横位ナデが施される。先端部の外面には溶着滓が付着している。また溶着滓の中には炉壁が遺存している。炉壁は羽口を炉壁に装着した際に羽口下部から左半部であると思われる。羽口下部に残存する炉壁には横方向の混入したスサが観察される。スサは羽口側辺に向かうにつれて徐々に湾曲し、羽口装着に際しては羽口下端の炉壁と羽口側辺の炉壁は一体的なものであった可能性がある。羽口上部と下部には粘土を充填している。

図 40-93 は吸気部内径 4.4 cm、先端部内径 2.8 cm、最大長 9.2 cm である。羽口外形は、先端部から吸気部に向かって弱く開く。内面形状では先端部付近は円筒形で、吸気部から 1.7 cm 付

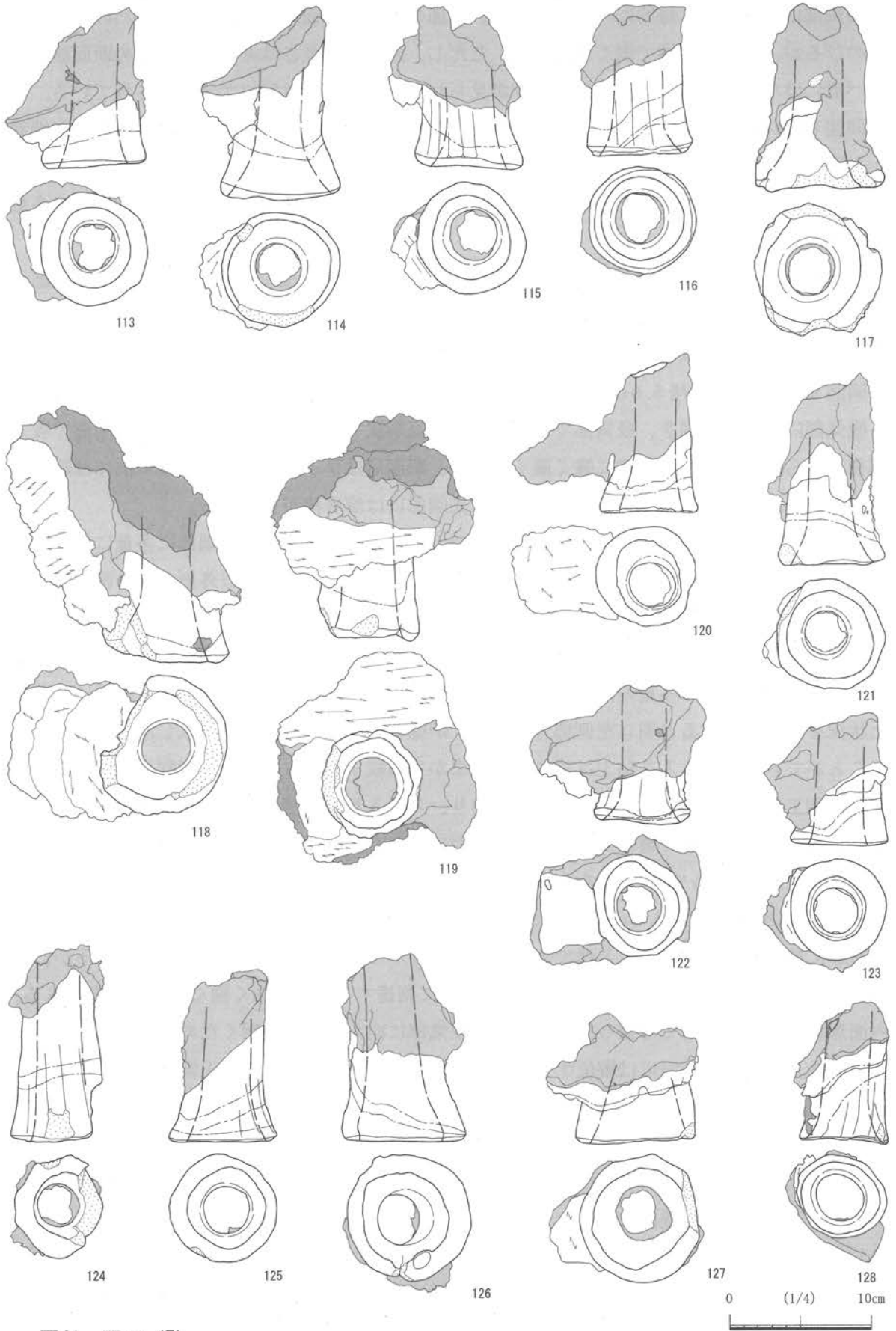


図41 羽口 (7)

近で弱く開くために断面形はラッパ形となる。吸気部には縦位ナデが施される。先端部には溶着滓が見られ、炉壁が残存している。

同図 94 は吸気部内径 4.8 cm、先端部内径 2.9 cm、最大長 6.9 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く。内面形状は先端部付近では円筒形で、吸気部付近で弱く開くために断面形はラッパ形となる。吸気部外面には縦位ナデが施される。先端部には溶着滓が見られる。

同図 95 は吸気部内径 5.8 cm、先端部内径 3.2 cm、最大長 8.2 cm である。羽口外形は先端部から吸気部付近まで円筒形を保持するが、吸気部端部で弱く外反するために断面形はラッパ形となる。外面には縦位ナデが施される。内面形状は先端部からハの字の開いて吸気部に向かい吸気部端部から約 1.4 cm 付近で強く開くために断面形はラッパ形となる。先端部の外面には多量の溶着滓と炉壁が残存している。炉壁の場所を断定することは困難であるが、溶着滓の付着状況や羽口の焼成状況から羽口左側付近であると推測される。炉壁には横方向に混入したスサが多量に観察される。

同図 96 は吸気部内径 7.1 cm、先端部内径 3.4 cm、最大長 10.6 cm である。羽口外形は先端部からハの字に開いて吸気部に向かい、吸気部端部で大きく肥大して収まる。また吸気部の外面には大きな指頭圧痕が残存する。内面形状は先端部から開いて吸気部に到達し、吸気部端部から 2.2 cm 付近で強く開くため、断面形はラッパ形となる。先端部には溶着滓と炉壁が残存する。

同図 97 は吸気部内径 5.6 cm、先端部内径 2.6 cm、最大長 10.4 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開き、吸気部端部で強く開くために、断面形はラッパ形となる。外面には斜方向のナデ、吸気部の内面には横位ナデが施される。先端部には溶着滓と炉壁が残存している。炉壁は、羽口の左上方付近のものである。横方向に混入したスサ入り粘土であることが解かる。炉壁粘土の上部にはスサ入り粘土間に充填した粘土塊も見られる。

同図 98 は吸気部内径 6.4 cm、先端部内径 3.5 cm、最大長 10.3 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く。内面形状は先端部から吸気部に向かってハの字に開いて端部に到達する。吸気部の外面には縦位ナデが施される。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 99 は吸気部内径 5.0 cm、先端部内径 2.9 cm、最大長 10.0 cm である。羽口外形は先端部から緩やかに開きながら吸気部へ向かい、吸気部から 3.2 cm 付近で開きが強くなるために断面形はラッパ形となる。内面形状は先端部から大きく変化せずに吸気部に到達するため、断面形は円筒形となる。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 100 は吸気部内径 5.4 cm、先端部内径 3.6 cm、最大長 7.5 cm である。羽口外形は先端部から直線的にハの字に開いて吸気部に到達する。内面形状も外面同様に先端部から吸気部に向かってハの字にのびる。先端部には溶着滓が見られ、吸気部外面にはナデが施されている。

同図 101 は吸気部内径 5.4 cm、先端部内径 3.2 cm、最大長 10.5 cm である。羽口外形は先端部付近では円筒形で、吸気部から約 2.5 cm 付近で強く開くために断面形はラッパ形となる。内面形状では先端部付近は円筒形を保持するが、吸気部から約 1.5 cm 付近で弱く外反するため、断面形はラッパ形となるが外形ほど明瞭ではない。先端部には溶着滓が見られる。

同図 102 は吸気部内径 4.9 cm、先端部内径 3.4 cm、最大長 10.6 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって直線的に開き、断面形はハの字である。内面形状では先端部から吸気部に向かってハの字に開くため、断面形はハの字形となる。先端部の外面には溶着滓が付着し、吸気部に近い部分には炉壁が残存する。

同図 103 は吸気部内径 5.6 cm、先端部内径 3.2 cm、最大長 11.5 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって大きく変化しない円筒形である。外面には縦位ナデが施され複数の面が形成されている点が特徴的である。内面形状は先端部から開きながら吸気部に向かい、吸気部から約 1.5 cm 付近で強く開くために断面形はラップ形となる。先端部の外面には溶着滓と炉壁が残存している。

同図 104 は吸気部内径 5.7 cm の不整形な円形である。先端部内径 3.2 cm である正円形であり、最大長 14.9 cm である。羽口の外形は器面には不規則な凹凸が見られるものの、先端部から吸気部に向かっては大きく変化しない円筒形である。内面形状は先端部周辺では整った円筒形を保持し、吸気部から約 2 cm 付近で外方に向かって強く開くために断面形はラップ形となる。先端部の外面には溶着滓が見られる。

同図 105 は吸気部内径 4.5 cm、先端部内径 3.4 cm、最大長 10.4 cm である。羽口外形は吸気部端部に外方に開く傾向が見られるが、ほぼ円筒形と見てよい。外面にはナデが施される。内面形状では先端部周辺は円筒形を保持し、吸気部周辺で外方に強く開くために断面形はラップ形となる。先端部には溶着滓と炉壁が残存している。

同図 106 は吸気部内径 4.4 cm の楕円形である。先端部は正円に近い形状で、内径 2.9 cm である。最大長 11.4 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって開き、断面形はハの字である。内面形状も同様で先端部から吸気部に到達する間、大きく変化せずに終了する。外面には縦位ナデが施され、器面には凹凸が残る。外面には溶着滓と赤褐色に変色した炉壁が残存する。

同図 107 は吸気部内径 5.0 cm の正円形、先端部内径 3.4 cm 楕円形、最大長 11.4 cm である。羽口外形は吸気部からハの字に開いて吸気部に向かい、吸気部から 2.5 cm 付近で外方に弱く開く。内面形状は先端部から吸気部に向かう間、大きく変化することなく終了する。先端部周辺には溶着滓が見られ、溶着滓が及ばない範囲にはナデが見られる。

同図 108 は吸気部内径 4.1 cm、先端部内径 3.1 cm、最大長 11.0 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に強く開き、内面形状は先端部から大きく変化せずに吸気部に到達する。先端部には溶着滓と炉壁が残存する。当資料の器厚は最大 2.0 cm を計測し、所々には編物状の繊維圧痕が残る。

同図 109 は吸気部内径 4.3 cm の不整形な円形である。先端部は 3.5 cm の円形である。最大長は溶着滓の影響によって正確ではないが 11.5 cm である。羽口外径は先端部から吸気部に到達するまで大きく変化せず、内面形状も先端部から大きく変化しないまま吸気部に到達する。羽口の断面形は内外面ともに円筒形に近い形状である。先端部には溶着滓が見られ、吸気部付近にはナデが見られる。

同図 110 は吸気部内径 5.5 cm である正円形で、先端部は内径 3.2 cm の正円形である。最大長



图42 羽口 (8)

は 12.6 cm である。羽口外形は先端部から円筒形に近い形状で吸気部に向かい、吸気部に到達する手前で外方に強く開くために、断面形はラップ形となる。内面形状も先端部周辺は円筒形であり、吸気部周辺で外方に向かって開いている。先端部には多量の溶着滓が見られる。

同図 111 は吸気部内径 5.9 cm、先端部内径 3.5 cm、最大長 8.9 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開く。内面形状もハの字形であるが、吸気部突端の横位ナデにより外方に開くラップ形となる。先端部には溶着滓が見られる。

同図 112 は吸気部内径 5.5 cm、先端部内径 2.7 cm、最大長 11.6 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に弱く開く。内面形状は先端部では円筒形、吸気部付近でラップ形に開く。先端部には溶着滓が見られる。

図 41-113 は吸気部内径 5.6 cm、先端部内径 3.3 cm、最大長 10.5 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に到達するまで大きく変化せずにハの字に開く。内面形状は先端部からハの字に開いて吸気部に向かい、吸気部から 2.0 cm 付近で外方に強く開くために、断面形はラップ形となる。先端部には多量の溶着滓が見られる。

同図 114 は吸気部内径 7.5 cm、先端部内径 2.9 cm、最大長 13.2 cm である。羽口外形は円筒形の先端部と強く外反する吸気部により断面形はラップ形となる。内面形状は外面同様に先端部付近では円筒形であるが、吸気部付近で外反するために、断面形はラップ形となる。吸気部内面には横位ナデが施される。先端部には溶着滓と炉壁が残存する。

同図 115 は吸気部内径 5.7 cm、先端部内径 3.6 cm、最大長 11.0 cm である。羽口外形は吸気部端部で外方に向かって開く傾向がある。外面にはナデが施される。内面形状は先端部周辺では整った円筒形を保持するが、吸気部周辺では外方に強く開くために、断面形はラップ形となる。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 116 は吸気部内径 5.8 cm、先端部内径 4.1 cm、最大長 10.3 cm である。羽口外形は先端部から緩やかに開いて吸気部に向かうが、円筒形に近い。内面形状は先端部から円筒形の形状を保持するが、吸気部から約 2 cm 付近で強く開くために、断面形は弱く開いたラップ形となる。先端部には溶着滓が見られる。外面には縦位ナデが施され、内面には横位ナデが施される。

同図 117 は吸気部内径 7.0 cm、先端部内径 2.9 cm、最大長 13.2 cm である。羽口外形は先端部では円筒形であるが、吸気部付近では強く外反するため、断面形はラップ形となる。内面形状も先端部付近では円筒形で、吸気部付近では外反するために断面形はラップ形である。吸気部付近の内面には横位ナデが施される。先端部には多量の溶着滓と炉壁が残存している。

同図 118 の大きな特徴は羽口側辺に大量の溶着滓が付着している点にある。溶着滓は羽口の先端部を覆い隠しているために先端部の法量ならびに最大長は不明である。かろうじて計測可能な吸気部内径は 7.3 cm で、当遺跡群から出土した羽口では最も大きい。羽口外形は先端部方向からハの字に開いて吸気部に向かい、吸気部に到達する手前で強く開くために断面形はラップ形となる。内面形状は先端部から緩やかに開いて吸気部に向かうために、断面形はラップ形となる。さて、羽口側辺に残存している溶着滓と炉壁については、羽口を炉壁に装着した際に羽口上部に当たる部分である。羽口は炉壁に据えられたあと、炉壁と羽口間にあいた隙間に拳

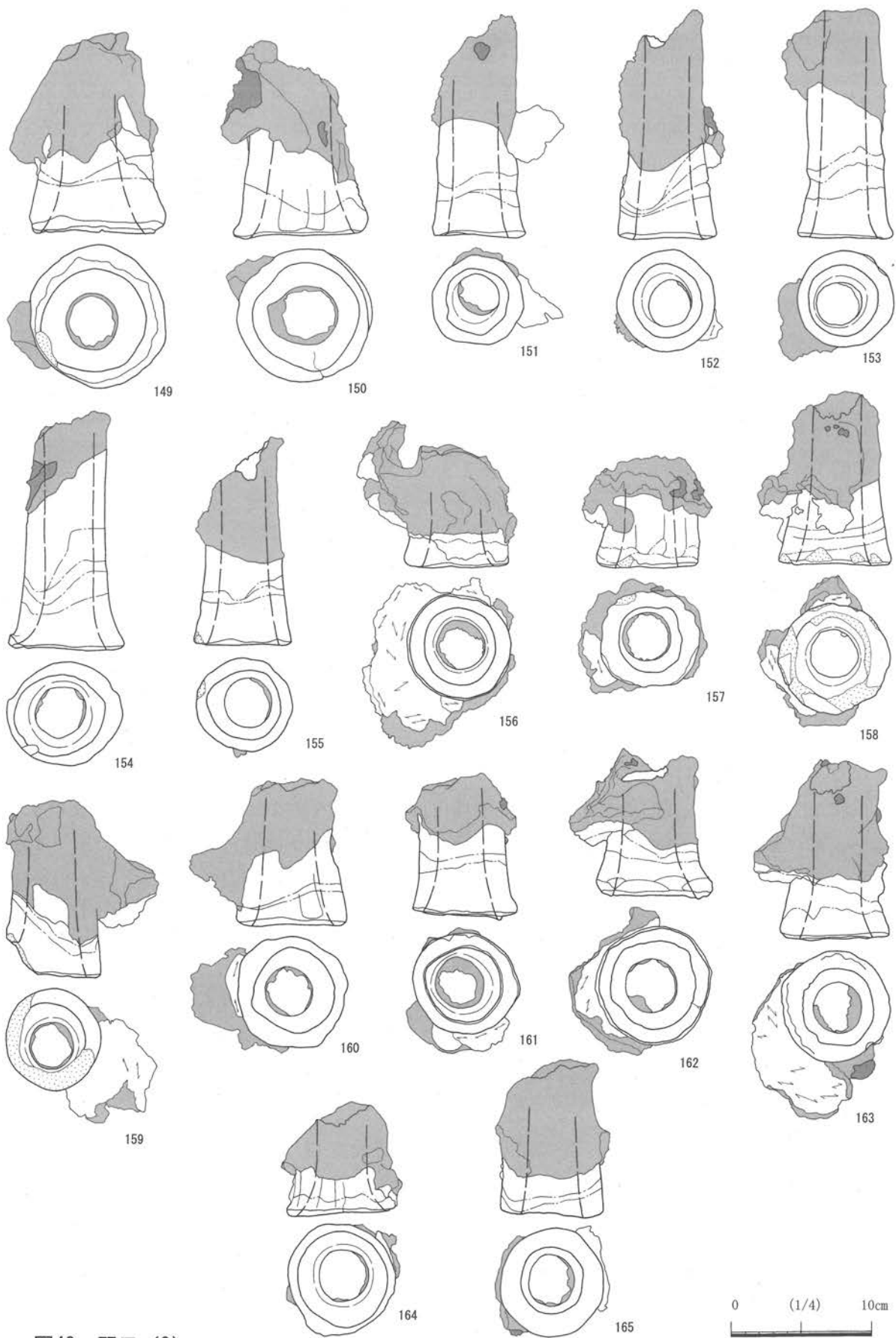


图43 羽口 (9)

大の粘土塊を充填している様子がうかがえる。

同図 119 は炉壁と溶着滓の付着が著しい資料である。羽口の半分は溶着滓と炉壁の中に埋もれているために、羽口の法量は吸気部付近でしか計測できない。吸気部内径は 6.4 cm である。羽口形状は観察できる範囲から外形は先端部から吸気部方向に向かって弱く開く形状であると思われる。外面には縦位ナデが施される。内面形状は円筒形に近いが、吸気部付近で弱く開くためにラッパ形に近い形状をもつ。当資料の大きな特徴は羽口の装着方法が明瞭に観察される点にある。羽口はスサを横方向に混入した炉壁の上部に据えられる。羽口の上部についても同様で、横方向にスサを混入した炉壁粘土を羽口上部から被せている。従って羽口は横方向にスサを混入した炉壁によって上下から挟み込まれた状況であると推測される。ただし、羽口の両側辺には上下から挟まれた炉壁粘土と羽口に隙間が生じたためか、拳大の炉壁粘土を充填することでこの隙間を解消している。羽口を炉壁に装着した際に炉内に当たる部分には赤褐色にさびた鉄塊が残されている。

同図 120 は吸気部内径 5.3 cm、先端部内径 2.9 cm、最大長 11.2 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かってハの字に開き、内面形状も先端部から開いて吸気部突端に達する。外面には縦位ナデが施される。吸気部内面には横位ナデが施される。先端部には溶着滓と炉壁が残存する。炉壁は羽口を炉に装着した際に、羽口上部に位置する範囲である。縦および斜め方向に混入したスサが明瞭に観察され、炉壁と溶着滓の厚さが 3.7 cm と薄い。

同図 121 は吸気部内径 6.7 cm、先端部内径 3.0 cm、最大長 13.2 cm である。羽口外形は先端部から弱く開いて吸気部に向かい、吸気部から 2.0 cm 付近で開くために断面形はラッパ形となる。内面形状も先端部では円筒形を保持し、吸気部付近で外方に強く開くため、断面形はラッパ形となる。吸気部突端ではヘラケズリを施している可能性がある。先端部には溶着滓が見られる。

同図 122 は吸気部内径が最大 6.2 cm である楕円形、先端部内径は 3.2 cm である。最大長は 9.5 cm である。先端部には多量の溶着滓が付着しているため、羽口の形状は判断できないが、先端部から吸気部に向かってハの字に開くと思われる。外面には縦位ナデが施されて、ナデ単位間は山形に突出している点特徴的である。内面形状では先端部付近は円筒形を保持し、吸気部付近で強く開く。吸気部付近には横位ナデが施される。

同図 123 は吸気部内径 4.4 cm の円形、先端部 3.8 cm の円形である。最大長は溶着滓の影響によって正確な値ではないものの 9.6 cm 前後である。羽口外径は先端部から吸気部に到達するまで大きく変化せずにハの字に開く。内面も先端部から大きく変化せずに吸気部突端に到達する。先端部には溶着滓と炉壁が残存している。

同図 124 は吸気部内径 4.6 cm、先端部内径 2.9 cm、最大長 13.2 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって弱く開く形状をもつが、円筒形に近い。内面形状は先端部から吸気部に向かって弱く開いて吸気部突端に到達する。先端部には溶着滓が見られ、外面には縦位ナデが施される。ナデの各単位は接することなく施されるため、器面の凹凸が著しい箇所がある。

同図 125 は吸気部内径 5.5 cm、先端部内径 3.6 cm、最大長 11.9 cm である。羽口外形の先端部は円筒形に近く、吸気部付近は強く外反する。内面形状も先端部付近では円筒形で吸気部付近

は外反する。断面形は内外面ともにラップ形である。外面の吸気部付近には縦位ナデ、内面には横位ナデが施される。先端部外面には多量の溶着滓が見られる。

同図 126 は吸気部内径 6.0 cm、先端部内径 4.0 cm、最大長 12.5 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって直線的に開き、吸気部は大きく肥大する。内面形状は先端部から吸気部に向かって開き、吸気部から 2.4 cm 付近で大きく開くために断面形はラップ形となる。外面には溶着滓が見られる。

同図 127 は吸気部内径 7.0 cm の円形、先端部は 3.2 cm の円形である。最大長は溶着滓より正確な値ではないが 7.7 cm である。羽口形状では外面は先端部から吸気部に到達するまで大きく変化せず強く開く。内面については先端部から大きく変化しないまま吸気部突端に到達する。先端部には溶着滓と炉壁が残存している。

同図 128 は吸気部内径 5.3 cm、先端部内径 3.5 cm、最大長 9.5 cm である。羽口外形は、先端

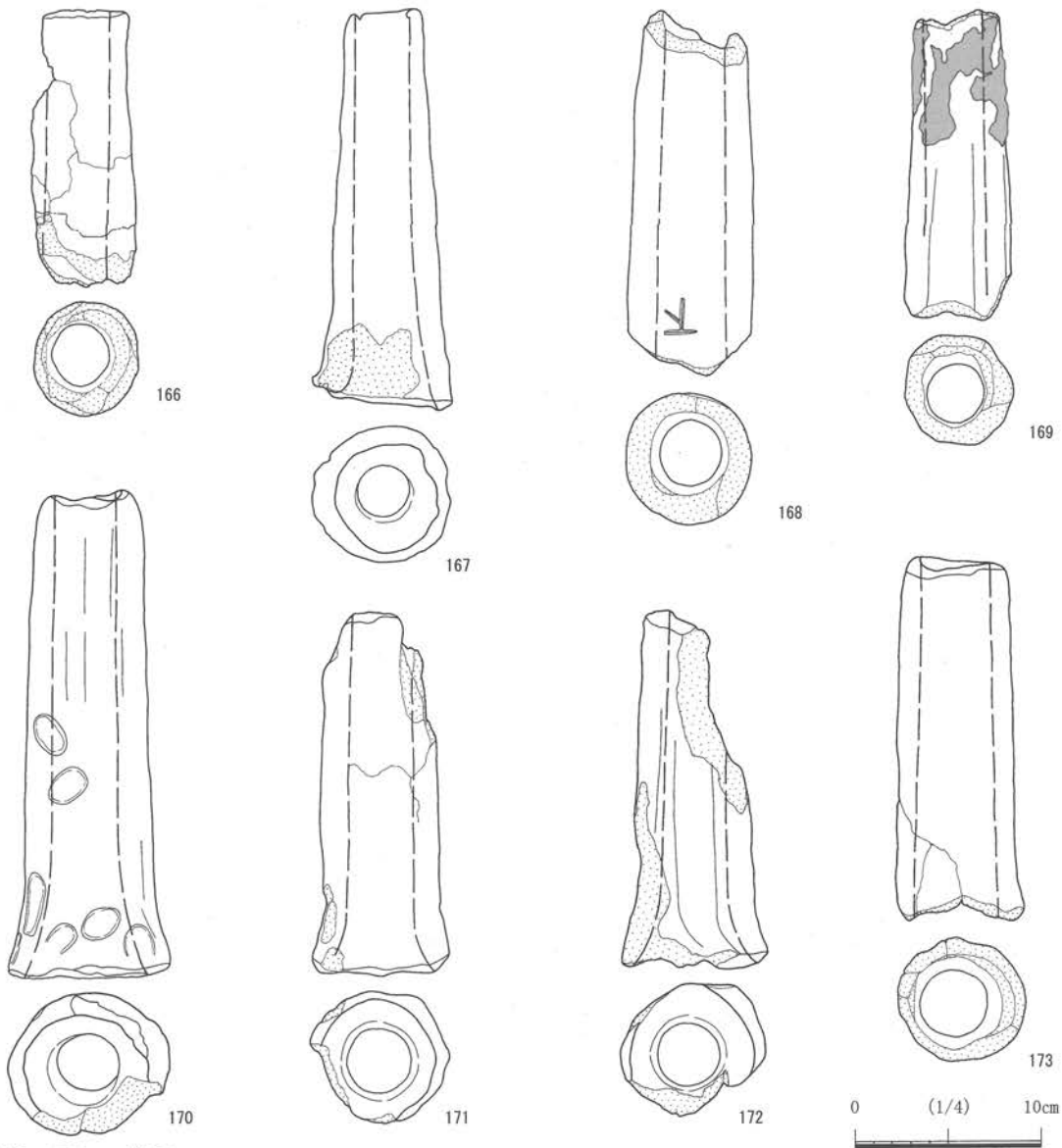
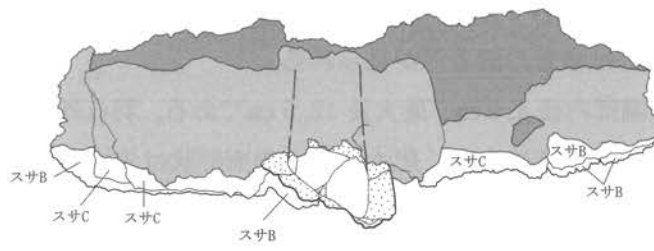
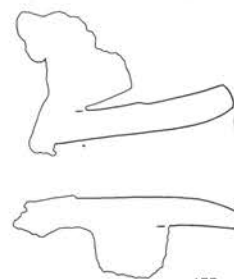
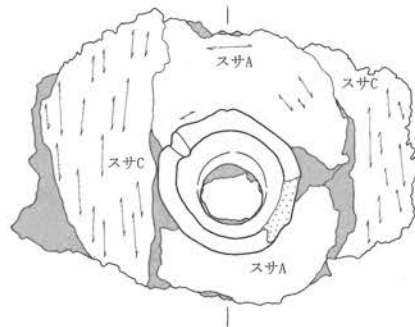
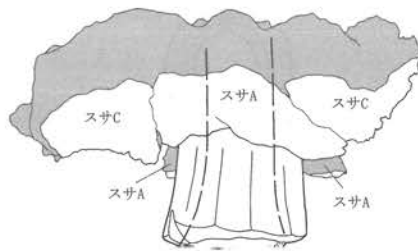


図44 羽口 (10)



174



175

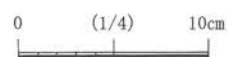


図45 羽口 (11)

部から吸気部に向かって円筒形にのびる。内面形状では先端部付近は円筒形で、吸気部から 2.5 cm 付近で強く開くために、断面形がラップ形となる。先端部には溶着滓と炉壁が残存している。

図 42-129 は吸気部内径 5.8 cm である正円形、先端部内径は溶着滓の影響により正確な数値は不明であるが 3 cm 以上の正円形である。最大長は 12.3 cm である。羽口外径は先端部から直線的に開いて吸気部に向かい、吸気部付近で外方に向かって弱く開くがラップ形とはいえない。内面形状では先端部付近は円筒形で、吸気部周辺では外方に向かって強く開く。先端部には溶着滓が見られる。外面には縦位ナデ、内面には横位ナデが施される。

同図 130 は吸気部内径 6.0 cm、先端部内径 3.3 cm、最大長 13.7 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって直線的に開き、吸気部から約 2.5 cm 付近で強く外反する。内面形状は先端部から吸気部に向かって開き、吸気部から 1.7 cm 付近で開きが強くなるために断面形はラップ形となる。外面には縦位ナデを多用し、内面には横位ナデを施す。外面には溶着滓と炉壁が見られる。羽口と炉壁の間には最大 2.0 cm の隙間が見られる。

同図 131 は吸気部内径 5.7 cm、先端部内径 2.7 cm、最大長 13.0 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって直線的に開き、吸気部から 2.5 cm で強く外反する。内面形状は先端部から吸気部に向かって開き、吸気部端部から 1.7 cm 付近で開きが強くなるために断面形はラップ形となる。外面調整には縦位ナデを多用し、内面調整には横位ナデを施す。先端部外面には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 132 は吸気部内径 5.3 cm、先端部内径 3.3 cm、最大長 13.3 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって直線的に開く。内面形状は先端部から吸気部に向かって開き、吸気部から 2.4 cm 付近で開くために断面形状はラップ形となる。外面には縦方向のナデが施され、内面には吸気部に横方向のナデを施す。外面には溶着滓と炉壁が見られる。当資料の大きな特徴のひとつに器厚の薄さがある。他の資料では 1 cm 前後の器厚に対して当資料では最も薄いところで 0.5 cm である点が特徴的である。

同図 133 は吸気部内径 6.6 cm、先端部内径 3.4 cm、最大長 10.5 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって直線的に開き、吸気部から約 3.5 cm 付近で開くために断面形はラップ形となる。内面形状は先端部から吸気部に向かって開き、吸気部から 1.7 cm 付近でさらに開くために断面形状はラップ形となる。外面に縦位ナデが施され、内面には吸気部に横位ナデを施す。外面には溶着滓が見られる。

同図 134 は吸気部内径 5.5 cm の円形、先端部内径 4.0 cm の円形である。最大長は 9.0 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に到達するまで大きく変化せずハの字に開く。内面形状は先端部からハの字に開きながら吸気部に向かい、吸気部に到達する手前で開きが強くなるために断面形はラップ形となる。先端部には溶着滓が見られる。

同図 135 は吸気部内径 5.0 cm の円形、先端部内径 3.5 cm の円形である。最大長は 9.9 cm である。羽口外形は先端部から吸気部まで大きく変化せずハの字に開く。内面形状も先端部から吸気部に到達するまで大きく変化せずハの字に開く。先端部には溶着滓が見られる。

同図 136 は吸気部内径 5.5 cm の円形で、先端部内径 3.1 cm 以上の円形である。最大長は 9.5



図46 羽口 (12)

cmである。羽口外形は先端部から直線的に開いて吸気部に向かう。内面形状は先端部では円筒形を保持するが吸気部では外方に強く開く。外面には縦位ナデナデによる調整が施されているが、ナデは単位の中央がくぼみ、両端は浅くなる傾向がある。吸気部内面にはヨコナデが施され、先端部には溶着滓と炉壁が残存している。

同図 137 は吸気部内径 6.6 cm、先端部内径 3.6 cm、最大長 8.9 cmである。羽口外形は先端部から吸気部に向かって直線的に開いて到達する。内面形状は先端部から吸気部に向かって開き、吸気部から 3.2 cm付近で強く開くために断面形はラッパ形となる。外面には縦位ナデが施され、吸気部内面には横位ナデが施される。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 138 は吸気部内径 4.8 cmの円形、先端部内径 3.5 cmの円形である。最大長は 8.0 cmである。羽口外形は羽口全体に溶着滓が見られるが、先端部から吸気部に到達するまで大きく変化しないハの字形であると思われる。内面形状は先端部から吸気部に到達するまで大きく変化せずハの字に開く。先端部には溶着滓が見られる。

同図 139 は吸気部内径 5.8 cm、先端部内径 3.3 cm、最大長 9.0 cmである。羽口外形は先端部から吸気部に向かって直線的に開き、吸気部から 3.1 cm付近で更に開く。内面形状は先端部から吸気部に向かって開き、吸気部から 2.5 cm付近で弱く開くために断面形はラッパ形となる。外面には縦位ナデ、吸気部内面には横位ナデが施される。先端部には溶着滓が見られる。

同図 140 は吸気部内径 5.2 cm、先端部内径 2.6 cm、最大長 11.1 cmである。羽口外形は先端部から吸気部に向かって直線的に開く。内面形状は先端部から吸気部に向かって大きく変化せず開いて突端に到達する。断面形は内外面ともにハの字形である。外面には縦位ナデが施される。先端部外面には溶着滓が見られる。

同図 141 は吸気部内径 5.6 cm、先端部内径 3.6 cm、最大長 9.1 cmである。羽口外形は先端部から吸気部に向かって直線的に開き、吸気部から 1.9 cm付近で更に開く。内面形状は先端部から吸気部に向かって開き、吸気部端部から 1.6 cm付近で強く開くために断面形はラッパ形となる。外面には縦位ナデ、吸気部内面には横位ナデが施される。先端部には溶着滓が見られる。

同図 142 は吸気部内径 5.7 cm、先端部内径 3.3 cm、最大長 11.1 cmである。羽口外形は先端部から直線的にハの字に開いて吸気部に到達する。内面形状は先端部から吸気部に向かって開き、吸気部から 1.5 cm付近で弱く開くために、断面形はラッパ形となる。外面には縦位ナデが施され、吸気部内面には横位ナデが施される。吸気部の端部に近い付近には面取りのような調整痕が見られる。外面には溶着滓と炉壁が残存している。

同図 143 は吸気部内径 5.7 cm、先端部内径 3.5 cm、最大長 8.2 cmである。羽口外形は先端部から吸気部に向かって直線的に開く。内面形状は先端部から吸気部に向かって開き、吸気部の手前で弱く開くが、断面形ラッパ形まではいたらぬ。外面には縦位ナデが施される。先端部には溶着滓が見られる。

同図 144 は吸気部内径 4.8 cm、先端部内径 3.3 cm、最大長 11.0 cmである。羽口外形は先端部から吸気部に向かって直線的に開き、内面形状は先端部から吸気部に向かって大きく変化せずに吸気部に到達する。外面には縦位ナデが施される。器面はナデによる凹凸が著しく断面が半

円形になる凹凸が連続する。内面には縦位ナデ施される。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 145 は吸気部内径 6.3 cm、先端部内径 4.1 cm、最大長 9.6 cm である。羽口外形は先端部から直線的にハの字に開いて吸気部に向かう。内面形状は先端部から吸気部に向かって開き、吸気部から 1.9 cm 付近で弱く開くために、断面形は開きの弱いラップ形となる。外面には縦位ナデが施され、吸気部内面には縦位、斜位のナデが施される。先端部には溶着滓が見られる。

同図 146 は吸気部内径 5.2 cm、先端部内径 3.2 cm、最大長 8.6 cm である。羽口外形は先端部から直線的にハの字に開いて吸気部に向かう。内面形状は先端部から吸気部に向かって開き、吸気部端部から 2.1 cm 付近で弱く開くために、断面形は開きの弱いラップ形となる。外面には縦位ナデ、吸気部内面には縦位、斜位のナデが施される。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 147 は吸気部内径 7.2 cm、先端部内径 3.5 cm、最大長 11.4 cm である。羽口外形は先端部から直線的にハの字に開いて吸気部に向かい、吸気部から約 2.5 cm 付近で開きが強くなるために、断面形はラップ形となる。内面形状では先端部付近は円筒形であるが、吸気部付近で強く開くために断面形はラップ形となる。外面には縦位ナデ、吸気部内面には横位ナデが施される。先端部には溶着滓が見られる。

同図 148 は吸気部内径 4.5 cm、先端部内径 3.0 cm、最大長 12.4 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって直線的に開き、内面形状は先端部から吸気部に向かって大きく変化せずに吸気部に到達する。外面には縦位ナデが施され、器面の凹凸が著しい。吸気部の断面形が八角形である点が特徴である。内面には縦位ナデが施される。外面には溶着滓が見られる。

図 43-149 は吸気部内径 6.5 cm、先端部内径 2.9 cm、最大長 12.5 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって弱く開き、吸気部から 3.1 cm 付近で強く開くために断面形はラップ形となる。内面形状も先端部から緩やかに開きながら吸気部に向かい、吸気部から 2.1 cm 付近で強く開くために断面形はラップ形となる。先端部には溶着滓が見られる。外面には縦位ナデが施され、内面には横位ナデが施される。

同図 150 は吸気部内径 6.5 cm、先端部内径 2.8 cm、最大長 11.4 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって弱く開き、断面形はラップ形となる。内面形状も先端部から緩やかに開きながら吸気部に向かい、吸気部から 2.5 cm 付近で強く開くために断面形はラップ形となる。先端部には溶着滓が見られる。資料の大きな特徴としては胎土にある。他の資料は比較的混入物の少ない良質の粘土を用いているのに対して、当資料の羽口胎土には 5mm 前後の粒子の粗い砂が混入する。

同図 151 は吸気部内径 4.6 cm、先端部内径 3.1 cm、最大長 15.4 cm である。羽口外形では先端部付近は円筒形に近い形状をもち、弱くハの字に開いて吸気部に到達する。内面形状は先端部付近では円筒形に近い形状を保持し、大きく変化せずに吸気部に到達する。先端部には溶着滓が見られる。吸気部内面には断続的な横位ナデが施され、外面には縦位ナデが施される。

同図 152 は吸気部内径 5.0 cm、先端部内径 3.3 cm、最大長 15.8 cm である。羽口外形では先端部周辺は円筒形を保持し、吸気部に向かって徐々に開く。内面形状も同様に先端部周辺は円筒形を保つが吸気部に向かうにつれて徐々に開くが、ラップ形というほど大きな変化は見られな

いまま吸気部に到達する。先端部には溶着滓が見られる。

同図 153 は吸気部内径 4.8 cm、先端部内径 3.0 cm、最大長 15.9 cm である。羽口外形は先端部付近では円筒形で、吸気部に向かって弱く開くが、開きの具合は弱く円筒形に近い形状である。内面形状も先端部周辺では円筒形を保持し、吸気部に向かって弱く開くが大きく変化することなく吸気部に到達する。先端部には溶着滓が見られる。

同図 154 は吸気部内径 6.3 cm、先端部内径 3.7 cm、最大長 16.9 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって弱く開き、吸気部から 3.1 cm 付近で開きが強くなるために断面形はラップ形となる。内面形状も先端部から弱く開いて吸気部に向かい、吸気部から 1.7 cm 付近で強く開くために断面形はラップ形となる。先端部には溶着滓が見られる。外面には縦位ナデが施され、吸気部内面には横位ナデが施される。

同図 155 は吸気部内径 5.4 cm、先端部内径 3.7 cm、最大長 14.2 cm である。羽口外形は先端部から吸気部に向かって開くが、円筒形に近い。内面形状では先端部付近はほぼ円筒形で、吸気部付近で外方に向かって開くために、断面形はラップ形となる。先端部には溶着滓が見られる。外面には縦位ナデが施され、吸気部内面には横位ナデが施される。

同図 156 は吸気部内径 5.5 cm、先端部内径 3.6 cm、最大長 8.1 cm である。羽口外形は先端部から直線的にハの字に開いて吸気部に向かう。内面形状は先端部から吸気部に向かって開き、大きく変換せずに吸気部に到達する。器面の調整は摩滅のために判然としない。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 157 は吸気部内径 4.7 cm、先端部内径 3.4 cm、最大長 7.7 cm である。羽口外形は先端部から直線的にハの字に開いて吸気部に到達し、内面形状は先端部から直線的に開いて吸気部に到達する。吸気部外面には縦位ナデが施される。先端部には溶着滓が見られる。当資料の大きな特徴に、吸気部の断面形が隅丸方形である点がある。

同図 158 は吸気部内径 5.5 cm、先端部内径 3.6 cm、最大長 12.2 cm である。羽口外形は先端部から直線的にハの字に開いて吸気部に向かう。内面形状は先端部から吸気部に向かって開きながら吸気部に到達する。吸気部の内外面にはナデを施す。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 159 は先端部内径 3.0 cm、最大長 12.5 cm である。吸気部内径は欠損のため計測はできない。羽口外形は先端部から直線的にハの字に開いて吸気部に到達し、内面形状も先端部から直線的に開いて吸気部に到達する。吸気部外面には縦位ナデ、先端部には溶着滓と炉壁が付く。

同図 160 は吸気部内径 5.7 cm、先端部内径 3.4 cm、最大長 10.3 cm である。羽口外形は先端部から直線的にハの字に開いて吸気部に向かう。内面形状は先端部付近から弱く開いて吸気部に到達し、吸気部から約 1.3 cm 付近で開くために、断面形はラップ形となる。外面には縦位ナデが施され、吸気部内面には横位ナデが施される。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 161 は吸気部内径 5.2 cm、先端部内径 3.5 cm、最大長 10.3 cm である。羽口外形は先端部から直線的にハの字に開いて吸気部に向かう。内面形状は先端部付近から弱く開いて吸気部に向かい、吸気部から約 1.6 cm 付近で弱く開くために、断面形はラップ形となる。外面には縦位ナデ、吸気部内面には横位ナデが施される。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

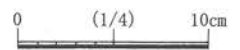
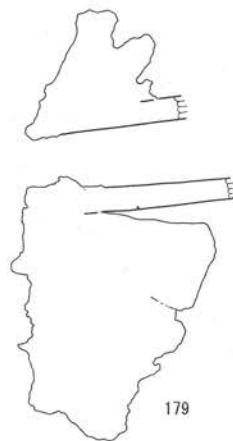
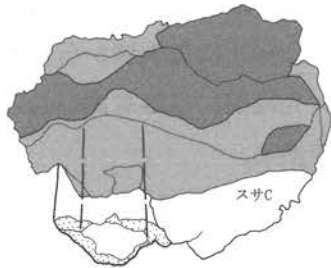
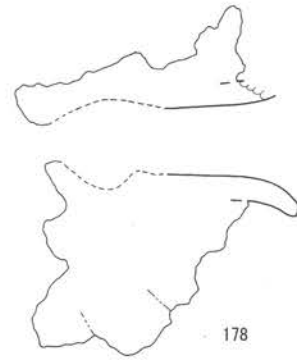
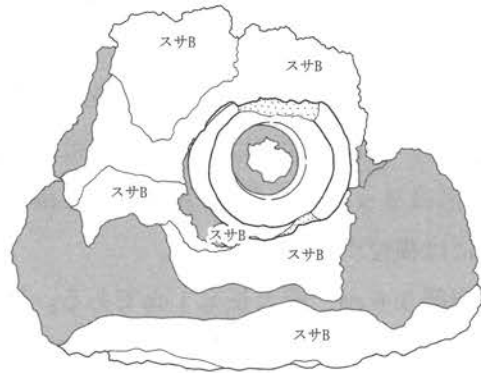
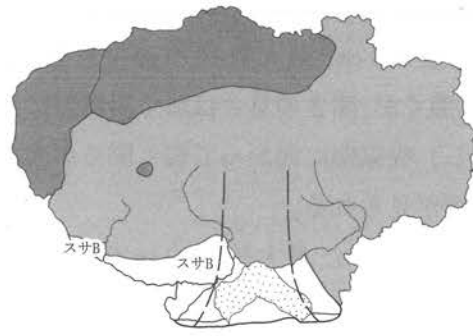


図47 羽口 (13)

同図 162 は吸気部内径 6.3 cm、先端部内径 3.6 cm、最大長 10.2 cm である。羽口外形は先端部から直線的にハの字に開いて吸気部に向かい、吸気部から 2.7 cm 付近で開きが強くなる。断面形はラップ形となる。内面形状は先端部付近から弱く開いて吸気部に向かい、吸気部から約 2.8 cm 付近で開きが強くなるために、断面形はラップ形となる。外面には横位ナデと吸気部端部に断続的なケズリ、吸気部内面には横位ナデが施される。先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 163 は吸気部内径 5.4 cm、先端部内径は溶着滓の影響により正確な値ではないものの 3.5 cm、最大長 12.5 cm である。羽口外形は先端部からハの字に弱く開いて吸気部に向かい、吸気部から 2.8 cm 付近で開きが強くなるためにラップ形となる。内面形状は円筒形に近い先端部付近から緩やかに開いて吸気部に向かう。更に吸気部から約 2.2 cm 付近で開きが強く変化するため、断面形はラップ形となる。外面には横位ナデが施され、先端部には溶着滓と炉壁が見られる。

同図 164 は吸気部内径 6.4 cm、先端部内径 3.6 cm、最大長 7.7 cm である。羽口外形は先端部からハの字に開いて吸気部に向かう。内面形状は先端部付近では円筒形に近く、吸気部付近で開きが強くなる。断面形はラップ形となる。外面には縦位ナデ、先端部には溶着滓が見られる。

同図 165 は吸気部内径 4.5 cm、先端部内径 3.5 cm、最大長 10.9 cm である。羽口外形は先端部から直線的に開いて吸気部に到達する。内面形状も先端部直線的に開いて吸気部に到達する。外面には縦位ナデ、吸気部内面には横位ナデが観察される。先端部には溶着滓が見られる。

図 44-166 は先端部に溶着滓が付着していないため、製作段階で破損した未製品の可能性がある資料である。残存長は 14.6 cm である。吸気部は残存していないため法量は不明である。先端部突端は丁寧に仕上がっている。羽口の形状は内外面ともに非常に整った円筒形を保持しており、器形の変化は認められない。外面の調整は判断し難いがナデを主とする調整であると思われる。先端部は黒色に変色している。

同図 167 は先端部から吸気部までの全体を確認できる資料である。吸気部内径 5.7 cm、外径は 7.5 cm、先端部内径 2.8 cm、外径 4.0 cm、最大長 21.1 cm である。先端部は径が最も狭く徐々に開いて吸気部に向かう。吸気部に到達する 2.8 cm 手前では開きが強くなり、そのまま吸気部突端に到達する。内面形状では先端部周辺は円筒形を保持し、吸気部周辺になると徐々に直径が大きくなり、吸気部から約 2.0 cm 付近で開きが強くなるために断面形はラップ形となる。器面には素材粘土を握り固めたような指頭の圧痕が残っており、その粘土の凹凸を整えるための器面調整は施されない。吸気部内面には横位ナデが観察される。

同図 168 は先端部と吸気部が欠損しており、羽口全体の法量ならびに形状は不明であるが、被熱の痕跡ならびに溶着滓は見られないため、未使用品の可能性が高い。残存する範囲での確認される羽口形状は、外面は先端部から吸気部に向かって緩やかに開き、内面は先端部方向から吸気部まで大きく変化しない円筒形である。器面の調整は摩滅のために不明である。当資料の特徴としては、吸気部付近に確認される線刻がある。線刻は吸気部を上に向けておくと「下」と読むことができる。線刻はヘラ状工具のよるものと推測される。

同図 169 は先端部が残存する資料である。先端部には溶着滓は見られない。先端部周辺には羽口の素材粘土とは異なる種類の粘土が付着している。羽口形状は先端部直径が最も狭く、吸

気部付近で最大径を測る。断面形は円筒形に近い。羽口は先端部内径 3.0 cm、外径 4.4 cm、残存長 16.0 cmである。外面には縦位ナデが施される。

同図 170 は出土した羽口では最も残存状況が良好な資料である。羽口は先端部から吸気部にかけて全体が遺存している。吸気部内径 6.6 cm、外径 8.6 cm、先端部内径 3.2 cm、外径 4.7 cm、最大長 25.5 cmである。羽口外形は先端部ではやや狭いが円筒形に近い形状をもつが、吸気部から約 3.5 cm付近で弱く開くために断面形はラッパ形となる。内面形状も先端部から吸気部に到達するまでは円筒形の形状を保持するが、吸気部端部で強く開くために断面形はラッパ形となる。外面には粘土素材を握り締めたような指頭圧痕が残る。

同図 171 は先端部から吸気部までの範囲が確認できる。吸気部内径 6.0 cm、外径 7.0 cm、先端部内径 3.5 cm、外径不明、最大長 19.0 cmである。羽口外形は先端部から吸気部までは円筒形に近い形状で、吸気部端部から約 4.0 cm付近で弱く開く。内面形状も先端部から吸気部までは円筒形であるが、吸気部突端で強く開くため断面形はラッパ形となる。外面には縦位ナデが施される。

同図 172 は欠損部分があるが羽口先端部から吸気部にかけて全体が判断できる資料である。先端部の内径及び外径は計測することはできない。吸気部内径 6.7 cm、外径 7.8 cm、最大長 18.7 cmである。先端部突端は平坦に仕上げられ、その断面形は四角である。羽口外形は先端部から吸気部に到達する 3.3 cm手前までは円筒形に近い形状を保持し、吸気部に到達すると強く開くために断面形はラッパ形となる。内面形状も先端部から吸気部の手前 2.5 cmの範囲は円筒形を保ち、吸気部付近では強く外反する。内外面には縦位ナデが施される。

同図 173 は先端部に溶着滓が見られないことから未使用品と思われる。最大長 19.0 cm、先端部内径 3.7 cm、外径 5.3 cmである。器形は先端部がやや狭いが、先端部は円筒形に近い形状をもつ。内面の残存範囲は円筒形である。器面の調整は判断し難いものの、縦位ナデを主とした調整を施しているものと推測される。

図 45-174 から図 48-180 は炉壁内に羽口が装着した状況の資料であるが、個々の羽口の形状については判断することは不可能である。従ってこれらの資料については主として炉壁と羽口の装着方法の記載を行い、個々の羽口については観察できる範囲についての記載をおこなう。

図 45-174 は炉壁上部に羽口が装着されている状況の資料である。炉壁は羽口下部にはスサの混入が少ない炉壁（スサA）が位置する。スサAの底面と接する地点には横方向に混入した炉壁（スサB）が位置する。スサBは残存している炉壁の底面全体に認められることから、当炉壁の主たる炉壁材であると思われる。スサBの上部にはスサが縦方向に混入する炉壁（スサC）が確認される。スサCの炉壁は羽口の両側辺に認められ、このスサCに混入するスサは炉壁内部から外部に向かって斜め方向に混入している点が特徴である。このような状況から、羽口は主たる炉壁となるスサBの上部に据えられた後、羽口の両側辺をスサCによって挟み込まれたものと考えられる。その後スサBと斜めに据えられた羽口の下部にスサの混入が少ないスサAを充填したものである。ただし羽口上部の炉壁は残存していないため、上部の装着状況は不明である。また残存している羽口は吸気部端部が欠損しており法量ならびに形状を知

ることはできない。

同図 175 は羽口を中心に炉壁が残存している資料である。吸気部の内径は 5.8 cm である。残存している範囲の炉壁は羽口の左右にスサが縦方向に混入したスサ C が位置し、羽口の上部と下部にはスサの混入が少ない炉壁（スサ A）が位置している。上記の状況から羽口の装着方法を考えると、主たる炉壁材の上に羽口を据えたのち、羽口の両端をスサ C で抑える。その後に羽口と炉壁の間に発生した隙間にスサ A を充填したと思われる。

図 46-176 は装着された羽口下半部の炉壁が確認できる資料である。残存している羽口の吸気部内径は 5.7 cm である。羽口は横方向にスサを混入する横長の炉壁材を 2 段以上重ね、この炉壁材の上部に羽口を据える。その後に羽口と炉壁材の隙間にスサの混入が少ない粘土を充填するものと思われる。

同図 177 は装着された羽口と炉壁の左半部が残存している資料である。残存する羽口の吸気部内径は 6.6 cm である。炉壁は羽口下部に横方向のスサが多量に混入するスサ B が位置し、スサ B の左端部には縦方向にスサが混入するスサ C が位置する。また当資料の大きな特徴のひとつにスサ A の施し方がある。スサ A はスサ C の上面に位置しており、スサ A が剥離した部分においてスサ C を確認することができる。以下、羽口の装着方法を記載すると、まず横方向にス

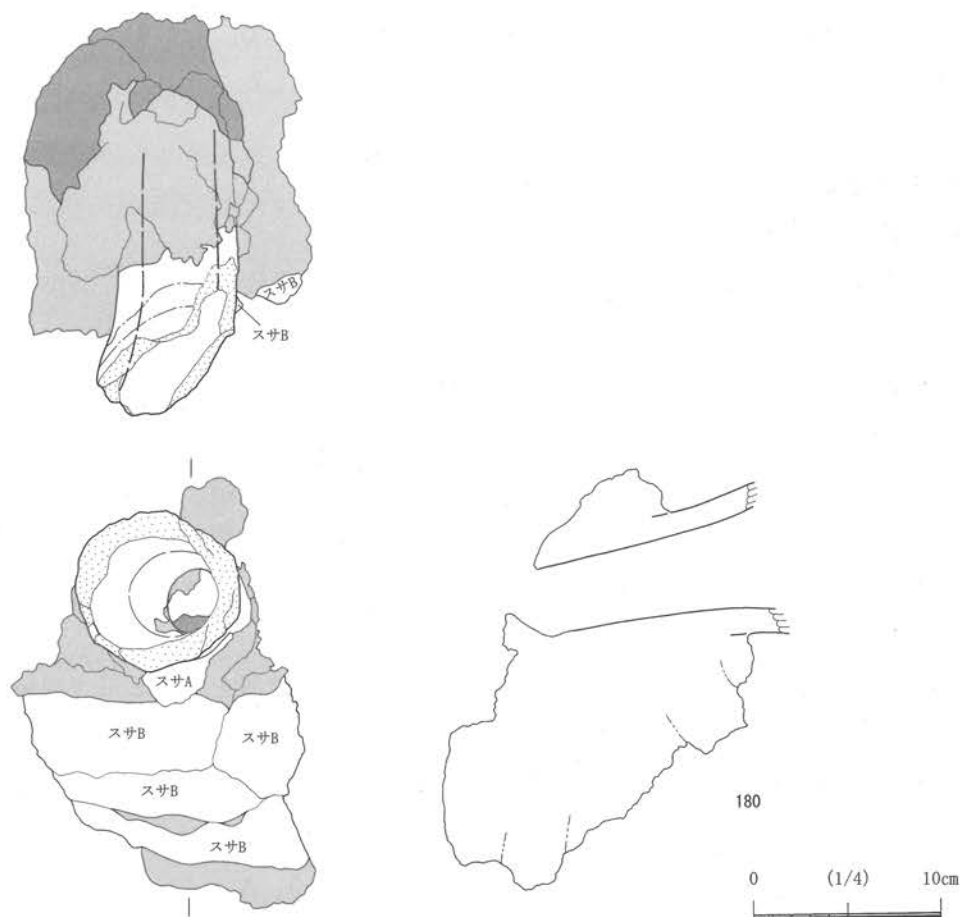


図48 羽口 (14)

サを混入した横長の炉壁材スサBを置く。羽口はスサBの上部に据えられ、その左右を縦方向にスサを混入した縦長の炉壁材スサCによって挟み込む。通常炉壁と羽口の隙間に充填されるスサAはスサCの上面を覆い隠すように施される。

図 47-178 は炉壁の中央に羽口が位置している資料である。羽口の吸気部内径は 6.5 cm である。羽口の装着方法は、横方向のスサを多量に混入する横長の炉壁材スサBの上部に羽口を据え置く。その後、拳大の大きさのスサBの粘土塊を羽口の側辺から上部にかけての範囲に積み上げることで羽口を固定する。したがって当資料には縦方向のスサが混入するスサCならびにスサの混入が少ないスサAは見られない。

同図 179 は残存する炉壁上部に羽口が位置する資料である。羽口は吸気部が欠損しているため法量を知ることはできない。羽口は横方向にスサが混入する炉壁材であるスサBの上部に据えられる。羽口両端の炉壁は残存していないために固定の方法は知ることはできないが、両端が明瞭に剥離している点を考慮すれば両端には縦方向にスサが混入したスサCが存在していた可能性が高い。羽口とスサBの間にはスサの混入が少ない炉壁材であるスサAが認められることから、羽口とスサBの隙間にスサAを充填したものであると思われる。炉内部にあたる羽口先端部周辺には赤褐色に酸化した鉄錆が付着している。

図 48-180 は炉壁上部に羽口が位置する資料である。羽口の吸気部は欠損しているために法量は不明である。全体的にハの字に開く断面形を保持する。羽口の下部にはスサの混入が少ないスサAが混入し、その下部には横方向のスサを混入したスサBが見られる。

(荒)

2号廃滓場

遺 構 (図 49)

2号廃滓場は、先述した炉跡や1号廃滓場と同一の丘陵斜面、標高 39m の地点に立地している。本遺構の東側には隣接して 3・4号製鉄炉跡、北東側 2m の位置には 1号製鉄炉跡、更に南西側約 15m の位置には 2号製鉄炉跡が位置する。廃滓層は主に、3・4号製鉄炉跡の西側同一標高の位置から斜面上位側にかけて広がっており、廃滓層の東側に隣接する 1号製鉄炉の操業に伴う廃滓層である可能性が高い。3・4号製鉄炉跡の踏みフイゴ掘方からは、フイゴ羽口や鉄滓が出土しており、これらは斜面上位に位置する 1号製鉄炉跡の操業に由来する可能性がある。その場合、斜面上位に位置する 1号製鉄炉跡が 3・4号製鉄炉跡よりも相対的に新しい可能性がある。

廃滓層の調査に際しては、地形や斜面上位の炉跡の位置を考慮して土層観察用のベルトを設定し、ベルトを境に A～D の 4 地区に分割して掘り下げ、遺物は地区ごとに取り上げた。

土層は、廃滓層の範囲に縦横に設定したセクションベルトで観察した。ベルトは、斜面の等高線に平行するように設定した A-A' (以下 A ライン)、A ライン南東端から「く」の字に折れ曲がって斜面下位へ向かう B-B' (以下 B ライン)、A ラインと十字に交わるように斜面等高線に直交させて設定した C-C' (以下 C ライン) に分かれる。

A ライン 1 層は茶褐色土で、鉄滓や拳大の炉壁を含む。2 層は地山と同質の黄褐色土で焼土・

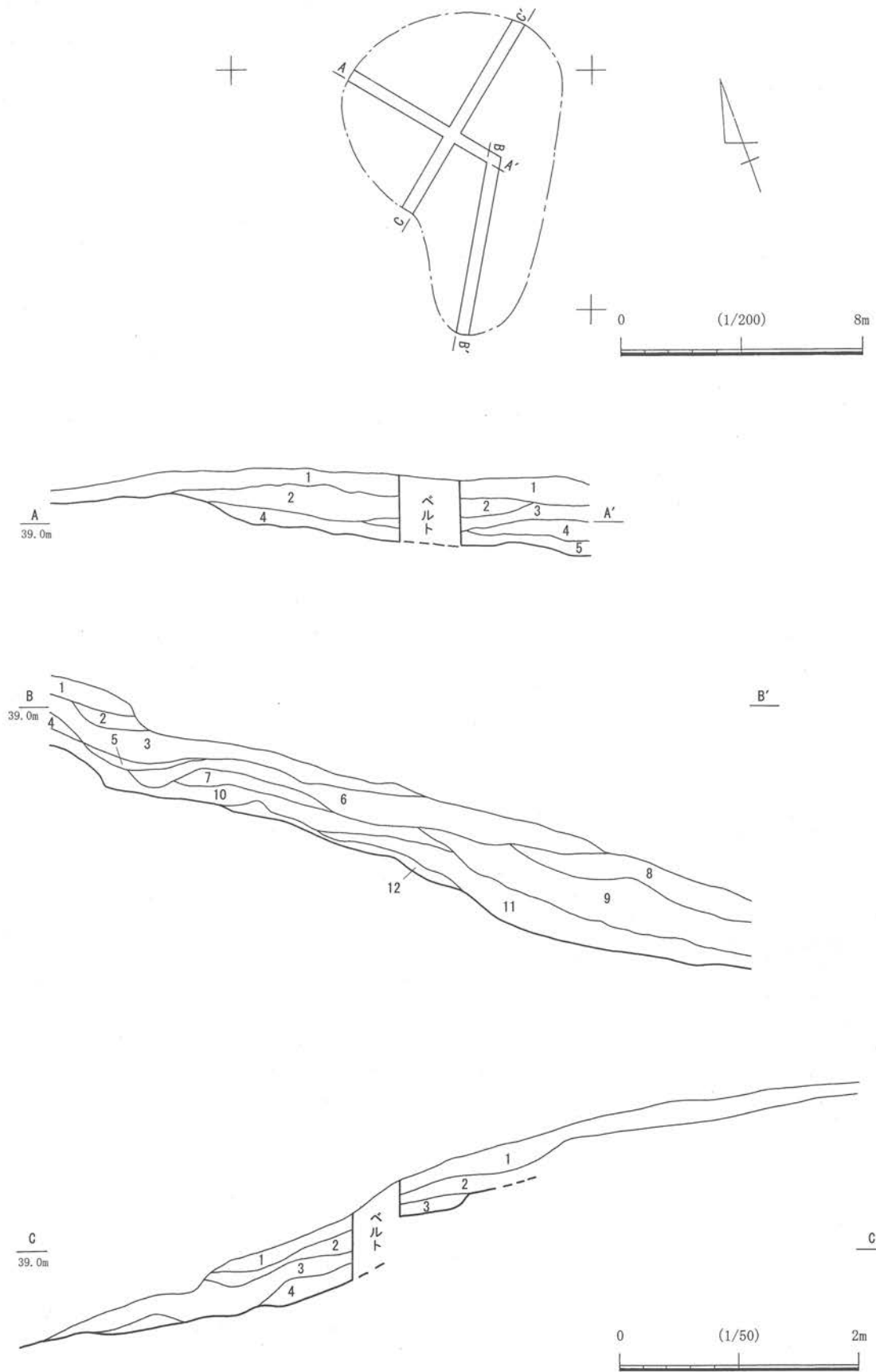


図49 2号廃滓場

炭を少量含む。3層は暗褐色土で、鉄滓・炉壁・炭を含む。4・5層は粘土主体で焼土・炭を含む土層である。1・3層は製鉄炉操業時の廃棄物堆積層と考えられる。2・4・5層は地山に由来する土層で鉄滓等は入らず、製鉄炉構築時ないし改築時の廃土と考えられる。

Bラインでは、斜面上位側のAラインで見られた土層が連続し、斜面下位側へ向かって流出した状況で堆積している状況が観察された。構築時廃土と推定されるAライン4・5層に連続する土層がBラインでは4・10層であり、10層の下層に入る11層は大型の鉄滓、炉壁、炭などを含む廃棄物堆積層である。11層は、廃滓範囲のなかでは斜面下位にのみ認められる堆積層で、1号製鉄炉跡の廃棄物堆積層である可能性とともに、4・10層を1号製鉄炉跡の構築時廃土と仮定すれば、それより古い時期の廃棄物堆積層ということになる。その場合、近接する4号製鉄炉跡の操業に伴うものである可能性がある。

CラインはAラインと十字に交わり、斜面等高線に直行するセクションである。鉄滓、炉壁廃棄物堆積層である1層が斜面上位から連続して堆積している状況がうかがえる。1・3層が廃棄物堆積層、2・4・5層は製鉄炉構築時ないし改築時の廃土と推定される。

(藤木)

2号廃滓場	
A-A' (Aライン)	C-C' (Cライン)
1 茶褐色土 鉄滓こぶし大 炉壁 炭大	1 茶褐色土 鉄滓 炉壁粒状 炭少
2 黄褐色土 焼土・炭少	2 暗褐色土黄褐色土混合土 炭・焼土微量
3 暗褐色土 鉄滓 炉壁 炭	3 茶褐色土 鉄滓 炉壁こぶし大～大
4 粘土 焼土・炭小	4 暗褐色土茶褐色土混合土 炭微量
5 粘土 焼土 炭少	5 黄褐色土 炭含
B-B' (Bライン)	
1 茶褐色土 鉄滓こぶし大 炉壁 炭大	7 黄褐色土 焼土・炭小
2 黄褐色土 炉壁 炭大	8 茶褐色土 鉄滓 炉壁 炭
3 暗褐色土 鉄滓 炉壁 炭	9 茶褐色土 鉄滓大 炉壁 炭
4 粘土 焼土・炭小	10 粘土 焼土 炭少
5 粘土 焼土・炭小 炉壁	11 黄褐色土 鉄滓大 炉壁 炭
6 暗褐色土 鉄滓大 炉壁 炭大	12 暗褐色土黄褐色土混合土 焼土 炭多

1・2号木炭窯跡

遺 構 (図 50・51 : 図版 20～28)

本遺構が位置する部分の地形は、北西方向から南東へ向かって谷が入り込んでおり、谷の両側には北西方向へ向かって発達した標高 25～40mほどの尾根が形成されている。北西から入り込んだ谷は、先端で東西に枝分かれして谷頭を形成している。1号木炭窯跡は、東西に枝分かれた西側の谷頭付近に位置し、北西方向に張り出した尾根の東向き斜面、標高 30～35mの地点に立地している。本遺構が立地する斜面と谷を隔てて向かい合う西向き斜面には、1号製鉄炉跡以下の製鉄炉跡や1号竪穴住居跡、土坑が位置している。

1・2号木炭窯跡は、丘陵斜面を、等高線にほぼ直行するように掘り込んだ地下式登窯である。検出段階では、作業場を共有し焼成室が斜面に直行してV字形の配置をとる両窯跡のプランが確認された。

両窯跡とも、焼成室の天井は崩落しており、崩落後の自然流入土と推定される暗褐色土が認

められた。1号木炭窯跡では、この暗褐色土の周囲を縁取るように被熱した地山が堆積する。斜面下位の作業場では木炭粒・焼土粒を多量に含む黒褐色土のプランが検出された。検出されたこれらのプランから遺構の中軸線を想定し、堆積土の左半分を掘り下げ、土層断面を観察することとした。また、焼成室、焚口、作業場にそれぞれ横断面観察用のベルトを適宜設定した。

1号木炭窯跡の堆積土は、縦断面であるA-A'（以下Aライン）では、焼成室内に堆積した2層は天井崩落後の自然流入土、3～7層は天井崩落土で、12層上面が最終作業面である。7層はブロック状の灰黄褐色粘土で、最終作業面の直上に焼成室のほぼ全体を覆って堆積した初期の天井崩落土である。その後奥壁近くが崩落し、4層・3層の順に堆積している。焚口近くに堆積した6層は、焼土ブロックを含む暗赤褐色土である。被熱した地山を主体とする層で、被熱した焼成室焚口近くの天井が崩落したものと思われる。

焼成室の横断面であるB-B'（以下Bライン）では、天井崩落土は被熱した2B・C層、

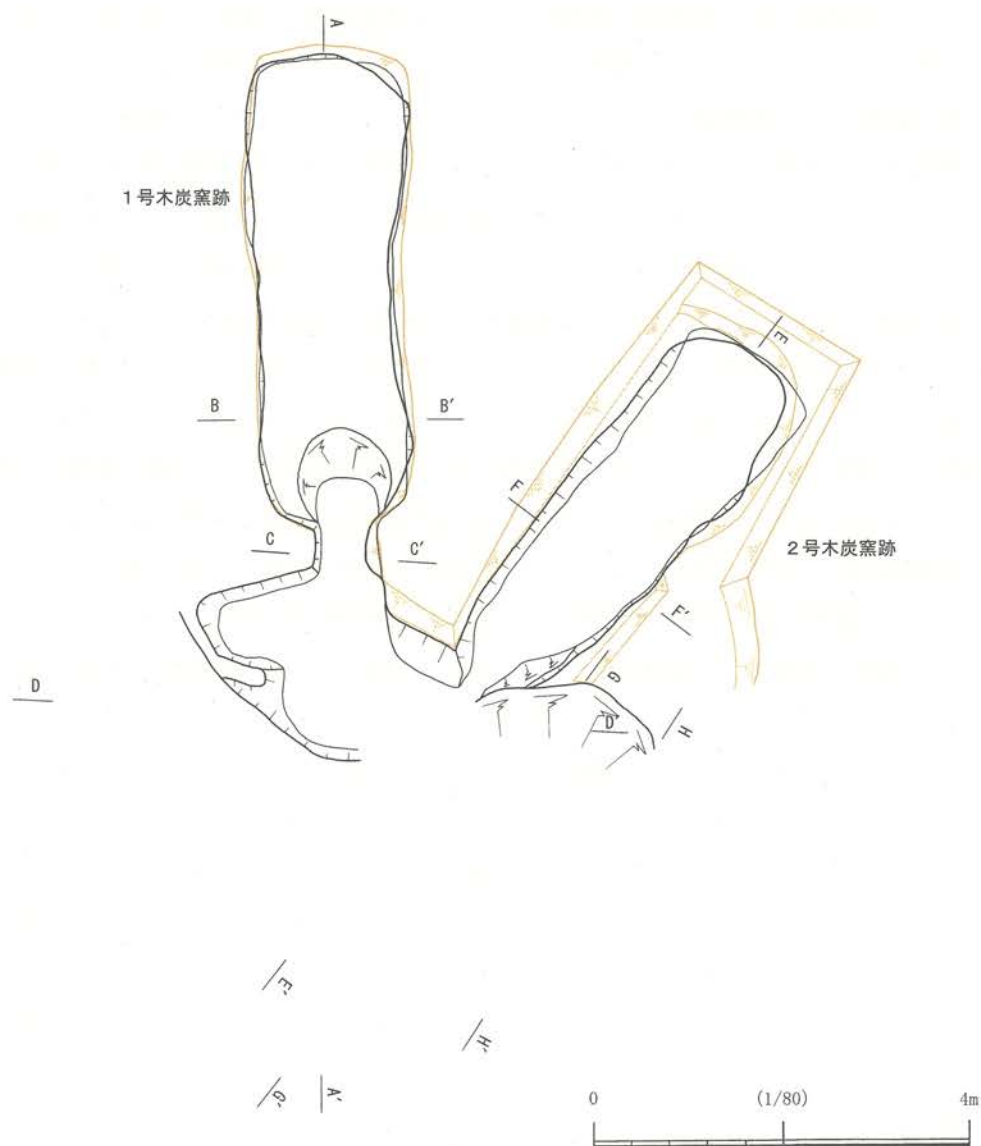


図50 1・2号木炭窯跡

被熱が及んでいない2 A層に分かれる。

焚口部の横断面であるC-C'（以下Cライン）では、最下層に窯焚きの際に形成された焼土ブロック層（3 C）、次に木炭層（3 B）が薄く堆積し、さらに焚口上部が崩落したものである炭を多量に含む暗赤褐色土（3）が堆積していた。黄褐色粘土である2層は被熱の及んでいない焚口上部の崩落土、暗褐色土である1層は自然流入土と考えられる。

作業場の堆積土は、Aラインでは最上層の1層が自然流入土、8層が木炭を多量に含む黒褐色土、9層が暗赤褐色土であり、8・9層は1号木炭窯の操業に伴う掻き出し層と推定される。10層は黄褐色粘土主体層で、その下層に炭を多量に含む11層が入り込んでいる。10層は1号木炭窯跡構築に伴って、作業場の部分を造り直したことによる整地層と考えられ、10層の上面が1号木炭窯跡に伴う作業場の底面となったものと考えられる。その下層に入り込む11層は、2号窯跡の操業に伴う堆積層と考えられる。

この1号木炭窯跡に伴う作業場の堆積土と、2号木炭窯跡の関係を、両者を通るように設定したD-D'（以下Dライン）で観察すると、最上層の1層は自然流入土で、2～9層が1号木炭窯跡の操業に伴う堆積層と考えられる。Dラインでは、8・9層が堆積する左半部と、10・11層が堆積する右半部にそれぞれ落ち込みがあり、両者の中央には地山が高く残っている。そして、右半部の落ち込み内3層の直下には、黄褐色粘土ブロック主体の10層が堆積しており、セクション中央部の高く掘り残された地山の上面と、この10層上面がほぼ連続している。さらにこの10層直下には、炭を多量に含む黒褐色土である11層が右側から左へ向かって流れ込んでいる。11層は2号木炭窯が位置する右方向から流れ込んでおり、2号木炭窯の操業に伴う堆積層である。従ってこの11層が流れ込んだ土層右半部の落ち込みは2号木炭窯跡に伴う作業場の掘り込みと判断される。この2号木炭窯跡に伴う作業場のなかに11層が堆積した後、作業場を埋め戻すように10層が堆積している。この10層上面から土層左半部の落ち込みにかけてが、1号木炭窯跡に伴う作業場を形成している。以上のことが、Dラインから読み取れる。従って、主にDラインの観察では2号木炭窯跡が古く1号木炭窯跡が新しいと判断される。

2号木炭窯跡の堆積土は、縦断面Eラインによって観察した。焼成室内の最上層に堆積した灰褐色土である1層は、天井崩落後の自然堆積層である。焼成室底面直上に堆積した5層は、被熱した地山である赤褐色土と、被熱が及んでいない地山の黄褐色粘土との互層であり、天井崩落土である。その直上に堆積した2層は地山の黄褐色土で、同じく天井崩落土と考えられる。作業場の上面部に堆積した3層は、炭を含む焼土ブロック主体の暗赤褐色土で、Dライン3層に対応する。4層は炭片を含む灰褐色土である。6層は、先述したDラインの10層に対応する土層で、1号木炭窯跡の作業場を造成した際の貼土である。7層は炭、焼土を含む黒褐色土で、Dライン11層に対応する。2号木炭窯の操業に伴う掻き出し層と考えられるが、操業回数を把握することはできなかった。

作業場に設定したGラインでは、最上層の1層と最下層の5層が盛土と推定される黄褐色土主体層で、両者の間には2号木炭窯の操業に伴うと推定される炭、焼土を含む2～4層が堆積している。1層は1号木炭窯の作業場造成に伴う盛土で、Dライン10層に対応する。5層は2

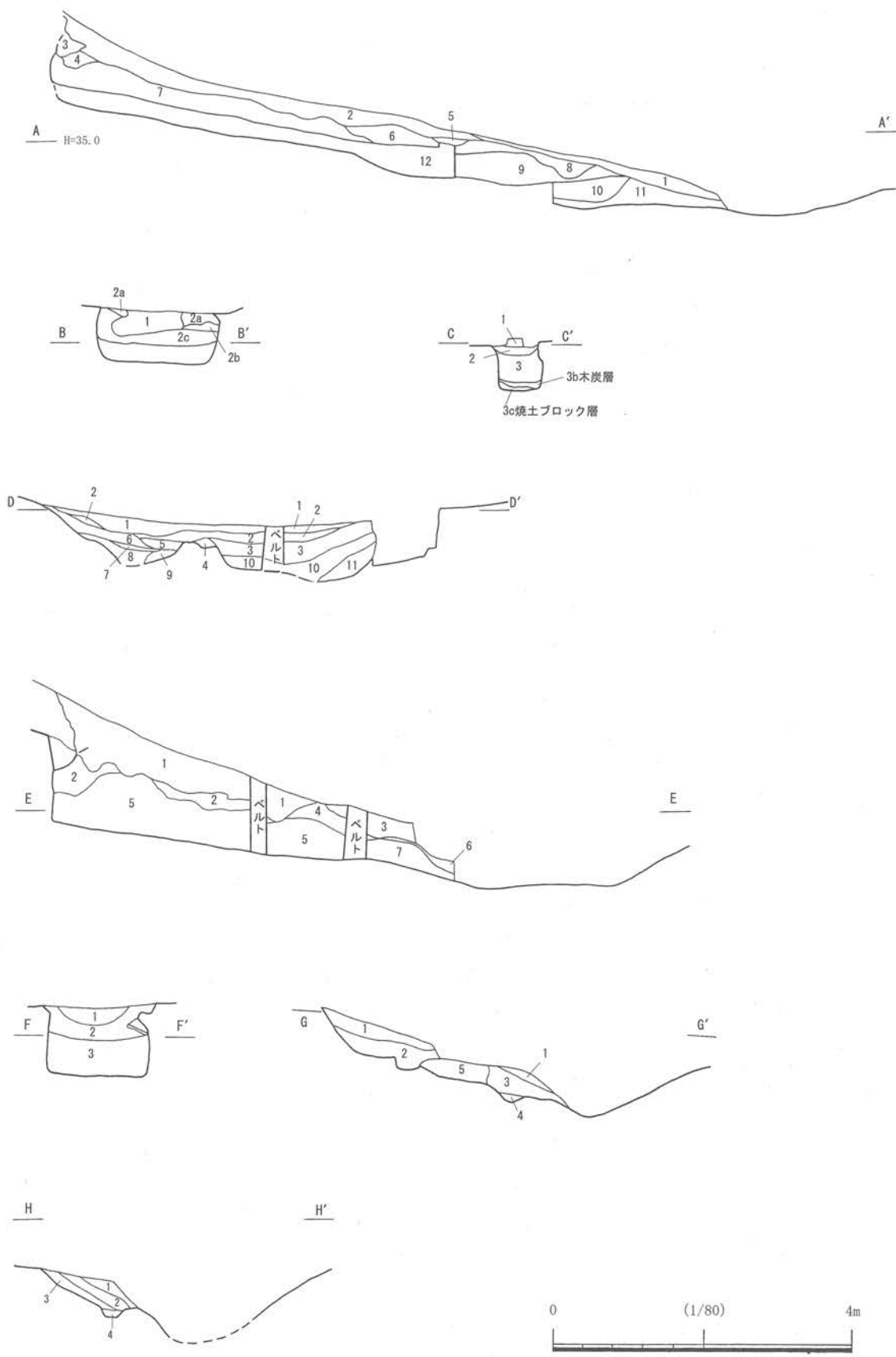


図51 1・2号木炭窯跡土層断面

号木炭窯の作業場造成にかかる盛土と推定される。

Hラインは、2号木炭窯跡作業場に設定したものである。1層は黒褐色土、2層は暗黄褐色土で、1～2cm角の焼土、炭片を含む。3層は黒褐色土、4層は暗褐色土で、炭を多く含む。いずれも2号木炭窯跡の操業に伴う堆積層と推定される。

底面まで掘り下げた段階の両窯跡の構造は、焼成室、焚口、作業場からなる。

1号木炭窯跡は、焼成室奥壁から作業場の末端までの全長は7.5mである。焼成室奥壁から側壁にかけては黒色を呈し、還元状態を示している。焼成室の平面形は、側壁、奥壁とも直線的な長方形である。断面形は、焼成室の横断面であるBラインで見ると、平坦な底面から両側壁が弱く内湾して立ちあがる。天井は崩落しているため形態は不明である。奥壁はAラインで見ると、底面から内湾して立ちあがっている。

焼成室全体の規模は、全長4.95m、幅1.75m、焚口部の形態は、向かって左側の周壁が直に、左側の周壁が内湾して立ちあがる。周壁は被熱により赤化している。底面は平坦である。底面は、焼成室内から焚口部へ向かってやや低く掘り窪められている。焚口の幅は64cmを測る。作業場の形態は、重複があるため不明瞭であるが、肩が張り、斜面下位へ向かってすぼまる形態と推定される。断面形は浅い皿状である。

2号木炭窯跡は、焼成室奥壁から作業場末端までの全長は4.9mを測る。焼成室の底面から焼成室壁の、主に下半部が黒色の還元状態を示している。焼成室の平面形は、奥壁、側壁とも直線的であるが、最大幅は奥壁にあり、焚口へ向かってすぼまる羽子板状である。断面形は、Fラインでは、向かって左の側壁が垂直に、右側壁が内湾して立ちあがり、底面は平坦である。

焼成室全体の規模は、全長4.8m、最大幅1.78mである。奥壁はEラインで見ると、垂直に立ち上がっている。焚口は丸みをもつ底面から周壁が内湾して立ち上がる形態である。作業場の形態は不明瞭であるが、平面は円形に近い形状を測る。断面形は浅い皿状と思われる。

なお、1・2号木炭窯跡からは時期を特定できるような出土遺物はなく、年代は不明である。

(藤木)

1号竪穴住居跡

遺構 (図52: 図版29)

1号竪穴住居跡は1～6号製鉄炉跡と同一斜面上、同一標高に立地している。東約6mの同一標高上に1号製鉄炉跡が、南約5mの斜面下位側に3・4号製鉄炉跡が位置している。

斜面下位側に位置する南側の大半は流出により失われているが、平面形は東西約5.9m×南北2.45m以上の方形である。検出面から床面の深さは約50cmを測る。

覆土は厚さ50cmが残っており、Bラインでは4層に分けられる。最上層の1層は炭・焼土の混ざる暗黄褐色土で、自然流入土と考えられる。西壁近くにレンズ状に堆積した2層は焼土を多量に含む暗赤褐色土である。壁際に三角堆積した3層は暗黄褐色土で、壁の崩落に伴う堆積土と推定される。最下層に薄く堆積した4層は炭・焼土の混ざる暗褐色土で、住居廃絶後の初期堆積土と考えられる。

周溝は幅30cm前後×深さ18cmで、遺存する北・西・東壁で認められるが、北壁ではカマドの

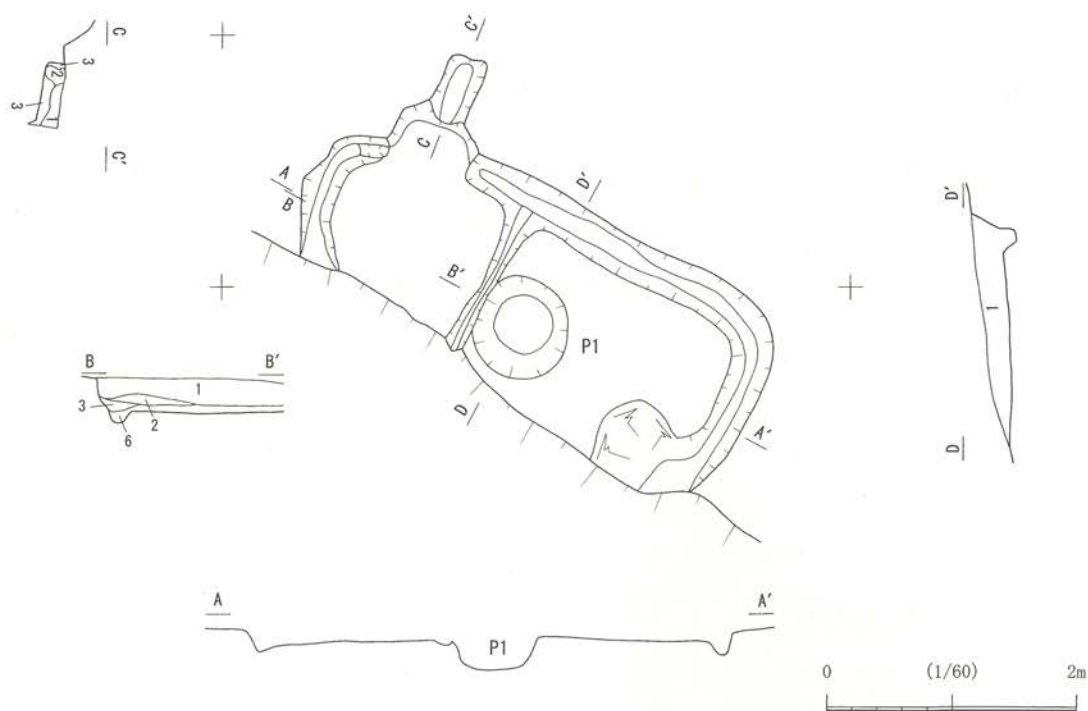


図52 1号竖穴住居跡

位置で途切れる。

また、中央やや西寄りには、住居主軸と平行する幅 21 cm の小溝が南北に走り、北壁周溝に接続している。住居跡に伴う柱穴は確認されなかったが、中央に径 1.15m × 深さ 36 cm の円形ピットが掘り込まれている。(P1)

カマドは北壁で確認された。カマドの位置のみ住居の壁がやや外へ張り出し、その部分から煙道が約 0.6m のびる。天井は崩落している。カマド部分の堆積土は3層に分層できた。1層は暗黄褐色土で天井の崩落土、煙道内には焼土主体の2層が堆積している。底面直上の3層は焼土を多量に含む暗褐色土である。なお、当住居跡に伴う遺物は出土しなかった。

(藤木)

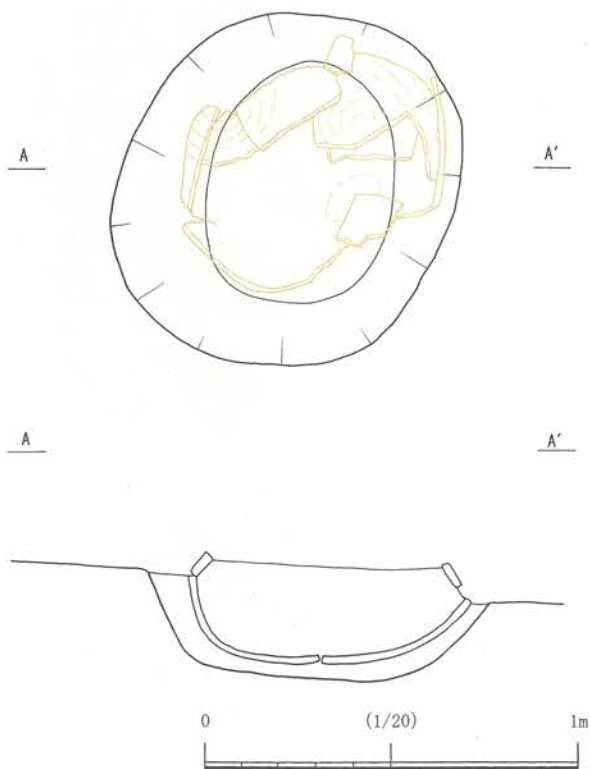


図53 土器埋設遺構

土器埋設遺構

遺 構 (図 53 : 図版 30)

本遺構は北西方向から大きく入り込む開析谷の東側に発達した丘陵の西向き斜面に立地する。

遺構は、径 98 cm × 深さ 26 cm の円形の掘方内に、壺を横に寝かせた状態で埋設したものである。壺は肩部以下、底部までが遺存していた。器壁自体は土圧により全体が細かく砕け、肩部破片が胴部以下にかぶさるような状態で出土し、胴部以下は壺内に堆積した土によって、本来の形状をとどめていた。壺内の堆積土は灰黄褐色粘土、掘方内の堆積土は灰白色粘土である。

(藤木)

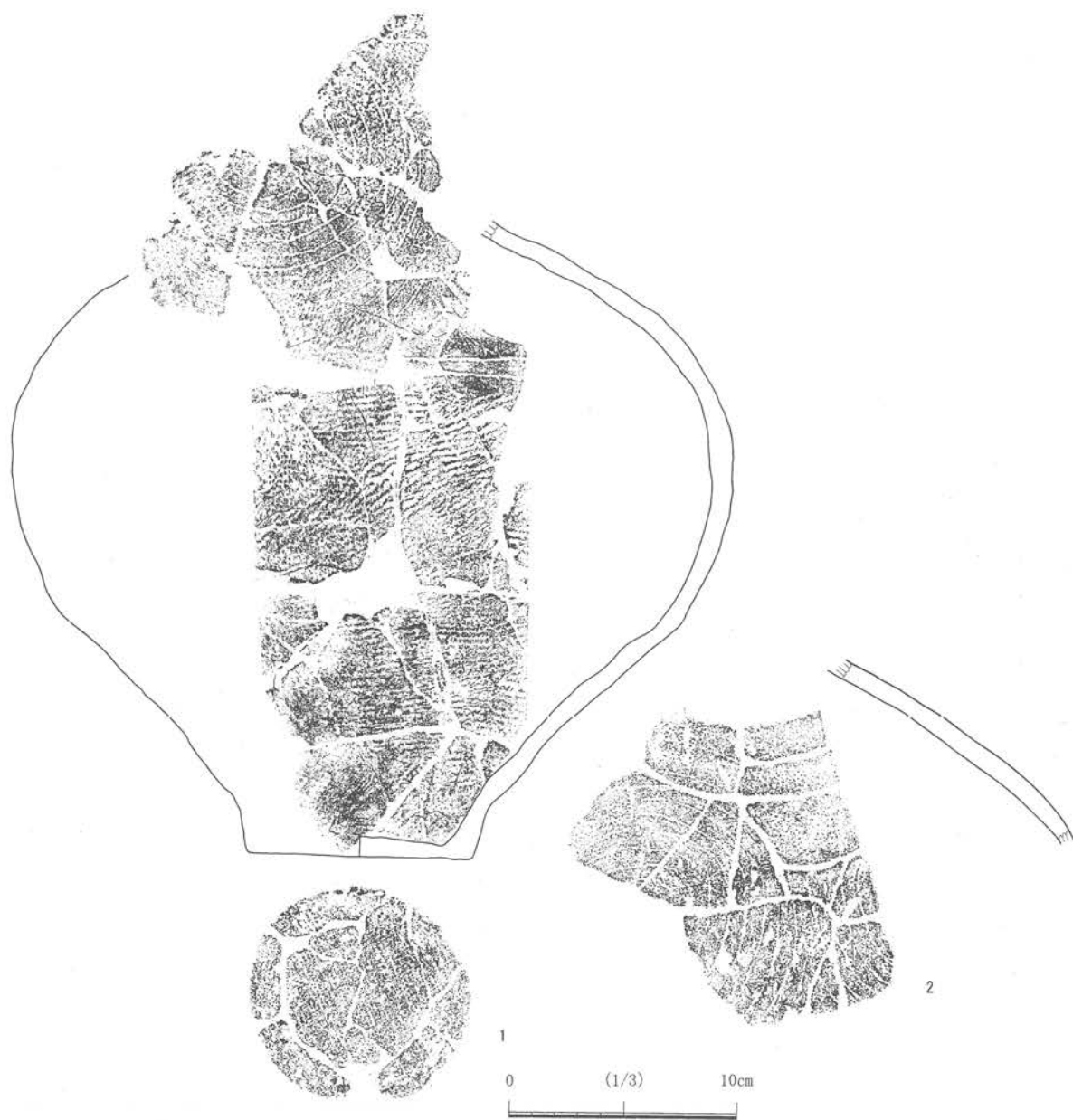


図54 埋設土器

遺物 (図 54 : 図版 112-3・4)

図 54 は掘方内に埋設されていた弥生土器である。頸部から口縁部にかけての範囲は欠損し、肩部から底部にかけての範囲が残存する。器種は壺である。底部は平坦で底面には布圧痕が残る。体部は緩やかに外傾して胴部中位に到達する。胴部の最大径はこの付近で計測され直径 31.6 cm である。器形は最大径を計測する胴部中位から強く内湾がはじまり頸部に達する。外面施文には、胴部下部に斜行する撚糸文、胴部上半に重弧文が描かれる。重弧文はヘラ状工具による 1 本挽きによる施文である。 (荒)

土坑 (図 55・56)

1号土坑

1号土坑は、南壁がやや外に膨らみ、北・東・西壁は直線的な長方形である。規模は、長軸 0.98m×短軸 0.64m×深さ 20mを測る。地山の黄褐色粘土を掘り込んで造られている。

覆土は2層に分層された。底面に薄く堆積したシルト質の黒褐色土である2層は、木炭の小片を多量に含んでいる。一方、上層に堆積した暗灰褐色土である1層では、木炭の混入は少ない。底面に薄く堆積した2層は、本土坑が機能していた段階の堆積土と推定され、1層は、土坑廃絶後に堆積した地山に由来する自然流入土と考えられる。土坑の掘り込みは、平坦な底面から壁が緩やかに立ち上がる。壁は、東側壁の一部を除いて被熱により赤化しているが、底面には赤化は認められない。被熱により酸化した部分の厚さは6 cmほどである。

本土坑からの出土遺物はなく、時期を推定する手掛かりは得られなかったが、焼壁がみられ、覆土最下層に木炭の小片が多量に混入することから、いわゆる木炭焼成土坑と考えられる。

(藤木)

2号土坑

1号土坑に近接する位置で確認された土坑である。平面形は、北壁から東西両壁にかけては隅丸状であるが、南壁は大きく膨らみ、東壁は一部が外へ飛び出している。規模は、長軸 1.5 m×短軸 1.15mである。深さは0.46mである。地山の黄褐色粘土を掘り込んで造られている。

覆土は5層に分層された。また底面直上では木炭小片が多量に認められた。木炭の分布は、土坑の北東隅、中央北東寄り、南壁近くに集中している。中央北東寄りの集中範囲では、この部分の底面に被熱が認められる。その上に薄く堆積した5層は赤褐色粘土で、焼土主体の土層である。焼壁が崩落したものと推定される。壁際に三角堆積した灰黄褐色粘土および黄褐色粘土である3・4層も壁の崩落による土層と考えられるが、被熱は認められない。2層は暗灰褐色砂質シルトで、木炭を含む。最上層の1層は、黒色砂質シルトで、木炭を少量含んでいる。1・2層は壁際から中央へ向かって堆積した自然流入土と考えられる。土層の堆積状況から、これらは自然堆積による覆土と考えられる。

土坑の掘り込みは、平坦な底面から壁が垂直に立ち上がるが、上部では外に広がる。壁は、南壁を除いて被熱により赤化している。被熱し焼けた部分の厚さは3 cmほどである。被熱は主

に壁の下半に認められるが、3・4・5層が壁の崩落に由来すると考えられること、壁の上半が外に開くことから、上部の焼壁は崩落により失われた可能性が考えられる。土坑南壁は大きく外に膨らむ形状であるのは、やはり壁の崩落による可能性が高く、本来は壁が垂直に立ち上がる平面形は長方形ないし隅丸長方形を基調とする掘り込みであったと推定される。

本土坑の性格については、底面直上に炭小片が多量に堆積していること、焼壁が認められることから、いわゆる木炭焼成土坑と考えられる。炭小片は、土坑内で木炭を焼成した際のカスが遺存したものと考えられる。なお、本土坑から遺物の出土はなく、時期を推定する手掛かりは得られなかった。
(藤木)

3号土坑

長軸 1.14m×短軸 0.72mの隅丸長方形の土坑である。深さは 0.30mである。地山の黄褐色粘土を掘り込んで造られている。

覆土は5層に分層された。最下層に薄く堆積した黒褐色土である5層には、炭小片が多量に含まれていた。本土坑が機能していた段階の堆積土と考えられる。4層はブロック状の灰色砂質シルトと焼土、黄褐色土粘土による斑状の混合土で、全体として暗灰褐色である。焼土は後述する焼壁に由来すると推定され、4層は壁の崩落による初期の堆積土と考えられる。3層は西側（セクションに向かって左側）の壁際から中央へ向かって堆積した土層で、暗灰褐色砂質シルトと黄褐色土ブロックの混合土である。主に西壁の崩落による堆積土と推定される。暗灰褐色砂質シルトである2層と黒灰褐色砂質シルトである1層は、レンズ状の堆積を示しており、最上層に堆積した自然流入土と考えられる。

土坑の掘り込みは、中央がわずかに窪む底面から壁が垂直に立ちあがっている。西壁は上半が外に大きく開くが、これは壁の上部が崩落したことによるものと考えられる。なお、東・北・南の壁および底面の一部には、被熱により赤化した焼壁が斑点状に認められた。

本土坑の性格は、底面直上に炭小片が多量に堆積していること、焼壁が認められることから、いわゆる木炭焼成土坑と考えられる。炭小片は、土坑内で木炭を焼成した際のカスが遺存したものと考えられる。なお、本土坑から遺物の出土はなく、時期は不明である。
(藤木)

4号土坑

長軸 1.05m×短軸 0.96mの楕円形ないし隅丸長方形の土坑である。東・北・西壁にかけては弧を描くのに対し、南側壁は直線的である。本来は隅丸長方形を基調とする平面形を有したと推定されるが、北壁の崩落により、円形に近い形態になったと思われる。深さは 0.24mである。地山の黄褐色粘土を掘り込んで造られている。

覆土は5層に分層された。底面直上に薄く堆積した5層は、炭小片を多量に含むシルト質の黒褐色土である。炭は特に南東隅付近に集中して検出された。本土坑が機能していた段階の堆積層と考えられる。壁際に三角堆積した灰褐色土である4層には、焼土が多量に含まれている。焼土は土坑の焼壁が崩落したものと考えられ、土坑廃絶後の初期堆積土と考えられる。壁際か

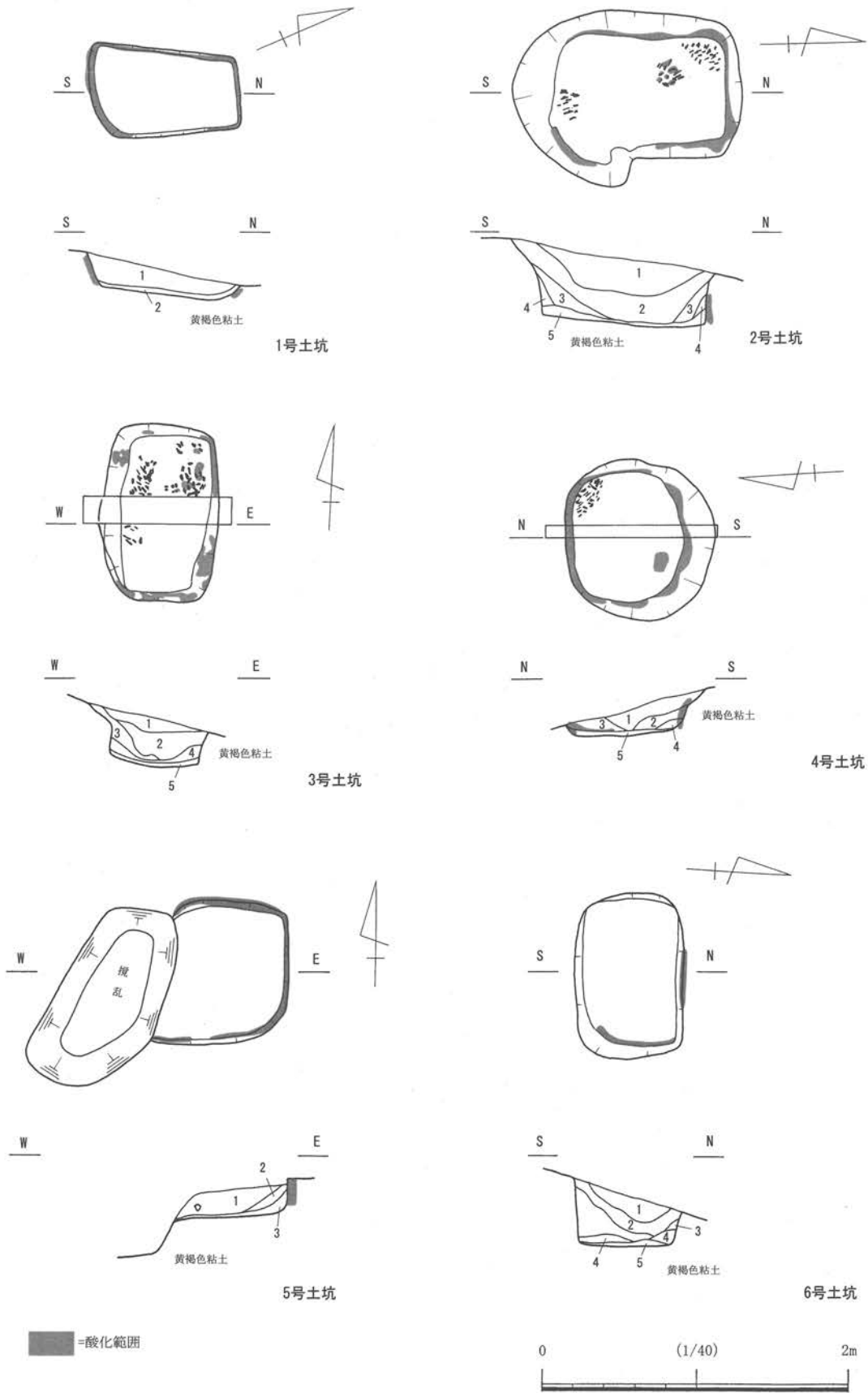


图55 土坑 (1)

ら中央に向かって流入している3層は粒子状の炭を多量に含む黒褐色土である。また、3層の下部には焼土が含まれる。壁際に三角堆積した2層は灰褐色砂質シルトで、炭粒を少量含む。最上層にレンズ状に堆積した1層は自然流入土である。

土坑の掘り込みは、平坦な底面から壁が外傾して立ち上がる形状で、北壁は上半部が大きく外に開く。壁および底面の一部は被熱により赤化し、被熱し焼けた部分の厚さは10 cmほどである。被熱は主に壁の下半に認められ、3・4層が壁の崩落に由来すると考えられること、北壁の上半が外に開くことから、上部の焼壁は崩落により失われた可能性が考えられる。

本土坑は、底面直上に炭小片が多量に堆積していること、焼壁が認められることから、木炭焼成土坑と考えられる。なお、遺物の出土はなく、時期は不明である。(藤木)

5号土坑

南北0.94mの方形ないし隅丸(長)方形の土坑である。東側部分に攪乱を受けており、東西規模は不明である。深さは0.22mである。地山の黄褐色粘土を掘り込んで造られている。

覆土は3層に分層できた。底面直上に薄く堆積した3層は黒褐色土で、炭小片を多量に含む。また、焼土・黄褐色土が混入している。炭小片は本土坑が機能していた段階に堆積したもの、焼土、黄褐色土は壁の崩落による初期の堆積土と考えられる。壁際に三角堆積した2層は暗褐色砂質シルトで、焼土・黄褐色土が径5 mmほどのブロック状に混ざっており、土坑壁の崩落に由来すると推定される。レンズ状に堆積した最上層の1層は、炭を少量含む暗褐色砂質シルトで、自然流入土と考えられる。また、1層には鉄滓が含まれていた。

掘り込みは、平坦な底面から壁が垂直に立ち上がる。壁は全面が被熱し赤化しており、被熱し焼けた部分の厚さは4 cmである。

本土坑は、底面直上に炭小片が多量に堆積していること、焼壁が認められることから、いわゆる木炭焼成土坑と考えられる。なお、本土坑から遺物の出土はなく、時期を推定する手掛かりは得られなかった。

(藤木)

6号土坑

長軸1.08m×短軸0.70mの隅丸長方形の土坑である。深さは0.43mである。地山の黄褐色粘土を掘り込んで造られている。

覆土は5層に分層できた。底面直上に薄く堆積したシルト質の黒褐色土である5層は、炭小片を多量に含んでいる。本土坑が機能していた段階の堆積土と考えられる。壁際に三角堆積した4層は赤褐色土で、被熱した焼土主体の層である。焼土は焼壁の崩落によるものと考えられ、土坑廃絶後の初期堆積土と推定される。同じく壁際から中央へ向かって三角堆積した3層は、地山と同じ黄褐色粘土主体の層であり、壁の崩落による堆積土と考えられる。覆土の上層部にレンズ状堆積した2層は粒子状の炭を少量含む灰黄褐色土、2層と同様にレンズ状に堆積した最上層にあたる1層は炭粒・炭片を多量に含む暗褐色土で、いずれも自然流入土と考えられる。

土坑は垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。北壁と東壁の一部が被熱し赤化している。東壁は特に焼けが強い。

本土坑は、底面直上に炭小片が多量に堆積していること、焼壁が認められることから、いわゆる木炭焼成土坑と考えられる。なお、本土坑から遺物の出土はなく、時期を推定する手掛かりは得られなかった。

(藤木)

7号土坑

長軸 0.97m×短軸 0.67mの炭丸長方形の土坑である。深さは 0.33mである。地山の黄褐色粘土を掘り込んで造られている。覆土は5層に分層できた。底面直上に薄く堆積したシルト質の黒褐色土である5層は、炭小片を多量に含んでいる。本土坑が機能していた段階の堆積土と考えられる。壁際に三角堆積した4層は赤褐色土で、焼土主体の層である。焼土は焼壁の崩落によるものと考えられ、土坑廃絶後の初期堆積土と推定される。同じく壁際から中央へ向かって三角堆積した3層は、地山と同じ黄褐色粘土主体の層であり、壁の崩落による堆積土と考えられる。覆土の上層部にレンズ状に堆積した2層は粒子状の炭を少量含む灰黄褐色土であり、自然流入土と推定される。2層と同様にレンズ状に堆積した最上層にあたる1層は炭粒・炭片を多量に含む暗褐色土で、本層も自然流入土と考えられる。

土坑は垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。北東隅部から東側にかけての壁と底面、および北西隅部の壁から底面にかけて、被熱による赤化が認められる。被熱し焼けた部分の厚さは3cmほどである。本土坑は、底面直上に炭小片が多量に堆積していること、焼壁が認められることから、木炭焼成土坑と考えられる。なお、本土坑から遺物の出土はなく、時期を推定する手掛かりは得られなかった。

(藤木)

8号土坑

長軸 1.28m×短軸 1.0mの不整楕円形の土坑である。深さは 0.24mである。地山の黄褐色粘土を掘り込んで造られている。

覆土は4層に分層できた。最下層の4層は木炭主体の層で、本土坑が機能していた段階の堆積層と考えられる。壁際に三角堆積した3層は、地山と同質の灰黄褐色土であり、壁の崩落による初期の堆積土と考えられる。炭を少量含んでいる。壁際から中央にかけてレンズ状に堆積した灰褐色土である2層は炭を多量に含む。やはりレンズ状の堆積を示す最上層の1層は、炭を少量含む黒色土である。1・2層は土坑廃絶後の自然流入土と考えられる。

掘り込みは平坦な底面から壁が外傾しながら直線的に立ちあがる形状である。壁は一部が被熱により赤化しており、焼壁が斑状に認められる。

本土坑は、底面に木炭層が認められること、焼壁が認められることから、いわゆる木炭焼成土坑と推定される。木炭層は、土坑の操業の際に生産された木炭のカスが遺存したものと考えられる。本土坑から遺物の出土はなく、時期を推定する手掛かりは得られなかった。

(藤木)

土坑

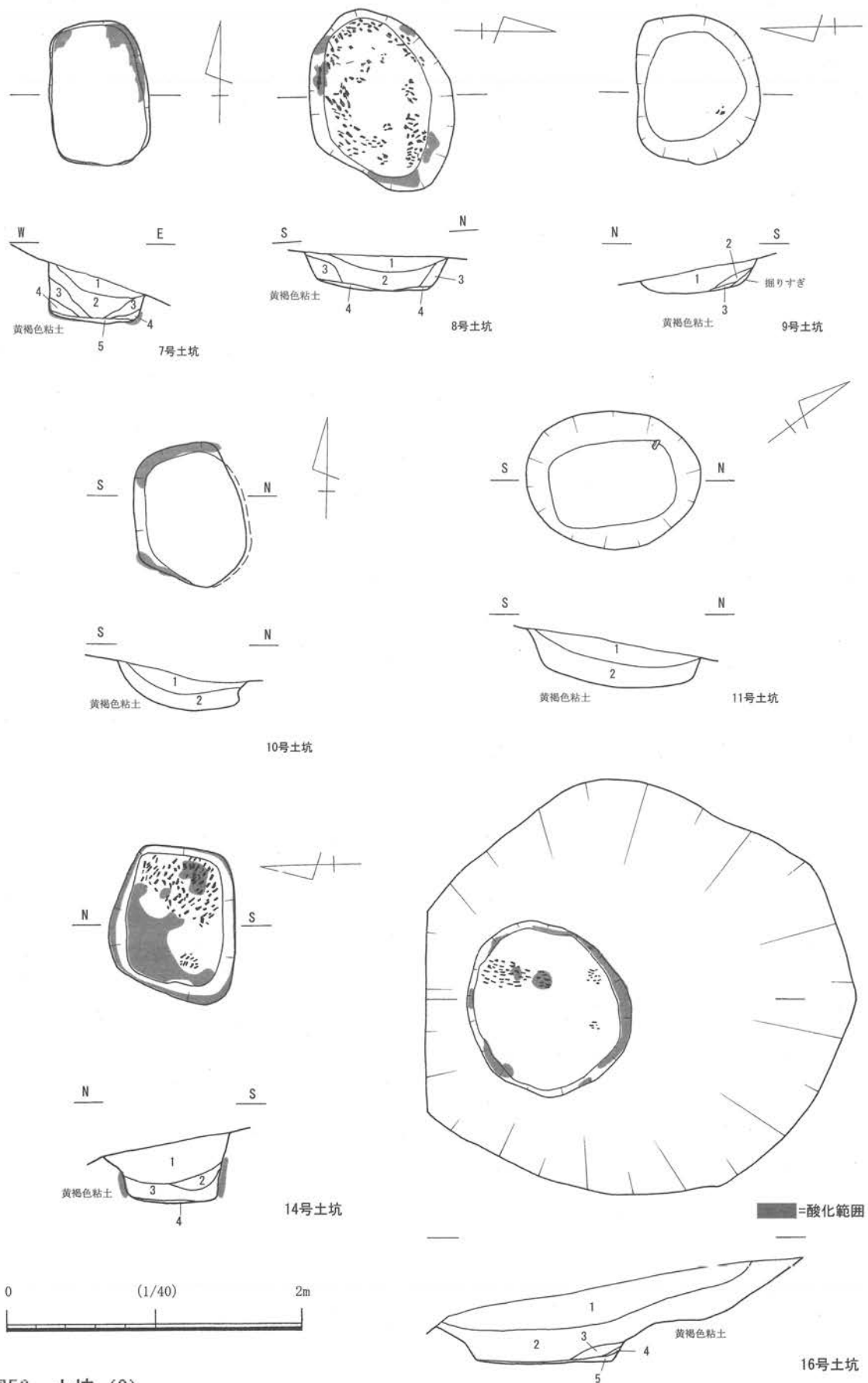


图56 土坑 (2)

9号土坑

長軸 1.01m×短軸 0.83mの不整楕円形の土坑である。深さは 0.16mである。地山の黄褐色土を掘り込んで造られている。

覆土は3層に分層された。壁際に薄く堆積した最下層の3層は、木炭主体の堆積土で、本土坑が機能していた段階の堆積層と考えられる。壁際に三角堆積した2層は焼土を多量に含む赤褐色土で、焼壁の崩落に伴う堆積土と推定される。最上層の1層は、炭粒を多量に含む黒褐色土である。本土坑は主にこの1層によって埋没している。

掘り込みは、平坦な底面から壁が緩やかに立ちあがる浅い皿状である。焼壁は認められないが、2層に多量の焼土が含まれることから、崩落により失われた可能性が高い。

本土坑は、底面に木炭層が認められること、焼壁に由来すると考えられる焼土が堆積土のなかに多量に混入することから、いわゆる木炭焼成土坑と推定される。木炭層は、土坑の作業の際に生産された木炭のカスが遺存したものと考えられる。本土坑から遺物の出土はなく、時期を推定する手掛かりは得られなかった。

(藤木)

10号土坑

長軸 0.97m×短軸 0.72mの不整五角形の土坑である。深さは 0.25mである。地山の黄褐色粘土を掘り込んで造られている。

覆土は2層に分層された。最下層に堆積したシルト質の黒色土である2層は、径1mmほどの焼土ブロックを多量に含む。2層に含まれる焼土は、後述する焼壁の崩落により、堆積土中に混入したものと推定される。また、炭を少量含んでいた。1層は同じくシルト質の黒色土で、顕著な混入物は認められなかった。自然流入土と考えられる。

土坑底面は東半部が平坦であるが、西半は緩やかにカーブして立ち上がり、そのまま西壁へ移行している。東壁は下半部がオーバーハングするが、上半は外に開く。上半ももとは下半と同様にオーバーハングしていたと考えられるが、崩落により変形したものと推測される。なお、北壁と南壁の一部は被熱し赤化している。北壁の焼けは特に強い。

本土坑は、堆積土に木炭粒の顕著な混入は認められないものの、焼壁が一部に認められ、また焼壁に由来すると考えられる焼土が堆積土中に多量に混入することから、いわゆる木炭焼成土坑である可能性が高い。なお、本土坑から遺物の出土はなく、時期を推定する手掛かりは得られなかった。

(藤木)

11号土坑

長軸 1.16m×短軸 0.94mの楕円形の土坑である。底面の形状は隅丸長方形であることから、本来は隅丸長方形の掘り込みであったと推定される。深さは 0.31mである。地山の黄褐色粘土を掘り込んで造られている。

覆土は2層に分層された。2層は灰褐色粘土質シルト、1層は暗灰褐色シルトで、いずれも自然流入土である。土坑の掘り込みは、中央がやや窪む浅い皿状の底面から壁が外傾して立ち

あがる。

なお、底面直上から製鉄炉の炉底片が出土している。土坑の性格を推定できるだけの知見は得られなかった。

(藤木)

14号土坑

長軸 1.01m×短軸 0.79mの長方形の土坑である。深さは 0.43mである。地山の黄褐色粘土を掘り込んで造られている。

覆土は4層に分層できた。底面直上に薄く堆積した木炭主体層である4層は、本土坑が機能していた段階の堆積層と推定される。その上に堆積した3層は、土坑廃絶後の初期の堆積土である。焼土ブロック主体で地山と同質の黄褐色粘土ブロックを少量含むことから、本層は焼壁の崩落による堆積土と推定される。壁際に三角堆積した灰黄褐色土である2層は、地山と同質の黄褐色粘土ブロックを含み、土坑壁の崩落による堆積土と考えられる。覆土の最上層に堆積した灰褐色土である1層は、炭・焼土を少量含む。自然流入土と推定される。

土坑の掘り込みは、平坦な底面から四壁がほぼ垂直に立ち上がる。壁は上半がやや外に開くが、これは崩落によるものと考えられる。四壁の下半から底面の大半が被熱により赤化している。被熱し焼けた部分の厚さは3cmほどである。壁上半も被熱していたと推定されるが、先述したように3層に含まれる焼土ブロックは焼壁に由来するものと考えられ、上半の被熱した部分は崩落により失われたと考えられる。

本土坑は、底面に木炭層が認められること、焼壁が認められることから、いわゆる木炭焼成土坑と推定される。木炭層は、土坑の作業の際に生産された木炭のカスが遺存したものと考えられる。本土坑から遺物の出土はなく、時期を推定する手掛かりは得られなかった。

(藤木)

16号土坑

長軸 2.88m×短軸 2.77mの不整形の土坑である。深さは 0.5mである。地山の黄褐色粘土を掘り込んで造られている。

覆土は5層に分層された。底面直上に薄く堆積した5層は木炭主体の層であり、本土坑が機能していた段階の堆積層と推定される。壁際に三角堆積した4層は、焼土ブロック主体の層である。焼土は焼壁の崩落によるものと考えられ、土坑廃絶後の初期堆積土と推定される。同じく壁際に三角堆積した3層は、地山と同質の黄褐色粘土主体の層で、壁の崩落に伴う初期の堆積土と考えられる。また3層は炭を少量含む。本土坑の大半を埋めているのはレンズ状に堆積した1・2層である。2層は炭を少量含む暗褐色土、1層は炭を少量含む黒褐色土で、いずれも自然流入土と考えられる。

土坑壁は、底面近くでは垂直に近い急な傾斜をもつが、上部は大きく外に開き、内湾気味に立ちあがる。底面は平坦である。壁は底面近くに被熱による赤化が部分的に認められる。

本土坑の性格については、底面直上に炭主体の層がみられること、焼壁が認められることから、いわゆる木炭焼成土坑と考えられる。底面に堆積した炭は、土坑内で木炭を焼成した際の

カスが遺存したものと考えられる。土坑上部が外に大きく開く点は、同じく木炭焼成土坑と推定される他の土坑にはみられない特徴である。なお、本土坑から遺物の出土はなく、時期を推定する手掛かりは得られなかった。

(藤木)

遺構外出土遺物 (図 57-1. 58-1・3. 59-1・2 : 図版 112-1・2. 113-1~3)

図 57-1 は鉄製釘である。釘頭部は扁平に仕上げられ、先端部に向かって細くなる。断面形は四角形である。釘頂部から先端までの長さは 8.6 cm である。表面の所々には木質が残存している。

図 58-1 は 4T 付近から出土した土鈴で、最大径 5.8 cm の球形である。球状の鈴体部の上部には最大幅 2.9 cm、高さ 1.1 cm の紐が付く。紐の中央には直径 0.8 cm の孔が穿たれている。鈴体部の下部には長さ 2.7 cm、幅 0.6 cm の切れ込みが見られる。紐の長辺と切れ込みの長辺は直交する。鈴体部内には楕円形の土製玉が確認される。

同図 3 は出土地不明の土鈴である。球状に近い鈴体部は最大幅 4 cm を計測し、鈴体部の上部には長さ 2.9 cm、高さ 2.7 cm の紐が付く。紐の断面形は台形で紐の中央には最大径 0.7 cm の孔が穿たれている。鈴体部の下部には長さ 3.5 cm、最大幅 0.7 cm の切れ込みが見られる。紐の長辺と切れ込みの長辺は直交する。鈴体部内には土製の玉が確認される。

図 59-1 は須恵器の甕である。底部は欠損しており、甕全体の形状を知ることができない。口縁部径は 23.7 cm、胴部最大径は 42.8 cm である。胴部外面には平行タタキが施され、内面にはユビナデが残る。頸部から口縁部にかけては強く外反し、口縁端部形状は T 字形である。

同図 2 は須恵器である。高台が見られることから、長頸瓶である可能性が高い。体部下半には 2 条 1 対の横位沈線が 2 条巡る。高台内部には溶着した須恵器片が見られる。

(荒)

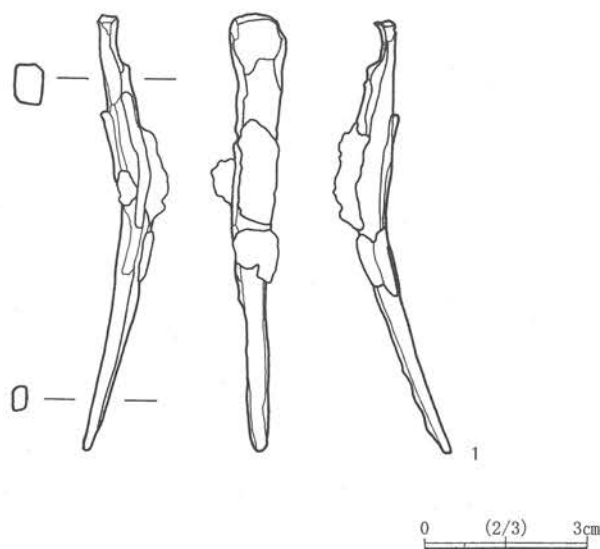


図57 鉄製品

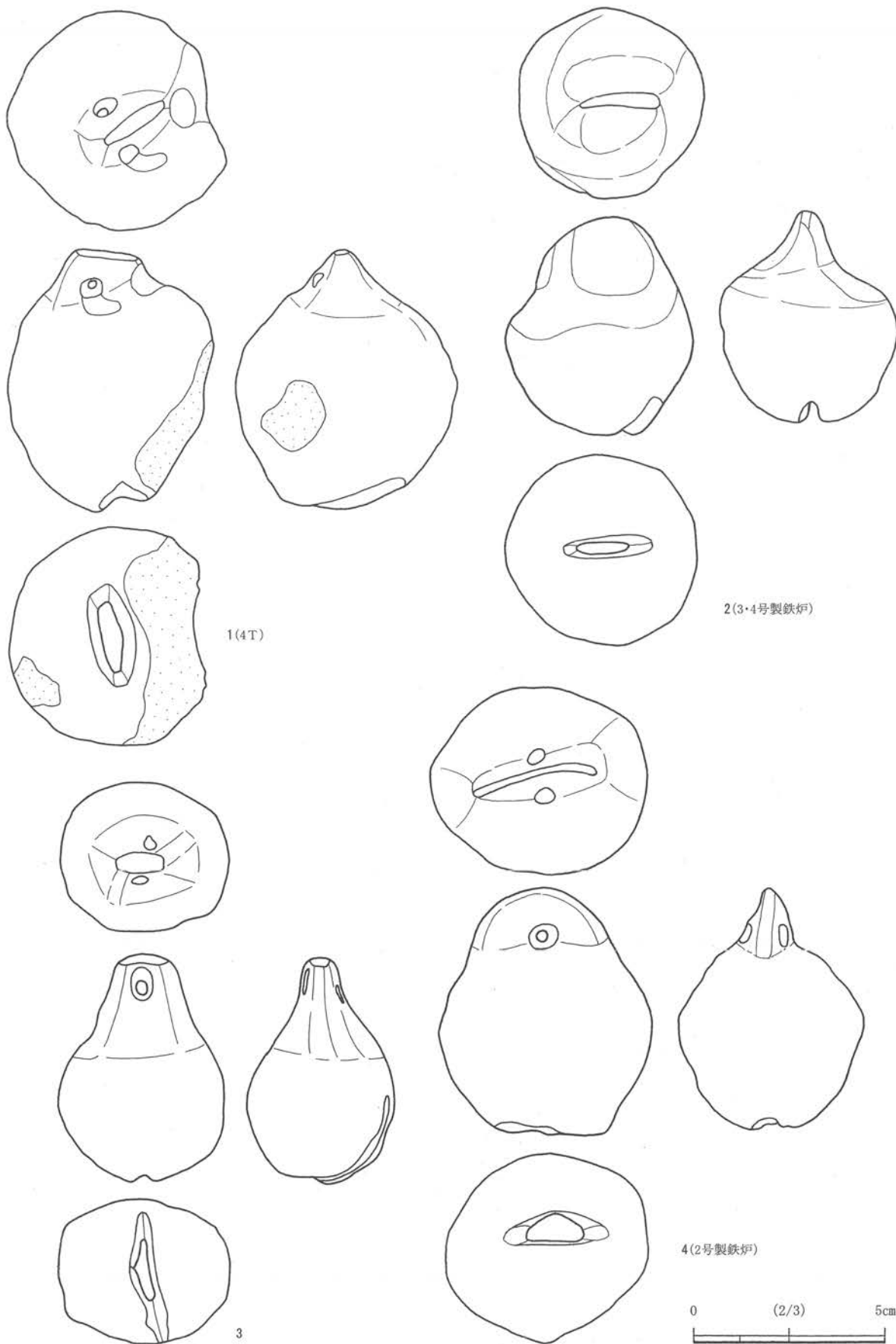


図58 土鈴

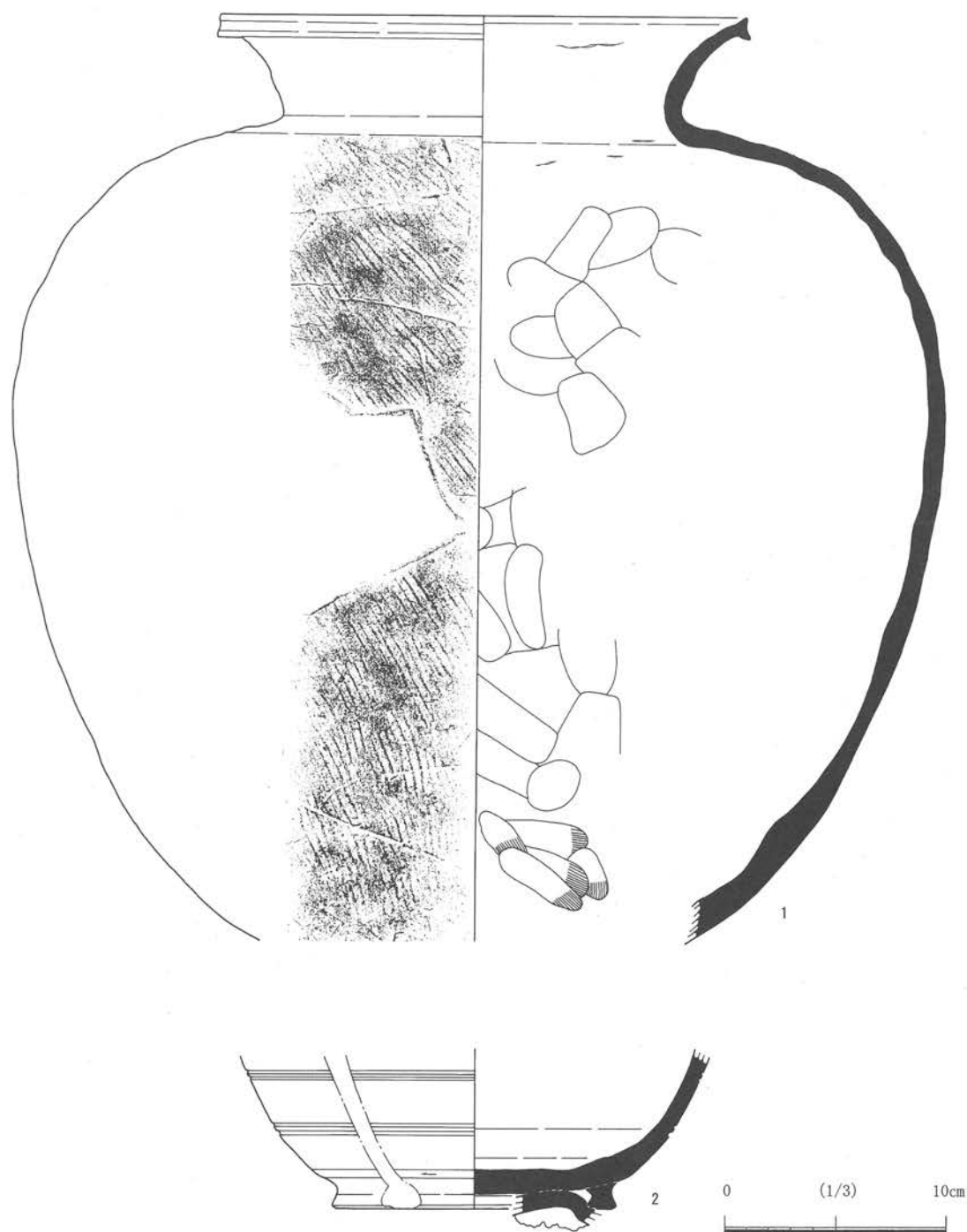


図59 遺構外出土遺物

第3項 蛭沢遺跡群のまとめ

前節で報告したように、当地点では6基の製鉄炉跡が確認されている。このうち、3・4号製鉄炉跡5・6号製鉄炉跡は、それぞれ作業場を共有し、2基が並列して営まれたものである。一方、1号製鉄炉跡と2号製鉄炉跡はそれぞれ1基が単独で営まれたものである。

これらの炉跡に直接的な重複関係はないが、3・4号製鉄炉跡に伴うと推定される廃滓層の下層で5・6号製鉄炉跡を確認しており、さらに、3・4号製鉄炉跡の上部堆積層が、これらの炉跡よりも斜面上位に位置する1号製鉄炉跡に伴う廃棄物に由来する可能性があることから、5・6号製鉄炉跡→3・4号製鉄炉跡→1号製鉄炉跡の順に、順次斜面上位へ移動しながら操業がおこなわれたものと推定しておきたい。3号製鉄炉跡と4号製鉄炉跡、あるいは5号製鉄炉跡と6号製鉄炉跡の構築順序は不明であるが、それぞれ2基が同時ないし交互に操業したものと考えられる。2号製鉄炉跡は、これらよりも斜面下位に位置するが、先後関係は不明である。いずれにしても、当地点では、6基の製鉄炉が一定期間内に継続的な操業を行っていたと推測される。

これらの製鉄炉跡から、谷を隔てて向かい合う丘陵に、1・2号木炭窯跡が位置している。2基の木炭窯跡は作業場が重複し、1号木炭窯跡が2号木炭窯跡よりも新しいことが明らかとなっている。これらの木炭窯跡も、1～6号製鉄炉跡の継続的な操業に伴って、燃料となる木炭を生産するために構築され、継続的に製炭を行っていたものと思われる。

竪穴住居跡は1軒が確認されたのみで、出土遺物がなく時期は不明である。しかし、上記製鉄関連施設に付随した竪穴住居と考えられる。

土坑は16基が調査された。その多くは壁や底面が強く酸化し、最下層に木炭層が認められることから、いわゆる木炭焼成土坑、または伏焼土坑と称されているものである。1・2号木炭窯による製炭のほか、このような簡素な炭焼施設も多数営まれていたと考えてよいであろう。

出土遺物のほとんどは、フイゴ羽口、炉壁、土鈴、鉄滓などの製鉄関連遺物である。鉄滓の総重量は約70tにもおよぶ。フイゴ羽口の多くは廃滓場から出土している。土鈴は、3・4号製鉄炉跡に伴って出土したものである。また、遺構外出土の須恵器は、高台のつく底部から内湾する体部が立ち上がるもので、大きさ、器形から壺の一部と推定されるが、時期は不明である。

(藤木)

挿 図	出土位置	先端部		吸気部		最大長	D	装着角度 (90° - α)	調 整	備 考	図 版
		内径	外径	内径	外径						
35-1	A	4.2		7.0	8.8	14.8	2.4	17°	ケズリ		101-1
35-2	A	3.0		6.9	×8.8	13.2	4.7	1°	ヘラナデ, 指頭圧痕, ナデ		101-2
35-3	A	×3.6		5.2	7.3	10.0	2.2	6°	ヘラナデ		101-3
35-4	A	3.2		5.1	7.1	10.3	5.3	23°	ヘラナデ		101-4
35-5	B	3.0		4.5	6.8	15.0	5.2	27°	ケズリ, 指頭圧痕		101-5
35-6	B	4.5		7.0	9.7	17.7	8.9	32°	ヘラナデ, 指頭圧痕		101-6
35-7	B	2.9		6.2	8.1	15.2	4.9	8°	ナデ, 指頭圧痕		101-7
35-8	B	3.5		6.5	8.2	13.6	4.6	11°	ナデ, 指頭圧痕		101-8
35-9	B	4.0		6.3	8.7	13.4	3.7	12°	ヘラナデ		101-9
35-10	B	3.7		4.7	7.4	13.0	3.7	16°	ナデ		101-10
35-11	B	×3.7		5.3	6.8	12.7	7.0	25°	ケズリ		101-11
35-12	B	3.3		5.7	7.1	11.5	4.3	18°	ケズリ, 指頭圧痕		101-12
35-13	B	2.8		5.1	6.8	12.0	2.6	17°	ケズリ	タガ状痕	101-13
35-14	B	3.5		5.5	6.7	11.4	1.6	5°	ヘラナデ, 指頭圧痕		101-14
36-15	B	3.0		4.9	6.4	10.5	1.7	5°	指頭圧痕		101-15
36-16	B	3.2		5.4	7.9	9.5	4.7	9°	ケズリ, 指頭圧痕		101-16
36-17	B	3.7		5.2	7.4	7.2	2.2	19°	ヘラナデ		101-17
36-18	B	3.3		6.0	8.2	8.0	2.5	4°	ケズリ, ナデ		101-18
36-19	C	3.5		4.9	7.4	12.1	4.7	6°	ヘラナデ		101-19
36-20	C	(3.0)		5.9	7.4	11.5	4.8	25°	ヘラナデ, ナデ		101-20
36-21	C	3.2		5.7	7.1	8.9	3.4	21°	ケズリ		101-21
36-22	C	3.8		6.4	8.0	13.0	5.9	36°	ヘラナデ, 指頭圧痕		101-22
36-23	D	3.1		4.5	7.5	11.5	4.4	16°	ケズリ, ナデ		101-23
36-24	D	3.2		5.7	7.5	8.5	2.4	10°	ヘラナデ		101-24
36-25	D	3.0		5.7	10.6	10.7	3.1	9°	ケズリ		102-25
36-26	D	3.4		5.6	7.6	10.8	3.1	2°	ヘラナデ		102-26
36-27	D	3.7		5.8	8.0	10.5	4.6	2°	ケズリ, ヘラナデ		102-27
36-28	D	3.7		4.1	5.8	10.8	—	—	ヘラナデ		102-28
36-29	D	—		6.3	7.7	9.1	4.0	24°	ヘラナデ, ナデ		102-29
36-30	D	3.0		5.5	7.4	13.0	5.9	8°	ヘラナデ		102-30
36-31	D	3.2		5.4	7.6	12.2	—	—	ヘラナデ		102-31
36-32	D	3.0		4.7	×7.5	10.8	—	—	ヘラナデ		102-32
36-33	D	3.2		5.3	6.5	10.2	2.5	8°	ヘラナデ, 指頭圧痕, ナデ		102-33
36-34	D	3.7		4.7	×7.8	6.6	3.2	16°	ナデ, 指頭圧痕		102-34
37-35	D	3.1		5.3	7.0	11.4	4.5	1°	ケズリ		102-35
37-36	D2	3.6		6.3	7.3	11.5	3.2	22°	ヘラナデ	タガ状痕	102-36
37-37	D2	3.1		5.5	6.3	8.7	3.5	8°	ヘラナデ, 指頭圧痕		102-37
37-38	D	3.4		6.0	7.7	12.2	5.3	20°	指頭圧痕, ヘラナデ		102-38
37-39	E	3.7		5.3	7.4	10.9	3.3	19°	ヘラナデ		102-39
37-40	E	2.8		5.6	7.2	11.8	4.4	10°	ケズリ		102-40
37-41	E	3.6		5.5	10.1	10.2	1.5	5°	ケズリ		102-41
37-42	E	3.4		5.8	8.1	10.8	2.4	4°	ヘラナデ		102-42
37-43	E	3.4		5.8	7.5	10.4	3.8	18°	ヘラナデ	タガ状痕	102-43
37-44	E	(3.0)		5.5	7.4	10.7	2.3	8°	ケズリ, ヘラナデ		102-44
37-45	E	3.6		5.9	7.4	9.6	3.2	11°	ヘラナデ, 指頭圧痕		102-45
37-46	E	2.9		5.9	7.4	12.1	3.9	12°	ヘラナデ	タガ状痕	102-46
37-47	E	3.3		4.6	6.7	9.0	2.5	10°	ヘラナデ	タガ状痕	102-47
37-48	E	3.2		5.6	7.6	12.0	4.6	1°	ナデ		102-48
37-49	E	3.3		5.4	7.5	8.8	4.5	26°	ナデ		102-49
37-50	E	3.0		4.5	6.8	10.9	4.9	12°	ナデ		102-50
37-51	E	3.1		4.3	6.8	9.4	3.9	28°	ナデ		102-51
37-52	E	2.2		5.7	7.4	9.1	2.1	7°	ナデ		102-52
37-53	E	3.1		5.8	8.5	8.0	3.4	19°	ナデ		102-53
37-54	E	2.8		3.8	6.2	8.0	2.5	17°	ナデ		102-54
38-55	E	3.3		4.8	7.2	8.9	1.8	15°	ナデ		103-55
38-56	E9	3.0		5.9	7.0	11.1	4.5	12°	ケズリ, ヘラナデ		103-56
38-57	E9	3.5		6.2	7.7	12.0	6.1	30°	ヘラナデ, ナデ		103-57
38-58	E9	3.3		6.2	7.9	11.3	1.2	4°	ヘラナデ, ナデ, 指頭圧痕		103-58
38-59	E9	3.6		4.5	6.8	12.0	3.4	29°	ヘラナデ		103-59
38-60	F9	3.1		6.4	7.8	11.8	4.8	10°	ヘラナデ		103-60
38-61	F9	3.0		6.2	8.5	14.3	5.4	11°	ヘラナデ		103-61

表7 羽口観察表(1)

蛭沢遺跡群のまとめ

挿図	出土地点	先端部		吸気部		最大長	D	装着角度	調 整	備 考	図 版
		内 径	外 径	内 径	外 径						
38-62	F9	—	5.7	7.2	12.6	4.0	17°	ケズリ, 指頭圧痕			103-62
38-63	F9	3.9	7.4	8.8	14.2	5.9	11°	ヘラナデ, 指頭圧痕			103-63
38-64	F9	3.4	5.8	8.5	9.8	3.9	12°	ケズリ			103-64
38-65	F9	—	5.1	—	12.0	3.0	15°	ヘラナデ, ナデ			103-65
38-66	F9	3.8	5.3	6.9	8.2	3.6	32°	ケズリ, 指頭圧痕			103-66
38-67	F9	3.7	5.7	7.6	9.7	2.5	19°	ヘラナデ			103-67
38-68	F9	3.0	4.8	7.0	10.2	4.0	26°	ヘラナデ			103-68
38-69	F10	3.3	5.8	7.2	11.1	4.8	23°	ケズリ, ナデ, 指頭圧痕			103-69
38-70	F10	3.8	6.3	7.2	9.3	4.3	17°	指頭圧痕	タガ状痕		103-70
38-71	F10	3.1	5.5	6.8	9.7	2.7	26°	ヘラナデ, 指頭圧痕			103-71
38-72	F10	3.6	6.3	7.8	9.2	5.6	24°	ケズリ, ナデ			103-72
38-73	F10	3.3	7.0	8.8	9.8	3.2	7°	ナデ, 指頭圧痕			103-73
39-74	F10	3.2	5.3	6.8	10.2	3.2	25°	ヘラナデ, 指頭圧痕	タガ状痕		103-74
39-75	F10	3.3	5.0	×6.5	13.4	3.7	3°	ナデ			103-75
39-76	F13	2.7	6.5	7.7	(11.9)	2.2	15°	ケズリ, 指頭圧痕			103-76
39-77	F13	3.2	6.1	7.4	(11.9)	3.5	4°	ケズリ, 指頭圧痕			103-77
39-78	F13	3.2	6.1	7.7	(11.2)	3.6	17°	ナデ			103-78
39-79	G	4.5	5.4	7.6	10.4	6.7	38°	ケズリ			104-79
39-80	G	3.5	3.9	6.2	10.0	3.3	19°	ヘラナデ			104-80
39-81	G	3.2	5.9	7.0	12.7	4.8	15°	ナデ			104-81
39-82	G	3.4	6.2	10.2	9.2	5.7	18°	指頭圧痕			104-82
39-83	G	2.8	5.4	7.5	12.2	3.2	13°	ヘラナデ, ナデ			104-83
39-84	G	3.2	4.5	6.2	10.9	4.6	16°	ケズリ, ヘラナデ			104-84
39-85	G	3.0	4.6	11.7	11.5	3.3	1°	ケズリ			104-85
39-86	G	3.4	6.0	7.4	11.5	5.3	21°	ケズリ, ヘラナデ			104-86
39-87	G	3.9	5.9	7.5	8.9	4.4	7°	ヘラナデ			104-87
39-88	G	4.0	5.7	7.7	11.4	3.3	4°	ケズリ, ヘラナデ			104-88
39-89	G	3.0	4.6	8.9	8.3	1.9	3°	指頭圧痕			104-89
39-90	G	3.2	5.0	×6.5	9.3	3.4	2°	ヘラナデ, ナデ	タガ状痕		104-90
39-91	G	3.3	6.8	8.2	(10.8)	2.9	10°	ヘラナデ, 指頭圧痕			104-91
39-92	G	—	6.2	8.2	—	—	—	ヘラナデ			104-92
40-93	G	2.8	4.4	6.1	9.2	3.5	17°	ヘラナデ			104-93
40-94	G11	2.9	4.8	6.5	6.9	4.0	13°	ナデ, ヘラナデ			104-94
40-95	G11	3.2	5.8	7.3	8.2	2.5	6°	ケズリ, 指頭圧痕			104-95
40-96	G ⁺ 鉢L1	3.4	7.1	8.8	10.6	5.0	25°	ナデ, 指頭圧痕			104-96
40-97	G ⁺ 鉢L1	2.6	5.6	7.7	10.4	2.2	13°	ケズリ, ナデ			104-97
40-98	G ⁺ 鉢L3	3.5	6.4	8.3	10.3	4.5	10°	ケズリ, ナデ			104-98
40-99	G ⁺ 鉢L6	2.9	5.0	6.7	10.0	—	—	ナデ			104-99
40-100	G ⁺ 鉢L6	3.6	5.4	7.0	7.5	2.4	2°	ヘラナデ			104-100
40-101	G ⁺ 鉢L9	3.2	5.4	6.8	10.5	3.2	2°	ケズリ, ナデ			104-101
40-102	G ⁺ 鉢L9	3.4	4.9	7.0	10.6	3.3	10°	指頭圧痕			104-102
40-103	G ⁺ 鉢L9	3.2	5.6	7.1	11.5	5.5	13°	ケズリ, 指頭圧痕			104-103
40-104	G ⁺ 鉢L9	3.2	5.7	6.8	14.9	7.5	25°	ヘラナデ, 指頭圧痕, ナデ			104-104
40-105	G ⁺ 鉢L9	4.5	3.4	7.2	10.4	4.7	28°	ヘラナデ, ナデ			105-105
40-106	H	2.9	4.4	6.7	11.4	2.2	11°	ケズリ			105-106
40-107	H	3.4	5.0	6.5	11.4	3.8	11°	ケズリ, 指頭圧痕			105-107
40-108	H	3.1	4.1	7.5	11.0	1.5	2°	ヘラナデ, 指頭圧痕			105-108
40-109	H	3.5	4.3	6.6	11.5	2.3	5°	ヘラナデ, 指頭圧痕			105-109
40-110	H	3.2	5.5	7.3	12.6	3.7	17°	ヘラナデ			105-110
40-111	H	3.5	5.9	8.9	8.9	2.9	5°	ヘラナデ, ケズリ	タガ状痕		105-111
40-112	H12	2.7	5.5	7.5	11.6	2.2	10°	ナデ, 指頭圧痕			105-112
41-113	H12	3.3	5.6	7.4	10.5	2.4	12°	ケズリ			105-113
41-114	H12	2.9	7.5	8.6	13.2	5.4	10°	ヘラナデ, 指頭圧痕			105-114
41-115	H12	3.6	5.7	7.7	11.0	4.0	20°	ケズリ, ナデ			105-115
41-116	H12	4.1	5.8	7.3	10.3	5.0	26°	ケズリ	タガ状痕		105-116
41-117	H12	2.9	7.0	×9.0	13.2	—	—	指頭圧痕			105-117
41-118	H12	—	7.3	—	—	3.4	19°	ケズリ			105-118
41-119	H12	—	6.4	—	—	4.9	10°	ケズリ, 指頭圧痕			105-119
41-120	K	2.9	5.3	7.0	11.2	4.5	25°	ナデ			105-120
41-121	N	3.0	6.7	7.8	13.2	3.6	11°	ナデ			105-121

表 8 羽口観察表 (2)

挿 図	出土地点	先端部			吸気部		最大長	D	装着角度	調 整	備 考	図 版
		内 径	内径	外径	内径	外径						
41-122	N	3.2	6.2	6.8	9.5	1.8	10°	ケズリ			105-122	
41-123	N	3.8	4.4	6.8	9.6	3.4	22°	ヘラナデ			105-123	
41-124	N	2.9	4.6	7.3	13.2	5.9	12°	ナデ			105-124	
41-125	N	3.6	5.5	7.6	11.9	4.3	23°	ナデ			105-125	
41-126	N	4.0	6.0	8.7	12.5	5.7	34°	ナデ			105-126	
41-127	N	3.2	7.0	8.5	7.7	4.0	8°	ナデ			105-127	
41-128	N	3.5	5.3	5.8	9.5	5.9	30°	ナデ			106-128	
42-129	N	(3.0)	5.8	7.9	12.3	6.1	26°	ナデ			106-129	
42-130	N	3.3	6.0	8.0	13.7	3.9	17°	ナデ			106-130	
42-131	N	2.7	5.7	7.3	13.0	4.0	12°	ナデ			106-131	
42-132	N	3.3	5.3	6.2	13.3	4.4	14°	ナデ			106-132	
42-133	N	3.4	6.6	8.3	10.5	2.1	12°	ナデ			106-133	
42-134	N	4.0	5.5	7.5	9.9	4.3	5°	ナデ			106-134	
42-135	N	3.5	5.0	7.3	9.9	3.7	20°	ナデ			106-135	
42-136	N	3.1	5.5	7.5	9.5	2.3	4°	ナデ			106-136	
42-137	N	3.6	6.6	8.1	8.9	1.9	4°	ナデ			106-137	
42-138	N	3.5	4.8	7.2	8.0	1.0	5°	不明			106-138	
42-139	N	3.3	5.8	7.3	9.0	3.3	12°	ヘラナデ, ナデ			106-139	
42-140	N	2.6	5.2	7.2	11.1	4.3	13°	ヘラナデ, 指頭圧痕			106-140	
42-141	N	3.6	5.6	7.2	9.1	-	-	ヘラナデ	タガ状痕		106-141	
42-142	N	3.3	5.7	7.2	11.1	4.5	7°	ケズリ	タガ状痕		106-142	
42-143	N	3.5	5.7	7.0	8.2	2.7	20°	ケズリ			106-143	
42-144	N	3.3	4.8	7.6	11.0	4.2	5°	ヘラナデ			106-144	
42-145	N	4.1	6.3	7.3	9.6	2.9	7°	ヘラナデ, ナデ			106-145	
42-146	N	3.2	5.2	7.0	8.6	-	-	ナデ, 指頭圧痕			106-146	
42-147	N	3.5	7.2	8.8	11.4	2.9	7°	ケズリ			106-147	
42-148	N	3.0	4.5	7.3	12.4	4.3	11°	ケズリ			106-148	
43-149	N	2.9	6.5	8.3	12.5	4.8	5°	ヘラナデ, ナデ			106-149	
43-150	N	2.8	6.5	8.0	11.4	3.4	12°	ヘラナデ, ナデ			106-150	
43-151	O	3.1	4.6	6.4	15.4	4.6	5°	ヘラナデ			106-151	
43-152	O	3.3	5.0	6.9	15.8	5.4	22°	ヘラナデ			107-152	
43-153	O	3.0	4.8	6.8	15.9	6.1	11°	ヘラナデ, 指頭圧痕			107-153	
43-154	O	3.7	6.3	8.1	16.9	8.8	35°	ケズリ, 指頭圧痕			107-154	
43-155	O	3.7	5.4	14.4	14.2	4.9	18°	ヘラナデ			107-155	
43-156	O	3.6	5.5	7.4	8.1	2.2	7°	ヘラナデ			107-156	
43-157	O	3.4	4.7	7.1	7.7	1.5	5°	ケズリ			107-157	
43-158	L	3.6	5.5	×8.0	12.2	3.5	8°	ケズリ, 指頭圧痕			107-158	
43-159	L	3.0	-	×8.0	12.5	5.6	27°	ケズリ, ナデ			107-159	
43-160	-	3.4	5.7	10.0	10.3	2.9	11°	ヘラナデ			107-160	
43-161	-	3.5	5.2	7.4	10.3	4.7	2°	ヘラナデ	タガ状痕		107-161	
43-162	-	3.6	6.2	8.2	10.2	4.5	20°	ヘラナデ, ケズリ			107-162	
43-163	-	3.5	5.4	7.6	12.5	4.6	16°	ヘラナデ	タガ状痕		107-163	
43-164	-	3.6	6.4	7.6	7.7	1.3	0°	ケズリ, 指頭圧痕			107-164	
43-165	-	3.5	4.5	7.3	10.9	2.8	6°	ケズリ			107-165	
44-166	-	-	-	-	(14.6)	-	-	ナデ			107-166	
44-167	-	2.8	5.7	7.5	21.1	-	-	ヘラナデ, ケズリ, 指頭圧痕			107-167	
44-168	F9	-	-	-	-	-	-	ケズリ	線刻「下」		107-168	
44-169	F9	3.0	-	-	16.0	-	-	ケズリ	粘土付着		107-169	
44-170	0	3.2	6.6	8.7	25.5	-	-	ナデ, 指頭圧痕			107-170	
44-171	-	3.5	6.1	7.4	19.0	-	-	ケズリ, 指頭圧痕			107-171	
44-172	-	-	6.7	7.8	18.7	-	-	ケズリ, ナデ			107-172	
44-173	-	3.7	-	-	19.0	-	-	ケズリ	炭化物		107-173	
45-174	-	-	-	-	-	-	-				108-174	
45-175	-	-	-	-	-	-	-				108-175	
46-176	-	-	-	-	-	-	-				109-176	
46-177	-	-	-	-	-	-	-				109-177	
47-178	-	-	-	-	-	-	-				110-178	
47-179	-	-	-	-	-	-	-				110-179	
48-180	-	-	-	-	-	-	-				111-180	

表9 羽口観察表(3)

挿 図	出土地点	器 種	法 量								備 考	図 版
			幅	最大長	直径	紐幅	紐高	紐厚	切込幅	切込長		
58-1	4T・L1	土 鈴	(5.2)	6.9	5.7	3.1	1.4	1.7	1.2	2.7	紐孔有	113-1
58-2	3・4炉	土 鈴	4.9	5.7	5.0	3.7	2.7	1.4	0.6	2.3	紐孔無	113-2
58-3	不 明	土 鈴	4.4	5.8	4.4	2.7	2.7	1.6	0.7	3.5	紐孔有	113-3
58-4	2炉	土 鈴	5.6	6.5	5.3	3.7	1.6	1.5	0.9	2.3	紐孔有	113-4

表 10 土鈴観察表

挿 図	出土地点	器種	部 位	法量 (器厚)		文 様 ・ 調 整	備 考	図 版
				口径/器高/底径				
54-1	L 1	壺	頸~底	- / (28.0)	10.0	外面：体部へラ描同心円文 横位沈線文 斜位捺糸文		112-3
54-2	L 1	壺	胴 部	0.9		外面：へラ描同心円文		112-4
57-1	遺構外	釘	完 形	8.6/0.6/0.9				-
59-1	遺構外	甕	口~胴部	23.6/41.4/-		外面：平行タタキ ロクロナデ 内面：ナデ		112-1
59-2	遺構外	壺	体 部	0.9		外面：ロクロナデ	溶着資料	112-4

表 11 出土遺物観察表 (1)

第3編 川内迫B遺跡群

第1章 遺跡群の概要

川内迫B遺跡群は、阿武隈高地から太平洋に向かって派生する標高40m前後の低位丘陵上に位置する(図60)。この丘陵には大小の谷が樹枝状に入り込んでおり、複雑な地形を形成する。川内迫B遺跡群は、このような丘陵の西半に展開する。試掘調査結果では12地点が設けられた。

C地点は、当遺跡群では最大の面積を有する調査地点である。C地点は遺跡群全体では中央やや西寄りに位置し、丘陵頂部から裾部にかけての広範囲で遺構、遺物が確認されている。

D地点は、丘陵の北端に位置する調査地点である。この調査地点は遺跡群が展開する主丘陵を形成する小規模な尾根のうち、北に向かって派生する小尾根の突端に位置しており、他の調査地点と比較すると調査地点の面積は300㎡と小規模である。

E地点は、丘陵の中心部に近い場所に位置する調査地点である。調査地点は丘陵北に向かって分断する大規模な谷の最深部に位置している。F地点は当遺跡群では最も南側に位置する調査地点である。当地点は遺跡が展開する主丘陵の南西付近において舌状に張り出す尾根の頂部平坦面に位置する。試掘調査では、製鉄に関連する遺構よりも弥生時代に属する土器群ならびに石器群が出土したことが本地点の特徴である。

G地点は、遺跡群北西端に位置する南北に細長く展開する調査地点である。G地点から北側には丘陵を分断する大規模な谷が北に向かって走り、G地点はこの谷によって形成された斜面地に広がる。調査区の南北は約200mの規模を有する。H地点は、遺跡群西部に位置する調査地点である。当地点における遺構の分布は非常に単発的な状況で、遺構は約5箇所において確認されている。これらを総括してH地区と総称した。

I地点は主丘陵のほぼ中央に近い地点に位置する調査地点である。H地点同様に集中した遺構分布は見られず、4箇所で遺構が確認され、この4箇所を総称してI地点と呼ぶ。J地点は、B遺跡群の東側に位置する調査地点である。主丘陵を西に向かって走る大規模な谷の最深部に位置し、K地点は、J地点が所在する尾根の南斜面に位置する調査地点である。K地点の西側には比較的広範囲に開けた谷部と谷地部の中央に3本の尾根が位置する。

L地点は、I地点とJ地点が展開する大規模な谷とK地点が展開する谷によって形成された尾根の突端に位置する調査地点である。遺構は尾根の頂部から尾根中腹にかけての範囲に展開していることが確認されている。M地点は、K地点が展開する開析地のなかに取り残された3本の尾根のうち、最も北に位置する尾根上に位置する調査地点である。M地点における遺構の分布は尾根の突端部で1箇所、尾根の最高部に1箇所の合計2箇所である。両者は約80m程離れているが、同一尾根に所在していることから総称してM地点と呼称している。

N地点は、M地点と同様に主丘陵西側において大規模に形成された開析地の中に取り残されたように位置する3本の尾根の最も南側に位置する尾根上に展開する調査地点である。M地点同様に尾根の突端付近と尾根の最高部付近の2箇所で遺構が確認されている。両者には約40m程の距離があるが、同一丘陵上に位置していることからN地点として捉えている。

(荒)

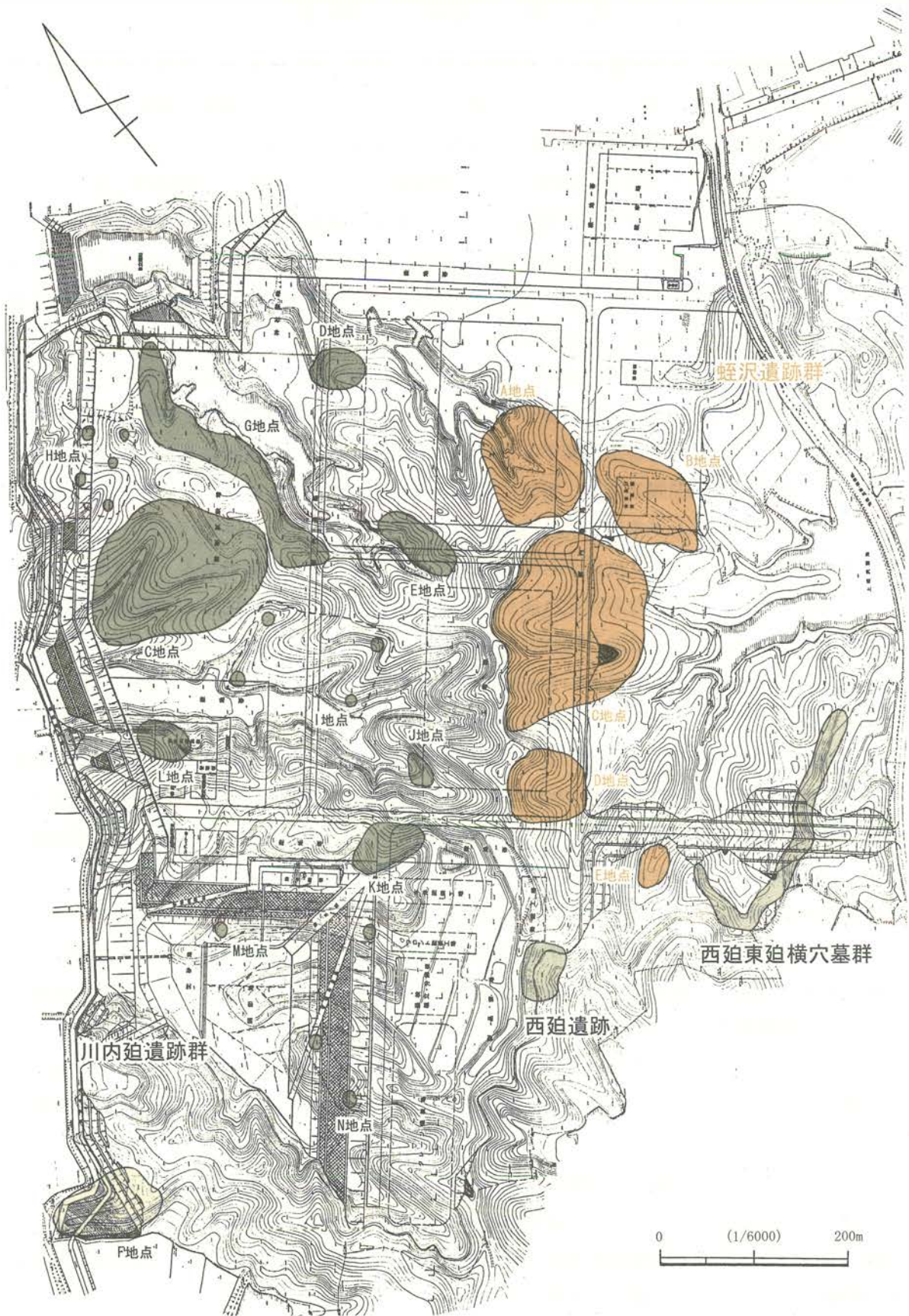


図60 川内迫B遺跡群位置図

第2章 調査要項と調査経過

第1節 調査要項

- 遺跡名** 川内迫B遺跡群
- 所在地** 福島県原町市下太田字川内迫 地内
- 実施期間** 発掘調査 平成4年7月22日～平成9年3月31日
整理作業 平成4年7月22日～平成14年3月31日
- 調査面積** 川内迫B遺跡群
C地点 (8000 m²)・D地点 (300 m²)・E地点 (300 m²)・G地点 (3000 m²)
J地点 (100 m²)・K地点 (300 m²)・L地点 (100 m²)・M地点 (100 m²)
N地点 (150 m²) 合計 (12350 m²)
- 調査担当** 文化財主事 武田耕平・学芸員 齋藤直之

第2節 調査経過

本遺跡群の調査は平成4年度から開始された。調査は同時期に実施されていた試掘調査の結果、遺構が確認されたトレンチを随時拡張することで遺構の全体を検出、調査する手法が採用されたため、トレンチの拡張作業における遺構検出作業からを本調査として捉えている。

以下、各調査地点の調査経過について調査日誌をもとに記載する。

平成4年度

10・11月 川内迫B遺跡群C地点バックホーによる表土剥ぎ開始

平成5年度

- 4月：試掘出土鉄滓袋詰。遺構検出。須恵器甕片多数出土。土坑4基、鉄滓下層で土坑検出。
- 5月：伐根。鉄滓収集。表土除去。廃滓場掘り下げ。廃滓場A・E区より獣脚鋳型、H区から用途不明の土製品出土。C区から須恵器甕出土。出土羽口、鉄滓、炉壁の中から鋳型片の再選別。廃滓場完掘。A・B区から器物の鋳型片出土。H区で長方形箱形炉検出。
- 6月：廃滓場遺構検出。木炭窯調査開始。土坑半割。木炭窯左右の南斜面の遺構検出。西側で土坑3・4基。東側に製鉄炉跡5～6基。焼成土坑検出。土師器出土。尾根の東側に木炭窯確認。測量準備。
- 9・10月：鉄滓袋詰。鉄滓袋詰終了。遺構検出。1号堅穴住居跡から須恵器片多量出土。1・2号製鉄炉跡調査開始。器物鋳型片出土。1号堅穴住居跡から須恵器甕、刀子片出土。1号土坑、2号製鉄炉ファイゴ土層セクション作成。2号製鉄炉ファイゴ(P1～3)セクション図作成。P4・5半割写真撮影、掘り下げ。1号製鉄炉跡掘り下げ。1号製鉄炉跡P1半割後完掘、写真撮影。P2半割後完掘。2号製鉄炉跡P6～10検出。半割後完掘、写真撮影。1号製鉄炉跡P2写真撮影、P3検出、半割後掘り上げ。1号製鉄炉周辺掘り下げ。1号製鉄炉跡P3完掘、写真撮影。P4検出、半割後完掘。写真撮影。1

調査経過

号土坑写真撮影。1号竪穴住居跡セクション、写真撮影。1号製鉄炉・2号製鉄炉周辺掘り下げ。1号製鉄炉跡精査。廃滓場セクションポイント配置図作成。1号竪穴住居跡、1・2号製鉄炉精査。2号土坑完掘。

- 11月：2号製鉄炉P11検出。1・2号製鉄炉上部掘り下げ。1号竪穴住居上部掘り下げ。1・2号製鉄炉、1号竪穴住居及び周辺精査、写真撮影。下部区域掃除。1・2号炉廃滓場掘り下げ。1号炭窯東西セクション、写真、図面作成。製鉄炉跡1基、木炭窯1基検出。弥生土器片出土。1号木炭置場、検出状況写真撮影。
- 12月：2号竪穴住居セクション・エレベーション図、平面図作成。2号炭窯セクション図作成。
- 1月：1号竪穴住居跡掃除、写真撮影。2号竪穴住居跡カマド精査、土師器甕出土。須恵器杯出土。床面確認。3号竪穴住居跡写真、図面、カマド精査。2号性格不明遺構を4号竪穴住居跡に変更。3号木炭窯跡完掘作業。焚口から使用済羽口出土。3号製鉄炉フイゴ部精査。2・3号土坑平面図作成。2号竪穴住居跡床面精査。3号竪穴住居跡床面、カマド精査。4号竪穴住居跡カマド精査、煙道確認。3号製鉄炉フイゴ精査。写真撮影。2・3号竪穴住居、4号竪穴住居精査。4～10号土坑掘り上げ、写真撮影。5号製鉄炉検出作業。11～15号土坑セクション写真撮影、セクション図作成、完掘、写真撮影。3・4号竪穴住居写真撮影。3・4号竪穴住居、3号木炭窯平面図作成。2号竪穴住居遺物取り上げ。カマド内より鋳型、鉄鏝出土。3号木炭窯羽口の取り上げ。2号竪穴住居鉄鏝写真撮影、平面図作成。2号木炭窯掘り下げ、セクション写真。P1セクション写真、セクション図作成。3号竪穴住居エレベーション図作成。
- 2月：2号竪穴住居跡セクション写真。4号竪穴住居跡エレベーション図作成。遺構検出作業。
- 3月：5号炉西部より住居跡検出。3・4号竪穴住居北部斜面表土除去。遺構検出作業。焼土・炭検出。鉄滓移動300袋。階段状遺構検出。各作業状況写真撮影。道具類移動及び撤収。

D地区

平成5年度

- 6月：表土除去。土師器・須恵器出土。土坑1基検出。調査区拡張。土師器甕破片出土。1・2号住居跡検出写真撮影。煙出ピットの位置から、1号住居のカマドは北辺の中央に、2号住居のカマドは北東角に確認。住居跡掘り下げ。
- 7月：1・2号竪穴住居跡掘り下げ。1号から土師器坏、甕、鉄製品出土。土坑半割。住居跡周辺他遺構の検出。土坑1基が発見。1号竪穴住居跡、東西土層セクション写真撮影。1・2号住居跡土層セクション図作成。1～4号土坑セクション図作成する。業務委託にて4mごとに基準点設置。竪穴住居跡検出。
- 9月：1・2号セクションベルト写真撮影。1号竪穴住居跡カマドから杯と甕出土。土坑4基精査、写真撮影。
- 10月：1・2号住居跡セクション図作成、精査。P1・3写真撮影。P2～4完掘写真撮影。1号竪穴住居北西部に溝跡検出。煙出ピット掘り上げ。写真撮影。1号溝掘り上げ、写真撮影。2号竪穴住居跡精査。煙出ピット掘り上げ 写真撮影。北西角に溝検出、写真

- 撮影。2号竪穴住居写真撮影、平面図作成。1～4号土坑平面図。1号住居跡貼床掘り下げ。土師器杯出土、ピット検出。2号竪穴住居跡煙道掘り上げ、写真撮影。P5・6、煙道A・B写真撮影。2号竪穴住居煙道セクション図、平面図作成、カマド写真撮影。
- 11月：調査区全景写真撮影。1号竪穴住居跡貼床除去・煙道写真撮影。煙道半割。1号炉廃滓場鉄滓取り上げ、セクション図作成。1号炭窯掘り下げ、写真撮影、セクション図作成。鋳型蓋、器物、獣脚鋳型出土。2・3号土坑検出状況および半割写真撮影。2・3号土坑上部区域遺構検出。1号木炭窯ベルト除去。1号木炭窯P2～5、半割後写真撮影。2・3号土坑掘り上げ。
- 12月：1号木炭窯P2セクション図。1号炭窯、半割底部下部斜面掘り下げ。1号木炭窯セクション図作成。1号製鉄炉、炉底精査。2号製鉄炉掃除。1・2号製鉄炉写真撮影。1号木炭窯掘り下げ。2・3号竪穴住居跡検出掘り下げ。1号住居跡完掘。2号竪穴住居跡から須恵器壺出土。1号木炭窯掘り上げ写真撮影。1号製鉄炉、1号木炭窯写真撮影。2・3号木炭窯掘り下げ。鉄滓土納袋搬出。713袋。2号竪穴住居カマド精査。3号木炭窯掘り下げ。竪穴状遺構掘り下げ。4号製鉄炉精査。2号木炭窯半割終了。2号竪穴状遺構の下位から鉄滓出、壁際に周溝確認。3号竪穴状遺構半割、大型の羽口片、底面に焼けた硬化面、鍛冶炉。1号住居跡床下検出ピット平面図、カマド煙道、エレベーション図作成。

E地区

平成5年度

- 9月：土坑7基半割。遺構検出トレンチ拡張。鉄滓、羽口出土。1号土坑半割、写真撮影。2～9号土坑（半割）、写真撮影。1・10・11号（半割）写真撮影。土坑2・3・6～9号セクション図作成。6・7号掘り上げ、写真撮影。2・3・8・9号土坑掘り上げ。4号土坑セクション図作成。
- 10月：1・11号土坑セクション図作成。1号製鉄炉検出。製鉄遺構、フイゴ、軸受け半割。1号製鉄炉精査。1・10号土坑完掘写真。1号製鉄炉P1～5セクション写真。1号製鉄炉、フイゴ、ピット掘り上げ、炉掘り下げ。1・11号土坑、全景写真撮影。1～4、6～9、11・12土坑平面図作成。12号土坑掘り上げ。1号製鉄炉清掃。1号製鉄炉精査、写真撮影。12号土坑平面図。1号製鉄炉平面図。廃滓場掘り上げ。
- 11月：1号製鉄炉平面図。調査区全景写真撮影。

G地区

平成5年度

- 7月：鋳型出土地点東側の調査区拡張。土坑3基、住居跡3軒。1・2号竪穴住居跡掘り下げ。1号住居跡から土師器杯出土。1～4号土坑完掘。
- 8月：住居跡1軒検出。鉄滓多量出土。調査区拡張。竪穴住居跡掘り下げる。土師器が出土。竪穴住居跡から土師器坏出土。製鉄炉および廃滓場掘り下げ。竪穴住居跡の北に製鉄炉検出、掘り下げ。住居跡拡張。製鉄炉、ベルト設定し、掘り下げ。

調査経過

9月：竪穴住居跡、製鉄炉精査。竪穴住居跡約30mの地点に木炭窯検出、掘り下げ。

10月：鉄滓袋詰。搬出。

J地区

平成9年度

1月：1号木炭窯跡の遺構検等検出作業及び写真撮影。

3月：1号木炭窯跡操業面セクション写真撮影、図面作成。平面図作成。1号土坑遺構検出状況写真撮影。1号土坑セクション写真撮影、図作成、完掘写真撮影。2号土坑セクション写真撮影、図面作成、1号木炭窯跡・2・3号土坑写真撮。1号木炭窯跡煙道セクション図作成、煙道写真撮影

K地区

平成9年度

1月：1号木炭窯跡セクション図作成。4号土坑、2号竪穴住居跡セクション図。2～4号土坑のセクション撮影。

2月：2号土坑セクション図作成。1号木炭窯跡写真撮影。4～7号セクション写真撮影。5号土坑平面図作成。4～6号土坑、1号木炭窯跡セクション図作成。1号竪穴住居跡セクション写真撮影。3～8号土坑セクション図作成。1号木炭窯跡平面図作成。

3月：3～6号土坑平面図作成。1～4号土坑平面図作成。9号土坑セクション図作成。1・2号竪穴住居跡平面図作成。1号木炭窯跡セクション図作成。1号木炭窯跡操業面撮影。2号土坑平面図作成。1号木炭窯跡操業面セクション図作成。K地点エレベーション・平面測量。7号土坑セクション写真撮影。2～6号土坑平面図作成。1号木炭窯跡操業面セクション写真撮影、平面図作成。1・2号竪穴住居跡写真撮影、平面図作成

L地区

平成9年度

2月：1号土坑セクション写真撮影、セクション図作成。1号木炭窯跡セクション写真撮影、セクション図作成、平面図作成。

3月：1号木炭窯跡煙道部分写真撮影。1号土坑写真撮影。1号木炭窯跡煙道部分のセクション、平面図作成。7号土坑セクション写真撮影。1号木炭窯跡操業面写真撮影

M地区

平成9年度

2月：1号土坑セクション図作成

3月：1号土坑平面図作成。1～4号土坑レベリング

N地区

平成9年度

2月：1号土坑検出状況撮影

3月：1～3号土坑写真撮影。1～4号土坑セクション撮影。1～4号土坑写真撮影

(斎藤)

第3章 調査成果

第1節 川内迫B遺跡群C地点

第1項 C地点の立地 (図61・図版40)

川内迫B遺跡群C地点は調査グリッドDN25 からDN45 付近に位置する。試掘調査においては 200~400T が該当し、遺跡群全体では中央やや北寄りに位置する。調査区の面積は 8000 m²と川内迫B遺跡群最大の規模である。調査区の西側は丘陵の南から北へ入り込んだ大きな谷地になっている。この主谷地には東に向かう小規模な谷が形成されており、C地点はこれらの谷に挟まれた尾根部に展開することになる。更に詳細に地形を見ると調査区を2本の谷が東西に走り、この谷に挟まれた地点には1本の尾根が形成されている。遺構の中心は尾根の頂部からやや丘陵斜面に移動した地点に位置しており、製鉄炉3基、廃滓場1基、木炭窯跡3基、竪穴住居跡4軒、鍛冶炉2基、土坑3基が検出されている。

(荒)

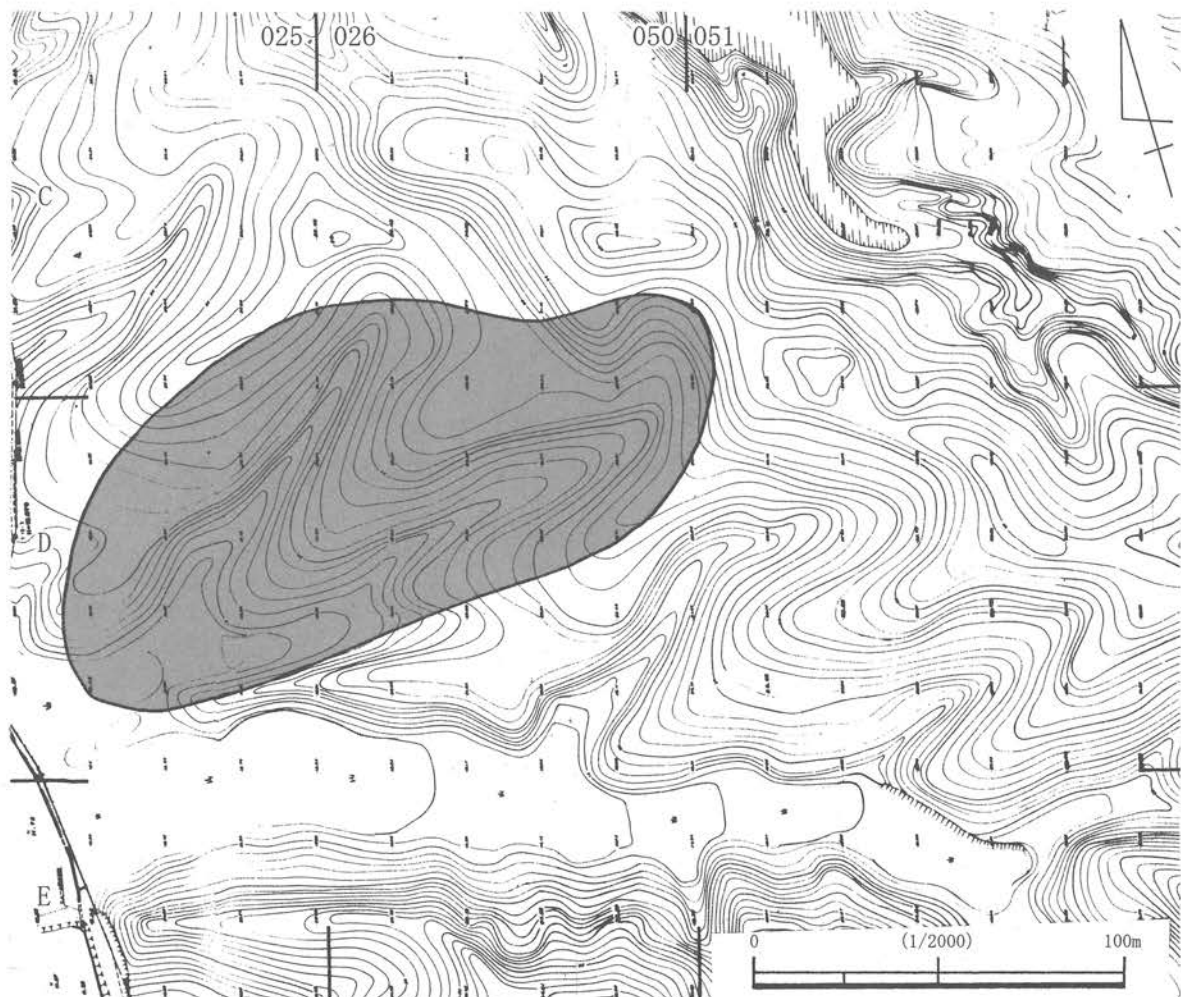


図61 C地点位置図

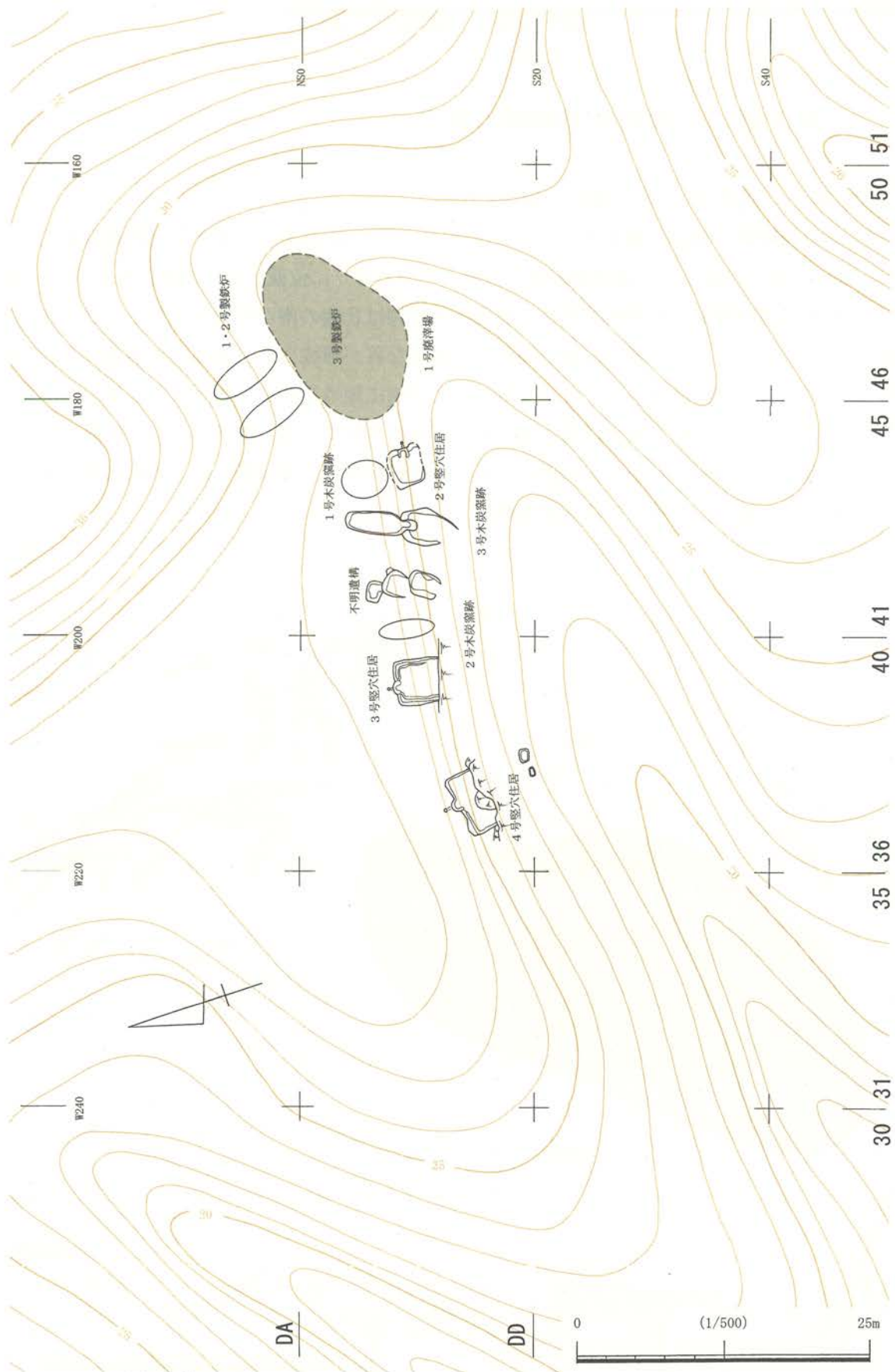


図62 C地点遺構配置図

第2項 検出された遺構と遺物

1・2号製鉄炉跡 (図版 41~46)

1・2号製鉄炉跡は、東西にのびる尾根の南向き斜面に、2基が並んで確認された。東西に走る尾根は、炉跡の北東側で南へ向きを変えて谷頭を形成しており、この部分に廃滓場が形成されている。

1・2号製鉄炉跡は、踏みフイゴを伴う長方形箱形炉であるが、調査を途中で中止せざるを得なかった経緯があり、遺構平面図等の記録の作成は行っていない。

(藤木)

3号製鉄炉跡

3号製鉄炉跡は他の遺構と同様、東西にのびる尾根の南向き斜面、標高約25~27mに立地する。3号竪穴住居跡、1号性格不明遺構の間に位置し、単独で構築された円筒形堅形炉である。

1・2号製鉄炉跡同様、遺構平面図作成等の記録の作成は行っていない。

(藤木)

1・2号炉廃滓場

遺 構 (図 63 : 図版 47)

当遺構は、1・2号製鉄炉跡に伴う廃滓場である。1・2号製鉄炉跡は東西に走る尾根の南斜面に立地してお

1・2号炉廃滓場

1 暗褐色土	4 粘土混じり鉄滓層 滓最も多い
2 黒褐色土	5 黒褐色土
3 粘土	

り、この斜面が南へ屈曲した谷頭に廃滓場が形成されている。廃滓層の範囲は東西約16m、南北約10mである。検出段階に、斜面に直行する2本のサブトレンチを設定し土層断面を観察した後、ベルトを残して全体の掘り下げを行った。堆積土は厚さ10~110cmを測り、表土である1層を含め、合わせて5層に分層された。最下層の5層は黒褐色土で、鉄滓を含む。4層は粘土混じりの鉄滓主体層で、1・2号製鉄炉の操業に伴う廃滓層と考えられる。厚さは10~45cmを測るが、操業回数を把握するには至らなかった。その上に位置する3層は粘土ブロック主体の土層で、鉄滓の混入が少ない。2層は黒褐色土、1層は暗褐色土である。なお、B-B'セクションでは2・3層の堆積は認められず、廃滓層である4層の上に表土である1層が堆積している。

(藤木)

遺 物 (図 64~76 : 図版 114・115・116-30~34・119-6~13)

図64-1~図69-14は獣脚鑄型である。図64-1は上部が欠損しており全体の法量を知ることができないが、脚関節上部から脚指までの範囲の資料である。特に脚指の表現は細かく良好な資料である。鑄型内面は被熱を受けたために青灰褐色に変色している。鑄型に表現された文様は、残存する鑄型中央部に2本の沈線により脚の関節部を表す。関節からは5本の脚指が下方に伸び、その先端に爪が表現される。鑄型断面形は明瞭な箱型で、内面の鑄物の脚になる部分は鋭角に仕上がっている。また直接的な接合関係にはないものの、図69-14の鑄型上半の資料と同一個体の可能性が強い。同図2は鑄型下半部の資料である。上半部は欠損しているた

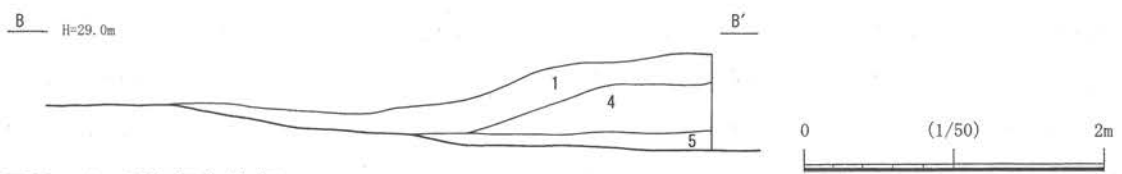
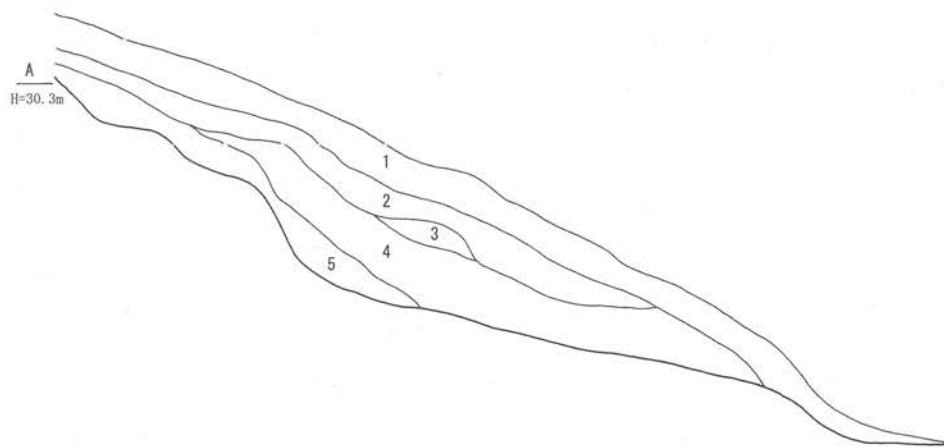
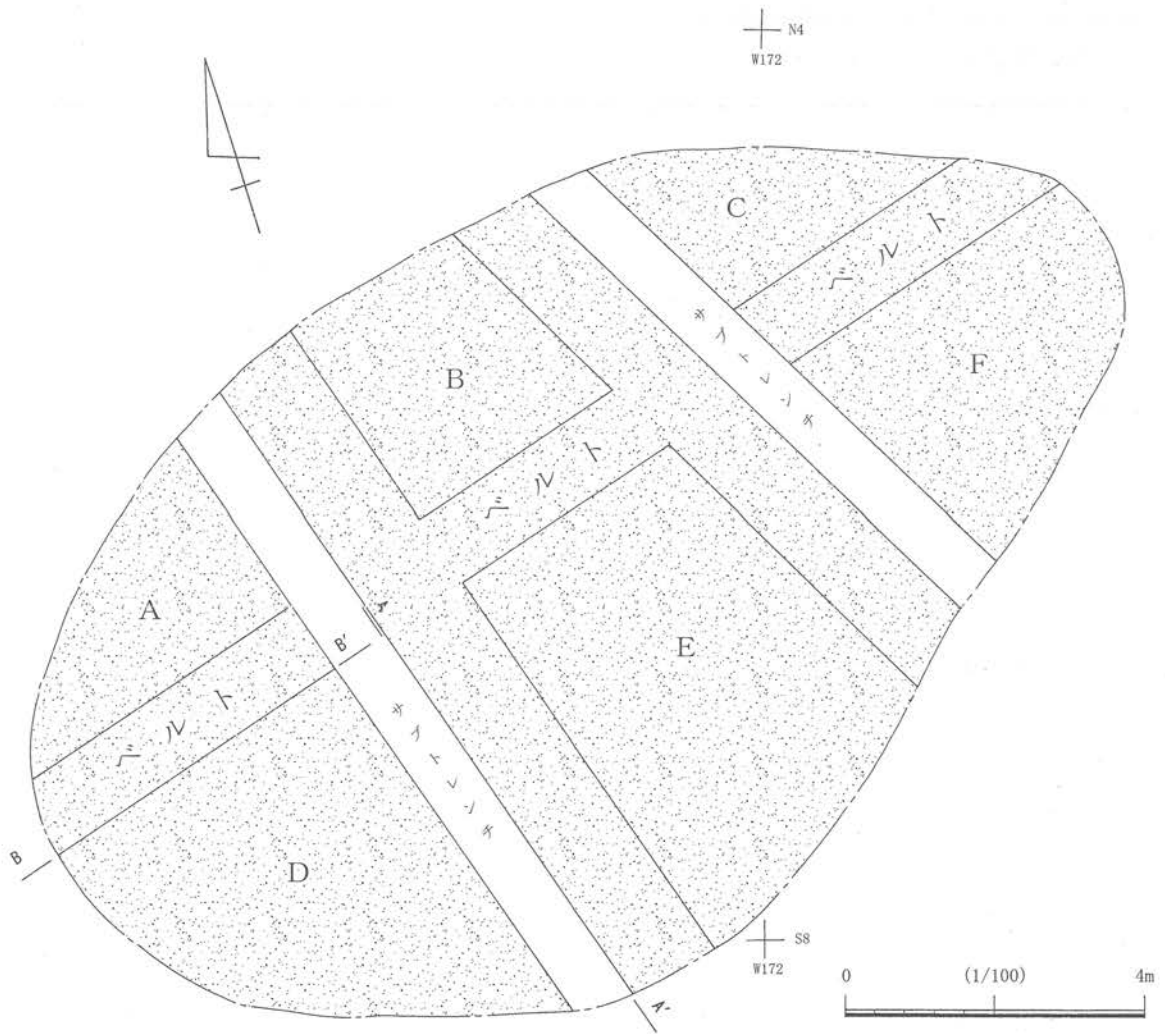


図63 1・2号炉廃滓場

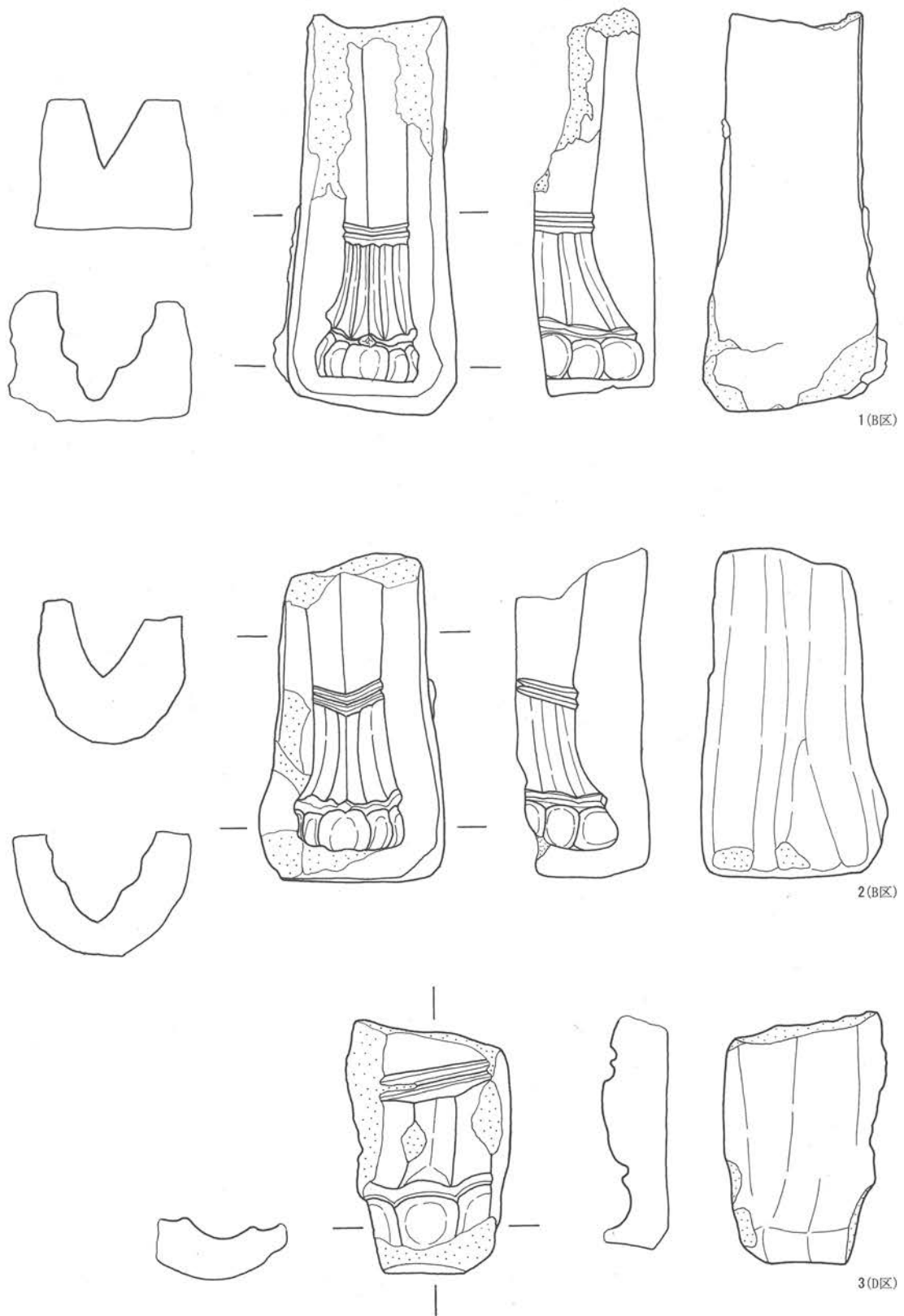


図64 獣脚鑄型 (1)

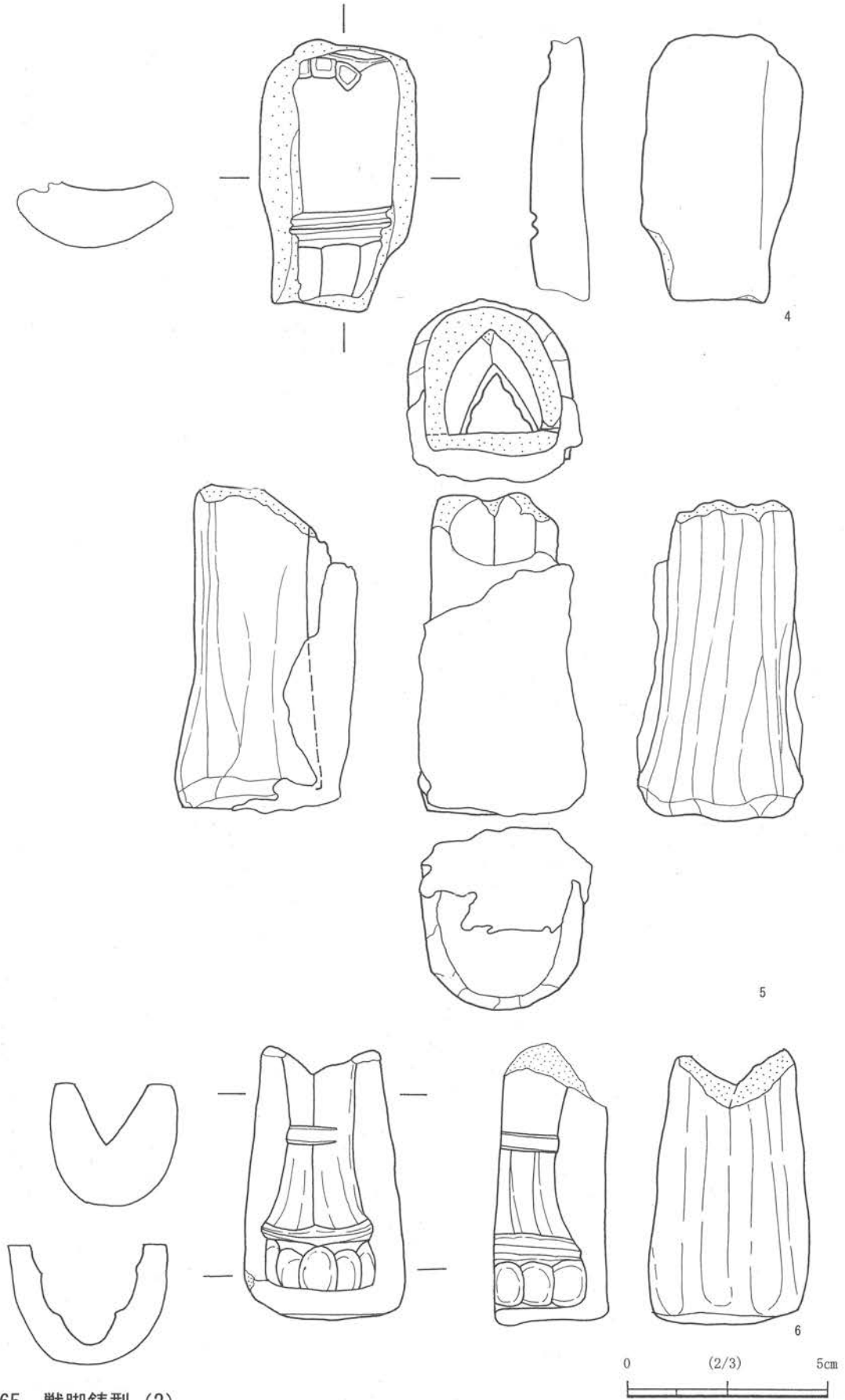


图65 獸脚鑄型 (2)

め鑄型全体の形状ならびに法量は不明である。鑄型内面に表現された文様は、獣脚の関節上部から脚指までを見ることができる。器面の消耗が著しいため1ほどは明瞭でないものの、残存範囲の中央には脚関節を表現している2条の沈線ならびに、関節から下方に延びる5本の脚指、そして脚指先端の爪が表現されている。器面は被熱のためか橙色に変色しているが、1の資料のように青灰色の被熱箇所は認められない。鑄型の裏面は縦方向のケズリによって半円形に仕上げられている点は1と大きく異なる点である。また鑄型内面の左下端部には鑄型の蓋となる板状の土製品をあわせる際の目安となる溝が1条つけられている。

同図3は獣脚の関節部から爪にかけての範囲の資料であるが、残存範囲が狭く鑄型の詳細は不明である。残存している範囲では脚部の関節を表現した2条の沈線と、3本の爪を観察することができる。脚指を表現した凹凸はその後の摩滅より不鮮明となっているが、かろうじて3本の脚指を認識することができる。鑄型の右端部は残存しており、鑄型の断面形を推測することができる。鑄型端部を水平に置くと、外面の器壁は緩やかに弧を描くことから、2と同様にケズリによって調整されていると推測される。また、当資料が他の資料と大きく異なる点に鑄型胎土がある。他の資料の鑄型胎土は非常にきめの細かい良質の粘土を使用しているのに対して、当資料の胎土には砂粒が多く含まれている点が特徴的である。

図66-4は獣脚鑄型の上部と下部が欠損している資料である。鑄型内面には獣面の一部と脚指までが確認される。獣面は資料の上部に位置し、四角で表現された2本の前歯と最も外側に位置する犬歯が見える。またこれら歯の上部におそらく頬を表現した弧状の文様がみられる。下半部には脚関節を2条の沈線で表し、その直下には3本の脚指が見られる。

同図5は鑄型と鑄型背面を覆う蓋をスサ入り粘土で接合している資料である。従って鑄型内面に表現されているであろう鑄型の文様構成を知ることはできない。鑄型の外面は縦方向のケズリによって整えられている。鑄型の断面形はU字型で、製品となる脚部の断面形は明瞭な二等辺三角形となる。

同図6は獣脚の脚関節部から爪にかけての範囲が残存している資料である。当資料は摩滅が著しく、他の資料と比較すると鑄型文様の凹凸は明瞭ではない。資料の中央上部には脚関節を表現した沈線が1条確認されるが、本来は2条1対であった可能性がある。脚関節部からは不明瞭な脚指が伸びる。指の本数は確認できないが、指の下部に残る5本の爪が認められることをみれば、同様に5本の脚指が表現されていたと見るべきであろう。鑄型の外面は縦方向のケズリによって整えられており、断面形はU字型である。

図67-7は獣脚鑄型のほぼ全体が残存している資料であるが、器面の摩滅が著しく鑄型文様はほとんど判断することはできない。かろうじて判断できる部分は脚関節部を表現した2条の沈線に限られる。また脚指と爪の存在を認めることは可能だが、詳細は不明である。獣脚の頂部は円錐形で、断面形は三角形である。鑄型内面の一部には仕上げマネが残存している。鑄型の断面形はU字型である。

同図8は獣脚鑄型の獣面部から爪にかけての範囲が残存している資料である。獣面部のほとんどが欠損し、獣面構成を判断することは不可能であるが、菱形に表現された犬歯とその隣に位



図66 獸脚鑄型 (3)

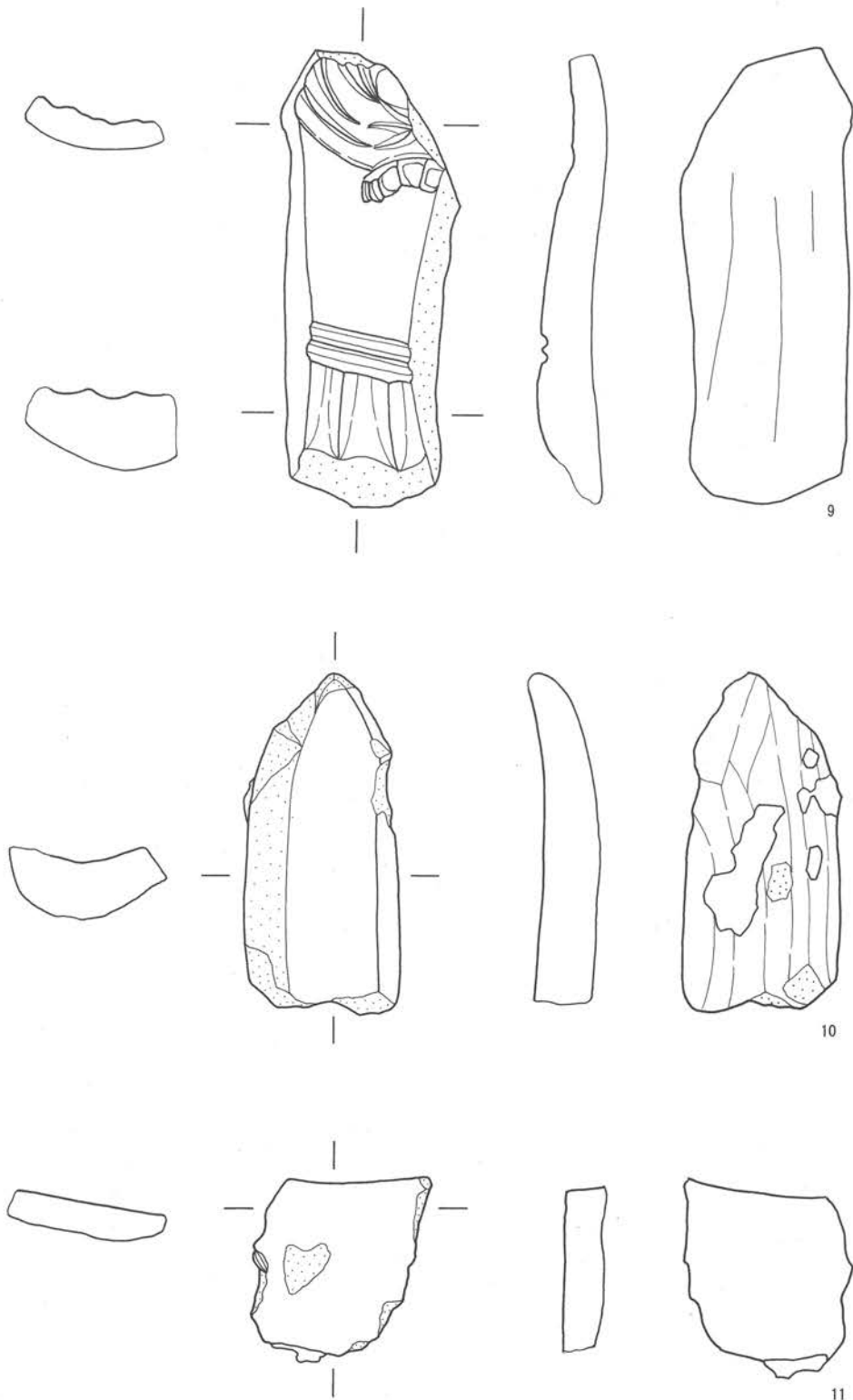


図67 獣脚鑄型 (4)

置する四角形の歯が認められる。鑄型中央には2条の沈線によって脚関節が表現されている。

この脚関節は型を取る際に型ずれを起こしたためか、文様の稜線に乱れが生じている。脚関節の下部には3本の脚指と爪が残存している。残存している範囲では鑄型の形状を知ることはできないが、鑄型内面には仕上げマネが残存している。

図 68-9 は獣脚鑄型の獣面から脚指にかけた範囲の資料である。爪は欠損している。獣面は斜めに釣り上がった眼は大きく見開き、眼から口にいたる間には頬を表したと思われる文様が斜め上方に延びる。口には2本の前歯が四角で表現され、その隣には犬歯と思われる菱形の歯が認められる。更に犬歯の外側には2本の歯があるように観察されるが明瞭ではない。資料中央下部には脚関節を表現する2条の沈線が表現され、脚関節からは3本の脚指が下方に伸びる。鑄型の形状を判断することはできないが、断面形がU字型となる可能性が高い。また鑄型の内面には明瞭な仕上げマネが残存している。

同図 10 は獣脚鑄型の上部付近の破片資料である。残存範囲では獣脚に表現された文様を見ることはできない。鑄型内面には明瞭な仕上げマネが残存する。鑄型の形状は断面形がU字型となるものと推測される。また鑄型外面には型と蓋を接合する際に使用したと思われるスサ入り粘土が付着している。

同図 11 は鑄型の蓋と思われる資料である。板状の粘土製品で断面形は長方形である。

図 69-12 は獣脚鑄型である。鑄型上半部ならびに左半部が欠損しているため、鑄型全体の形状を知ることはできない。鑄型内面に表現されている文様は非常に明瞭で、脚関節は2条の沈線で表現され、脚関節からは脚指が下方に伸びる。脚指の先端には爪が表現されている。鑄型の外面には縦方向のケズリが施され、断面形はU字型に整形されている。

同図 13 は獣脚鑄型の脚関節付近の資料である。鑄型上半と脚指以下は欠損しており知ることはできない。脚関節は2条の沈線で表現されている。

同図 14 は獣脚鑄型上半の資料である。鑄型に表現された文様は残存していない。獣脚の頂部は円錐形で、脚の断面形は三角形である。鑄型断面形は箱形で内面は被熱により青灰褐色に変色している。図 65-1 と同一個体の可能性がある。

図 70-1 ~ 図 71-20 は器物鑄型と判断した資料である。

図 70-1 は1号廃滓場B区から出土した器物鑄型の口縁部付近の資料である。鑄型口縁部は平坦で、右側には半円形の凹部が見られる。底部の状況や鑄物製品の詳細は不明である。鑄型内面には明瞭な仕上げマネが観察される。鑄型の器厚が薄い点に特徴がある。

同図 2 は同廃滓場B地区から出土した器物鑄型の口縁部付近の資料である。器厚は口縁端部が最も厚く2.5 cmを測る。断面の観察では粗マネ、中マネが観察され、資料左側の一部に仕上げマネが観察される。口縁部は平坦である

同図 3 は同廃滓場B地区から出土した器物鑄型の口縁部付近の資料である。残存している範囲では部位の断定は困難であるが資料上端に半円形の凹部が認められることから、口縁部に近い付近の資料であると思われる。断面観察では鑄型の大部分を形成する粗マネと中マネは認められるが、仕上げマネは口縁部の凹部だけに残存している。

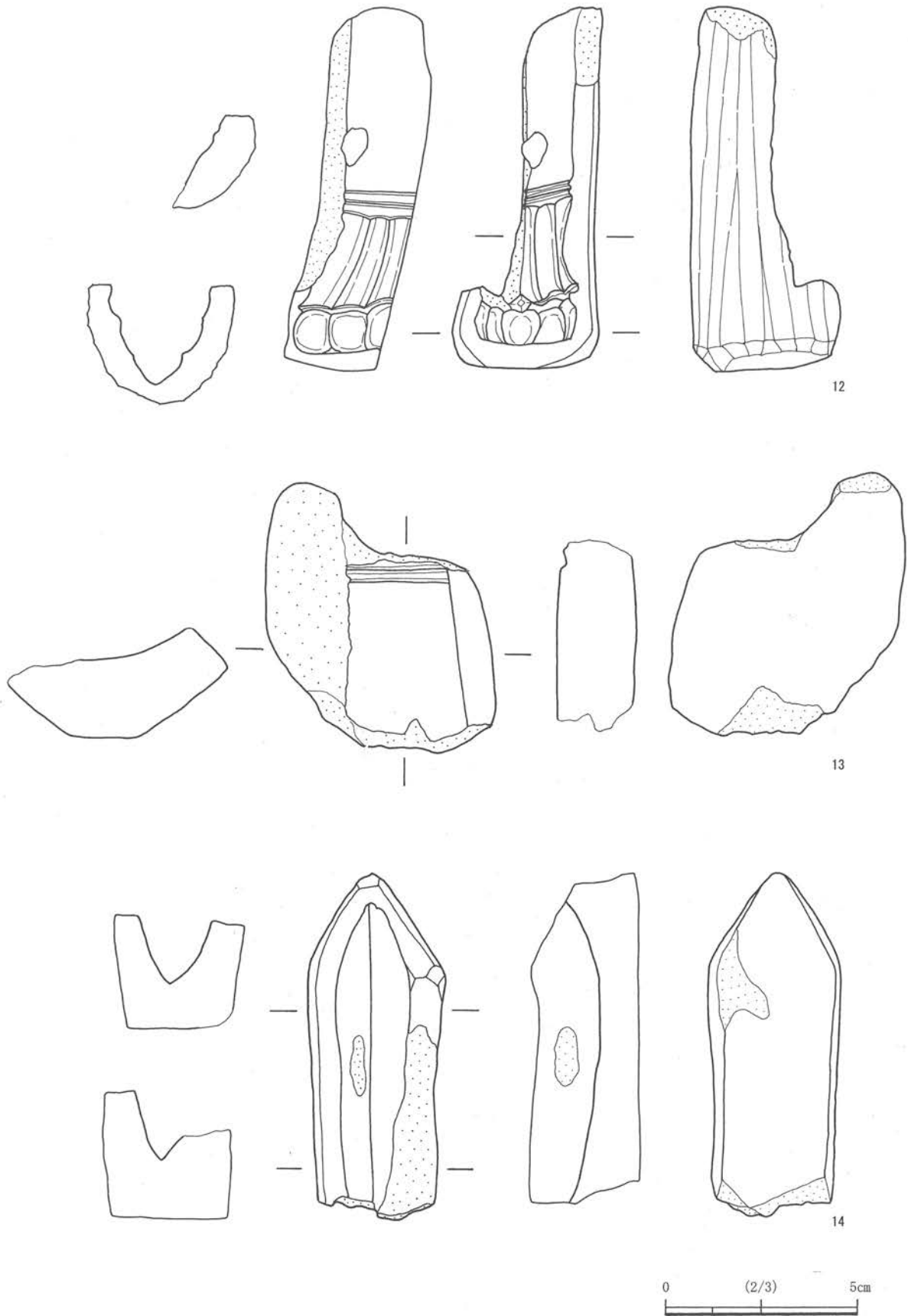


図68 獣脚鑄型 (5)

同図4は同廃滓場B地区から出土した器物鋳型である。鋳型の残存率は1/4程度である。計測される鋳型内径の半径は8cm前後であることから鋳型製品は16cm前後に復元される。断面観察では粗マネ、中マネと鋳型内面の大部分に仕上げマネが残存している。

同図5は同廃滓場B地区から出土した器物鋳型の資料である。口縁部付近の資料であり、粗マネ、中マネ、仕上げマネが観察される。仕上げマネは資料内面から口縁端部にかけての範囲に残存しており、口縁部断面は丸い。

同図6は廃滓場B地区から出土した器物鋳型である。口縁部付近が残存しており、粗マネ、中マネ、仕上げマネが観察される。口縁端部は平坦で、仕上げマネは器物鋳型内面にのみ観察される。器厚は約2cmと薄い点特徴的である。

同図7は同廃滓場C地区から出土した器物鋳型である。口縁部を中心とした資料で、半円形凹部が観察される。鋳型内面の断面形を見ると、口縁部から2.5cm付近で段を有する。胎土断面観察では粗マネ、中マネ、仕上げマネが観察される。仕上げマネは、資料口縁部直下の一部にのみ観察される。

同図8は同廃滓場C地区から出土した器物鋳型である。鋳型の口縁部付近の資料で、半円形の凹部が観察される。粗マネ、中マネが観察され、口縁部の凹部付近と、内面の一部に仕上げマネが残存する。

同図9は同廃滓場C地区から出土した器物鋳型である。底部側辺から口縁部にかけての範囲の資料である。口縁部断面は丸みを帯び、胎土観察では粗マネ、中マネが見られる。仕上げマネは内面の全体に見られる。本資料から製作された鍋の器高は5.5cm前後であったと判断される。

同図10は同廃滓場から出土した口縁部を中心とした器物鋳型である。口縁部は扁平で、器厚は2.8cmである。胎土観察では粗マネ、中マネは見られるが、仕上げマネは残存していない。

同図11は同廃滓場D地区から出土した器物鋳型である。底部を中心とした資料であり、口縁部は欠損している。底部付近の器厚は3.1cmを計測し、中央部分がやや厚い。胎土観察では粗マネ、中マネは良好に観察され、仕上げマネは底部内面の一部にのみ残存する。鋳型の底部直径は15.6cmに復元されるが、鍋製品の直径までは復元できない。

図71-12は1号廃滓場A区から出土した器物鋳型である。口縁部を中心とした資料で、口縁部左側には湯口若しくは注口を形成したと思われる凹部が見られる。断面の観察では粗マネ、中マネと、鋳型内面の全体に仕上げマネが残存する。仕上げマネは口縁部の凹部にまでおよぶ。口縁部の断面形は四角形である。

同図13は同廃滓場B区から出土した器物鋳型である。口縁部を中心とした範囲の資料で、資料左側には半円形の凹部が見られる。口縁部の断面形は四角形で、器壁の立ちあがり角度は緩い。胎土の断面観察では粗マネ、中マネ、仕上げマネの順で確認されるが、仕上げマネは鋳型内面の一部にのみ残る。

同図14は1号廃滓場から出土した器物鋳型である。底部側辺から口縁部にかけての範囲が残存しており、出土した器物鋳型では最も残存率が良い。鋳型の厚さは2.9cmを測り、粗マネ、中マネが確認されるが仕上げマネは残存していない。本鋳型で製作された鍋は器高7.5cm前後で



図69 器物鑄型 (1)

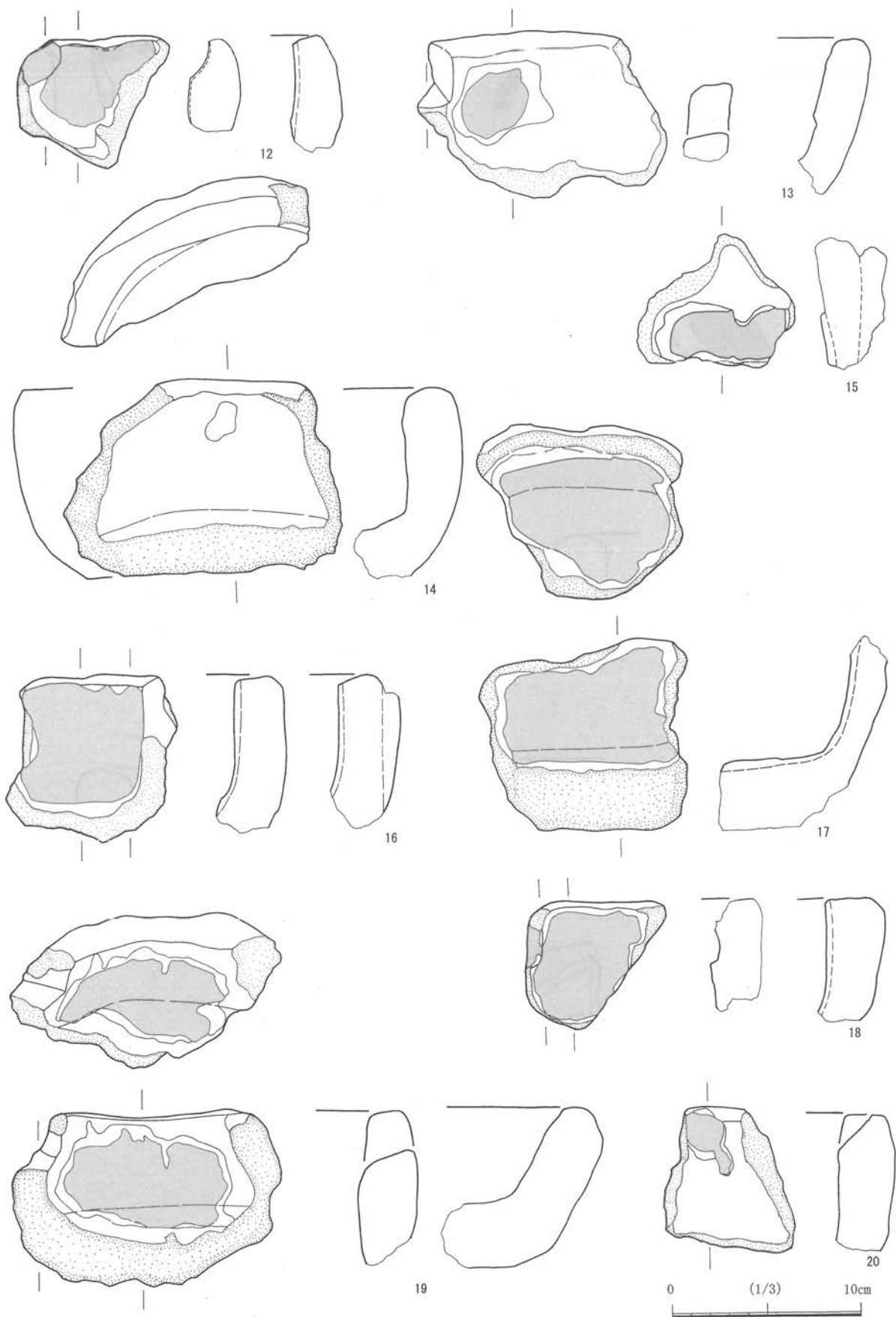


图70 器物鑄型 (2)

あったと推測される。

同図 15 は 1 号廃滓場 B 地区から出土した器物鋳型である。部位は不明である。胎土の断面観察では粗マネ、中マネ、仕上げマネが観察される。仕上げマネは資料下半に残存する。

同図 16 は同廃滓場 B 地区から出土した器物鋳型である。口縁部から底部側辺の屈曲点までの資料である。器壁の立ちあがりはやや外傾気味である。胎土の断面観察では粗マネ、中マネ、仕上げマネの順で観察される。本鋳型から製作された鍋は器高 7 cm 前後であったと思われる。

同図 17 は 1 号廃滓場 B 地区から出土した器物鋳型である。底部を中心とした資料で、口縁部は欠損している。底部内面は扁平で、器壁は緩やかに立ち上がる。鋳型底部の厚さは 3.6 cm と厚く、器部付近は 2.0 cm と比べて薄い。胎土の断面観察では粗マネ、中マネ、仕上げマネの順で観察され、仕上げマネは鋳型内面の全体に遺存している。

同図 18 は同廃滓場 B 地区から出土した器物鋳型である。口縁部を中心とした資料である。口縁部の断面形は四角形で、胎土の観察では粗マネ、中マネ、仕上げマネの順で施されている。仕上げマネは内面全体に遺存している。

同図 19 は同廃滓場 B 地区から出土した器物鋳型である。底部から口縁部にかけての範囲が残存している。器物鋳型の器厚は 3 ~ 3.5 cm 前後で比較的均一である点は図 71-17 と異なる。胎土の断面観察では粗マネ、中マネ、仕上げマネの順で施されていることがわかる。なお本鋳型で製

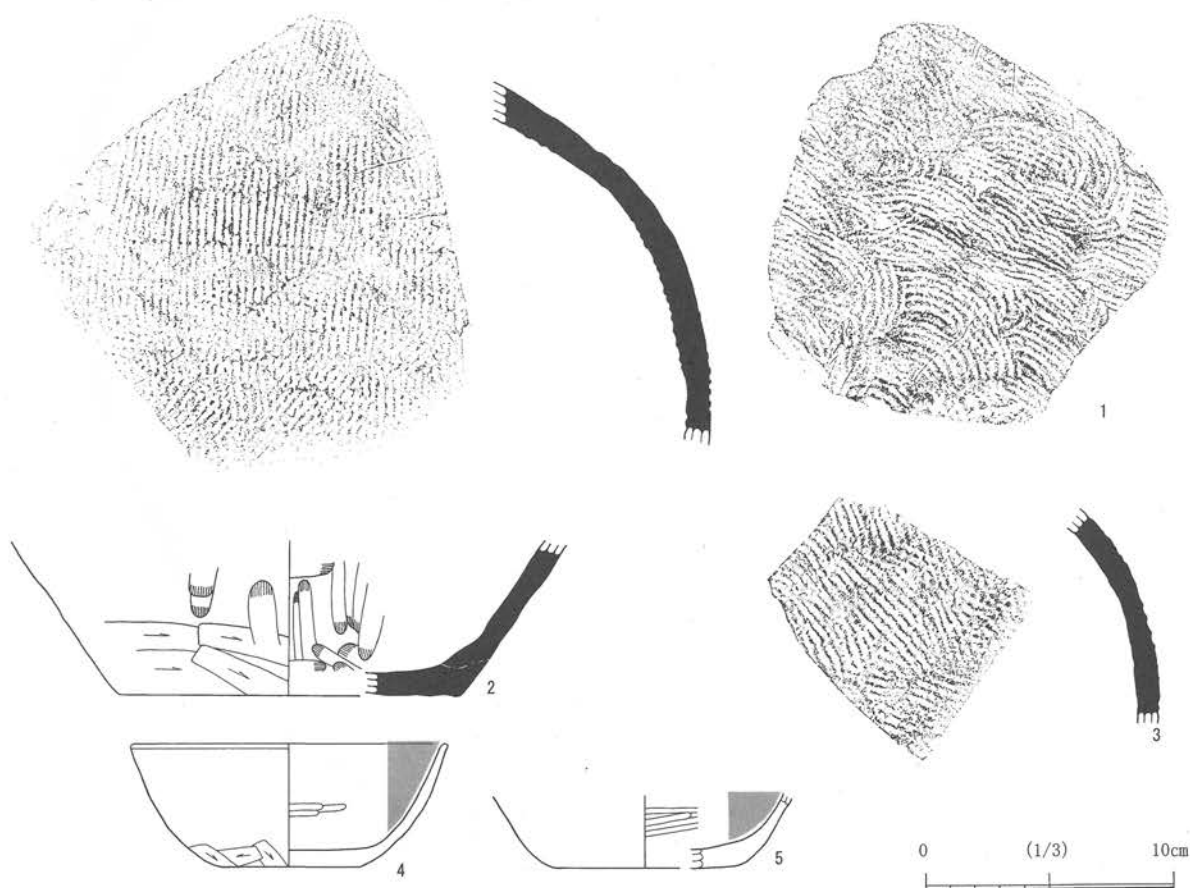


図71 土師器・須恵器

作された鍋製品の器高は5.1 cm前後であったと推測される。

同図20は同廃滓場B地区から出土した器物鋳型である。他の資料で口縁部に見られる半円形の凹部が見られることから口縁部付近の資料であることがわかる。胎土の断面観察では粗マネ、中マネ、仕上げマネの順で施されたことがわかるが、仕上げマネは口縁凹部に残存する。

図71・72は土師器・須恵器である。須恵器は4点、土師器は2点を図示した。

図71-1は須恵器甕の破片である。外面には平行タタキ、内面には青海波文の当具痕が残る。

同図2は須恵器の底部資料であり、おそらく甕であると思われる。底面は平坦で復元すると直径13.5 cm前後と思われる。外面にはロクロナデ後に横位ヘラケズリと縦位ナデが施され、内面にはナデが施される。3は甕体部の破片資料である。外面には平行タタキが施される。同図4・5はロクロ整形による土師器杯である。4は口径12.5 cm、器高4.8 cm、底径5.5 cmを測り、内面にはミガキと黒色処理が施されている。底部の切り放し技法は不明であるが、底部側辺に

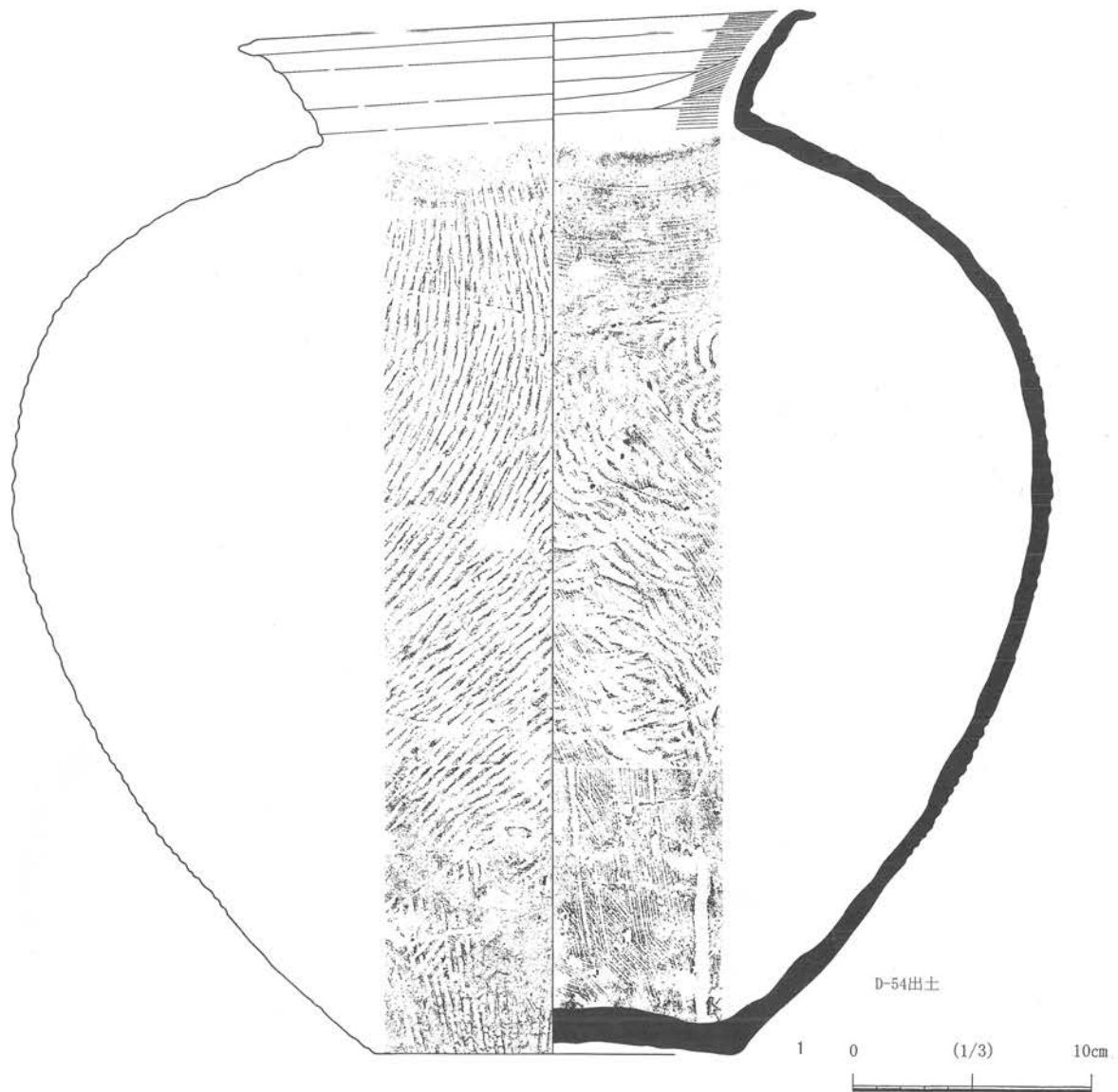


図72 須恵器

は手持ちヘラケズリが施される。同図5の口縁部は欠損しており詳細は不明であるが、復元底径は7.4 cm、残存高2.8 cmである。内面にはミガキと黒色処理が施される。底部の切り離し技法は不明で、底部再調整の有無も確認できない。

図72-1はほぼ完全な形に復元された須恵器甕である。器高45 cm、口径24.2 cm、体部部最大径43.5 cm、底径15.2 cmである。中央に向かってやや窪んだ底部から体部が立ちあがり、体部上半で最大径を計測する。頸部から口縁部は直線的に外傾して、口縁端部へ至る。口縁端部はナデによって平坦に仕上げられ、平坦面は上方を向く。体部外面には明瞭な平行タタキ痕が残り、内面には青海波文状の当具痕が見られる。また、体部下部の外面には縦位の平行タタキが施され、内面にはカキメが見られる。頸部および口縁部の調整は外面にはロクロナデが残り、内面には横位のユビナデが施される。

図73-1から図75-5は用途不明の製品である。ともに出土した獣脚鋳型や器物鋳型をみれ

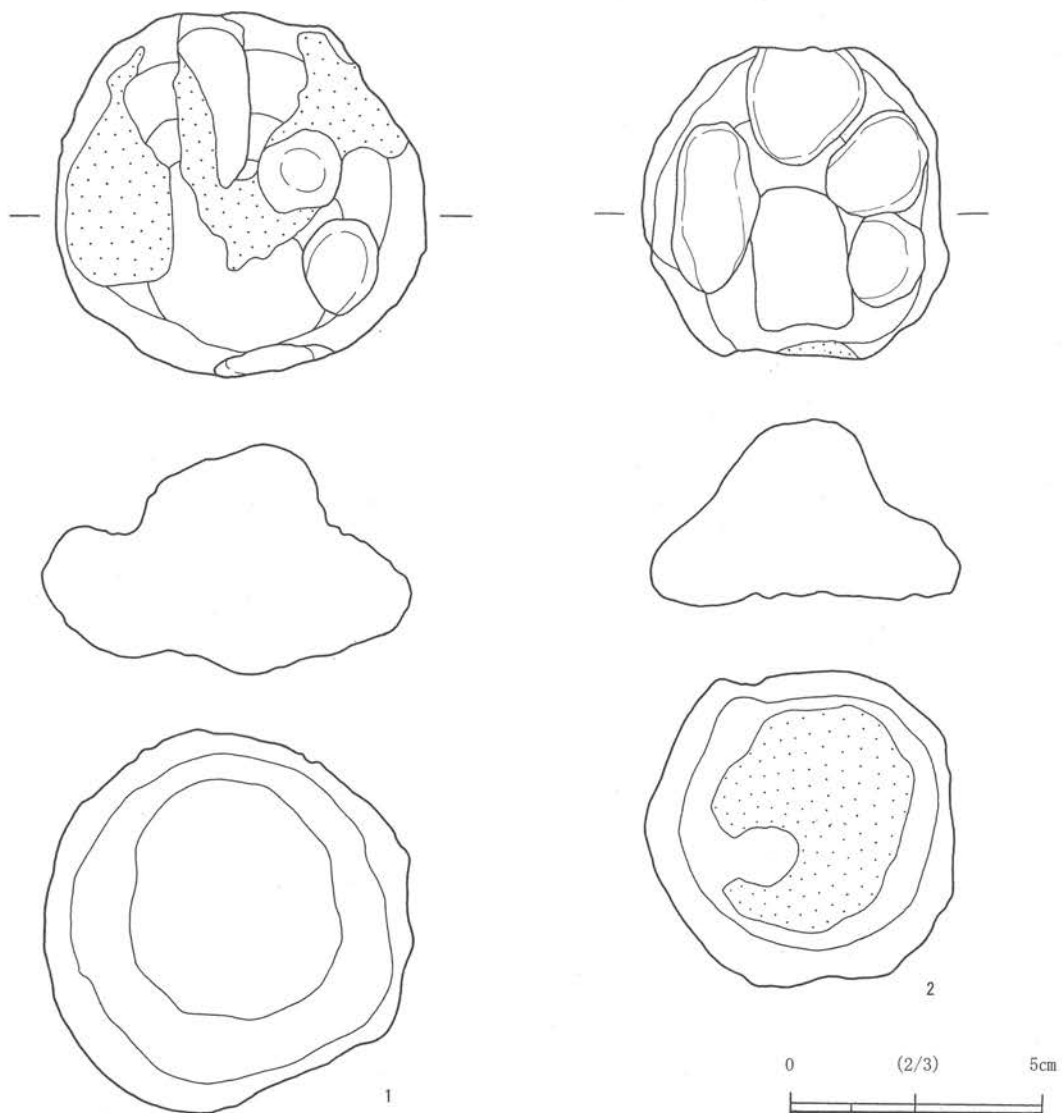


図73 不明土製品 (1)

ば鑄造に関連する遺物である可能性が高いと思われる。図 73-1 は直径 7.2 cm の円形土製品である。スサ入り粘土を円形に丸めたのち、表となる面に指頭の押圧によってつまみ状の部分形成している。指頭の押圧を行った部分には指頭の形状が明瞭に観察され、器面の 5 箇所凹部として残っている。裏面は被熱のために変色している。中央から約 4 cm の範囲は周辺よりも一段盛り上がり、にぶい黄橙色に変色している。さらに周辺部は橙色に変色している。

同図 2 は直径 6.0 cm の円形土製品である。製品はスサ入り粘土を円形に丸めた後、表となる部分に指頭による押圧を加えている。指頭の圧痕は非常に明瞭で右手 5 指それぞれに対応するものと思われる。裏面とした部分の中央付近はにぶい黄橙色で、その周辺部は被熱のために橙色に変色している。

図 74-3 は直径 6.0 cm の円形土製品であり、スサ入り粘土を原料としている。上記資料同様に器面に指頭の押圧による凹部が形成されている。凹部は表面に 4 箇所、土製品側面に 1 箇所

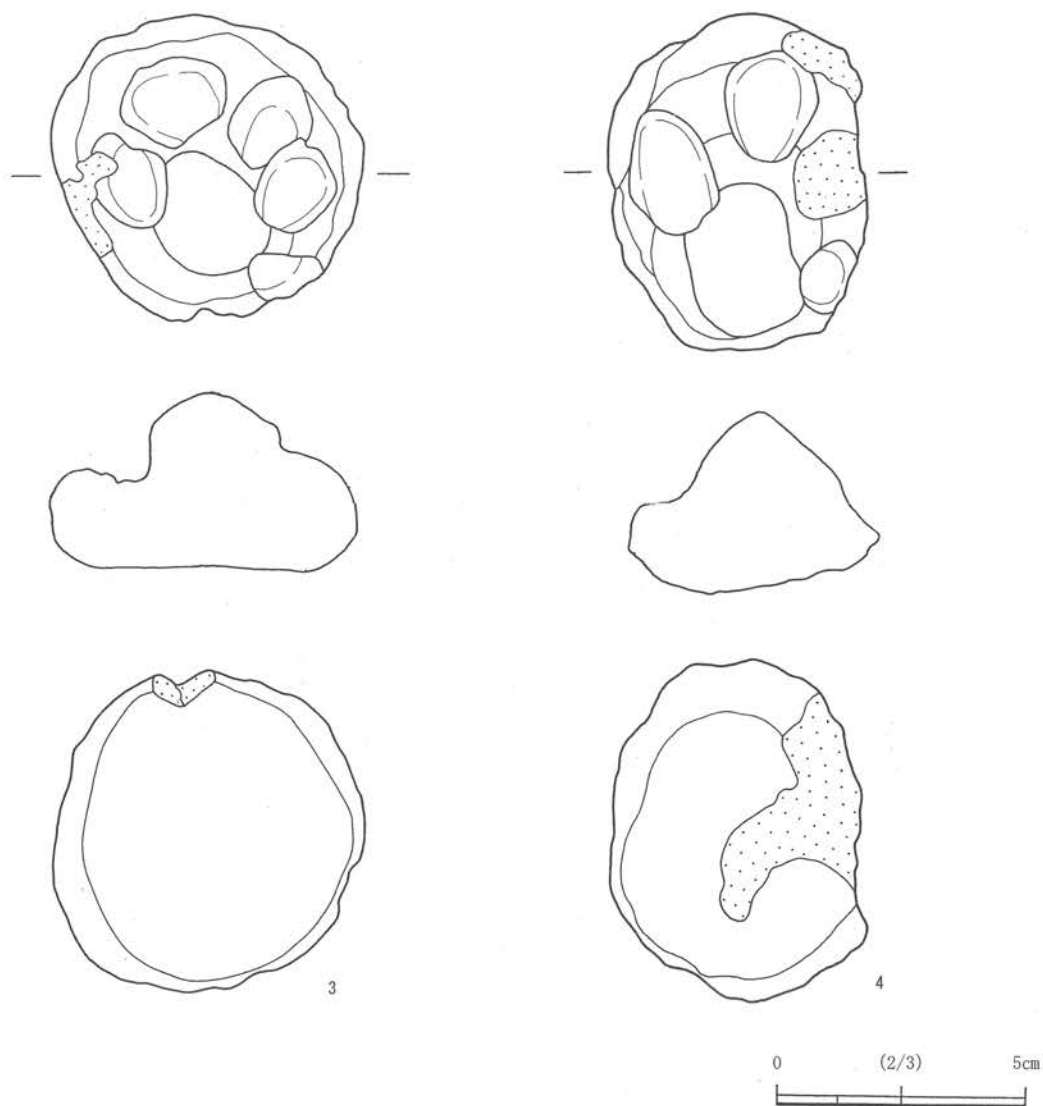


図 74 不明土製品 (2)

が確認される。表面の4箇所の凹部は右手第1指から第4指に相当し、側面の押圧痕は右手第5指にあたるものと思われる。裏面は平坦で被熱により橙色に変色している。

同図4はスサ入り粘土を円形に丸めた土製品である。資料の1/3部分が剥離のために欠損しているが、直径6.6cm程度の円形もしくは楕円形の製品となるものと推測される。上記資料ほど明瞭ではないが、表とされる面の4箇所には指頭の押圧による圧痕が観察される。これらの圧痕は右手第1指から第4指に対応するものと思われる。第5指に相当する圧痕は認めることはできない。裏面は剥離により中央部から側辺部にかけて欠損しているため詳細は不明であるが、被熱による変色が認められる。

同図5は最大径7.5cmの楕円形土製品である。全体的にスサが混入する粘土を原料とし、表とした面には指頭の押圧による凹部が4箇所に認められる。これらの4箇所の圧痕は右手第1指から第4指にそれぞれ対応すると思われるの点は上記4資料と同様である。第5指に対応す

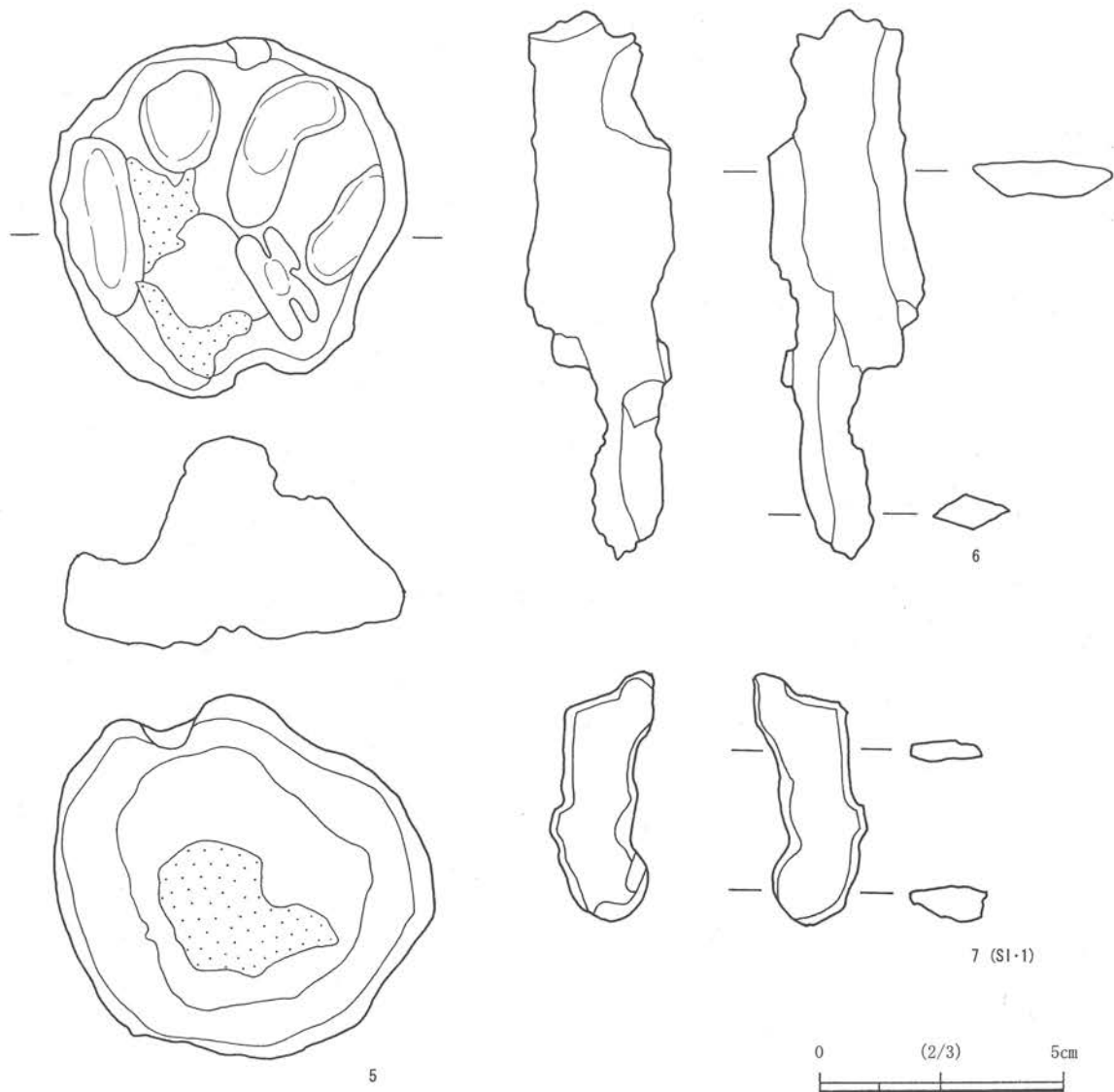


図75 不明土製品 (3)・鉄製品

る圧痕は側辺に確認される。第5指の圧痕は表面の指頭によるものとは異なり、第5指側辺によって形成されたものと思われる。裏面の中央部がやや突出する点は1と類似し、また突出した部分にはぶい黄橙色に変色し、その周縁部は橙色に変色している点も1と共通する。

これらの5点の資料はいずれも表面とした部分には右手第1指から第4指もしくは第5指による指頭圧痕が認められる。これらの土製品の用途としては鑄造用工具などが想定されるが、いずれも考えも推定の域をでないため、用途不明製品としておく。

1・2号廃滓場からは多量の羽口が出土している。出土した羽口は先述した蛭沢遺跡A地点から出土した羽口と比較すると残存状況は不良で、代表的な3点を図示した。

図76-1~3は羽口である。1は先端部から吸気部手前までは円筒形であるが、吸気部付近で強く開くために、内外面共に断面形はラップ形となる。先端部には溶着滓が付着し、鉄錆が発生している。法量は長さ13.0cm、先端部内径3.1cm、吸気部内径6.6cmである。2は先端部から吸気部手前までは円筒形で、吸気部付近で強く開く形状の羽口である。1と比較すると吸

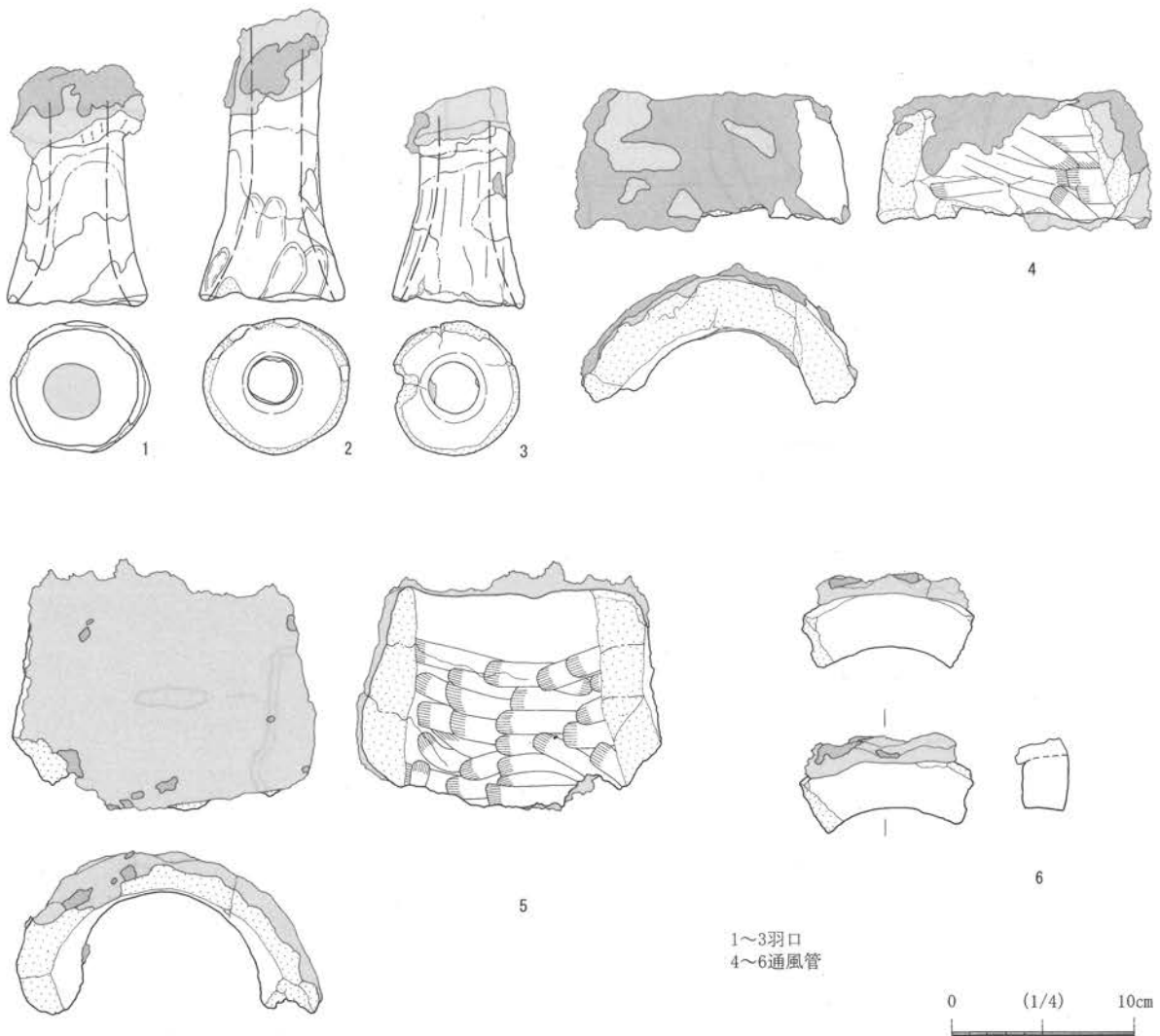


図76 羽口・通風管

気部の開きが強い。先端部には溶着滓が付着している。長さ 16.0 cm、先端部内径 2.4 cm、吸気部内径 6.9 cm である。3 は長さ 12.0 cm、先端部内径 2.3 cm、吸気部内径 6.3 cm の羽口である。形状は先端部から吸気部手前までは円筒形であるが、吸気部付近で強く開くために断面形はラッパ形となる。先端部には溶着滓が付着している。

図 76-4～6 は通風管の破片である。いずれも通風管全体の様相を推察するほどの残存状況にはない。4 は通風管先端付近であると思われる。外面には多量の溶着滓が見られる。推定される直径は 15 cm 前後である。5 も 1 と同様に通風管先端部付近の資料である。外面には溶着滓が付着する。6 は非常に小片であるために詳細は不詳であるが、通風管の破片と見ている。

図 75-6 は鉄塊である。表面には 3 つの面が形成されている。裏面は平坦で断面は台形となる。これらの面が剥離の痕跡であるのか、元来の面であるかを判断することは困難で、鉄塊であるということ以外は言及することはできない。(荒)

1・2号木炭窯跡 (図版 48～51)

1・2号木炭窯跡は、東西にのびる尾根の南向き斜面に位置する。両窯跡とも途中で調査を中止したため、遺構平面図等の記録作成はしていない。

(荒)

3号木炭窯跡

遺 構 (図 77・図版 52)

3号木炭窯は、東西にのびる尾根の南向き斜面、標高 24～27m 付近に立地し、丘陵斜面を等高線に直行してトンネル状に掘り込んだ地下式登窯である。西側には 1号不明遺構、東側には重複する 2号竪穴住居跡と 2号木炭窯跡が、本遺構と同じ斜面のほぼ同一標高に比較的近接して営まれている。

検出段階において、斜面に直行して南北方向にのびる焼成室から作業場にかけてのプランを確認している。焼成室の部分では流入土と推定される暗褐色土、作業場の部分では黒褐色土のプランが確認され、焼成室の天井が崩落していることを確認している。これらのプランから遺構の中軸線を想定し、覆土の断ち割りを行って土層断面を観察した。

堆積土は 19 層に分かれる (A-A' セクション)。焼成室内の堆積土は天井崩落土が主体となり、焼成室中央の底面直上には初期の天井崩落によるブロック状の堆積土である 18・19 層が堆積している。2 層は奥壁近くの天井が崩落したことによるブロック状の堆積土である。15 層は焼土主体の層であり、焚口付近の被熱した壁に由来するものと考えられる。焼成室内の土層の堆積状況からは、まず焼成室中央の天井が崩落し、流入土をはさみながら焚口付近および奥壁付近の天井が順次崩落した状況がうかがえる。

作業場に堆積した 12・13・17 層は、炭化物を多量に含む。底面直上に堆積した 17 層は、当木炭窯の作業時の堆積土と推定される。なお、土層断面の観察からは、複数の作業を推定できるような知見は得られなかった。

窯は焼成室・焚口・作業場からなり、焼成室奥壁から作業場の末端までの全長は 9.5m であ

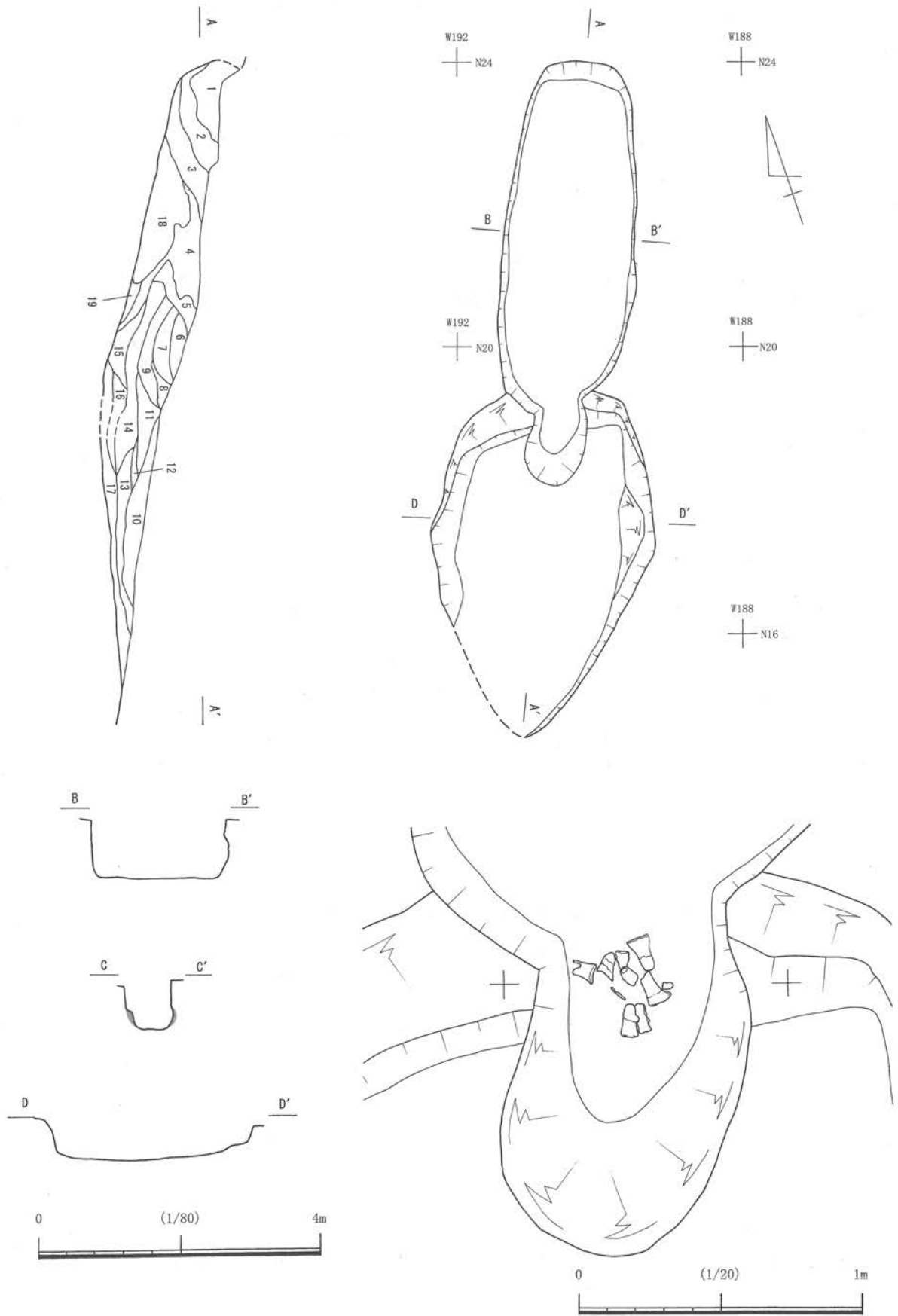


图77 3号木炭窯跡

る。焼成室は全面に炭素が吸着して黒色の還元状態を示している。焼成室の平面形は、両側壁の中央やや作業場寄りの部分が外に膨らみ、そこから焚口へ向かって弧を描いてすぼまる。奥壁は直線的で隅丸状である。焼成室の横断面形は、西側壁は直線的に立ち上がるのに対し、東側壁はやや内湾する。底面は平坦である。崩落により天井形態は不明であるが、奥壁近くに僅かに残る天井の形態から、丸みを帯びるものと思われる。焼成室全体の規模は、全長 4.6m、幅は奥壁部で 1.0m、最大幅 1.96m、焚口部で 0.7mを測る。底面の傾斜角度は 15° である。

焚口部は、やや平坦な底面から周壁が緩やかに内湾して立ち上がる形態で、底面は作業場から焼成室へ向かってやや低く掘り窪められている。幅は 0.75m である。周壁は被熱により赤化している。なお、焚口部には使用済みのフイゴ羽口が集中して出土した。出土位置は底面直上ではなく、本窯跡の廃絶後に焚口内に投棄されたものと推定される。作業場の平面形は、肩の張った不整な逆五角形で、平坦な底面が削り出されている。壁は急な傾斜をもつ。底面は焚口方向へ向かってやや低くなっている。規模は、長さ 3.55m、最大幅 3.1mを測る。時期を示す遺物は出土しなかった。(藤木)

3号木炭窯

- | | |
|-----------------|----------------------|
| 1 褐色土 炭粒 焼土少 砂質 | 11 暗褐色土 砂質 炭少 |
| 2 壁崩落土 ブロック状 | 12 黒褐色土 炭多 |
| 3 褐色土 炭粒 焼土少 砂質 | 13 暗褐色土 砂質 炭多 |
| 4 黒褐色土 炭多 砂質 | 14 黄褐色土 砂質 |
| 5 褐色土 粘質 炭少 | 15 赤褐色土 砂質 |
| 6 灰黄色土 粘質 炭少 | 16 壁崩落土まじり褐色土層 ブロック状 |
| 7 黄褐色土 粘質 炭少 | 17 黒色土 炭多 |
| 8 暗褐色土 砂質 炭多 | 18 崩落土 ブロック状 |
| 9 黄褐色土 粘質 | 19 崩落土まじり褐色土層 |
| 10 黒褐色土 砂質 炭少 | |

1号竪穴住居跡

遺 構 (図版 53・54)

1号竪穴住居跡は、1号廃滓場の北東側で確認された住居跡である。本遺構も前述した事情により遺構図などの記録作成は行っていない。

(藤木)

遺 物 (図 75-7・図 78 : 図版 118-1・2)

図 78-1 はロクロ整形の土師器杯である。口径 13.7 cm、器高 3.8 cm である。内面にはミガキ、黒色処理が施される。外面底部には回転糸切りの痕跡が認められ、底部切り離し後の再調整は行われていない。同図 2 は土師器甕の口縁部資料であるが、非常に小さな碎片であるため、詳細は不明である。観察できる範囲では、胴部上端から外方に向かって強く外傾したのち、上方に向かって短く立ち上がって収まる。長胴甕に分類されると思われる。器面の調整は内外面ともにヨコナデが施されている。図 75-7 は用途不明の鉄製品である。板状の鉄製品の一部であると思われるが、その性格については不明である。

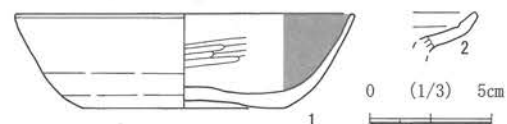


図78 1号竪穴住居跡出土遺物

同図 2 は土師器甕の口縁部資料であるが、非常に小さな碎片であるため、詳細は不明である。観察できる範囲では、胴部上端から外方に向かって強く外傾したのち、上方に向かって短く立ち上がって収まる。長胴甕に分類されると思われる。器面の調整は内外面ともにヨコナデが施されている。図 75-7 は用途不明の鉄製品である。板状の鉄製品の一部であると思われるが、その性格については不明である。(荒)

2号竪穴住居跡

遺 構 (図 79・図版 55・56)

2号竪穴住居跡は、東西にのびる尾根の南向き斜面、標高は25m前後の地点に立地する。住居跡は2号木炭窯跡と重複しており、土層断面の観察から、当住居跡が新しいと判断している。

2号木炭窯と重複しており、また斜面の下位にあたる南壁の一部が流出し

失われているため不明確な部分もあるが、平面形は東西約3.18m、南北約3.0mの正方形に近い形態と考えられる。検出面からの深さは約51cmである。主軸方位はN-18°-Wを指す。

覆土は検出面からの厚さ51cmを測り、1～5層に分けられる。最下層の5層は暗褐色砂質シルトで、地山と同質の黄褐色土粒を多量に含んでいる。住居廃絶後の初期堆積土とも考えられるが、貼床の可能性もある。

壁際に三角堆積した4層は地山と同質の黄褐色砂質シルトで、壁の崩落に伴う堆積土と推定される。中央部にレンズ状に堆積した3層は黒褐色砂質シルトで、炭化物を多量に含んでいた。壁際から中央へ向かって堆積した2層は、炭化物・黄褐色土粒を少量含む暗褐色砂質シルト、最上層にレンズ状に堆積した1層は、焼土粒・炭化物粒を微量に含む黒褐色砂質シルトで、いずれも斜面上位から流れ込んだ自然流入土である。

カマドは東壁中央に構築されている。煙道は地下式で、天井が残っており、住居東壁より約50cm外側にのびる。燃焼部の天井は失われていた。袖部は被熱により酸化した粘土塊が使用されており、両袖の内側には溶着滓がみられた。また、南側袖の外側には装着されたフイゴ羽口が突出している。カマド材として製鉄炉の炉壁が転用された可能性と、実際に簡易な炉として機能していた可能性が考えられる。カマド内からは鋳型が出土していることから鋳造に関連する機能を果たしたのかもしれない。燃焼部内の堆積層は3層に分層した。北側袖部の際に三角堆積した3層は褐色粘土で、焼土を多量に含む。燃焼部底面に堆積した2層は、炭化物粒を多量に含む黄褐色粘土である。その上に位置する1層は焼土主体の層である。なお、本住居跡では、周溝、柱穴は確認できなかった。

(藤木)

遺 物 (図 80・81：図版 117)

出土遺物は、住居南西壁付近の床面直上から須恵器杯、カマド燃焼部から土師器甕、須恵器短頸壺、床面からは鉄鏟が出土している。また、須恵器短頸壺の直下には、器物鋳型の破片が出土した。鋳型破片はカマド内の支柱として利用された可能性がある。以下、出土遺物の特徴について記載する。

図81-1は須恵器杯である。口縁部の一部が欠損しているが、ほぼ完全形に近い残存状況である。口径13.0cm、器高4.1cmである。器面にはロクロナデが認められ、底面ならびに底部側

2号竪穴住居跡	
1	黒褐色砂質シルト 焼土粒・炭化物粒微量含
2	暗褐色砂質シルト 炭化物少量混ざる 黄褐色土粒少量混ざる
3	黒褐色砂質シルト 炭化物多く混ざる
4	黄褐色砂質シルト 炭化物少量混ざる 壁崩落土
5	暗褐色砂質シルト 炭化物少量 黄褐色土粒多く混ざる →住居の堆積土あるいは貼土
カマド	
1	焼土 しまり良
2	黄褐色 粘土 炭粒大含 しまりやや弱
3	褐色土 粘土 焼土ブロック多 しまりやや弱

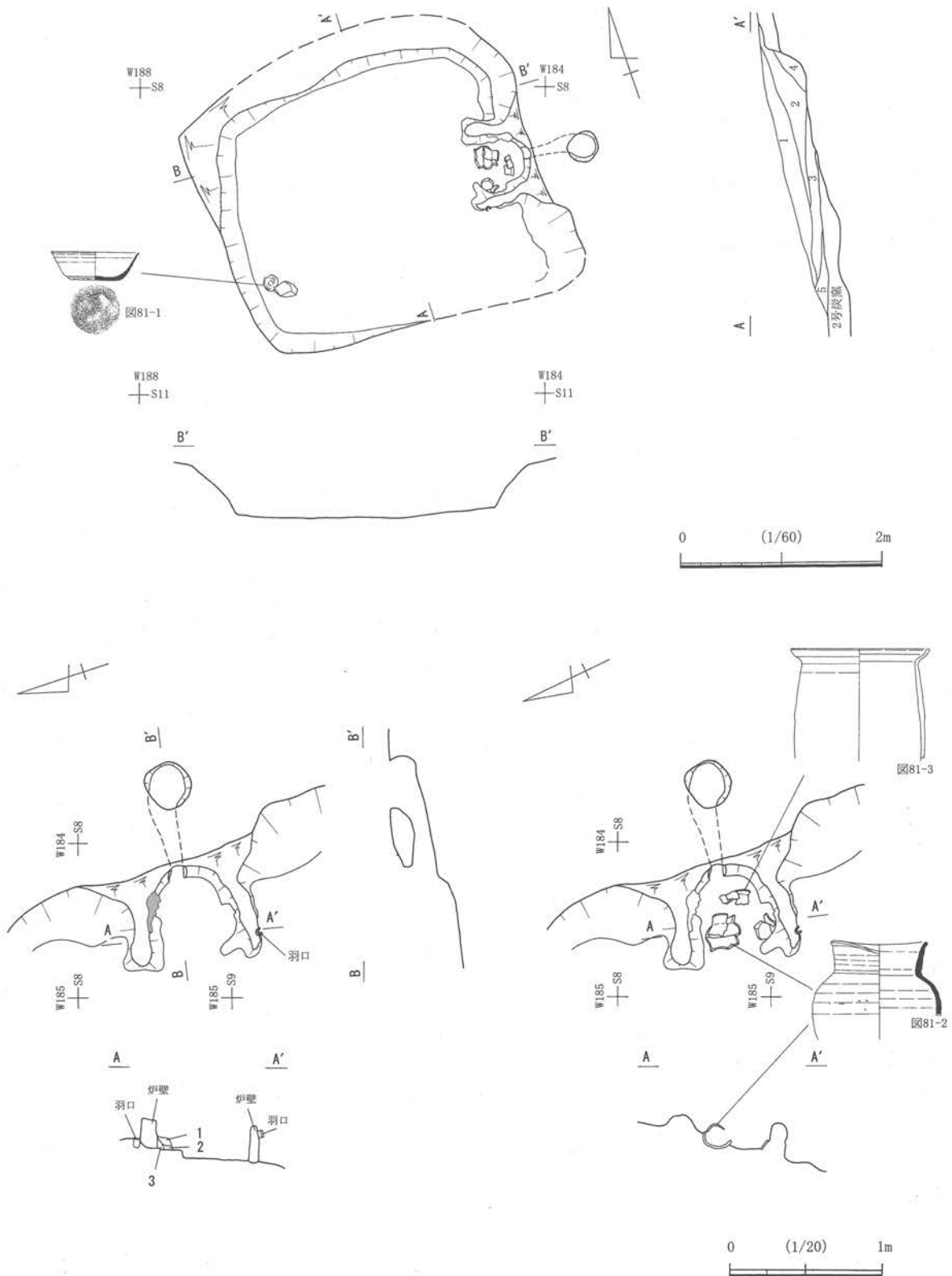


图79 2号竖穴住居跡

面には回転糸切り後に手持ちヘラケズリによる再調整が施される。

図 81-2 は須恵器短頸壺である。体部下半ならびに底部は欠損しており不明である。体部の形状は比較的球形に近いが、体部上部で弱い肩部が形成されている。頸部ならびに口縁部は弱く外傾しながら直線的に立ちあがり、口縁端部に至る。口縁端部は丸く肥大しおさまる。また、口縁部の一部は片口状に歪んでいる。器面には明瞭なロクロナデが認められ、口縁部から頸部にはヨコナデが施される。

図 81-3 はロクロ整形による土師器の甕である。胴部下半から底部にかけての範囲は欠損しており全体の形状は不明であるが、長胴甕であると推測される。口径 20.6 cm、残存器高は 16.7 cm である。残存している範囲ではすでに口縁部に向かって弱く内湾している状況が認められる。口縁部は一端斜め上方に向かって外傾した後に弱く立ち上がっておさまる。器面の調整は摩滅のために判断し難いが、体部には斜め方向を主としたナデが施され、口縁部にはヨコナデが施されるものと推測される。

図 81-5・6 は 2 号竪穴住居跡カマドから出土した器物製品の鋳型である。5 は底部側辺部から口縁部にかけての範囲が残存している資料である。最も内面には砂粒を含む中マネが観察され、最も外側にはスサを含む粗マネが認められるが、仕上げマネは残存していない。この鋳型から推定される器物の口径は 22 cm 前後、器高は 6～7 cm 前後であったと思われる。また当資料の口縁部には深さ約 2 cm の凹部が認められ、注口もしくは湯口の可能性が高い。

6 は 2 号竪穴住居跡カマドから出土した。鋳型から推定される製品の法量は口径 18 cm、器高 5 cm 前後と推測される。底部はほぼ平坦で、器壁は外傾しながら直線的に立ち上がる。鋳型内面の一部には仕上げマネが残存しており、外面にはスサが混入した粗マネが観察される。

同図 7 はカマド壁に再利用された炉壁である。表面にはスサ入り粘土の炉壁粘土が見られ、背面には粘土の溶解によるガラス質が現われ、気泡が発生している。

図 80-1 は鉄鏝である。長さ 11.8 cm の長頸鏝に分類される。根は長さ 3.1 cm の三角形で逆刺はない。頸部は 2.6 cm、茎部は 6.1 cm、この両部位をあわせた筥被部長は 8.7 cm である。頸部は茎に向かって細くなり、断面形は隅丸方形である。茎端部は尖り、断面形は方形である。根から頸部にかけての範囲には木質が遺存している。

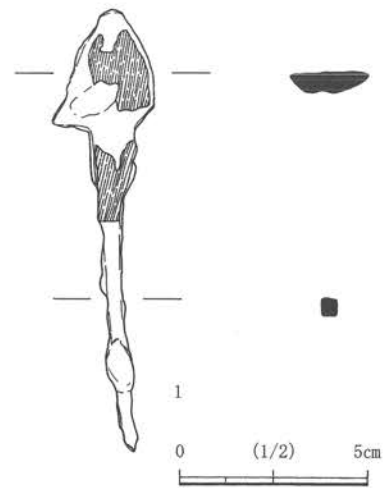


図80 鉄鏝

(荒)

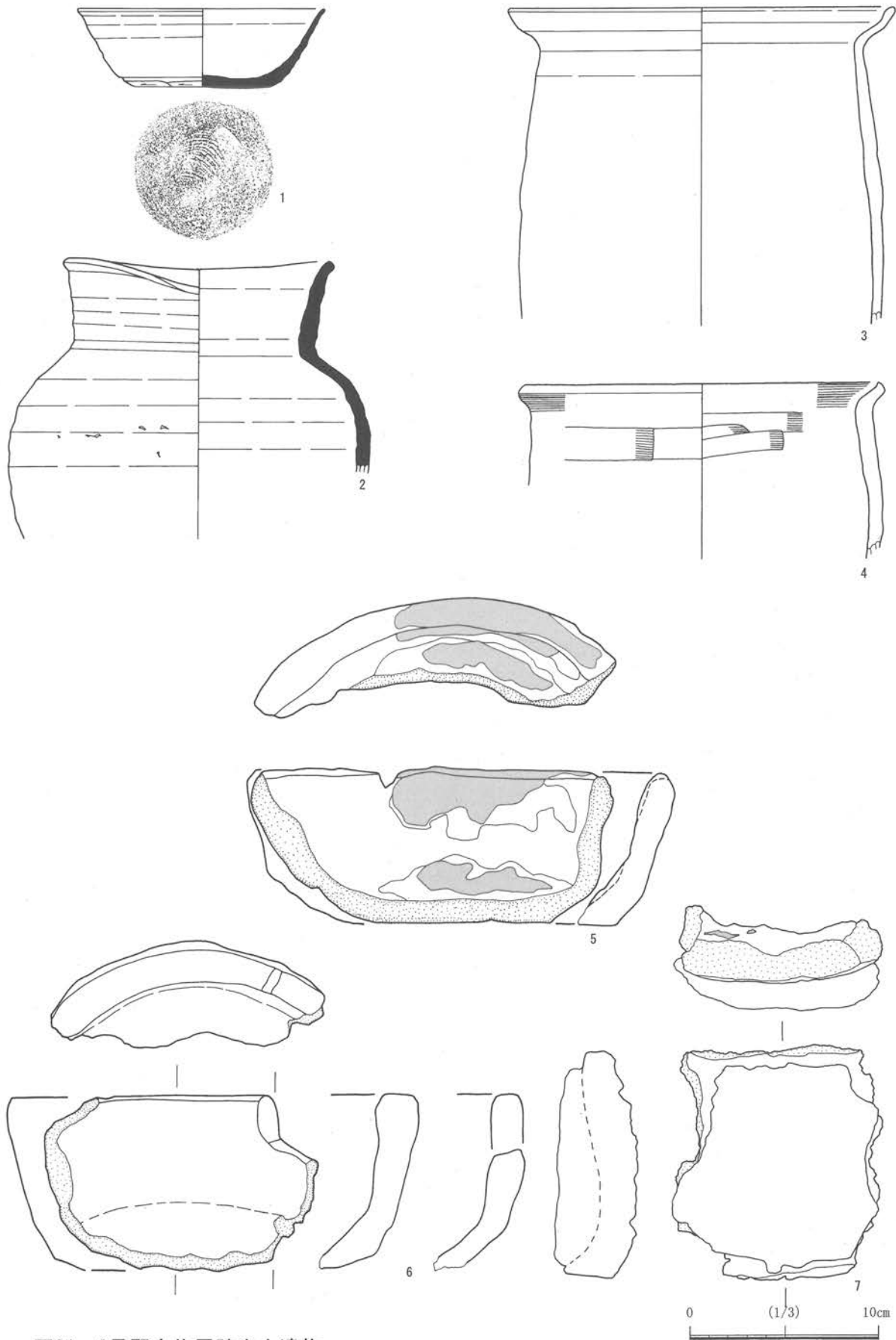


图81 2号竖穴住居跡出土遺物

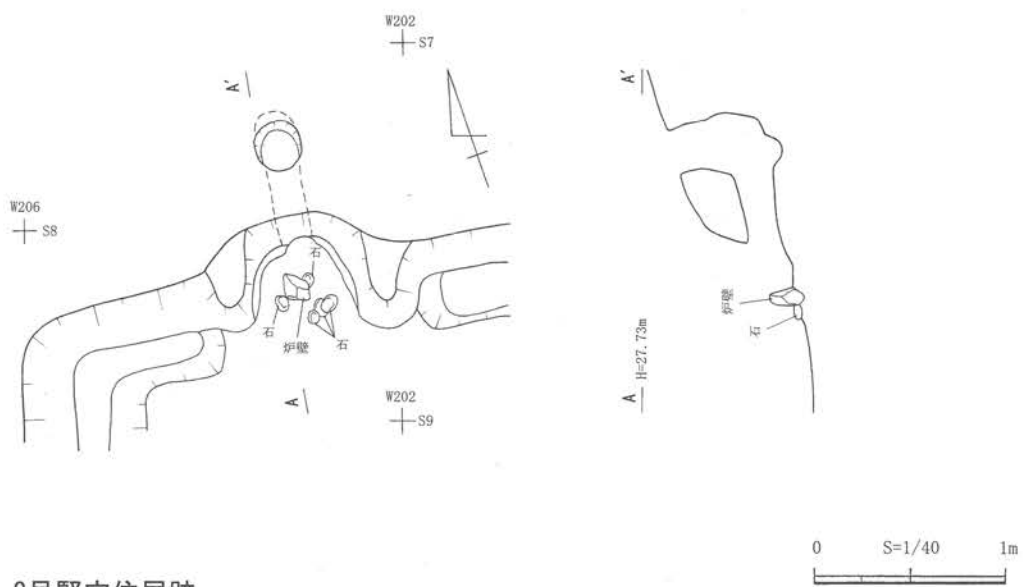
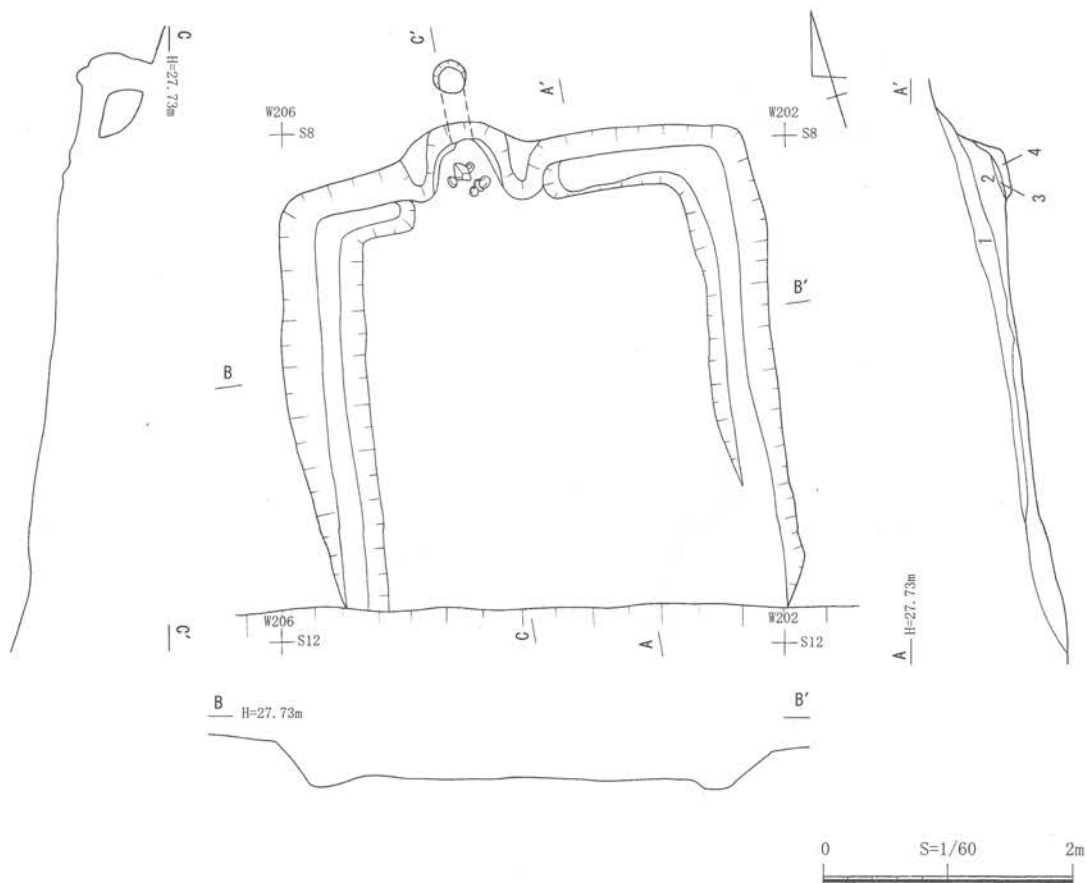


图82 3号豎穴住居跡

3号竪穴住居跡

遺 構 (図 82 : 図版 57・58)

3号竪穴住居跡の立地する地形は、他の遺構と同様、東西にのびる尾根の南向き斜面で、標高は25~27m前後である。

斜面下位に位置する南壁が流出により失われているが、平面形は東西約 3.88m×南北 3.75m以上の、ほぼ正方形に近い形状と考えられる。検出面からの深さは、約 30 cmである。

覆土は厚さ 10~30 cmが残り、4層に分けられる。黒褐色土・黄褐色粘土による自然堆積である。3層は、焼土・粘土ブロックを多量に含んでいる。周溝は、幅 33 cm前後、深さ 5 cmで、北・西・東壁を巡るが、カマドの位置で途切れる。住居跡に伴う柱穴は確認されていない。

カマドは北壁で確認された。カマドの位置のみ住居壁がやや外へ張り出し、また、その両側の地山が掘り残され、袖部が削り出されている。天井は崩落している。煙道は地下式で、天井が残っていた。住居北壁から約 0.35m外へのびている。なお、カマド燃焼部内には、20 cm角の炉壁が据えつけられていた。炉壁を支柱として利用したものと推測される。また、その周囲には、10~15 cmほどの川原石が据えられていた。なお、当住居跡に伴う遺物は出土しなかった。

(藤木)

3号竪穴住居跡

- | | | | |
|---|-------|------------|--------|
| 1 | 黒褐色土 | 焼土・炭微量含 | しまりやや弱 |
| 2 | 黄褐色粘土 | 砂質 焼土・炭少含 | しまり良 |
| 3 | 黄褐色粘土 | 砂質 焼土ブロック多 | しまり良 |
| 4 | 黄褐色粘土 | 砂質 | しまり良 |

4号竪穴住居跡 1・2号鍛冶炉跡

遺 構 (図 83 : 図版 59・60)

4号竪穴住居跡は、3号竪穴住居跡の西側約 11mに位置する。南半部を欠くが、平面形は東西約 5.4mの方形と推測される。主軸方位はN-27° -Wを指す。検出面からの深さは約 30 cmである。

覆土は、厚さ 5~30 cm程が残り、5層に分けられる。黄褐色粘土・暗褐色土の自然堆積層である。周溝は西壁から北壁西半にかけてめぐると、カマドの位置で途切れる。また、北壁東半および東壁では確認されなかった。なお、柱穴は確認されなかった。

カマドは北壁中央で確認された。住居北壁中央は、カマドの位置が外側へ 50 cmほど張り出し、向かって左側の袖は地山を掘り残すことによって造り出されているが、右側の袖は遺存していなかった。煙道は、住居外側へ約 60 cm延びていた。

4号竪穴住居跡床面では、鍛冶炉跡と推定される遺構が、西壁近くと中央部の2ヶ所で確認されている。以下、前者を1号鍛冶炉跡、後者を2号鍛冶炉跡とする。いずれも4号竪穴住居跡に伴うものと判断している。

1号鍛冶炉跡は、東西、南北とも 50 cmを測る不整形の浅い掘り込みで、内部は全面に被熱が認められ、硬化している。竪穴住居床面を掘り込み、掘方の底面をそのまま使用面としている。覆土は焼土を含む黒褐色土である。覆土中から鉄滓が少量出土している。

2号鍛冶炉跡は、径 70 cm、深さ 10 cmの浅い掘り込みである。径 90 cmの範囲に炭化物の

4号竪穴住居跡

- | | | | | |
|---|-------|---------|--------|--------|
| 1 | 黄褐色粘土 | 砂質 褐色土混 | 炭・焼土少含 | しまり良 |
| 2 | 暗褐色土 | 炭・焼土含 | しまりやや弱 | |
| 3 | 黄褐色粘土 | 砂質 | 炭多 | しまり良 |
| 4 | 黄褐色粘土 | 砂質 | 炭粒状含 | しまり良 |
| 5 | 黄褐色粘土 | | | しまりやや弱 |

2号鍛冶炉跡

- | | | | | |
|---|-----|---------|---------|------|
| 1 | 黄褐色 | 炭(小~粒状) | 焼土ブロック含 | しまり良 |
|---|-----|---------|---------|------|

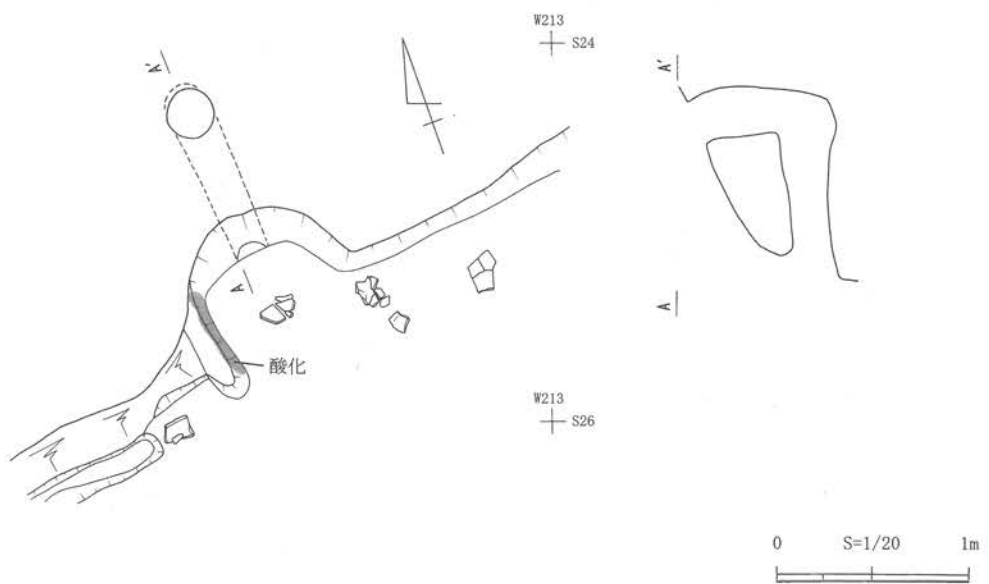
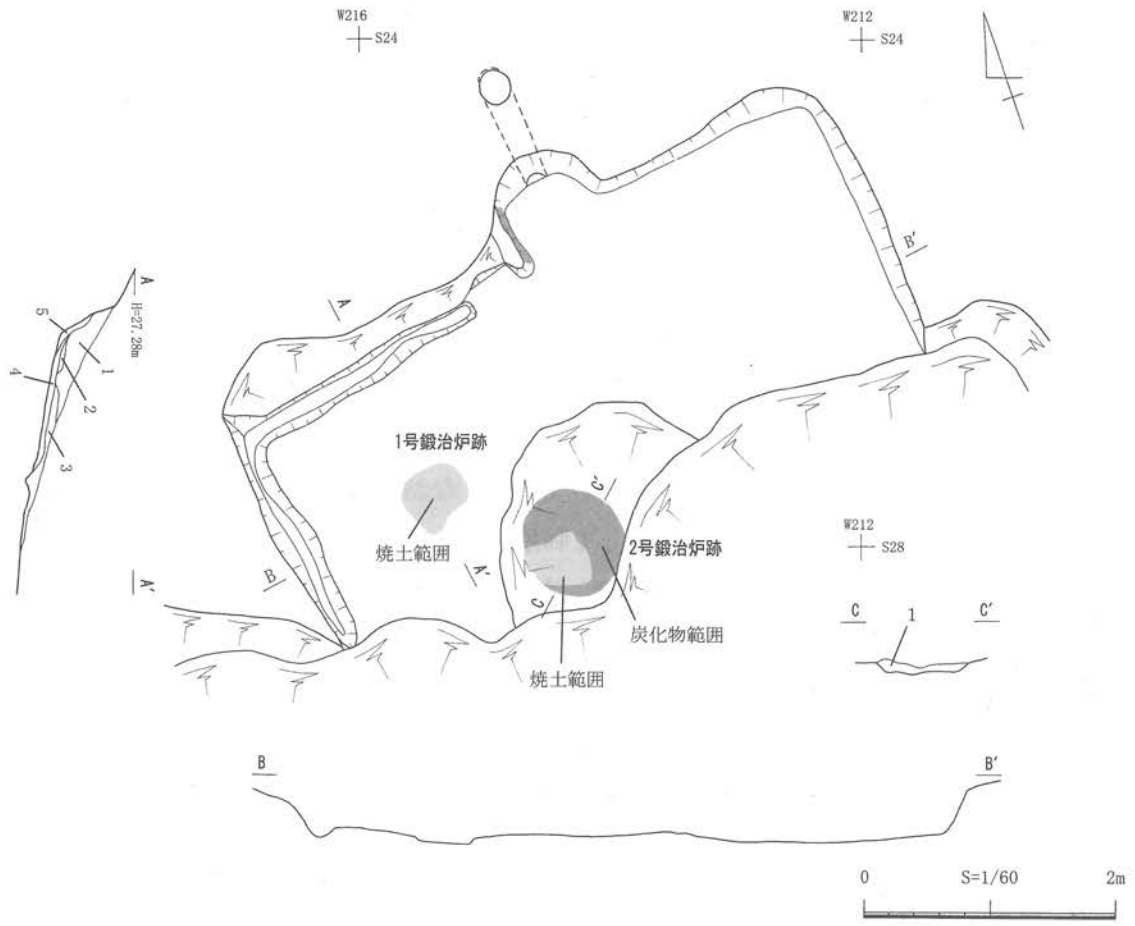


图83 4号豎穴住居跡

集中が認められ、その上部には径 50 cm ほどの範囲に焼土ブロック・鉄滓が集中している。堅穴住居の床面を掘り込み、底面をそのまま使用面としている。

遺物

遺物は、カマド内およびカマド周辺の床面直上から土師器甕が出土している。図化するに至らなかったが、ロクロ調整の甕である。

(藤木)

土坑

2号土坑 (図84)

2号土坑は長軸 1.4m×短軸 0.8m、深さ 0.4mの長方形の平面プランを有する土坑である。地山の黄褐色粘土を掘り込んで造られている。

土坑は垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。四壁と底面の一部は強く被熱し赤化している。なお、底面直上に一部、木炭層の堆積が認められた。

本土坑は、底面直上に木炭層がみられること、焼壁が認められることから、いわゆる木炭焼成土坑と考えられる。なお、土坑から遺物の出土はなく、時期を推定する手掛かりは得られなかった。

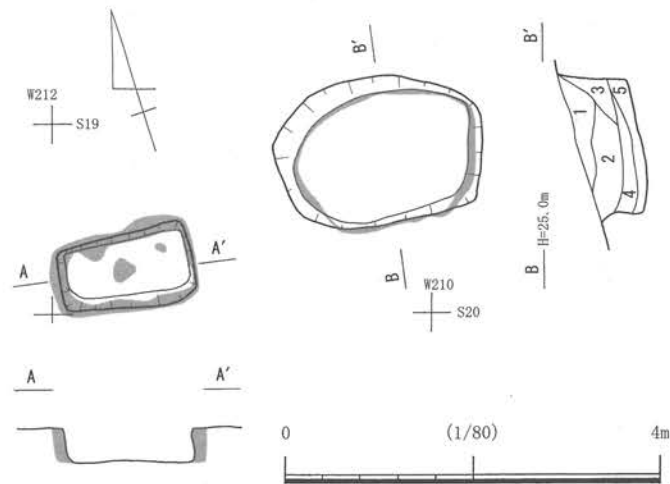


図84 2号・3号土坑

(藤木)

3号土坑 (図84)

3号土坑は長軸 2.2m×短軸 1.55m、深さは 0.7mの不整隅丸長方形の平面プランを有する土坑であり、地山の黄褐色粘土を掘り込んで造られている。

覆土は厚さ 35~50 cmが残り、5層に分層できた。底面直上に堆積した茶褐色土である5層は、焼土ブロックを多量に含んでいる。また、炭小片を少量含む。4層は5層と同様の茶褐色土であるが炭を多量に含んでおり、本土坑が機能していた時期の堆積土と考えられる。東壁際に三角堆積した3層は地山と同質の黄褐色粘質土で、炭・焼土を含む。土坑壁の崩落に伴う堆積土と推定される。西壁側から中央へ向かって三角堆積した2層は炭を少量含む茶褐色土である。最上層にレンズ状に堆積した1層は、茶褐色土と黄褐色土の混合土で炭を少量含む。1・2層は自然流入土と推定される。地山と同じ黄褐色粘土主体の層であり、壁の崩落による堆積土と

3号土坑

- 1 茶褐色黄褐色混合土 炭少含 しまり良
- 2 茶褐色土 炭少含 しまりやや弱
- 3 黄褐色粘土 炭・焼土含 しまり良
- 4 茶褐色土 炭多量・焼土ブロック少 しまり弱
- 5 茶褐色土 炭少 焼土ブロック大 しまりやや弱

考えられる。覆土の上層部にレンズ状に堆積した2層は粒子状の炭を少量含む灰黄褐色土、2層と同様にレンズ状に堆積した最上層にあたる1層は炭粒・炭片を多量に含む暗褐色土で、いずれも自然流入土と考えられる。

土坑は垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。西側から南側にかけての壁は上半がやや外に開くが、これは本来垂直に立ち上がっていた壁の一部が崩落したことによるものと思われる。壁は被熱し赤化している。

本土坑は、炭小片を多量に含む層がみられること、焼壁が認められることから、いわゆる木炭焼成土坑と考えられる。炭小片を多量に含む4層が本土坑の操業時の堆積土と推定される。その下層に位置する5層は、焼土ブロックを多量に含むが炭は少量しか入らない。5層は、本土坑が掘り込まれた当初から堆積していた操業以前の土層が、4層の操業段階で被熱したものである可能性と、4層以前の操業に伴うものである可能性が考えられよう。なお、本土坑から遺物の出土はなく、時期を推定する手掛かりは得られなかった。(藤木)

4～9・11・14・15号土坑 (図85)

4～9・11・13・14・15号土坑は、先に記載したように最終的な記録作成まで至らなかった土坑群である。従って図示できる記録は土層断面図のみで、遺構平面図ならびに遺構位置図は作成されていない。ここではこれら10基の土坑について、作成した土層断面の記録をもとに記載をおこなう。

4号土坑は標高32m付近に位置する土坑である。土坑の断面形は浅い箱形で、遺構内の堆積土は4層に細分される。斜面山側には1・3層が位置し、谷側には2・3層が位置する。最下層に位置する3層には多量の炭化物を含み、3層の上層に堆積した1層には多量の焼土を含む。3層に含まれた炭化物は本遺構が機能していた時点の残存物、上層に堆積した焼土を含む1層は赤化した遺構壁の崩落に起因するものと思われる。これらの諸痕跡から本遺構は木炭焼成土坑のような焼成土坑と思われる。

5号土坑は標高31m付近に位置する土坑である。土坑断面形は山側にあたる遺構壁は明瞭に掘り込まれるが、谷側の遺構壁は不明瞭なため三角形になる。遺構内の堆積土は山側から流入した自然堆積土で、最終的には5層に細分される。最下層に堆積した4層には多量の焼土が含まれていることから、木炭焼成土坑であると思われる。

6号土坑は標高31m付近に位置する土坑である。山側に位置する遺構壁は明瞭であるが、谷側の遺構壁は流出が激しい。遺構内の堆積土は水平に近く、2層に分層された。1・2層ともに炭化物や焼土を含むことから、木炭焼成土坑に代表される焼成遺構であると思われる。

7号土坑は標高27m付近に位置する土坑である。比較的緩やかな斜面に構築されており、土坑の断面形は明瞭な箱形である。遺構内の堆積土は最終的に7層に細分された。いずれの層もレンズ状堆積を示す。特に下層に位置する5～7層には多量の炭化物や焼土を含んでいることを見れば、本土坑が木炭焼成土坑に代表されるような機能を有するものと推測される。

8号土坑は標高26m付近に位置する土坑である。遺構の断面形は明瞭な箱形である、遺構下

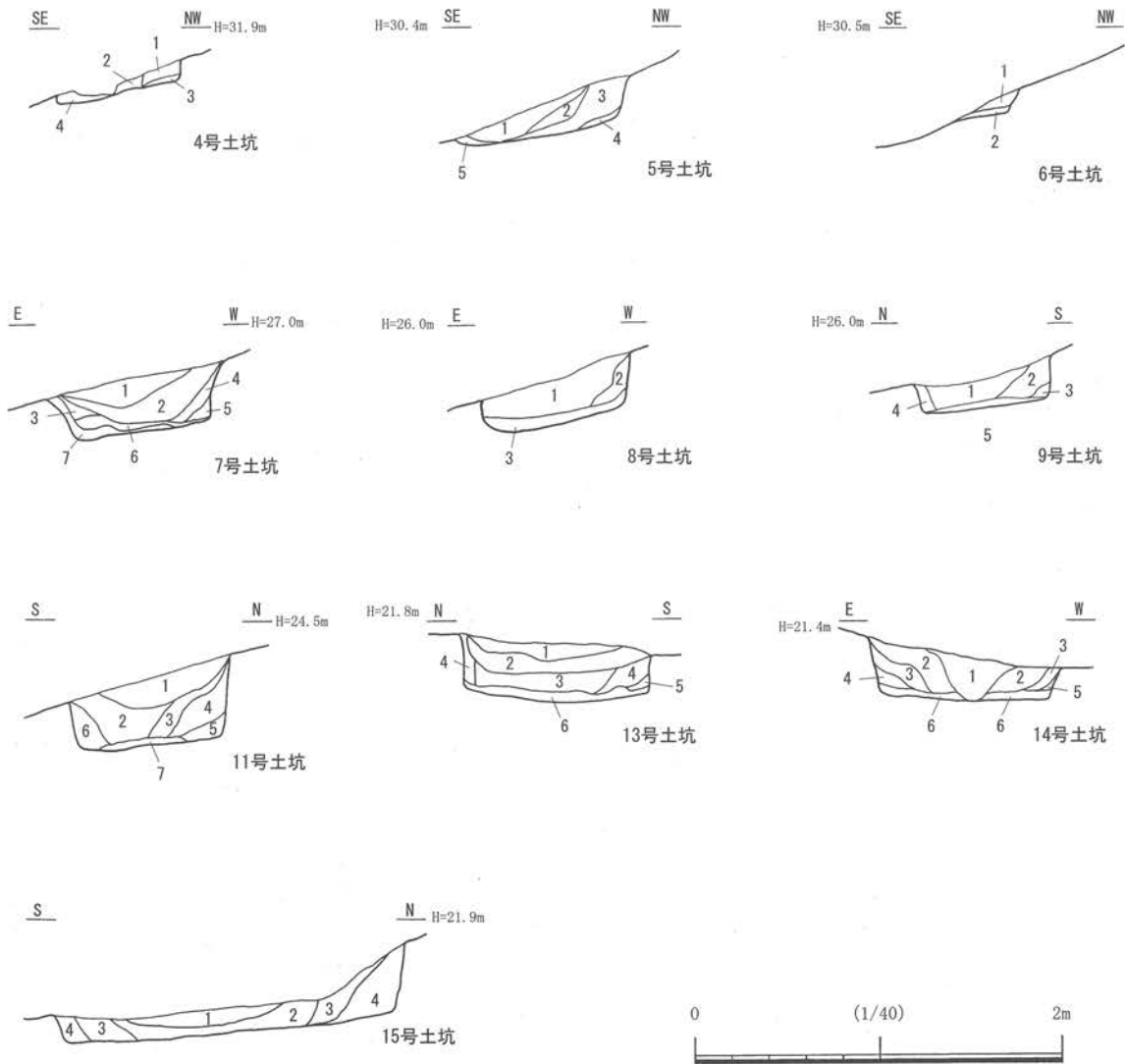


図85 土坑断面図

4号土坑

- 1 黄褐色土 炭微量・焼土多 しまり良
- 2 暗褐色土 炭・焼土含 しまり良
- 3 黄褐色土・暗褐色土混合土 炭多 しまり良
- 4 黄褐色土・暗褐色土混合土 炭微量 しまり良

6号土坑

- 1 茶褐色土 炭・焼土含 しまりやや弱
- 2 炭層 しまりやや弱

7号土坑

- 1 暗褐色土 炭微小粒含 しまりやや弱
- 2 茶褐色・黄褐色混合土 炭微小粒含 しまり弱
- 3 茶褐色・黄褐色混合土 炭微小粒・焼土 しまり弱
- 4 黄褐色土 炭・焼土少含 しまり良
- 5 黄褐色土 焼土多含 しまり良
- 6 茶褐色土 炭多含 しまり弱
- 7 黄褐色粘土 炭・焼土微量含 しまり良

5号土坑

- 1 暗褐色土・茶褐色土混合土 炭・焼土含 しまりやや弱
- 2 黄褐色土 炭・焼土微量 しまり良
- 3 黄褐色砂質土 しまり良
- 4 焼土(崩落) しまり良
- 5 茶褐色土 炭多 焼土 しまり弱

8号土坑

- 1 茶褐色土 焼土少 炭粒状多 しまり良
- 2 黄褐色土・茶褐色土混合土 炭微量 焼土多 しまり良
- 3 暗褐色土 炭層 焼土ブロック少含 しまりやや弱

9号土坑

- 1 茶褐色土 焼土少 炭粒状含 しまりやや弱
- 2 黄褐色土・茶褐色土混合土 砂質 炭微小含 しまり弱
- 3 黄褐色土・茶褐色土混合土 砂質 焼土含 しまりやや弱
- 4 黄褐色土・茶褐色土混合土 砂質 焼土含 しまり良
- 5 茶褐色土 炭層 しまり良

端の傾斜変換線は不明瞭である。遺構内の堆積土は3層に細分され、上半部には大きく堆積した1層が位置する。2層は山側から三角堆積した焼土層で、3層は土坑底面に水平方向に堆積した炭化物層である。2層には多量の焼土が含まれることから、赤化した遺構壁の崩落土で、その下層に水平堆積した炭化物層は、遺構が機能していた時点のものと思われる。したがって、本土坑は木炭焼成土坑であると思われる。

9号土坑は標高26m付近に位置する。遺構の断面形は明瞭な箱形で、遺構内の堆積土は5層に細分される。最も下層には水平堆積した炭化物を主体とする5層が位置し、その直上の3・4層には多量の焼土を含む。最下層の5層は本土坑が機能していた時点の木炭層、3・4層は赤化した遺構壁の崩落土と判断されることから、本土坑は木炭焼成にかかるものと推測される。

11号土坑は標高24m付近に位置する土坑である。遺構の断面形は明瞭な箱形で、遺構内堆積土は7層に分層される。最も下層に位置する7層は遺構底面中央に位置し、自然堆積土とは考え難い。7層の上部にのる合計6層の堆積土はいずれもレンズ状の堆積状況をもつため、自然堆積土である考えられる。

13号土坑は標高22m付近に位置する土坑である。比較的緩やかな斜面に構築されており、遺構の断面形は整った箱形である。遺構内の堆積土は6層に細分され、1～5層はレンズ状の堆積であることから自然堆積土である可能性が高い。最も下層に位置する6層は水平堆積をしており、上記5層とは異なる可能性がある。

14号土坑は標高22m付近に位置する土坑である。遺構の断面形は明瞭な箱形であり、遺構内の堆積土は6層に分層される。最も下層に位置する6層は水平堆積する木炭層で、遺構の存続時期のものである可能性が高い。6層にのる2～5層は遺構外から遺構内に流入した自然堆積層である。最も上層に位置する1層は最下層の6層を分断し遺構底面に到達していることから、木根による攪乱層の可能性が高い。

15号土坑は標高22m付近に位置する土坑である。上記9基の土坑と異なり、土層断面図を作成したラインで計測すると1.84mの堅穴状遺構である。遺構の断面形は明瞭な箱形で、遺構内堆積土は4層に細分される。いずれの層もレンズ状に堆積しており自然堆積層と判断される。本土坑については、遺構の規模ならびに堆積土の状況から異なった機能を想定しなければならないが、詳細は不明である。

(荒)

性格不明遺構 (図86: 図版61)

性格不明遺構と総括する遺構は、東西にのびる丘陵尾根の南斜面中腹、標高25～28m付近に立地する3基の遺構である。これら3基の遺構は斜面上部から縦列に並び、最も高所に位置するものからP1・P2・P3とした。他の遺構との関係では、当遺構群の東側隣接地には2号木炭窯が位置し、対する西隣には3号製鉄炉跡が位置している。これらの遺構との直接的な重複関係にはなく、先後関係は不明である。1号不明遺構とした3基のピットで見るとP1とP2は重複関係にあるが、土層断面の検討を踏まえても先後関係は明らかとされなかった。またP2とP3については重複関係にはないため、先後関係は不明である。

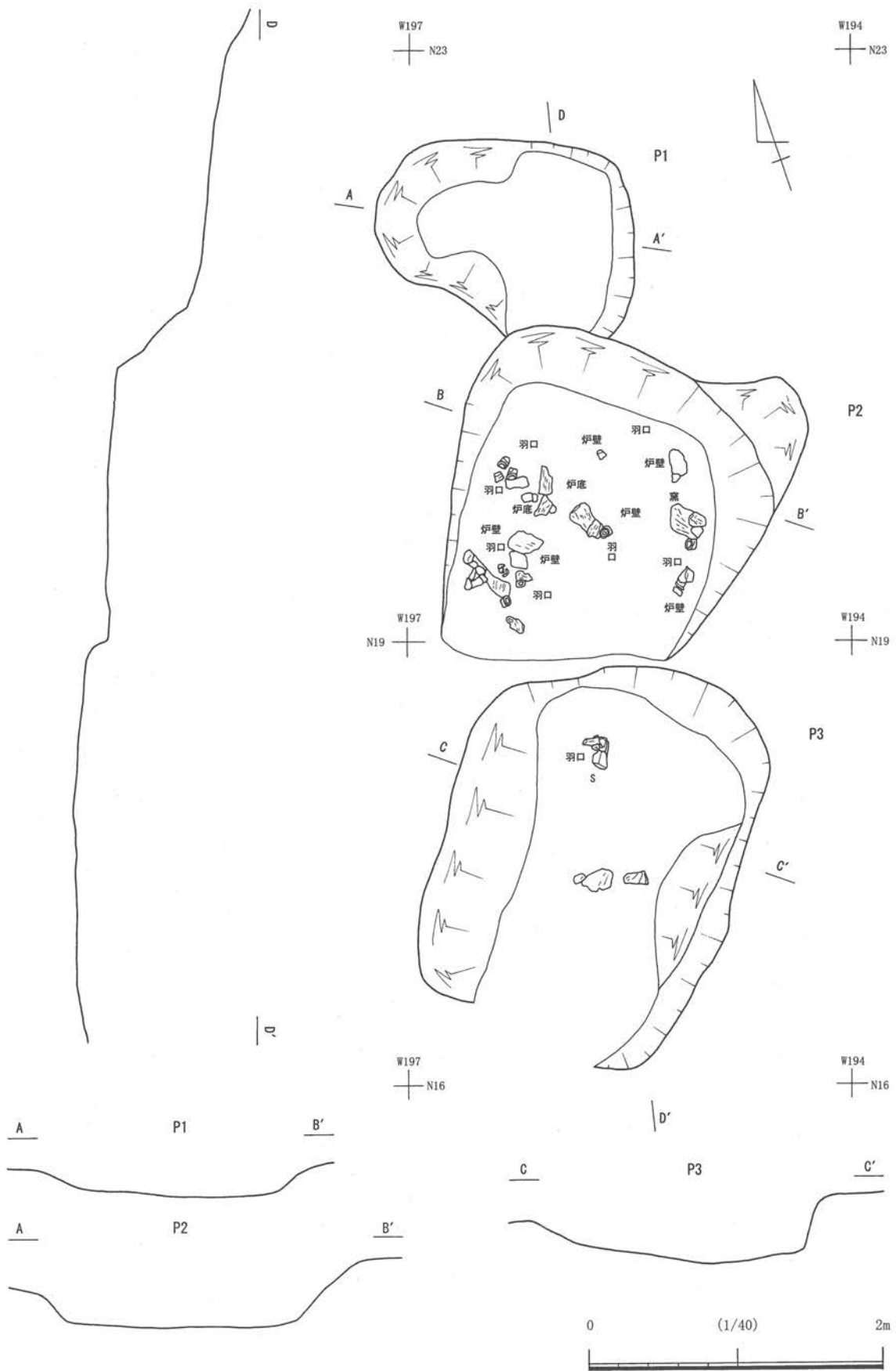


図86 性格不明遺構

遺構の特徴についてP1から記載する。P1はこれらの不明遺構の最も高所に位置する竪穴状の掘り込み遺構である。平面形は南北方向に長軸を向けた長方形の掘り込みと、この長方形の掘り込みの西壁に舌状に張り出した掘り込みが付属する。長方形の掘り込みは長辺1.22mを測り、掘り込みの壁面は緩やかである。一方舌状に張り出した掘り込み西端と長方形の掘り込み東端までの距離は約0.9mで、掘り込みの角度はやはり緩い。底面はほぼ平坦であるが西壁から東壁に向かって弱く傾斜する。P2との重複関係にある。

P2は3基のピット群の中央に位置する方形の掘り込みである。東西2.2m×南北2.5mの方形の平面プランを有し、北東コーナー付近では舌状に張り出した緩斜面が見られる。遺構の南壁は流出している。遺構は斜め上方から掘りこまれ、底面はほぼ平坦である。P1同様に西壁から東壁に向かって弱く傾斜する。位置的にはP1との重複関係にある。

P3は最も低所に位置する長方形の掘り込みである。長辺は南北方向を指し、2.7mを測る。短辺は東西を向き2.0mである。遺構の掘り込みは東壁では垂直に近い角度で掘り込まれているが、西壁は緩い。底面には傾斜変換点が複数存在し、西壁から東壁に向かって傾斜する。

これらの遺構内の堆積土は炭化物を多量に含む黒色土で、層の細分はできていない。したがって、P1とP2の重複関係においても、先後関係を明らかにすることはできなかった。出土遺物を見ると、P2とP3からは羽口と炉壁が出土している。特にP2からの出土が多く、P3からの出土は比べて少ない。また、P2からは鉄滓が出土しているのに対して、P3からは鉄滓が出土していない点は大きく異なる点である。

いずれにしても、本遺構群は他の遺構とは大きく異なり、竪穴状の掘り込みの内部において、羽口や炉壁を使用し、何らかの活動を行っていたと推測される。これらの活動がどのようなものであったのかを決定することはできないが、鉄滓なども出土することから鉄の精錬や鍛冶、鑄造などを想定している。

(荒)

第3項 まとめ

川内迫B遺跡群C地点の調査では製鉄炉跡3基、廃滓場、木炭窯跡3基、竪穴住居跡4軒、土坑が調査され、土師器、須恵器、鑄型が出土した。特に廃滓場から出土した鑄型類は他の調査地点では全く出土していないことを見れば、当調査地点の特異性を示す貴重な資料である。ここではC地点の調査を概述して、C地点の調査をまとめる。

まず、C地点は他の調査地点と比較すると検出された遺構の多さが特徴的である。

1・2号製鉄炉跡は、縦置きされた踏みフイゴ付きの長方形箱形炉で丘陵南斜面に2基が接して築かれる。両製鉄炉の下部には1・2号炉廃滓場が位置し、この廃滓場は上位に築かれた1・2号製鉄炉の操業に際して形成された可能性が高い。1・2号製鉄炉跡の先後関係や操業時期、回数などを示す知見は得られず詳細は不明であるが、長方形箱形炉に踏みフイゴが付属し、複数が並列して築かれている点を考慮すれば、金沢製鉄遺跡群における8世紀第4四半期から9世紀第1四半期のIV期の特徴と酷似する。

3号製鉄炉跡は、1・2号製鉄炉跡南東側に単独で造営された円筒形竪形炉である。遺構の詳細には不確定要素を含み、また遺構に伴う遺物は出土していないため遺構の年代は不明であるが、金沢製鉄遺跡群製鉄炉変遷において円筒形竪形炉が導入される時期はⅢ期である8世紀中頃の特徴である。従って3号製鉄炉の操業年代を金沢製鉄遺跡群製鉄炉変遷Ⅲ期から踏みフイゴ付長方形箱形炉導入以前までの年代が与えられ、3号製鉄炉が先行して操業を開始し、後出して1・2号製鉄炉の造営、操業が開始されるという変遷が想定される。

木炭窯跡は3基が調査された。いずれも地下式登窯であり、燃焼室、焚口、作業場で構成される点は共通している。これら木炭窯跡は3号製鉄炉跡とほぼ同じ標高に比較的近接するように築かれているが、群在するというよりはそれぞれが独立して造営されたように見える。

他の遺構との重複関係が明らかな2号木炭窯跡は、9世紀後半の須恵器杯を伴う2号竪穴住居跡より古いことが判明していることから、2号木炭窯跡は9世紀後半以前の年代が与えられる。したがって、2号木炭窯跡の造営時期は、先述した製鉄炉の年代幅の中に収まり、当地区内における製鉄作業に関連した木炭窯であると評価できよう。

1・3号木炭窯跡については不確定要素を多分に含むが、3号木炭窯跡の焚口付近からは本窯の廃絶後に投棄されたと考えられる羽口が集中した状態で出土している。3号木炭窯跡から出土した羽口は当地区内における1・2号製鉄炉のいずれかが機能を停止し、そこで使用された羽口が投棄されたものと考えられる。したがって、3号木炭窯跡はこの地区の製鉄炉の操業開始時期よりは後出するものと考えられる。この想定に従えば、3号木炭窯跡の造営時期の上限は当地区内における製鉄炉の出現以降の年代となる。

竪穴住居跡は4軒が調査された。2～4号竪穴住居跡は木炭窯跡や他の遺構とほぼ同じ標高に営まれており、地形等高線と平行に住居北壁を築き、カマドを除いた周囲には壁周溝を巡らす。また4号竪穴住居跡と3号竪穴住居跡は北壁にカマドを有しており住居構造は酷似する。一方2号竪穴住居跡は東壁にカマドを構築しており、3・4号竪穴住居構造との相違点としてあげられる。

1号竪穴住居跡からは底部未調整土師器杯、2号竪穴住居跡から須恵器杯、4号竪穴住居跡からはロクロ整形甕の破片が出土している。これらの遺物の特徴は表杉入式期に位置付けられるものである。

調査した住居跡のうち2号竪穴住居跡はカマド材に製鉄炉の炉壁を転用し、また燃焼部からはカマド支脚として再利用された器物鋳型が出土している。このような状況を見ると、2号竪穴住居跡は当地区の製鉄炉から廃棄された炉壁や鋳型を利用して築かれており、年代的には9世紀後半段階まで降る可能性があり、出土した遺物との年代観と合致する。

4号竪穴住居跡は住居に伴うと考えられる2基の鍛冶遺構が特徴的な住居跡である。住居内からはロクロ整形の甕が出土している。出土した資料は碎片のため厳密に時期比定するには問題が残るものの、9世紀中頃を前後する時期の所産である可能性が高いと見ている。従って本住居跡は9世紀第2四半期から第3四半期を中心とした年代が想定される。また住居内には2基の鍛冶遺構が営まれている。鍛冶遺構が担った役割については不明であるが、本住居跡は一

一般的な住居と考えるよりは鍛冶的な工房として性格をも考慮すべきであろう。つまり4号竪穴住居跡から、本地点内では鉄の生産と同時に、精錬や鉄製品、鋳物製品などの生産が行われていた可能性が高まる。このことは、廃滓場内から獣脚鋳型や器物鋳型の出土も関連しているものと推測される。3号竪穴住居跡については特徴的な遺物や構造を有していないため、詳細な時期特定は困難であるが、9世紀後半段階の2号竪穴住居跡は壁周溝をもたず、東壁にカマドを構築する特徴、9世紀第2～第3四半期の4号竪穴住居跡が壁周溝をもち、北壁にカマドを構築する特徴を考慮すれば、住居構造の酷似する4号竪穴住居跡に近接する時期のものと考えておきたい。

以上のように、本地点の製鉄炉、木炭窯、竪穴住居の大部分は金沢地区製鉄遺跡群における各遺構変遷では8世紀前半段階に円筒形竪形炉である3号製鉄炉から製鉄活動が開始され、8世紀第4四半期から9世紀第1四半期を中心とした時期まで活動が続いたと見ることができる。

また、4号竪穴住居では製鉄活動以外に精錬や鉄製品、鋳物製品の製作を行っていた可能性がある。4号竪穴住居跡の年代は9世紀第2・3四半期と想定されている。従って、製鉄炉や木炭窯の操業、ならびに各住居での活動がもっとも盛んになる時期は9世紀中頃を中心とした時期であると考えられる。

その後の9世紀中頃以降の製鉄遺構は希薄となる。また、前段階のような精錬や鉄製品、鋳物製品の製作に関しても活動を示す知見は得られていない。この時期に該当する可能性のある遺構は3号木炭窯跡、2号竪穴住居跡である。

出土遺物では、廃滓場内から出土した獣脚鋳型と器物鋳型の存在が注目される。出土した鋳型は型面に被熱によると思われる色調変化が見られ、当調査地点内ではこれらの鋳型を用いた鋳物製品の製作が行われていたことを示している。鋳型は鋳上がった製品を取り出す際に型を打ち割るために、鋳型全体が残存している例は少ないとされる。本地点で出土した鋳型についても、鋳型の原形を留めているものは皆無で、鋳型全体の様相を知ることはできない。このような出土状況を見ても、当調査地点内もしくはその周辺において鋳物の生産行為が行われていたと考えられよう。

これまで、近接する遺跡の調査で鋳型が出土した例としては、新地町向田A遺跡、相馬市山田A遺跡、同市猪倉B遺跡に限られ、川内迫遺跡群、蛭沢遺跡群の他の地点や金沢製鉄遺跡群でも見られず、当調査地点の大きな特徴であるといえる。このように見ると、福島県太平洋岸北部である相双地方では各地で大規模な鉄の生産を行ってはいるものの、遺跡内において鋳物製品を製作する行為は、非常に特異な行為であるといえる。

川内迫B遺跡群C地点から出土した鋳型類は獣脚と器物の2種類であるのに対して、武井地区製鉄遺跡群で出土した鋳型類には獣脚、器物に風鐸、梵鐘が加わる点は、大きな相違点として捉えられる。出土した鋳型の相違は生産された鋳物製品の相違を直接的に示し、武井地区では火舎や梵鐘などの密教儀式に使用する物品に加え寺院を加飾する風鐸をも製作し、一方川内迫B遺跡群では、火舎のみが生産されたものと考えられる。

(荒)

挿 図	出土地点	種 別	先端部		吸 気 部		最大長	調 整	図 版
			内 径	内 径	外 径				
76-1	1 廃滓	羽 口	3.1	6.6	7.7	13.0		119-6	
76-2	1 廃滓	羽 口	2.4	6.9	7.8	16.0		119-7	
76-3	1 廃滓	羽 口	2.3	6.3	7.1	12.0		119-8	
挿 図	出土地点	種 別	直 径	残 存 長		器 厚	調 整	図 版	
76-4	1 廃滓	通風管	—	7.3		3.2		119-9	
76-5	1 廃滓	通風管	—	13.5		2.0		119-10	
76-6	1 廃滓	通風管	—	3.9		2.9		119-11	

表 12 出土遺物観察表 (2)

挿 図	出土地点	器種	口径/器高/底径	調 整		図 版
71-1	1 廃滓	甕	長(17.7)厚1.4	内面:体部青海波文タタキ 外面:体部平行タタキ		120-1
71-2	1 廃B区	甕	—/(6.1)/13.6	内面:指ナデ 外面:指ナデ 底部ヘラナデ		120-2
71-3	1 廃B区	甕	長(9.1)厚0.9	内面:体部青海波文タタキ 外面:体部平行タタキ		120-4
71-4	1 廃B区	杯	12.3/4.9/5.5	内面:ミガキ 黒色処理 外面:ロクロナデ・ヘラケズリ		120-3
71-5	1 廃B区	杯	—/(2.9)/7.0	内面:ミガキ 黒色処理 外面:ロクロナデ ヘラケズリ		120-5
72-1	1 廃B区	甕	22.5/43.7/15.0	内面:青海波文タタキ ハケメ 外面:タタキ ケズリ		120-6
78-1	1 住B区	杯	13.7/3.8/8.0	内面:ミガキ 黒色処理 外面:ロクロナデ 底部糸切り		118-1
78-2	1 住	甕	—/(1.6)/—	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ		118-2
81-1	2 住	杯	13.1/4.1/7.2	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ 糸切りヘラケズリ		117-1
81-2	2 住	壺	13.8/(14.7)/—	内外面とも口~体部ロクロナデ		117-2
81-3	2 住	甕	20.3/(16.8)/—	内面:ロクロナデ ヘラナデ 外面:ロクロナデ ケズリ		117-3
81-4	住居	甕	18.6/(9.2)/—	内外面:口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ		117-4

表 13 出土遺物観察表 (3)

挿 図	出土層位	最大長	D1	D2	最大幅	備 考	図 版
64-1	1 廃B L4	(9.7)	(8.1)	3	2.5		114-4
64-2	1 廃B L4	(8.0)	(6.7)	3	2.65		114-5
64-3	1 廃	(5.8)	—	—	3.9		114-6
65-4	1 廃D	(6.7)	—	—	—		114-7
65-5	1 廃D	(8.1)	—	—	—		114-8
65-6	1 廃D	(6.9)	(5.4)	3	2.9		114-9
66-7	1 廃	(12.2)	—	—	(3.1)		114-10
66-8	1 廃	(9.9)	(8.8)	(5.0)	(4.2)		114-11
67-9	1 廃	(9.9)	—	—	—		114-12
67-10	1 廃	(7.4)	—	—	—		114-13
67-11	1 廃	(3.7)	—	—	(3.4)		114-14
68-12	1 廃A L3	(9.3)	(8.8)	4	2.7		114-1
68-13	1 廃	(4.9)	—	—	(5.8)		114-2
68-14	1 廃	(8.9)	—	—	(3.6)		114-3

表 14 獣脚鋳型観察表

挿 図	出土地点	種 別	直 径	高 さ	色 調	備 考	図 版
73-1	1 廃A	土製品	7.5	4.5	5YR7/6	一部被熱痕	116-35
73-2	1 廃B	土製品	6.4	3.4	7.5YR7/6	剥離	116-36
74-3	1 廃B	土製品	6.7	3.4	5YR6/6		116-37
74-4	1 廃B	土製品	6.5	3.6	5YR7/6		116-38
75-5	1 廃B	土製品	8.0	4.0	7.5YR8/6	一部に被熱痕	116-39

表 15 不明土製品観察表

挿 図	出土地点	口 径	底 径	残 存 高	器 厚	備 考	図 版
69-1	1 廃B区	—	—	8.0	0.9~1.7		115-24
69-2	1 廃B区	—	—	7.4	1.5~2.2		115-25
69-3	1 廃B区	—	—	9.4	2.2~2.7		115-26
69-4	1 廃B区	—	—	3.2	2.2~3.1		115-27
69-5	1 廃B区	—	—	7.2	1.8~2.4		115-28
69-6	1 廃B区	—	—	4.3	1.3~1.4		115-29
69-7	1 廃滓C区-1	—	—	7.4	2.2~2.8		116-32
69-8	1 廃滓C区-1	—	—	4.5	2.0~2.4		116-30
69-9	1 廃滓C区-1	—	—	7.9	2.3~2.7		116-33
69-10	1 廃	—	—	6.3	2.1~2.8		116-31
69-11	1 廃B区	—	(15.4)	4.0	1.1~3.2		116-34
70-12	1 廃滓A区-1	—	—	7.3	1.2~2.2		115-15
70-13	1 廃B区	—	—	8.3	2.0~2.5		115-16
70-14	1 廃B区	—	—	10.0	2.9~3.1		115-18
70-15	1 廃滓B区-1	—	—	6.8	2.1~3.6		115-17
70-16	1 廃B区	—	—	8.0	2.7~3.2		115-19
70-17	1 廃滓B区-1	—	11.8	10.0	1.8~3.7		115-21
70-18	1 廃B区	—	—	6.7	2.3~3.0		115-20
70-19	1 廃滓B区-1	—	19.4	8.7	3.0~3.3		115-22
70-20	1 廃B区	—	—	7.1	2.5~3.0		115-23
81-6	2 住加ト*	—	—	9.1	1.5~2.4		117-5
81-5	2 住加ト*	—	—	8.0	1.2~1.9		117-6

表 16 器物鋳型観察表

第2節 川内迫B遺跡群D地点

第1項 D地点の立地 (図87: 図版62)

川内迫B遺跡群D地点は調査グリッドBA051からBY075の範囲に位置する調査区であり、調査区の面積自体は300㎡と小規模である。D地点の南には蛭沢遺跡群A地点が位置し、西には川内迫B遺跡群G地点が位置するが、D地点が所在する丘陵付近には他の遺構は確認されてなく、非常に単独な遺構の分布状況である。

D地点が所在する地形は、調査地点から南方に約150mの地点に位置する丘陵頂部から北方に向かって走る傾斜の緩やかな尾根が形成され、丘陵頂部からは複数の小規模な谷が不規則にはしる。当調査地点の東側ならびに西側には小規模の谷が合流して形成された大規模な谷が位置し、谷の下方は溜池となっている。当調査地点はこれらの谷に挟まれた尾根の傾斜が緩やかになる緩斜面の突端に位置することになる。この尾根は標高35m前後で尾根の北側には緩やかに開析された谷地になっており、また尾根の裾部も北から南に傾斜する緩斜地になっている。

(荒)

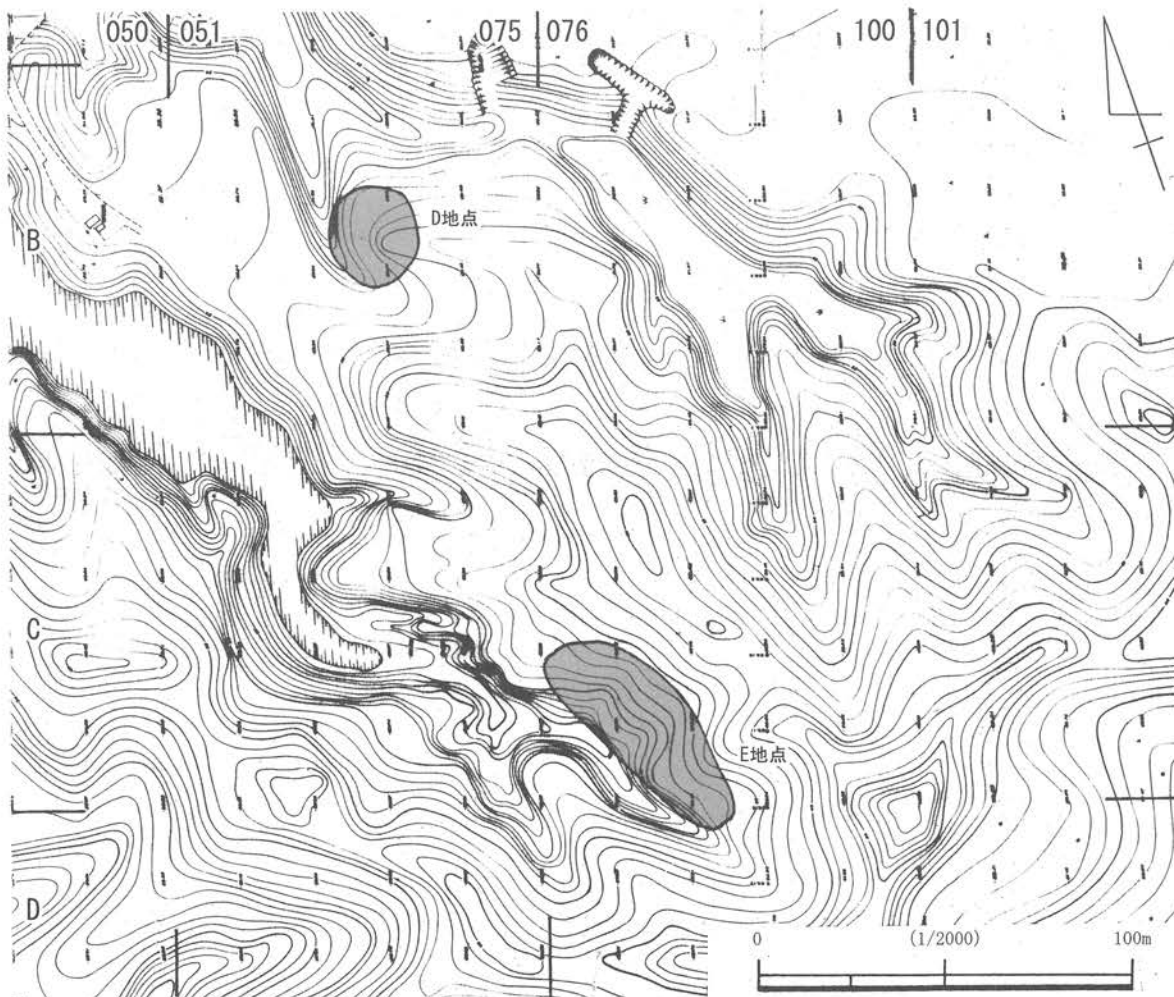


図87 D地点位置図

D地点立地

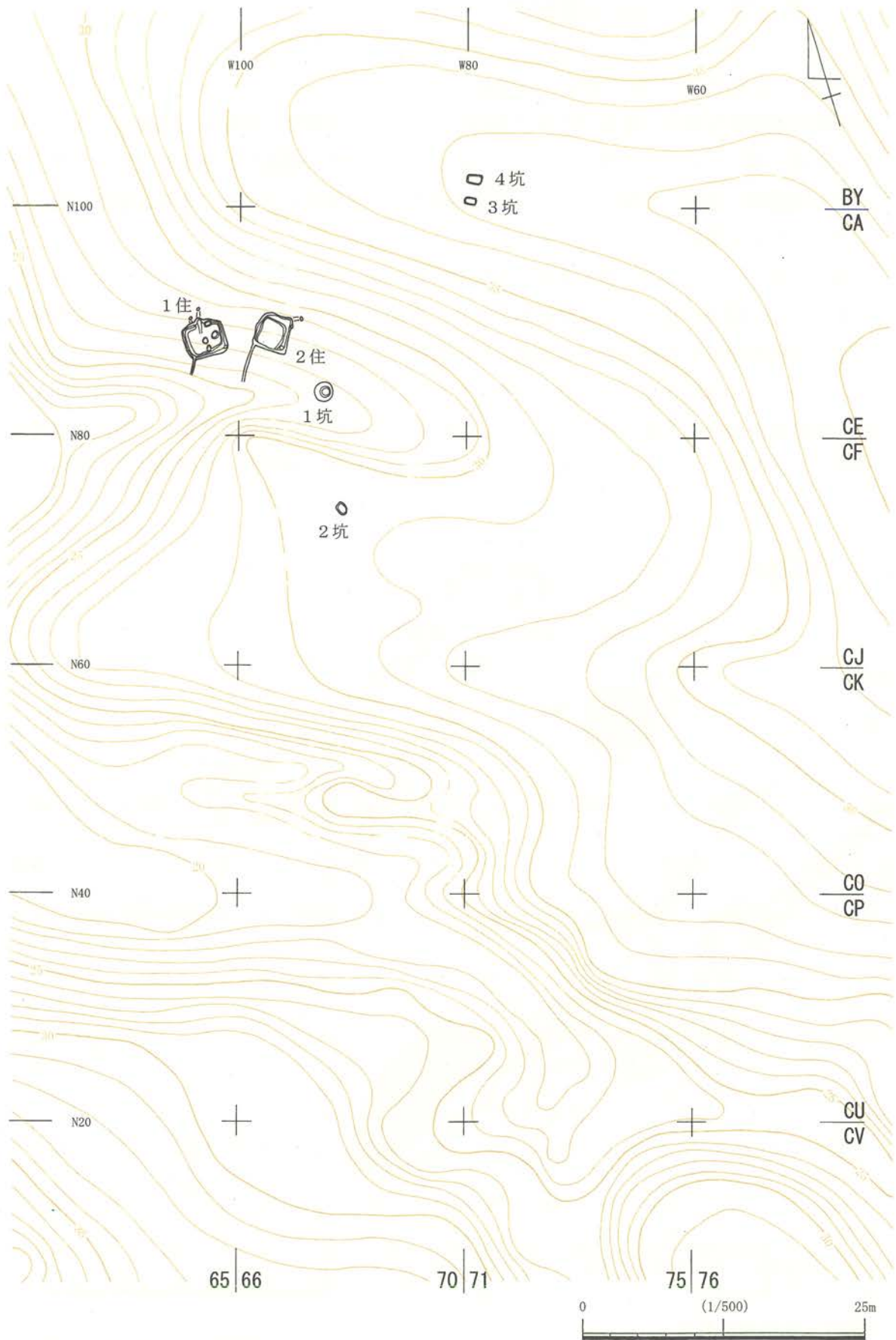


图88 D地点遺構配置図

第2項 検出された遺構と遺物 (図88)

1号竪穴住居跡

遺 構 (図89: 図版63~66)

1号竪穴住居跡は調査区北西部、標高約28.0m前後の緩斜面に立地する。他の遺構との重複関係にはない。住居の平面形は一辺が3.5mの正方形に近い。住居内の堆積土は最大10層に細分され、土層観察では住居壁方向から中央に向かってレンズ状に堆積する自然堆積土である。これらの堆積土を除去すると床面が検出される。床面はほぼ水平で5基のピットが構築されている。ピットは長軸が60cmを前後する規模をもつが、平面形状には共通性はなく、楕円形もしくは隅丸方形である。これらのピットは住居東半に分布しており、住居構築の際の柱痕跡とは考え難い。ピット内堆積土はピット5の土層断面を見る限り暗褐色土の単一土層である。

住居の北壁にはカマドが構築されている。カマドは2度の付け替えが行われており、古い時期のカマド(カマドA)は北壁中央からやや西に寄り、住居壁から外へのびる煙道が検出されている。煙道は地下式で煙道内に堆積した初期流入土により支えられたためか、崩落せずに遺存していた。煙道の底面は奥に向かってやや降り気味に掘り込まれ、ほぼ垂直に近い角度で立ち上がる。煙道の総長は80cmである。新しいカマド(カマドB)は住居北壁ほぼ中央に構築されており、焚口付近からは土師器甕と杯が底部を上にした状態で出土している。またカマド右袖付近には方形の川原石が据えられている。煙道はカマドA同様に地下式の煙道で、初期流入土により支えられ崩落せずに残存していた。煙道の底面は水平に掘りこまれ、煙道最深部から直角に近い角度で立ち上がる。煙道の長さは1.1mである。

住居の北辺中央のカマドを除いた四辺の壁際には上幅約50cm、下幅約15cmの壁周溝が巡る。壁周溝は住居床面から約15cmで底面に到達する。壁周溝は南西コーナーで住居敷地外へ延び、最終的には丘陵急斜面に到達していることから、住居内の水の排水する目的が強いと思われる。
(荒)

遺 物 (図90: 図版121-1~5)

図90-1はロクロ整形による土師器杯である。口径10.2cm、器高3.3cm、底径5.7cmを計測する。底部の切り離しは回転ヘラ切り、底部側辺には手持ちヘラケズリによる再調整が加わる。内面には黒色処理が施され、ミガキは摩滅のため確認できない。

2は非ロクロ整形の土師器である。体部下半から底部が欠損しているため器種の特定は困難であるが、甕もしくは鉢であると思われる。口縁部は弱く外反し収まる。器面には粘土継ぎの痕跡が所々に残る。

3は土師器甕である。体部上半から口縁部は欠損のため不明である。底部は平坦で木葉痕が観察される。体部は上方に向かってほぼ直立気味に立ち上がる。外面には縦位のヘラケズリが施され、内面下部にはヘラナデが施される。また所々には粘土継ぎ痕跡が残存している。焼成ならびに胎土の状況が他の資料と比較すると不良である点が特徴である。

4は焼成状況から土師器と判断して掲載した資料であるが、焼成不良の須恵器である可能性もある。残存している範囲は底部から体部下半であるため、器種の断定はできない。底部はほ

ば平坦で緩やかに外傾しながら上方に向かう。外面にはヘラケズリとハケメが施される。ただしハケメは須恵器の平行タタキと見ることも可能であるが断定し難い。内面には横位方向のナデが施される。復元された底径は13 cmである。5は硯に転用された須恵器片である。外面には明瞭な平行タタキが施されている。内面の硯面範囲には墨痕は認められないが、他の部分と比べて非常に平滑である。

(荒)

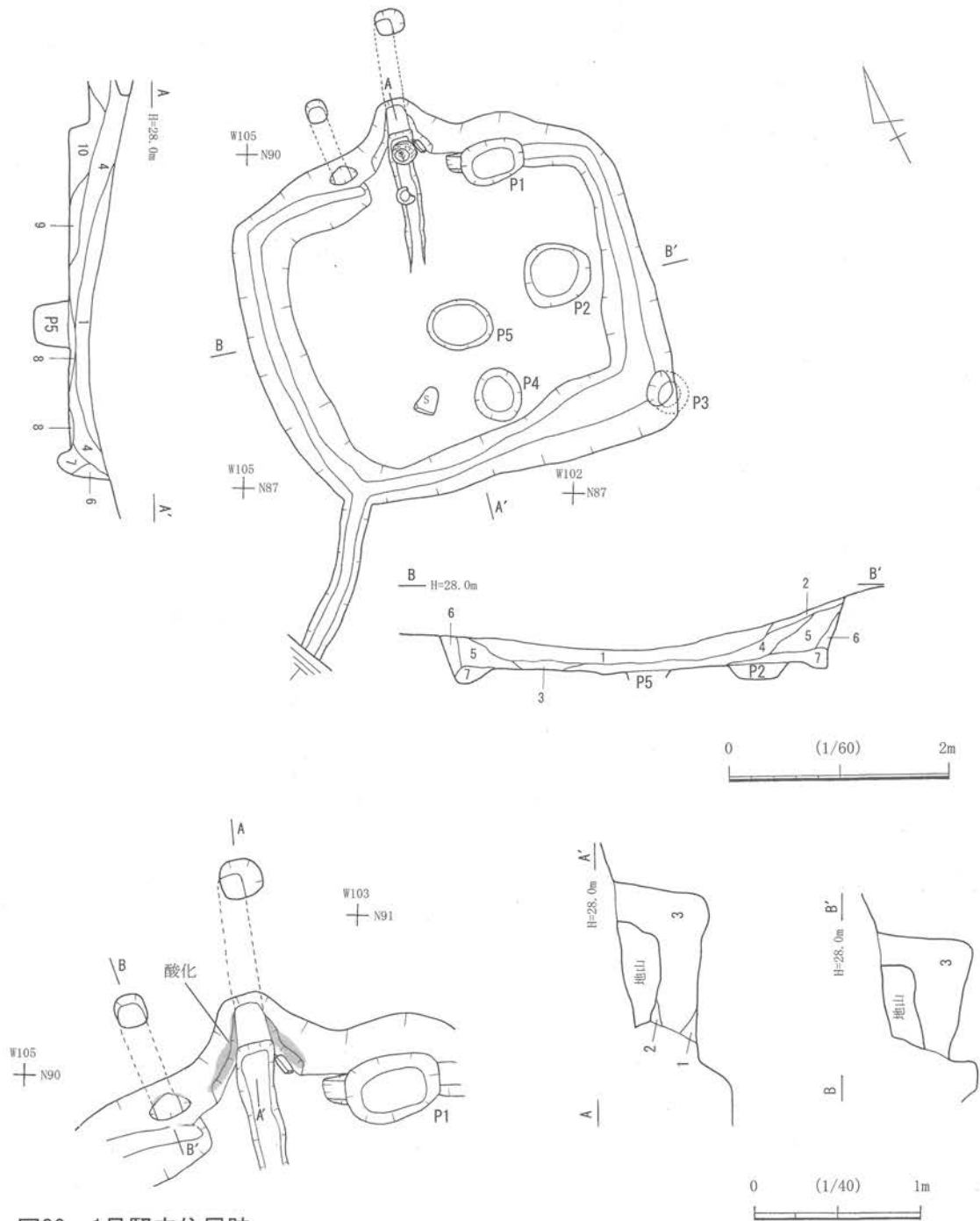


図89 1号竪穴住居跡

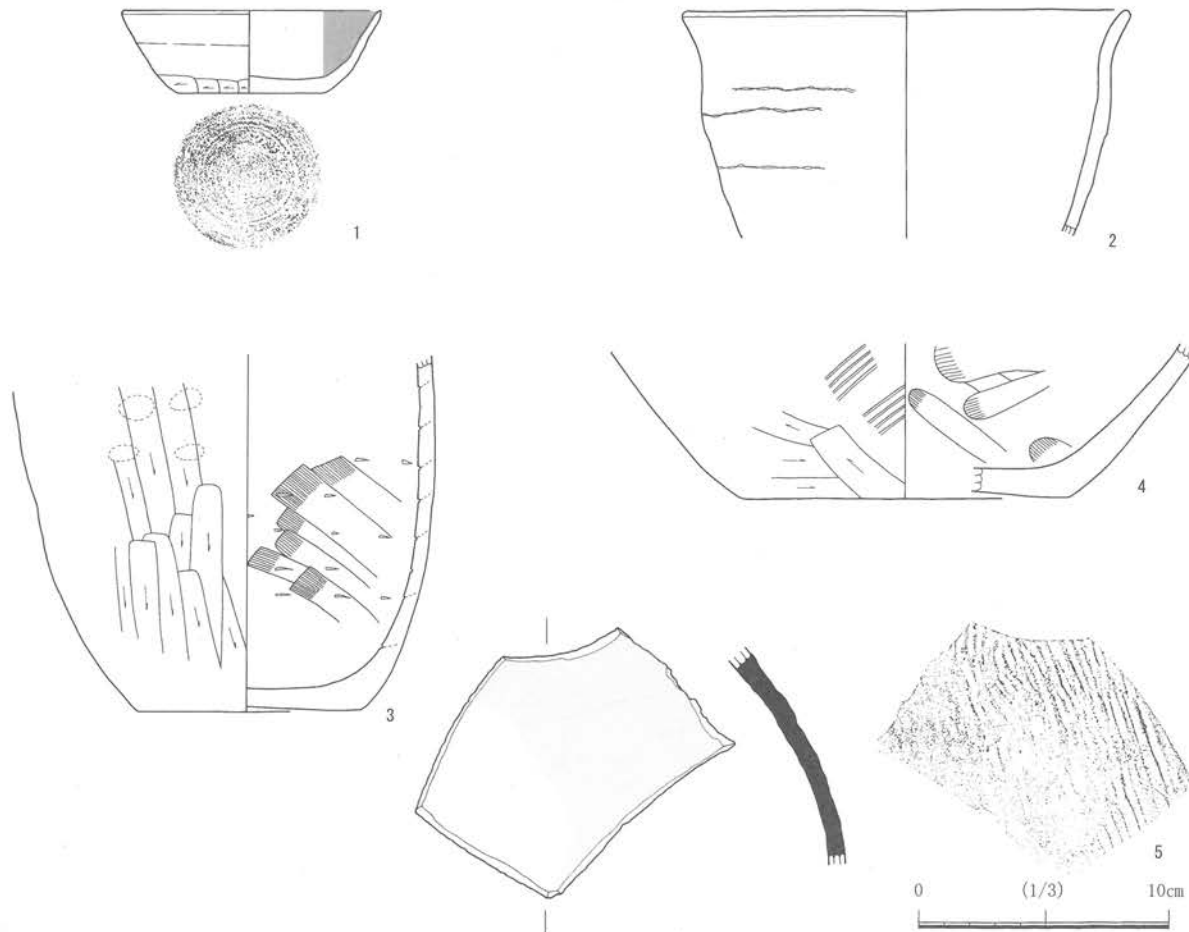


図90 1号竪穴住居跡出土遺物

挿 図	出土地点	器 種	口径/器高/底径	調 整	備 考	図 版
90-1	1	住 杯	10.2/3.3/5.7	外面：再調整ヘラケズリ 内面：ミガキ 黒色処理	回転糸切	121-1
90-2	1	住 鉢	-/(15.1)/8.8	外面：ナデ 内面：ヘラナデ ヘラ削り	輪積痕	121-2
90-3	1	住 甕	17.5/(9.1)/-	不明		121-3
90-4	1	住 甕	-/(6.1)/12.9	外面：ハケメ ヘラケズリ 内面：ユビナデ		121-4
90-5	1	住 甕	長(9.5)厚0.7	外面：平行タタキ内 面：ヘラナデ	砥石転用	121-5

表 17 出土遺物観察表 (4)

2号竪穴住居跡

遺 構 (図 91 : 図版 67~69)

2号竪穴住居跡は、1号竪穴住居跡と同一尾根上、東方約6mに位置する。平面形は東西2.9m、南北3.1mの正方形で、検出面からの深さは0.30mである。主軸方位はN-21°-Eを指す。覆土は褐色粘質土であるが、後述する別の掘り込みに切られ、堆積状況の詳細は不明である。南東隅部の床面で検出した28cmのピットは、当住居跡に伴う柱穴の可能性が有る。南西隅壁より、幅25cmの細い溝が南西方向へ延びている。

カマドは北東隅部で検出した。住居北東隅の壁が外に膨らみ、煙道が1m延びている。

なお、検出段階では重複はないものと考えて調査を進めたが、土層断面の観察および掘り上がりの形状が

2号竪穴住居跡	
A-A'・B-B'	
1	黒褐色土 しまり良 炭粒多 焼土粒少
2	暗褐色土 しまり良 炭粒・焼土粒少
3	褐色粘土 炭粒・焼土粒1より少
4	黒褐色土 しまり良 炭多 焼土多
C-C'	
1	褐色粘土質 しまりやや強 炭有
2	暗褐色粘質土 しまりやや弱 炭有
3	暗赤褐色土 焼土・炭

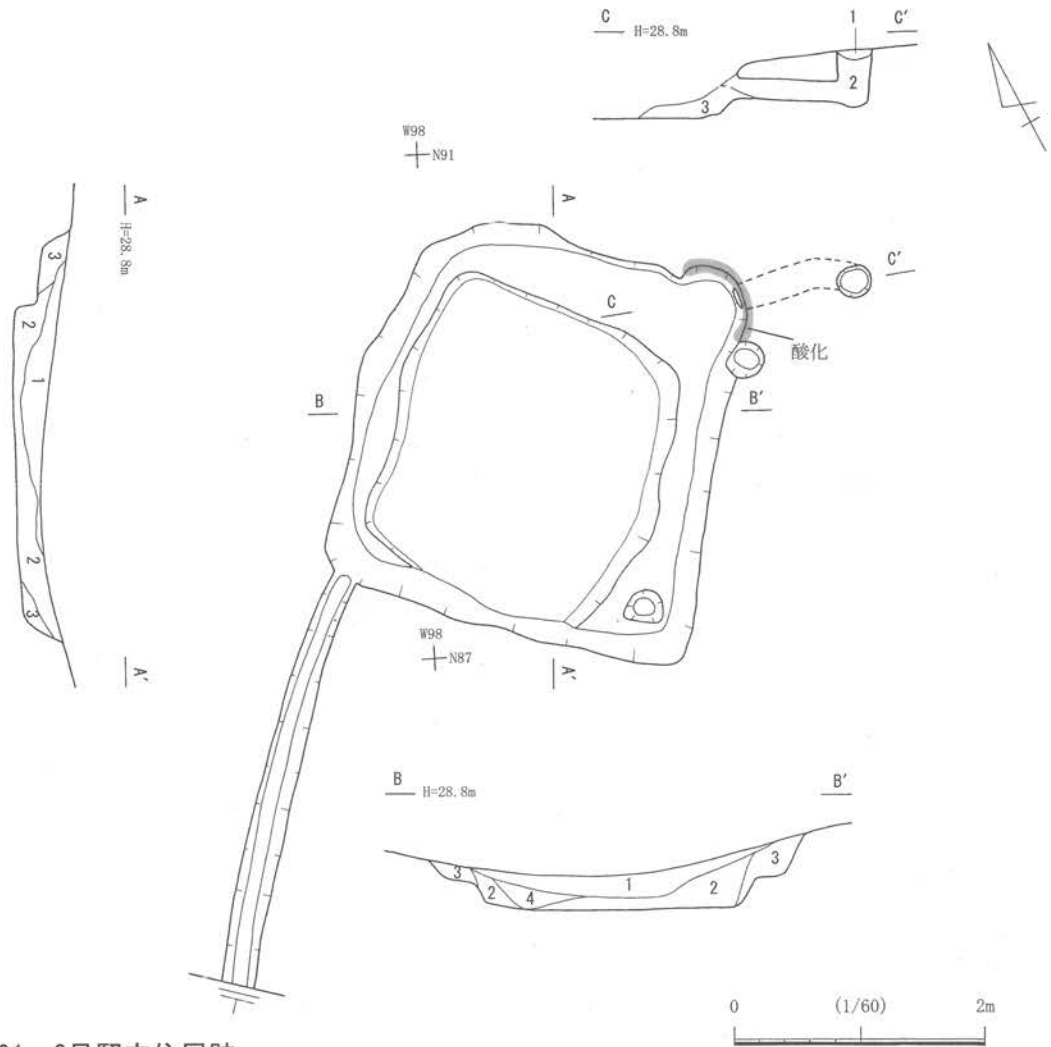


図91 2号竖穴住居跡

ら、当住居跡より一回り小さく深い方形の掘り込みが重複して存在していることが明らかとなった。掘り込みの平面形は東西 2.05m×南北 2.35mの正方形で、検出面からの深さは 28 cmである。堆積土は黒褐色土、暗褐色土、褐色粘土による自然堆積土である。西壁近くにレンズ状に堆積した4層は、焼土・炭化物を多量に含んでいた。平坦な底面と方形のプランから、2号住居跡と重複する別の竖穴住居跡である可能性も考慮されたが、カマド・貼床等・住居跡であることを積極的に示す知見は得られなかった。(藤木)

土 坑 (図 92)

1号土坑

1号土坑は、標高は約 29m前後の丘陵斜面に立地する。遺構を検出した時点の平面形は直径 1.6mの円形である。土坑は約 30 cm掘り進んだ地点で底面に到達する。底面は平坦である。当土坑の大きな特徴は、土坑断面形にある。まず、土坑は浅く円形に掘り込まれる。この掘り込みは検出面から約 20 cmほどの地点で傾斜が垂直方向に変化し、掘り込みの形状も隅丸方形と変化する。2段

1号土坑	
1	黒褐色土 炭粒若干
2	黒褐色土 炭粒・焼土多
3	黄褐色土 地山崩落流
4	■

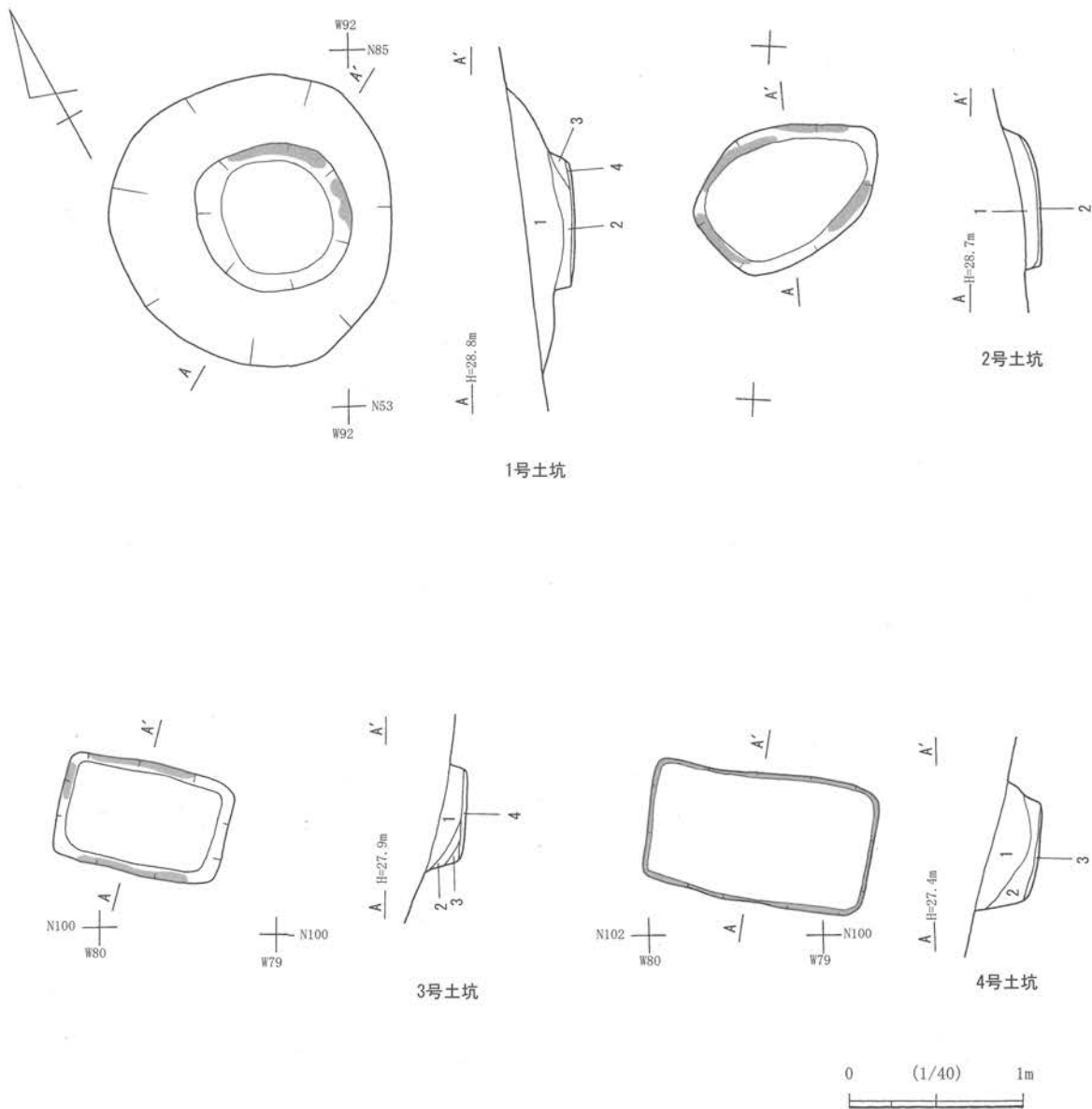


図92 土坑

目の掘方は一辺が 80 cm 程度の方形で、約 10 cm で底面に到達する。遺構内の堆積土は 4 層に細分され、1 段目の掘方内部には厚く堆積した 1 層が堆積し、2 段目の掘方にはレンズ状に堆積した 2 層が堆積する。4 層は遺構底面に約 2 cm の厚さで水平堆積し、3 層は斜面山側から谷に向かって遺構内に流入した堆積土である。当遺構からは遺物は出土していないが、堆積土に焼土や炭化物等を含む点をみれば木炭焼成土坑の可能性はある。遺構の年代は不明である。

(荒)

2号土坑

2号土坑は標高 28.7m 付近に位置する、長さ 1.12m の長方形の土坑である。遺構内堆積土は 2 層に細分される。このうち 2 層は約 2 cm で

2号土坑	
1	黒褐色土 炭粒少
2	木炭層 焼土粒含

水平に薄く堆積する。調査では遺構にともなう遺物が出土していないため、遺構年代は不明である。堆積土2層中には焼土を含んでおり、木炭焼成土坑の可能性はある。

(荒)

3号土坑

3号土坑は調査グリッドに位置する長方形の土坑である。遺構長辺は東西を向き、長辺 1.0m×短辺 65 cmである。土坑の断面形は箱形で堆積土は4層に細分される。最も下層に位置する4層は底面に薄く水

平に堆積し、上層の3層とは異なり遺構の利用時期の堆積土である可能性がある。調査では遺物の出土はないため遺構の年代は不明であるが、直上の3層に多量の焼土を含んでおり、木炭焼成土坑の可能性が考えられる。

(荒)

3号土坑	
1	黒褐色土
2	黄褐色土
3	赤褐色土層 (焼土)
4	木炭層

4号土坑

4号土坑が構築されている標高は 27.4m付近である。遺構は長辺を南北に向けた長方形で、長辺 130 cm×短辺 75 cmである。堆積土は3層に細分される。

1・2層はレンズ状の堆積をしており、自然堆積土であると思われる。また

最下層に位置する3層は遺構底面に薄く堆積しており、上記2層とは異なると思われ、遺構が存続していた時期の堆積土である可能性がある。土坑の断面形は箱形を呈し、検出面から 30 cmで底面に到達する。遺構からは遺物の出土はなかったことから年代は不明であるが、木炭焼成土坑の可能性はある。

(荒)

4号土坑	
1	黒褐色土
2	暗褐色土
3	木炭層

第3項 まとめ

ここでは調査された遺構、遺物について記載をし、D地点の調査におけるまとめとする。

調査された2軒の竪穴住居跡は、いずれも丘陵南斜面の標高 28m付近に位置し、壁周溝が住居跡南西コーナーから住居外へのびる点などに強い共通性がうかがえる。1号竪穴住居跡の新旧2基のカマドのうち、新しい時期の燃焼部から甕と杯が出土し、その特徴から9世紀第2四半期の年代が与えられる。2号竪穴住居跡の年代は不明であるが、1号竪穴住居跡との構造的特徴から、大きくかけ離れた時期は考え難い。従って、2号竪穴住居跡も1号竪穴住居跡と近接する9世紀第2四半期以降の年代を与えておきたい。

調査された土坑は3・4号土坑が近接して築かれるが、土坑群全体として見た場合、明確な計画性は薄い。土坑の堆積土には焼土や炭化物を含むものが見られ、木炭焼成土坑としての機能が想定される。一方、自然埋没した土坑も存在し厳密な機能の想定はできない。

以上、D地点における調査成果について概観したが、本調査地点で調査された遺構を見ると、各々の遺構が単独で存在しているように見える。従って当地区単独では組織的な製鉄活動が行われたとは判断し難い状況であるが、近接する他の調査地点の遺構を踏まえ、改めた検討と位置付けが必要である。

(荒)

第3節 川内迫B遺跡群E地点

第1項 E地点の立地 (図93: 図版70-1)

E地点は調査グリッドCA076からCY100の範囲に展開する調査地点である。調査地点の面積は300㎡で、調査地点内での最高標高は40㎡である。E地点から北方約200mの地点にはD地点が位置し、北西方向約200mの地点にはG地点が位置する。更に東方には蛭沢遺跡群A地点、C地点が展開しており、これらの遺跡群の囲まれるような地点にE地点は位置している。特にE地点の東方には丘陵頂部から派生する尾根があり、この尾根を超えると蛭沢遺跡群が展開する丘陵斜面が始まる。

E地点が立地する地形は、E地点の東側約100mの地点には丘陵頂部が位置する。丘陵はこの頂部から複数の谷と尾根を形成しながら標高を下げていく。北方には傾斜の緩い尾根が緩やかにのび、川内迫B遺跡群D地点へと向かう。

E地点はこの尾根の頂部から中腹にかけての範囲に展開する。尾根は緩やかに起伏し、浅い谷が2箇所位置する。この浅い谷に挟まれた地点には緩い尾根が存在し、また調査地点の下端から下の地形は斜面の傾斜が強くなり、明瞭な谷地となる。この谷は北方向かう。

(荒)

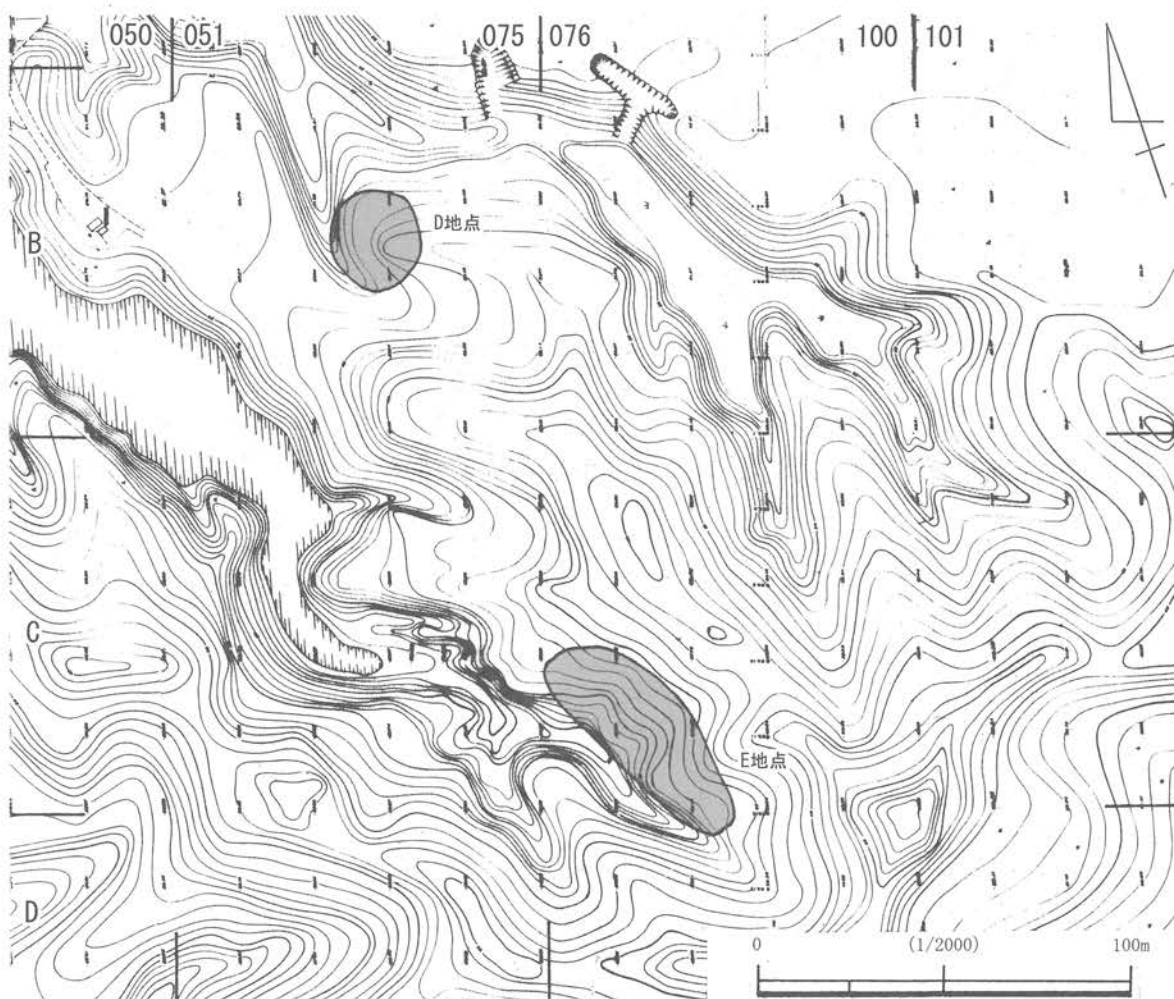


図87 E地点位置図

第2項 検出された遺構と遺物

1号製鉄炉跡 (図95・96: 図版70-2~72)

1号製鉄炉跡が立地する地形は、蛇行し枝分かれしながら東西方向に走る谷の南向き斜面からやや平端な尾根に移行する部分である。標高は32~33mで、等高線に直行するように縦置きされた長方形箱形炉で、作業場・炉底・炉掘方・炉背部の踏みフイゴ掘方・排滓溝・ピットで構成される。周囲には他の製鉄炉跡は確認されておらず、1基が単独で操業したものと思われる。製鉄炉は斜面を削平して平場をつくり、作業場としているが、壁は北壁以外では確認されなかった。作業場北壁は、踏みフイゴ掘方が位置する部分では傾斜角が緩やかであるが、炉本

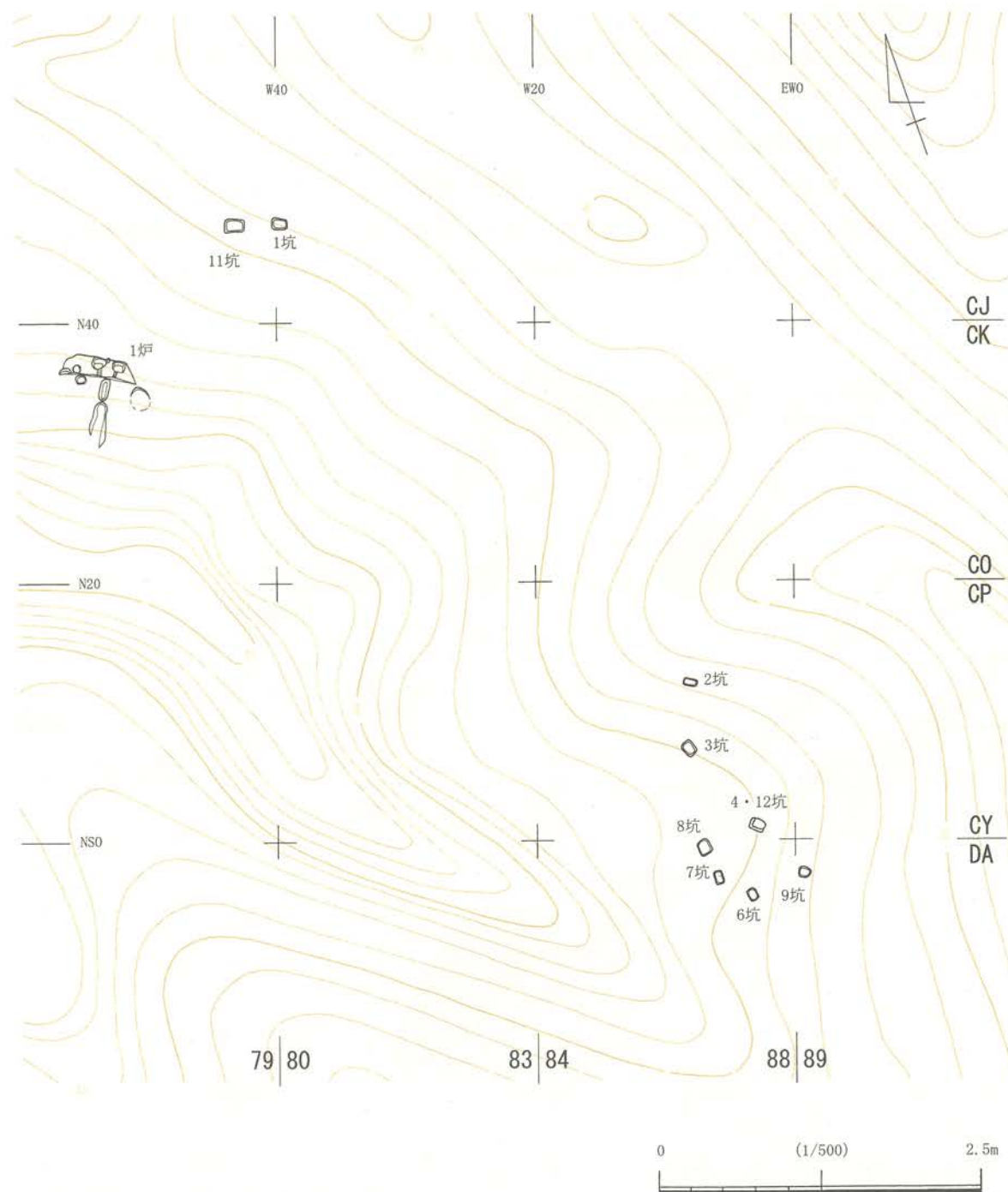


図94 E地点遺構配置図

体の上端に当る部分をやや急な角度でカットして平場を造り出している。作業場の東西規模は、北壁で計測して約5.7mである。

作業場内の堆積層を除去すると、青灰色を呈する地山ブロックで形成された炉底の還元面が確認された。操業面として確認されたのはこの面のみである。炉底の一部は黒色で、サビのある滓が遺存していた。炉底の規模・形状は、長軸1.6m×短軸0.45mの楕円形で、横断面は中央が窪む浅い皿状である。還元土の厚さは3cmで、その下層は赤色の酸化面、更に下位には炉掘方埋土の灰白色土が堆積する。炉掘方は地山の凝灰岩を掘り込んだ長軸1.55m×短軸0.65mの楕円形である。炉底の排滓側に接して、幅0.8~1.2m、深さ10cm前後の排滓溝が約3.4m下へのびている。溝の断面形は浅い皿状を呈する。排滓溝底面と炉底上面との比高差は18cmである。踏みフイゴ掘方は、炉本体の上方に位置する。掘方は先述した緩やかに傾斜する作業場の壁に掘り込まれており、斜面下方にあたる南側では掘方の壁を検出できなかった。掘方は、踏板を受けたと推定される不整五角形の掘り込み2基が東西に並び、両者の中央、作業場北壁の肩に接して軸木を受けた長方形のピットからなる。踏板を受けた掘方の北西と北東のコーナーの距離は約2.3mである。踏み板掘方からは、斜面下方の炉本体ないし作業場へ向けて、幅34cmの溝がのびる。フイゴと炉本体に設置された羽口とをつなぐ送風溝と考えられる。

炉跡に伴うと推定されるピットが4基確認されている。P1は作業場北壁斜面に掘り込まれ、

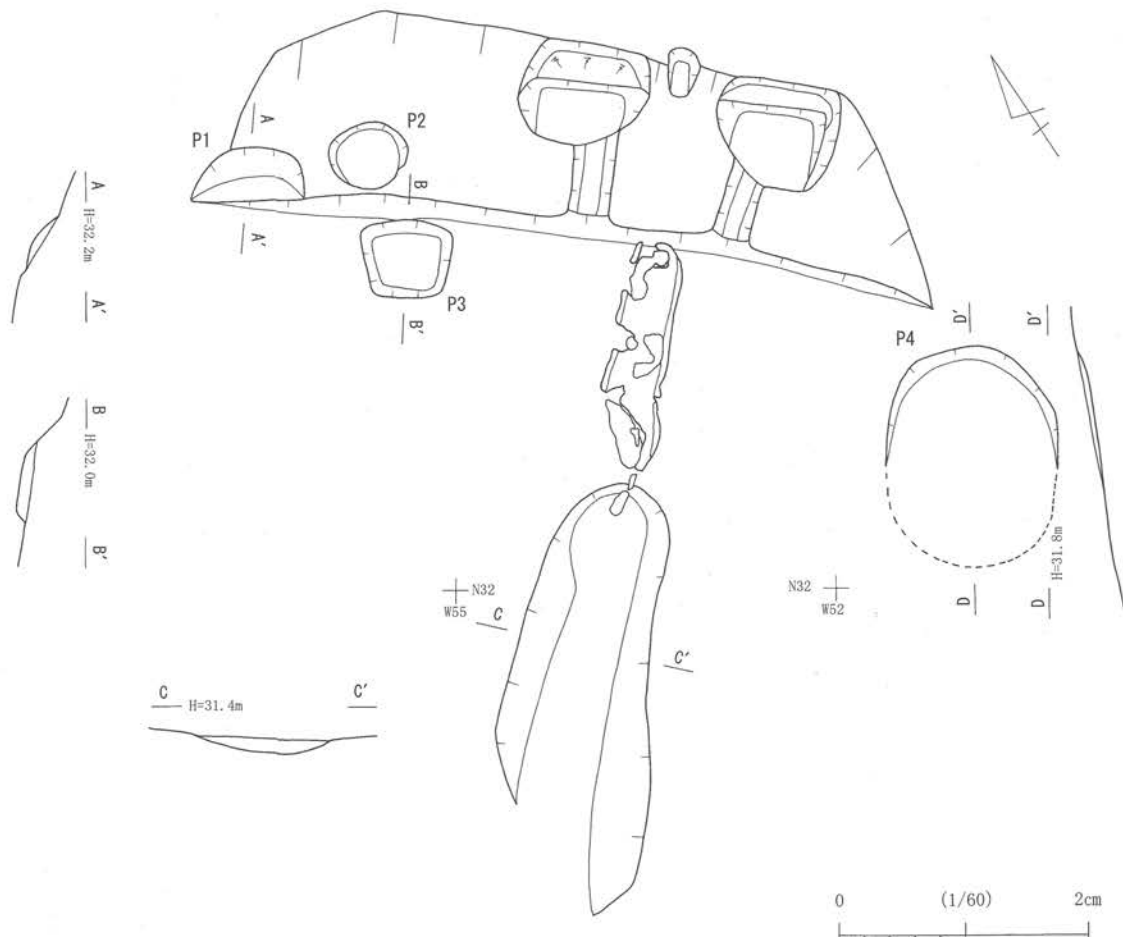


図95 1号製鉄炉跡 (1)

北半部しか遺存していないが、東西 0.9m 前後の円形ないし半円形の掘り込みと考えられる。P 1 の東側に位置し、やはり作業場北壁斜面に掘り込まれた P 2 は、直径 0.62m の円形である。P 2 の南側、作業場の平坦面に掘り込まれた P 3 は長軸 0.71m × 短軸 0.6m の長方形のプランを持ち、深さ 0.1m、底面は平坦な掘り込みである。炉本体の東約 2.5m に位置する P 4 は、南半部は斜面の流出により失われているが、東西約 1.37m × 深さ 10 cm の浅いピットで、覆土に炭小片を多量に含んでおり、炭置場の可能性がある。(藤木)

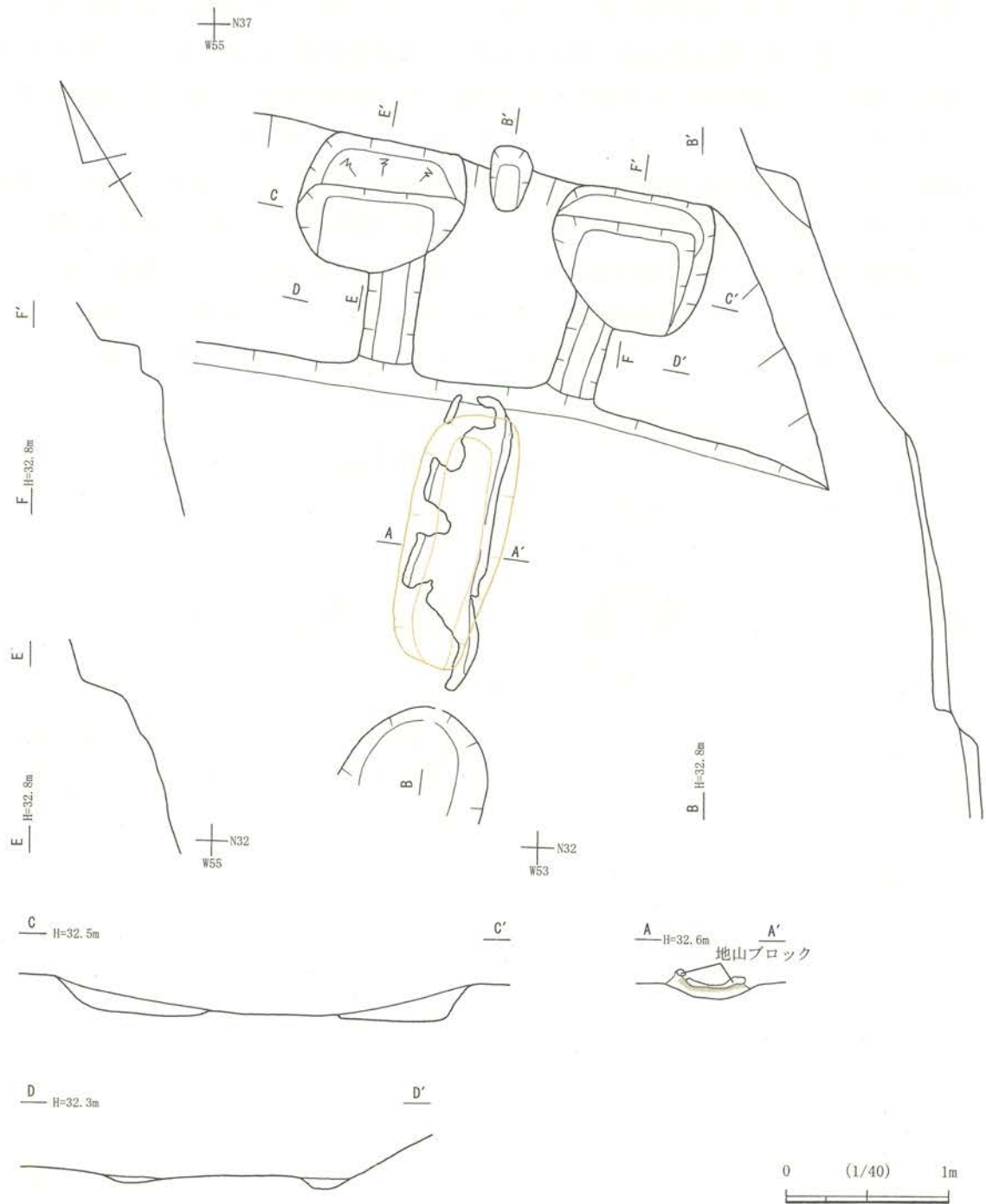


図96 1号製鉄炉跡 (2)

土 坑(図 97・98)

1号土坑

1号土坑は、平面形長辺 115 cm×短辺 84 cmの方形である。他の遺構との重複関係にはない。土坑断面は箱形を呈し、検出面から約 30 cmで底面に到達する。遺構内の堆積土は5層に細分され、1～4層まではレンズ状に堆積した自然堆積である。このうち3・4層には炭化物や焼土を含む層であることから、赤化した遺構壁の崩落土と考えられる。最下層の5層は約 2 cmで水平に堆積し炭化物層で、本土坑が機能していた時点の堆積層と考えられる。遺構からの出土遺物はなく遺構の時期は不明であるが、木炭焼成土坑のような機能を想定すべき遺構である。

(荒)

2号土坑

2号土坑は、平面形は長辺 96 cm×短辺 56 cmの隅丸長方形である。他の遺構との重複関係にはない。遺構は検出面から約 15 cmで底面に到達し、断面形は浅い皿状である。遺構内の堆積土は2層に細分され、1層は明褐色土、2層は明褐色土に茶褐色土と炭化物が混入する層である。遺構からの出土遺物は無く、遺構の時期および性格は不明であるが、堆積土に炭化物が混入する状況を見れば、木炭焼成土坑のような機能を有していた可能性がある。

(荒)

3号土坑

3号土坑は長辺 110 cm×短辺 80 cmの方形の土坑である。他の遺構との重複関係にはない。土坑の底面は検出面から約 30 cmほどで到達し、断面形は箱形である。レンズ状に堆積した堆積土は5層に細分される。1層は土坑廃棄以降の最終的な自然堆積土であると思われる。両壁際に堆積した4層は多量の焼土を含むことから、赤化した遺構壁の崩落土であろう。その下層に位置する炭化物層は、土坑が機能していた時期の堆積であると考えられる。遺構内からの出土遺

1号土坑 1 黒褐色土 2 横褐色粘土 3 焼土 4 暗褐色土 炭・焼土含む 5 炭化物	2号土坑 1 明褐色粘質土 2 明褐色土に茶褐色土と炭を含む	3号土坑 1 茶褐色土 炭含む 2 茶褐色土 焼土・炭含む 3 茶褐色土 焼土・炭含む 4 黄褐色土 焼土・炭含む 5 炭・焼土
4号土坑 1 茶褐色土 炭少量含む 2 茶褐色土 焼土・炭含む 3 案褐色土 焼土を含む	6号土坑 1 暗褐色土 しまり良 2 黄褐色土 粘土。焼土含む 3 暗褐色土 炭・焼土含む	7号土坑 1 茶褐色土 2 茶褐色土焼土・炭含む 3 黄褐色土焼土・炭含む
8号土坑 1 暗褐色土 2 茶褐色土 炭含む 3 黄褐色土 炭・焼土含む	9号土坑 1 茶褐色土 炭・焼土少量含む 2 黄褐色土 焼土含む 3 黄褐色土 焼土・炭含む 4 炭化物	11号土坑 1 黒色土 2 灰白色粘土 3 焼土 4 炭化物
12号土坑 1 黄褐色土 茶褐色土・焼土・炭含む 2 黄褐色土 焼土含む 3 炭化物		

土坑

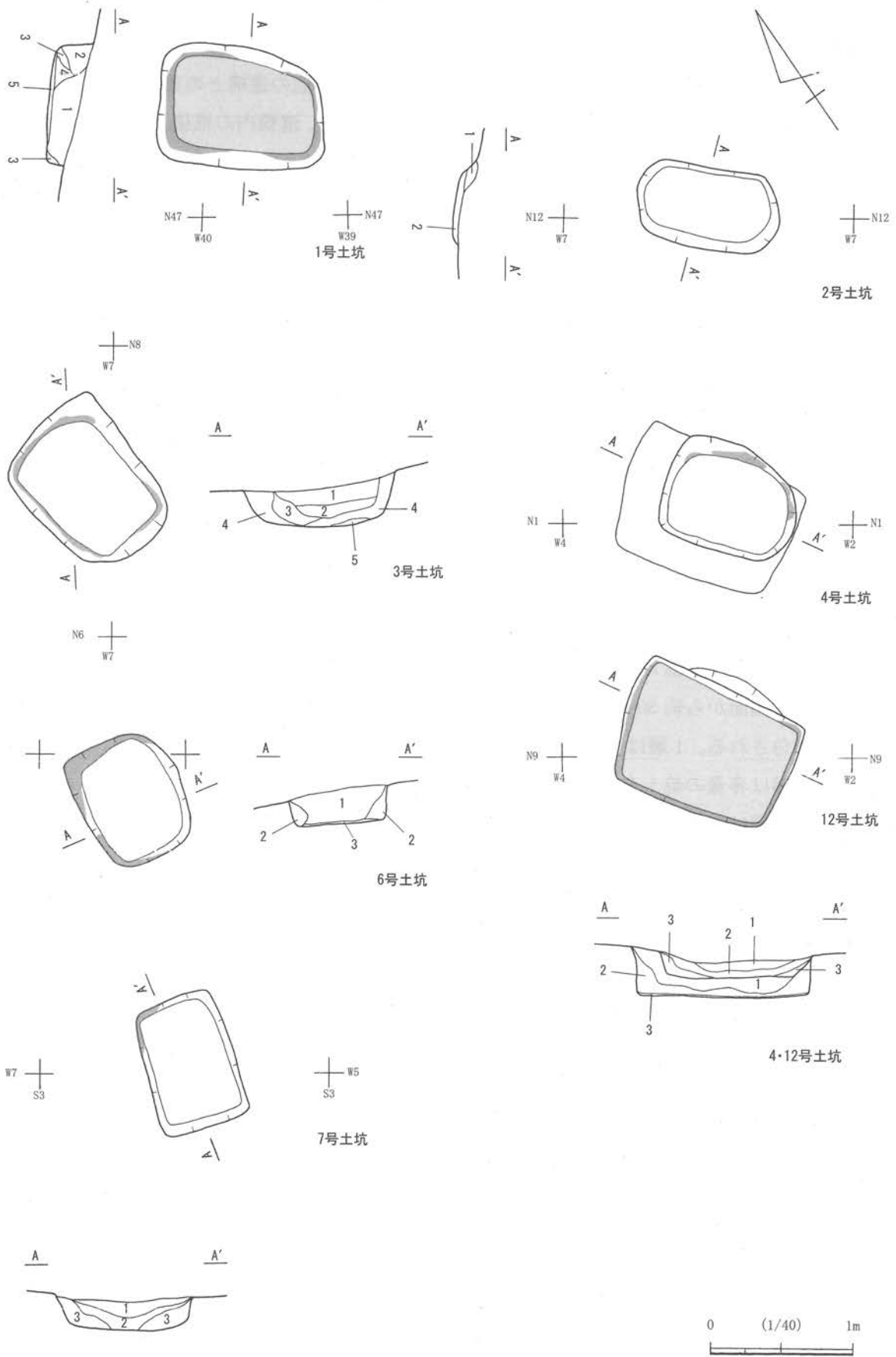


图97 土坑(1)

物はなく遺構の時期は不明であるが、本土坑は木炭焼成土坑として機能していたものと考えられる。(荒)

4号土坑

4号土坑は、隅丸長方形の平面形を有し、長辺94cm×短辺68cmの規模の土坑である。12号土坑との重複関係にあり、本遺構が新しい。レンズ状に堆積した埋土は3層に細分される。2・3層には焼土と炭化物が混入しており、遺構壁の崩落土と考えられる。検出面から約10cmで平坦な底面に到達し、断面形は箱形である。当遺構に伴う遺物無く時期は不明であるが、性格としては木炭焼成土坑であると考えられる。(荒)

6号土坑

6号土坑は、長辺を北西に向けた方形の平面形を有する、長辺88cm×短辺73cmの土坑である。遺構内堆積土は3層に細分され、最も下層には水平に堆積した炭化物層が位置する。2層は遺構壁に三角堆積した焼土を含む堆積層で遺構壁の崩落に起因するものである。遺物の出土は認められず遺構の時期は不明である。本遺構は木炭焼成土坑であると考えられる。(荒)

7号土坑

7号土坑は長方形の土坑である。規模は長辺90cm×短辺65cmを測り、深さは遺構検出面から約20cmで底面に到達する。遺構の長辺は北西方向を向く。断面形は箱形で堆積土は3層に細分される。最下層に位置する3層と直上の2層には焼土と炭化物が混入し、1層は茶褐色の単一土層である。1層は遺構埋没の最終自然堆積土で、2・3層は赤化した遺構壁の崩落土である。当土坑における調査では遺物の出土は認められ無かったことから遺構の時期は不明であるが、木炭焼成土坑として機能していたものと考えられる。(荒)

8号土坑

8号土坑は、長辺110cm×短辺90cmの長方形である。遺構の断面形は緩い箱形で、深さ約35cm付近で遺構底面に到達する。堆積土は3層に分層され、下層の2・3層には焼土と炭化物が混入する。最上層は暗褐色土の単一土層である。1層は遺構埋没段階の最終堆積層で、2・3層は遺構壁の崩落土である。したがって、本土坑は木炭焼成土坑として機能していたものと考えられるが、遺物の出土が認められなかったことから遺構年代は不明である。(荒)

9号土坑

9号土坑は、長辺110cm×短辺90cmで、遺構検出面からの深さは約40cmの方形の土坑である。遺構の南壁は流出により失われている。遺構内の堆積土は斜面山側から谷側に向かって堆積した4層に細分される。2・3層には焼土と炭化物が混入し、最下層4層は炭化物層である。このような状況から2・3層は赤化した遺構壁の崩落土、4層は遺構が機能していた時点の堆

積層と見る。従って、木炭焼成土坑として築かれたものと考えられる。遺構からの出土遺物は認められなかったため時期は不明である。 (荒)

11号土坑

11号土坑は、長辺1.5m×短辺95cmの長方形である。遺構内には4層の堆積土が確認される。上層に位置する1層は埋没最終堆積層、2・3層は赤化した遺構壁の崩落土であると判断される。最も下層に位置する4層は土坑底面に薄く水平堆積をしており当土坑が利用されていた時期の炭化物堆積層である。遺構の時期は不明であるが、木炭焼成土坑として機能していたものと考えられる。 (荒)

12号土坑

12号土坑は4号土坑と重複関係にあり、4号に切られる。遺構平面形は長方形で長辺121cm×短辺85cmである。遺構内の堆積土は3層に細分され、断面形は箱形である。4号土坑の底面は12号土坑1層まで到達する。1・2層は遺構内に堆積した遺構壁崩落土、3層は遺構機能段階の炭化物層と考えられる。当土坑からは遺物の出土が認められず時期は不明であるが、木炭焼成土坑として機能していたものと推測される。 (荒)

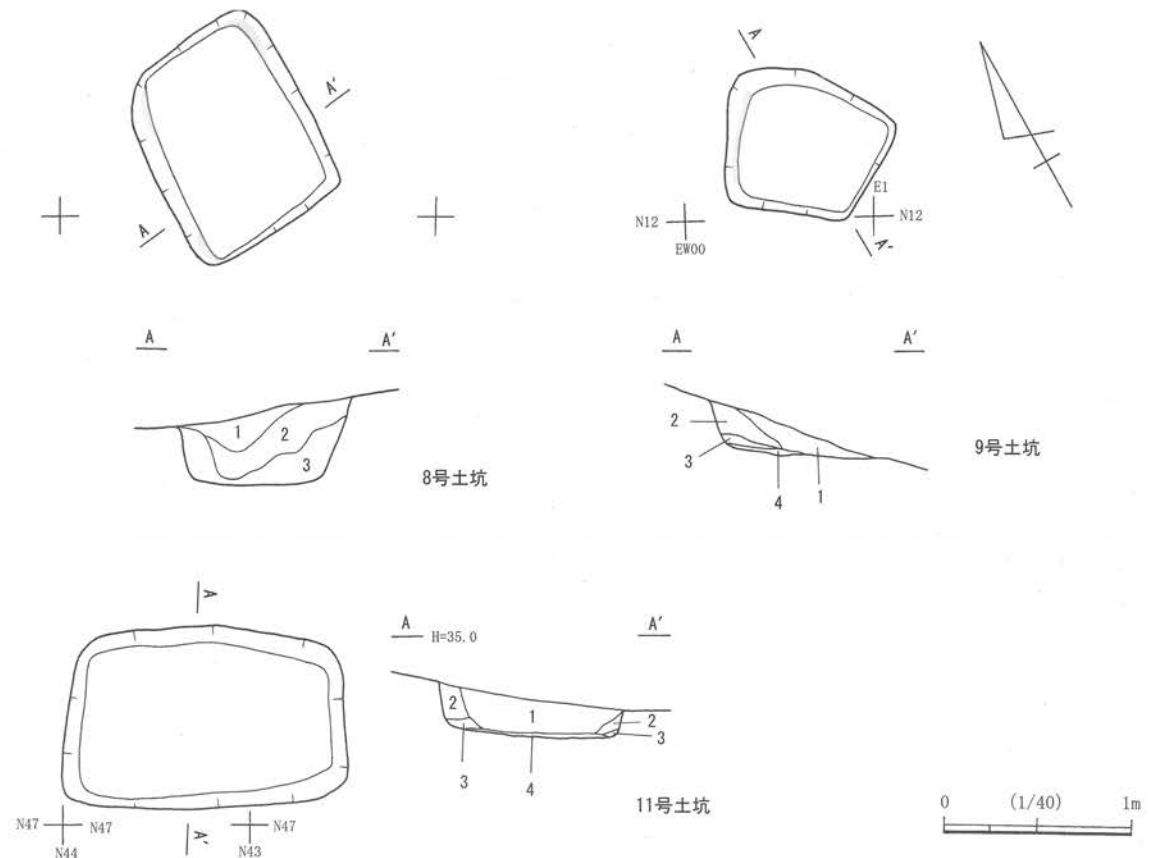
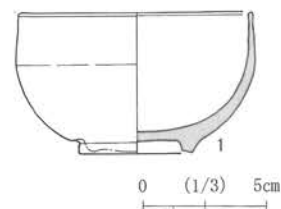


図98 土坑 (2)

遺構外出土遺物 (図 99-1 : 図版 121-6)

図 99-1 は遺構外出土の近世陶器丸碗である。体部の 3/4 が欠損している。高台部は断面逆台形を呈し、0.5 cm の高さを有する。底部から丸みの強い体部が口縁部に向かい、体部中央からやや外反気味に立ち上がる。復元された口縁部径は 9.0 cm、器高は 5.7 cm である。器面の全体には貫入による青ヒビが見られる。



(荒) 図99 遺構外出土遺物

挿 図	出土地点	器 種	口径/器高/底径	調 整	備 考	図 版
99-1	遺構外	丸	9.2/5.7/4.5	ロクロ成形後高台削り出し	大堀相馬焼	121-6

表 18 出土遺物観察表 (5)

第3項 まとめ

E地点で検出、調査された遺構は製鉄炉1基と12基の土坑である。最も東側に位置する地点には1号製鉄炉が構築される。1号製鉄炉は北に向かう丘陵尾根の南斜面に築かれた踏みフイゴを付属した長方形箱形炉である。この製鉄炉の周辺には他の遺構は存在せず、製鉄炉が単独で操業されたと考えられる。また、製鉄炉の下部にも、明瞭な廃滓場の存在が認められない点は、C地点2号製鉄炉跡と類似している。本製鉄炉からは土器の出土は無かったため、構築、操業時期については不明であるが、踏みフイゴの導入を見れば金沢製鉄遺跡群製鉄炉変遷IV期以降と考えられる。

土坑は尾根南側斜面において、比較的同一等高線を中心に構築され、土坑の立地については強い共通性がうかがえる。特に12基の土坑のうち土坑7基が集中する状況を見れば、この地点がE地点における遺構分布の中心地に見える。

土坑自体に目を向けてみると、いずれの土坑も長方形の平面形をもち、土坑長軸を等高線に対してほぼ平行に配する傾向が見られる。また調査された土坑のほとんどが底面に炭化物層を有し、壁際には焼土層が堆積することから木炭を焼成した土坑であると思われる。当地区で調査された土坑はそのほとんどが木炭焼成土坑に位置付けられるものであるが、これらの遺構の分布や、遺跡全体における評価については、改めた検討を行う必要がある。

(荒)

第4節 川内迫B遺跡群G地点

第1項 G地点の立地 (図100)

G地点は調査グリッドB25 からD51 にかけて範囲に展開する。この調査区は南北に細長い形状をしており、南北約 220m×幅約 30mである。このような遺構の分布状況には当調査区の立地が大きく関係していると思われる。当調査区は遺跡群が展開する低位丘陵の北西付近に位置する。この付近は主丘陵の中央部から北に向かって開析された大規模な谷が位置している。遺構の分布はこの谷によって形成された丘陵北斜面に展開し、製鉄炉跡 1 基、木炭窯跡 2 基、竪穴住居跡 1 基が確認されている。

(藤木)

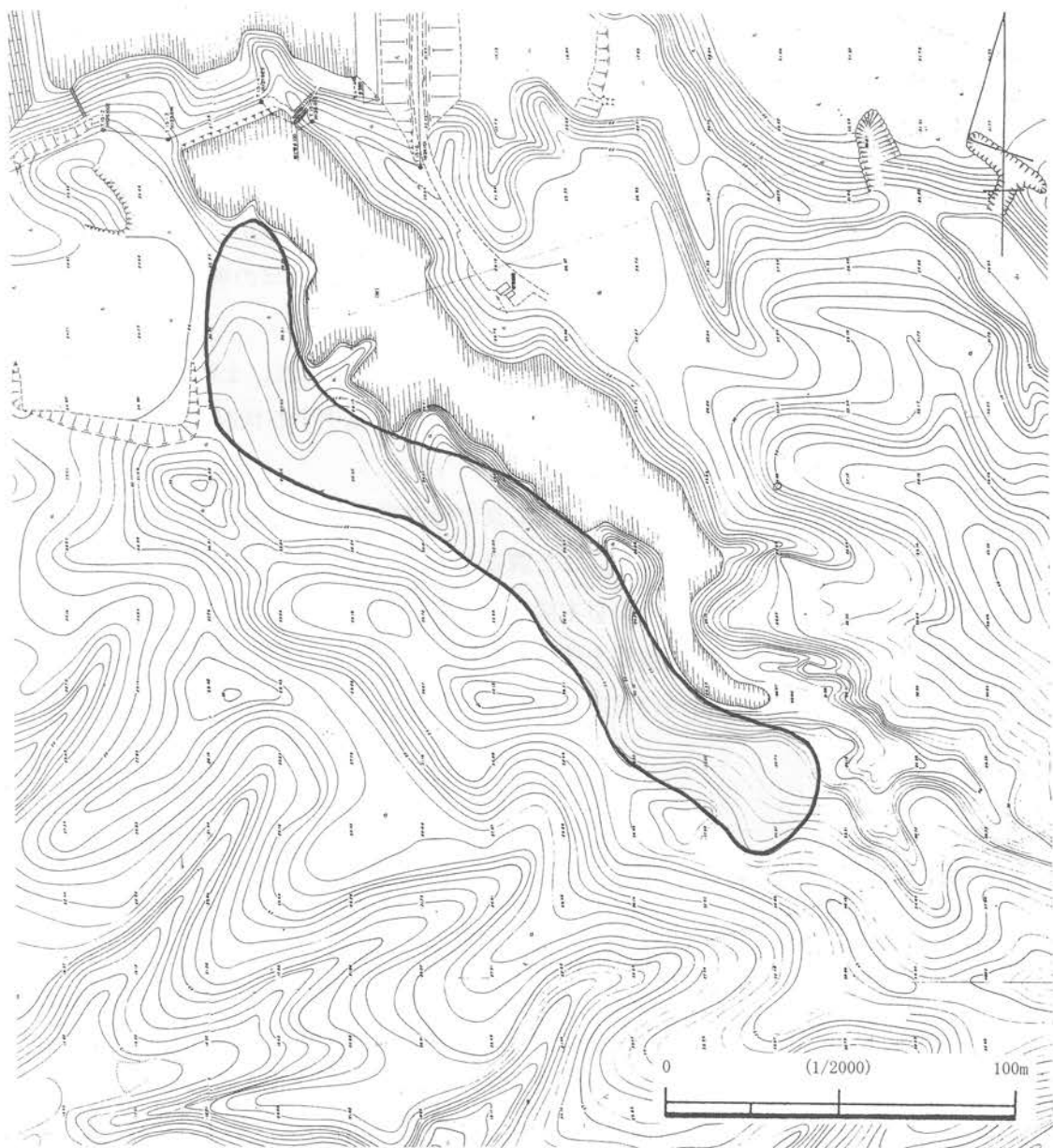


図100 G地点位置図

第2項 検出された遺構と遺物

遺 構

G地点は、遺跡群北部の丘陵を北東-南西方向に解析した谷の北向き斜面に位置し、試掘調査段階では251・256・259・262・265・267・287・288・294・296・297Tにおいて遺構の存在が確認されていた。遺構は、解析谷の北向き斜面に沿って細長い分布を示し、251・256・259・262・265・267Tが位置する南西部と287・288・294・296・297Tが位置する北西部に分かれ、両者の間に位置する部分では遺構は確認されていない。これらの調査成果に基づいて本調査を実施することとなった。

前項で述べたように、製鉄炉跡1基、木炭窯跡2基、竪穴住居跡1基が確認されたが、調査を途中で中断したため遺構各図、写真などの記録は作成していない。

(藤木)

遺 物 (図101-1 : 121-7)

1は遺構外出土のロクロ土師器杯である。口径14.5cm、器高5.0cm、底径6.2cmを計測し、口径・器高に対して底部の直径が小さい。外面にはロクロナデが認められるが、杯部中央には粘土継の痕跡が残存しており、丁寧なつくりとはいえない。底部底面には回転糸切りの痕跡が残り、底部側辺には手持ちヘラケズリによる再調整が施される。内面にはミガキと黒色処理が施されている。

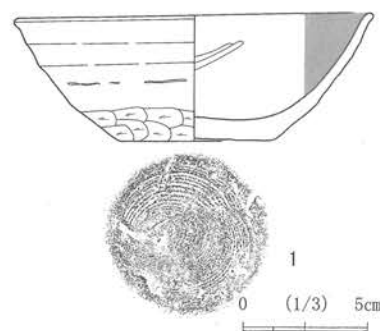


図101 遺構外出土遺物

(荒)

挿 図	出土地点	器種	口径/器高/底径	調 整	備 考	図 版
101-1	遺構外	杯	14.1/5.0/6.1	外面：ロクロナデ・回転糸切り 内面：ミガキ・黒色処理	手持ちヘラケズリ	121-7

表19 出土遺物観察表(6)

第3項 まとめ

G地点は、開発計画の諸事情により遺構検出作業の途中で調査を終了した調査地点であるため、遺構配置図や検出状況写真などの記録は作成されていない。遺構検出作業の段階では製鉄炉跡1基、木炭窯跡2基、竪穴住居跡1基が確認され、川内迫B遺跡群内の各調査地点の中ではC地点に次いでまとまった内容の遺構が存在している地点であると判断される。しかし、先述のとおり遺構の掘り込みや精査作業は実施していないため、これら確認された遺構の構造や時期などの詳細については不明である。

(荒)

第5節 川内迫B遺跡群J地点

第1項 J地点の立地 (図102~104)

J地点は川内迫B遺跡群調査グリッドE-076付近に展開する地点である。遺跡群の立地する丘陵は、西方向から開析谷が入り込み、C~E地点が位置する北半部と、J~N地点が位置する南半部とに大きく分断されている。開析谷は先端が枝分かれして、その間に尾根が張り出している。

J地点は、この尾根に伴う南向き斜面、標高30~34m付近に立地する。試掘調査において、この斜面の等高線に直行するように設定した数本のトレンチのうち、537Tで遺構が確認されたため、同トレンチを拡張するかたちで本調査を実施することとした。

検出された遺構は、木炭窯跡1基、土坑3基である。

(藤木)

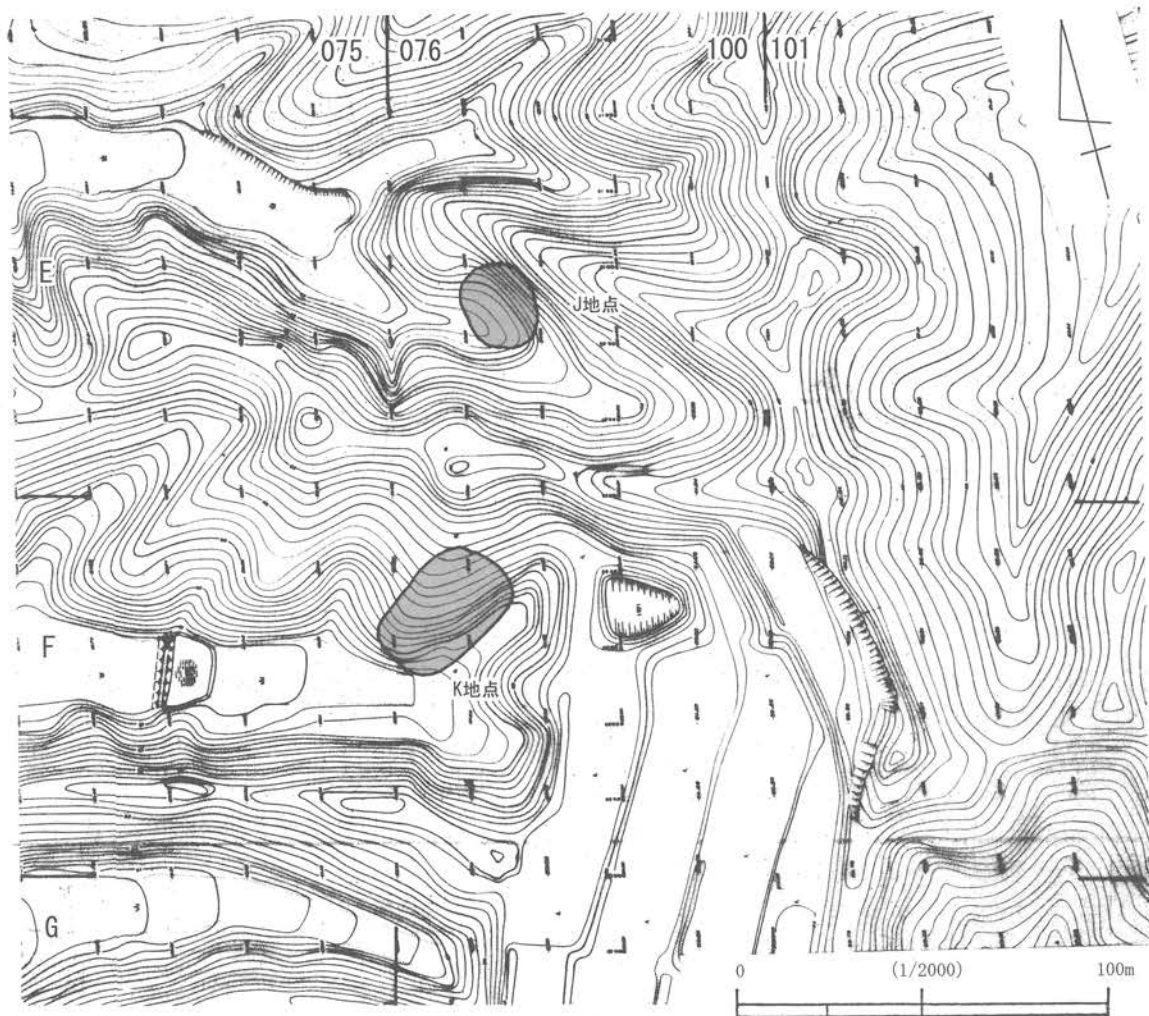


図102 J地点位置図

第2項 検出された遺構と遺物

1号木炭窯跡

遺 構 (図104・105: 図版73~75)

1号木炭窯跡は、ER89~ES88・89グリッドに位置する。遺構が立地する地形は、北西-南東方向に張り出した尾根の南向き斜面である。斜面は本窯跡の東約20mの地点で屈曲して向きを変え、谷頭を形成している。標高は30~33mほどで、丘陵斜面を等高線に直行してトンネル状に掘り込んだ地下式登窯である。天井が崩落したために地表面が陥没し、焼成室の奥壁近くが一部露出している状況を、表面調査の段階で確認している。

検出段階において、斜面に直行してのびる焼成室から作業場にかけてのプランを確認している。焼成室の部分では流入土と推定される暗褐色土、作業場の部分では黒褐色土のプランが確認されたため、これらのプランから遺構の中軸線を想定し、土層断面を観察した。

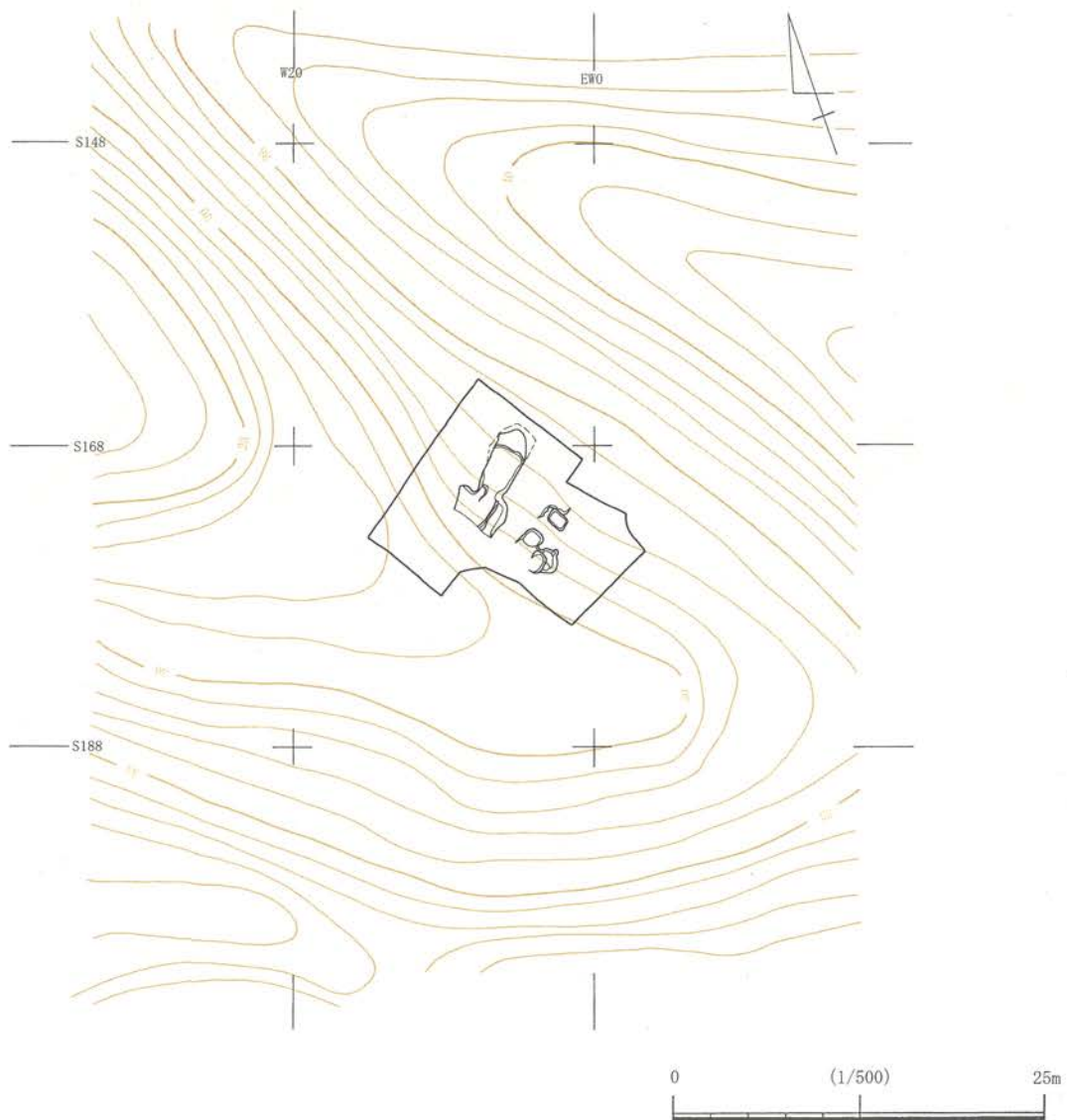


図103 調査区位置図

木炭窯跡

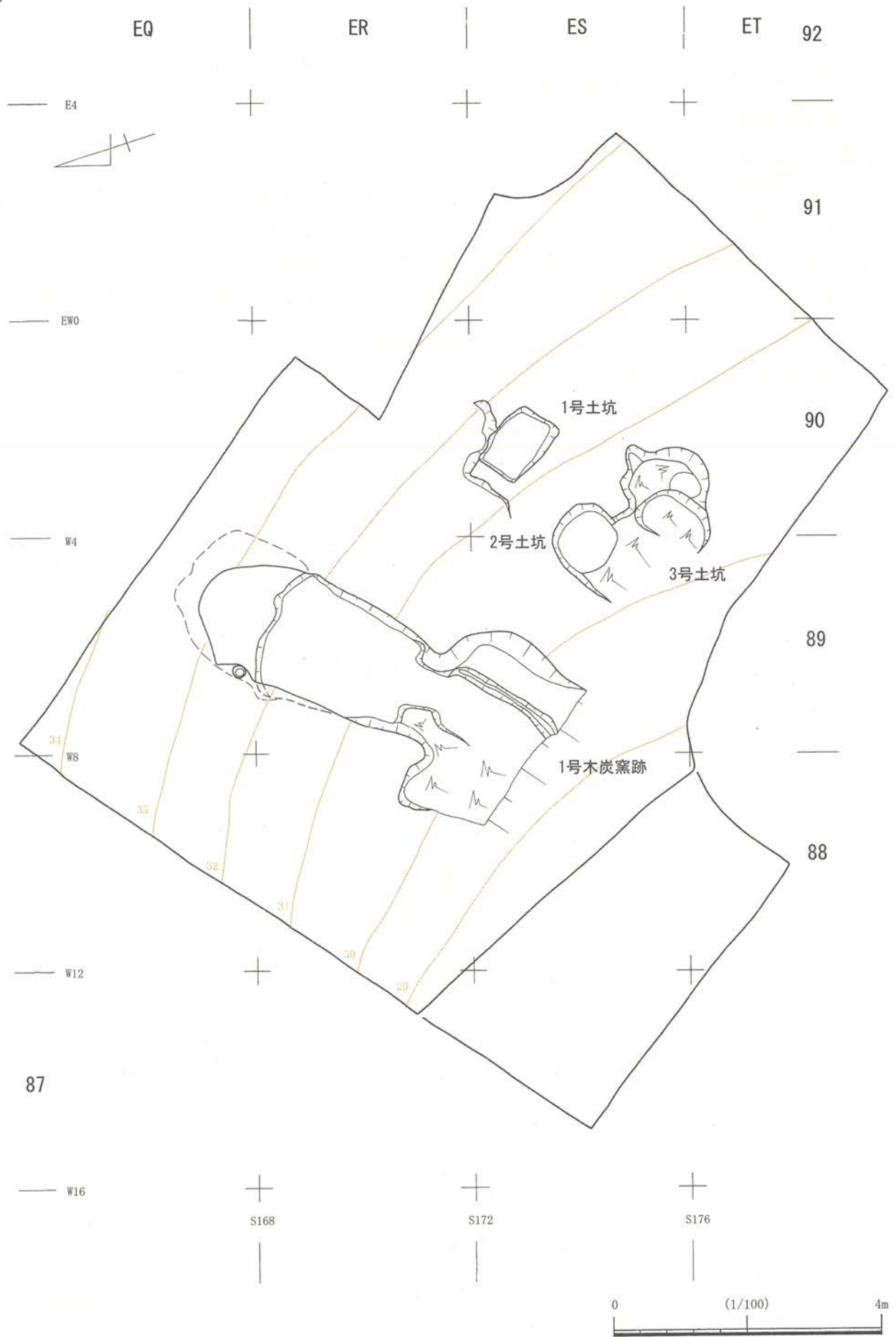


图104 J地点遺構配置図

遺構内の堆積土は27層に分層される(A-A'セクション)。このうち、1～21層は自然流入土、地山の崩落土、天井崩落土で、22・23層以下が操業に伴う堆積土と推定される。上層部の1～4層は、斜面下方へ向かって流出した自然流入土と推定される。

焼成室内に堆積した7～21層は天井の崩落に伴う堆積土と考えられる。焼成室の中ほど、22層の直上に堆積した17・20層は被熱した地山であり、酸化した壁に由来するものと考えられる。14、18層も焼土主体の堆積土である。21層は地山と同質の黄褐色土であるが被熱は認められない。16層は還元状態の地山である。焼成室内の土層の堆積状況は、天井部が一度に大きく崩落した状況は認められず、細かい崩落が繰り返されたことにより、埋没したものと考えられる。

22層以下は本窯の操業に伴う堆積層である。22層は木炭粒を多量に含む黒色土、焚口付近から作業場にかけて堆積した23層は焼土粒・木炭粒を多量に含む暗赤褐色土で、両者とも窯の最終的な操業に伴う堆積層と考えられる。作業場に伴う23層は、焼土ブロックを含むことから木炭のかき出し等に伴う堆積土と推定される。焼成室内の堆積層は、木炭粒を多量に含む黒色土の26層と、22層との間には木炭粒を含まない明褐色土の薄い層である24層が入る。この24層は天井の部分的な崩落によるものと推定され、26層は22層以前の操業に伴うものと推定される。26層の下層には、木炭粒を多量に含む暗茶褐色土が堆積している。25層は24層とともに26層の直上に堆積した土層で、焼成室の焚口寄りから作業場にかけて堆積した焼土粒、木炭粒を多量に含む層である。これも23層と同様、木炭のかき出し等に伴う堆積土と推定される。焼成室掘方の底面直上に堆積した27層は、木炭粒を多量に含む暗茶褐色土である。初期の操業に伴う堆積層と考えられる。以上の土層断面観察から、本窯跡は2回以上の操業が想定される。

底面まで掘り上げた段階での窯の構造は焼成室・焚口・作業場からなり、焼成室奥壁から作業場の末端までの全長は7.1mである。

焼成室は壁および底面に還元状態が認められるが、底面の奥壁付近と焚口付近の一部は酸化状態を示している。焼成室の平面形は、西側壁が直線的にのび、焚口近くと奥壁で直角に折れるが、東側壁は奥壁近くで緩やかにカーブした奥壁に到達する。奥壁は直線的である。焼成室の横断面形は、B-B'セクションの位置では平坦な底面から西側壁が直線的に内傾して立ちあがり、東側壁はやや内湾する。天井形態は崩落により不明であるが、B-B'セクションの西側壁では、側壁から天井に移行する部分がわずかに残っており、この部分から推測して天井は丸みを帯びるものと考えられる。奥壁は底面から弧を描き内湾して立ちあがる。底面は、奥壁から焚口側約1.6mの位置に20cmほどの段が認められる。底面の傾斜角度は、奥壁から段の位置までは24°前後、段より下位では9°となる。焼成室全体の規模は、全長5.2m、幅は奥壁部で1.6m、最大幅2.4m、焚口部近くで0.9mを測る。

煙道は、焼成室奥壁から約1.7m離れた西側壁にある。径は20cmを測る。壁面から2cmほどまでが青灰色の還元状態を示し、そこから更に2cmまでが酸化状態を示す赤色を呈している(D-D'セクション)。焚口は、平坦な底面から周壁が垂直に短く立ちあがり、底面から20cmの位置で大きく外に開き、さらに上方へ折れて垂直に立ちあがる形状である。幅は、底面近くで0.5m、上部で2.3mである。なお、周壁と底面は被熱により赤化している。

木炭窯跡

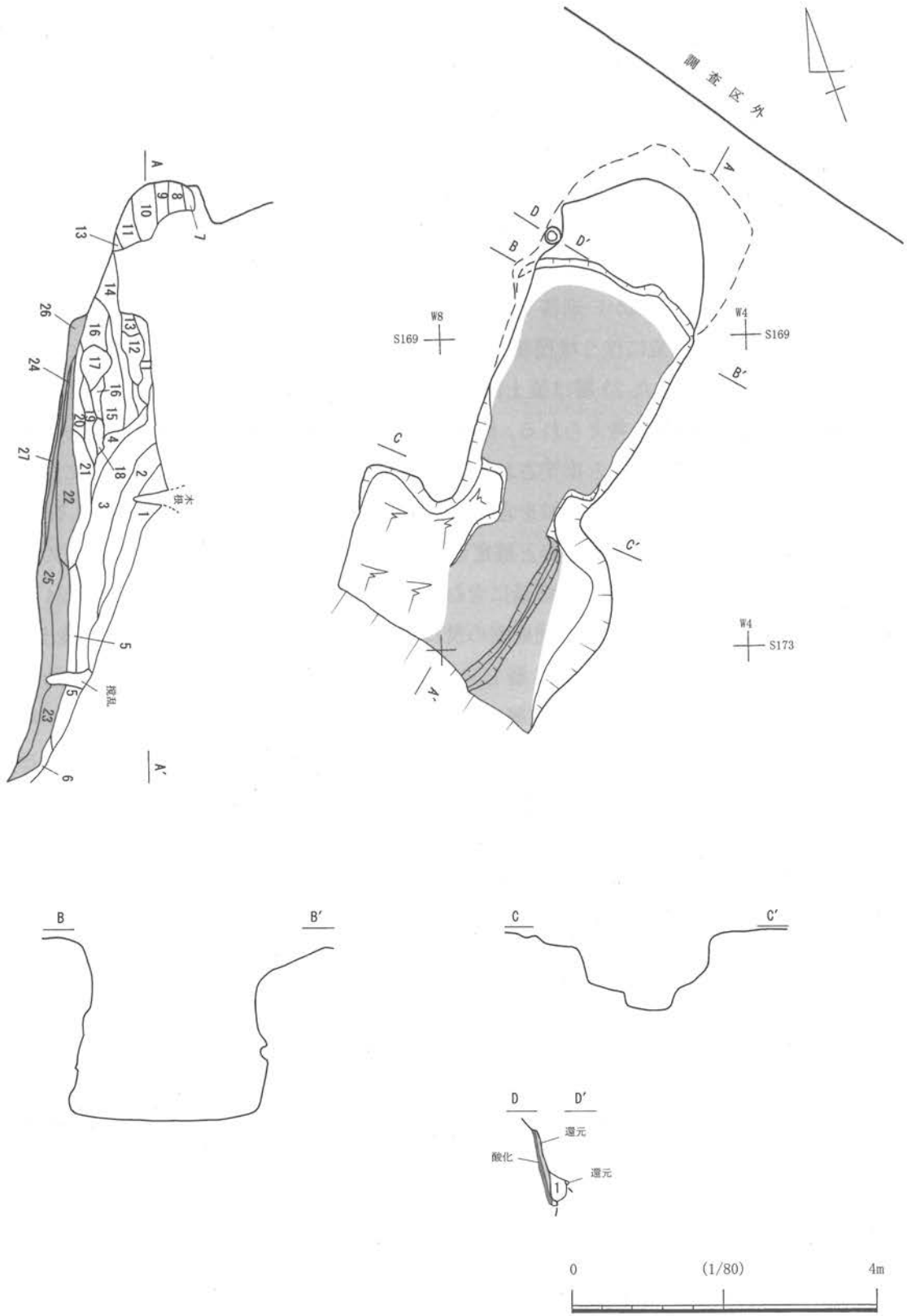


图105 1号木炭窯跡

作業場の平面形は、焚口近くで大きく横に肩を張り出し、斜面方向へ鋭角に折れる形態である。底面は、作業場正面から東半部にかけてがほぼ平坦であるが、西側は斜面方向に向かって緩やかに傾斜している。また作業場底面には、焚口東側の周壁に接し、斜面方向にのびる幅 20 cm の小規模な溝が認められる。(藤木)

1号木炭窯跡	
1 明褐色土	16 暗灰色土 木炭粒含
2 暗褐色土 木炭粒含	17 赤灰色土
3 黒褐色土 木炭粒含	18 赤褐色土
4 明褐色土 黄色土塊含	19 暗灰褐色土 焼土塊・木炭粒多含
5 黒褐色土 木炭粒・焼土粒含	20 赤灰色土 木炭粒含
6 黒色土・木炭粒多含	21 黄褐色土 焼土粒含
7 赤灰色土 (天井部分)	22 黒色土 木炭粒多含
8 明褐色土 白色土粒含	23 暗赤褐色土 焼土粒・木炭粒多含
9 明褐色土 黄白色土粒多含	24 明褐色土
10 明褐色土 黄白色土粒・焼土塊多含	25 黒褐色土 木炭粒・焼土粒多含
11 明褐色土 黄白色土粒多含	26 黒色土 木炭粒多含
12 明褐色土 白色土混合土	27 暗茶褐色土 木炭粒多含・焼土粒少含
13 明褐色土 黄色土塊多含	
14 暗赤褐色土 焼土塊・白色土塊多含	煙道
15 暗褐色土 黄色土塊多含	1 暗褐色土

土坑 (図 106)

1号土坑

1号土坑はW1-S174に位置する方形の土坑である。遺構は標高32m付近に位置する。遺構は東西方向に長軸を向けた長方形で、長辺1.5m×短辺0.94mである。土坑の断面形は長軸方向では明瞭な箱形であるが、短軸方向では南西壁ではオーバーハング状況となる。遺構内の堆積土は短軸方向で観察され、合計3層に分層される。最下層には水平堆積した3層が位置し、2層は左右から三角形に堆積する。遺構内からは遺物の出土が無かったため、詳細な性格、時期については示すことができないが、堆積土のうち2層には焼土や炭化物を含み、3層は厚さ約6cmの炭化物層であることを考慮すれば、木炭焼成土坑の可能性が考えられる。

1号土坑

- 1 暗茶褐色土
- 2 暗黄褐色土 焼土粒・木炭粒含
- 3 黒色土 (木炭層)

(荒)

2・3号土坑

2号土坑はW4-S175に位置する土坑群である。2号・3号土坑が近接して営まれ、北に位置する土坑を2号、南に位置する土坑を3号と呼称し記載する。

2号土坑

- 1 黒色土 木炭粒含
- 2 暗褐色土 木炭粒・焼土粒含
- 3 黒色土 木炭粒多含
- 4 暗褐色土 木炭粒・焼土粒多含

2号土坑は標高31mに立地する円形の土坑である。土坑の周囲には3号土坑から続く地山成形の掘り込みが巡り、2号土坑はこの地形整形範囲の北端に構築される。土坑断面形は明瞭な箱形である。遺構底面は平坦で土師器杯や羽口などが出土している。

3号土坑は2号土坑の南に隣接し、地山成形した掘り込みの南端に円形の掘り込みを形成し、土坑とする。3号土坑の東端には舌状に張り出した掘り込みがのびる。また3号土坑の東側に

土坑

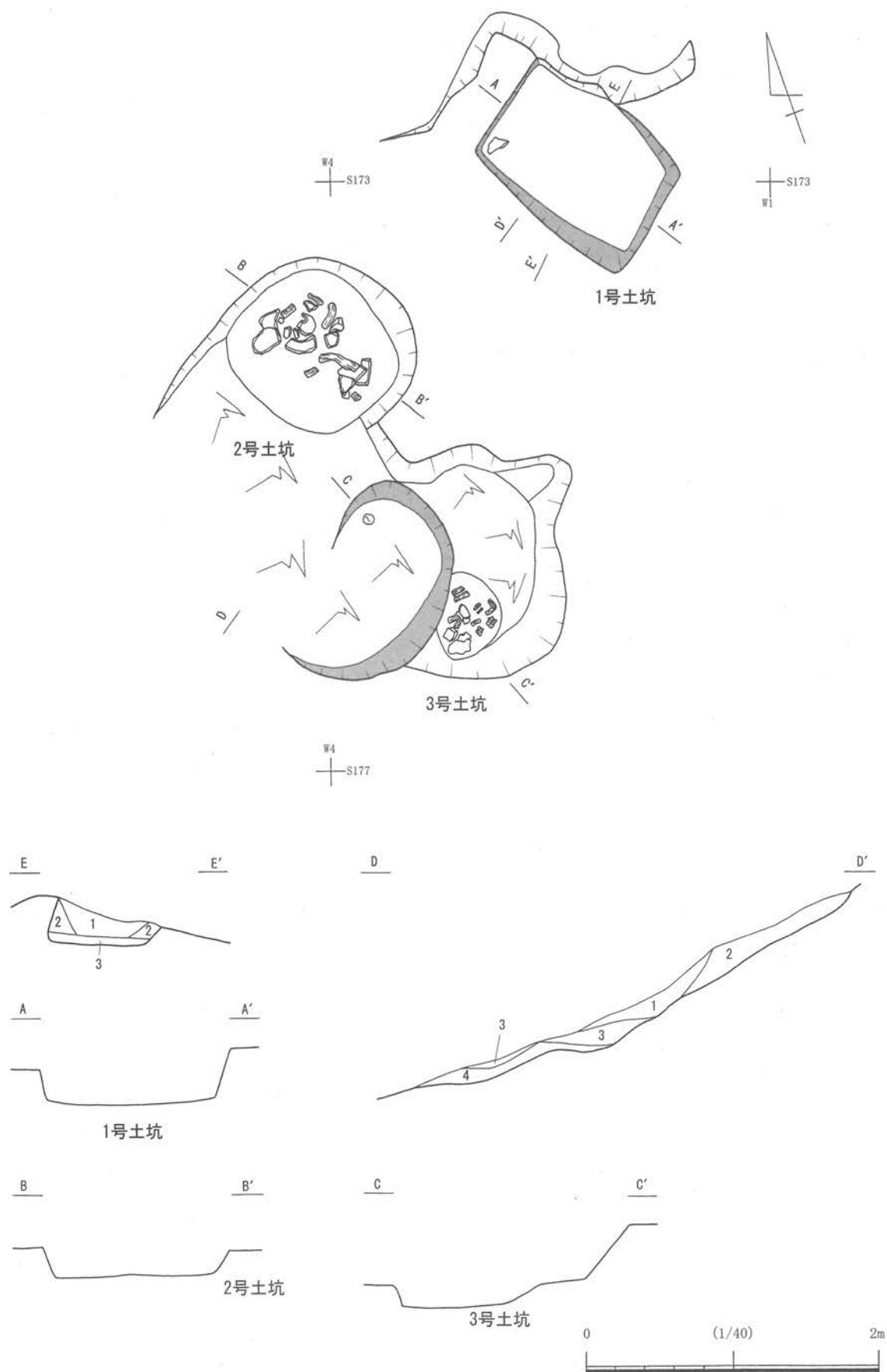


图106 1~3号土坑

は更に円形の掘り込みが広がり、3号土坑とは別の土坑であった可能性が高いが、重複関係は認識されていない。土坑の断面形は3号土坑の南壁は斜め上方から掘り込まれ、平坦な底面に到達する。そこから更に一段深く掘り込まれ下段の掘り込み底面に到達する。下段掘り込みの底面も平坦である。木炭置場のような性格を有する土坑の可能性はある。(荒)

遺物 (図107-1 : 図版121-8)

図107-1は2号土坑から出土したロクロ土師器杯である。口縁部は欠損しており全体の形状は不明である。また器面についても摩滅が著しいため調整方法を知ることは困難である。底部は平坦で直径7.1cmを計測し、器面内面には黒色処理が施されている。外面調整については体部下半に屈曲点が認められることを考慮すれば、底部切り離し後に回転ヘラケズリ、手持ちヘラケズリによる再調整が施されていると思われる。いずれにしても、当資料については良好な残存状況ではないため、これ以上の記載は困難である。

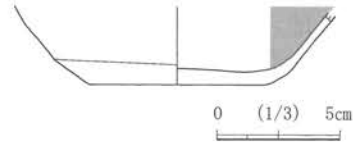


図107 2号土坑出土遺物

(荒)

挿 図	出土地点	器種	口径/器高/底径	調 整	備 考	図 版
107-1	SK-2	杯	-/(3.1)/7.0	内面：ミガキ・黒色処理 外面：ロクロナデ	手持ちヘラケズリ	121-8

表20 出土遺物観察表(7)

第3項 まとめ

J地点は調査区の中央に位置する1号木炭窯跡が調査された。木炭窯跡は標高40m前後の尾根南斜面の中腹に構築された地下式登窯である。窯の構造は作業場、焚口、燃焼室で構成される。木炭窯跡の調査では窯に伴う遺物は出土しなかったため、窯の構築ならびに操業の時期を限定することはできないが、ここでは、敢えて金沢地区製鉄遺跡群における木炭窯跡の変遷に従い、年代的な位置付けをしておきたい。

金沢製鉄遺跡群では7世紀代(第I期)に位置付けられる木炭窯跡は未確認で、確実に木炭窯が構築される時期を8世紀(第II・III期)と見ている。この時期の焼成室の平均規模は最大幅1.5m、奥行4.2mで、以後の9世紀代(第IV期)に位置付けられる窯跡の平均規模は最大幅1.8m、奥行5.6mとされる。第V期(9世紀後半)では最大幅2.1m、奥行5.7mとなり、時期が降るにつれて焼成室の規模が拡大することが指摘される。

本調査地点1号木炭窯跡の焼成室規模は最大幅2.4m、奥行5.2mである。この計測値をみると本窯跡は金沢製鉄遺跡群木炭窯跡変遷の第IV期・V期に近い計測値である。

本調査地点における検出遺構は木炭窯跡、土坑と非常に少ない傾向にあるため、調査地区内だけでは、調査遺構群の位置付けを行うことは困難である。今後、遺構の集中するC、G地点を含めて総合的な検討が必要である。

(荒)

第6節 川内迫B遺跡群K地点

第1項 K地点の立地 (図108・109: 図版76)

川内迫B遺跡群の立地する丘陵は、西側から入り込む開析谷によりいくつか大きく分断されている。このうち、F-26付近から入り込む開析谷は、丘陵の西端から約250m東へのび、先端で南北に枝分かれする。開析谷の両側には東西に長い丘陵の尾根が発達している。K地点は、この開析谷の北側に発達した尾根の南側斜面、標高20~30m前後に立地する。K地点が位置する丘陵南向き斜面は、開析谷へ向かう数本の沢を形成しているために等高線は蛇行する。当地点の西250mにはL地点が、北80mにはJ地点が位置している。

K地点に設定した調査区は1~3区に分けられる。試掘調査段階において、丘陵斜面に設定したトレンチのうち、567・576・577・580Tで遺構が検出され、本調査はこれらの調査区を拡張するかたちで実施することとした。1区は567Tを、2区は576・577Tを、3区は580Tを拡張した調査区である。1区では木炭窯跡1基、2区では採掘遺構と推定される土坑群、3区では竪穴住居跡2軒・土坑2基が確認された。(藤木)

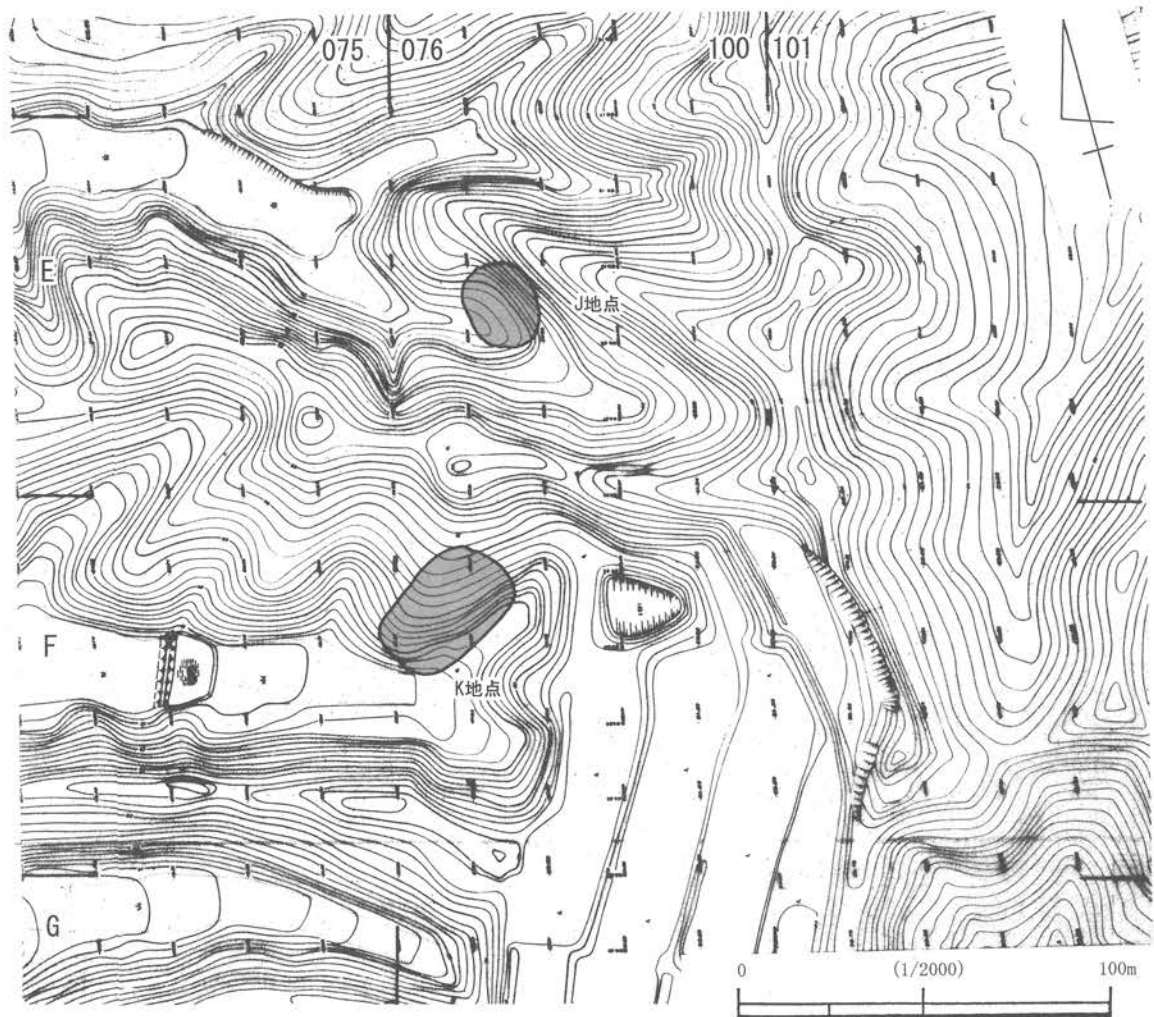


図102 K地点位置図

第2項 検出された遺構と遺物

1号木炭窯跡

遺 構 (図 110・111 : 図版 81~82)

1号木炭窯跡は1区で検出された遺構で、FC-62・FD-62・FE-62 グリッドに位置する。遺構は、南西方向に張り出した尾根の南向き斜面、標高 21~25mの地点に立地している。遺構が立地する斜面は、本窯跡の東約 20mの位置で屈曲して向きを変え、谷頭を形成する。

本窯跡は、等高線に直行するようにトンネル状に掘り込んだ地下式登窯である。検出段階では斜面に直行してのびる焼成室から作業場にかけてのプランを確認している。焼成室から作業場にかけては、天井崩落後の自然流入土と推定される暗褐色土が、作業場の斜面下位の一部に木

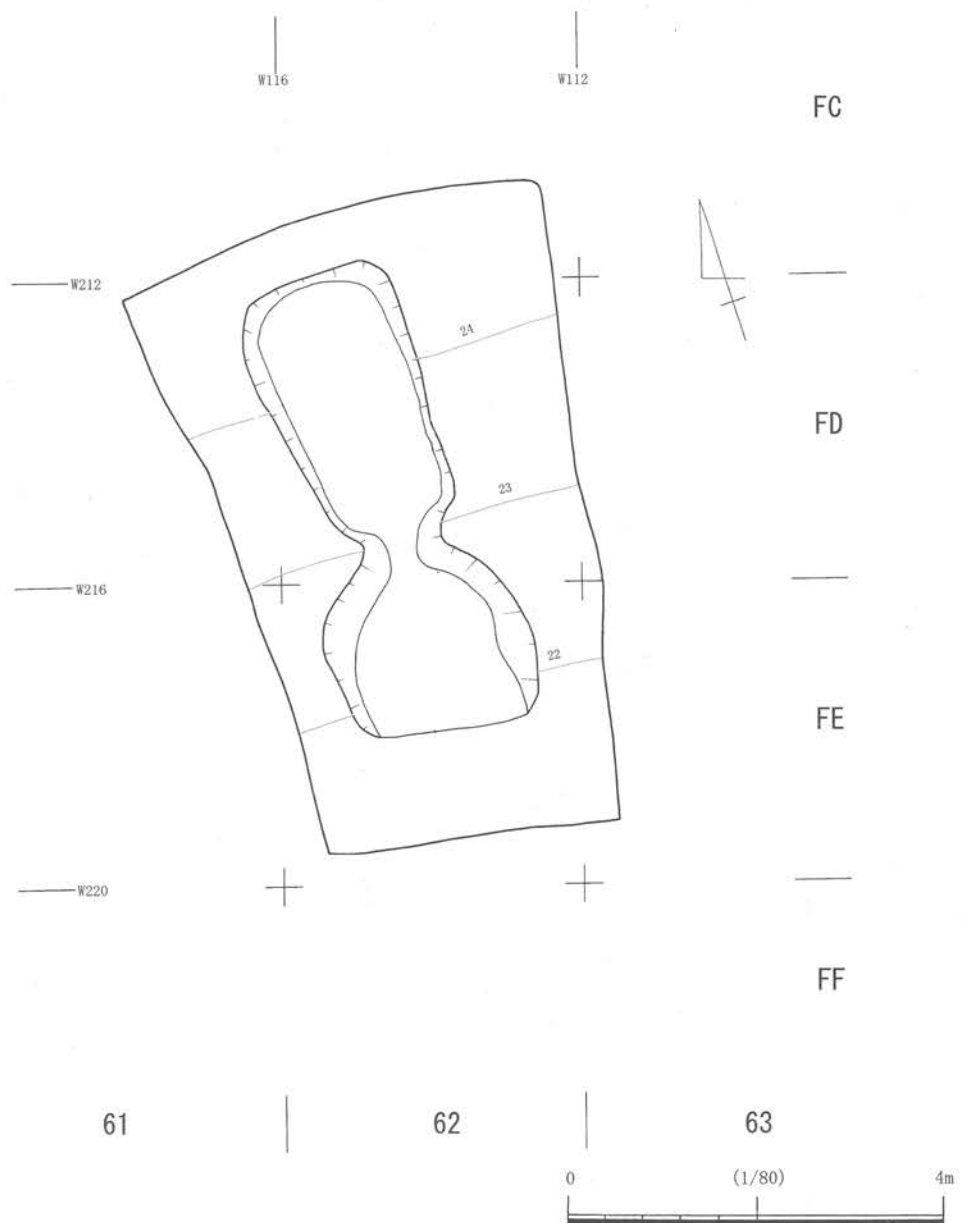


図110 1区全体図

炭粒、焼土粒を多量に含む黒褐色土のプランが検出されたため、このプランから遺構の中軸線を想定し、堆積土の北半分（斜面下方から向かって左側）を掘り下げた。

土層断面を観察した結果、遺構覆土は1～22層に分層される（A-A'セクション）。1～16層は自然流入土・地山崩落土・天井崩落土で、17～22層は本木炭窯の操業に伴うものである。

最上層の1層は天井崩落後の自然流入土であり、焼成室から作業場にかけて堆積している。

焼成室中央の底面直上に堆積した16層は、暗灰色土ブロックと褐色土の混合土で、還元状態である。その上に堆積した13・14層は赤褐色土・暗赤褐色土で、被熱し酸化した地山である。焼成室天井のこれらの層はそれぞれ焼成室天井の還元・酸化部分が焼成室内にそのまま落ち込んだものと考えられる。地山と同質の明黄褐色土である12層は、還元や酸化が及んでいない天井部の一部と推定される。暗灰色土ブロック主体の9～11層は、還元状態の天井に由来するものと考えられる。12層の上の8層は、暗灰色土粒を含む暗赤褐色土で、奥壁近くの天井が崩落した土層である。5～7層は焼土粒・焼土ブロックを多量に含む堆積土で、酸化した天井崩落土と考えられ、斜面下位へ向かって流出した状況で堆積している。その上の2～4層は地山と同質の黄白色泥岩や黄褐色土であるが、酸化・還元は及んでいない。

焼成室内におけるこれらの土層堆積の状況から、焼成室の天井については中央部がまず崩落し、以後奥壁近くへ向かって順次崩落した状況がうかがえる。

焼成室下部から作業場にかけて堆積した17層以下は、本窯の操業に伴う堆積層と考えられる。17層は木炭粒を多量に含む黒色土で、窯の最終的な操業に伴う土層と考えられる。18～20層は木炭粒とともに焼土粒を多く含み、焚口から作業場にかけて堆積していることから、窯焚き後の掻き出しに伴う堆積層と考えられる。作業場下方に位置する21層も掻き出しに伴うものと推定されるが、18層とは操業時を異にする可能性がある。土層断面の観察からは、操業回数を捉えることはできなかったが、複数回の操業が推定される。

窯跡は焼成室・焚口・作業場からなり、焼成室奥壁から作業場末端までは6.35mである。

焼成室の平面形は、両側壁が直線的にのび、奥壁・焚口付近で内側へ折れる長方形である。焼成室全体の規模は、全長3.5m、幅は奥壁近くで1.7m、焚口近くで1.6mを測る。全面に炭素が吸着し、黒色の還元状態を呈する。横断面形は、B-B'セクションでは平坦な底面からやや内湾する側壁が立ちあがる。天井は崩落しているため形状は不明であるが、内湾する側壁の形状から考えて、天井もやや丸みを帯びるものと思われる。奥壁は底面から弧を描き、強く内湾して天井部へ至る。底面の傾斜角度は16°前後である。

焚口はU字形の底面から周壁が立ちあがる形状で、幅は1.1mほどである（C-C'セクション）。周壁は強く被熱し赤化している。

作業場は焚口近くから緩やかなカーブを描いて斜面下方へ向かう、あまり肩の張らない形状である。底面は、上半部が16°前後の傾斜をもつものに対し、下半では角度を変え、水平に近くなる。壁は緩やかに内湾して立ちあがる。作業場の規模は、長さ2.25m×幅2.6mである。なお、本窯跡からは遺物は出土しておらず、時期は不明である。

（藤木）

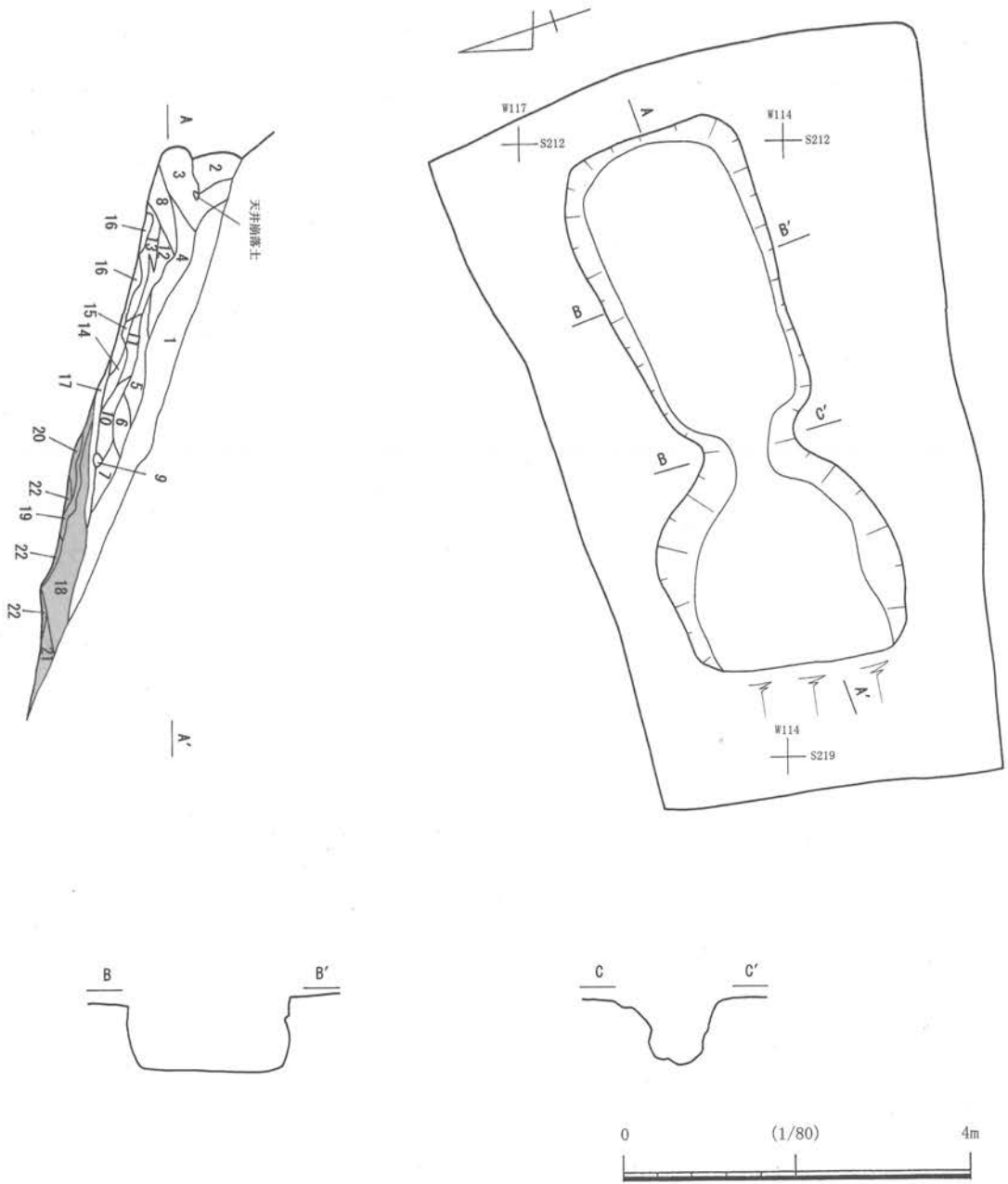


图111 1号木炭窯跡

1号木炭窯跡	
1	暗褐色土 木炭粒少含
2	黄白色泥岩明褐色土混合土 (天井崩落土)
3	黄褐色土
4	暗黄褐色土
5	暗褐色土 赤色烧土塊含
6	暗赤褐色土 赤色烧土粒多含
7	暗赤褐色土 赤色烧土粒多含
8	暗赤褐色土 暗灰色土粒含
9	暗灰色土塊 (天井崩落土)
10	褐色土暗灰色土塊混合土
11	暗灰色土塊暗褐色土混合土
12	明黄褐色土
13	赤褐色土
14	暗赤褐色土
15	暗黄褐色土 木炭粒含
16	暗灰色土塊暗褐色土混合土 (天井崩落土)
17	黑色土 木炭粒多含
18	黑褐色土 木炭粒・烧土粒多含
19	黑色土 木炭粒・烧土粒多含
20	暗褐色土 木炭粒・烧土粒多含
21	暗褐色土 木炭粒・烧土粒多含
22	暗黄褐色土 木炭粒少含

※17~22 まで操業面

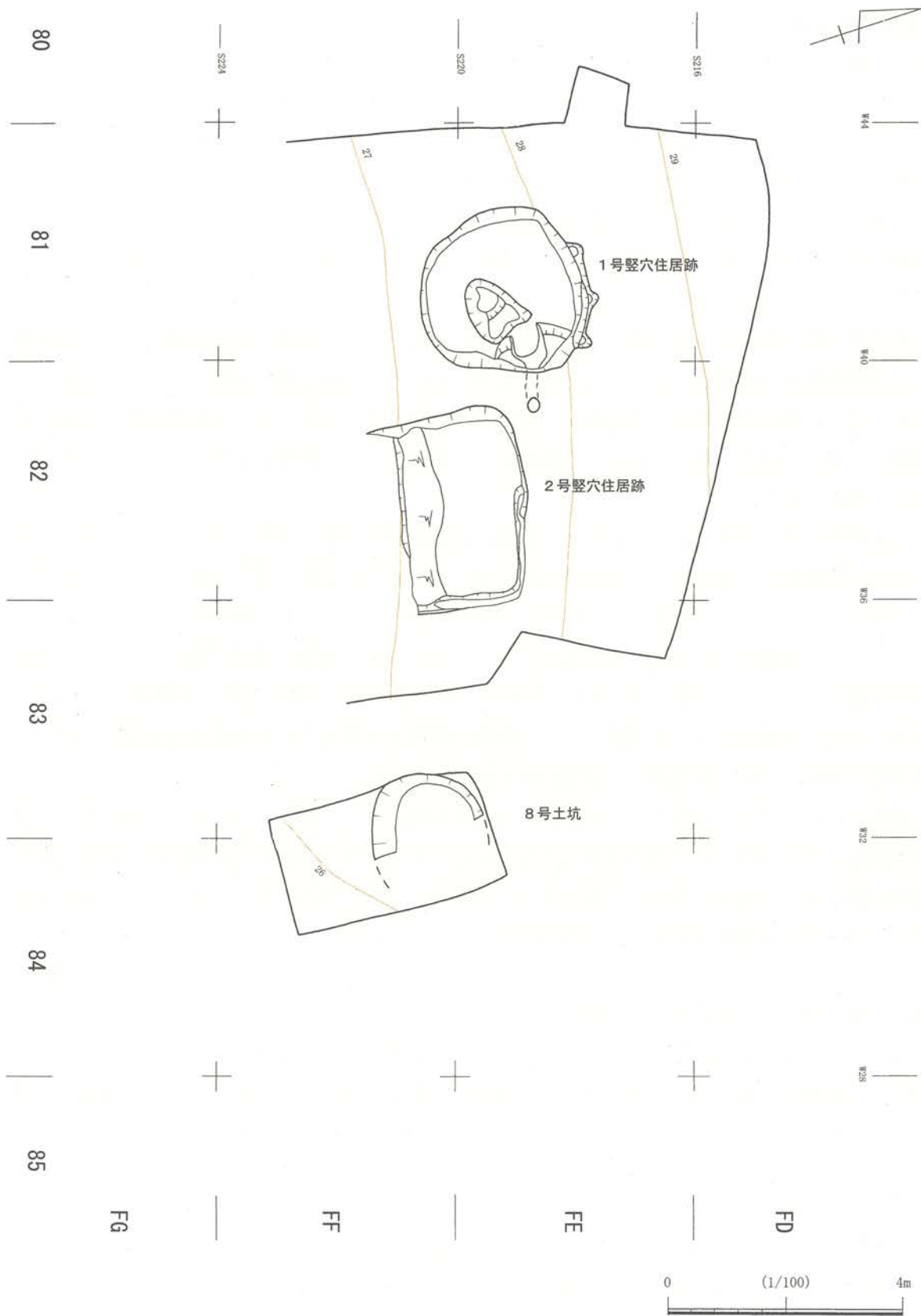


图112 3区全体图

1号竪穴住居跡

遺 構 (図 112・113 : 図版 83)

1号竪穴住居跡は、FE-81~FF-81 グリッドに位置する。遺構が立地する地形は、西側から入り込む開析谷の北側に発達した丘陵の南向き斜面で、標高27~28m前後である。住居中央部を土坑状の掘り込みが切っている。主軸方位はN-17° -Eを示す。

住居のプランは、四辺の中央が膨らむ胴張り隅丸方形を基調としたものと考えられるが、南西隅は緩やかな弧を描き角が明瞭でない。規模は東西2.8m×南北2.8mを測る。検出面からの深さは0.54mである。

覆土は、厚さ20~50cmを測り、1~8層に分けられる。5・6層は住居周壁近くに三角堆積した住居廃絶後の初期流入土と考えられ、そのうえに1~4層が順次堆積して完全な埋没にいたる。5・6層の直下には、暗褐色土・黒褐色土の混合土(7層)が8cm前後の厚さで水平に堆積しており、貼床と考えられる。7層直下に一部認められた明褐色土の9層は、住居掘方の埋土と推定される。

壁は垂直に近い急角度で立ちあがる。北壁には等間隔で並ぶ3ヶ所の突出があり、突出部はそれぞれ住居壁の中位ほどに平坦な底面をもつ。これらは住居壁に接して掘り込まれた壁柱穴の可能性もある。なお、住居壁の周溝は伴わない。床面ではピットは確認されなかった。

カマドは、東壁の中央北寄り確認された。天井の一部と袖部、煙道が遺存していた。煙道は住居壁から0.5mのびる。径は18cmである。天井部や袖部は黄白色粘土で構築されている。煙道内には、底面にカマドが機能している段階の堆積土と推定される黒紫色土が薄く堆積し、廃絶後に崩落土である灰黄色土、灰褐色土が堆積している。

遺物は、住居中央北西寄りの床面直上から土師器甕、カマド南側の床直上から土師器甕、須恵器長頸瓶、カマド内から土師器甕が出土している。カマド内から出土した図114-2は、住居廃絶の際にカマドにかけられた状態であったものが、天井の崩落に伴ってカマド内に落ち込んだか、カマド内に投棄されたものと思われる。

(藤木)

遺 物 (図 114 : 図版 119-1~5)

図114-1~5は床面直上から出土した。1はロクロ整形の土師器甕である。体部下半から底部までの範囲は欠損のため不明であるが、長胴化の進んだ甕であると思われる。口縁部は一端緩やかに外傾するが、口縁部中央で上方に向かって立ち上がっておさまる。口径は18.5cm前後である。

2はロクロ整形の土師器甕であり、カマド付近から出土した。1同様に体部下半から底部にかけての範囲は欠損のため不明であるが、長胴化の進んだ甕である。口縁部の形状は外方に向かって屈曲したあと、強く直立して口縁端部を形成する。口縁端部の断面形は三角形を呈し、口径は19.8cmである。胴部外面には明瞭なロクロナデが認められる。

3はロクロ整形による土師器甕である。1・2同様に胴部下半から底部にかけての範囲は欠損している。口縁部の形態は2よりは1に類似し、口径は16.6cmである。器面にはロクロナデが

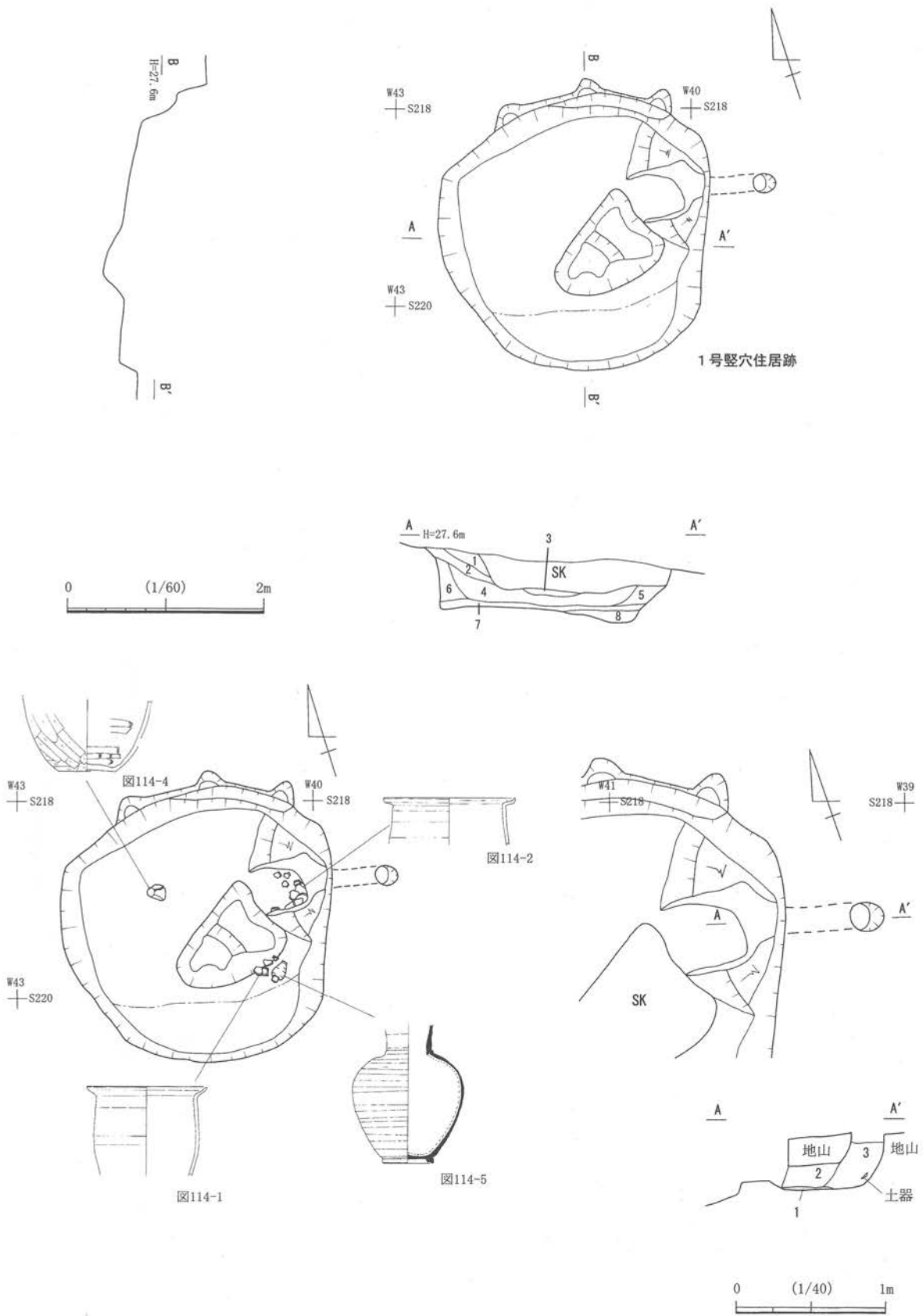


图113 1号竖穴住居跡

観察される。

4は土師器甕の底部資料である。体部上半ならびに口縁部の形状は欠損のため不明であるが、上述の1・2・3のいずれかの資料と同一個体の可能性が高い。底部はほぼ平坦である。胴部は直立に近い角度で立ち上がる。胴部外面には縦位ヘラケズリが施され、内面には横位ナデが施される。5は須恵器長頸瓶である。口縁部は欠損しており 不明であるが、高台部から口縁下部にかけての範囲が残存している資料である。高台部はほぼ直立し高さ 0.6 cm、直径 6.9 cmである。高台が取り付け底部から卵形の体部が延びる。頸部は口縁部に向かって直立しており、体部と接する地点には断面が半円形のリング状の突帯が見られる。器面には明瞭なロクロナデが認められ、自然釉の付着がある。

(荒)

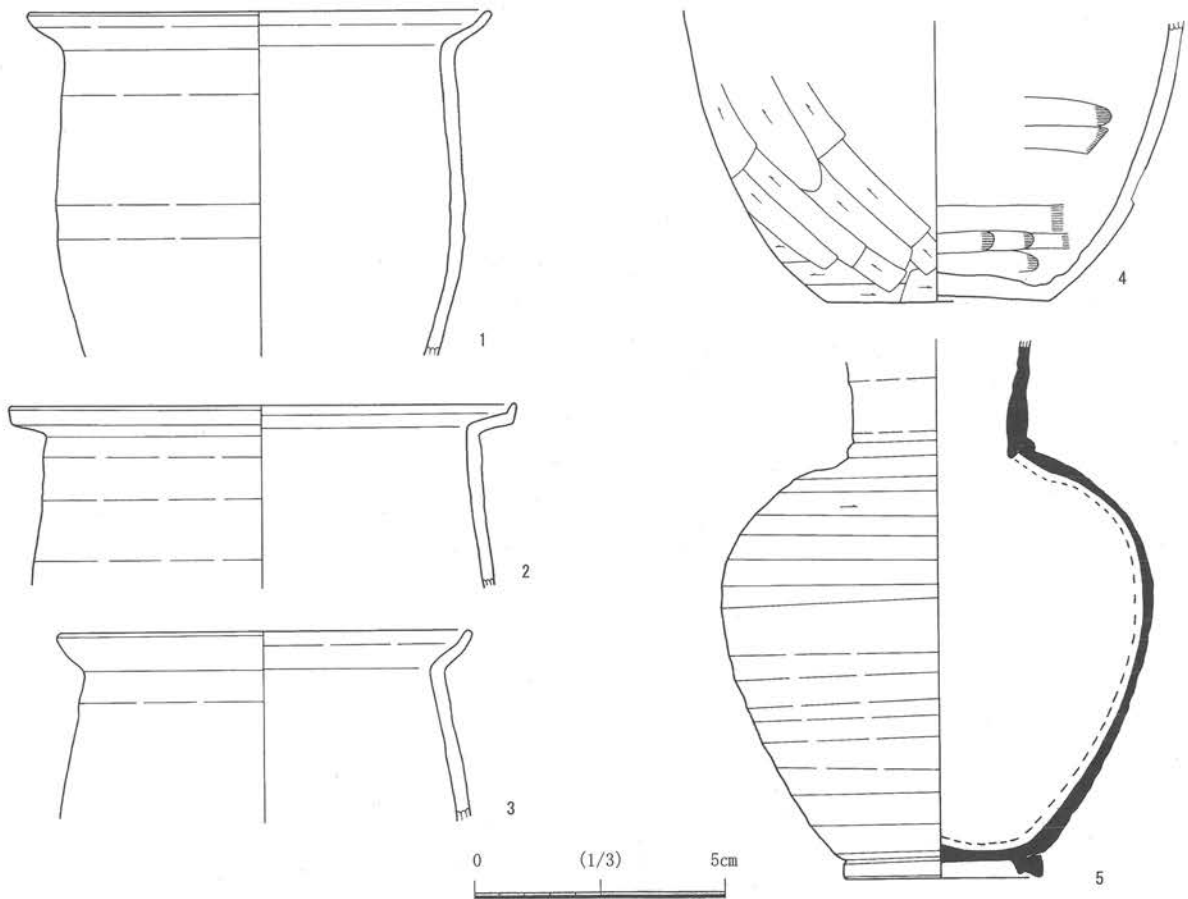


図114 1号竪穴住居跡出土遺物

挿 図	出土地点	器 種	口径/器高/底径	調 整	備 考	図 版
114-1	1 住	甕	-/(11.1)/8.8	内面:ナデ,ヘラナデ 外面:ヘラ削り		119-1
114-2	1 住	甕	16.2/(7.6)/-	口~体部部ロクロナデか		119-2
114-3	1 住床直	甕	18.2/(13.2)/-	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ		119-3
114-4	1 住カト	甕	20.2/(7.3)/-	内外面とも口~体部ロクロナデ		119-4
114-5	1 住床直	長頸壺	-/(21.3)/7.7	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ・ケズリ		119-5

表 21 出土遺物観察表(8)

2号竪穴住居跡(図 112・1 15)

2号竪穴住居跡は、FE-82~FF-82 グリッドに位置し、1号竪穴住居跡の東に隣接している。1号竪穴住居跡と同じ丘陵南向き斜面、標高27~28mに立地する。住居南半部は削平によって失われ、北半部を残すのみであるが、遺存する壁の状況から平面形は方形と推定される。

2号竪穴住居跡	
1	黒褐色土 木炭粒含
2	暗褐色土 木炭粒含
3	明黄褐色土 木炭粒・暗褐色土含
4	暗褐色土 木炭粒含
5	暗褐色土
6	暗褐色土 木炭粒含

覆土は厚さ45cmを測り、5層に分層される。黒褐色土、暗褐色土、明褐色土による自然堆積土である。周溝内に住居が機能している段階か廃絶後の初期流入土と推定される5層が堆積し、その後周壁に近い位置に木炭粒を含む暗褐色土である4層が三角堆積している。以後、2・3・1層が順次堆積したと思われる。

北壁は垂直に立ちあがり、東・西壁はやや外傾する。また、北壁東半から東壁にかけて、幅24cm×深さ10cmの壁周溝がめぐる。遺存する部分ではピットは確認されなかった。

調査では当遺構に伴う遺物を検出することはできなかったため、年代的な位置付けは困難な状況にある。

(藤木)

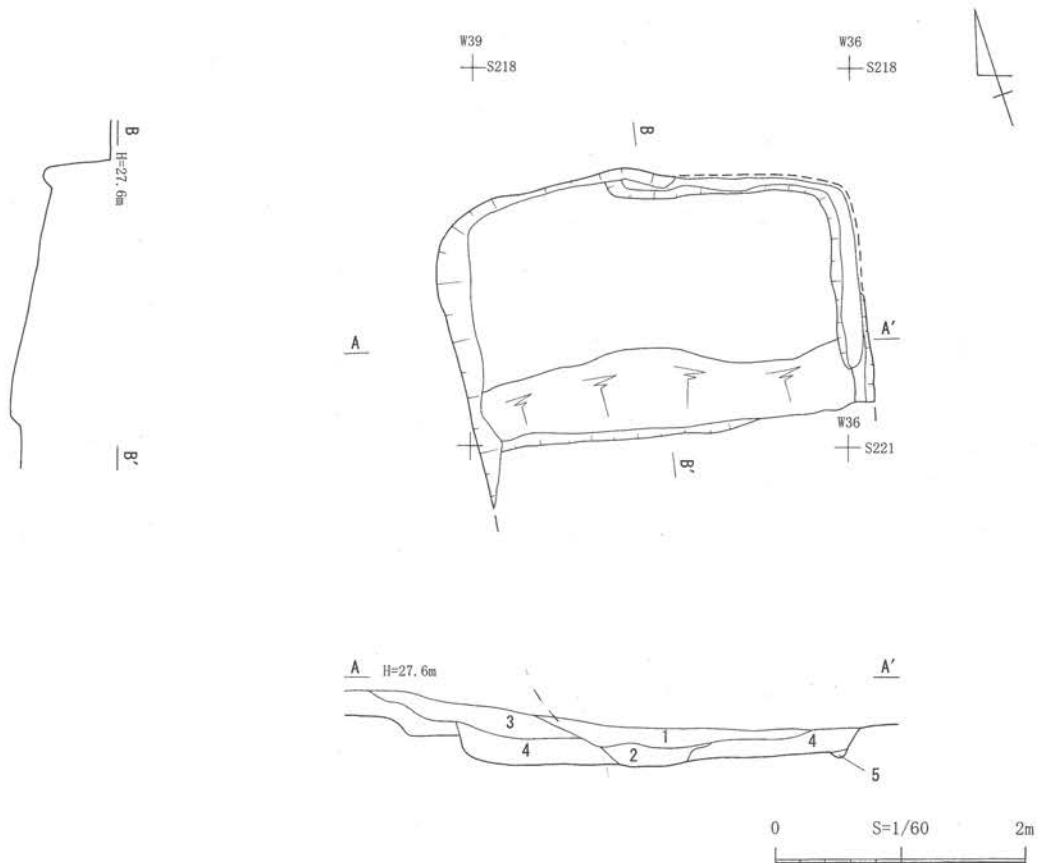


図115 2号竪穴住居跡

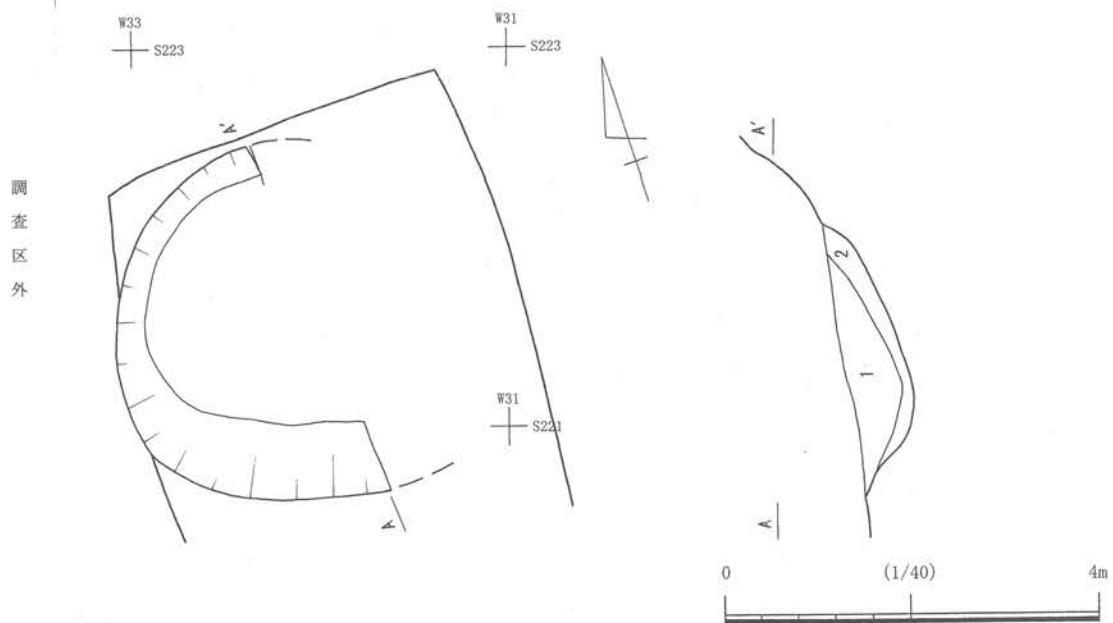


図116 8号土坑

土坑

8号土坑(図 116)

8号土坑は調査グリッドFE83に位置する土坑である。遺構東半部は掘り過ぎのため、遺構全体の形状は不明であるが、残存する西半部を見ると、本来はほぼ正円形に近い形状であったものと思われる。遺構断面形は斜面上部から緩やかに弧を描く遺構壁がのび、そこから更に1段深く掘り込まれる。遺構内の堆積土は2層に細分される。この2層はレンズ状に堆積しているため、自然堆積層と考えられる。調査では遺物が出土しなかったため、時期、性格ともに不明である。

(荒)

不明遺構(図 117~120:図版 77~80)

不明遺構として扱う遺構は、大きく2つのグループに分けられる。まず第1のグループは2号~7号土坑として調査をおこなったものである。これらは当初、それぞれが独立した土坑であると想定し調査を行ったが、調査の結果、通常の土坑とは異なる要因が認められたため、不明遺構として位置付けた一群である。ここではA群とする。第2のグループは上記A群の調査所見をもって、当初から不明遺構として位置付けて調査を行った遺構群であり、ここではB群として記載する。

A群は2号~7号土坑として調査を行った。遺構群は東西方向に走る丘陵の南斜面に位置するが、この斜面にはいくつかの小規模な谷が形成されており、等高線は大きく蛇行しながら横走る。当遺構群はこれらの小規模な谷によって形成された丘陵突端の斜面部に位置し、この斜面を削り出し平場の造成を行っているようである。遺構の掘り込みはこの造成された平場から丘陵斜面が始まる地点から行われている。尾根筋を挟んだ反対側にはB群が隣接する。

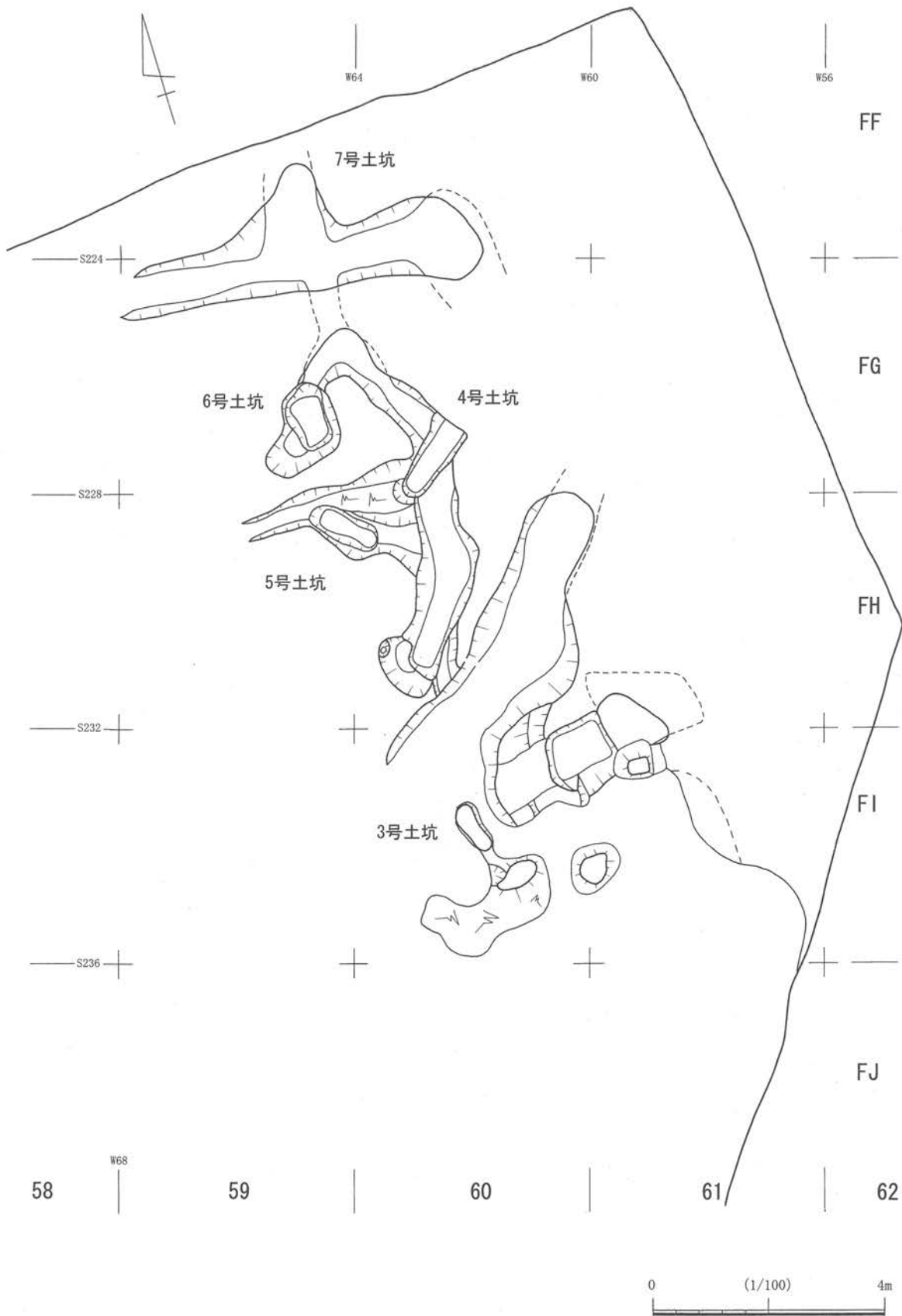


图117 不明遺構A群全体図

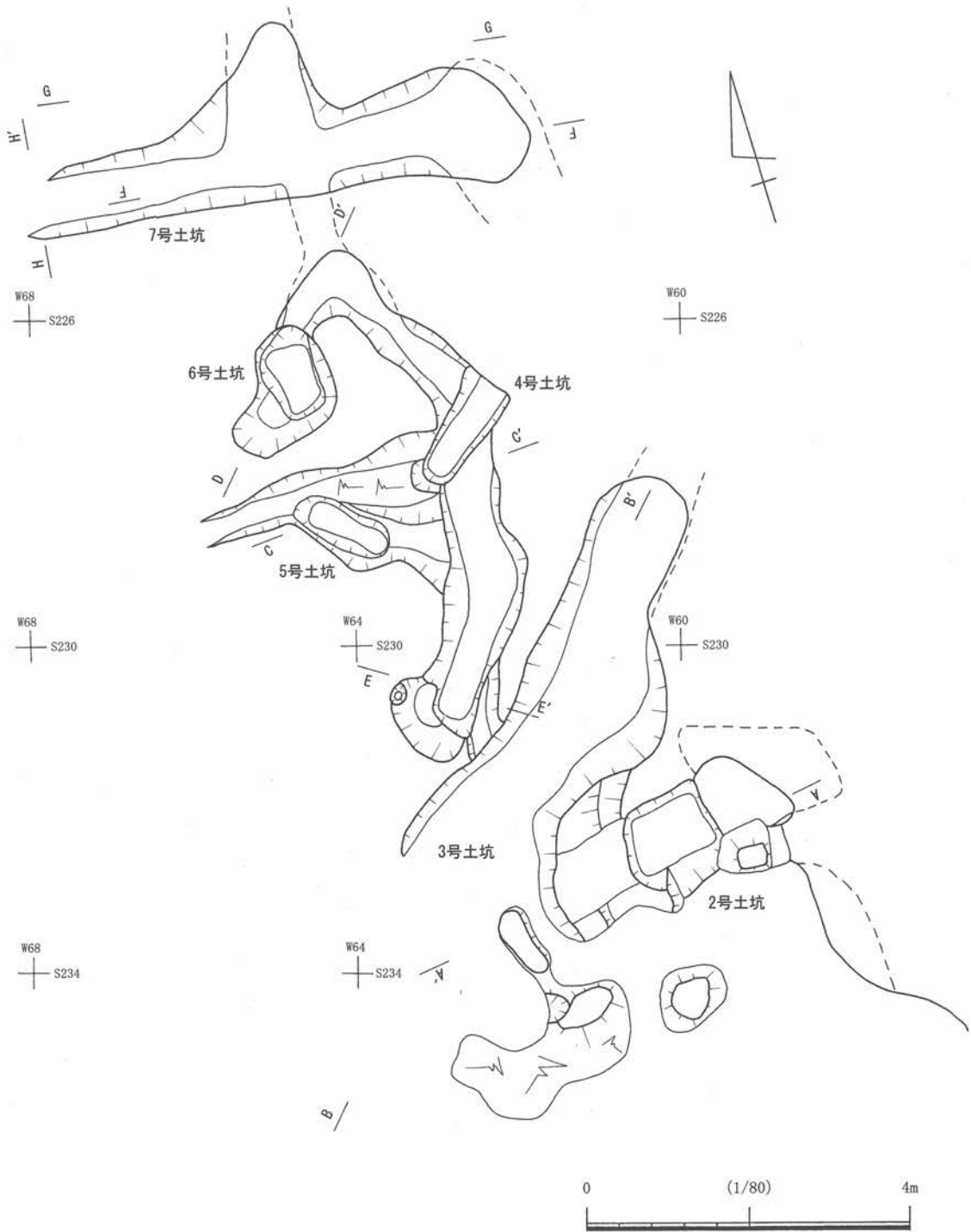


图118 不明遺構A群

不明遺構A群とした6基の土坑群はほぼ南北方向に縦列し、いずれも標高23m前後に位置する。最も南側には2号土坑が位置し、以下北に向かって3・4・5・6・7号土坑の順に並ぶ。いずれの土坑も平表面から掘り込みが開始される。掘り込みは地山である泥岩岩盤面を掘り抜き、下層に位置する砂質層が露呈した時点で縦方向の掘り込みは終了される。そこから、丘陵斜面を横方向に掘り込みを変化させ、最終的な土坑の掘り込みは丘陵内部にまで到達する。調査ではトンネル状に掘り込まれた遺構の最深部(奥壁)を確認することはできず、最深部は調査可能範囲を超えて、更に丘陵内部(奥)に位置するものと思われる。特に4～7号土坑は特徴的で、先ず溝状の掘り込みが形成される。4～6号土坑が位置する付近では溝状遺構が平場

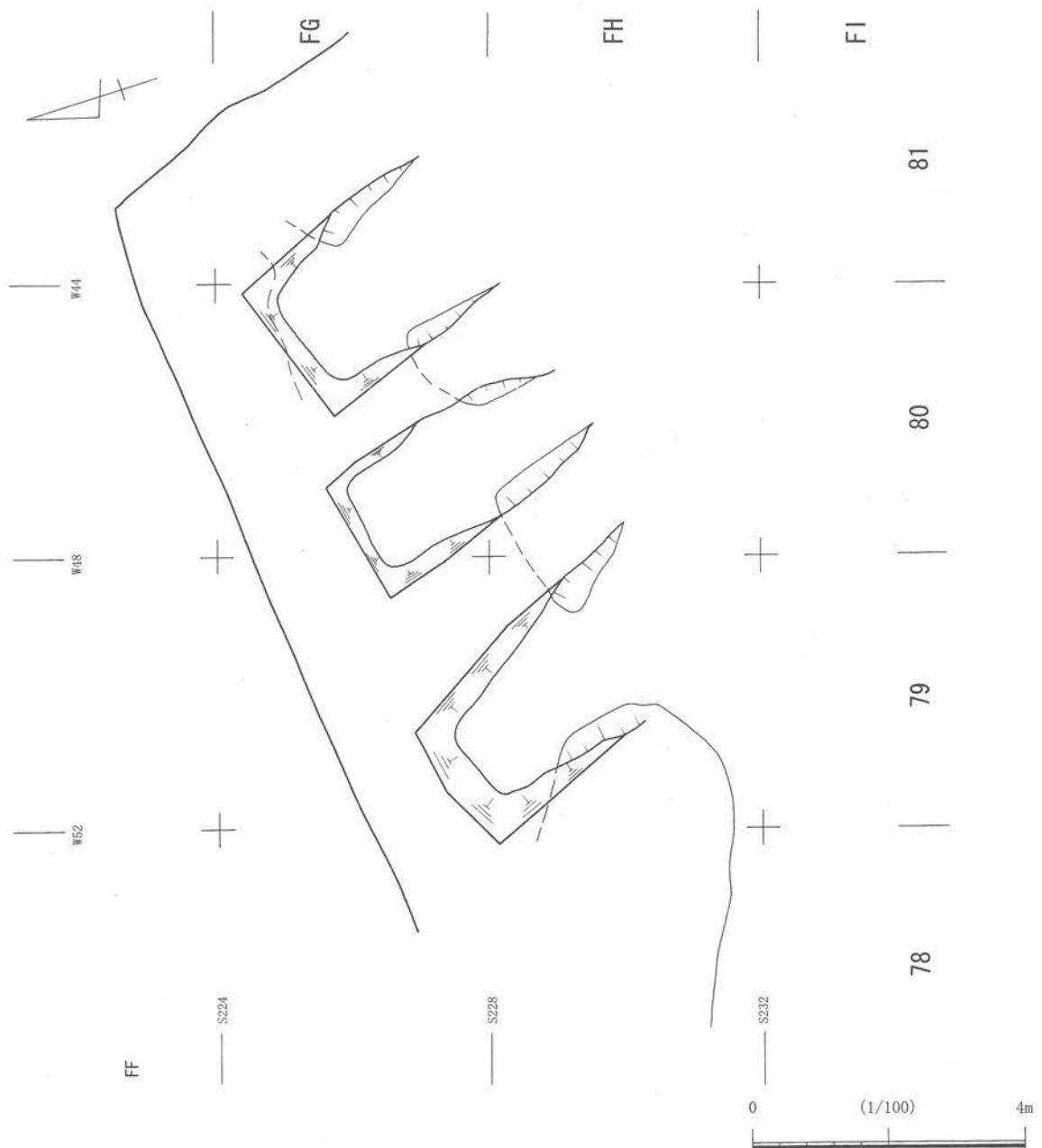


図120 不明遺構B群

付近から掘り込まれ、丘陵裾付近に添うように走り7号土坑方向へ向かう。7号土坑に到達する手前には岩盤の丘陵斜面が遺存しているが、溝状の掘り込みはトンネル状に丘陵斜面を抜け、7号土坑へと連結する。4～6号土坑は上述の溝状の掘りこみと重複するように位置する。溝状遺構との重複関係を見ると、5号土坑は溝状遺構が埋没したのちに掘り込まれており、時期差が認められる。6号土坑は溝状遺構と一連の埋没過程を示しており、埋没時期はほぼ同時期であったと思われる。このような状況を見ると2号土坑付近にも掘り残された岩盤が所々に認められ、本来は複雑に走る溝状の掘り込みが存在していた可能性も考えられる。

不明遺構B群としたものはA群が築かれた尾根筋を挟んだ東側に位置する遺構群である。A群と比較すると複雑な掘り込み形状はもたず、丘陵内部へ向かって横穴状に掘り込まれた3基の遺構である。遺構は標高23m付近に並列して築かれており、丘陵内部へと伸びている。またこれらの3基の掘り込みは丘陵内部において連結している。

A、Bと総称したこれらの不明遺構の調査では、遺構の性格ならびに時期を決定できる遺物は出土していない。また遺構の形状も特異で、遺構の性格を示唆する痕跡は認められなかった。

ただし、これらの遺構は地山である凝灰岩質泥岩を掘り込み、下層の砂質層が露呈すると掘り込みを停止させている点を見れば、掘削の対象となる地質を選定しているように見える。このような状況を過大評価すると粘土採掘坑に代表されるような採掘遺構としての性格を考えておきたい。

(荒)

第3項 まとめ

K地点は川内迫B遺跡群で調査された調査地点の中では、C地点の次にまとまった内容の遺構が検出、調査された地点である。調査では木炭窯跡、竪穴住居跡、土坑、不明遺構の調査が行われた。当調査区で調査された遺構群の立地する場所は大きく2箇所に分けられる。ひとつは調査地点の西端部に単独で構築された1号木炭窯跡が位置する地点である。1号木炭窯跡の周囲には他の遺構は確認されず、非常に孤立した状況で構築された木炭窯跡であると言える。第2の地点は住居跡、土坑、不明遺構が所在する場所である。遺構の種類や数を見れば、この地点がK地点における遺構分布の中心であるように見える。

1号木炭窯跡は焼成室・焚口・作業場で構成される、典型的な形状を保持した木炭窯跡である。木炭窯跡の構築、操業年代を示す遺物の出土は無かったことから、遺構時期を決定することはできない状況にあるが、敢えて、遺構の規模や形状から遺構時期を推定すると、1号木炭窯跡の焼成室の規模は、奥行3.5m×最大幅1.7mを計測し、金沢製鉄遺跡群木炭窯跡変遷のⅡ～Ⅲ期に位置付けられる計測値と近似する。金沢地区製鉄遺跡群木炭窯跡変遷Ⅱ～Ⅲ期は8世紀代とされており、当木炭窯跡も相前後する時期の所産であると考えておきたい。またK地点の近辺では、製鉄炉の存在は知られていない。したがって、単独で操業された木炭窯で焼成された木炭の供給先は不明である。今後、本遺跡群全体の中で木炭窯と製鉄炉の関係について検討する必要がある。

W80 S 236～W40 S 216 の範囲には竪穴住居跡 2 軒、不明遺構、土坑が築かれている。

調査された竪穴住居跡は 2 軒が隣接して築かれており、住居の立地については非常に強い共通点がうかがえる。1・2 号の 2 軒の竪穴住居跡は標高 30m 付近の丘陵斜面に築かれており、2 軒が東西に並列するように築かれている。住居跡が築かれた斜面は、丘陵全体の中で比較的斜面の傾斜が緩やかになった地点で、当調査地点で確認された遺構では最も高所に位置する。

1 号竪穴住居跡の平面形は胴張り隅丸方形で東にカマドを有する。住居北壁には 3 基の壁柱穴がある。2 号竪穴住居跡は 1 号竪穴住居跡の東側 3 m に近接する方形プランの住居跡である。残存する西、北、東壁ではカマドは確認されないが、壁周溝が巡る。両住居でも柱穴は見つかっていない。

1 号竪穴住居の床面からは須恵器と土師器が出土している。出土遺物の多くはカマド付近に散在した状況で出土し、土師器甕と須恵器長頸瓶がその主な内訳である。年代的には出土した須恵器長頸瓶の頸部にリング状の突帯が巡ることから、9 世紀第 2 四半期から第 3 四半期にかけてのものと思われる、住居が機能していた年代は 9 世紀中頃のものであることはほぼ確定的である。2 号竪穴住居跡からは遺構にともなう遺物は出土しなかったことから、年代的位置付けは困難であり、隣接する 1 号竪穴住居跡とは住居構造にも相違点が見られ、一概に両住居跡に年代的な関連性をもたせることはできない。この 2 軒の住居跡の関係については詳細な検討が必要であると考えている。

以上、木炭窯跡と住居跡について概観したが、木炭窯跡は 8 世紀代、住居跡は 9 世紀中頃の年代が与えられ、本地点における遺構の初現は 8 世紀代の木炭窯で、やや時期をおいた 9 世紀中頃を中心とする時期に住居が築かれたと考えられる。これらの遺構以外には年代決定ができない 2 号竪穴住居跡や 8 号土坑なども存在しているが、9 世紀から大きくかけ離れた年代は考え難く、概ね 9 世紀代に営まれたものと推察しておきたい。

さて、当調査地点で最も特徴的な遺構として不明遺構として記載した遺構群がある。これらの遺構群は 2 つのグループに分けられているが、その特徴は類似する。いずれも丘陵斜面を掘り込み、最終的にはトンネル状の掘り込みを形成している。この掘り込みは砂質層に到達すると掘り込みを停止させ、丘陵内部では互いが連結するという特徴を有する。

このような遺構の存在は管見する限りでは知ることができず、遺構の性格や目的については不明と言わざるを得ない。これらの遺構については最終的に粘土採掘坑のような粘土素材を採集した痕跡であると考えているが、決定的な根拠は全くない。一方、相馬開発関連武井地区製鉄遺跡群や原町火力発電所関連金沢地区製鉄遺跡群の調査において粘土採掘坑と位置付けられている遺構は、いずれも連結した円形土坑状の形態を持ち、本遺跡群のような形態は持っていない。このような形態的な相違点も注意したうえで、今後の調査例や、類似遺構について改めて検討が必要であることを記して、まとめとする。

(荒)

第7節 川内迫B遺跡群L地点

第1項 L地点の立地(図 121・122)

L地点は、遺跡群が立地する丘陵の西端、D24~30グリッド付近に位置する。L地点周辺の地形は、西側から入り込む大規模な開析谷によって北側を画され、また南側も小規模な谷が入り込んでおり、両者の間には標高30mほどの東西に細長い尾根が発達している。L地点は、この尾根の南向き斜面に立地する。当地区の東約100mの地点にJ地点、南西110mの地点にK地点、大規模な開析谷を隔てた北側にC地点が位置している。

試掘調査の段階では、斜面の等高線と平行にトレンチを設定し、このうち 548・549T で遺構が検出されたため、両トレンチを遺構の範囲にしたがって拡張するかたちで本調査を行った。

確認された遺構は、木炭窯跡1基、土坑1基である。

(藤木)

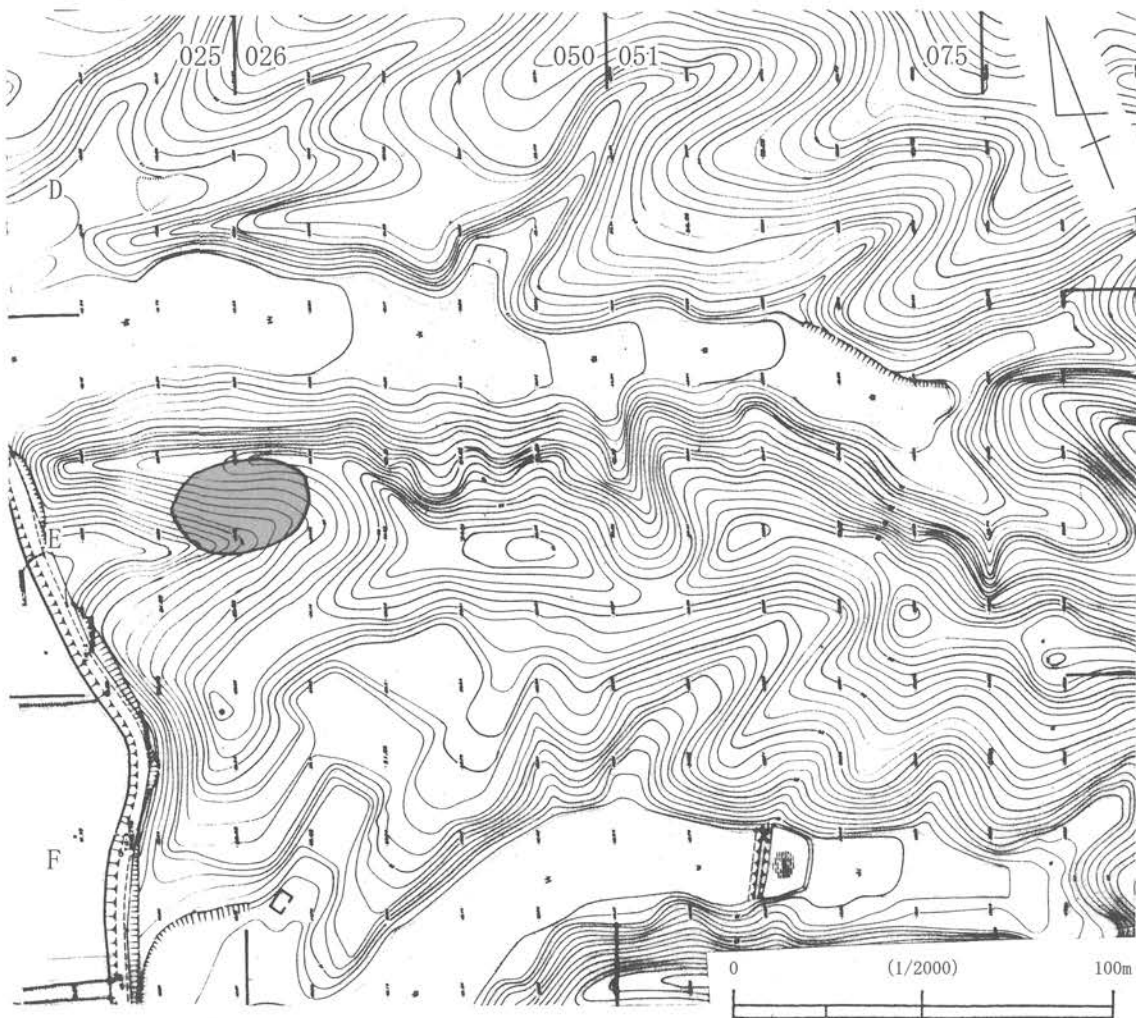


図121 L地点位置図

第2項 検出された遺構と遺物

1号木炭窯跡

遺 構 (図 123・124 : 図版 84~86)

1号木炭窯跡は、EM-28・29、EN-27・28、E0-27・28 グリッドに位置する。遺構は、西へ向かって張り出した尾根の南向き斜面、標高 21~24m に立地する。尾根斜面は、すぐ東側で谷頭を形成しており、窯跡はこの谷頭の下方向へ向かって主軸をとっているため、等高線に対してはやや斜行する配置となる。本遺構の東側 10m の位置に 1号土坑が位置している。

遺構検出段階では、焼成室および作業場の上層部に堆積した自然流入土のプランを検出し、焼成室の天井は崩落していることが確認された。また、燃焼室の天井は奥壁近くで一部が崩落せずに遺存し、その部分で煙道を確認している。

このような検出プランに従って遺構中軸線を推定し、斜面下方から向かって左側の覆土を掘り下げ、土層断面の観察を行った。

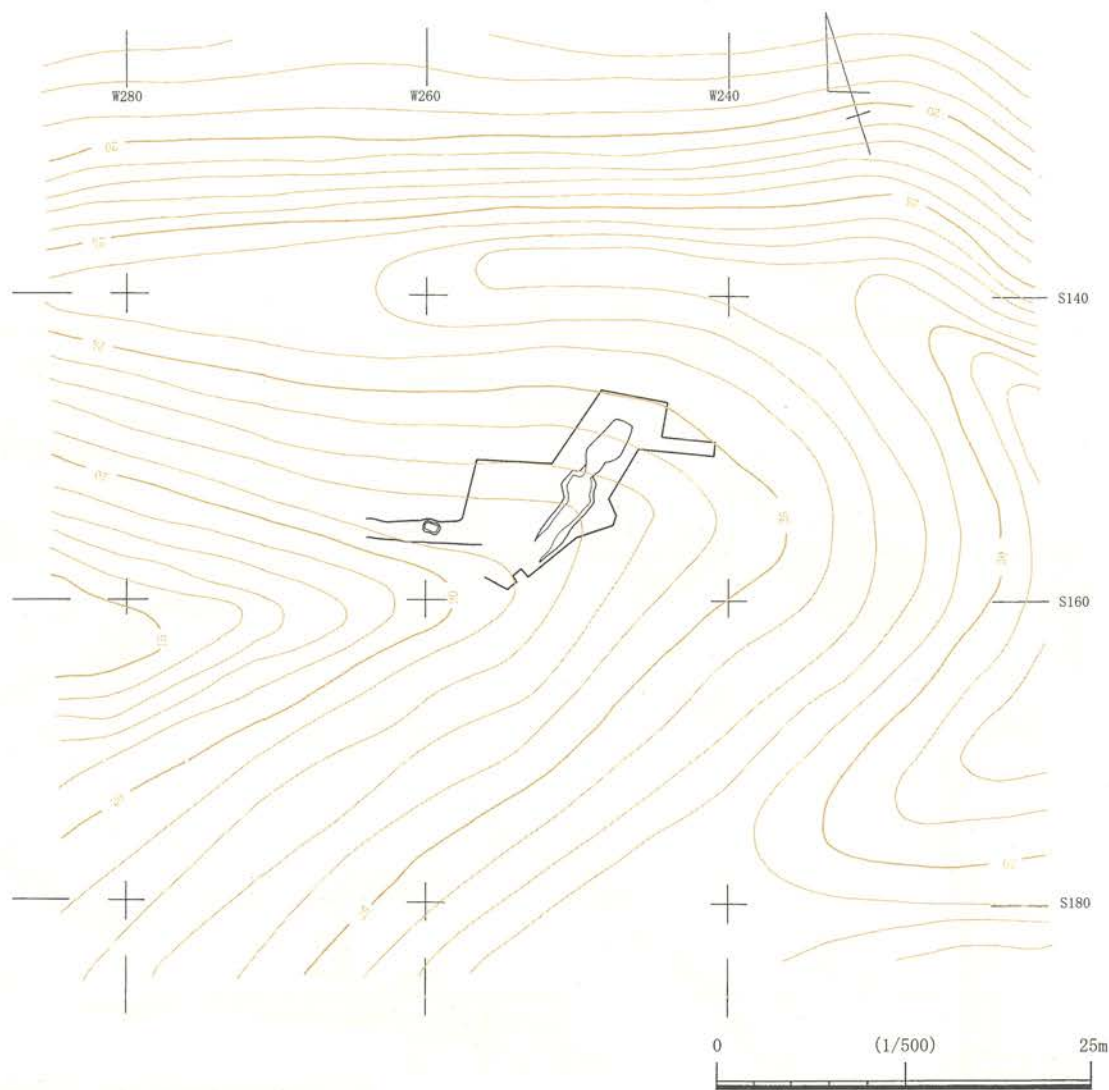


図122 L地点遺構配置図

覆土は1～20層に分層できた(A-A'セクション)。1～16層は自然流入土・地山崩落土・天井崩落土であり、17層以下が窯の操業に伴う堆積層である。1～3層は暗褐色土または黒褐色土で、斜面上方から作業場内に流入した自然流入土である。

また暗褐色土である4層は、焼成室の天井が崩落した窪みに堆積した自然流入土である。

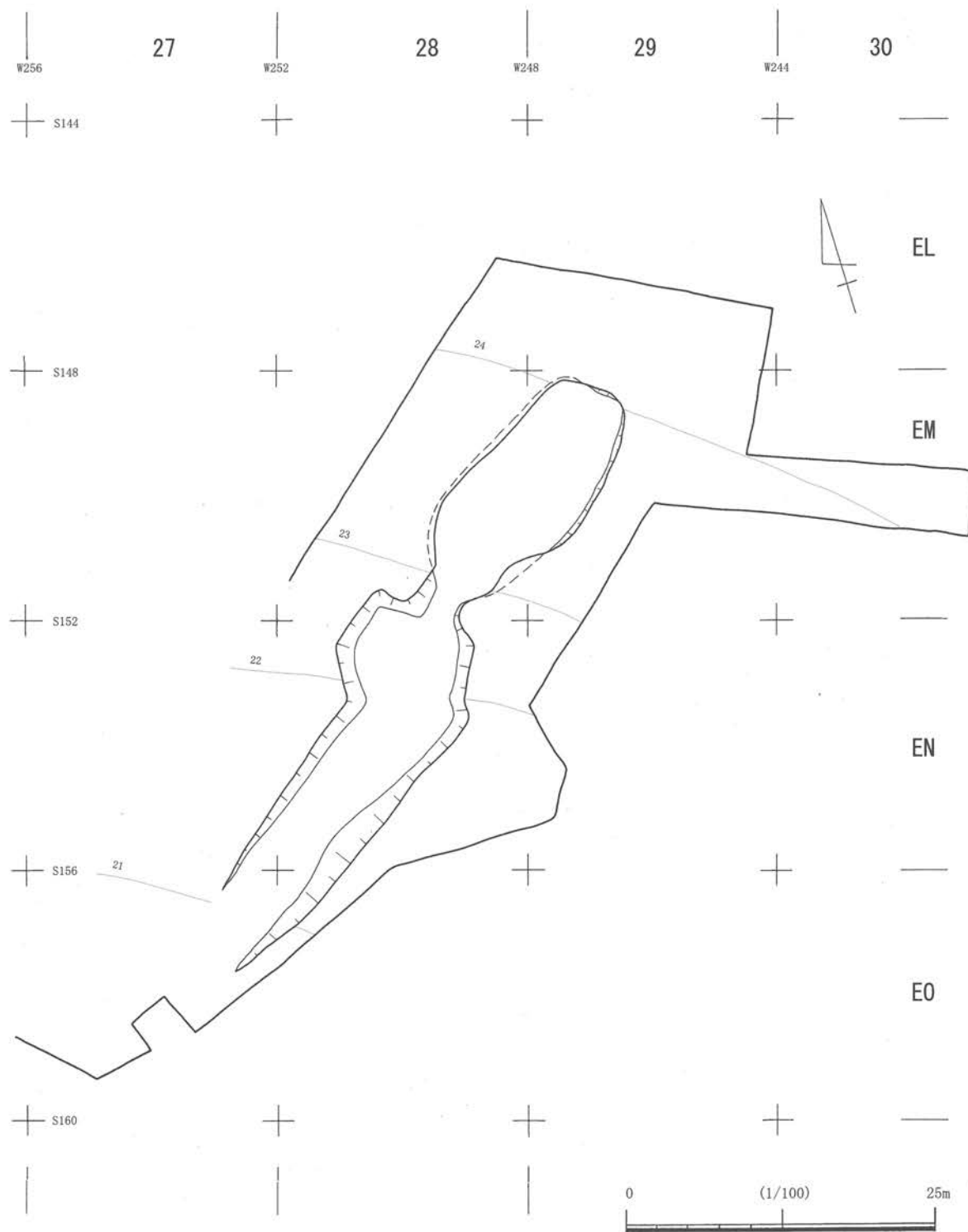


図123 1号木炭窯跡位置図

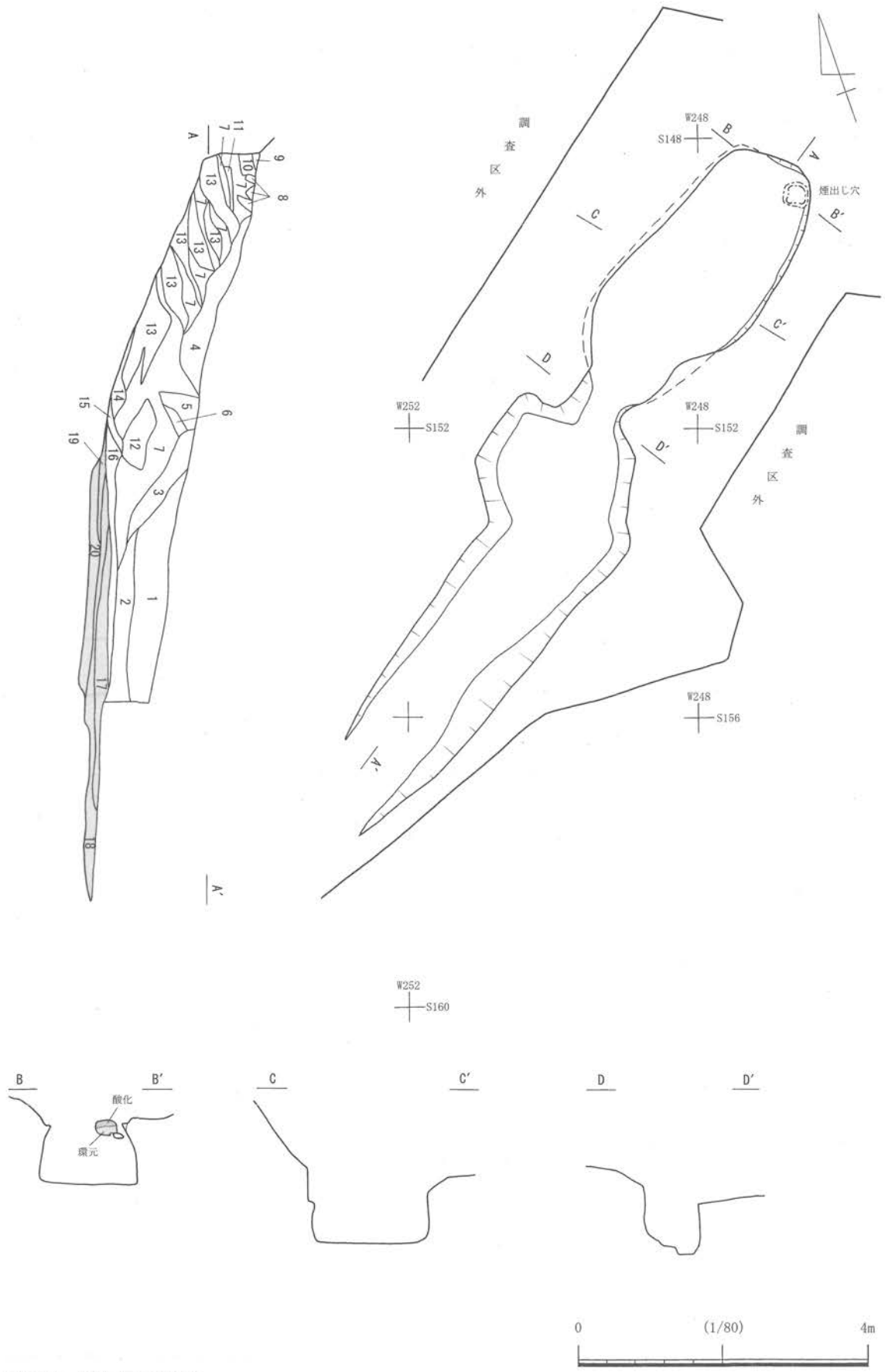


图124 1号木炭窯跡

焼成室内の堆積土の主体は、焼土粒を少量含む暗黄褐色土である7層と、焼土と黄褐色土の混合土の13層であり、両者が交互に堆積している。これらは焼成室天井

1号木炭窯跡	
1 暗茶褐色土	11 灰褐色土
2 黒褐色土	12 赤色土黄褐色粘質土混合土
3 暗褐色土	13 赤色土黄褐色土混合土
4 暗褐色土 木炭粒少含	14 白灰色土赤色土混合土
5 明黄褐色粘質土	15 赤色土灰色粘質土混合土
6 暗褐色土黄褐色粘質土混合土	16 黄褐色土灰色土混合土
7 暗黄褐色土 赤色焼土粒少含	17 黒色土黄白色粘質土粒混合土 木炭粒多含
8 暗赤色土(煙道部分)	18 黒褐色土 木炭粒多含
9 黄白色粘質土 一部赤色焼土化	19 黒色土 木炭粒多含
10 灰赤色土	20 黒色土 木炭粒多含 白色粘質土粒少含
※9~15: 天井崩落土 17~20: 操業面	

に由来するものと考えられる。土層の堆積状況から、焚口近くから崩落がはじまり、以後焼成室奥壁へ向かって順次崩落が進んだ状況がうかがえる。8層は被熱し酸化した地山で、焼成室奥壁近くの天井に設けられた煙道部の崩壊に起因すると考えられる。9層は黄白色粘質土、下層の10層は灰赤色土で、それぞれ奥壁に近い天井の酸化部分と酸化の及んでいない部分である。焚口近くに堆積した12層は焼土と黄褐色土の混合土で、焚口部の天井が崩落したものである。

焼成室から作業場には、白灰色土と焼土の混合土である14層、焼土と灰色粘質土の混合土である15層、黄褐色土と灰色土の混合土が、斜面上方から下方へ流出した状況で堆積している。作業場に堆積した17~20層は、木炭粒を多く含む黒色土ないし黒褐色土で、17層を最終操業面とする窯の操業に伴う掻き出し等による堆積層と推定される。土層断面の観察からは、操業回数を捉えることは出来なかったが、複数回の操業が推定される。

窯は、焼成室・焚口・作業場で構成され、焼成室奥壁から作業場末端までの全長は約11mである。焼成室の平面形は、向かって右側壁の中央付近が膨らむが、左側壁は比較的直線的で、それぞれが緩やかにカーブして焚口へ到達する。奥壁は直線的で隅丸状である。横断面形は、比較的残りのよいB-B'セクションでは平坦な底面から側壁がやや内傾して立ちあがり、側壁上半から天井にかけては丸みを帯びた蒲鉾形である。焼成室の規模は、奥壁から焚口までの長さが4.1m、幅は奥壁近くで1.2m、最大幅1.9m、焚口近くで1.5mを測る。底面の傾斜角度は21°前後である。

煙道は、焼成室の右上隅に設けられており、径は35cmを測る。焚口は、丸みを帯びた底面から周壁が直立するU字形である。作業場平面形は、焚口近くでは左側の肩が張りコの字状に折れ、右側は肩の張りが弱い。斜面下位では幅1.2m×深さ0.15mの幅広で浅い溝状となる。全長は6.5m、幅は最大で4.5mを測る。底面はほぼ水平である。

(藤木)

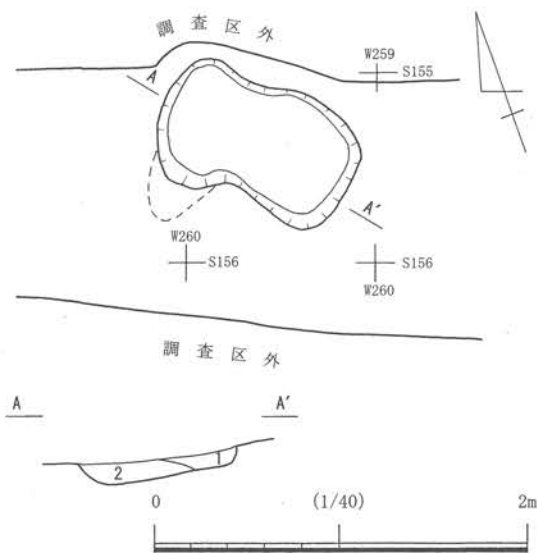


図125 1号土坑

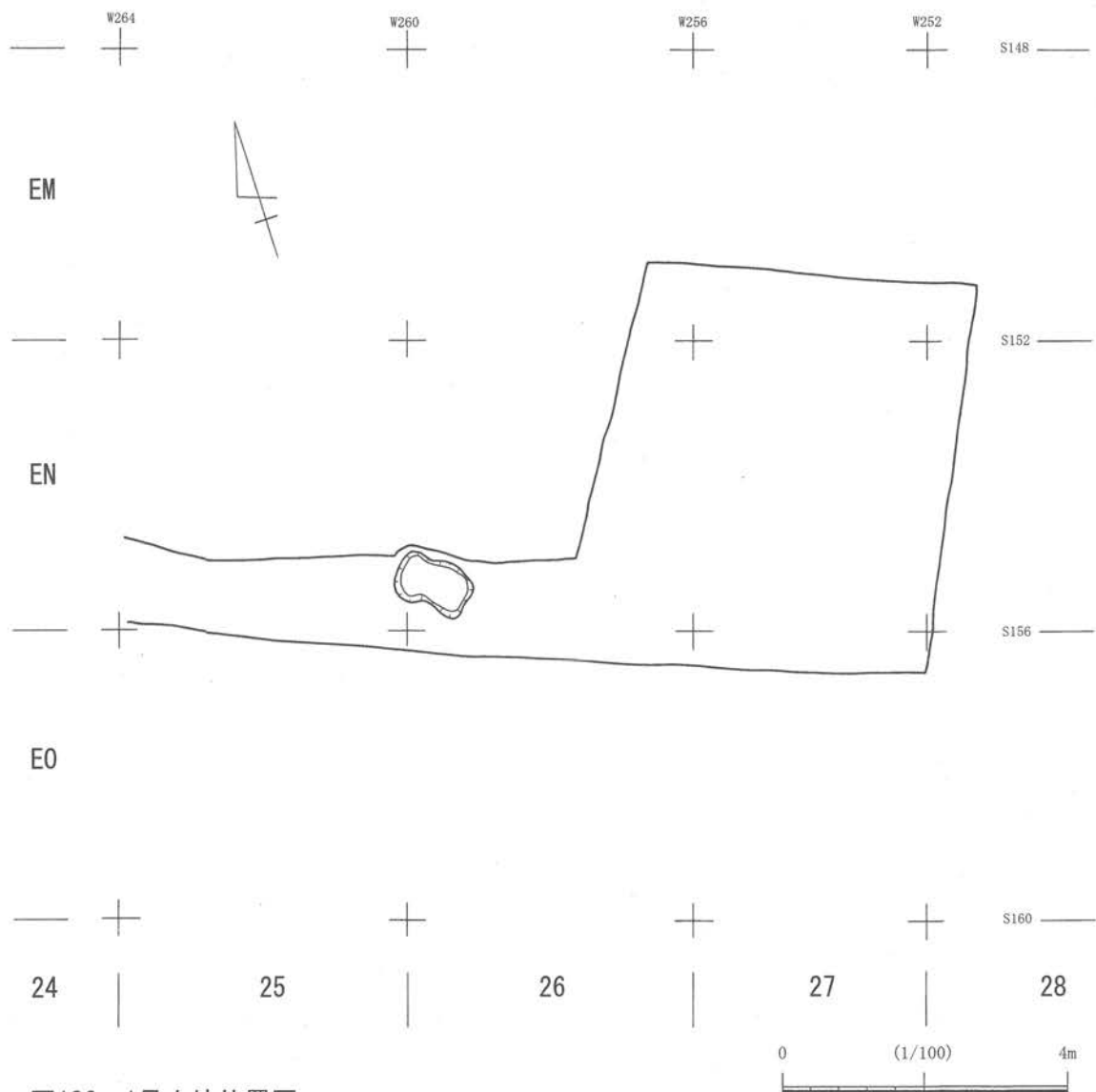


図126 1号土坑位置図

1号土坑 (図 125・126 : 図版 87)

1号土坑は、EN-26グリッドに位置する。長辺がややくびれる隅丸長方形で、長軸1.07m×短軸0.6mである。深さは10cmで浅い掘り込みである。覆土には多量の焼土粒を含む。

(藤木)

1号土坑	
1	暗褐色土 焼土粒多含
2	黒褐色土 木炭粒・焼土粒多含

第3項 まとめ

当地区で確認された遺構は木炭窯跡1基、土坑1基のみであり、試掘段階において当地区周辺では他に遺構は検出されていないことから、1号木炭窯跡は単独で操業された窯であったと考えられる。遺物の出土はなく、窯跡の操業時期は不明であるが、他の地点で操業されていた製鉄炉に燃料を供給した窯であったと推定される。

(藤木)

第8節 川内迫B遺跡群M地点

第1項 M地点の立地 (図127・130・131)

M地点が立地する丘陵は、西から入り込む谷によって北側・南側が開析され、両谷の間には東西に長い馬の背状の細い尾根が発達している。

試掘段階において、この尾根の等高線に平行する形でトレンチを設定し、調査を行った結果、尾根の先端近くに位置する592Tで遺構が検出され、またこの592Tの東約120mに位置する593Tでも遺物の出土が見られたことから、両トレンチを拡張するように本調査を実施することとした。以下、前者を1区、後者を2区とする。1区では土坑1基が確認された。2区では、少量の遺物が確認されたのみで、遺構は確認されなかった。

(藤木)

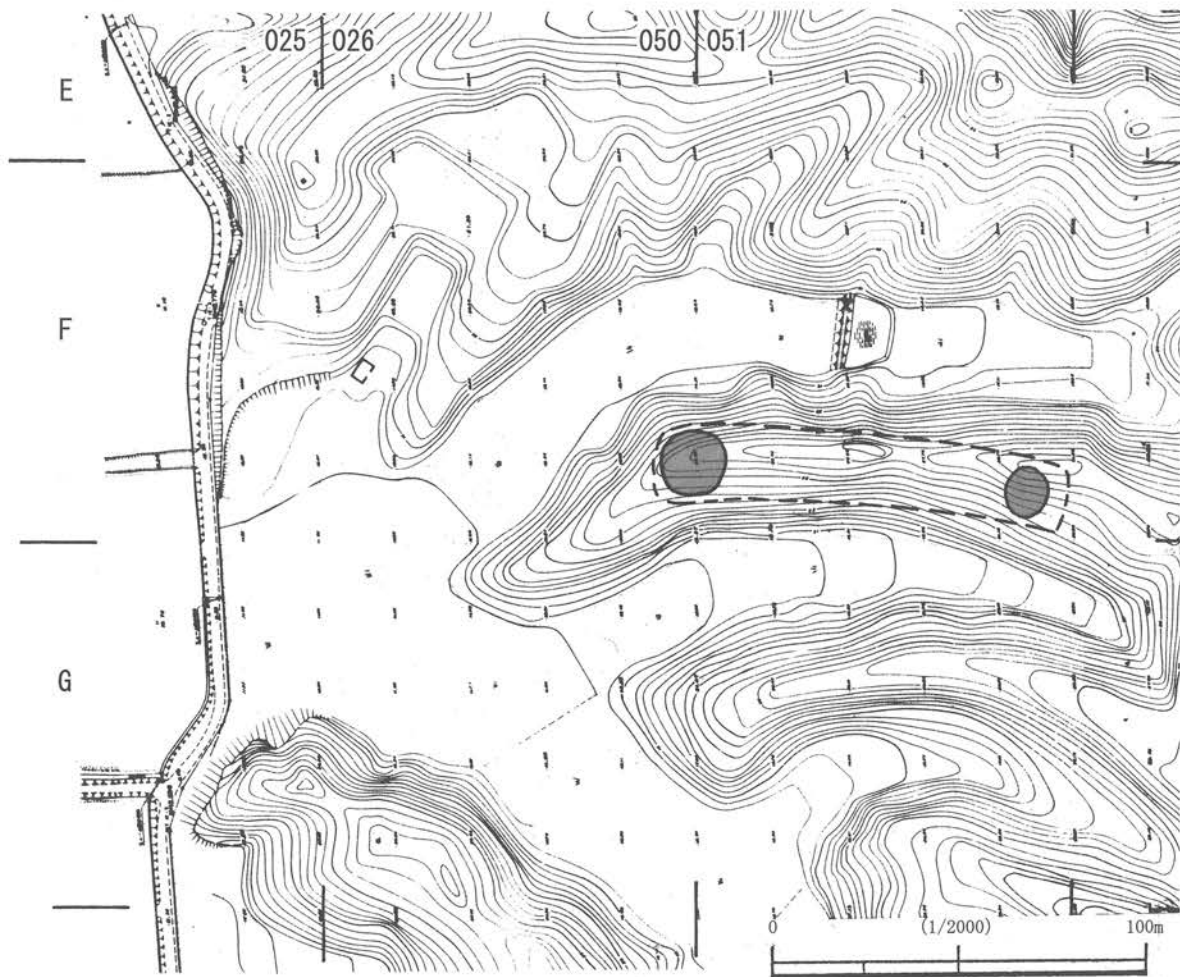


図127 M地点位置図

第2項 検出された遺構と遺物

1号土坑 (図128・129)

1区で確認された土坑で、FW-50 グリッドに位置する。平面形は、長軸0.96m×短軸0.64mの小判形である。深さは0.12mを測る。底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ちあがる。

覆土は厚さ8~12cmで、2層に分層される。壁際に三角堆積した2層は木炭粒を含む暗黄褐色土で、初期に堆積した地山と同質の流入土と考えられる。1層は木炭粒、焼土粒を含む黒褐色土である。いずれも自然堆積によるものと考えられる。覆土から遺物の出土はないことから、遺構の年代は不明である。

(藤木)

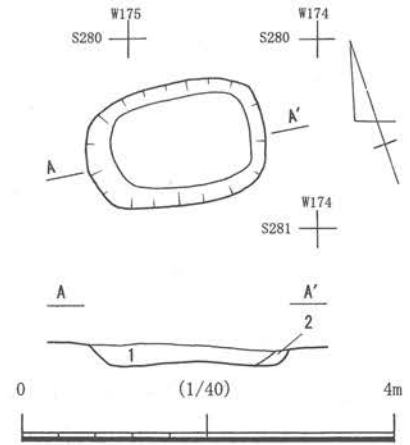


図128 1号土坑

- | | |
|------|---------------|
| 1号土坑 | |
| 1 | 黒褐色土 木炭粒・焼土粒含 |
| 2 | 暗黄褐色土 木炭粒含 |

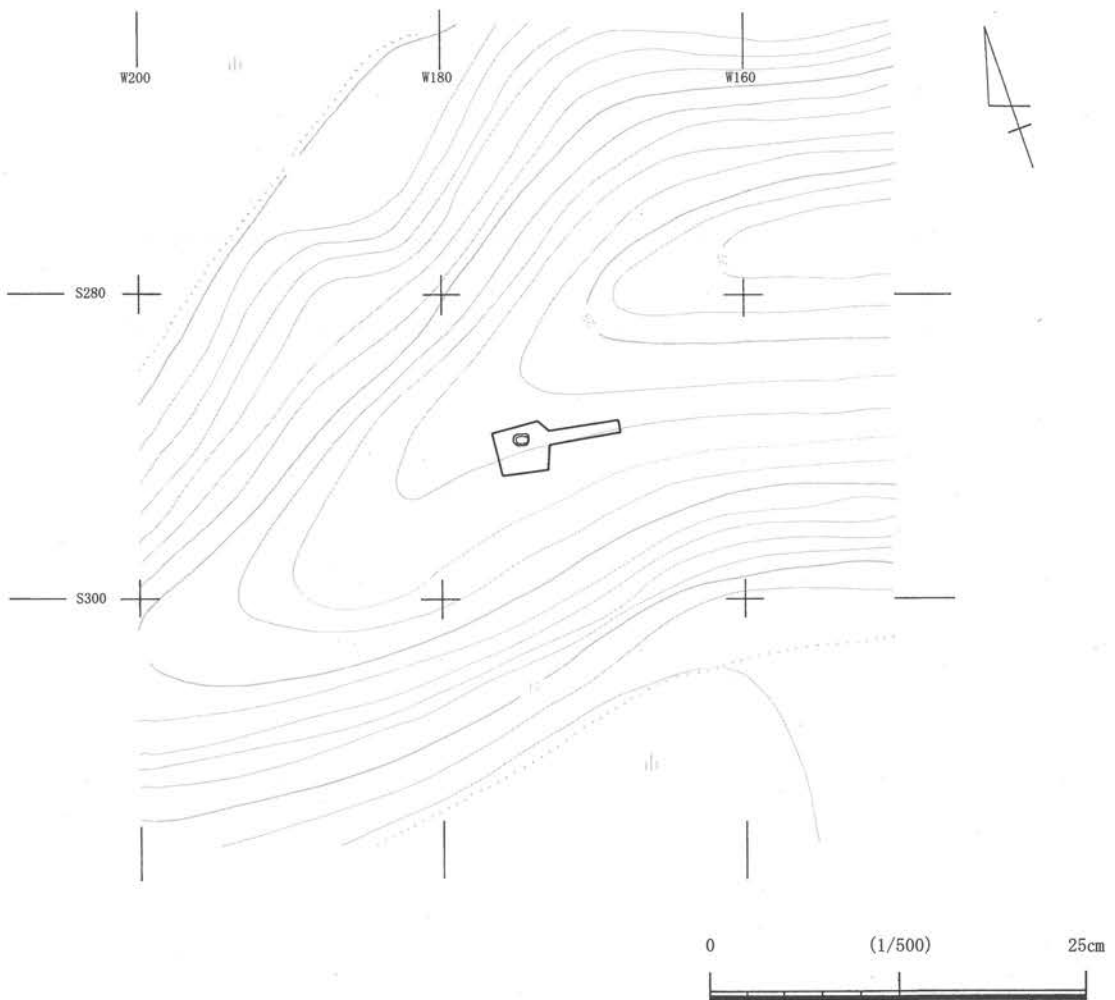


図129 1区位置図

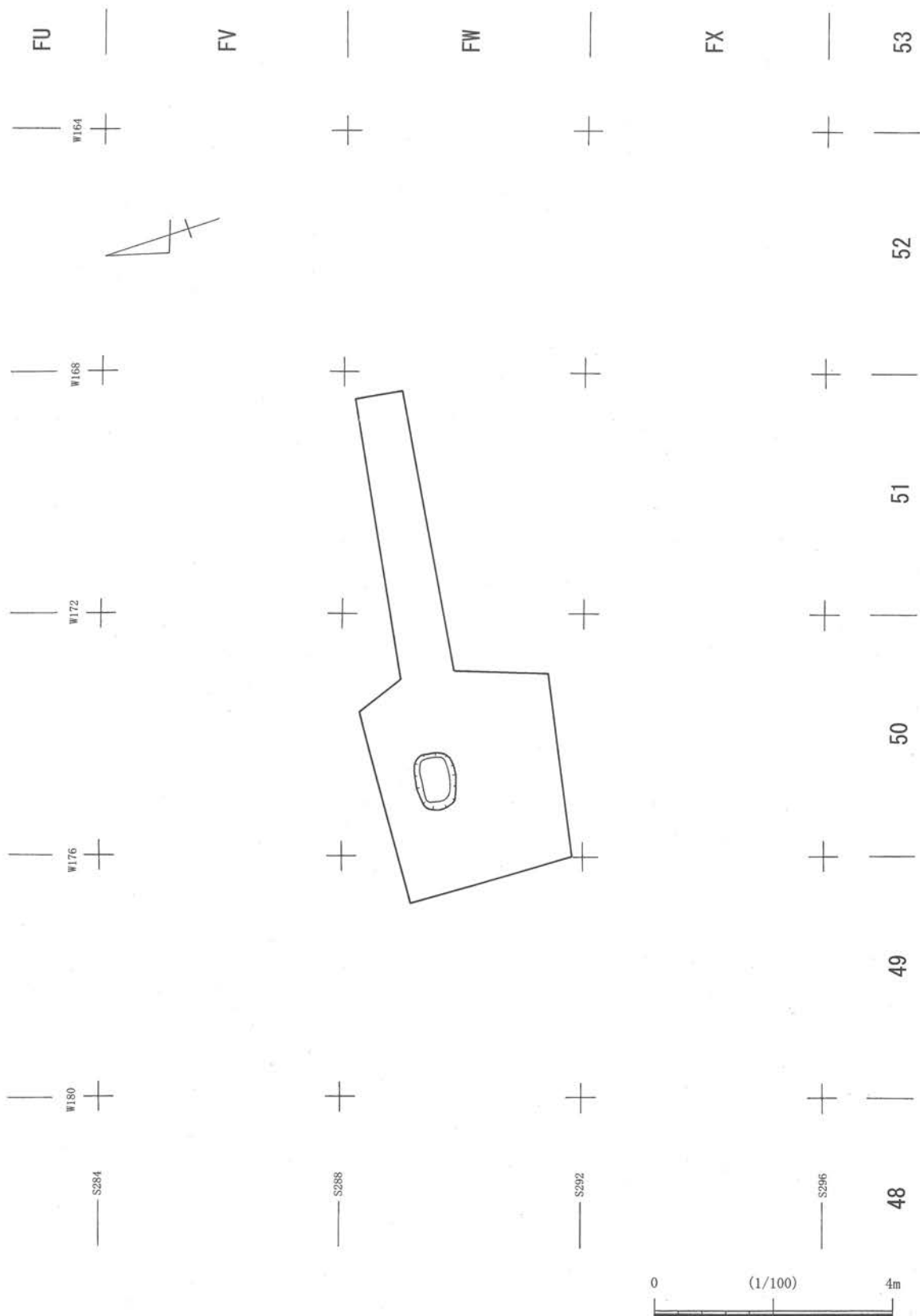


图130 1号土坑位置图

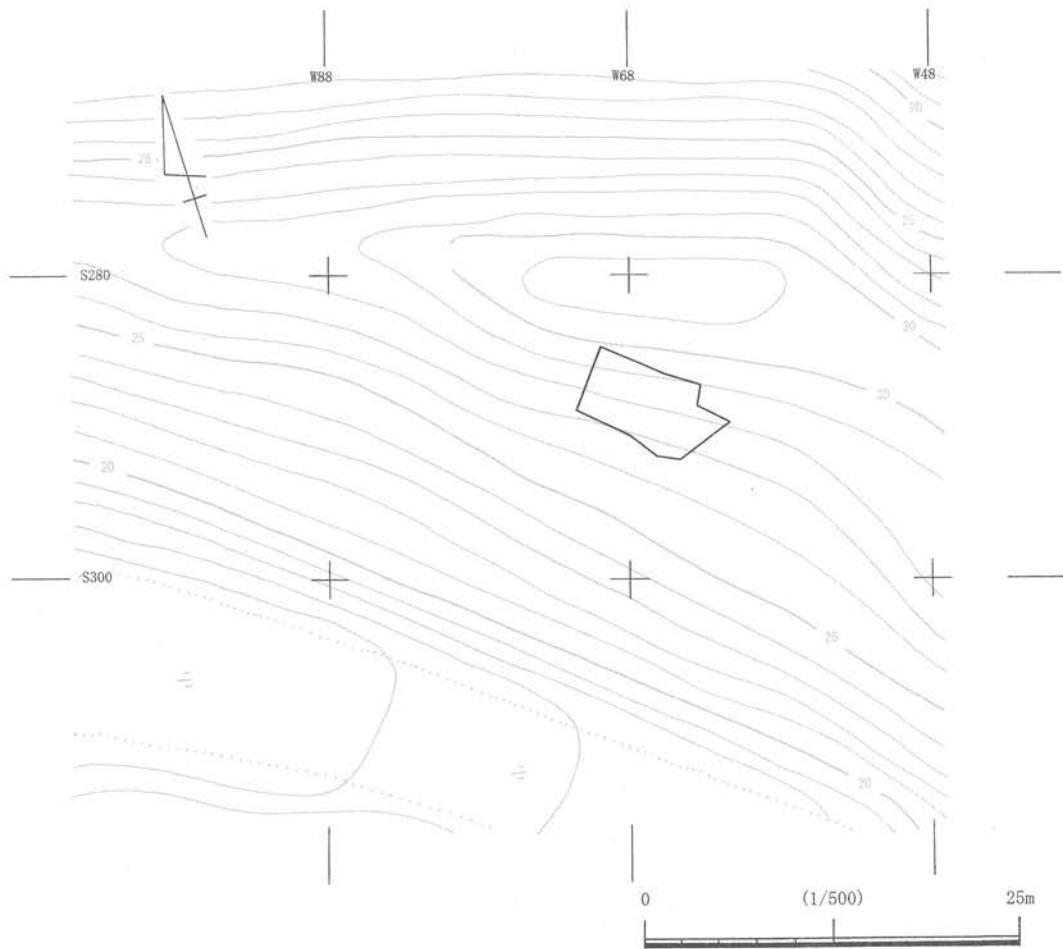


図131 2区位置図

第3項 まとめ

当地点で確認された遺構は土坑1基のみである。土坑からの出土遺物はなく、また、覆土に焼土・炭化物が混入する状況が認められたものの、焼壁などのように土坑の機能を類推しうるような知見は得られなかった。したがって、本土坑の所属時期や性格は不明である。

(藤木)

第9節 川内迫B遺跡群N地点

第1項 N地点の立地 (図132・133)

N地点が立地する地形は、北西方向から入り込み枝分かれする開析谷の間に、東西に長く発達した丘陵の斜面である。

試掘調査において、丘陵の頂部から斜面にかけてトレンチを設定したが、このうち619Tおよび634Tにおいて遺構が検出されたため、これらのトレンチを拡張するかたちで本調査を実施することとなった。以下、634Tが位置する部分に設定した調査区を1区、619Tが位置する部分に設定した調査区を2区とする。

2区は樹枝状に開析された丘陵の先端近くに位置しており、この部分は標高25~30m程度の高さで丘陵の頂部が比較的平坦な地形となる。2区の南東約70mに位置する1区は、2区と同じ尾根の南向き斜面、標高28m付近に立地する。

遺構は、1区で土坑2基、2区で土坑1基を確認し調査をおこなった。

(藤木)

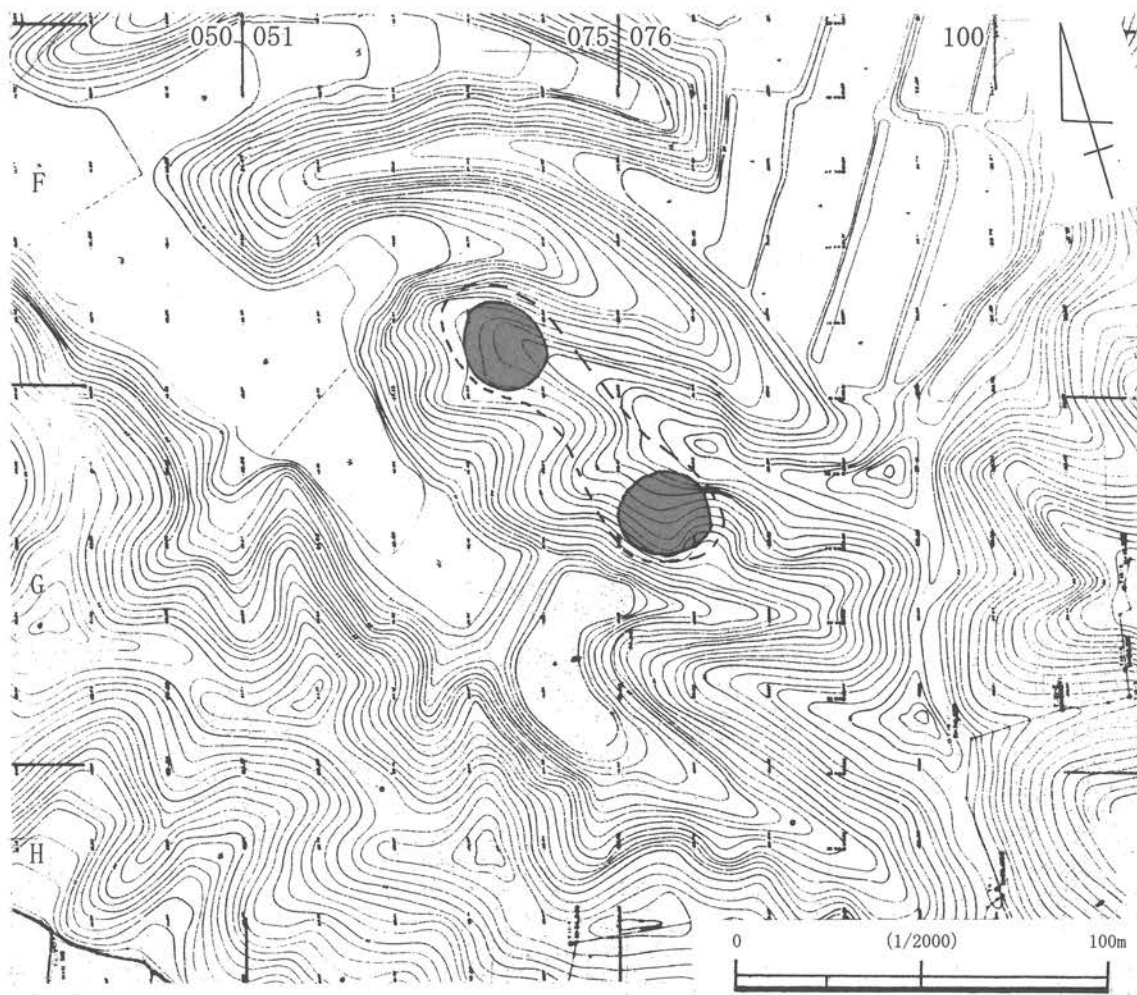


図132 N地点位置図

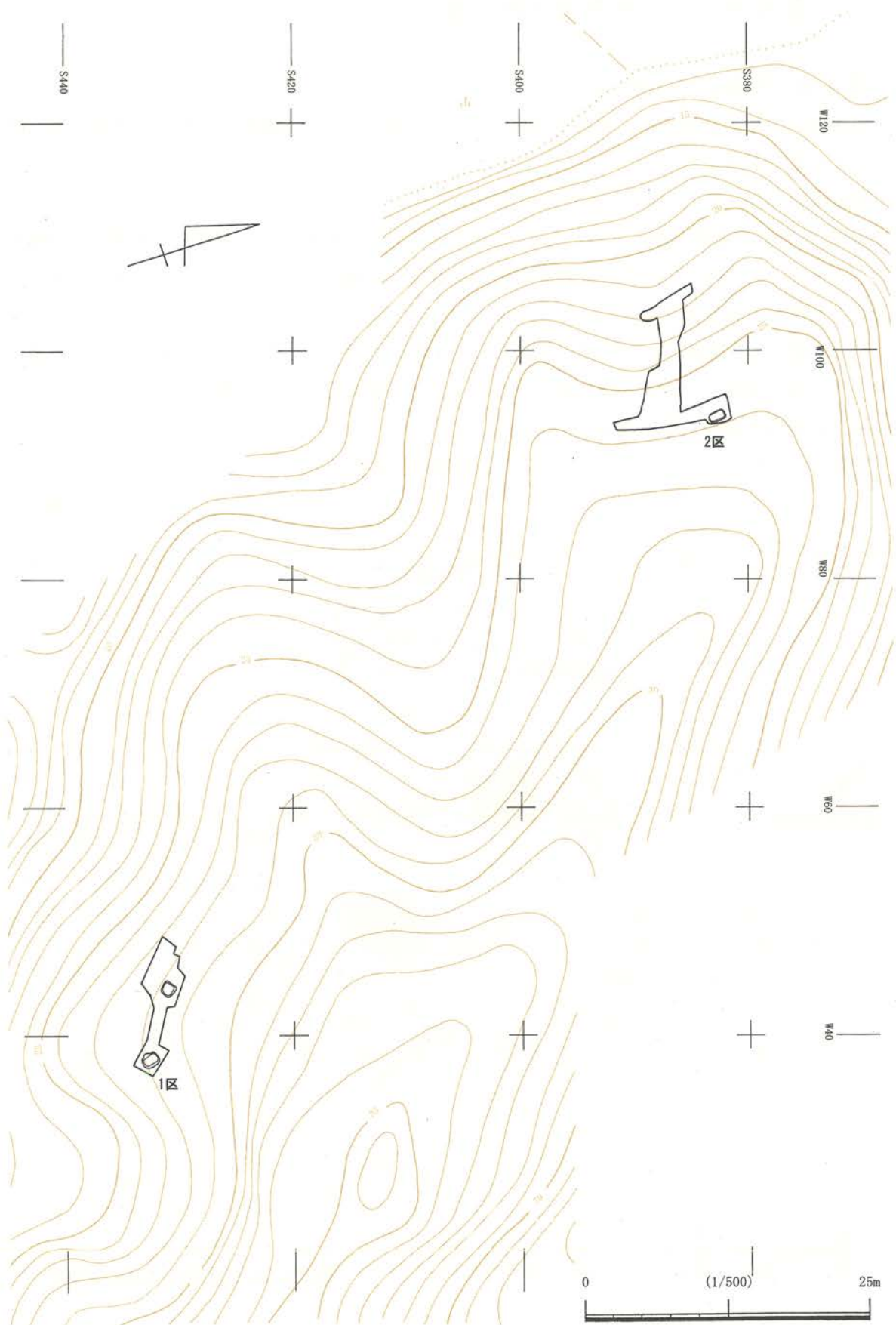


图133 調査区位置図

第2項 検出された遺構と遺物

土 坑 (図134~136)

1号土坑 (図134)

1区で確認された土坑である。HI-81グリッドに位置する。平面形は、隅丸長方形を基調としていると思われるが、西壁や南壁はやや外へ膨らむ。規模は、長軸1.6m×短軸1.25mを測る。深さは44mである。等高線に対し直行する方向に主軸をもつ。

覆土は厚さ29~44cmで、3層に分層された。南壁際に三角堆積した暗黄褐色土である3層は、地山と同質の初期流入土と考えられるが、焼土粒・木炭粒を多量に含んでいる。2層も同様に壁際に堆積した暗黄褐色土であり、土坑壁が崩れた初期の堆積土と考えられる。1層は焼土粒・木炭粒を含む暗黒褐色土で、土坑のほとんどはこの1層によって埋没している。堆積の状況から、これらはいずれも自然堆積によるものと考えられる。

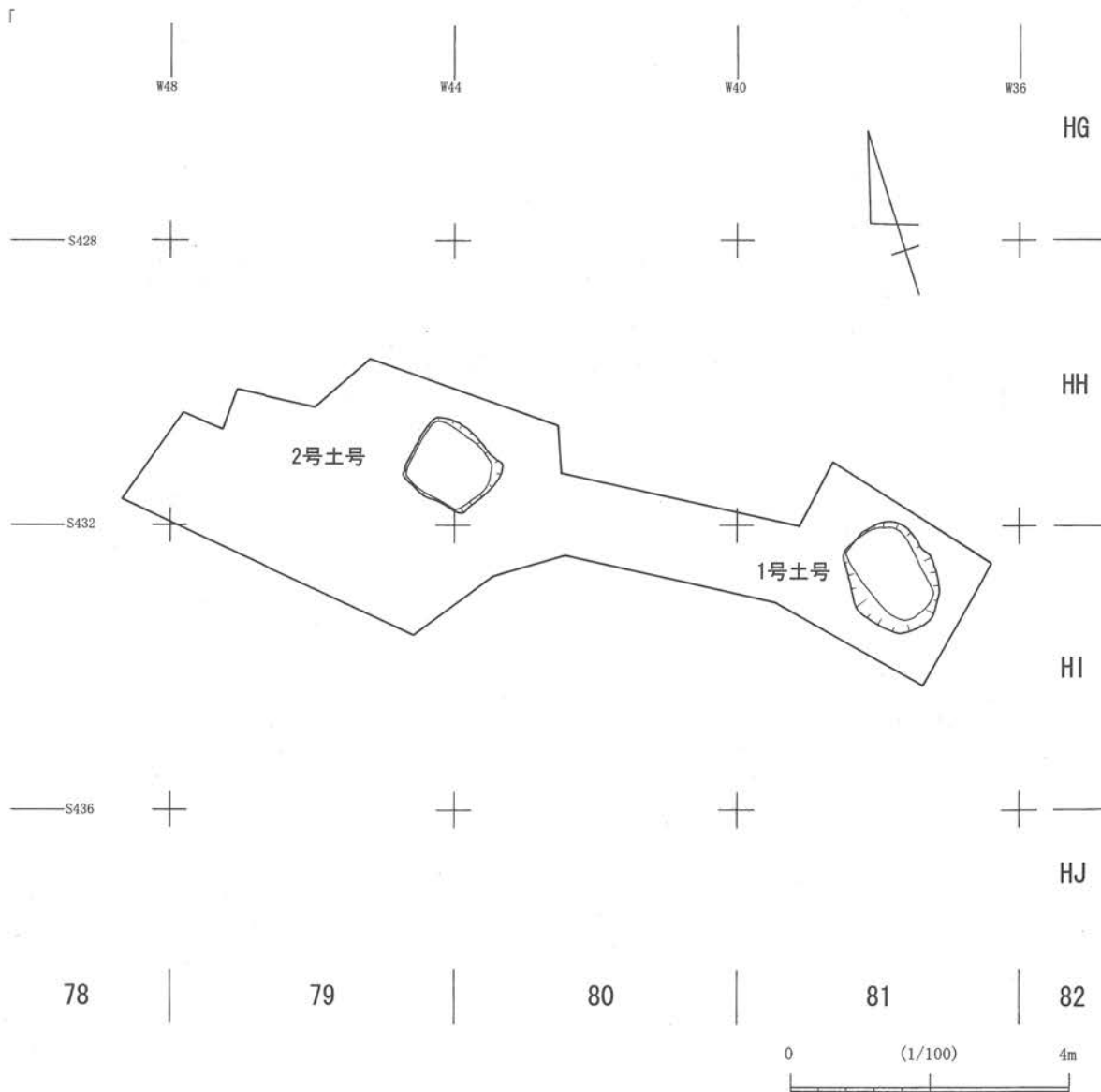


図134 1区遺構配置図

土 坑

土坑の掘り込みは、西壁・東壁・南壁が外傾するが、北壁はオーバーハングしている。底面は平坦である。北・西・南壁にかけては被熱により赤化している。底面と東壁には被熱は認められなかった。東壁については、覆土最下層に堆積した3層に多量の焼土が混入していることから、焼壁は崩落して失われたものと推定している。

本土坑からの出土遺物はなく、時期を推定する手掛かりは得られなかったが、焼壁がみられ、覆土に焼土、炭化物が多量に混入することから、木炭焼成土坑と考えられる。

(藤木)

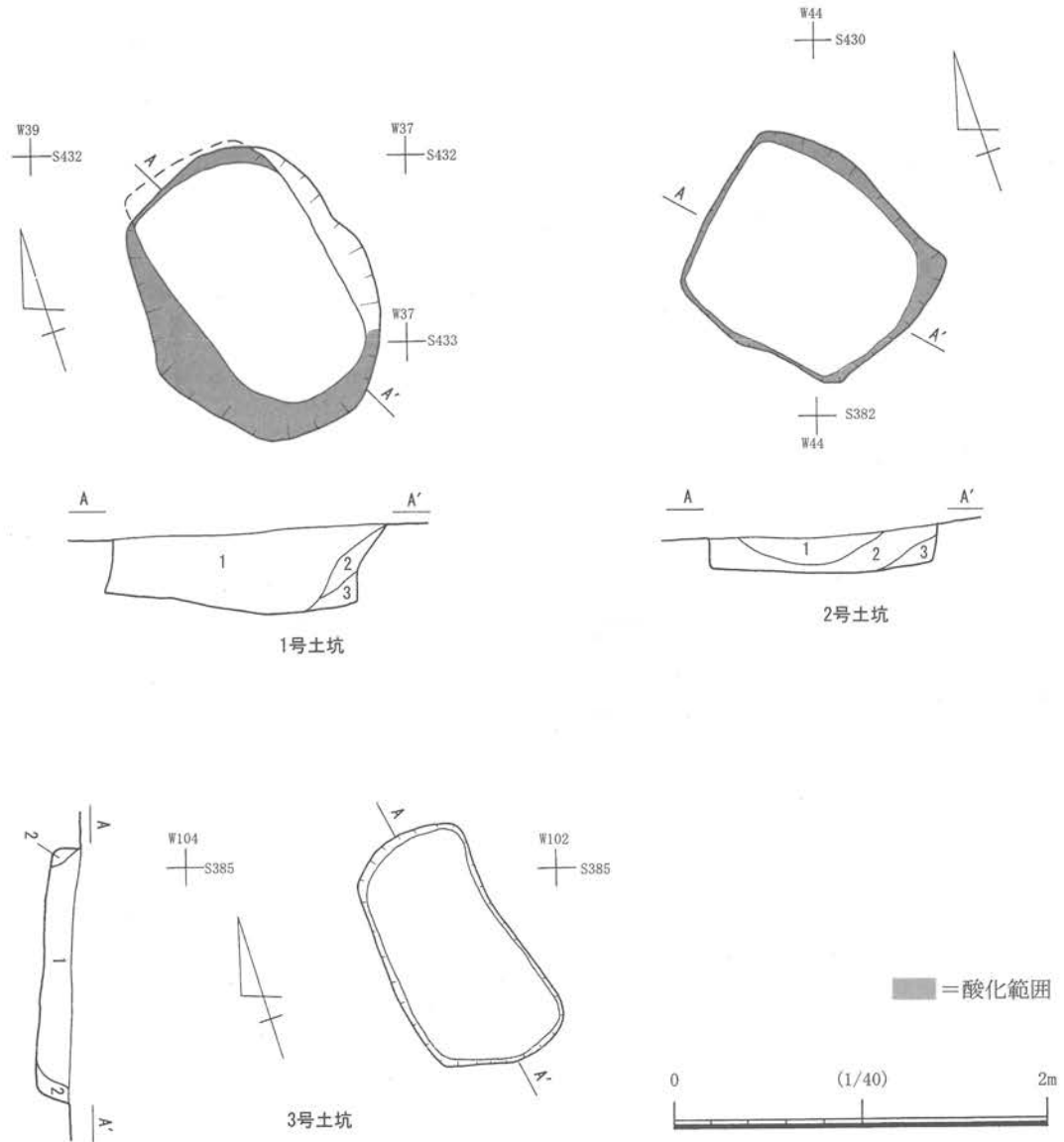


図135 1~3号土坑

1号土坑	2号土坑	3号土坑
1 暗黒褐色土 焼土粒・木炭粒含	1 暗褐色土	1 暗褐色土 焼土粒・木炭粒含
2 暗黄褐色土	2 暗黄褐色土	2 暗黄褐色土 焼土粒・木炭粒含
3 暗黄褐色土 焼土粒・木炭粒多含	3 暗黄色土 焼土粒多含	

2号土坑

本土坑は、1号土坑の西約6mの地点、HH-79・80グリッドに位置する。平面は長方形を呈し、長辺1.25m×短辺1.05mを測る。深さは0.18mである。

覆土は厚さ15~18cmで、3層に分層できた。壁際に三角堆積した3層は焼土粒を多量に含む暗黄色土であり、後述する焼壁が崩落し堆積したものと推定される。2層は暗黄褐色土、1層は暗褐色土である。覆土は壁際から流入したレンズ状の堆積を示していることから、自然堆積により埋没したものと考えられる。

土坑の掘り込みは、平坦な底面から壁が垂直に立ちあがる箱形である。壁は四壁ともに被熱し赤化しているが、底面には被熱は認められない。

本土坑は、焼壁がみられることから、近接する1号土坑と同様の木炭焼成土坑である可能性が高い。遺物は出土せず、遺構の時期を推定する手掛かりは得られなかったが、1号土坑と近接する時期の所産と思われる。(藤木)

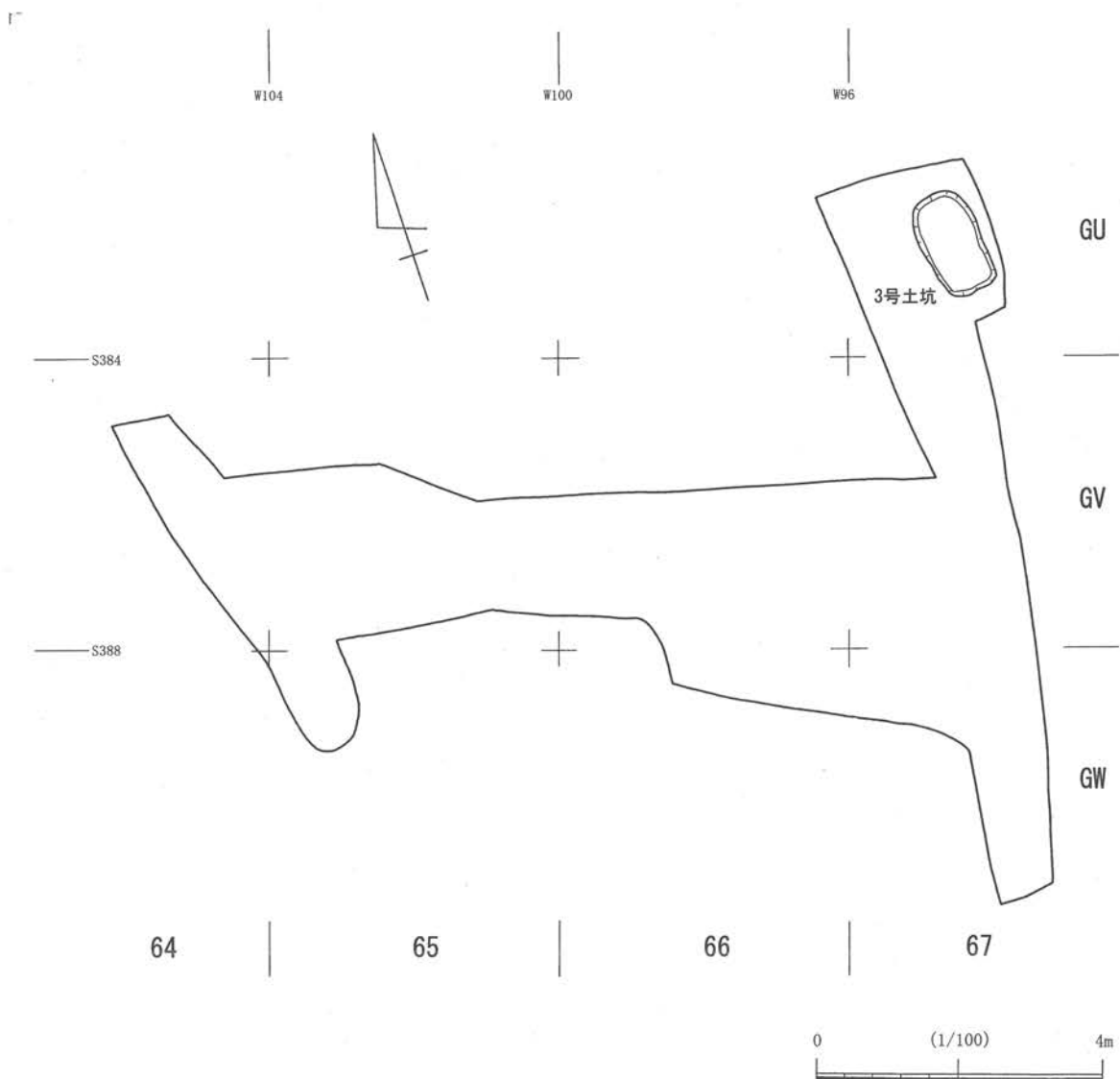


図136 2区遺構配置図

3号土坑

2区で確認された土坑で、GU-67グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形を基調とするものと推定されるが、短辺はやや外に膨らむ形状である。規模は長軸1.35m×短軸0.7mを測る。深さは0.2mである。

厚さ20cmの覆土は2層に分層される。壁際に三角堆積した2層は焼土粒、木炭粒を含む暗黄褐色土で、壁が崩落して堆積した初期の堆積土である。1層も焼土粒・木炭粒を含む。いずれも壁際から中央へ向かって堆積した自然堆積である。

掘り込みは底面が平坦で壁の立ちあがりは垂直に近い。焼壁は認められなかった。

本土坑から遺物の出土はなく、焼壁も認められないことから、時期や性格を特定することは困難である。ただし、覆土に焼土粒・木炭粒が含まれることから、1・2号土坑と同様の木炭焼成土坑である可能性があろう。(藤木)

第3項 まとめ

当地点で確認された遺構は土坑3基のみである。これらはいずれもいわゆる木炭焼成土坑であると推定される。調査区周辺では他に遺構は確認されていないことから、当地区周辺では木炭窯跡や製鉄炉などの大規模な操業は行われず、散発的な製炭が行われたものと考えられる。遺物は出土しておらず、こうした製炭が行われていた時期は不明である。

(藤木)

第10節 川内迫B遺跡群のまとめ

川内迫B遺跡群は試掘調査で、C～N地点の合計12箇所の調査地点に分けられ、その内C～E・G・J～N地点で発掘調査が行われた。調査の結果、当遺跡群では製鉄炉跡5基、木炭窯跡8基、竪穴住居跡9軒、木炭焼成土坑40基、不明遺構2基が確認された。出土遺物では土師器、須恵器を主として縄文土器、弥生土器などの土器類のほか羽口や獣脚、器物鋳型などの製鉄関連遺物や鉄製品、弥生時代の土器、石器が出土した。

この節では川内迫B遺跡群の調査に成果について概観し、まとめとする。

製鉄炉は5基が調査された。製鉄炉の分布はC地点3基、E地点1基、G地点1基である。これらの製鉄炉の分布は、C地点を中心とした遺跡群北側に集中する傾向にある。

製鉄炉多くは踏みフィゴを付属する長方形箱形炉で、丘陵枝谷の南向き斜面頂部からやや標高を下げた地点に築かれている。製鉄炉跡からは、炉自体の構築時期や操業時期、そして廃絶時期を示す資料の出土は無かったため、直接遺物を用いた年代決定はできない状況にあるが、近年の大規模な相馬開発関連事業「武井地区製鉄遺跡群」や原町火力発電所建設「金沢製鉄遺跡群」などの発掘調査成果によって、製鉄炉の立地や構造的な変遷が捉えられ、遺構の年代を推定することが可能な状況が整いつつある。ここでは近接する金沢製鉄遺跡群における検討を踏まえて、本遺跡群で調査された製鉄炉について考えてみたい。

まず、最も年代的な位置付けを可能とする要因として、炉内温度を管理、調整するための施設である踏みフィゴをあげることができる。金沢製鉄遺跡群では長方形箱形炉に踏みフィゴが導入される時期を8世紀第4四半期から9世紀第1四半期とされるIV期の大きな特徴とみる。この変遷に従えば、本遺跡群の製鉄炉の大部分は金沢製鉄遺跡群製鉄炉変遷のIV期以降の所産であると考えることができる。特にC地点1・2号製鉄炉跡は丘陵南向き斜面に踏みフィゴが付く長方形箱形炉2基が並列して築かれているが、2基の製鉄炉が並列して構築されるのは金沢製鉄遺跡群ではIV期の大きな特徴のひとつである。

一方、C地点3号製鉄炉跡、E地点1号製鉄炉跡、G地点1号製鉄炉跡は1基単独で構築された製鉄炉で、これらの製鉄炉跡のうちE地区、G地区の2基の製鉄炉にも踏みフィゴが導入されている点からIV期以降の所産であることは疑いない。ただし、単独で操業された製鉄炉はIV期から9世紀第2四半期から9世紀第3四半期のV期段階まで存在しているため、IV～V期の年代幅で考えざるを得ない。C地区3号製鉄炉跡は上位に位置する1・2号廃滓場下層から検出された円筒形竪形炉である。従って、相対的にC地区1・2号製鉄炉よりも古い時期の製鉄炉であることは層位的にも明らかとされている。金沢製鉄遺跡群では円筒形竪形炉は踏みフィゴ付の長方形箱形炉以前の製鉄炉形態でありIII期段階の8世紀中頃の年代観が与えられる。従って川内迫B遺跡群においては8世紀中頃の円筒形竪形炉の導入をもって製鉄活動が開始されたと考えられる。

金沢製鉄遺跡群では7世紀後半段階には既に長方形箱形炉（片側排滓）による製錬が開始され、8世紀第3四半期には踏みフィゴをもつ竪形炉が登場する。これらの踏みフィゴをもつ竪

形炉はこれまでの長方形箱形炉に踏みファイゴが付属される技術革新の要因となるが、製鉄炉の主流を占めることなくその姿を消してしまう。その後は踏みファイゴ付き長方形箱形炉が鉄生産の主流となり金沢製鉄遺跡群における鉄生産量のピークを迎えることとなる。

このような流れを見ると、本遺跡群における製鉄の初現は、これまで長方形箱形炉が主流であった8世紀前半までの製鉄活動に、新たな製鉄炉形態である踏みファイゴを持つ竪形炉が導入された時期、金沢製鉄遺跡群では急激な鉄生産量の増加を迎える直前のⅢ期からⅣ期にかけての過渡期段階に位置付けられる。つまり、金沢製鉄遺跡群以外の地区の製鉄遺跡では、8世紀中頃の竪形炉の導入とともに鉄生産が開始され、8世紀第4四半期以降に踏みファイゴを付属した長方形箱形炉による大規模な製鉄活動が営まれたと考えられよう。

木炭窯跡はC地点3基、G地点2基、J地点1基、K地点1基、L地点1基の合計8基が確認された。木炭窯跡は丘陵尾根の斜面地もしくは、小谷斜面地に位置するが、例外なく南をむいた場所に構築されていることから、木炭窯跡構築には南を向いた斜面地を好地としていたものと推察される。また、C地点以外では複数の木炭窯が近接して構築されることはなく、遺跡群が展開する丘陵地の広範囲に点在する分布傾向をもつ。

いずれの木炭窯も地下式登窯で焼成室、焚口、作業場で構成され、立地、構造、規模ともに大きく逸脱するものは認められず、非常に共通した特徴をもつ。

C地点では合計3基の製鉄炉に対して同数の木炭窯が構築されている。2号木炭窯跡の年代は9世紀後半の須恵器を伴う住居跡より古いことが確認されていることから、9世紀後半にはすでに操業を停止していたものと考えられる。3号木炭窯跡は作業場に廃棄された羽口の出土により、製鉄炉操業以降の9世紀後半に位置付けられる。従って、C地点1・2号製鉄炉には2号木炭窯跡によって木炭燃料が供給されたと考えられる。C地点では隣接する場所に1号木炭窯が構築されているが、この木炭窯跡の年代と製鉄炉の関係については不明である。

一方、J・K・L地点で確認、調査された木炭窯跡は1基単独で操業されており、木炭窯跡に伴う遺物の出土も無かったため、明確な時期は決定できない状況にある。周辺には製鉄炉の存在は確認されていないが、木炭窯は製錬作業に不可欠な製炭を行う施設であることを前程にすれば、周辺地区における未確認の製鉄炉の存在も想定しなければならない。ただし、川内迫C地点や蛭沢遺跡群A地点のような明らかな廃滓場の存在は確認できない点を見れば、周辺部において製鉄炉の存在についても疑問が残る。これら3基の木炭窯跡は製錬に必要な燃料供給のために構築されたにもかかわらず、製鉄炉とは異なる地点で操業されたものと考えられる。

このような状況は、木炭窯は木炭の原料となる雑木を求めて丘陵全体を移動するように構築された結果であろうか。また製炭活動が丘陵全域を対象とした背景には、8世紀第4四半期から9世紀第3四半期にかけて主流となるみファイゴ付き長方形箱形炉による製錬技術の進展にともない、燃料とされる木炭とその原料となる雑木が多量に必要とされた結果と推察されよう。

竪穴住居跡はC地点で4軒、D地点2軒、G地点1軒、K地点2軒の合計9軒を確認した。竪穴住居跡は製鉄炉や木炭窯跡と同様に、丘陵頂部からやや標高を下げた丘陵南向きの斜面に築かれており、本遺跡群内では他の遺構と同様の立地条件を有している。C地点で調査された

3軒の竪穴住居は製鉄炉、木炭窯跡と近接して営まれているが、それ以外の竪穴住居は住居単独で営まれるという特徴がある。

調査された竪穴住居跡はいずれも方形の平面プランを有し、地形等高線に平行となるように住居壁を築く。また北壁若しくは東壁にカマドを布設する。また住居壁のカマド部を除いた壁際には周溝を巡らし、その周溝を住居外へのぼすものも見られる。

これらの住居跡で出土遺物が伴い、ある程度年代的な位置付けが可能な住居跡は5軒である。まず、C地点1号竪穴住居からは再調整の無い土師器杯が出土し9世紀第2・3四半期頃の年代が想定される。2号竪穴住居からはカマドから須恵器短頸壺と須恵器杯が出土し、9世紀後半の年代が想定される。4号竪穴住居もロクロ甕から9世紀中頃から後半の年代が想定される。D地点1号竪穴住居跡からは土師器甕と杯が出土し、9世紀第2四半期頃の年代が与えられる。K地点2号竪穴住居跡からは須恵器長頸瓶が出土し、頸部にリング状突帯が巡ることから9世紀中頃の年代が想定される。このように調査された竪穴住居跡は出土遺物の検討から、いずれも9世紀中頃から後半にかけての時期で9世紀前半段階まで遡るものは、極めて少ない。

以上のように、本遺跡群における竪穴住居は、概ね9世紀第2・3四半期を前後する時期を中心に営まれたものであると考えられる。

次に製鉄炉と竪穴住居の関係を見るが、E地点やG地点では他の遺構が隣接して築かれていないため直接比較することは困難である。C地点では製鉄炉、木炭窯と隣接した竪穴住居跡であることから、C地点で検討する。

C地点の製鉄炉は竪形炉が導入される8世紀前半を上限として、製錬活動の中心は8世紀第4四半期～1四半期と考えられる。2号木炭窯は9世紀後半の2号竪穴住居跡に切られることから9世紀前半の年代が与えられる。このように見ると、1・2号製鉄炉と木炭窯跡の年代は合致するが、住居跡の大部分は9世紀中頃を中心とした年代が想定される。従って両者の年代には若干の相違が認められ、引き続き詳細な検討と位置付けが必要であろう。

以上のようにC地点の住居は、単純に地区内における製錬や製炭に関わった住居施設であると位置付けることは困難である。D・K地点の住居跡も他遺構の関連は不明瞭である。巨視的に見ればD地点における2軒の竪穴住居跡は、E・G地点の製鉄炉操業に関わり、K地点の2軒の竪穴住居跡は地点の木炭窯の操業にかかる可能性を想定され、C地区の住居も同地区内における1次製錬、2次精錬、鑄造活動とは無関係ではないと考えている。

土坑は40基が調査された。調査された土坑の大部分が長方形の平面プランを有し、土坑内の堆積土には焼土や木炭を含む。また土坑底面に厚さ約2cm前後の炭化物層を含むものも見られる。土坑の規模は長辺90cm、短辺70cm前後のものが圧倒的に多く、この法量を超えるものも下回るものも少ない。

土坑の分布状況を見ると遺跡群北部に展開する製鉄炉や周辺には比較的少なく、木炭窯跡が位置する遺跡群南側に多く展開する傾向が見られる。また土坑が構築される地形は、他の遺構と比較しても特段異なった選地はされておらず、丘陵尾根筋の若干標高を下げた地点や、丘陵南向きの斜面に築かれているという共通性を見ることができる。

これらの土坑の性格については不明な点が多いものの、堆積土下層に位置する木炭層や、堆積土中に含まれる多量の焼土層、遺構壁が赤化するものが存在している点を見れば、これらの土坑の内部において火の使用が行われていたと推察され、従来の見解に従って木炭焼成土坑(伏焼土坑)である可能性が最も高いと考えている。木炭焼成土坑は木炭窯によって作られる木炭とは異なり、消炭をつくるためのものであると考えられており、本遺跡群における土坑についても同様の目的を与えておきたい。

ここまでで川内迫B遺跡群全体の様相について概観してきたが、最後に川内迫B遺跡群C地点の特異性について記載しておく。

川内迫B遺跡群の調査で明らかとなったC地点の特徴には大きく4つ項目があげられる。

第1に、C地点の製鉄の操業は8世紀中頃に竪形炉の導入によって開始され、本遺跡群内では最初に製錬活動が開始された可能性がある。

第2に製鉄炉、木炭窯、竪穴住居跡、木炭焼成土坑などが比較的集中した地点に築かれており、非常にまとまったセット関係を保持している。

第3に鍛冶遺構を伴う竪穴住居(4住)が存在している。

第4に1・2号廃滓場から獣脚、器物製品の鋳型が出土する。

以上の4点がC地点の特徴として指摘することができる。

このような特徴は他の調査地点や蛭沢遺跡群には見られず、川内迫B遺跡群C地点に限られた特徴であると指摘することができる。

まず、これらの特徴からC地点における操業の様相を推察すると、製鉄炉による1次的な鉄の生産(製錬)と木炭窯による製炭活動、4号竪穴住居による二次的な鉄の生産活動(精錬)、以上の工程を経て生産された鉄資源を用いた鑄造作業までの作業が行われたと想定される。つまりC地点では製錬から鑄物製品の製作までの一連の作業を一貫して行っていた場所である可能性が極めて高いと指摘できよう。

このような活動形態は武井地区製鉄遺跡群における「山田A遺跡」と「猪倉A遺跡」の2例の留まり、隣接する蛭沢遺跡群や製鉄炉123基、木炭窯跡149基、竪穴住居跡133軒が調査された金沢製鉄遺跡群でさえも見ることにはできない。

以上のように、川内迫B遺跡群は他の製鉄関連遺跡と比較しても、非常に特異な様相を保持しており、本地点における鉄の生産活動に際しては他の地点や金沢製鉄遺跡群などとは異なった目的や役割を担っていた可能性が考えられる。また、C地点で活動していた工人たちは、他の地点において生産活動をおこなっていた工人たちと比較すると、二次的な精錬技術や鑄造技術を有する集団であると指摘することが可能である。今後、武井地区製鉄遺跡群における山田A遺跡や猪倉A遺跡との比較、検討を行い、C地点で活動をおこなっていた工人たちの具体的な様相の解明やその技術的系譜、しいてはC地点が担った役割や性格、歴史的背景について詳細な検討が必要であると考えている。

(荒)

第4編 総括

第1章 遺構について

福島県通り地方の北端に位置する新地町から原町市にかけての地域、古代の行政区画における宇多郡から行方郡にかけての地域は、福島県域、すなわち陸奥国南部のなかで製鉄遺跡が特に集中して分布する地域である。その代表的な例は、原町市内では製鉄炉跡の調査数において全国最大の製鉄遺跡群である金沢地区製鉄遺跡群（註1）であり、他に新地町の武井地区製鉄遺跡群（註2）がある。大規模な開発にともなって発掘調査が行われたこれらの大製鉄遺跡群については、製鉄炉や木炭窯跡の構造と変遷、遺構群の構成・分布、炉壁やフイゴ羽口をはじめとした遺物の検討、鉄滓の冶金学的分析といった多角的な視点による検討がなされている。

日立建機関連で実施された蛭沢・川内迫Bの両遺跡群の調査も、こうした大規模な開発にともなうものであり、調査対象面積は約48200 m²、調査面積は約37550 m²に及ぶ。

原町市内における製鉄遺跡の調査例は、この金沢地区製鉄遺跡群と当遺跡群のほかにも出口遺跡（註3）・田堤遺跡（註4）を挙げることができる。

本章では、まず今回報告分の遺構について若干のまとめを行うこととし、さらに既報告の蛭沢遺跡群C・D地区の成果（註5）を合わせ、両遺跡群の発掘調査を総括したい。その際、主に同じ原町市内の遺跡である金沢地区製鉄遺跡群の研究成果を参考にし、本遺跡群の特徴をまとめ、他遺跡との類似性・差異性を整理することとしたい。

調査・整理に十分意を尽くせなかった部分が少なくないため、こうした資料を基礎として議論を進めること自体に躊躇せざるを得ないが、他遺跡の事例によって適宜に補足をを行いながら、今回の調査で得られた知見を可能な限り評価し、今後の調査・研究への脚掛かりとして若干の予察を述べることは許されるであろう。従って本章の内容は、今後の調査例の蓄積により再検討され、修正されるべきものである。

第1節 製鉄関連遺構について

本節では、個々の遺構について、若干のまとめを行うこととしたい。ただし、その細部の特徴を論じることは避ける。

第1項 製鉄炉跡

製鉄炉跡は、蛭沢遺跡群A地点で6基、川内迫B遺跡群C地点で3基、E地点・G地点でそれぞれ1基が確認されている。このうち、川内迫B遺跡群C地点3号製鉄炉跡が円筒形竪形炉、他はいずれも踏みフイゴを伴う長方形箱形炉である。後者は斜面の等高線に直行する方向に炉の主軸をもつ縦置炉である。また、既報告の蛭沢遺跡群C地点では10基、D地点では2基の製鉄炉が確認されている。このうち、C地点の1号製鉄炉跡が円筒形竪形炉である以外は、いずれも踏みフイゴを伴う長方形箱形炉である。

長方形箱形炉についてみると、炉本体部の構造については、炉底の残るもの、掘方のみが検

出されたものがあり、遺存状況が一様ではないが、基礎構造から、地山が浅く掘り窪められ、その上に直接粘土を貼って炉底を構築したもの（蛭沢遺跡群A地点1号製鉄炉跡、川内迫B遺跡群E地点1号製鉄炉跡）、比較的深い掘方を伴い、掘方内に施設土を充填しているもの（蛭沢遺跡群A地点3～6号製鉄炉跡）に大きく分かれる。蛭沢遺跡群A地点の3～6号製鉄炉跡は、施設土に地山ブロックが利用されている。なお、既報告の蛭沢遺跡群C・D地点で確認された製鉄炉跡はいずれも後者に属するが、施設土には被熱した地山ブロックだけでなく、炭化物主体層や黒色土・褐色土が用いられ、比較的発達した基礎構造を伴うものが多い。

踏みフイゴ掘方の形態については、遺構の残存状況にもよるが、左右の踏板を受けたと思われる方形の掘り込み2基が並ぶ形態であり、軸受けと思われる箱状の掘り込みが斜面上位寄りにみられる。また、炉本体部へ送風を行うための小溝が伴う。既報告の蛭沢遺跡群C・D地点では、踏みフイゴ掘方は踏板全体の大きさに合わせて長方形に掘り込まれたものが多く、軸受けが掘方内を貫通しているもの、斜面上位寄りのみに箱状の掘り込みが認められるもの、斜面上位側の掘方壁の中央がやや突出するのみのものがある（註6）。

作業場は、炉本体部周辺と踏みフイゴとの間に段がみられるものが多く、この段を境界として踏みフイゴが位置する上位作業場と、炉本体部が位置する下位作業場に分かれるもの（蛭沢遺跡群A地点3・4号製鉄炉跡）、作業場が炉本体部周囲のみに設けられ、斜面上位側に作業場造成の際に形成された緩やかな法面がみられるもの（蛭沢遺跡群A地点5・6号製鉄炉跡、川内迫B遺跡群E地点1号製鉄炉跡）がある。蛭沢遺跡群C・D地点の製鉄炉跡は前者に属するものが多い。このことは、踏みフイゴ掘方の形状と関係するものと思われる。

蛭沢遺跡群A地点・川内迫B遺跡群C地点では、製鉄炉2基が並列するタイプのものがみられる。第2編第3章で述べたように、蛭沢遺跡群A地点では2基並列の5・6号製鉄炉跡から3・4号製鉄炉跡へ、さらに単独の1号製鉄炉跡へと、斜面上位側へ順次移動しながら操業が行われたと推定した。一方、川内迫B遺跡群の他の地区や、既報告の蛭沢遺跡群C・D地点では、2基ないし3基の製鉄炉が並列する状況は認められない。蛭沢C地点では、10基もの製鉄炉跡が確認されているが、これらはいずれも単独とみられるものである。

第2項 木炭窯跡

木炭窯跡は、今回の報告地点で8基が確認されている。内訳は蛭沢遺跡群A地点で2基、川内迫B遺跡群C地点で3基、J・K・L地点で各1基である。いずれも地下式登窯である。

焼成室の平面形は、側壁が直線的な長方形を呈するもの（蛭沢遺跡群A地点1・2号木炭窯跡、川内迫B遺跡群K地点1号木炭窯跡）、側壁が外に張り出す胴張隅丸長方形を呈するもの（川内迫B遺跡群C地点3号木炭窯跡、同L地点1号木炭窯跡）がある。また、長さ（奥行）5m前後に対し、幅2m以下の比較的細長い形状を呈するもの（蛭沢遺跡群A地点1号木炭窯跡、川内迫B遺跡群C地点3号木炭窯跡）、長さが3.5～4.5m前後に対し幅2mほどで、比較的幅広で短い形状のもの（川内迫B遺跡群J・K・L地点）がある。従って、平面的形態と規模は必ずしも対応していない。

断面形は、天井が崩落しているものが多いため不明瞭であるが、いずれも蒲鉾形とみられる。また、奥壁は直線的に立ちあがる形態と丸みをもつ形態とがある。煙道の位置は、残っている川内迫B遺跡群J地点では左側壁、同L地点1号製鉄炉跡は右側壁の奥壁近くである。

これらの木炭窯跡は、前項で述べた製鉄炉の操業に対応して、燃料となる木炭を生産したと推定され、基本的には製鉄炉に伴う時期ものと推定される。蛭沢遺跡群A地点1・2号木炭窯跡は作業場が重複することから時間的先後関係があり、同位置で比較的長期間にわたる製炭が行われたと考えられる。谷を隔てて向かい合う同地点1～6号製鉄炉跡の継続的な操業に伴って製炭を行ったのであろう。川内迫B遺跡群C地点の1～3号製鉄炉跡についても、重複はしないが同一斜面に営まれており、同地点における継続的な製鉄炉の操業に対応し、継続的な製炭が行われたと考えられる。一方、川内迫B遺跡群J・K・L地点では、製鉄炉跡が近接することなく、木炭窯跡1基が単独で営まれている。

なお、既報告の蛭沢遺跡群C・D地点では、木炭窯跡は1基も確認されていない。

第3項 竪穴住居跡

竪穴住居跡は、今回報告地点で9軒を確認した。内訳は、蛭沢遺跡群A地点で1軒、川内迫B遺跡群C地点で4軒、同D地点で2軒、同K地点で2軒である。また、既報告の蛭沢遺跡群C地点では1軒が確認されている。

斜面地に掘り込まれたものであるため、斜面下位側の壁が流出し、失われている例も多いが、蛭沢遺跡群A地点1号竪穴住居跡・川内迫B遺跡群C地点4号竪穴住居跡は1辺が5mを超える比較的大型のものであり、他は3.5～3m前後の小型のものである。既報告の蛭沢遺跡群C地点1号竪穴住居跡は後者に属する。

カマドは、いずれも地下式の煙道を持つものである。北カマド・東カマドの両者がみられ、壁の中央にカマドを構築するもの、コーナー近くに設置するものがある。金沢地区製鉄遺跡群では、カマドが住居コーナーに構築されるのがみられるのはIV期の特徴とされる(註7)。なお、川内迫B遺跡群D地点1号竪穴住居跡では、住居北壁西寄りの位置から北壁中央へ、カマドの作り替えが行われている。地山を掘り残した袖が残るものもの、無袖のものがあるが、川内迫B遺跡群C地点2号竪穴住居跡では、カマドの袖に製鉄炉と同様のスサ入り粘土が使用されている。内側に溶着滓が付着し、羽口が装着された状態である。カマド構築材に使用済の炉壁が転用された可能性とともに、実際に簡易な炉として使用された可能性が考慮される。カマド内からは土器とともに器物鋳型が出土していることから、鋳造に関連するものかも知れない。同住居跡に近接する廃滓場から獣脚・器物鋳型が多量に出土しており、これらは同住居跡内で鋳造が行われた後に廃滓場に廃棄されたものである可能性がある。

また、川内迫B遺跡群C地点4号竪穴住居跡は、床面で鍛冶炉跡2基が確認されている。

竪穴住居跡の性格については、金沢地区製鉄遺跡群をはじめ、他遺跡でも製鉄関連遺構に近接して数軒の竪穴住居が確認される例が多く、西山眞理子氏は、「これらの住居跡はカマドの造りが簡素で、出土遺物も少なく、あまり使用された痕跡がないことから、鉄生産時の作業小屋

的性格をもつ一時的な居住空間」と位置付けている（註8）。

蛭沢・川内迫の両遺跡群においても、堅穴住居跡の多くは土師器・須恵器といった日常什器を出土することから、主に工人の飯場小屋として、居住機能をもったものと考えられるが、川内迫B遺跡群C地点2号堅穴住居跡では鑄造が、4号堅穴住居跡では第2次製錬ないし鍛冶が行われた可能性があり、工房としての機能も兼ね備えた場合もあったと考えてよいであろう。

第4項 その他の遺構

上記した以外の遺構として、弥生時代の土器埋設遺構、土坑、性格不明遺構がある。

弥生時代の土器埋設遺構は、蛭沢遺跡群A地点で1基のみが単独で確認されている。丘陵上で該期の土器埋設遺構が単独で見つかる例は、金沢地区製鉄遺跡群南入A遺跡・長瀨遺跡に類例がある。これらの例では、2個体構成の合蓋土器棺墓の可能性が指摘されているが（註9）、本例は壺形土器1個体しか出土しておらず、上層部が削平や流出により失われた可能性があるものの、合蓋式であることを示すような知見は得られていない。既報告の川内迫B遺跡群F地区では、弥生時代の遺物包含層が確認されている。ここでは、弥生時代の生活域が本地点にも及んでいたことを確認するに留める。

報告のなかで、土坑として扱ったものは、多くが平面が長軸1.5～1m前後、短軸0.9～0.7m前後の隅丸長方形を呈するもので、壁面が強く焼け、底面直上に薄い木炭層が認められる、いわゆる木炭焼成土坑、あるいは伏せ焼き土坑と解釈されているものである。ただし、この種の土坑では、時期や性格を特定する根拠となる遺物が一切なく、他の製鉄関連遺構に伴うものかどうかとも判然としない。製鉄炉や木炭窯跡が確認されている地点ばかりにみられるわけではなく、川内迫B遺跡群E地点のように、他の遺構と混在することなく、10基ほどが集中的に確認される場合や、N地点のように、1基ないし2基のみが単独で確認される場合がある。

この種の土坑の機能については、坑内製炭法による木炭焼成遺構とする説（註10）の他に、火葬に関連する遺構であるとする説もあり（註11）、意見の一致をみていない。今回の調査においても、その性格を特定するだけの知見は得られなかった。

また、川内迫B遺跡群K地点では、不明遺構として扱った、複数単位の掘り込みが複雑に重複した遺構が検出されている。これらは、丘陵斜面に対して縦方向の壺掘り状ないしは溝状に掘り込みが行われるだけでなく、横穴状ないしはトンネル状に掘り進められている状況がみられる。この地区の基本層序は、泥岩層・砂質土層・白色粘土層であるが、掘り込みの多くの部分は泥岩層を掘り抜いて砂質土層に達した段階で掘り込みを停止しており、トンネル状に掘り込まれた部分については、泥岩の下層を掘り進んでいる。地層を意識した掘り込み行われたと解釈されることから、特定の土層を採取する目的で掘削された採掘遺構の可能性が指摘できるものの、時期や性格を特定できるだけの知見は得られていない。なお、金沢地区製鉄遺跡群鳥打沢A遺跡で類似する遺構が確認されている（註12）。

第5項 製鉄関連遺構の年代

確認された製鉄炉・木炭窯跡そのものからは、年代を特定できる遺物は出土していないため、製鉄関連遺構がいつごろ操業したのかについては判然としない。しかし、これらと近接する位置で確認されている竪穴住居跡に、製鉄炉の操業に伴って営まれた作業小屋や工人の住居といった性格を認めるとすれば、これら竪穴住居跡出土土器の年代が、当遺跡における製鉄関連遺構の年代を代表するとみて大過ないであろう。

一方、市内の金沢地区製鉄遺跡群においては、炉跡や廃滓場からも土器が少なからず出土しており、それらの編年作業を通じて、製鉄炉の形態変化が示されている（註13）。すなわち、同遺跡群においては、竪形炉がみられるのはⅢ期（8世紀第2～第3四半期）からⅣ期（8世紀第4四半期～9世紀第1四半期）への過渡期、踏みフイゴを伴う長方形箱形炉が出現するのはⅣ期以降である。金沢地区製鉄遺跡群の製鉄炉では、Ⅳ期に2ないし3基並列のものが多くみられるが、Ⅴ期（9世紀第2～第3四半期）になると単独で営まれるようになる。また、炉の基礎構造が発達するのはⅤ期の特徴である。

川内迫B遺跡群C地点では、竪形炉である3号製鉄炉跡が、2基並列の長方形箱形炉である1・2号製鉄炉跡に先行する。また、蛭沢遺跡群A地点では3～6号製鉄炉跡が2基並列で、これに単独の1号製鉄炉跡が後出する。従って、炉形態と相対年代の関係は、金沢地区製鉄遺跡群のそれと矛盾しない。蛭沢遺跡群C・D地点検出の長方形箱形炉はいずれも単独で、炉本体部に比較的発達した基礎構造を伴っていることから、相対的に新しい要素をもつと言えよう。

明確な遺構期区分はできないものの、製鉄炉跡の年代は、炉跡の形態からみて、金沢地区製鉄遺跡群の遺構期区分におけるⅢ・Ⅳ・Ⅴ期に対応するものと考えられる。出土土器の年代とも矛盾しないことから、実年代を8世後半から9世紀中頃と推定しておきたい。

第2節 遺跡群について

遺跡群は、谷によって樹枝状に開析された標高45m以下の丘陵状に立地しており、川内迫B・蛭沢の両遺跡群を合わせた広がり東西約6km、南北約8kmほどである。製鉄炉跡・木炭窯跡・竪穴住居跡といった製鉄関連遺構の分布は、基本的にはこのような開析谷に面する尾根の斜面を単位としたまとまりをみせている（図137）。

第1項 遺構の分布について

これまでに検出された製鉄炉跡は、蛭沢遺跡群ではA地点6基、C地点10基、D地点2基を数える。川内迫B遺跡群ではC地点3基、E地点1基、G地点1基である。なお、蛭沢遺跡群C地点については、調査区が3つの谷筋にまたがるものであり（北谷・中谷・南谷と称される。以下、この呼称に従う）、厳密には北谷5基、中谷3基、南谷2基という分布を示す。木炭窯跡は蛭沢遺跡群A地点で2基、川内迫B遺跡群C地点で3基、J・K・L地点で各1基である。

両遺跡群を巨視的にみた場合、製鉄炉を中心として木炭窯跡や竪穴住居跡などの遺構が集中してみられるのはいずれも両遺跡群の北半に位置する部分ということになる。そのなかでも、

遺構密度からみて中心的な位置にあると思われるのは、蛭沢遺跡群A地点、C地点北谷、および川内迫B遺跡群C地点であろう。

蛭沢遺跡群A地点では、一つの尾根に6基の製鉄炉が営まれており、製鉄炉跡の分布密度が最も高い。第2編で報告したように、これらの製鉄炉跡には時間的先後関係が想定され、継続的な操業が行われたものと考えられる。また、蛭沢遺跡群C地点の3つの谷筋のうち、最も北側に位置する北谷では5基の製鉄炉が確認されており、同谷がA地点に次ぐ検出数である。従って、蛭沢遺跡群のなかで、特に北寄りの部分において最も製鉄炉の操業が集中的ないし継続的に行われたことがわかる。

また、川内迫B遺跡群C地点は、製鉄炉の検出数においては蛭沢遺跡群A地点に劣るものの、竪穴住居跡・木炭窯跡の数においては両遺跡群を通じて最多であり、両遺跡群のなかでも一中心をなすものである。2号竪穴住居跡は鍛冶炉を伴っていること、また、廃滓場から火舎に伴う獣脚・器物の鋳型が出土しており、製鉄炉による第1次製錬だけでなく、第2次製錬に関わる精錬・鍛錬鍛冶、鑄造など、鉄器生産における各工程を示す遺構・遺物が確認されている点が注目される(註14)。

両遺跡群が立地する低丘陵地のなかで、東半に展開する蛭沢遺跡群では丘陵の北端、西半にひろがる川内迫B遺跡群においては西端に、操業の中心が位置していたと考えられる。

これに対し、両遺跡群の南半に位置する地区においては、川内迫B遺跡群J地点やL地点のように木炭窯跡が単独で操業される場合や、川内迫B遺跡群N地点のように木炭焼成土坑の可能性が想定される土坑が単独あるいは数基まとまって営まれる場合があるだけで、製鉄炉の操業は認められない。なお、川内迫B遺跡群K地点では、2軒の竪穴住居跡とともに採掘坑と推定される遺構も確認されている。

遺跡群の南半部の様相は、製鉄炉の操業による製錬そのものではなく、燃料となる木炭の生産や、炉壁の材料となる粘土や混和材の調達といった、製鉄炉の操業を行う準備段階の遺構を主としているといえよう。鉄生産に必要な材料調達のため、操業の中心地から離れた地点に進出していったものと推定される。

第2項 遺構群の構成について

当遺跡群における製鉄炉の操業は、金沢地区製鉄遺跡群などと同様、谷を単位として行われていると推定される。遺構の年代に大きな隔たりは想定されず、各地点で確認された遺構群を一定の時間幅をもって連続的に行われた操業の単位と捉えても、巨視的には誤りはなかろう。第1項で述べたように、製鉄関連遺構の分布は、両遺跡群が位置する丘陵のなかでは北半部に中心がある。それらの地点について、地点ごとに遺構の構成をみると、まず蛭沢遺跡群C地点では、製鉄炉跡5基が確認されているが、木炭窯跡は確認されていない。蛭沢遺跡群A地点では木炭窯跡2基が確認されているが、製鉄炉とは谷を隔てている。一方、川内迫B遺跡群C地点では、製鉄炉と木炭窯跡が同一斜面上に混在している。

このことから、前二者と後者では遺構群の構成が大きく異なっていたことがわかる。すなわ

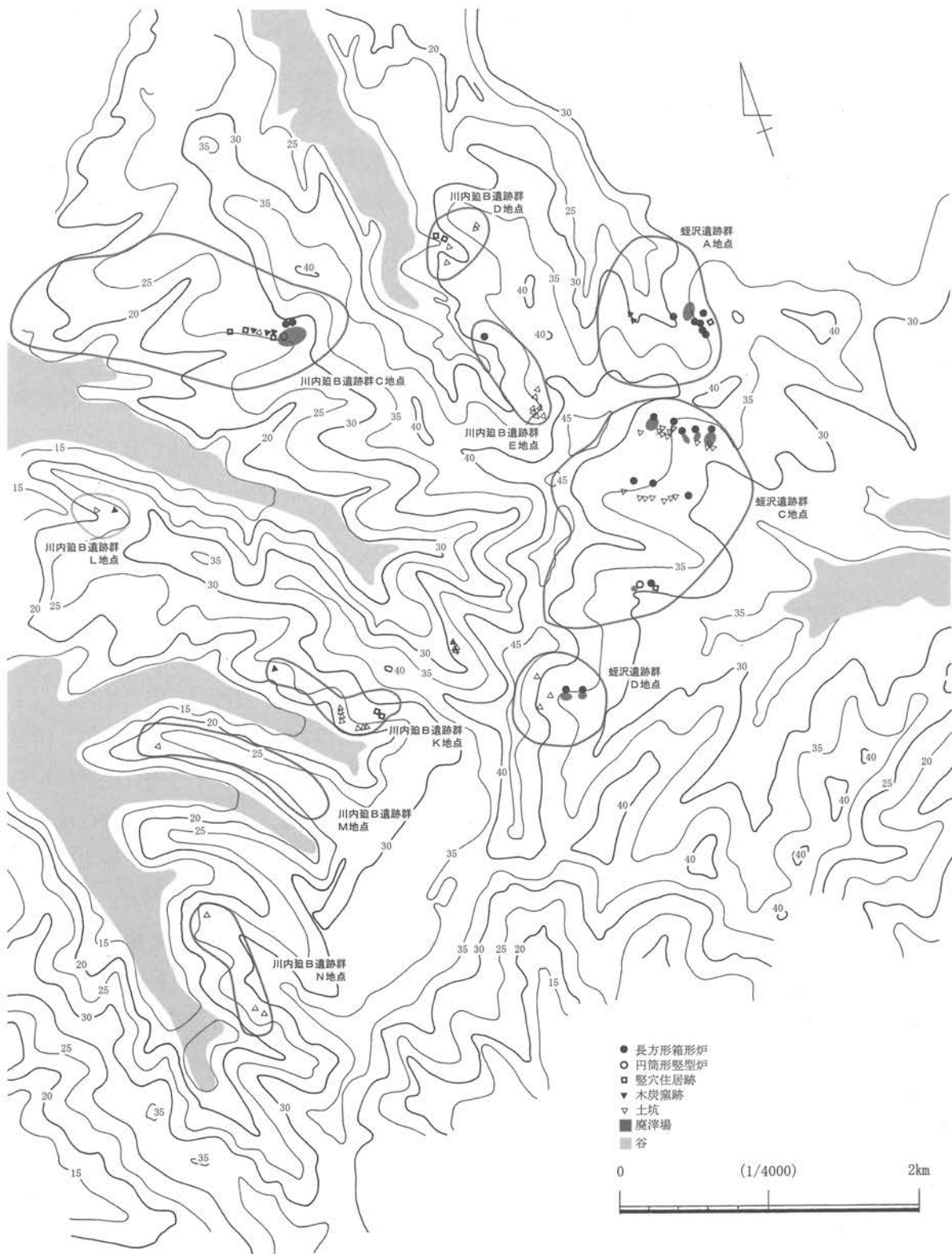


図137 蛭沢・川内迫B遺跡群遺構分布図

ち蛭沢遺跡群A・C地点は、製鉄炉ばかりが集中的に営まれ、主に第1次製錬が行われたとみられるのに対し、川内迫B遺跡群C地点では、前項でみたように、製鉄炉跡・木炭窯跡だけでなく、鍛冶炉を伴う豎穴住居跡・鋳型が確認されており、燃料となる木炭の生産から、第1次製錬・第2次製錬または鍛造、鋳造に至るまで、鉄器生産に関わる多様な工程が行われた可能性がある。このことは、蛭沢遺跡群と川内迫B遺跡群とで、操業の目的や技術者・労働力の編成の在り方が異なっていたことを示す可能性がある。

金沢地区製鉄遺跡群では、鉄生産のユニットが想定されており、IV期のユニットAでは製錬ブロックと木炭生産ブロックといったように生産ブロックが分かれるのに対し、ユニットBは、ユニットAのように分業的な生産ブロックには分かれていない(註15)。蛭沢製鉄遺跡群の在り方は、このユニットAの形態にやや類似しており、比較的規模の大きい生産組織に基づいて、製錬・製炭などが複数の谷にまたがって分業的・集約的に行われたと推定される。一方、川内迫B遺跡群C地点では、製錬から鉄器の製品化までの各工程が、一つの谷のなかで行われたと考えられ、それらの作業が未分業的に実施されたのかも知れない。

蛭沢遺跡群と川内迫B遺跡群C地点がいかなる関係にあったかは今後の課題となるが、先述したように、両者に時期的な隔たりはなく並存したと考えられ、同時期における操業目的の違い、労働力編成の違いを反映している可能性がある。

第3項 豎形炉について

蛭沢遺跡群C地点1号製鉄炉跡、川内迫B遺跡群C地点3号製鉄炉跡は、円筒形豎形炉である。蛭沢遺跡群C地点1号製鉄炉跡は、報告によれば、廃滓場および近接する豎穴住居跡(1号豎穴住居跡)から、金沢地区製鉄遺跡群出土土器編年におけるⅢ期(8世紀第2～第3四半期)とされる土器が出土しており、この時期のものとされている。なお、1号豎穴住居跡からは、おそらく1号製鉄炉に伴ったと思われる通風管が出土している。川内迫B遺跡群C地点の豎形炉の内容については明確でないが、2基並列の長方形箱形炉に伴う廃滓場の下層で確認されている。従って両地点において相対的に古い時期には、豎形炉操業が行われたと考えられる。

なお、豎形炉は鋳造との関連が指摘される炉形態でもあり、川内迫B遺跡群C地点における鋳型の出土は、3号製鉄炉跡に関連づけることが可能かもしれない。ただし、鋳型は主に3号製鉄炉跡に後出する1・2号製鉄炉跡に伴う廃滓場からの出土であるため、層位的な位置付けを経ないと断定はできない。また、蛭沢遺跡群A地点・川内迫B遺跡群C地点とも、鋳造溶解炉とみられる遺構は確認されていない。

さて、蛭沢・川内迫Bの両遺跡群とも、確認された製鉄炉跡は大多数が長方形箱形炉で、いずれも踏みフィゴを伴うものである。本遺跡群の製鉄炉跡の構造は、出土遺物の年代からも、金沢地区製鉄遺跡群における製鉄炉の変遷過程と矛盾なく対応するものと理解でき、金沢地区の遺構期区分におけるIV期ないしV期に位置づけられることは先に述べた。この推定が妥当なものだとすれば、両遺跡群が位置する丘陵では、現在までのところ、この豎形炉の時期よりも遡る形態の炉跡、すなわち踏みフィゴ導入以前の製鉄炉跡が確認されていないことから、蛭沢・

川内埵Bの両遺跡群においては、最も早い時期には竪形炉によって操業が開始され、これが当丘陵における製鉄の端緒（または起点）となった可能性がある。

そして、竪形炉が営まれた地点付近が、その後、踏みフイゴ付の長方形箱形炉の段階になっても操業の中心となっていることは先に述べたとおりである。両遺跡群において、それぞれ竪形炉の操業によって鉄生産の端緒が開かれ、以後、踏みフイゴを伴う長方形箱形炉による本格的な操業が、9世紀代になって開始されるようになったのではなかろうか。

第3節 原町市の製鉄遺跡

—川内埵B遺跡群・蛭沢遺跡群の歴史的評価—

冒頭で述べたように、浜通り北部地域一帯は、製鉄遺跡が特に集中して分布する地域である。分布密度からみて、古代行方郡の領域では、金沢地区にその中心があることは明らかである。金沢地区製鉄遺跡群では、7世紀後半から9世紀にいたる製鉄炉の連続的な変遷過程をたどることができ、谷筋を変えながら継続的に製鉄炉の操業が行われた実態が明らかにされている。

一方、蛭沢・川内埵B遺跡群で確認された製鉄炉跡は、今のところ円筒形竪形炉の8世紀中頃ないし後半から、踏みフイゴを伴う長方形箱形炉の9世紀中葉頃までの時期に収まる。

金沢地区製鉄遺跡群は海岸沿に位置するのに対し、本遺跡群は太平洋岸から内陸へ約3.5km入った位置にある。金沢地区製鉄遺跡群においても、7世紀後半から9世紀に至る連続的な製鉄炉の操業が認められる部分と、8世紀末から9世紀以降に操業がスタートする部分がある。太田川北岸の丘陵上では、より太平洋に近い京塚沢B遺跡や同D遺跡も製鉄遺跡として把握されており、未調査ではあるが、これらの遺跡では相対的に古い時期の製鉄炉が確認される可能性もある。

また、先に述べたように当遺跡群における操業の開始は竪形炉によるものであった可能性があり、そのことは、金沢地区製鉄遺跡群においてⅢ期からⅣ期への過渡期に竪形炉が導入される画期と対応するものと考えられる。逆に、金沢地区で明らかにされた製鉄炉の変遷過程は原町市内における他の製鉄遺跡群においても普遍的にみられる現象であった可能性を示唆するものかも知れない。そして、竪形炉については、官主導によって導入された新技術であったことが指摘されていることを踏まえるならば、当遺跡群において操業の端緒が拓かれた背景に、やはり公権力の存在を認めなければならないであろう（註16）。ところで、原町市内における製鉄遺跡群の分布は、該期の窯跡として把握されている遺跡と重なる場合が多い。このことは、既に指摘されているように、燃料となる森林資源や粘土などの調達といった基礎的な労働力において、窯業と製鉄とに重なる部分があったことを示すものと考えられる（註17）。

金沢地区製鉄遺跡群長瀬遺跡8号住居跡からは、行方郡衙正倉院所用瓦と同様の簾状タタキの平瓦が出土している（註18）。こうした製鉄遺跡群にともなう竪穴住居跡には、前述のように、製鉄工人の住居、ないしは工房といった機能を想定できるが、長瀬遺跡で鉄生産に従事した人物は、行方郡衙正倉建物所用瓦の生産・流通に携わった人間であったと推定される。金沢地区製鉄遺跡群と行方郡衙、またはこの瓦を生産した瓦窯などの有機的なつながりが想定できよう。

金沢地区製鉄遺跡群と行方郡衙は非常に近接した位置にあり、両者の強い関連が想定されるが、具体的には、製鉄や窯業といった手工業生産に、おそらく専門技術をもった工人そのものではなく在地における基礎的な労働力の徴発・編成といった部分において、郡衙が一定の役割を担ったものと思われる。

そして、蛭沢・川内迫の両製鉄遺跡群もまた、金沢地区の動向と連動しながら、官主導による新技術の導入、労働力の徴発・編成のもとに、堅形炉の操業によって新たに鉄生産の端緒が拓かれ、その後展開していった鉄生産地であったと評価しておきたい。

日立建機関連遺跡の発掘調査で得られた資料は、原町地域における製鉄をはじめとした手工業生産の実態を知るための糸口を与える貴重なものであり、当地域の古代史を明らかにするうえで重要な遺跡の一つに加えられよう。

(藤木)

〔註〕

- 註1 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・東北電力株式会社『原町火力発電所関連遺跡調査報告』I～IX 福島県文化財調査報告書第236・265・281・297・310・315・336・343・344集 1990～92・94・95・97・98年。以下、原町報告とする。
- 註2 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・地域振興整備公団『相馬開発関連遺跡調査報告』I～V 福島県文化財調査報告書第215・234・312・236・333集 1989・90・95～97年。以下、相馬報告とする。
- 註3 堀 耕平・佐藤佑子「出口遺跡発掘調査報告」『研究紀要』3 野馬追の里原町市立博物館 2000年
- 註4 原町市教育委員会『原町市内遺跡発掘調査報告書』6 原町市埋蔵文化財調査報告書第25集 2001年。
- 註5 日立建機(株)土浦事業本部・(有)山武考古学研究所・福島県原町市教育委員会『川内迫B遺跡群F地区・蛭沢遺跡群C地区・D地区』原町市埋蔵文化財調査報告書第19・20集 2000年。
- 註6 前掲註5報告。同報告では、蛭沢遺跡群C・D地区で検出された踏みフイゴ掘方の形態を、A類：中央の高まり「ハの字」状で、軸部掘方が明瞭なもの、B類：中央の高まりの上面に僅かな平坦面があり、軸部掘方が炉側まで接続されず、斜面上方寄りのみに見られるもの、C類：中央の高まりが比較的高く、半円形に近い断面形で、軸部掘方は斜面上方の壁の掘り込みにみ認められるもの、の3類に分けている。
- 註7 西山真理子「第9編第2章第3節 堅穴住居跡」前掲『原町報告』III。
- 註8 西山、前掲註7に同じ。
- 註9 井 憲治「第8編第2章 弥生時代の遺構と遺物」前掲『原町報告』IV。
- 註10 吉野滋夫「所謂木炭焼成遺構について」『論集しのぶ考古一日黒吉明先生頌寿記念—』論集しのぶ考古刊行会 1996年。
- 註11 香川慎一「焼土坑に関する再検証」前掲註10書。
- 註12 前掲『原町報告』IV。鳥打沢A遺跡4～6号性格不明遺構は、地山のオリーブ黄色粘土層を掘り込んでいることから、断定はできないものの、粘土採掘遺構である可能性が指摘されている。
- 註13 金沢地区製鉄遺跡群における製鉄炉の変遷は、まず西山真理子氏によって整理され(前掲『原町報告』II)、その後、調査の進展に応じて吉野滋夫氏(『原町報告』III・V)、安田稔氏(前掲『原町報告』V・VI)が検討を行っている。要約すれば、I期(7世紀後半)：両側廃滓の長方形箱形炉(横置炉)→II期(8世紀第1四半期)：片側廃滓の長方形箱形炉(横置炉)→III期(8世紀第2四半期～第3四半期)：長方形箱形炉(縦置炉)と円筒形堅形炉の導入→IV期(8世紀第4四半期～9世紀第1四半期)：踏みフイゴを伴う長方形箱形炉→V期(9世紀第2四半期～第3四半期)：炉形態はIV期と同様だが基礎構造が発達、という変遷過程を示す。
- 註14 ただし鍛冶炉については、鉄製品の生産ではなく、「直し鍛冶」のような目的に利用されたものの可能性もある。
- 註15 西山、前掲註7に同じ。
- 註16 小暮伸之氏は、武井地区製鉄遺跡群にみられる堅形炉について、在地の箱形炉とは別系譜の製鉄技術であり、宮城県多賀城市柏木遺跡の堅形炉と同様に、官主導の技術移入によるものと位置付けている(前掲『相馬報告』V)。
- 註17 宇野隆夫「北陸における律令制の生産システム」『官営工房研究会会報』4 1996年 奈良国立文化財研究所
- 註18 原町市教育委員会『原町市内遺跡発掘調査報告書』8 原町市埋蔵文化財調査報告書第32集 2003年。同報告のなかで筆者は、正倉院に比定される県指定地内出土の平瓦を分析した。その結果、正倉院内で出土する平瓦は特定の2種(簾状タタキ・雨垂れ状タタキ)が95%を占めるのに対し、他の官衙ブロックでは60%前後に留まること、郡寺の存在が推定される館前地区では、多量の瓦が出土しているにもかかわらず、この種の平瓦は少量であることが明らかとなったことから、上記2種の平瓦は正倉院所用瓦として生産されたものであると位置付けた。

第2章 遺物について

第1節 土器

本開発事業にかかる蛭沢遺跡群、川内迫B遺跡群両遺跡群における試掘調査から発掘調査までの一連の調査で出土した土器には縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、近世陶器がある。これらの土器の中で最も出土量が多いのは弥生土器、次いで土師器、須恵器である。

この節ではこれら各時代の土器について概述するが、最も出土量の多かった弥生土器群と当丘陵において行われた鉄の生産行為の時期を考える上で重要な知見となる土師器、須恵器を中心に記載することで土器の総括とする。

第1項 縄文土器

今回の発掘調査で出土した縄文土器のうちで、土器の残存状況ならびにその特徴から凶化に至った資料は1点である。従って、当調査地における縄文時代の様相について語ることは不可能な状況にあると言わざるを得ない。この項では、出土した土器片のもつ特徴を踏まえ原町市内における当該期の様相を概観することでまとめとする。

今回の発掘調査で出土した縄文土器は土器の胎土に繊維を含むいわゆる繊維土器と呼ばれるものである。当地方において土器の胎土に繊維を含むものは縄文時代前期前葉の大木1式もしくは2式に見られる特徴で、当遺跡で出土した縄文土器片も大木式1式もしくは2式に比定される可能性が高い。

原町市内において大木1式～2式の土器を出土する遺跡は、現在までに萱浜赤沼遺跡（1983. 長島）、上太田上ノ内遺跡（2001. 荒）、上渋佐桜井古墳（2002. 荒）、馬場原遺跡（1995. 堀）、信田沢風越遺跡、片倉八重米坂A遺跡、同羽山B遺跡（1968. 竹島）の7遺跡で確認されている。

萱浜赤沼遺跡、風越遺跡、桜井古墳は新田川水系に属し、最も下流域の沖積地内に赤沼遺跡、下流域河岸段丘縁辺に桜井古墳、上流域南岸の丘陵に風越遺跡が所在する。

一方、上ノ内遺跡、原遺跡、八重米坂A遺跡、羽山B遺跡は太田川水系に属し、中流域の河岸段丘上に上ノ内遺跡、中流域の沖積平野に原遺跡、八重米坂A遺跡、羽山B遺跡は阿武隈高地の縁辺部に所在している。

このように、縄文時代前期前葉の遺物を出土する遺跡は、この地域を代表する河川に添って確認されているが、その立地は河岸段丘面縁辺や阿武隈高地裾部、そして本遺跡のように低位丘陵にかけた範囲に広がり、縄文時代前期における人々の生活の一端を知ることができる。

第2項 弥生土器

出土した弥生土器は最終的に川内迫B遺跡群F地点として総括された地点からの出土であり、平成9年度には発掘調査が実施されその内容については別途報告がなされている（2000. 平岡他）。調査では当該期に属する遺構は弥生土器が埋設された土坑1基に留まり、当地における弥生期

の生活様相についてはほとんどが不明な状況である。

今回の調査で出土した弥生土器はそのほとんどが破片であり、土器の器種組成や個々の土器の形状が判断されるものは少ないが、この項では破片資料から判断される土器型式により5つの土器群に大別し、弥生土器についてまとめる。

第Ⅰ土器群

第Ⅰ土器群は柵形罎式土器と判断される一群である。柵形罎式土器は弥生時代中期中葉の標式土器で、宮城県柵形罎式貝塚を標式遺跡とする。この土器は仙台平野を中心とする分布し、北は北上山系、三陸海岸南部、南は福島県磐城・相双地方の地域で確認されている。柵形罎式土器は甕、深鉢、鉢、台付鉢、高杯、壺、そして甕、壺とセットになる蓋が加わる器種構成を持つ。これらの土器群の特徴は多彩な土器の装飾が挙げられる。器面には連続三角文、連弧文、渦巻文、同心円文、錨形文などを描き、充填縄文、磨消縄文手法による加飾が加わる。また粗製の甕では口縁部端部には縄文が施文され、口頸部にはヨコナデが施される。肩部にはヘラ、細竹管、茎先端で刺突した列点文が巡るといった極めて斉一的な装飾、調整手法が見られる(1996. 須藤)。

さて、出土した第Ⅰ土器群を見ると、縄文を地文とした器面にヘラ状工具を用いて、円弧文を描く資料が多いことがわかる。器種の断定には慎重を期するが、口縁部が残存している図138-1~3・5は鉢類であると思われる。次に柵形罎式の特徴を良く表している器種として甕がある。前述したように柵形罎式の甕は、口縁部に列点文が巡る点が粗製段階の特徴とされる。図138-28~34を見ると明瞭な列点文が施文されていることが解かる。これらの列点文の刺突は横長ものを主体とし、一部に縦長の刺突を施すものがあることが指摘されているが(2000. 平岡)、本資料でも横長刺突と縦長刺突の2種類の列点文が確認される。甕の器面には縄文施文のほか植物茎回転による施文が確認される。その他ササラ状の施文を施した資料が1点ある。

周辺遺跡における柵形罎式土器の出土は桜井古墳(2002. 荒)で確認されているだけで、確認例としては決して多い状況とは言えないが、桜井古墳の調査では遺構に伴わなかったものの比較的多くの資料が得られている。

第Ⅱ土器群

第Ⅱ土器群は川原町口式とした土器群である。川原町口式は福島県会津若松市出土土器群を標式とし弥生時代中期後半に位置付けられる。器種の構成としては粗製の深鉢を主体とし甕、袋状の口縁をもつ壺、瓢箪型土器、蓋がある。これらの器種の文様は深鉢に平行沈線文と斜行縄文、甕には口縁部に縄文もしくは平行沈線文、連弧文を施す。壺は口縁に縄文、腹部(胴部)に格子目状の磨消縄文、連続する並行連弧文、頸部に平行沈線文、胴部に渦巻文が施文される(1996. 穴沢)。

第Ⅱ土器群の資料は1点と少なく、その詳細については不明とせざるを得ない。出土資料は口縁部から体部下半にかけての範囲が残存しているもので、器形としては内湾しながら立ち上が

った胴部は口縁部直下の頸部で一端くびれるが、頸部からはもう一段内湾する口縁部が延びるため、瓢箪のような器形を有する。口縁部外面には1本挽きの横位沈線文を5条配し、頸部にはヨコナデによる無文帯を形成する。胴部文様は不鮮明であるが、ヘラ状工具による工字文を施文する。当該期の資料のなかで瓢箪形の器形を有するものとしては川原町口式の他には円田式があり(1996. 水沢)、当資料が円田式に含まれる可能性も考慮しておかなければならないが、いずれにせよ当資料が弥生時代中期後半頃のものと考えても大きな誤りではないものと考えておきたい。

第Ⅲ土器群

第Ⅲ土器群は陣場式土器と思われる土器群である。陣場式は福島県本宮町陣場遺跡を標式とし、弥生時代中期中葉に位置付けられる。器種の構成は大小の壺と甕、鉢、高杯がある。器面文様の系譜は南御山式、柵形罫式に求められ、多彩な文様を展開する(1996. 馬目)。

第Ⅲ群に属する土器は4点ある。このうち2片は細片のため詳細は不明であるが、図138-38は器面にヘラ状工具による下垂連弧文もしくは渦巻文が施される。器厚の状況をみると壺形土器の体部に施文された渦巻文の可能性が高い。37は第Ⅰ群土器との判別が困難な資料であるが、地文である縄文が磨き消されていないと判断し第Ⅲ群に入れた。39・40は埋設土器として使用されていた壺である。頸部から口縁部にかけての範囲は欠損しているが胴部下半には縄文を地文とした施文が施される。胴部上半には1本描きによる同心円文が描かれる。

第Ⅳ土器群

第Ⅳ土器群は当地方の弥生時代中期後葉の標式土器である桜井式土器で、原町市桜井遺跡を標式とする。その器種組成については未だに不明な点が多いが、半截竹管状工具を用いた平行沈線文で連続三角文、重菱形文、重山形文、同心円文、渦巻文を描くのが特徴である。平行沈線文による文様は胴部上半に位置し、横位の沈線文によって下部の縄文帯と区画される。甕は短く外反する口縁部が特徴的で、縄文による施文が施される。頸部にはヨコナデによる無文帯が存在し、綾絡文が巡る。器種組成としては、壺、甕、鉢などがある。また、桜井遺跡周辺からは弥生時代の石器群が多量に出土する。出土する石器は石庖丁、石ノミ、扁平片刃石斧、大型蛤羽石斧、打製石鍬、打製石斧など、その石器組成、内容ともに良好な資料が出土している(1996. 馬目・1992. 竹島他)。

出土した資料のうち、図化に耐え得る資料として18点の資料を掲載した。掲載した資料の多くは甕に分類されるものであるが、その他に平行沈線文による三角文や渦巻文が施文された壺の碎片が多く出土している。

第Ⅴ土器群

第Ⅴ土器群は弥生時代中期末の天神原式に相当する。天神原式は福島県楢葉町天神原遺跡を標式とし、器種の組成は壺を代表としながら小型壺、甕、高杯、鉢、椀がある。器面には縄文

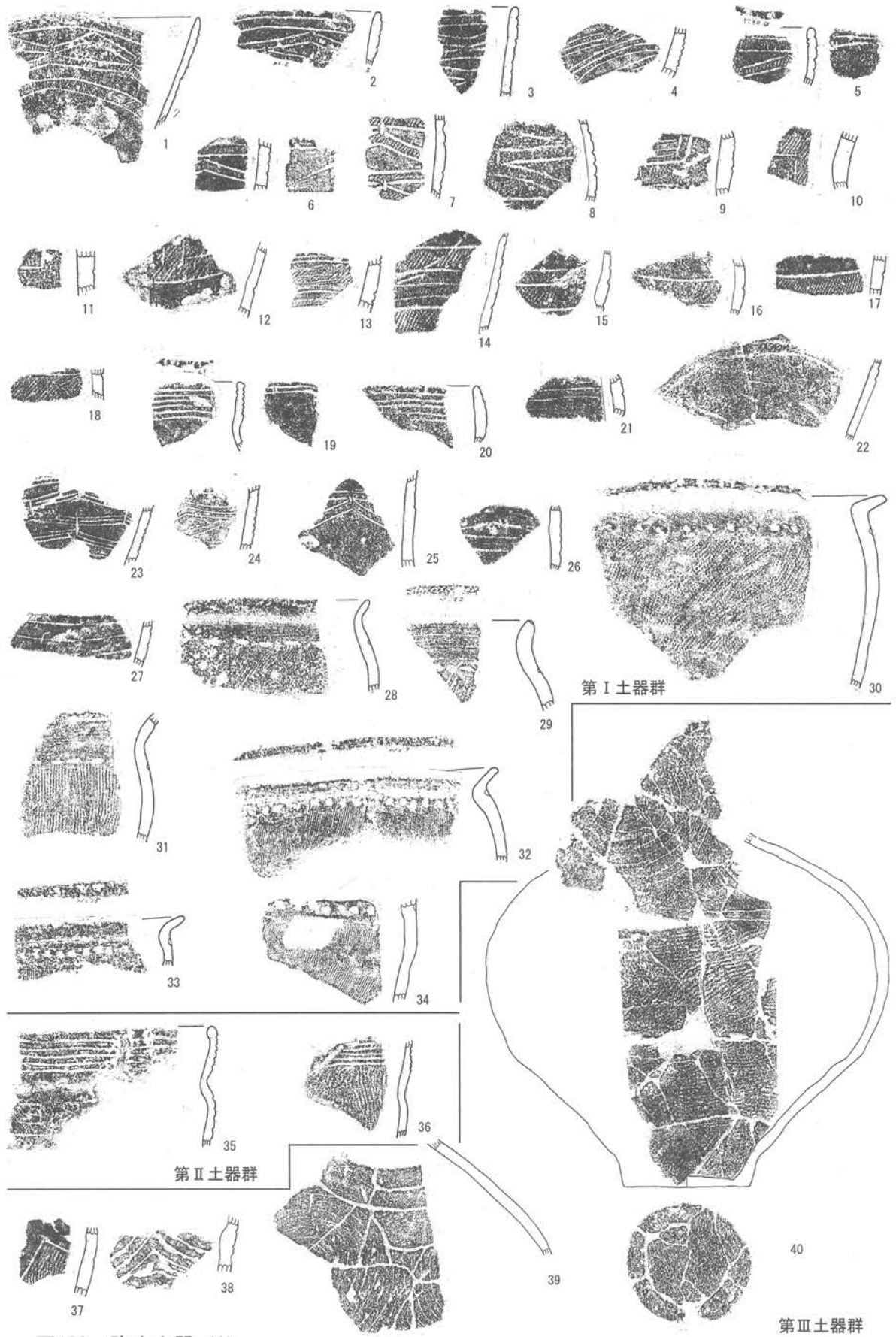
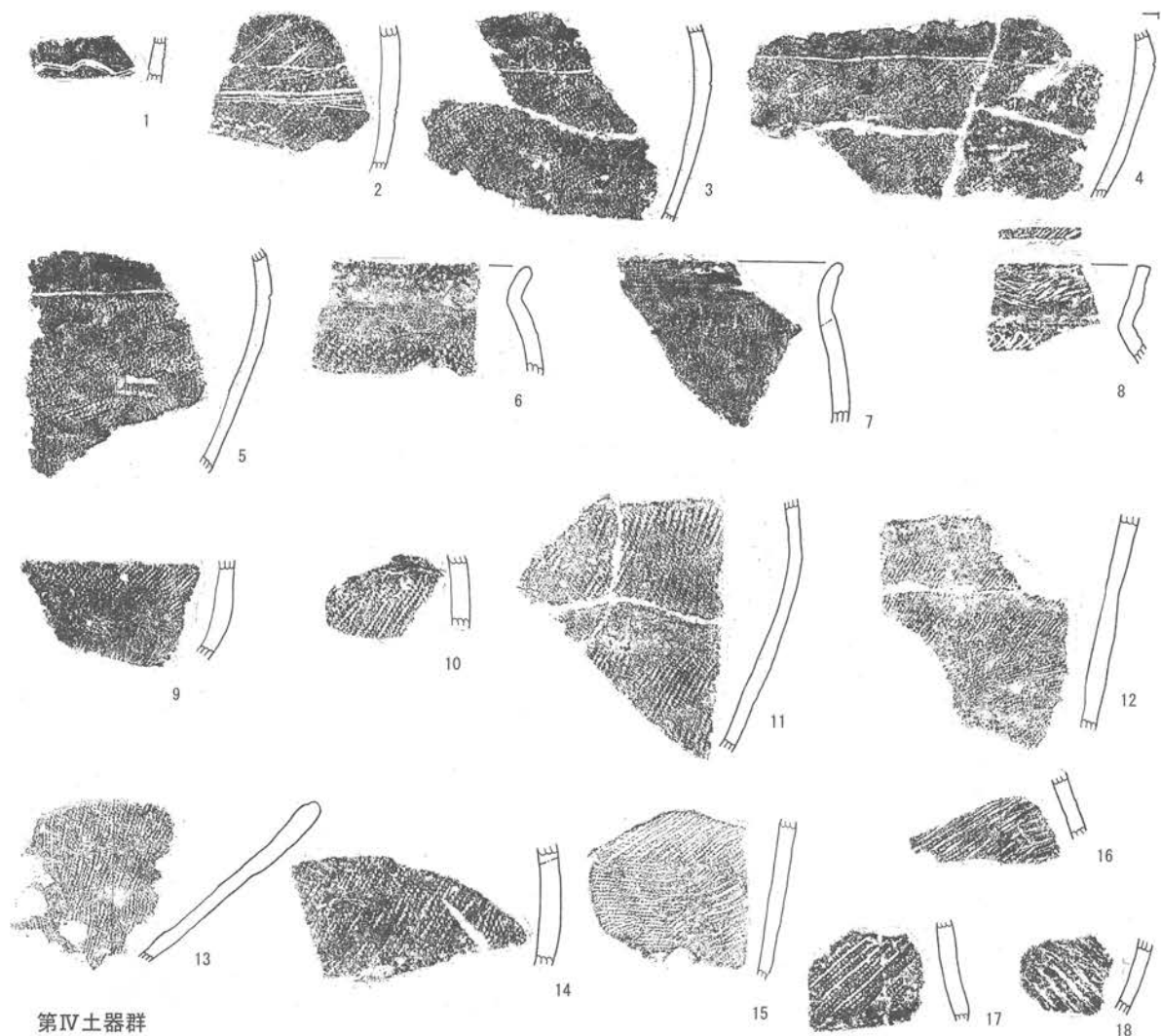
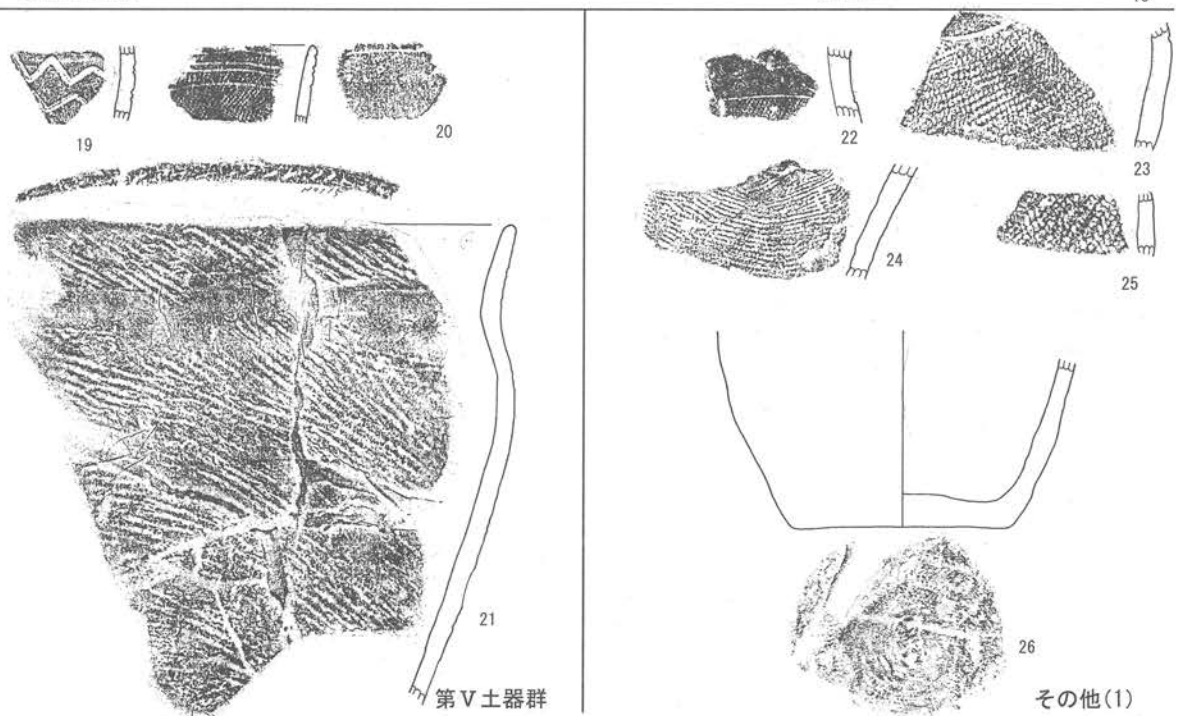


图138 弥生土器 (1)



第IV土器群



第V土器群

その他(1)

図139 弥生土器(2)

と沈線文によって同心円文、連続山形文、半円重弧文、縦弧文、丘状連弧文などを施文する(1982・1996、馬目)。出土資料のうち天神原式のものと思われる資料は2点ある。破片の特徴を見ると地文の縄文を施した後に1本工具による連続三角文と同心円文が施文される。甕はほぼ併行関係にある桜井式の特徴である頸部の綾絡文が見られない。口縁部から胴部にかけての範囲には斜行する縄文が施され、頸部のみナデによる無文帯が形成されている。

これらの出土資料のうち最も多いのが弥生時代中期前葉に位置付けられる椀形罌式土器と同時代中期中葉の桜井式土器である。その他は川原町口式や天神原式、陣場式で福島県浜通り地方の弥生時代中期を代表する土器群と他地方の土器群が出土している状況にある。

各土器群の出土比率を見ると、まず最も大きな比率を占めているのが椀形罌式に比定される第I土器群である。全体の65%を占め、圧倒的に他を凌駕する傾向をもつ。次いで多い比率を占めるのが第IV土器群とした桜井式土器であり、全体の約25%を占める。その他に川原町口式土器(第II土器群)、陣場式土器(第III土器群)、天神原式土器(第V土器群)の出土比率は合計しても10%足らずで、全体的には客体的な存在であると見ることができる。

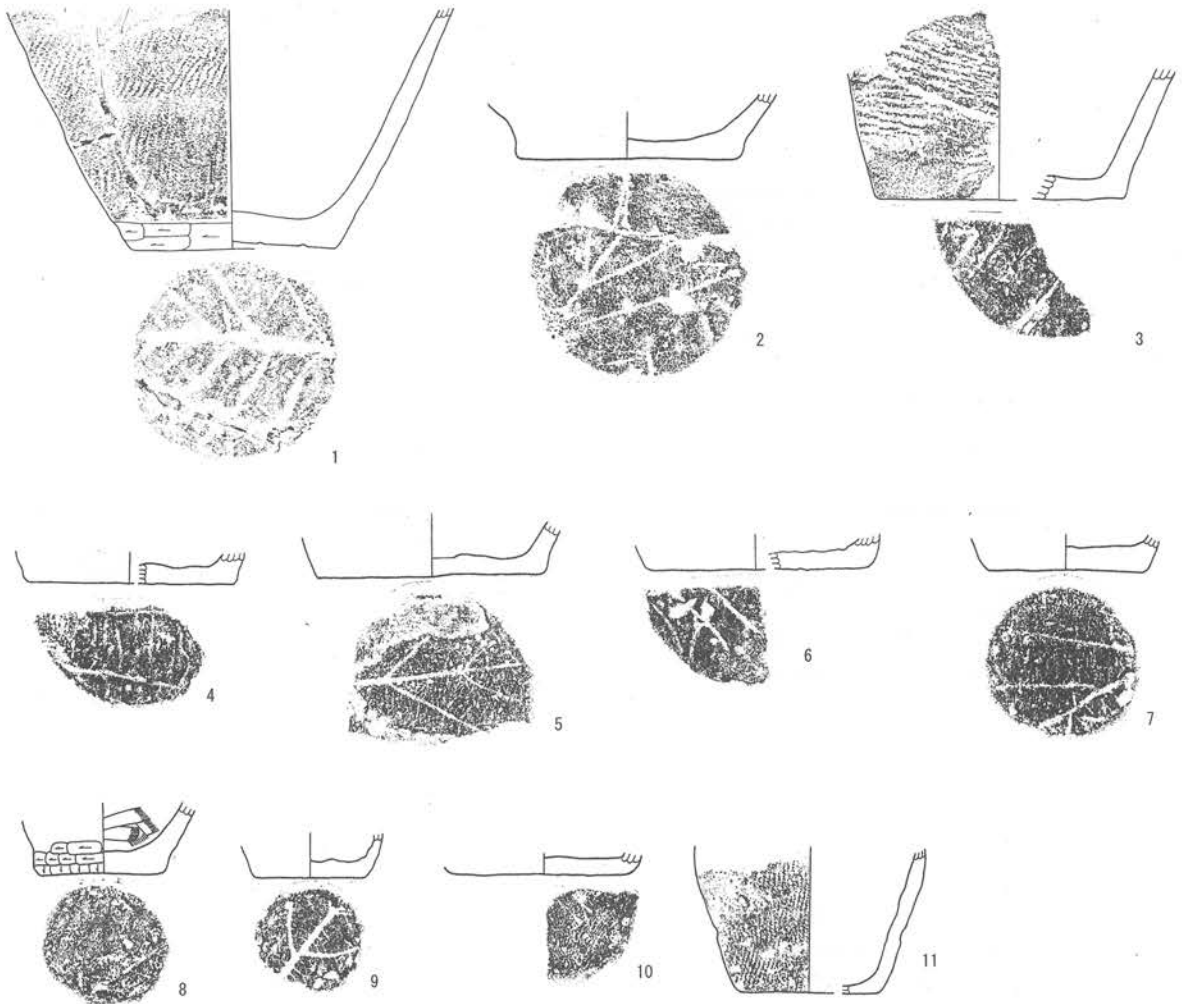


図140 弥生土器 (3)

その他(2)

さて、以上のように当地から出土した弥生土器は中期中葉に位置付けられる第Ⅰ土器群である榊形罎式に相当する資料が圧倒的に多い状況にあるが、このような背景には弥生時代中期の榊形罎式には生活の基盤が確立し、比較的安定した集落が営まれていたものと推測される。当然、安定した集落を営むためには、稲作に代表される生産活動が安定していたことを示し、多量に出土した榊形罎式土器もこれらの集落で製作、使用された可能性が高い。

一方、榊形罎式に後出する第Ⅱ土器群である川原町口式は阿賀野川水系に展開する土器型式であり、第Ⅲ土器群である陣場式は阿武隈川水系に展開する土器型式である。これらの土器群はその出土量の少なさや他地域で発展した土器であることから、当地方において当土器群を製作、使用された集落が営まれたと考えるよりは、これらの土器群は榊形罎式期に確立した集落に持ち込まれた土器群であると思われる（註4）。また、これら第Ⅱ・Ⅲ土器群の存在からは、この時期において太平洋岸に展開した集落と阿武隈川水系、遠くは阿賀野川水系に展開した集落間において土器の移動をとまなう人的交流があったことを示しており、今後これらの地域間交流活動の背景にあるものを解明していかなければならない。

次段階は浜通りを代表する天神原式、桜井式が展開する時期である。これらの土器群は他域で成立した土器を用いた前段階の集落とは異なり、当地において確立された土器型式であるが、成立の背景については未だ不明な点が多い。ただし前段階の榊形罎式期の集落、生産活動が基盤となり桜井遺跡や天神原遺跡が成立したものと考えておきたい。

以上のように当地においては、弥生時代中期中葉の榊形罎式期には他の地域との交流を行い、安定した生産活動が営まれた集落が確立し、その後中期後葉の時期に桜井式土器を成立させた集落が展開したと見られる。一方、榊形罎式以前の様相については、全くといっていいほど資料の蓄積はなされていなく、今後の調査の増加と研究に期待したい。

第3項 土師器・須恵器

この項では、試掘調査を含め蛭沢遺跡群・川内泊B遺跡群から出土した土師器と須恵器について記載しまとめにかえる。出土した土師器・須恵器は合計30点に及ぶ、その内訳としては土師器17点で全体の約50%を占める。須恵器は13点を数え全体の約40%である。

土師器

出土した土師器の内訳を見ると杯6点、甕9点、椀もしくは鉢は1点である。まず当該期の土師器編年の基準とされる土師器杯から見よう。

出土した土師器杯は、内面に黒色処理とヘラミガキを施したロクロ整形の杯で、ロクロ未使用段階のいわゆる「非ロクロ整形」杯は出土していない。底部底面には回転糸切り後

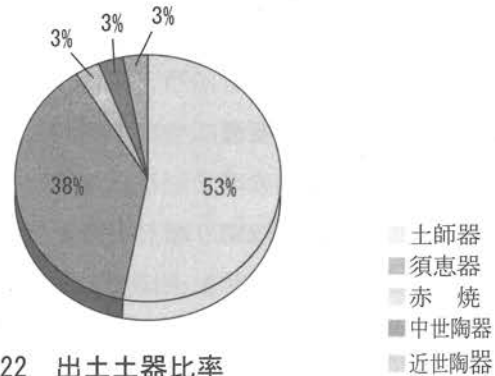


表 22 出土土器比率

に底部側辺に手持ちヘラケズリを施すもの1点。底部切り離し技法に回転糸切りを採用し、再調整に底面にヘラケズリを施すもの3点。底部に回転糸切り痕跡を残し再調整が施されないもの1点で、その他に赤焼土器1点がある。これらの杯で遺構から出土したものは3点ある。

図78-1はC地点1号竪穴住居跡からの出土である。内面にミガキと内黒処理が施され、底面には回転糸切痕が残る。川内迫B遺跡群D地点1号竪穴住居跡からの出土である図90-1は、回転ヘラ切りによって底部の切り離しを行う。器面の摩滅が著しく明確な調整痕は判断し難いが、底面には回転糸切り痕が観察され、底部側辺には手持ちヘラケズリによる再調整が施されている可能性がある。

図107-1は川内迫B遺跡群J地点2号土坑から出土した。口縁部までは残存していないため詳細は不明であるが、底部底面には手持ちヘラケズリによる再調整が施される。

図71-4・5は川内迫B遺跡群C地点1号廃滓場から出土した。5は底部の切り離し技法は不明であるが、手持ちヘラケズリによる再調整が施されている可能性がある。4も同様に底部切り離し技法は再調整の手持ちヘラケズリが施されているために判断できない。

さて、出土した杯類を見ると全ての杯がロクロ使用によって製作され、内面にはヘラミガキならびに黒色処理を施す点で共通している。以下、同様の特徴を有する土師器杯の研究をもって当遺跡から出土した土師器杯の年代的な位置付けを行う。

まず、本遺跡と地理ならびに遺跡の性格がもっとも近似する金沢製鉄遺跡群における土器群の変遷を見る。金沢製鉄遺跡群の調査では出土した土師器、須恵器の土器群を合計X群に分類される。金沢製鉄遺跡群から出土した杯類で杯の製作がロクロを使用したものに限られる時期は、8世紀末から9世紀初頭の年代が与えられる第V土器群から見られる特徴であるが、第V土器群は底部切り離し技法に回転ヘラ切りと回転糸切りが見られるのを特徴とし、底部再調整に手持ちヘラケズリを施すものはVI~IX土器群に位置付けられる。第VI土器群は9世紀第1四半期、続くVII群は9世紀第2~3四半期、第VIII土器群は9世紀第4四半期、第IX土器群は9世紀末の年代が与えられる(註1)。

次に陸奥国府である多賀城跡政庁跡で出土した土師器杯類の検討を見てみる。多賀城跡政庁出土資料では政庁III~IV期に相当するD群に分類された土師器杯がロクロ整形の土師器に限定される。D群の年代は、先出するC群が9世紀前半、F群が政庁最終末の10世紀中頃、F群に先行するE群を10世紀前半される。従って、9世紀前半のC群と10世紀前半のE群の間に位置付けられるD群は9世紀後半とされる(1982. 白鳥)。

この両研究に対して更に補脚すれば、福島県中通り地方から出土した内黒土師器を中心に当該期の内黒土師器の変遷について検討した木本氏は、土師器編年上明確な形でロクロが導入される時期を5段階に分けている。木本氏が指摘する3段階の特徴は底部切り離し技法が回転糸切りとなり、底面には切り離し痕跡を残すものが主体となると指摘している。再調整が加わるものは手持ちヘラケズリを主体とし回転ヘラケズリは少数となるとする。3段階の年代は共伴する須恵器が貞観11年の大地震による甚大な被害を受けた多賀城政庁第IV期瓦群の生産をおこなった仙台市安養寺中圀窯跡出土須恵器に同類のものが見られることから、陸奥修理府が設

置された貞観12年(870年)を上限とし9世紀後半の年代を与えている(1990.木本)。

このように見れば、当遺跡から出土したロクロ土師器杯類の特徴は総じて9世紀後半の年代を与えることができる。この時期の土師器は東北地方の土師器編年第7型式とされる表杉ノ入式の範疇で捉えられ、その年代観からも大きな矛盾は認められない。

次にその他の器種について見てみる。ただし、杯類以外の器種については、その全体の器形が判断できる資料はなくいずれも破片資料である。従って、これらの資料では各器種の相対的な変遷を見ることはできない状況にある。ここでは先に整理した杯類の検討を踏まえて年代的な位置付けをおこなう。

まず甕類であるが、出土した甕類は総数10点で、その内訳としてはC地点1号竪穴住居跡からロクロ整形1点、同地点2号住居跡からはロクロ整形1点、非ロクロ整形1点、D地点1号住居跡から非ロクロ1点、K地点1号住居跡からロクロ整形4点、試掘調査において非ロクロ1点、ロクロ整形1点となる。その他の器種としては非ロクロ整形の鉢1点ある。

杯類と共伴関係にある資料はC地点1号竪穴住居跡出土の図78-1と、D地点1号竪穴住居跡出土の図90-3があるが、いずれの資料も詳細は判然とせず、年代的な位置付けはできない。ただしD地区1号竪穴住居跡から出土した資料は、非ロクロ整形の甕と思われ、外面には縦位ケズリが顕著である。

甕類の製作に際してロクロの使用が一般化する時期は土師器編年の第6型式の国分寺下層式からである。国分寺下層式は陸奥国分寺建立の天平13年(741)から胆沢城創建の延暦21年(802)の8世紀中頃から9世紀初頭に位置付けられ、以後9世紀の表杉ノ入式まで国分寺下層式の特徴を引継ぐ。従って、D地点1号竪穴住居跡から出土した甕類はともに出土した杯類の年代から9世紀前半の年代を与えておきたい。

次に赤焼土器であるが出土した赤焼土器は試掘調査731Tの土坑から出土したものである。径の小さな底部底面には回転糸切り痕が残り、非常に薄手の作りである。内面外面ともにロクロ整形段階のナデを施す以外には特段の調整は加えられない。このような土器は10世紀である多賀城跡政庁跡では須恵系土器と呼ばれ、E群から登場し11世紀のF群まで見られる。またE群では大型の須恵系土器が大型杯に限られるがF群小型製品が加わる。本資料は口径が10cmを超え、器高も2.5cmを超える大型品に含まれるものでE群・F群の両群に含まれる可能性がある。いずれにしても本資料の年代はE群の上限である10世紀前半を遡り得ない。

須恵器

須恵器は13点が出土している。その内訳は川内迫B遺跡群C地点2号竪穴住居跡から杯1点、短頸壺1点、甕1点、C地点1号廃滓場から甕3点、D地点1号竪穴住居跡から甕1点、K地点1号竪穴住居跡から長頸瓶1点、蛭沢遺跡群A地点廃滓場から須恵器甕1点、1号木炭窯付近から長頸瓶底部1点、501Tから甕胴部1点、甕口縁部1点、長頸瓶底部1点の合計13点がある。このうち須恵器の残存状況からある程度年代的な位置付けができる資料をあげれば川内迫B遺跡群C地区1号廃滓場から出土した須恵器甕、同地点2号竪穴住居跡出土杯、短頸

壺、K地点1号竪穴住居跡出土長頸瓶、501T出土甕、蛭沢遺跡群A地点廃滓場出土甕がある。

まず、川内迫B遺跡群C地点2号竪穴住居跡出土遺物を取り上げる。出土した須恵器は杯と短頸壺がある。杯は底部の切り離し技法に回転糸切りを採用し底部側辺から底面にかけて手持ちヘラケズリを施すが、底部底面の中心部には回転糸切り痕が残存する。多賀城政庁出土の土器群ではD群が須恵器の杯類が糸切りのものを主体とし、須恵系土器を全く含まない土器群として特徴付けられている。土師器杯で先述したが多賀城跡政庁跡におけるD群の年代は9世紀後半とされており(1982. 白鳥)、底部の切り離し技法に回転糸切りを採用している2号住居跡出土杯は9世紀後半に位置付けられよう。

この杯と共に出土した短頸壺であるが、体部下半から底部にかけての範囲が欠損しており、全体の形状を知ることはできない。口縁部から体部上半にかけての形状を整理すると、体部は比較的丸みが強く、体部最大径は壺肩部付近に位置する。口縁部はやや外傾するものの、垂直に近い形状で直立し、口縁端部の断面形は丸みを帯びるものである。

このような特徴を有する短頸壺は管見した範囲では類例を求めることは困難であるが、会津若松市大戸窯跡南原19号窯跡(MH19)から出土した資料に、類似する可能性のある資料が見られる。南原19号窯はその操業年代が9世紀前葉から中葉に位置付けられている(1993・1994. 石田)。とすれば、短頸壺は土師器杯、須恵器杯の年代よりも古相を示す。このような状況から、当遺跡で出土した短頸壺は9世紀中葉でも後半に近い時期と位置付けておきたい。

次に川内迫B遺跡K地点1号竪穴住居跡出土の長頸瓶であるが、この資料は口縁部が欠損しており、口縁端部の形状は知ることはできない。頸部の形状も判然としないものの口縁部に向かって弱く開きながら立ち上がるものと思われる。頸部と体部の接点には断面形が半円形のいわゆるリング状の突帯が巡る。体部は最大径が体部上半に位置し明瞭な肩部を形成する。底部には約1cm前後の高台が付する。

長頸瓶の頸部にリング状の突帯が巡る資料例は、原町市内では入道迫瓦窯跡2号窯跡、荒井前遺跡2号溝跡、町遺跡、広畑遺跡の4遺跡からの出土が認められている(1984. 戸田・2002. 二本松・2000・2001・2002. 荒)。その他では未報告であるが滝ノ原窯跡からの出土もある。入道迫瓦窯跡は8世紀末から9世紀初頭の年代が与えられる窯跡である。その特徴は瓦と須恵器を焼成した窯跡(2号)が確認され、須恵器窯では底部切り離し技法に回転糸切りを用い再調整を行わない杯、頸部にリング状の突帯を巡らせた長頸瓶を製作する点にある。

広畑遺跡は行方郡家跡である泉廃寺跡に関連すると考えられる遺跡である。長頸瓶と共伴する土師器杯は底部の切り離し技法が回転糸切りに限られ、再調整に回転ヘラケズリ、手持ちヘラケズリ、未調整のもの、須恵器杯も底部の切り離し技法は回転糸切りに限定され、再調整として手持ちヘラケズリを施すもの、未調整のものと共伴することが確認されている。従って入道迫瓦窯跡のような生産遺跡では8世紀末から9世紀前半段階に生産が開始され、消費遺跡では主に9世紀後半段階に見られるようになる。このリング状の突帯が巡る長頸瓶は8世紀末を初現として9世紀いっぱい年代を与えておきたい。

本遺跡群から出土した須恵器のなかで最も時期が遡る可能性がある長頸瓶が8世紀末に位置

付けられるが、それ以外のものは9世紀中頃から後半を中心とした年代が与えられると考えられる。これら須恵器群の年代は上述した土師器類も9世紀後半段階の所産であることから、両土器群においては年代的な相違は認められない。従って、ここでは出土した土器群は9世紀中頃から後半の年代を与えておく。(荒)

第3節 羽口

製鉄関連遺跡の調査で最も豊富に出土する資料に羽口がある。羽口は製鉄炉の両側辺に複数装着され、製鉄炉上部に構築された踏ふいごから強制的に送られた風を炉内に導き、炉内の温度を管理するための部品である。これらの羽口は炉内に形成された鉄塊を取り出す際に炉壁とともに破壊され、廃滓場等に廃棄される。従って、製鉄関連遺跡から多くの羽口が出土する背景には、個々の製鉄炉に対して複数の羽口が用いられたこと、また製鉄炉の操作が終わると同時にその大部分は廃棄されるといった、いわゆる消耗品的な使用形態があるからである。

これらの羽口については製作方法、形態変遷などについて多くの検討、研究が行われてきている。特に福島県浜通り、相双地方では新地町・相馬市の両市町にまたがる相馬開発関連で調査された武井地区製鉄遺跡群(註1)、鹿島町・原町市の両市町にまたがる東北電力原町火力発電所建設にかかる金沢製鉄遺跡群(註2)、そして原町市内で平成9年度に実施された日立建機株式会社工場用地造成にかかる蛭沢遺跡群C・D地区(2000.平岡)において検討が重ねられている。ここではこれらの調査における検討を踏まえて、出土した羽口について概述する。

第1項 羽口の製作技法

羽口の製作技法は大きく粘土の採取からはじまり焼成に至るまでいくつかの工程が想定される。以下、各作業についてその状況を検出された遺構とともに記載し、まとめとする。

粘土の採掘

羽口製作に限らず、当時の生産活動の中で最もはじめに行われる作業として粘土素材の獲得がある。粘土素材は製作する製品の目的を達するために最も適した性質の粘土が選定、採取されるが、適した粘土素材を獲得することが困難である場合には、素材粘土に手を加え製作に適した粘土に加工することもあったことであろう。

製鉄に関連する生産活動の中で最も粘土素材が必要とされるのは製鉄炉の炉壁構築材としての粘土と多量に生産・破棄される羽口製作に使用される粘土である。この両者は、土器や鋳型などを生産するよりは遥かに多量の粘土が必要とされる。従って、これらの生産活動に必要とされる粘土素材の獲得は生産活動がおこなわれる低位丘陵もしくはその周辺地域などに比較的限定された範囲であると推測される(註3)。

今回の調査では粘土素材を獲得した粘土採掘坑と想定される遺構は検出されず、粘土素材の獲得方法については不明であるが、川内迫B遺跡群K地点では砂質土を採取した可能性のある遺構が検出されている。2～7号土坑がそれにあたる。特にこれらの土坑のうち2・3・7号は、遺跡がのる丘陵の斜面を水平方向に掘り進み横穴状の掘り込みを形成している。この土坑

は基本層位となる凝灰岩質泥岩とその下層に位置する灰褐色砂質層を掘り込んでおり、その底面は基本層位の砂質層面に達し、場所によっては砂質層を深さ約 40 cm 程度掘り込んでいる部分も見られる。この遺構が形成された目的を解明することは困難であるが、羽口の製作に際しては粘土に長石などの砂を混入させ、羽口の耐火強度を高くするために、凝灰岩質泥岩下層に位置する砂質土を求めたという可能性を指摘しておきたい。

羽口の製作

作業 2 は羽口を製作する段階にあたる。羽口の製作は羽口の内径となる芯材に粘土を巻きつけることで製作される。出土した資料の中では羽口の製作過程が判別できる資料はないが、いくつかの製作技法が想定される。第 1 の技法は粘土紐を芯材に巻き上げるもの。第 2 の技法は芯材に粘土板状の羽口素材を巻きつけるもの。第 3 の技法は羽口素材を粘土塊とし芯材を粘土塊に突き刺し整形したものの 3 種の技法が想定されるが、残存する資料では第 1 技法における横方向の粘土継ぎ痕跡ならびに第 2 技法による縦方向の粘土継ぎ痕跡を確認することはできていない。とすれば第 3 の技法によって羽口が製作された可能性がもっとも有力であると思われる。ただし、羽口の製作に際しては上記 3 種の技法のいずれかを決定する明確な根拠はなく、確実な製作手法は不明であると言わざるを得ない。

乾燥

粘土素材と内面形状の型となる芯材を用いて製作された羽口は乾燥と焼成の段階を迎える。調査では乾燥ならびに羽口の焼成をおこなったとされる遺構は明確にされていないため、その全容は不明である。ここでは、羽口製作にかかる作業においては確実に行われる工程であり、気付いた点を記載し、今後の資料の増加を待ちたい。

まず第 1 点として、羽口の乾燥を取り上げる。羽口にかかわらず、粘土製品は焼成の前に乾燥される。水分を多く含んだ状態で焼成にかけると粘土内の水分の急激な膨張により破損してしまうためである。また日当たりの良い場所で乾燥を行うと粘土にひび割れが発生するため、日陰の風通しの良い場所が選定される。出土した羽口を観察すると、吸気部端部に編物状の圧痕が付いている資料が 1 点認められた。この吸気部端部に現われた編物状の圧痕を見ると、この編物製品の圧痕は布製品のようなものではなく、ゴザのようなものであったと思われる。この想定によれば、製作された羽口はゴザのような編物製品の上に吸気部を下に、先端部を上にして縦並べられて乾燥されたと推測される。

第 2 項 羽口の分類

上述の作業には羽口の芯となる芯材が存在したうえで成立する作業である。つまり、出土した羽口を形状分類することで、基本的な羽口の分類作業が可能になると思われる。

羽口の内面の断面形態に注目し分類作業を試みると、出土した羽口は 7 類に大別される。

A 類：羽口の形態が外面形は先端部から直線的に開きながら吸気部に到達するため、断面形がハの字型となるもの。内面の形状は先端部付近では円筒形であるが、吸気部に近づくと大きく開くために断面形がラッパ形となるもの。

B類：羽口の形状が外面形の先端部付近は円筒形に近い形状を保つが、吸気部に近づくと大きく開くため、断面形がラップ形になるもの。内面の形状も外面と同様に先端部付近は円筒形をもつが、吸気部付近で大きく開くために、断面形がラップ形になるもの。

C類：羽口の形状は外面形では先端部付近から直線的に開きながら吸気部に到達するため、断面形がハの字形になるもの。内面の形状も外面と同様に先端部から直線的に開きながら吸気部に到達するため、断面形がハの字形になるもの。

D類：羽口の形状は外面形では先端部から大きく変化することなく吸気部に到達するため、断面形が円筒形になるもの。内面の形状も先端部から大きな変化をしないまま吸気部に到達するため、断面形が円筒形になるもの。

E類：羽口の外面には器形を大きく変化させる屈曲点は存在せしないため、断面形が円筒形のもの。内面の形状は先端部付近では円筒形であるが、吸気部付近で大きく開くために断面形がラップ形になるもの。

F類：羽口の形状は外面形では先端部から直線的に開きながら吸気部に到達するため、断面形はハの字型になるもの。内面の形状は吸気部から先端部に到達するまで、大きな変換点は存在せず、器形は円筒形を保持するもの。

G類：羽口の形状は外面形では先端部付近は円筒形であるが、吸気部付近で大きく開くために断面形がラップ形となるもの。内面の形状は先端部から吸気部に到達するまで大きな変換点が存在しないため、断面形が円筒形を保持するもの。

これらの分類は器面の調整により2類に細分される。

I類：外面には縦方向のナデを施し、吸気部内面にはヨコナデを施すもの。

A類：外面調整がユビナデのもの。

B類：外面調整がヘラナデのもの。

II類：外面には縦方向のナデを施すが、吸気部内面は無調整のもの。

さて、上記の分類に基づき出土した羽口の割合を示したのが表23である。表を見るとA類が全体の約40%の割合を占め、B類が約30%を占め、全体の約70%の割合を占めていることが解かる。またE類を含むとその割合は全体の80%を占めることとなる。A・B・E類に共通する点は、吸気部の内面形状がラップ形を持つ点にある。つまり、蛭沢遺跡群A地点に際しては吸気部の内面形状が大きく外反した『ラップ形』が主体的な羽口形状と見ることができる。

一方、C・D・F・G類は羽口の内面形状がハの字もしくは円筒形をもつものである。その割合はC類が18%、D類が7%、F類が2%、G類にいたっては1%となる。これらの4類の合計は28%であり、4類を合計してもA類の割合にも満たない状況にある。従ってC・D・F・G類の4種の羽口は蛭沢遺跡

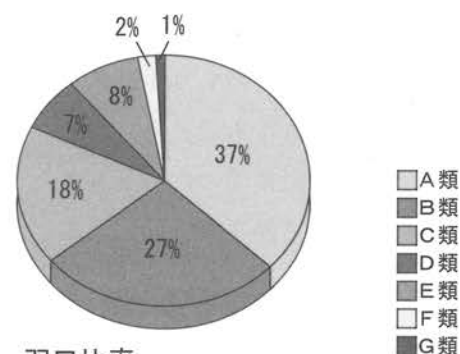


表23 羽口比率

群A地点では客体的な存在であると言える。

金沢製鉄遺跡群における大船迫A遺跡出土の羽口の検討では、箱形炉に技術移入される以前の段階であるⅡ・Ⅲ期、箱形炉に踏ふいごが導入された直後であるⅣ期古段階では特定の1・2形態の羽口が過半数以上を占めることはないことが指摘されている（註1）。一方、箱形炉に踏ふいご、作業場が布設されるⅣ期中段階では特定の1・2形態の羽口が過半数を占め、羽口の規格化傾向が顕著になる。最も技術が完成され箱型炉に基礎構造が構築されるⅣ期新段階、Ⅴ段階には羽口の規格性は前段階よりも強くなり、1形態の羽口が過半数以上を占める傾向が強くなるとされている（註1）。

このような検討結果を見ると、蛭沢遺跡群A地点で出土した羽口の出土状況はA・B類が圧倒的に他の形態の羽口を数的に凌駕する傾向にあり、大船迫A遺跡におけるⅣ期中段階の羽口出土傾向に非常に類似する状況にあると見ることができる。

蛭沢遺跡群A地点では合計6基の製鉄炉が検出、調査されている。この6基の製鉄炉のうち1・2号製鉄炉はそれぞれが単独で存在し、3・4号の両製鉄炉は近接した位置に築かれ、さらに5・6号製鉄炉が近接した位置に築かれている。また3・4号の両製鉄炉と、5・6号の両製鉄炉は隣接して築かれており、合計4基の製鉄炉が並列する位置関係にある。しかし、当調査地点では廃滓場は1箇所では確認されていない。確認、調査された1号廃滓場は3～6号製鉄炉の下部に位置しており、この廃滓場は上部に位置する4基の製鉄炉によって形成された可能性が高く、1号廃滓場から出土した羽口は上部に位置する3～6号製鉄炉によって使用、そして廃棄された可能性が非常に高い。従って、これらの羽口がどの製鉄炉によって使用されていたのかを明確にすることはできない状況にある。

蛭沢遺跡群A地点3～6号製鉄炉跡のように2基が並列して築かれる製鉄炉は金沢製鉄遺跡群における製鉄炉変遷Ⅳ期の特徴と一致する。大船迫A遺跡4・13号製鉄炉、3・34号の製鉄炉本体は竪穴状に掘られた作業場内に設けられ、ふいごは作業場の外に飛び出しているという特徴をもつ。これら2基の製鉄炉が並列した状況で築かれた製鉄炉は最初に1基の操業が開始され、その後のもう1基が増設、操業が行われたものと考えられており、比較的短期間の内に2基の製鉄炉が連続して操業を開始したものと考えられる。

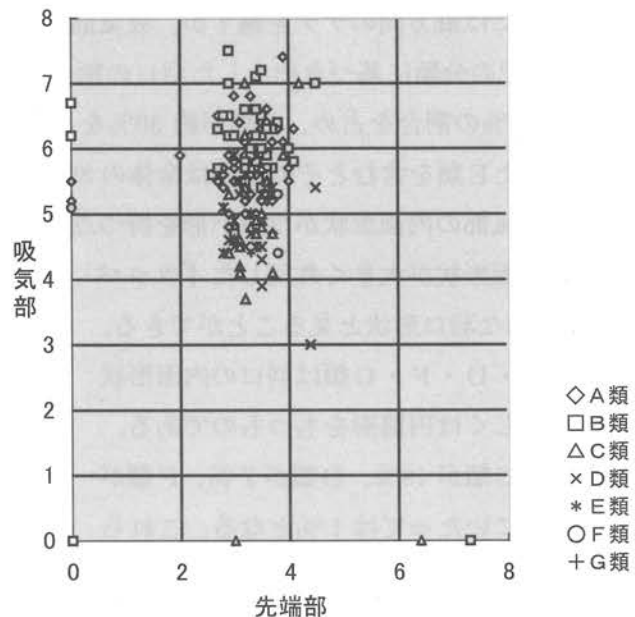


表 24 吸気部・先端部法量比較

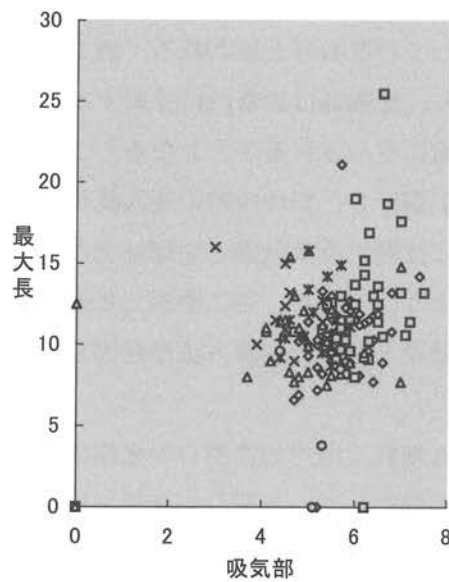


表 25 最大長・吸気部法量比較

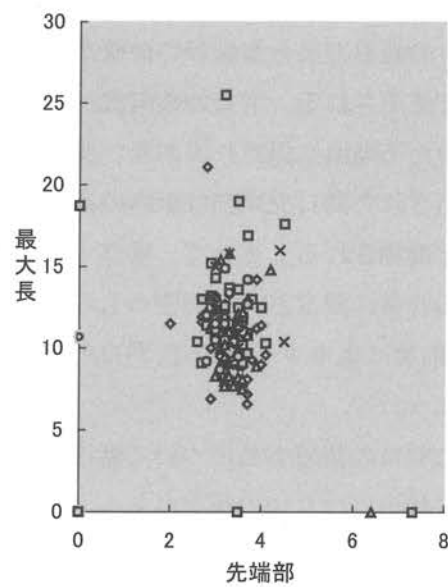


表 26 最大長・先端部法量比較

- ◇ A類
- B類
- △ C類
- × D類
- * E類
- F類
- + G類

この想定に従えば蛭沢遺跡群A地点で隣接して築かれた3～6号製鉄炉はほぼ時期を同じくして構築、操業されたことにより、炉の構造ならびに羽口の装着方法についても大きな相違はなかったものと推測される。つまり、1号廃滓場から出土した羽口に大きな形態的变化が見られない背景には、このような製鉄炉の構築における特徴があるものと考えられ、当調査地点の4基の製鉄炉に使用された羽口はいずれもA類若しくはC類の形態のものが採用されていたものと考えられる。

さて、表 24～26 は羽口の最大長・吸気口内径・先端部内径の関係を明示したものである。表 24 で吸気部と先端部の関係を見るとA類とB類が重複する位置に展開し、C類とD類が重複する位置に展開していることがわかる。従って吸気部の形状が吸気部の内面調整によりラッパ形になるものと、調整が加えられないためにハの字若しくは円筒形のものがある程度のまとまりをもつものと言える。一方、先端部の内径については3.5 cm周辺に集中しており、明確な分布変化は見取れることはできない。

表 25 で最大長と吸気部の関係を見ると表 25 と同様にA類とB類が重複する範囲に展開し、C類とD類が重複する範囲に展開していることがわかる。最大長は10 cm周辺に位置し、吸気部は4.5 cmを中心とした範囲に展開する。

一方、表 26 では最大長と先端部の関係を明示したが、この項目では各類型の羽口に明確な分布相違は認められず、先端部内径は3.4 cm、最大長10 cm付近の非常に限定されたものであると見ることができる。

さて、上記3表に現われた傾向を見ると、先端部内径と最大長は非常に共通した内容であることがわかる。先端部の形状は3.5 cmを前後しており、羽口の製作に用いられた芯材は直径規模が3.5 cm前後のものであったものと推測され、羽口製作にかかる芯材の直径規模には明確な差はなく、非常に規格性の高いものであったと考えられる。

また、最大長の比率は10 cmを前後する範囲に集中する傾向が指摘される。このような傾向の背景には羽口の装着方法と製鉄炉の炉壁厚が大きく関係しているものと思われる。羽口は炉壁に装着されて使用される。羽口の吸気部は炉壁外に位置し、先端部は炉壁内に位置する。炉内は製錬作業のため高温に保たれており、羽口先端部は高温にさらされることとなる。このような環境で使用された羽口先端部は炉内の高温により溶解が進行し、製作当時の最大長から短くなっていると推測される。従って、残存する羽口は炉外に位置する吸気部と炉壁粘土内に埋設された範囲の非常に限定された範囲のものであるといえよう。つまり、表に明示した最大長の比率が10 cm前後に集中する傾向は、羽口が装着された炉壁厚と羽口の装着方法が起因していると考えられよう。

では、次に羽口の装着方法について見る。蛭沢遺跡群A地点で出土した羽口の先端部に付着した溶着滓の状況には2つの傾向がある。まず、溶着滓が残存している羽口の先端部付近に限定しているものと、溶着滓が吸気部までの範囲に付着しているものがある。前者の羽口は比較的 maximum 長が長く、後者の資料は短い傾向が指摘される。前述したように出土した羽口の最大長の長短が炉壁厚と装着方法の影響を受け、溶着滓の付着の仕方と最大長の関係に共通する点があるとすれば、炉壁構造と装着方法を知る手がかりとなるものと考えられる。

大船迫A遺跡の検討では羽口の装着方法には大きく3通りの方法があることが指摘されている(註1)。その内容をまとめると以下の通りとなる。

- ① 炉壁は最も下部に横長粘土ブロックを置き、その上部に縦長粘土ブロックを並べる。羽口はこの縦長粘土ブロックで挟むように装着される。装着された羽口は吸気部が上方に、先端部が下方に位置し、炉壁に対して斜めに装着される。また、この時羽口の吸気部は炉壁外面から大きく飛び出す。このような特徴は金沢製鉄遺跡群における製鉄炉変遷ではⅡ・Ⅲ期のものである。
- ② 炉壁は横長粘土ブロックの上部に縦長粘土ブロックを並べ、羽口の吸気部は炉壁から大きく飛び出している点は①と同様である。①との相違点は羽口の装着方法にあり、①で斜めに据えられた羽口は②では水平方向に変化する。考察では踏ふいごの導入により炉内の鉄滓が羽口吸気部方向へ逆流しなくなったことが背景にあると考えられている。このような構造の製鉄炉はⅣ期中段階の特徴である。
- ③ 炉壁は横長粘土ブロックの上部に羽口を水平に置き、羽口間には粘土を充填する。さらに羽口の上部には横長粘土ブロックを置き、羽口を固定する。この炉壁構造の大きな特徴は羽口の装着方法にある。上記2種の羽口は吸気部を含む広い範囲が炉壁外に位置するのに対して、③では羽口の大部分が炉壁内ならびに炉内に位置し、炉壁外面からは吸気部端部のみが出るという状況になる。このような製鉄炉はⅣ期新段階からⅤ期のものである。

これらの製鉄炉炉壁構造と、羽口の装着方法の相違は出土する羽口の残存状況に明確に現われるものと推測している。先に指摘した蛭沢遺跡群A地点出土の羽口には長短に明確な相違が認められ、また羽口の付着した溶着滓の状況も上記の相違に対応している状況は金沢製鉄遺跡群の②と③における羽口の装着方法の相違が大きく影響すると考えられる。②は炉壁外面から

水平方向に大きく飛び出した羽口が特徴的であるが、この装着方法で使用された羽口は、吸気部から先端部までの距離が長くなり、溶着滓は先端部の限定された範囲にのみ付着しよう。③の構造の製鉄炉で使用された羽口は先端部の大部分が炉内の高温により溶解し、吸気部から残存する先端部までの距離が短くなり、吸気部周辺まで溶着滓が付着してしまうことは容易に想像される。

従って、蛭沢遺跡群A地点から出土した羽口の長短の有無は製鉄炉に用いられた羽口の装着方法の相違が明瞭に現われたもので、蛭沢遺跡群A地点では金沢製鉄遺跡群におけるIV期中段階～IV期新段階・V期のものが含まれている可能性が高い。

とすれば、蛭沢遺跡群A地点から出土した羽口をみると、羽口の形態的な出土比率からはIV期中段階の特徴を多く含み、羽口先端部に付着した溶着滓の状況から推測される装着方法からはIV期中段階からV期にかけての特徴を含んでいることが解かる。

つまり、蛭沢遺跡群A地点1号廃滓場から出土した羽口からは当調査地点で確認された製鉄炉は金沢製鉄遺跡群製鉄炉変遷におけるIV期中段階を中心としながらV期までの時間幅で収まるものと考えられる。金沢製鉄遺跡群変遷ではIV期は8世紀第4四半期～9世紀第1四半期、V期は9世紀第2四半期から第3四半期の年代が与えられており。当地点における製鉄炉の年代は出土羽口から見るとIV期の8世紀第4四半期を初現とし9世紀第1四半期～9世紀第3四半期を中心とした時期を与えておきたい。

第4節 鋳型

川内迫B遺跡群C地点からは鋳物製品を製作する際に使用された型、いわゆる鋳型が出土している。出土した鋳型には大きく『獣脚鋳型』と『器物鋳型』が確認されている。

川内迫B遺跡群C地点から出土した鋳造関連の遺物は合計36点を数える。出土した獣脚鋳型は14点を数え全体の40%を占める。器物鋳型22点であり全体の60%を占める。また14点の獣脚鋳型には鋳型の蓋となる資料を1点含む。これらの鋳型資料は川内迫B遺跡群1号廃滓場からの出土が多く、次いで2号堅穴住居跡から器物鋳型2点が出土している。このような出土状況を見ると、廃滓場から出土した獣脚鋳型は鋳物製品を型から取り出す際に破壊若しくは破損したものが廃滓場に捨てられたものと考えられ、一方2号堅穴住居跡から出土した器物鋳型は、カマド周辺部からの出土であるものの、調査では当住居跡にともなう遺物であるかを明確にされてはならず、遺構と器物鋳型の関係について言及することはできない。従って、住居から出土した2点の器物鋳型は住居廃絶後に廃棄された可能性と当住居跡が鋳物製品にかかる鋳造施設の可能性の2つが想定される。

このように、川内迫B遺跡群から出土する鋳型には、その出土状況に大きな傾向が見られる。第1は出土した獣脚鋳型が1号廃滓場に限定された出土傾向をもつということである。第2は出土した器物鋳

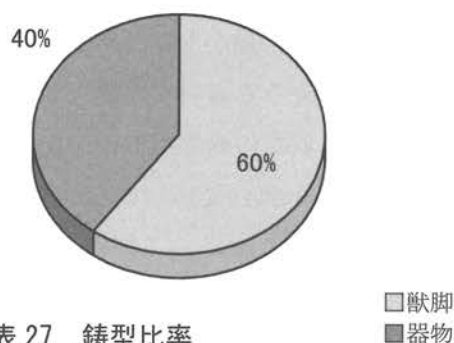


表 27 鋳型比率

型が廃滓場出土と住居跡から出土しているということである。

このような状況は福島県相馬市猪倉B遺跡における鑄型出土状況と類似する。猪倉B遺跡では出土した鑄型の鍋類鑄型と獣脚鑄型の出土遺構の関係を検討し、作業場内には鍋類鑄型が多く廃棄され、廃滓場には獣脚鑄型、獣脚鑄型蓋が多く廃棄される傾向を提示している(註2)。

従って、川内迫B遺跡群C地点から出土した鑄型の廃棄状況は、猪倉B遺跡の検討結果を追従すると見ることが出来る。

さて、これらの36点の鑄型資料は川内迫B遺跡群C地点からの出土に限られ、隣接する蛭沢遺跡群を含む他の調査地点からの出土はない。これらの鑄型の存在は鑄物製品製作に関わった人々と川内迫B遺跡群C地点の性格を考える上では重要な資料であると考えられ、この節ではこれらの出土した鑄型について記載してまとめとするが、器物鑄型では鑄型自体の残存率が低く、その詳細を語れる状況にはないため、本節では獣脚鑄型に主眼をおき記載をおこなう。

第1項 獣脚鑄型

川内迫B遺跡群C地点から出土した獣脚鑄型は14点を数える。その内訳は鑄型13点、鑄型蓋1点である。これらの鑄型が出土する遺構は調査地点中央部に位置する1号廃滓場である。1号廃滓場は上部に位置する1・2号製鉄炉の2基の製鉄炉によって形成されたと考えられるが、鑄型自体は直接的に製鉄作業に関連する遺物ではないために製鉄炉周辺に位置する遺構群との関係を重要視し、遺跡内における鑄造作業に注目しなければならない。

製作工程の復元

まず、この項において獣脚鑄型にかかる製作工程の復元を試みるが、川内迫B遺跡群C地点では製作工程を復元できるだけの資料は得られていないという事実があるため、猪倉B遺跡の報文を補足引用し記載する(註2)。

- ① 第1の工程には粘土の採取がある。粘土の採取は前節の出土羽口で述べたとおり、粘土の採取は、遺跡群が展開する丘陵やその周辺で得られる場合が多いと推察され、獣脚鑄型製作に際しても同様であると思われる。獣脚鑄型に用いられている粘土素材は、羽口に比べるときめの細かな粘土が採用されている。それは、羽口は製鉄炉本体に装着されるため高温に耐える素材が求められるために、白色や半透明の長石を意図的に混入させることにより、羽口の耐熱温度の強化を行っていると考えられる。

一方、獣脚鑄型に用いられている粘土素材は非常にきめ細かな良質の粘土が用いられている。このことは、これらの粘土は獣脚製品の文様を明瞭に表現する必要性から、長石などを混入しないものを、意図的に用いているものと考えられる。また、鑄型は羽口ほど長

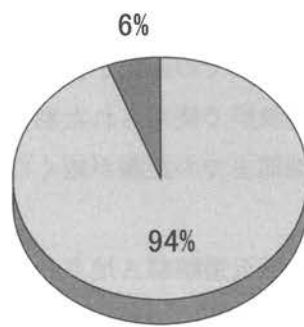


表 28 出土地点比率

□ 1 廃
■ 2 住

期間に渡り高温にさらされる状況が少ないことも影響しているものと考えられる。

- ② 第2の工程として①で選定された粘土に獣脚の文様をつける作業が行われる。この作業については猪倉B遺跡の報文を引用しておきたい。「獣脚鑄型は粘土に木型を押し付ける型押しによって製作されたものと考えられる。きめの細かい粘土を枠に詰め、それに木型を押し付ける方法と粘土板に木型を押し付ける方法がある・・・(中略)。この型押しの跡、鑄型の裏面は削り調整されて角は面取りされ、上半部は丸みをもって仕上げられているが、削りの多寡が鑄型自体の形態差を生み出し・・・(以下略)」とされている。

この復元工程に従うと、最初に行われる作業としては枠の中に粘土を詰める作業がある。川内迫B遺跡群C地点出土の獣脚鑄型を見ると、この製作工程を示唆する資料として図141-1・2に図示した2点の鑄型資料がある。1は鑄型上半の資料である。残存範囲では獣脚上部であることから鑄型文様は刻み込まれていない。2は鑄型下半の資料である。残存範囲の中央には足関節を表現した2条の沈線が刻まれ、そこから5本の足指が鑄型下端に向かって伸びる。足指の先には指の本数と対応する5本の爪が表現されている。

当資料の大きな特徴は鑄型外面の断面形が明瞭な箱形を呈しており、器面の調整はまったく行われていない点にある。従って、本資料は外面を調整する以前の状況を残存している資料と判断されることから、鑄型製作に際しては枠に粘土を充填したという見解を支持しておきたい。

次に枠に充填された粘土に木型の押し付け文様を模る作業が行われる。これらの作業には鑄上がった獣脚製品と同型の木型の存在が想定され、この木型を枠に充填した粘土に塊に押し付け型抜きを行うことで獣脚鑄型の文様を製作していると考えられる。

- ③ ②において枠に充填された粘土に木型によって獣脚が写し取られると、次の工程として器面の調整が行われる。外面には縦方向の削りにより、鑄型外面の面取りが行われる。基本的には断面形がU字形になるまで作業が繰り返される。出土した資料の中には器面の調整を施さず、粘土充填の枠形状を残すものがあることは②で述べたとおりである。
- ④ 鑄型の形状が完成した後、乾燥を経て焼成が行われる。焼成が済むと鑄型内面に仕上げマネに代表される塗型材を施し、鑄造作業を向かえる。

鑄型の分類

さて、上述したように獣脚鑄型は鑄上がった製品と同様の型が存在しているものと考えられる。つまり、これら獣脚鑄型に表現された文様の相違は鑄型製作にかかる型の相違を明確に反映したものである。従って、鑄型内面に製作された獣脚の形状を検討、分類することによって、鑄型製作に使用された型の存在と製作された製品の様相を知ることができると考えられる。ただし、調査で出土した獣脚鑄型のうち鑄型全体が残存している資料は皆無であり、その詳細を明らかにすることはできない状況にあることを断ったうえで、獣脚鑄型を大別する。

A型：この型は獣脚の下部に足関節、5本の脚指、脚指の先端に5本の爪が表現されるものである。更に、A型は表現された獣脚文様からI・II型に細分される。

AI型：この型は獣脚鑄型の中央下部に脚関節を表現する2条の沈線を配し、その関節部から

下方に伸びる5本の脚指と脚指の先端に5本の脚爪が表現されるものである。

A II型：この型は獣脚鑄型の中央下部に脚関節を表現する2条の沈線を配するが、脚指はこの沈線を超えて上部にまで及ぶ点が上記類型とは異なる点である。脚指の下端には指の本数と対応する脚爪が表現される。

B型：この型は獣脚鑄型の上部に獣面を表現したものである。獣面全体が残存している資料はなくその表情による細分は困難であるが、ここではあえて歯の表現方法からI・II型に分類しておく。

B I型：獣面から下には一定の無文帯が確保され、その下部に2条の沈線によって脚関節を刻む。脚関節からは本数は不明であるものの脚指が伸びると思われる。脚指の先端には指本数と同数の脚爪が表現される。獣面は歯と頬筋が認められるが、表現された歯は四角で前歯を表すが、歯は外側に向かうにつれて小さく表現されて、犬歯に代表される鋭い歯がない点が特徴である。

B II型：獣面から下には一定の無文帯が確保され、その下部に2条の沈線によって脚関節を刻む。脚関節からは本数は不明であるものの脚指が伸びると思われる。脚指の先端には指本数と同数の脚爪が表現される。獣面は歯のみが確認されるが最も外側には犬歯が位置し、前歯は四角で表現される。

上記分類に従い獣脚鑄型の割合を求めると、A I型は62%、A II型は15%、B I型は8%、B II型は15%となる。また、A型とB型に大別してみるとA型は全体の77%を占め全体の約8割、B型が23%を占め全体の約2割を占めることとなる。さて、このような分類、検討の結果、A型について2種類の型が存在していたことになる。A Iは出土した鑄型の相対的な量が多く、A I型で製作された製品が当遺跡における鑄造作業の主たる鑄物製品であったと考えられる。A I型に属する資料を図144~146にまとめて掲載した。図を見ると非常に類似した特徴を有していることがわかる。その代表的な点としては鑄型の最も奥に表現された獣脚製品の脚にあたる稜線が鑄型中軸線に対して歪んでいる点にある。この特徴は特に2と3において顕著に表れている。また、2と4・5を比較しても、脚関節を表現した2条の沈線幅、脚指の長さ、脚爪から鑄型底面までの距離においてほぼ同じ法量を有しており、同じ型を用いて作られた可能性が高い。従って2・3・4・5は同型の汎によって製作された鑄型であると考えておく。また、1は鑄型の外面調整、胎土の状況、鑄型内面の被熱痕跡から2と同一個体の可能性

が高い。このように見ると、A I型に分類された獣脚鑄型資料はほぼ同一の獣脚型を使用して製作された可能性が高いと言える。一方、A II型に分類された資料は、脚指が脚関節の沈線の上下にまで表現されている点で、上記資料と異なるが、出土数が1点であることから鑄型詳細についての言及は控える。B類に属する資料では、計測に耐えうる資料は出土

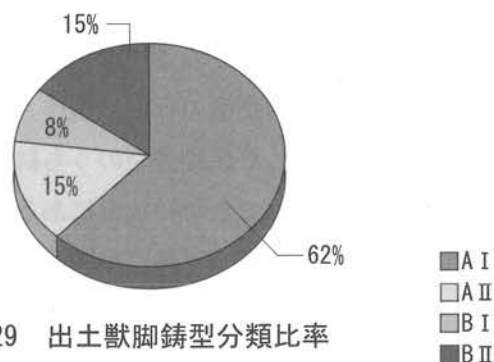


表29 出土獣脚鑄型分類比率

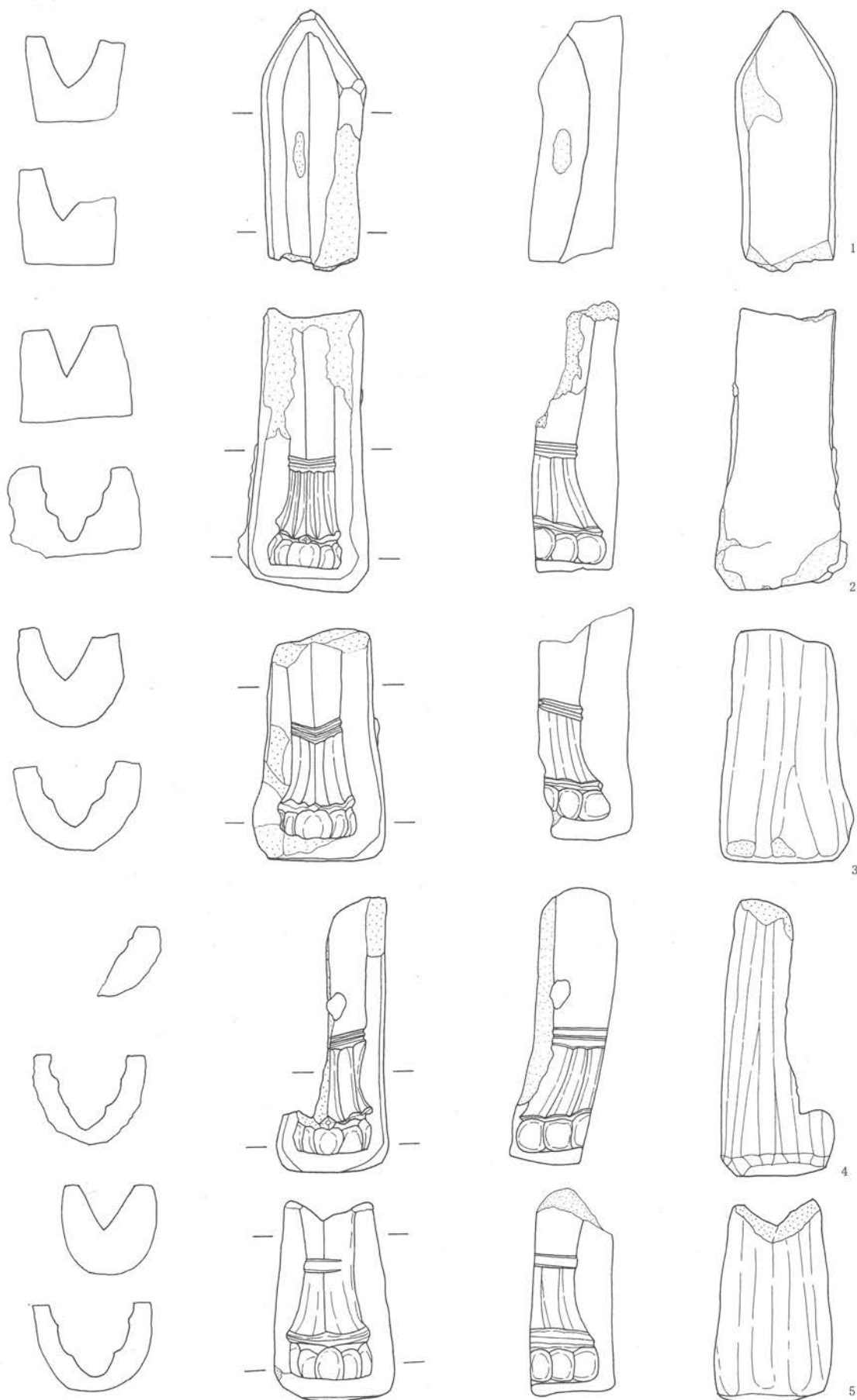


図141 獸脚鑄型分類 (1)

(A1)

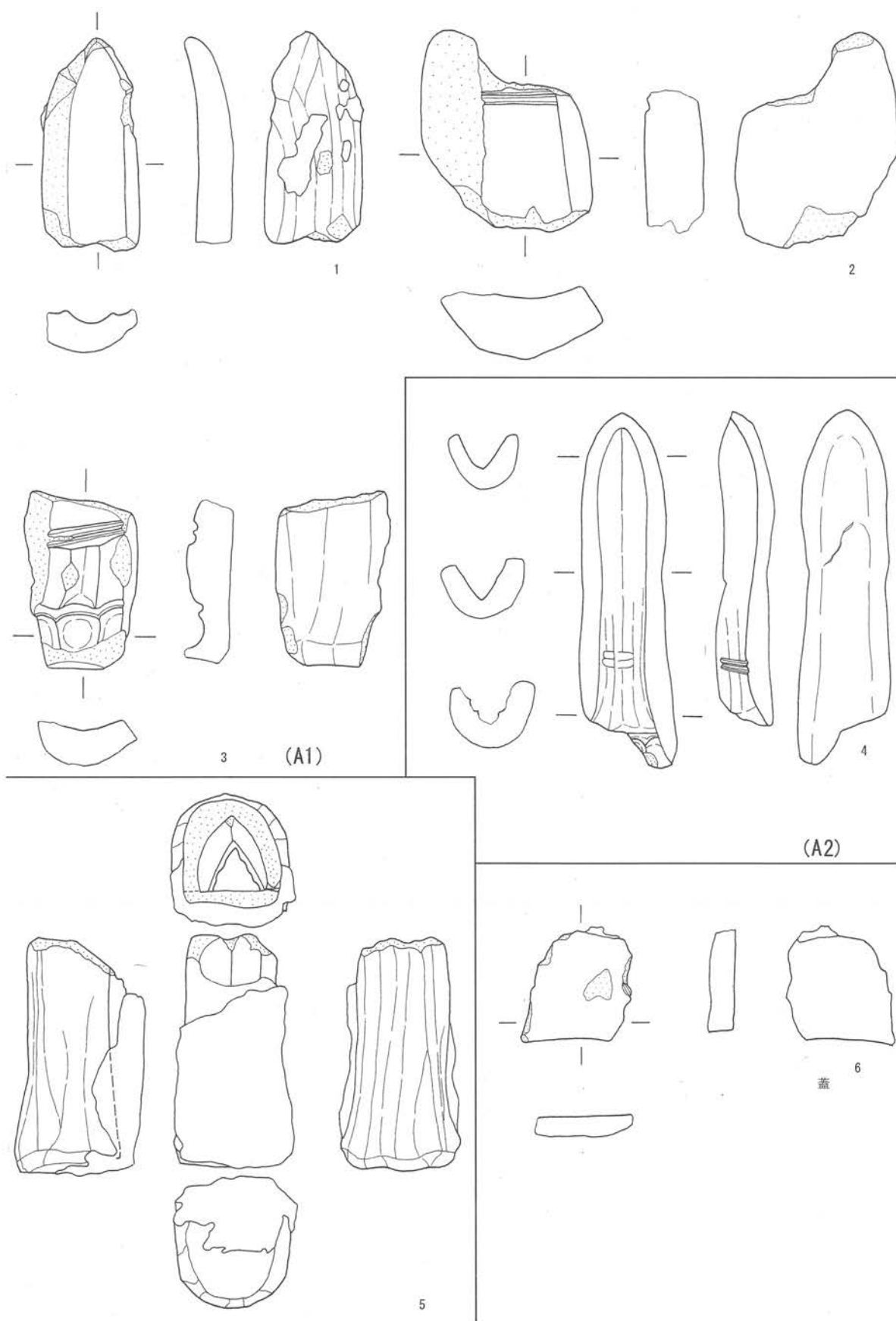


图142 獸脚鑄型分類 (2)

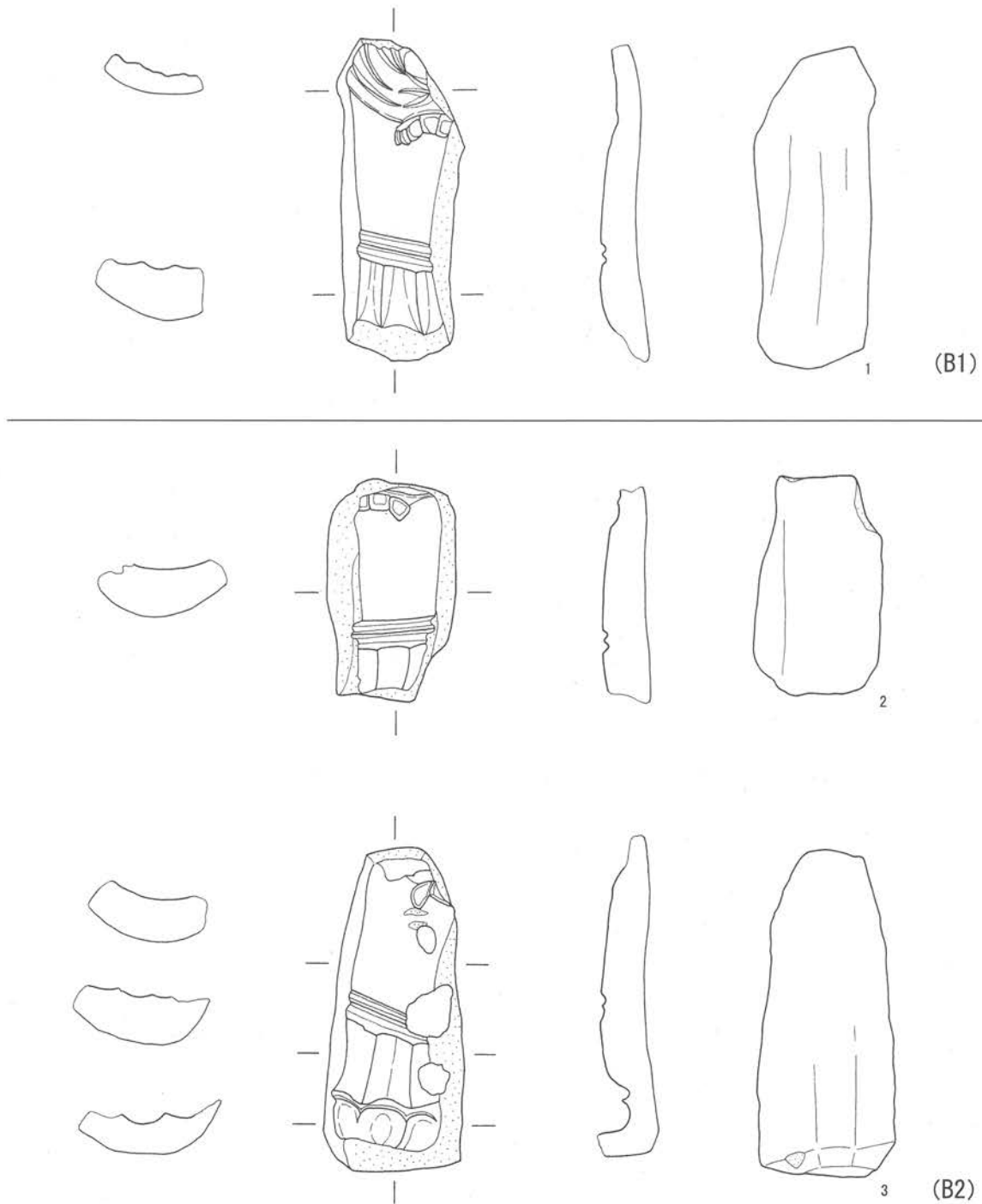


図143 獣脚鑄型分類 (3)

してなく、また最も判断が容易な獣面についても部分的な範囲のみの残存範囲であるため、相対的な比較は困難な状況である。ここではあえてB類の相違点を指摘しておく。図143-1は最も獣面が残存している資料である。表現された歯は四角で表現され、端部に向かうにつれてその大きさは小さくなるようである。歯の上部には斜め上方に向かう頬筋が表現される。頬筋の一角には大きく見開き、釣りあがった眼が確認される。同図2は獣脚鑄型右半の資料である。残存する獣面は最も外側にあたる八重歯のように尖った犬歯とその内側に並ぶ四角の前歯が見

られる。

以上の観察を持ってみれば、2と3は表現された歯の表現に共通点が認められ、同一個体もしくは同一の型を用いて製作された可能性の高い資料であるとして指摘しておく。一方1は表現された歯の外側にあたる部分に相違点が認められることから、上記2資料とは異なる型を用いて製作された資料であると考えておく。

このような観察、検討を見れば、B型についても2種類の型の存在が想定される。従ってA型、B型ともに鑄型製作に際して使用された型はそれぞれ2種類ずつ存在していたこととなる。

上記のA・B型の2種類の鑄型は獣脚製品として使用された用途、つまり火舎製品に付属する獣脚の設置場所による文様の相違が現れているという可能性を考えておきたい。B型は獣面が施されていることから、火舎に用いられた場合に正面に位置する脚を製作するための鑄型で、A型はB型以外の部分に用いられる脚を製作した鑄型と想定する。表26をみると、出土した獣脚鑄型はA：B＝1：2の関係を有しているものと言える。この比率から、製作された獣脚は獣面が施されたB類1脚に対して獣面が施されないA類2脚がセットになっていたものと考え、つまり当遺跡内で鑄造された獣脚類は火舎のような製品に用いられたと仮定した場合、その火舎の脚は獣面が施された獣脚1脚、獣面のない脚2脚、合計3本の脚で構成されていた製品であると推察する。また、A類、B類ともに2種類の型に細分されることから、同じ火舎でも文様表現のことなる2種類の火舎を製作していた可能性がある。ただし、当調査地点から出土した獣脚鑄型についてはその出土量が14点と非常に少ないものであることから、統計的な信頼性は低いと言わざるを得ない。従って、ここでは可能性のひとつとして提示するに留める。

鑄込み方法

ここでは、これらの獣脚鑄型への鑄込み方法についてまとめる。敢えてこの項を設けた理由は、猪倉B遺跡において検討された鑄込み方法とは明らかに異なる点が認められことによる。

まず、猪倉B遺跡における鑄込み方法を整理する(註2)。猪倉B遺跡から出土した獣脚鑄型の下端には外面から開いた円錐状の小穴が必ず存在しており、小穴の器面及び脇は被熱を受けたため、灰色に変色している点をあげ、この小穴を鑄込み口として位置付けている。

川内迫B遺跡C地点から出土した獣脚鑄型を見ると、猪倉B遺跡出土例で獣脚下端に認められる小穴が存在している資料は全くない。従って、猪倉B遺跡出土の鑄型をもって想定された鑄込み方法を、そのままあてはめて考えるわけにはいかない。

そこで、改めて当調査地点から出土した資料をもって、鑄込作業を考えてみる必要がある。

まずは図142-5に図示した資料に注目する。この資料は鑄型背面にあたる部分に蓋を被せ、更に蓋を固定するために粘土を用いて鑄型と蓋を被覆している状況が良くわかる。この資料から、鑄型の使用にあたっては鑄型と蓋がセットで使用されたことが知ることができる。鑄型の下端部には猪倉B遺跡出土例のような小穴は存在していない。またこの他にも蓋と思われる破片が1点出土していることも、上述の使用方法を裏付ける。さて、問題は蓋と粘土によって被覆された鑄型のどの部分から湯を流し込むかであるが、当地点から出土した資料ではこれまで言われてきたように、鑄型上端に位置する三角形の開口部を考えざるを得ない。まず鑄型の形

状が良くわかる図 141-1・2をもって解説する。取り上げた資料は直接的な接合関係にはないものの、同一個体の可能性が高い資料である。獣脚鑄型の背面は平坦に仕上がっており、蓋を被せる際に大きな支障はない。この平坦部は鑄型上端に向かうと一端突出した後、斜めに切れ下がる。従って、鑄型の背面に蓋が被さった場合に鑄型上端部には三角形の開口部が存在することとなる。一方、図 141-2 では鑄型の下端部には外面から穿たれた小穴は存在しない。

鑄型に湯を注ぎこんだ際、湯口付近には被熱による熱変化が起きることは容易に想像されるが、この想定を支持する痕跡が現われている。三角形の開口部には鑄型背面から外面にかけた範囲に被熱による色調の変化が明瞭に現われている。被熱を受けた範囲は鑄型内面から背面端部、そして鑄型の外面にまで及ぶ。従って、川内迫B遺跡群C地点から出土した鑄型は、鑄型上端に設けられた三角形の開口部から湯を注ぐと考えるのが最も妥当であると思われる。

次に問題となるのが、獣脚と鍋部の接合方法である。猪倉B遺跡の検討では、火舎製品の製作は、獣脚鑄型と器物鑄型を接合し一体となった火舎鑄型を倒立させ、鍋部の底に設けられた湯口ならびに獣脚下端部に穿たれた小穴からそれぞれ湯を流し込むという方法を想定している。つまり獣脚と鍋部は一体の火舎製品として製作されることとなる。一方当資料では獣脚鑄型と器物鑄型を接合した痕跡、更には獣脚鑄型に湯口となる小穴が存在していないことことから、上述のような方法では鑄物製品の製作はできない。つまり、鑄型上部に設けられた三角形開口部から湯を流し込み、獣脚を製作した場合、獣脚と鍋部が個々に製作された可能性が高くなる。

とすれば、次に製作された獣脚と鍋部の接合方法が問題となるが、この問題については出土した獣脚鑄型ならびに器物鑄型資料を見る限り、両者の接合技法を想定することは困難であるといわざるを得ない。従って、この問題については今後の資料の増加と、検討に期待したい。

獣脚鑄型は器物鑄型によって製作された鍋状の器物に接合され密教にかかる行為に使用されると考えられる火舎を製作するものである。従って、これらの鑄型類の存在からは、当遺跡内では製鉄活動と共に鑄物製品が製作されていたことを示している。このことは、この時期には密教による宗教活動が浸透していたことを示す好例であり、当該期の原町市を中心とした地域においても密教に代表される宗教が広まっていたことを示すものと評価されよう。ただし、これらの遺物は出土遺跡が生産遺跡という遺跡の性格上、この遺跡内において宗教行為が執り行われていたと考えるよりは、生産された鉄とともに遺跡外へ搬出され、別の場所で使用された可能性も考慮しておかなければならない。

当遺跡群で製作された密教用具の供給先としては、当遺跡群から北東方向に約 4.5 km の地点に位置する行方郡家（泉麿寺跡）関連寺院が最も有力な候補地であろうが、市内には他にも寺院跡と想定される遺跡も所在しており、供給先の解明については今後の課題とせざるを得ない。また武井地区製鉄遺跡群における山田A遺跡や向田A遺跡では獣脚鑄型や器物鑄型と共に梵鐘や風鐸鑄型などが出土しているのに対して、本遺跡群から出土した鑄型類は火舎を製作した獣脚鑄型と器物鑄型のみ出土である点、鑄込み手法についても、山田A遺跡・向田A遺跡とは異なる手法が見られる点は大きな相違点であると考えられる（註2）。

これらの出土した製作された鑄物製品の相違や鑄物製作手法の違いは、それぞれの地区で活動

した工人グループの技術系譜の相違とともに供給先において必要とされた鑄物製品が武井地区製鉄遺跡群とは異なっていたものと考えられよう。

いずれにしても、本遺跡群から出土した鑄型はこの地域における宗教活動の一端とその製作に際して大きな知見を与えた反面、新たな課題を提示したと言えよう。

(荒)

《 参 考 文 献 》

- 1968 竹島国基「第1章 先史時代」『原町市史』 福島県原町市
- 1982 馬目順一他『楯葉天神原弥生遺蹟の研究』福島県楯葉町教育委員会
- 1982 白鳥良一「第7章考察 2遺物 (2)土器」『多賀城跡』政庁本文編 宮城県教育委員会・多賀城跡調査研究所
- 1983 長島雄一『赤沼遺跡試掘調査報告』原町市埋蔵文化財調査報告書 原町市教育委員会
- 1984 戸田有二「福島県原町市 入道迫瓦窯跡」『考古学研究室発掘調査報告書』国士舘大学文学部考古学研究室
- 1990 木本元治「福島県の黒色土器 (平安時代)」『東国土器研究』第3号 東国土器研究会
- 1993 石田明夫『会津・大戸窯 (遺構編)』会津若松市教育委員会
- 1994 石田明夫『会津・大戸窯 (遺物編)』会津若松市教育委員会
- 1995 堀 耕平『県道相馬浪江線付替え工事関連遺跡調査報告書 原遺跡』 原町市教育委員会
- 1996 須藤 隆「樹形罎式土器」『日本土器辞典』雄山閣
- 1996 穴沢和光「川内町口式土器」『日本土器辞典』雄山閣
- 1996 水沢教子「円田式土器」『日本土器辞典』雄山閣
- 1996 馬目順一「陣場式土器」「桜井式土器」「天神原式土器」『日本土器辞典』雄山閣
- 1996 戸田有二他「福島県の7世紀の土器」「福島県の8世紀の土器」「福島県の9世紀の土器」『日本土器辞典』雄山閣
- 1996 柳沼賢治「福島県の10世紀の土器」『日本土器辞典』雄山閣
- 2000 平岡和夫他『川内迫B遺跡群F地区』—弥生時代遺物包含層の調査—
日立建機株式会社土浦事業本部・有限会社山武考古学研究所・福島県原町市教育委員会
- 2000 荒 淑人「広畑遺跡」『県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書』1
福島県相双農林事務所・原町市教育委員会
- 2001 荒 淑人「町遺跡」『県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書』2
福島県相双農林事務所・原町市教育委員会
- 2001 荒 淑人「上ノ内遺跡」『原町市内遺跡発掘調査報告書』6 原町市教育委員会
- 2002 荒 淑人『国史跡 桜井古墳』原町市教育委員会
- 2002 二本松文雄「荒井前遺跡」『県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書』3
福島県相双農林事務所・原町市教育委員会
- 註1 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・東北電力株式会社『原町火力発電所関連遺跡調査報告』I~IX 福島県文化財調査報告書第236・265・281・297・310・315・336・343・344集 1990~92・94・95・97・98年。
- 註2 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・地域振興整備公団『相馬開発関連遺跡調査報告』I~V 福島県文化財調査報告書第215・234・312・236・333集 1989・90・95~97年。
- 註3 蛭沢遺跡群C・D群の羽口の蛍光X線分析結果では、出土した羽口は地元の粘土を用いて製作されたものと想定され、また出土した弥生土器の一部には明らかに当地方の胎土とは異なる成分を持つ土器が含まれていることが明らかとされている。(三辻利一 「付章 蛭沢遺跡群・川内迫B遺跡群出土土器類の蛍光X線分析」『蛭沢遺跡群C・D地区』原町市埋蔵文化財調査報告書第20集 日立建機株式会社・有限会社山武考古学研究所・原町市教育委員会 2000年)

第3章 今後の課題

前章までで、蛭沢遺跡群A地点ならびに川内迫B遺跡群において調査遺構、出土遺物についての報告を行った。最後に本開発計画地内における埋蔵文化財の取り扱いについて、今後に残された課題を記することで、本報告書のまとめとしたい。

本開発事業にかかる埋蔵文化財の調査には、現地発掘調査に7年、整理作業に5年の期間を費やし、本報告書が刊行された。調査の結果、9世紀を中心とした製鉄炉と、鉄生産にかかる諸活動の具体的な様相が明らかとされた。川内迫B遺跡群では1次製錬とともに2次精錬、鑄造活動を行っていることが明らかとされた点は、極めて重要な調査成果である。

ただし、本地区における埋蔵文化財の全ての調査が終了したわけではない。発掘調査が完全に終了した区域は、蛭沢遺跡群A・C・D地点、川内迫B遺跡群D・F・J・K・L・M・N地点2遺跡10地点で、蛭沢遺跡群B・E地点、川内迫B遺跡群C・E・G・H・I地点、西迫東迫横穴墓群、西迫遺跡の4遺跡9地点における埋蔵文化財の記録保存は図られていない。

特に川内迫B遺跡群C地点では調査途中で開発事業の見直しがなされ、発掘調査自体も途中で終了された。従って当時、遺構検出、精査作業が進行されていた遺構についても、記録作業が完了されていないものが多数存在し、現在も当時のままである。このような状況は埋蔵文化財保護の観点から見れば大きな問題であると考えられ、当地における埋蔵文化財における早急な記録の作成が必須である。

このような調査経過から、本地区内において再度開発事業を実施する場合には、表30のとおり、4遺跡9地点に所在する埋蔵文化財についてあらためた保存協議が必要であり、協議の結果、埋蔵文化財の保存が困難と判断された場合には、記録保存の発掘調査が必要である。

(荒)

遺 跡	表土除去	遺構検出	精 査	測 量	写 真	調査完了	備 考
川内迫B遺跡群	C	○	○	△	△	△	一部未完了 保存協議要
	D	○	○	○	○	○	平成9年度 記録保存済
	E	○	×	×	×	×	一部未完了 保存協議要
	F	○	○	○	○	○	平成10年度 記録保存済
	G	×	×	×	×	×	未着手 保存協議要
	H	×	×	×	×	×	未着手 保存協議要
	I	×	×	×	×	×	未着手 保存協議要
	J	○	○	○	○	○	平成9年度 記録保存済
	K	○	○	○	○	○	平成9年度 記録保存済
	L	○	○	○	○	○	平成9年度 記録保存済
蛭沢遺跡群	M	○	○	○	○	○	平成9年度 記録保存済
	N	○	○	○	○	○	平成9年度 記録保存済
	A	○	○	○	○	○	平成5年度 記録保存済
	B	×	×	×	×	×	未完了 保存協議要
	C	○	○	○	○	○	平成9年度 記録保存済
西迫遺跡	D	○	○	○	○	○	平成9年度 記録保存済
	E	×	×	×	×	×	未完了 保存協議要
西迫東迫横穴墓群	×	×	×	×	×	未完了 保存協議要	

表30 調査完了表

圖 版





1 蛭沢遺跡群 A 地点



2 川内迫B遺跡群C地点

図版2
試掘調査



1 19T (東から)



2 21T (東から)



3 22T (南から)



4 35T (南から)



5 38~42T (南から)



6 39T (東から)



5 40T (南から)



8 42T (南西から)



1 1号製鉄炉跡 遠景



2 1号製鉄炉跡 近景



3 1号製鉄炉跡 土層断面(1)



3 1号製鉄炉跡 土層断面(2)



5 1号製鉄炉跡 土層断面(3)



1 1号製鉄炉跡 全景



2 1号製鉄炉跡 炉内状況



1 2号製鉄炉跡 完掘状況(1)



2 2号製鉄炉跡 完掘状況(2)



1 2号製鉄炉跡 調査状況



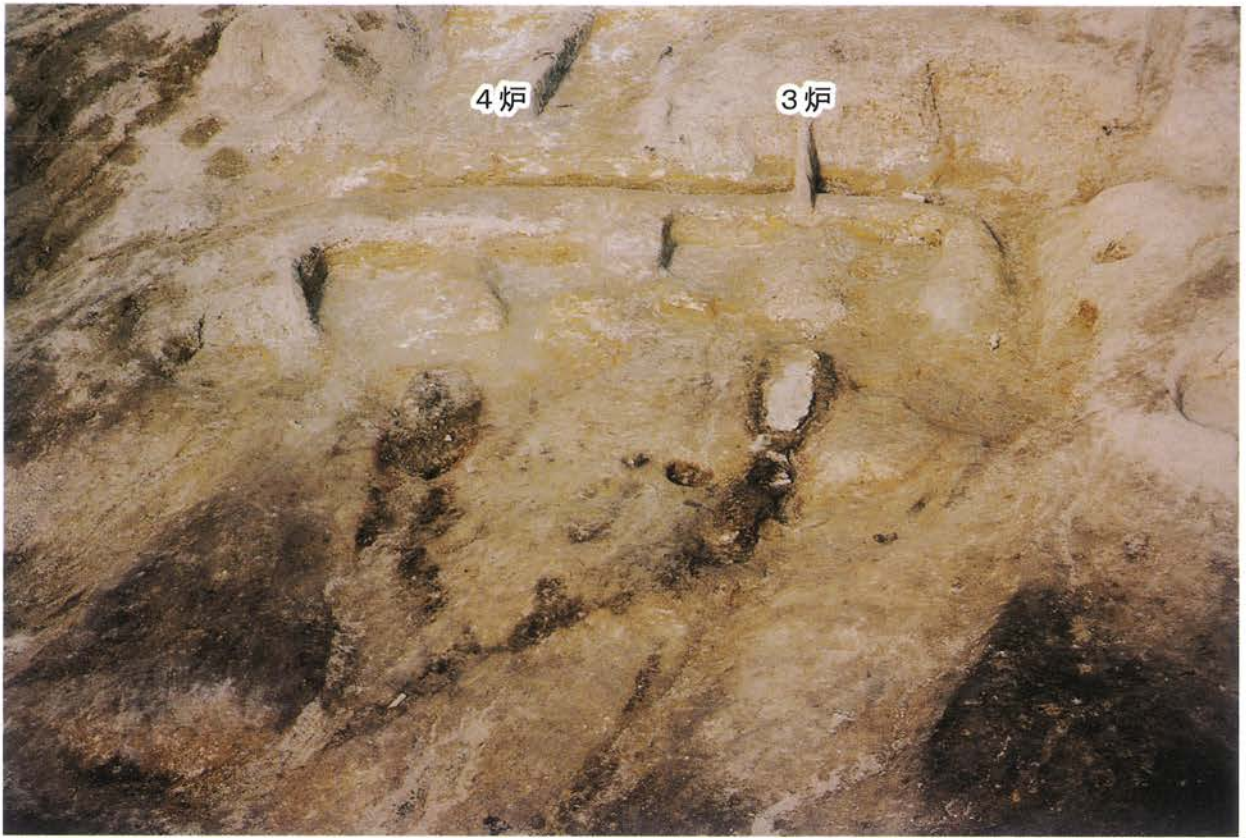
2 2号製鉄炉跡 土層断面(1)



1 2号製鉄炉跡 土層断面(2)



1 2号製鉄炉跡 土層断面(3)



1 3・4号製鉄炉跡 全景(1)



2 3・4号製鉄炉跡 全景(2)



1 3・4製鉄炉跡 全景(3)



2 3号製鉄炉跡 近景



1 3号製鉄炉跡 炉内全景



2 3号製鉄炉跡 炉低滓検出状況



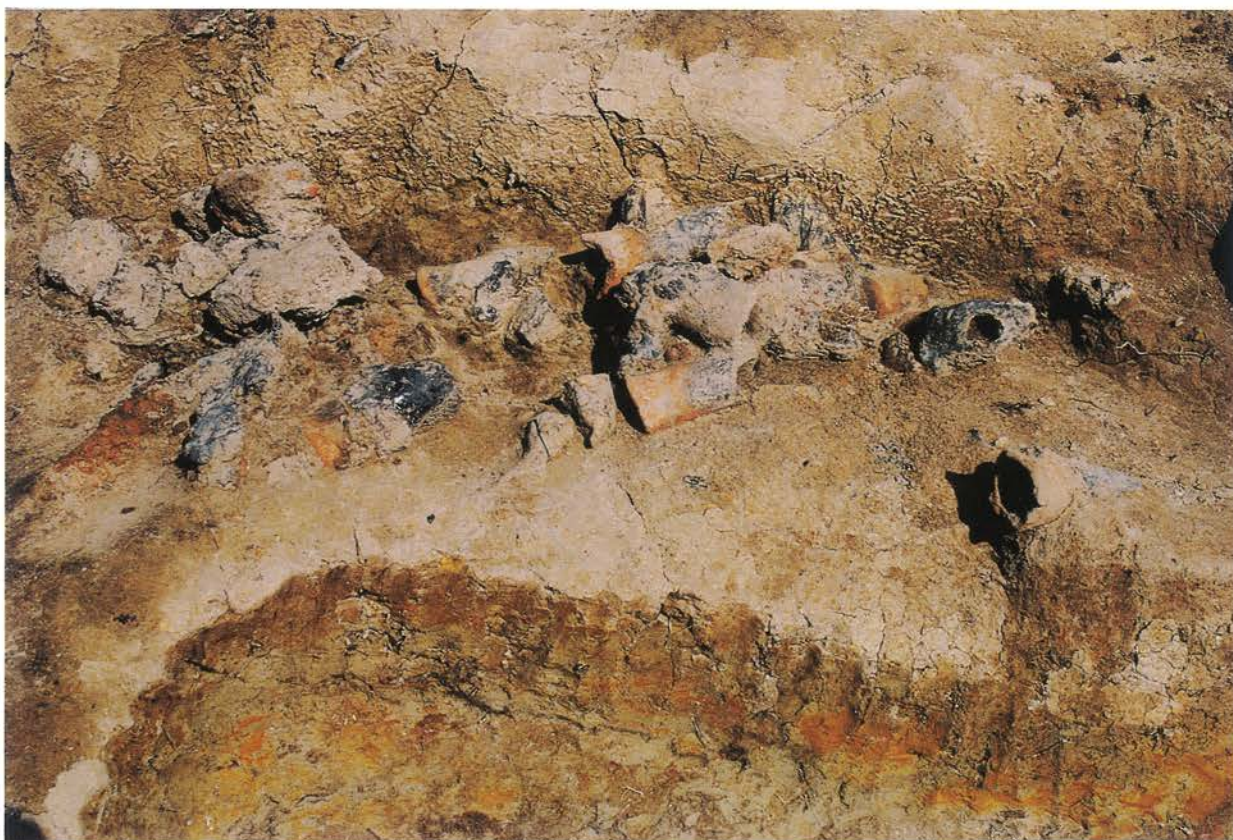
1 4号製鉄炉跡 ふいご部遠景



2 4号製鉄炉跡 ふいご部近景



1 4号製鉄炉跡 ふいご内遺物出土状況



2 4号製鉄炉跡 ふいご外遺物出土状況



1 4号製鉄炉跡 ふいご内遺物出土状況



2 4号製鉄炉跡 ふいご外遺物出土状況



1 4号製鉄炉跡 土層断面(1)



2 4号製鉄炉跡 土層断面(2)



3 4号製鉄炉跡 土層断面(1)



4 4号製鉄炉跡 土層断面(2)



5 4号製鉄炉跡 土層断面(1)



6 4号製鉄炉跡 土層断面(2)



7 4号製鉄炉跡 土層断面(1)



8 4号製鉄炉跡 土層断面(2)



1 3～6号製鉄炉跡



2 5・6号製鉄炉跡



1 5・6号製鉄炉跡 検出状況



2 5・6号製鉄炉跡 調査状況



1 5号製鉄炉跡 検出状況



2 5号製鉄炉跡 完掘状況



1 6号製鉄炉跡 検出状況



2 6号製鉄炉跡 炉内完掘状況



1 5号製鉄炉跡 土層断面(1)



2 5号製鉄炉跡 土層断面(2)



3 5号製鉄炉跡 土層断面(3)



4 5号製鉄炉跡 土層断面(4)



5 6号製鉄炉跡 土層断面(1)



6 6号製鉄炉跡 土層断面(2)



7 6号製鉄炉跡 土層断面(3)



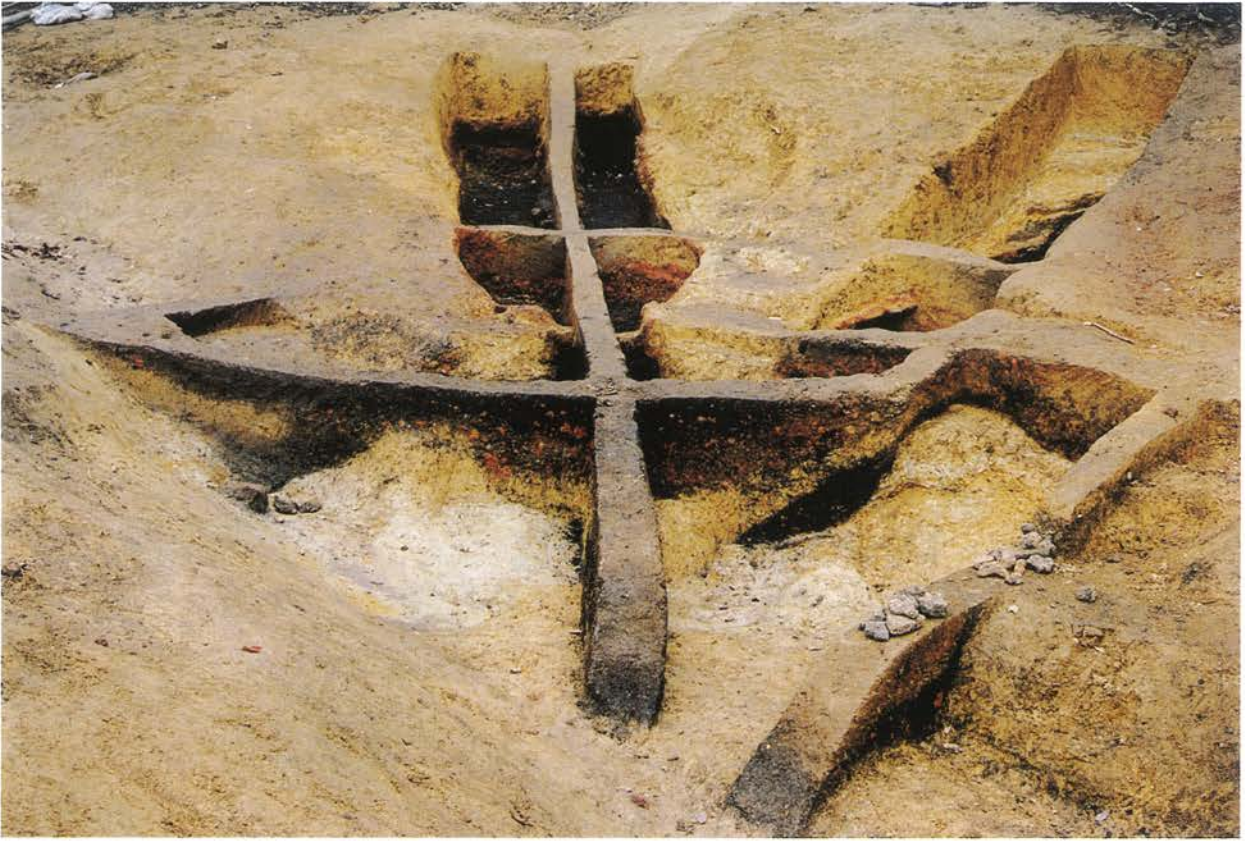
8 6号製鉄炉跡 土層断面(4)



1 1・2号木炭窯跡 検出状況



2 1・2号木炭窯跡 全景



1 1・2号木炭窯跡 調査状況



2 1号木炭窯跡 全景



1 1号木炭窯跡 作業場土層断面



2 1号木炭窯跡 焼成室土層断面



1 1号木炭窯跡 遺物出土状況



2 1号木炭窯跡 工具痕跡



1 1号木炭窯跡 完掘状況



2 1号木炭窯跡 完掘状況近景



1 1号木炭窯跡 完掘状況



2 1号木炭窯跡 土層断面(1)



3 1号木炭窯跡 土層断面(2)



4 1号木炭窯跡 土層断面(3)



5 1号木炭窯跡 土層断面(4)



6 1号木炭窯跡 土層断面(5)



7 1号木炭窯跡 土層断面(6)



8 1号木炭窯跡 土層断面(7)



1 1・2号木炭窯跡 全景



2 2号木炭窯跡 全景



1 2号木炭窯 全景



1 2号木炭窯跡 烧成室土层断面



1 2号木炭窯跡 奥壁



2 2号木炭窯跡 遺物出土状況



1 1号竪穴住居跡 全景



2 1号竪穴住居跡 カマド土層断面



1 土器埋設遺構(1)



2 土器埋設遺構(2)



1 廃滓場遠景 (1)



1 廃滓場遠景 (2)



1 廃滓場遠景(3)



1 廃滓場近景(1)



1 廃滓場遠景 (4)



1 廃滓場近景 (2)



1 廃滓場近景 (3)



1 廃滓場近景 (4)



1 廃滓場近景 (5)



1 廃滓場近景 (6)



1 廃滓場近景(7)



1 廃滓場近景(8)



1 廃滓場近景 (9)



1 廃滓場近景 (10)



1 廃滓場近景 (11)



1 廃滓場近景 (12)



1 廃滓場近景 (13)



2 廃滓場近景 (14)



3 廃滓場近景 (15)



3 廃滓場近景 (16)



5 廃滓場近景 (17)

図版40 川内迫B遺跡群C地点



1 調査前(1)



2 調査前(2)



3 調査前(3)



4 調査前(4)



5 調査前(5)



6 調査前(6)



1 表土除去後(1)



2 表土除去後(2)



1 表土除去後(3)



2 表土除去後(4)



3 表土除去後(5)



4 表土除去後(5)



5 表土除去後(7)



1 調査区全景(1)



2 調査区全景(2)



1 1号製鉄炉跡(1)



1 1号製鉄炉跡(2)



1 1号製鉄炉跡(3)



2 1号製鉄炉跡(4)



1 2号製鉄炉跡(3)



2 2号製鉄炉跡(4)



1 1号廃滓場 作業風景(1)



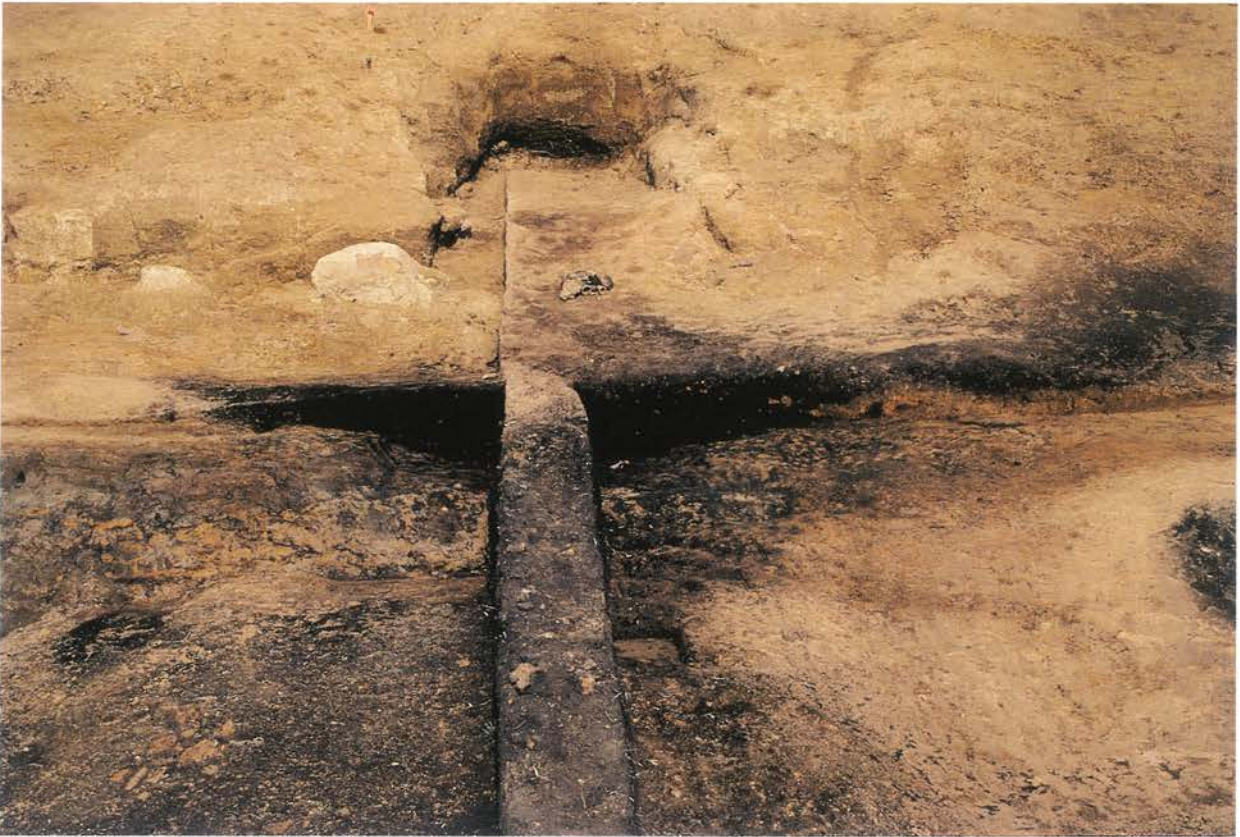
2 1号廃滓場 作業風景(2)



1 1号木炭窯跡



2 1号木炭窯跡



1 1号木炭窯跡土層断面(1)



2 1号木炭窯跡土層断面(2)



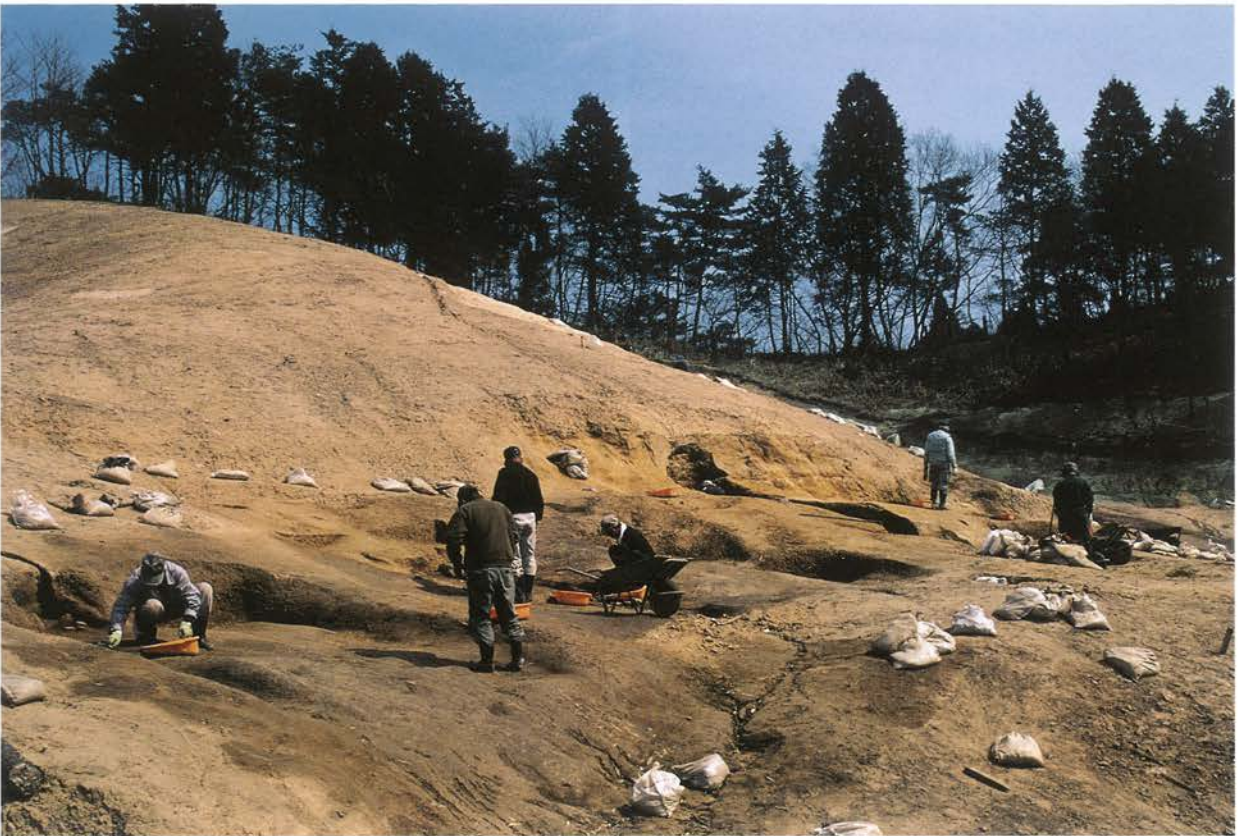
1 2号木炭窯跡検出状況



1 2号木炭窯跡土層断面



1 2号木炭窯跡検出状況



2 作業風景



1 3号木炭窯跡全景



2 3号木炭窯跡焚口付近遺物出土状況



3 3号木炭窯跡土層断面(1)



4 3号木炭窯跡土層断面(2)



5 3号木炭窯跡土層断面(3)



4 3号木炭窯跡半截全景



1 1号竖穴住居跡



2 1号竖穴住居跡



1 1号竖穴住居跡土層断面(1)



2 1号竖穴住居跡土層断面(1)



1 2号竖穴住居跡



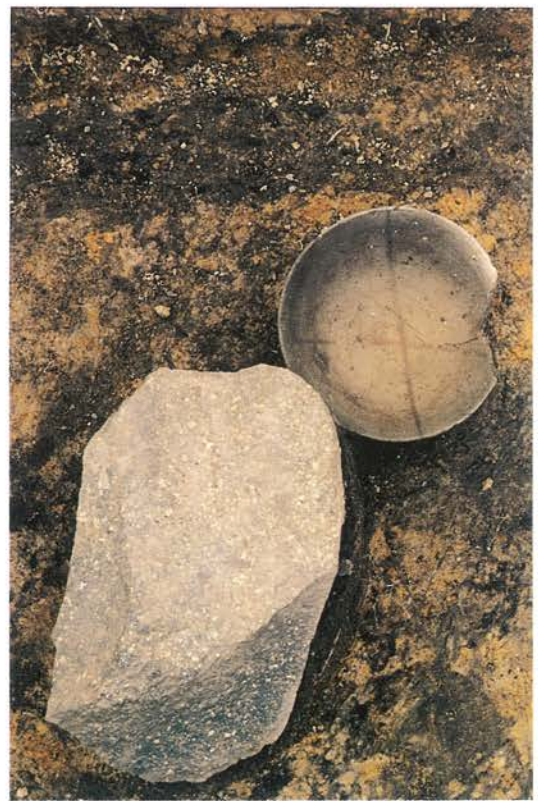
2 2号竖穴住居跡カマド部



1 須恵器出土状況(1)



2 須恵器出土状況(2)



3 須恵器出土状況(3)



1 3号竖穴住居跡



2 3号竖穴住居跡 土層断面



1 3号竪穴住居跡 カマド部近景



2 3号竪穴住居跡 カマド部近景



1 4号竪穴住居跡 全景



2 4号竪穴住居跡 カマド部全景



1 4号竖穴住居跡 鍛冶炉(1)



1 4号竖穴住居跡 鍛冶炉(2)



3 4号竖穴住居跡 土層断面



1 性格不明遺構



2 性格不明遺構



3 性格不明遺構 土層断面(1)



4 作業風景(1)



5 性格不明遺構 土層断面(2)



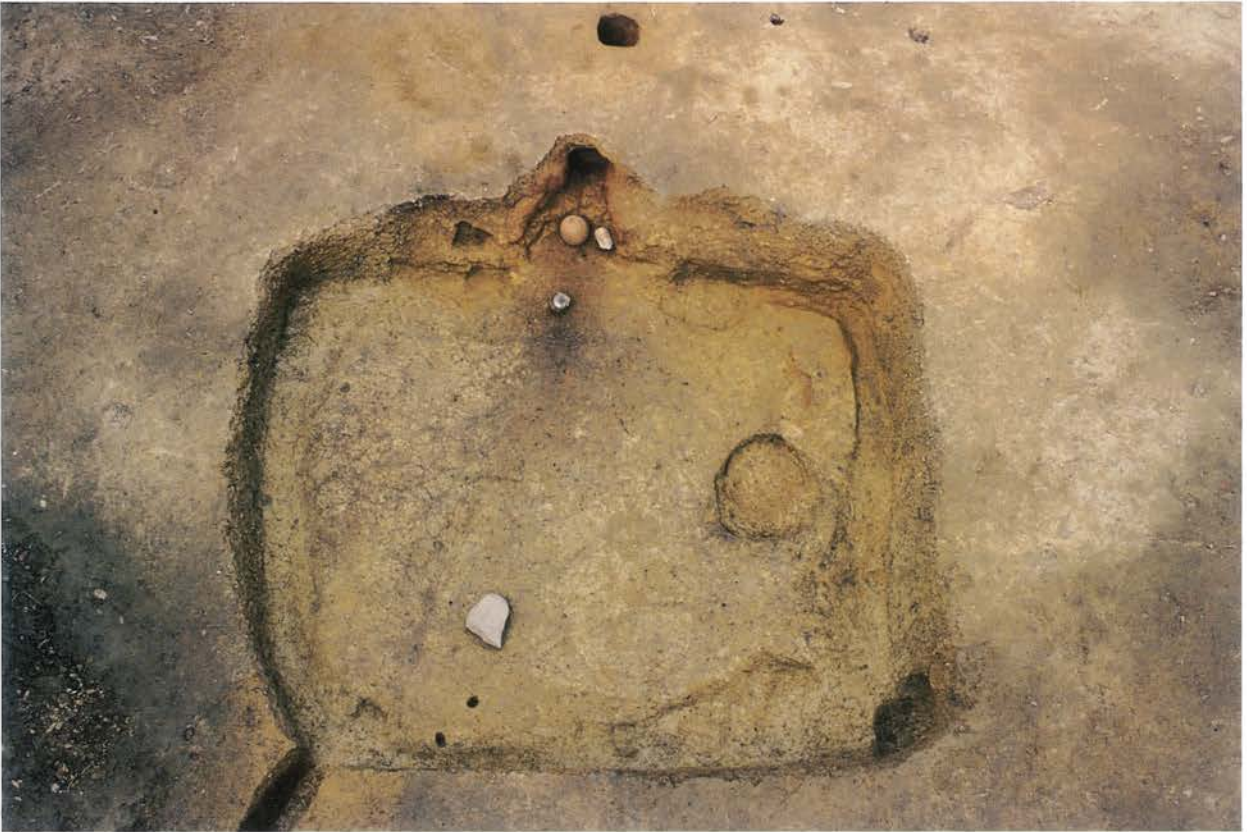
6 作業風景(2)



1 表土除去後



2 調査区全景



1 1号竖穴住居跡 全景



2 1号竖穴住居跡 検出状況



1 1号竖穴住居跡 土層断面



2 1号竖穴住居跡 全景



1 1号竖穴住居跡 壁周溝



2 1号竖穴住居跡 遺物出土状況



1 1号竖穴住居跡 カマド部近景 (左:古・右:新)



2 1号竖穴住居跡 全景



1 2号竖穴住居跡 全景



2 2号竖穴住居跡 検出状況



1 2号竖穴住居跡 土層断面



2 2号竖穴住居跡 全景



1 カマド部近景



2 カマド部調査後



1 調査区全景



2 1号製鉄炉跡 全景



1 1号製鉄炉跡 ふいご部近景



2 1号製鉄炉跡 炉内近景

図版72
川内迫B遺跡群E地点



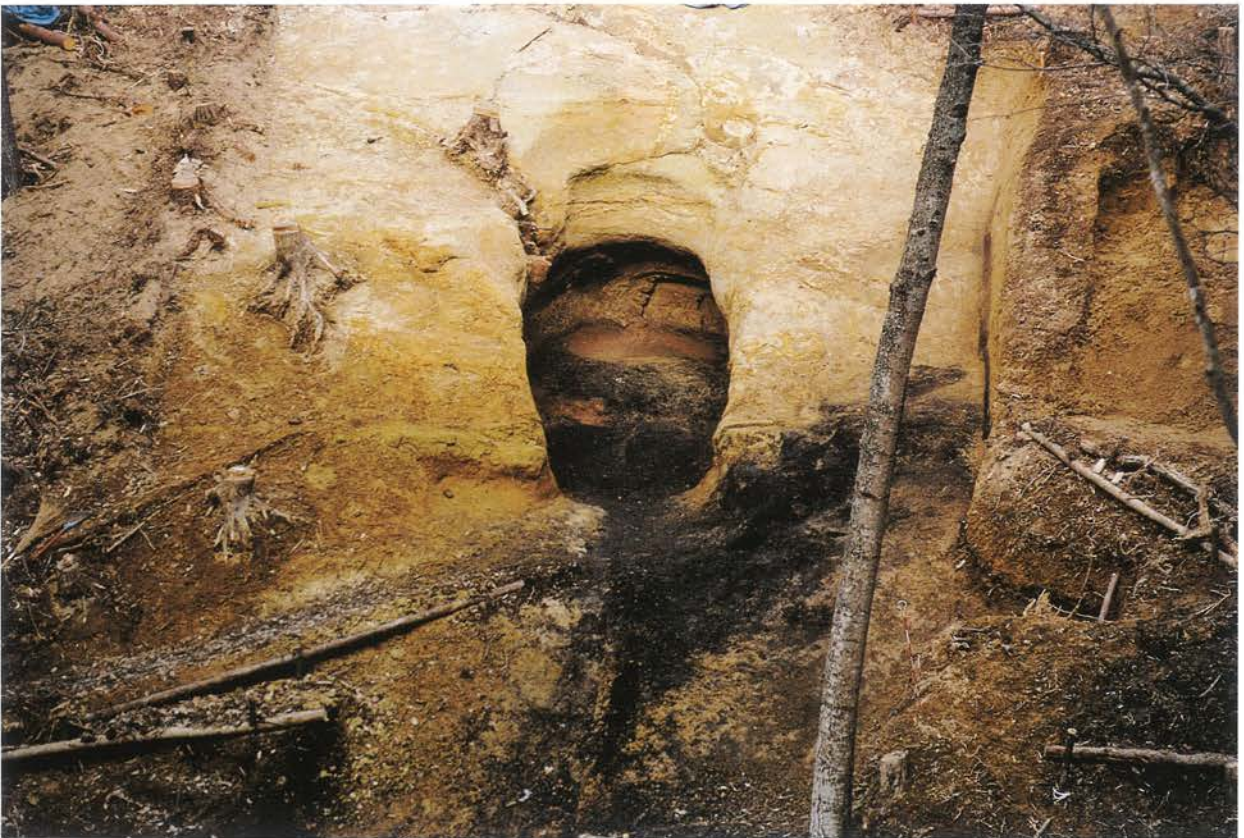
1 土坑群全景



2 11号土坑



1 1号木炭窯跡 確認状況



2 1号木炭窯跡 完掘状況



1 1号木炭窯跡 全景



2 1号木炭窯跡 煙道部近景



1 1号木炭窯跡 土層断面



2 1号木炭窯跡 作業面確認状況



1 調査前



2 K地点遠景



1 採掘坑跡(1)



1 採掘坑跡(2)



1 2号土坑



2 2号土坑土層断面



1 3号土坑



2 3号土坑土層断面



1 4号土坑(1)



2 4号土坑(2)



3 4号土坑 土層断面(1)



4 4号土坑 土層断面(2)



5 5号土坑



6 6号土坑 土層断面



1 1号木炭窯跡 検出状況



2 1号木炭窯跡 完掘状況



1 1号木炭窯跡



2 1号木炭窯跡 土層断面(1)



3 1号木炭窯跡 土層断面(2)



4 1号木炭窯跡 (操業面確認)



5 1号木炭窯跡 (操業面確認)



1 調査区



2 1号竖穴住居跡 完掘状況



1 遺物出土状況(1)



4 遺物出土状況(2)



5 1号竖穴住居跡 全景



1 1号木炭窯跡 全景



2 1号木炭窯跡 土層断面



1 1号木炭窯跡操業面確認(1)



2 1号木炭窯跡操業面確認(2)



1 1号木炭窯跡 煙道部



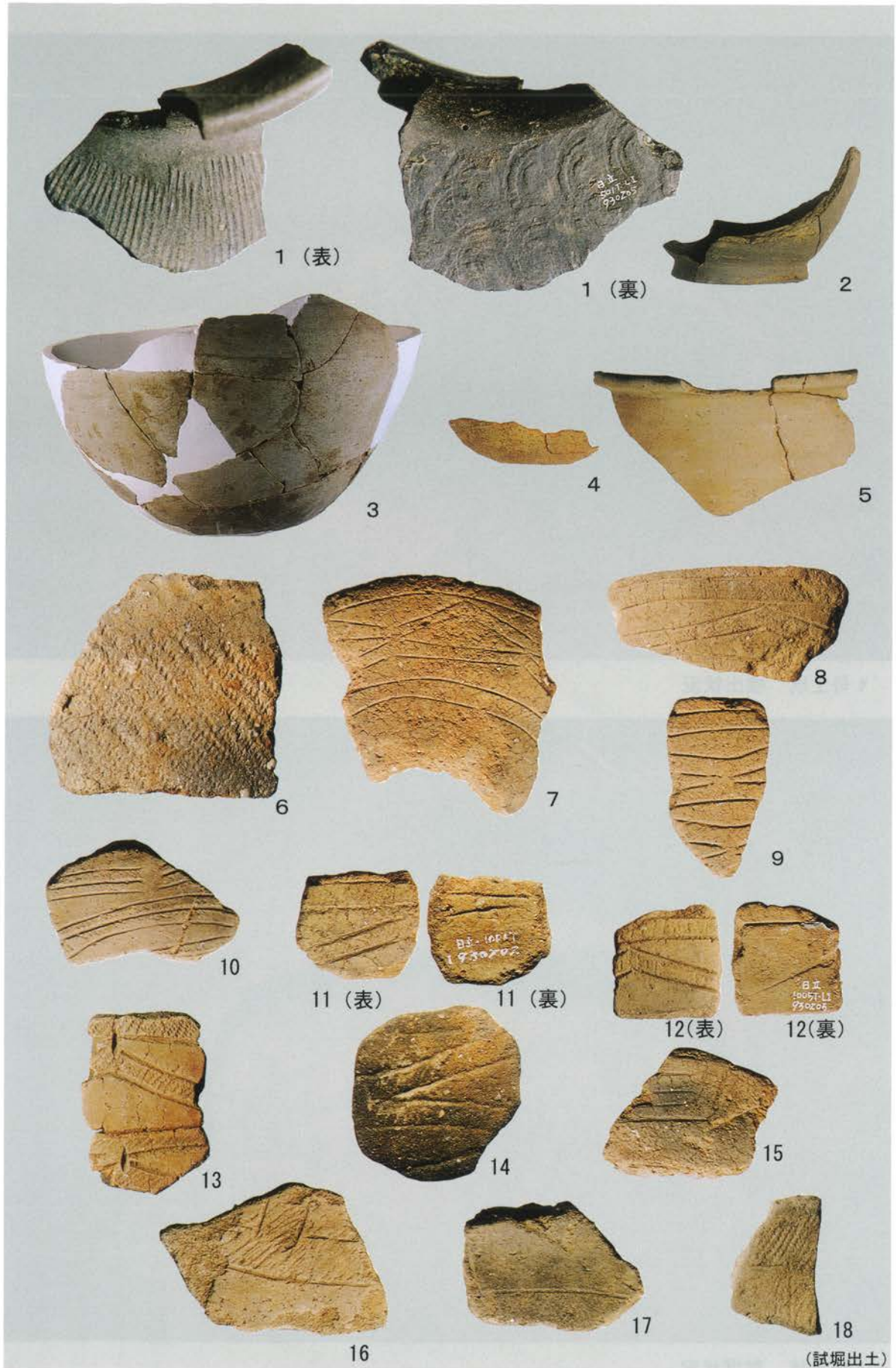
2 1号木炭窯跡 煙道部断面

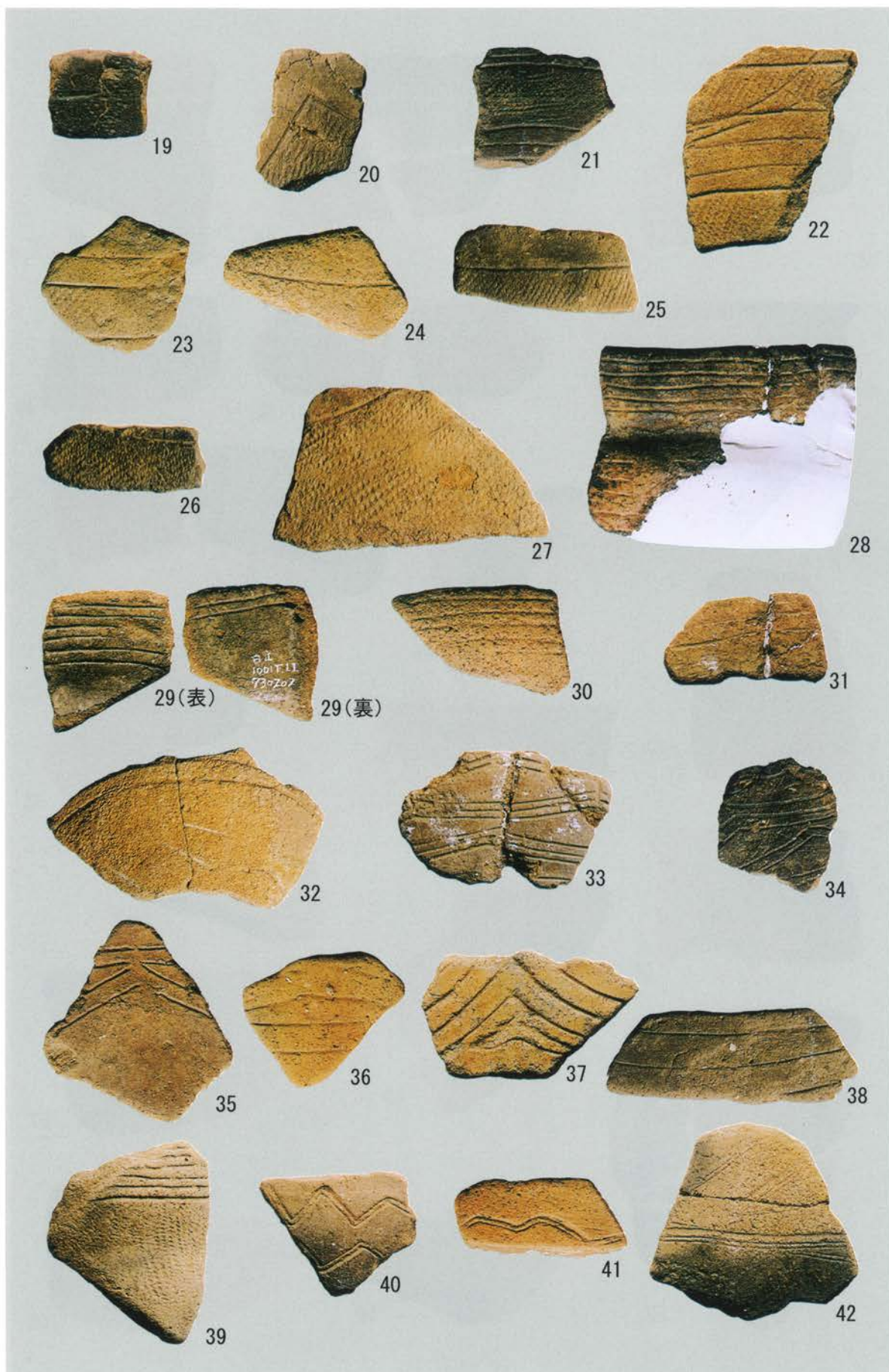


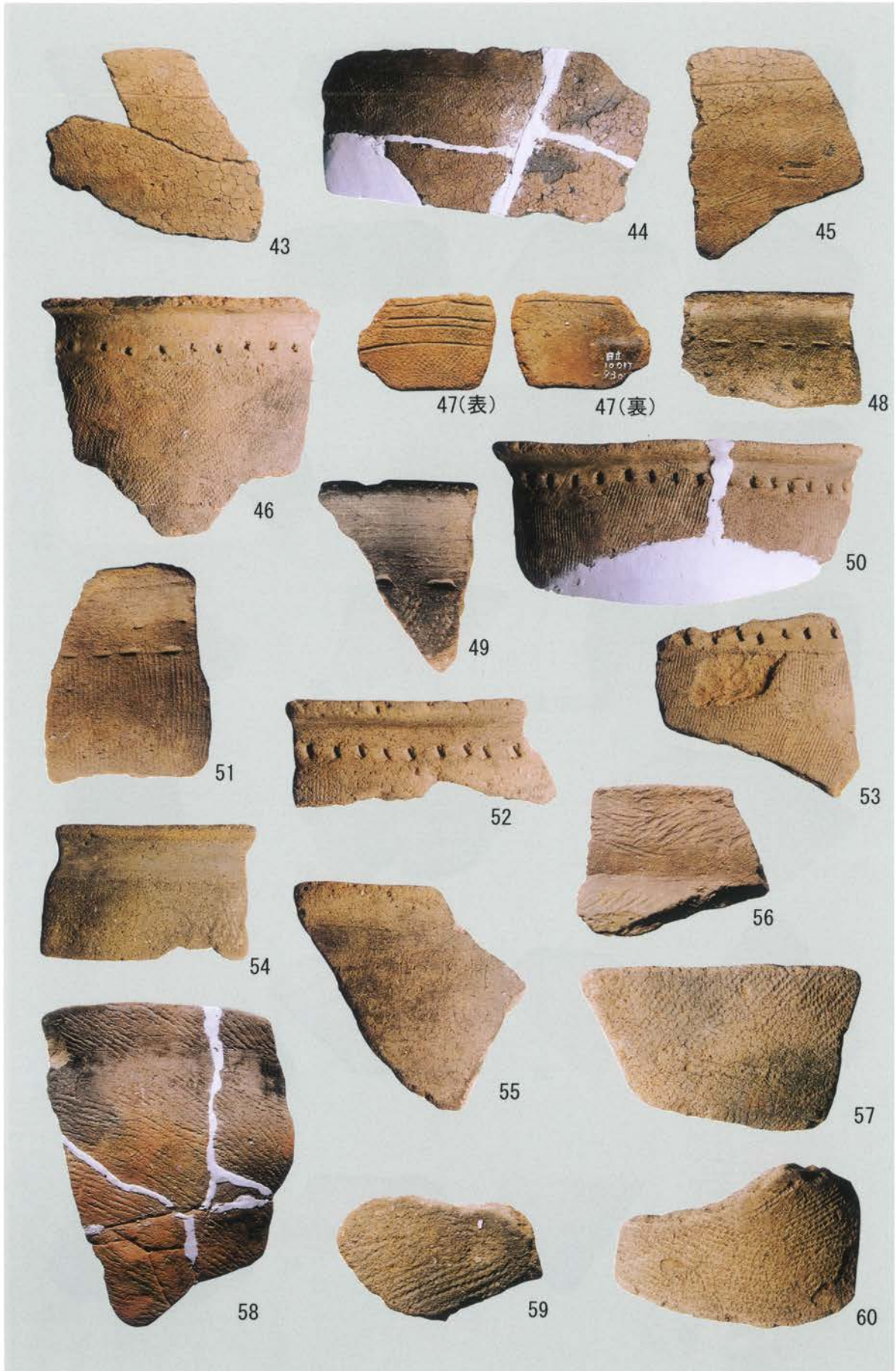
1 1号土坑 検出状況

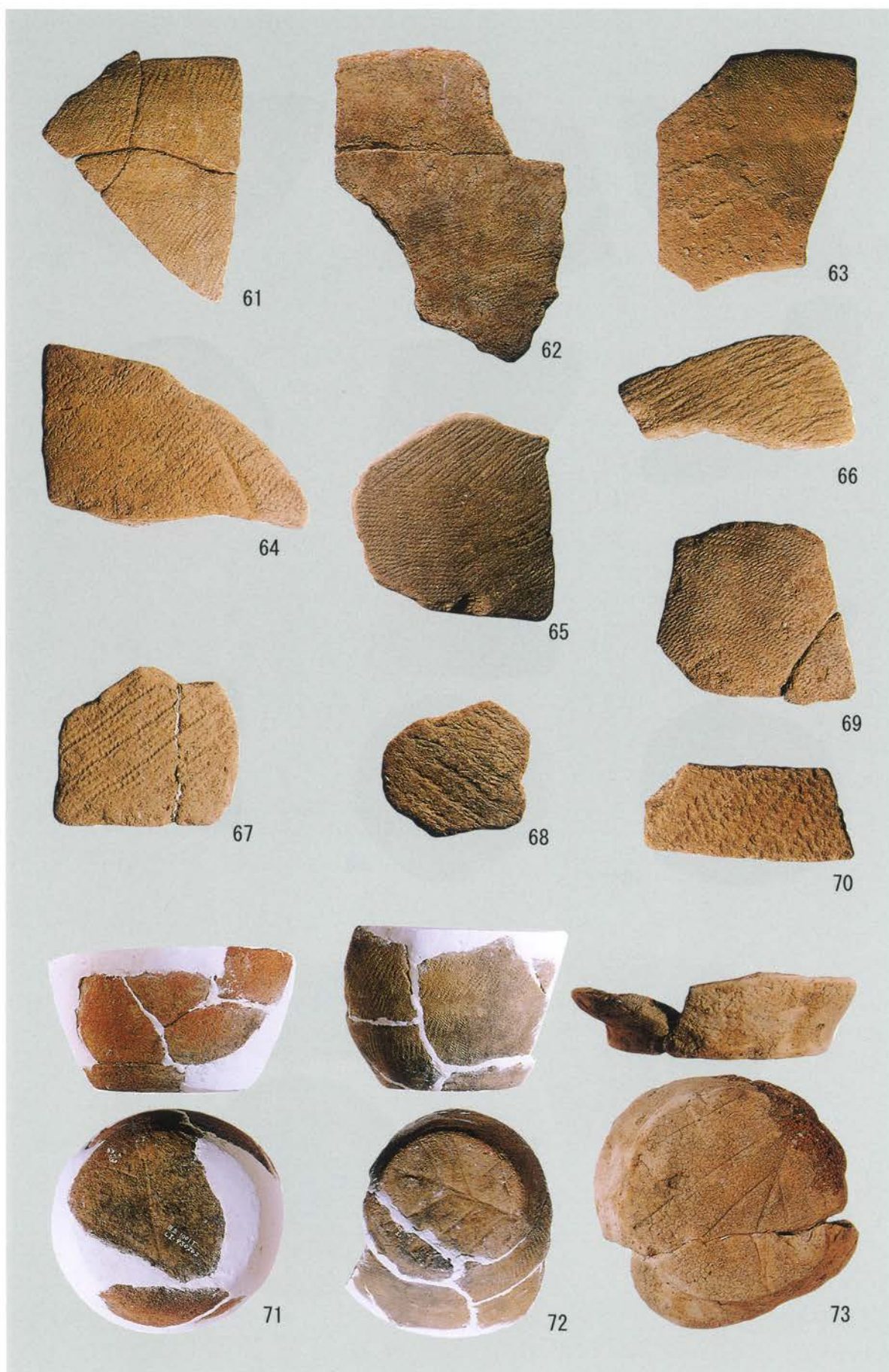


2 1号土坑 完掘状況

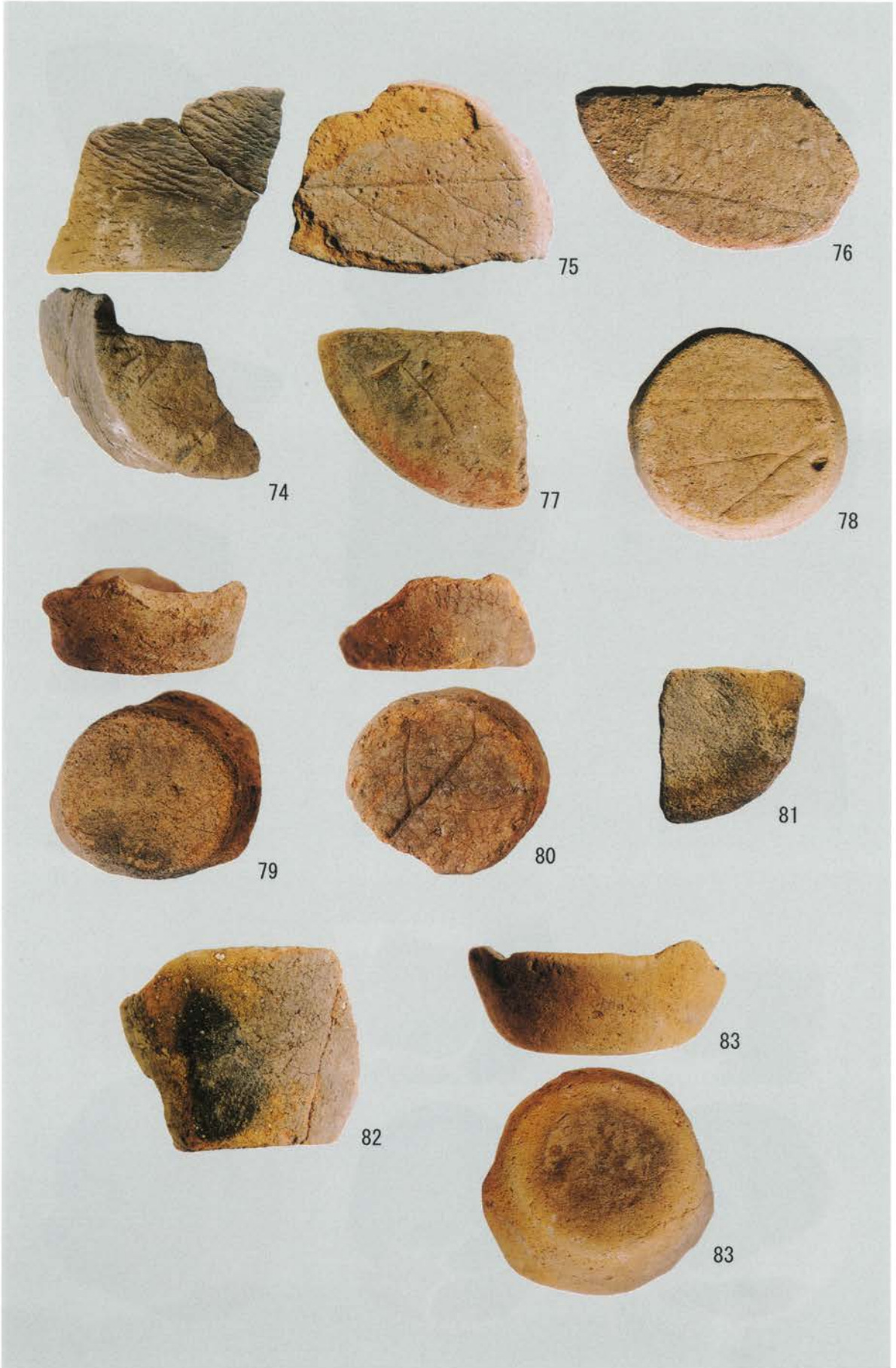




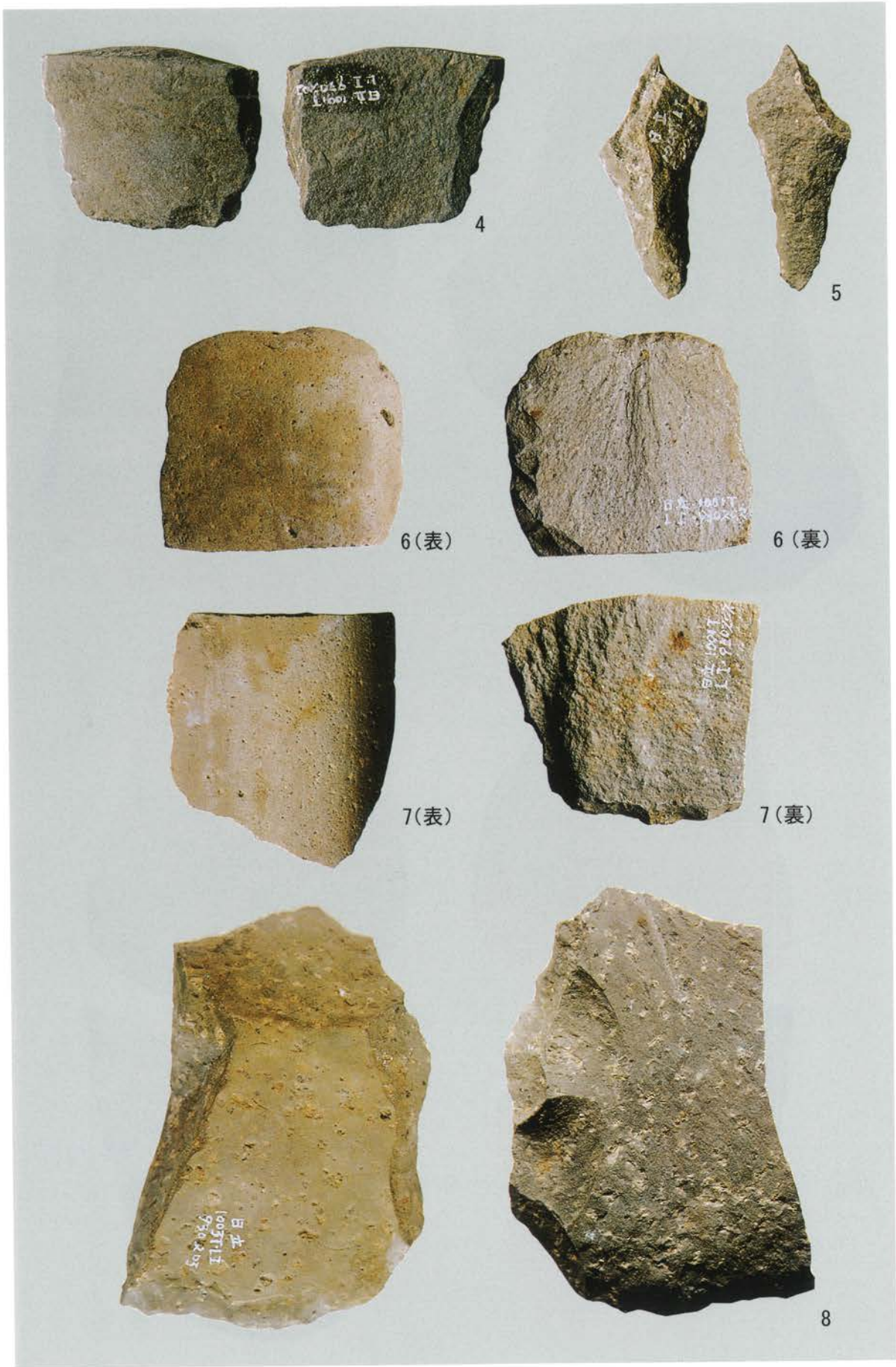




図版 92
出土遺物(5)

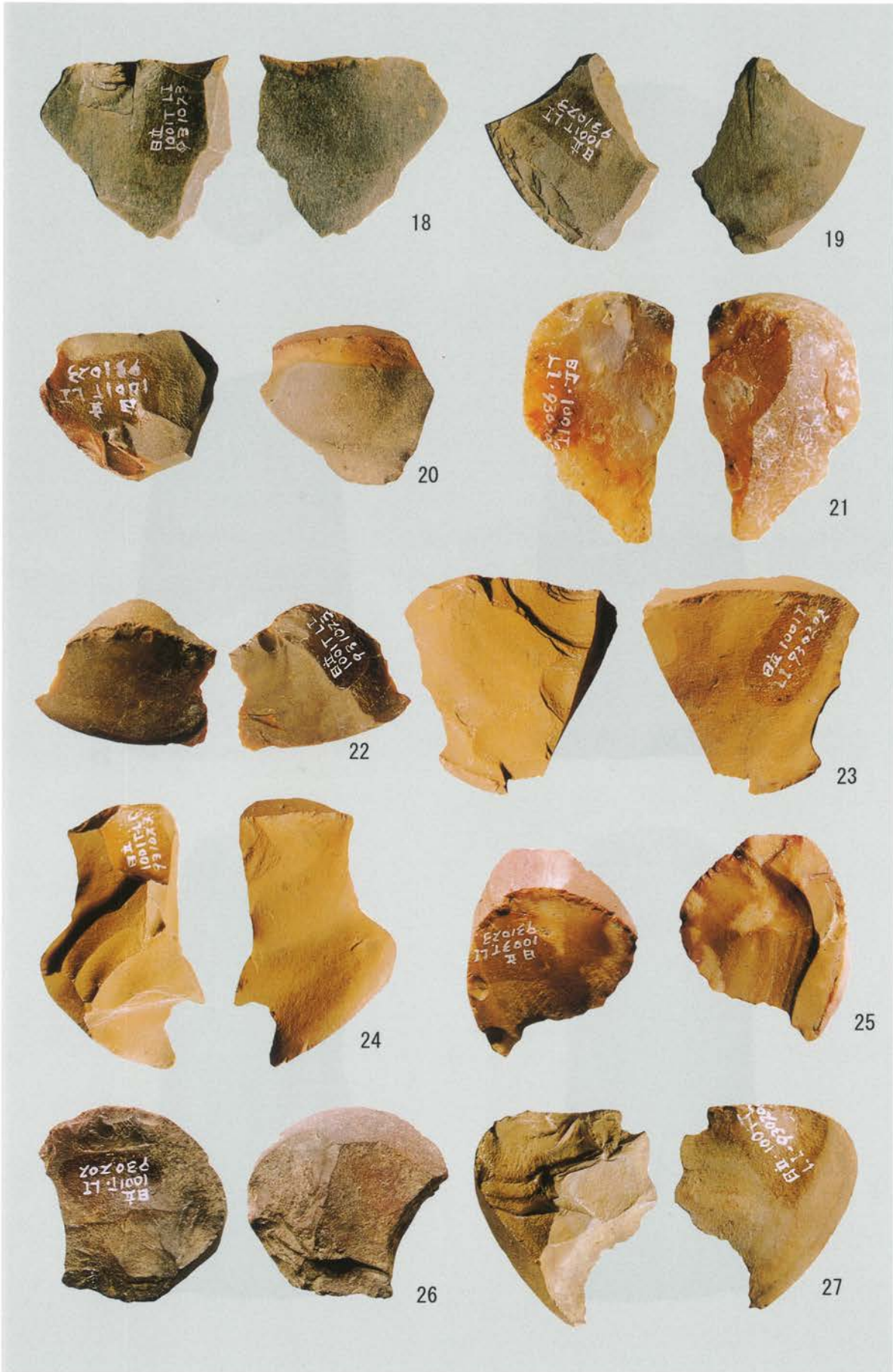
















31

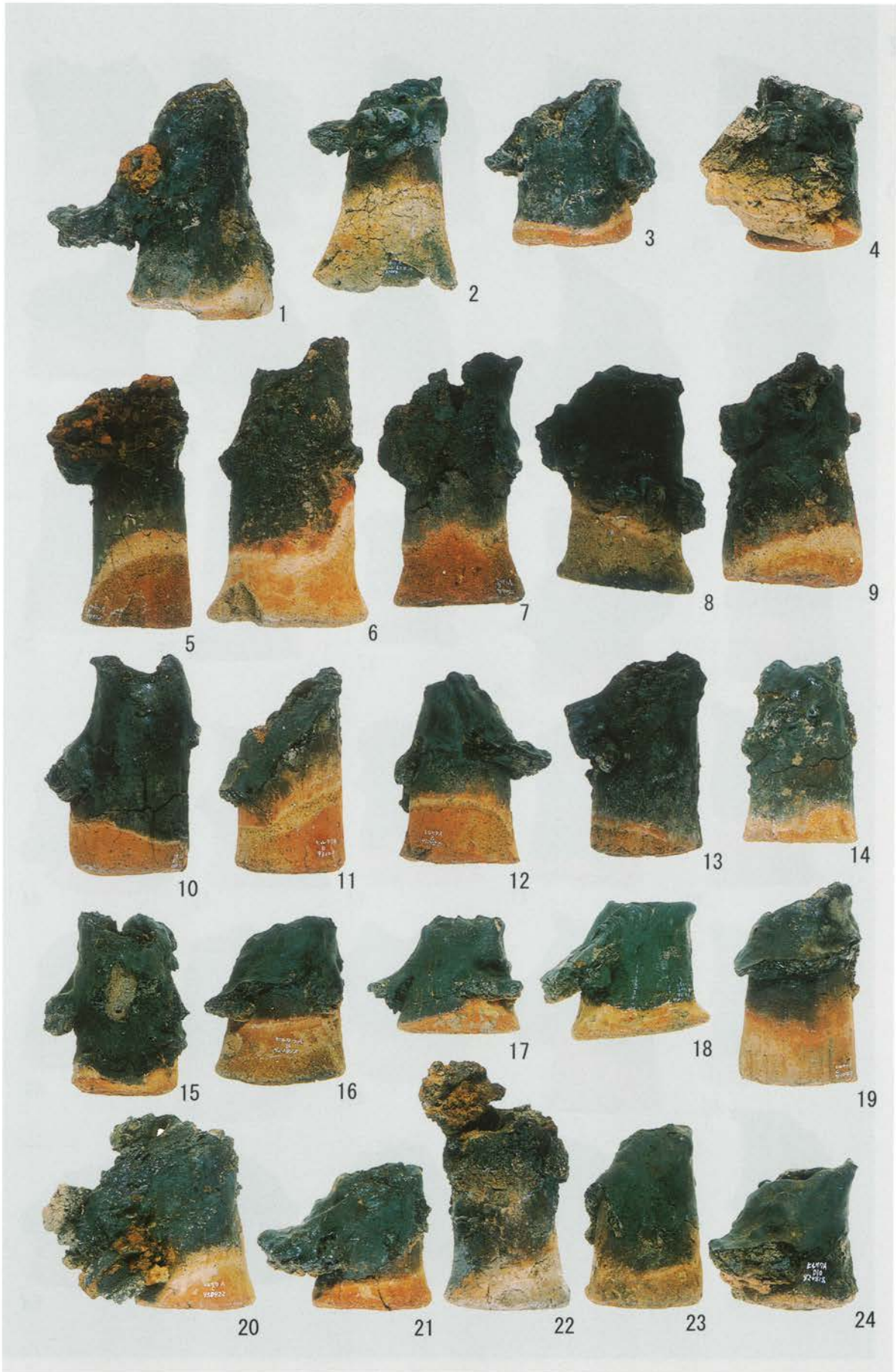


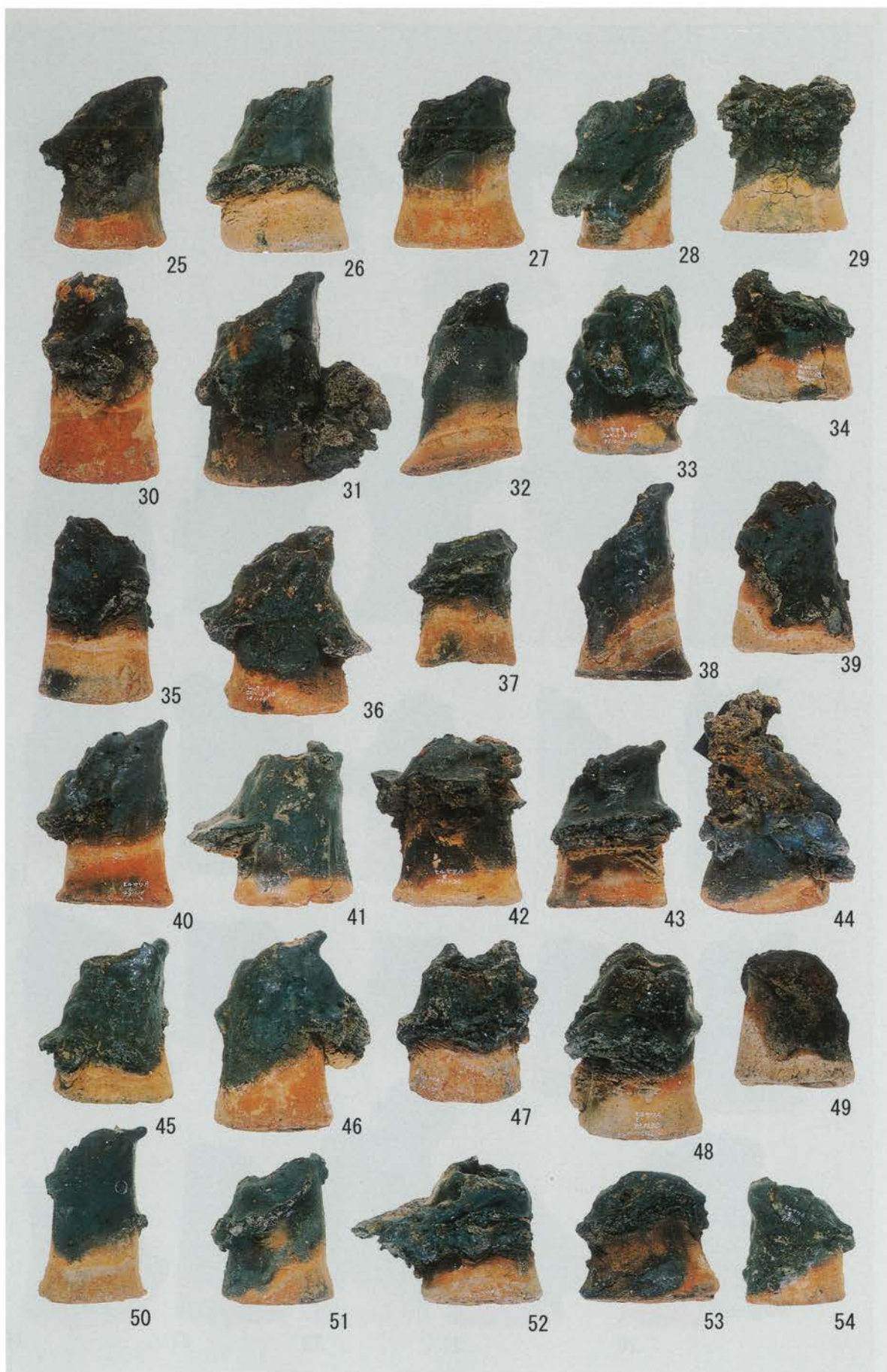
32

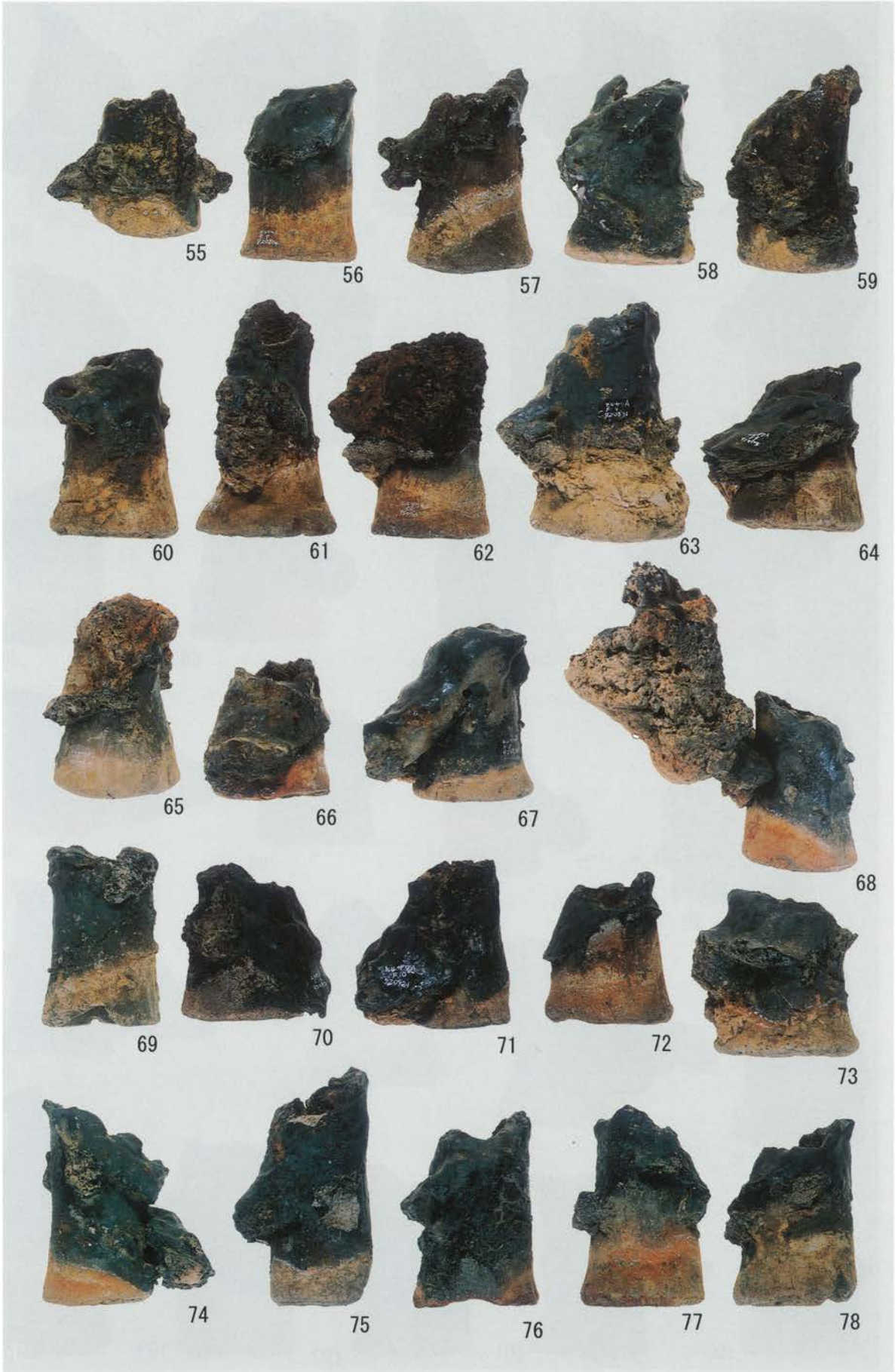


33

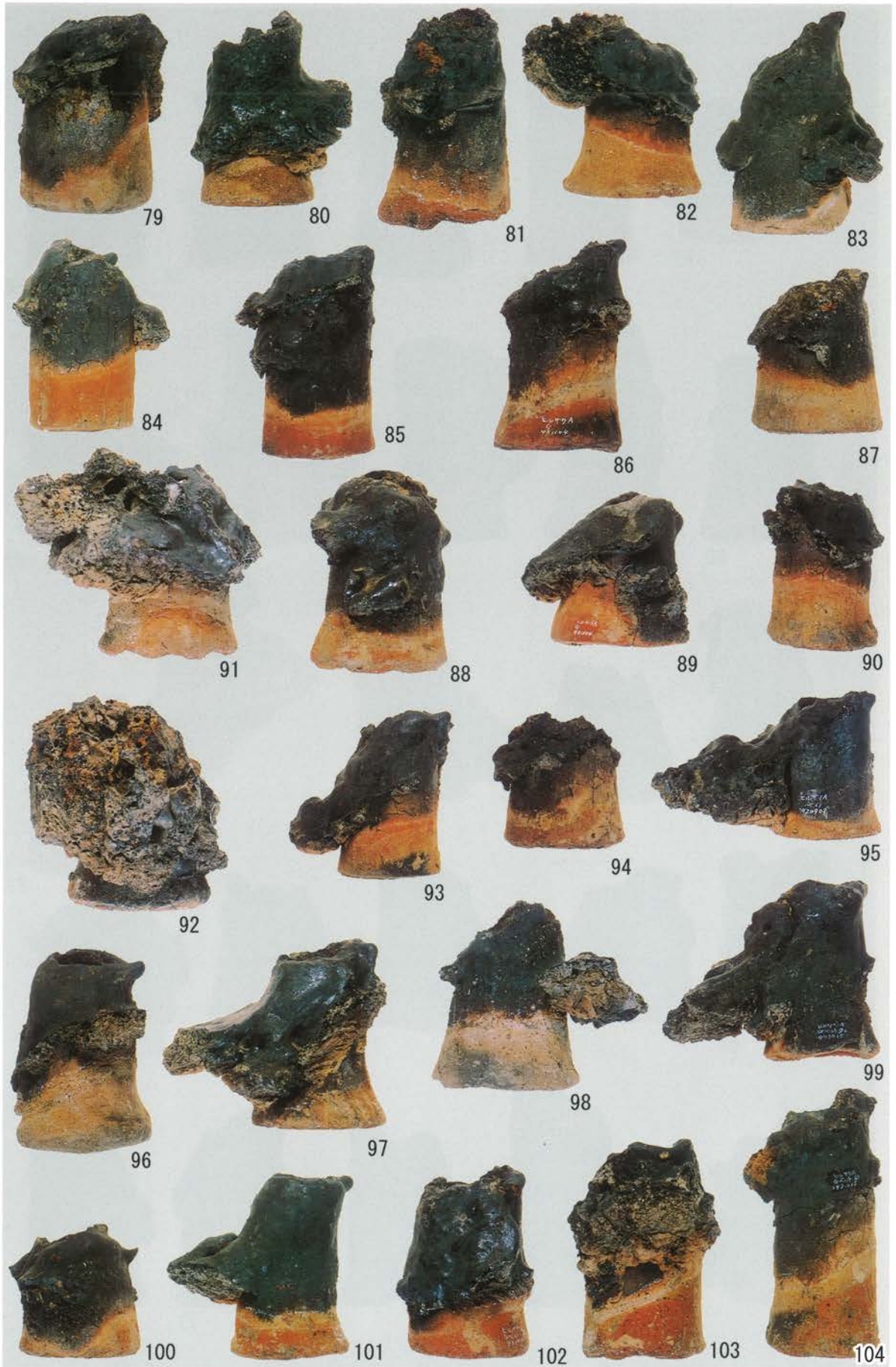






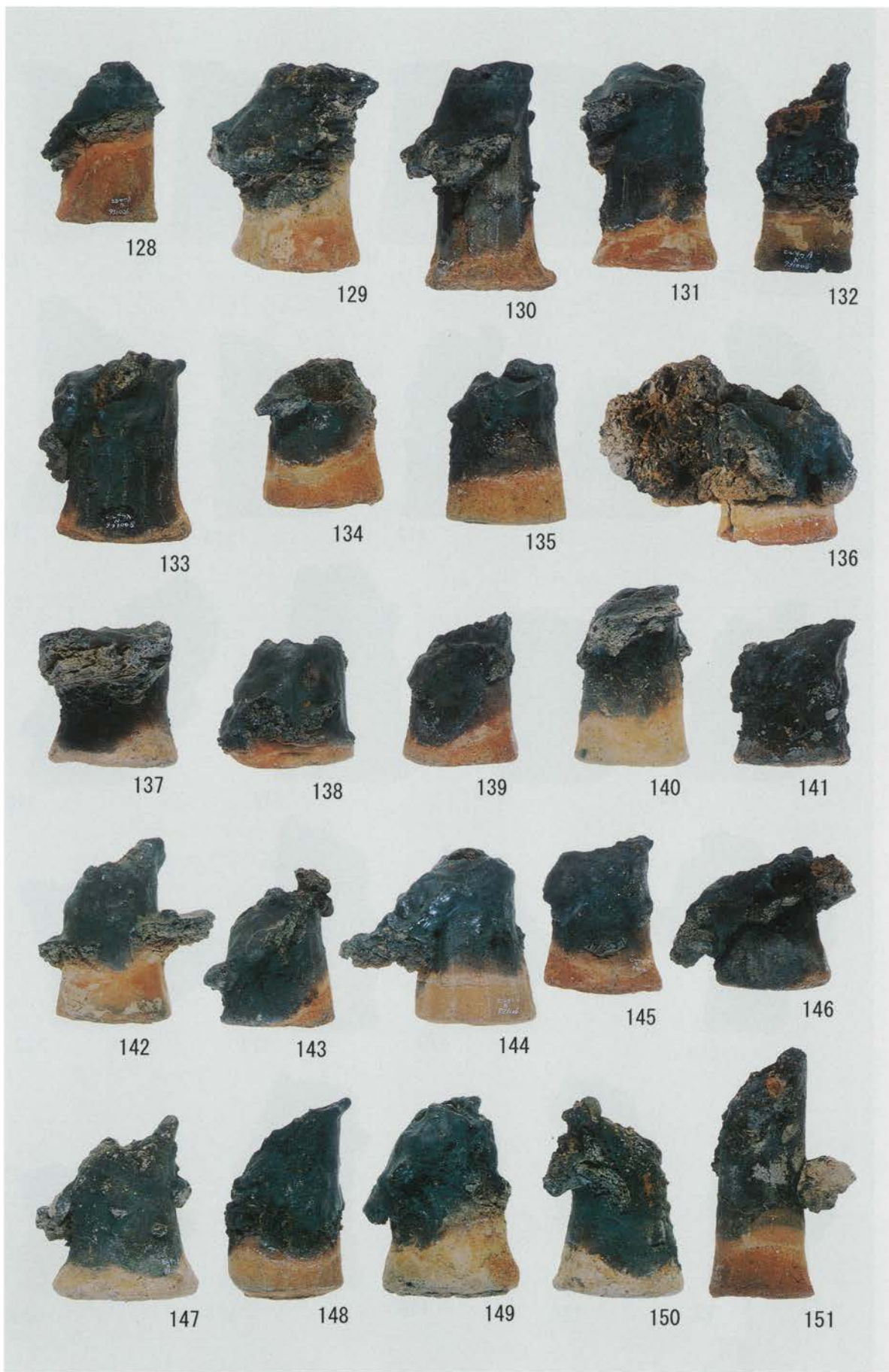


図版
104
出土遺物
(17)





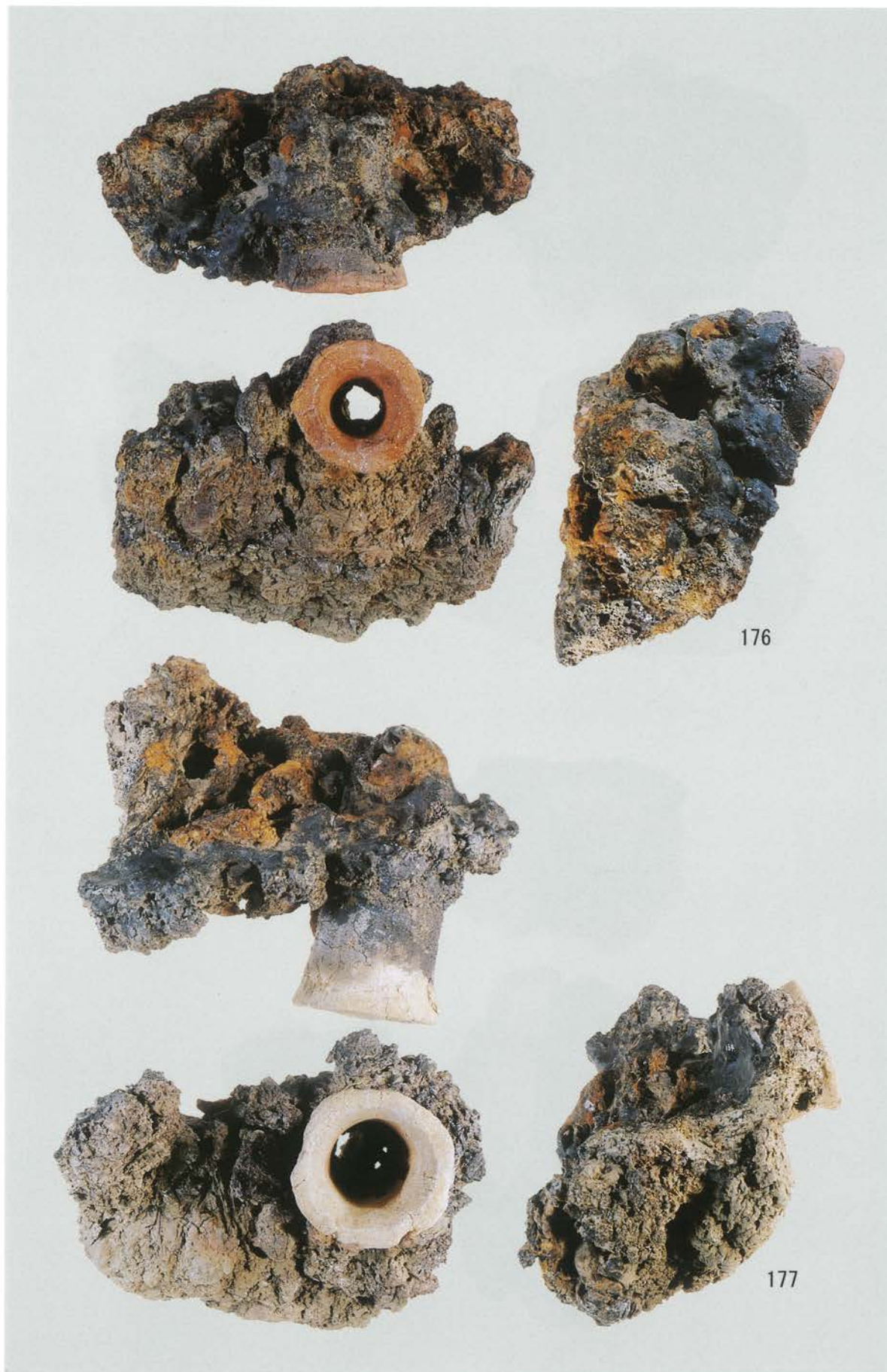
図版
106
出土遺物
(19)





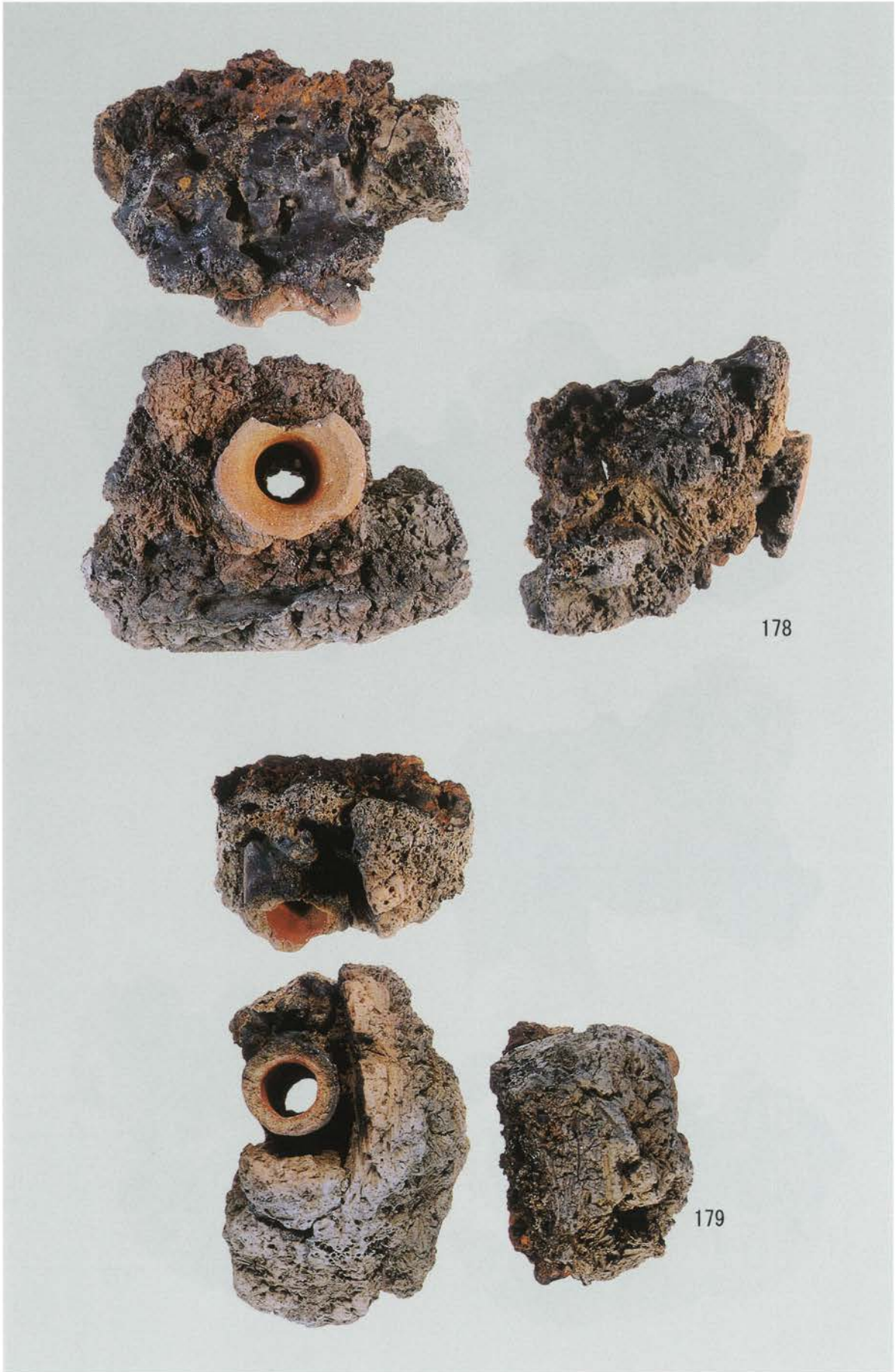
図版
108
出土遺物
(21)



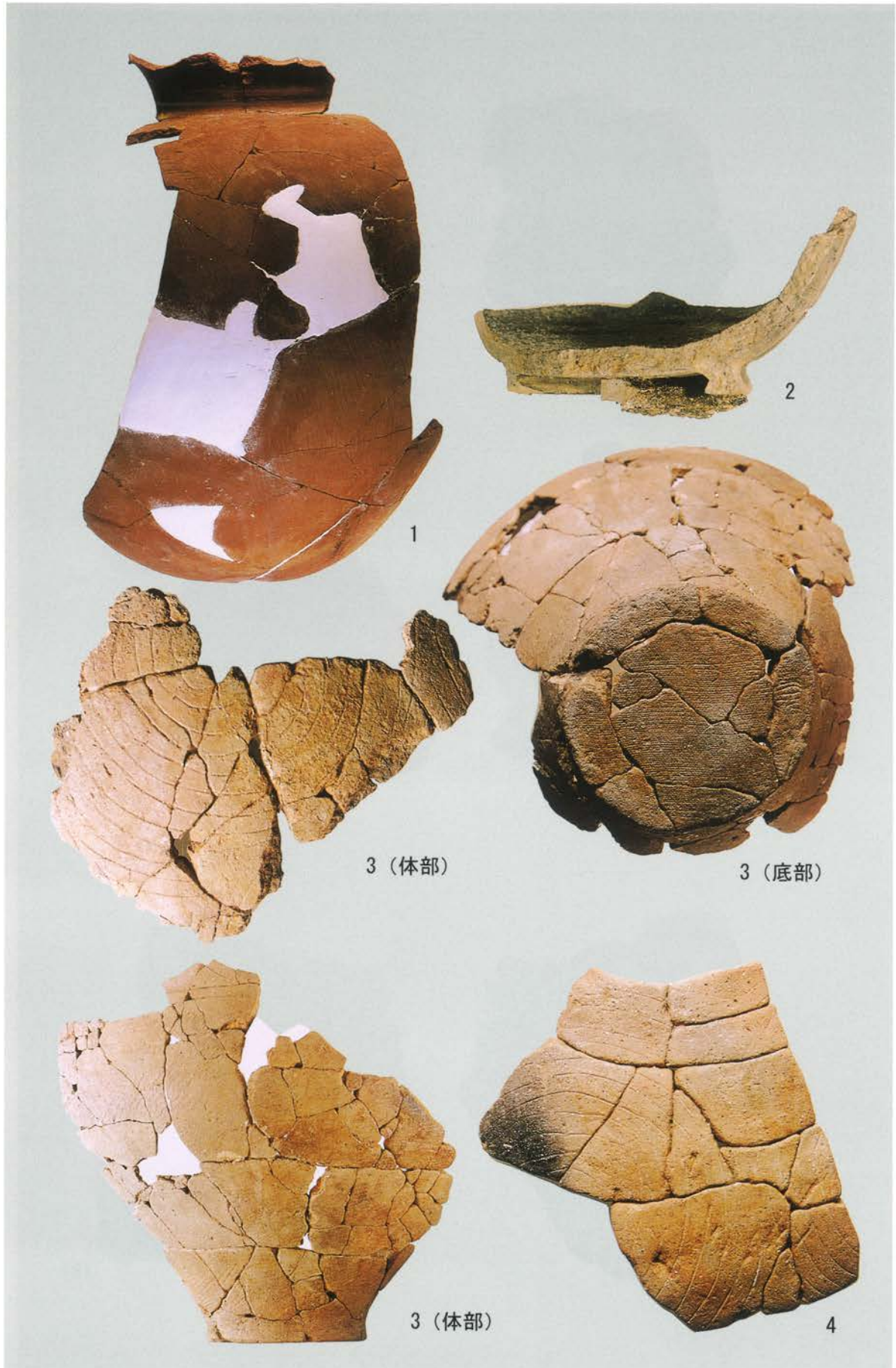


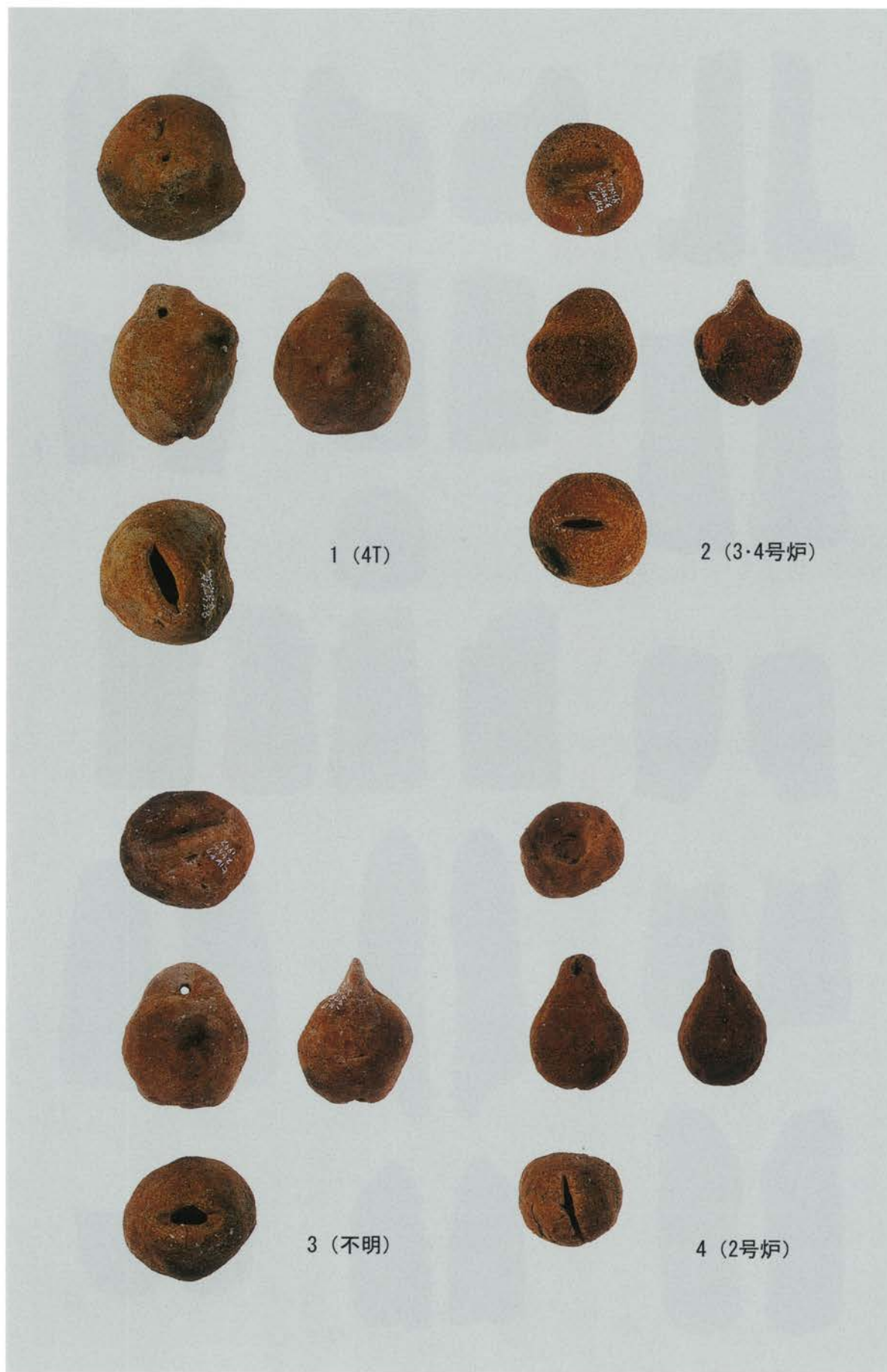
176

177





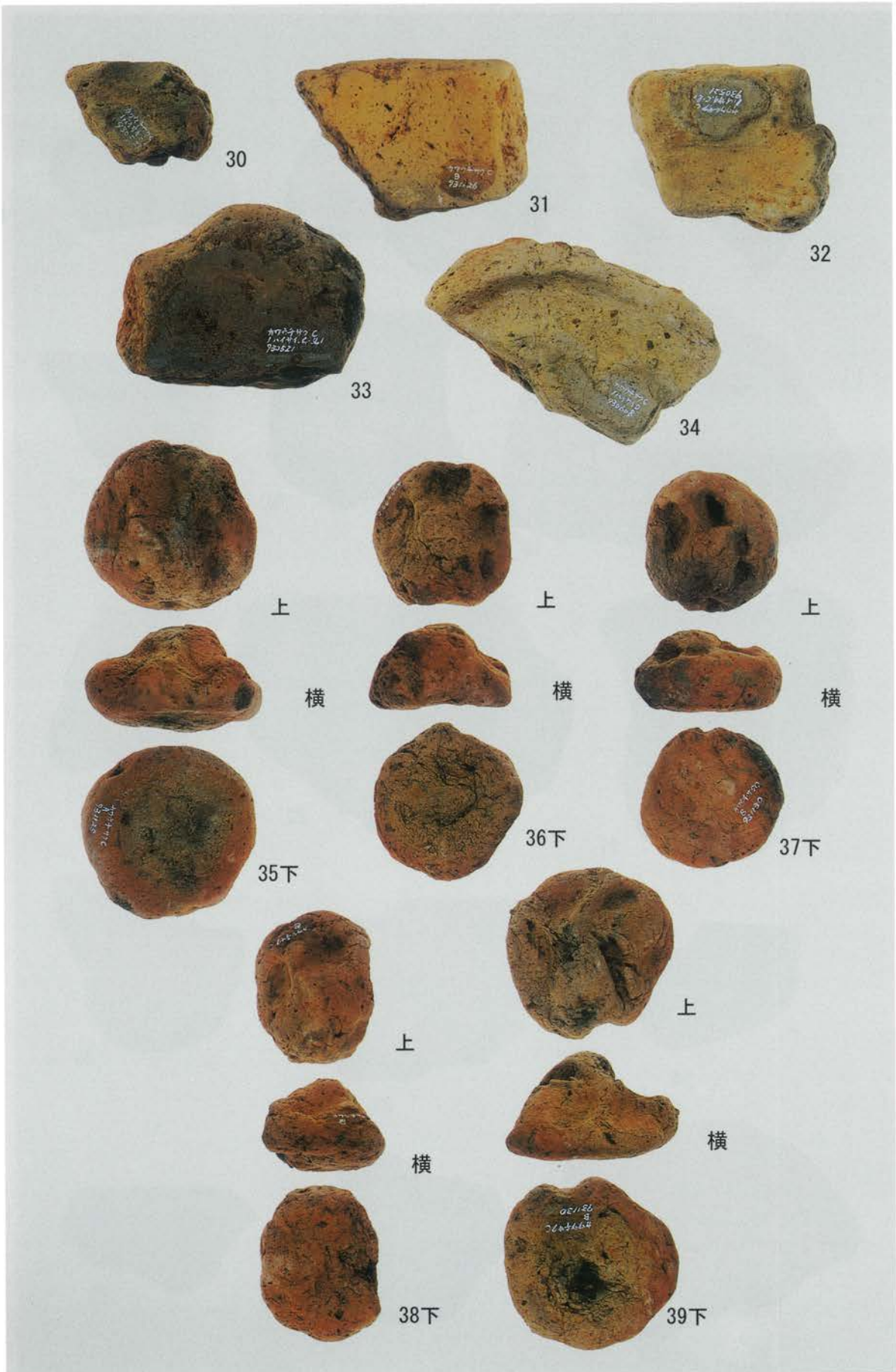




図版
114
出土遺物
(27)









(C地区 2住)

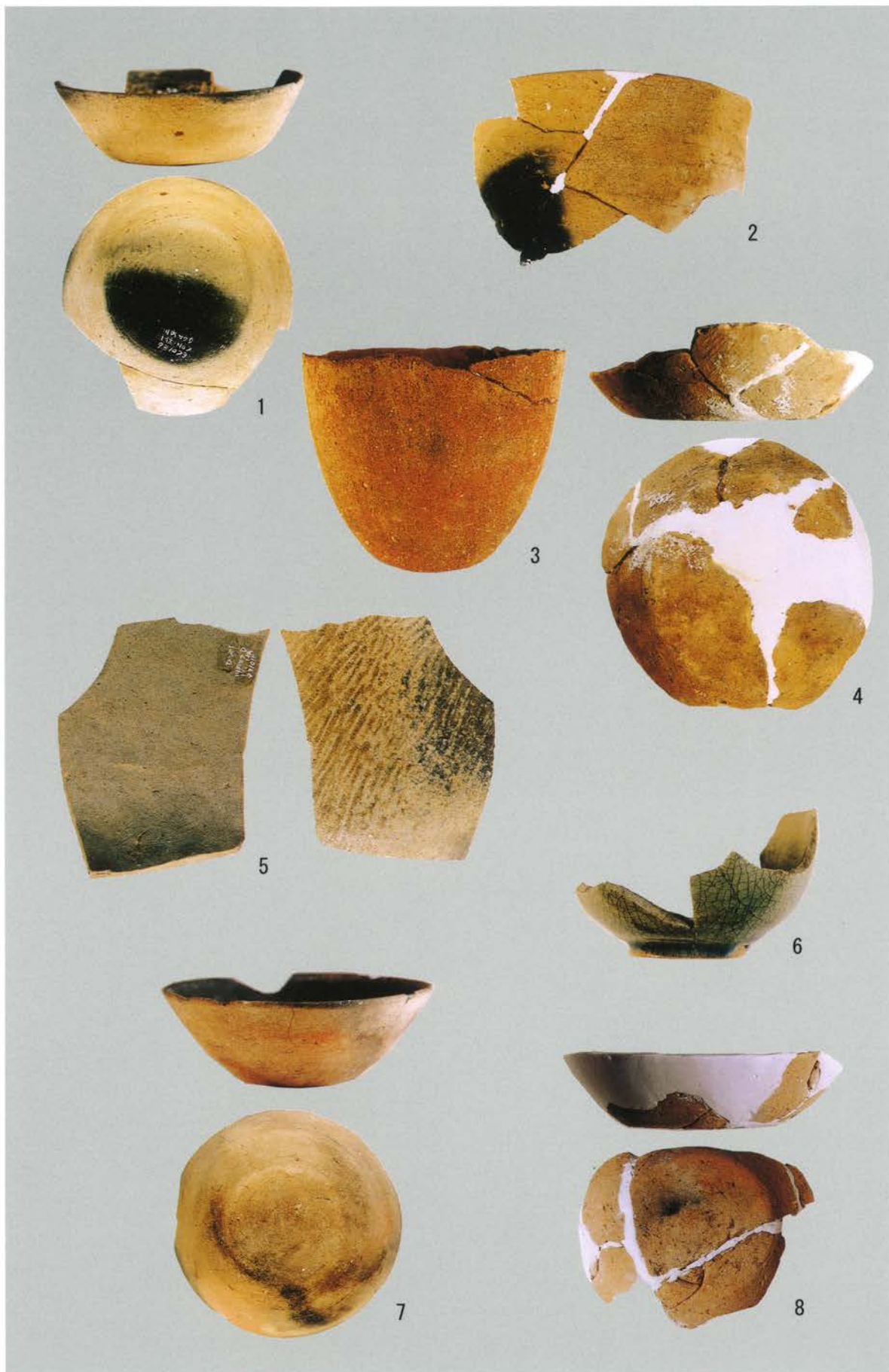
图版
118
出土遺物
(31)

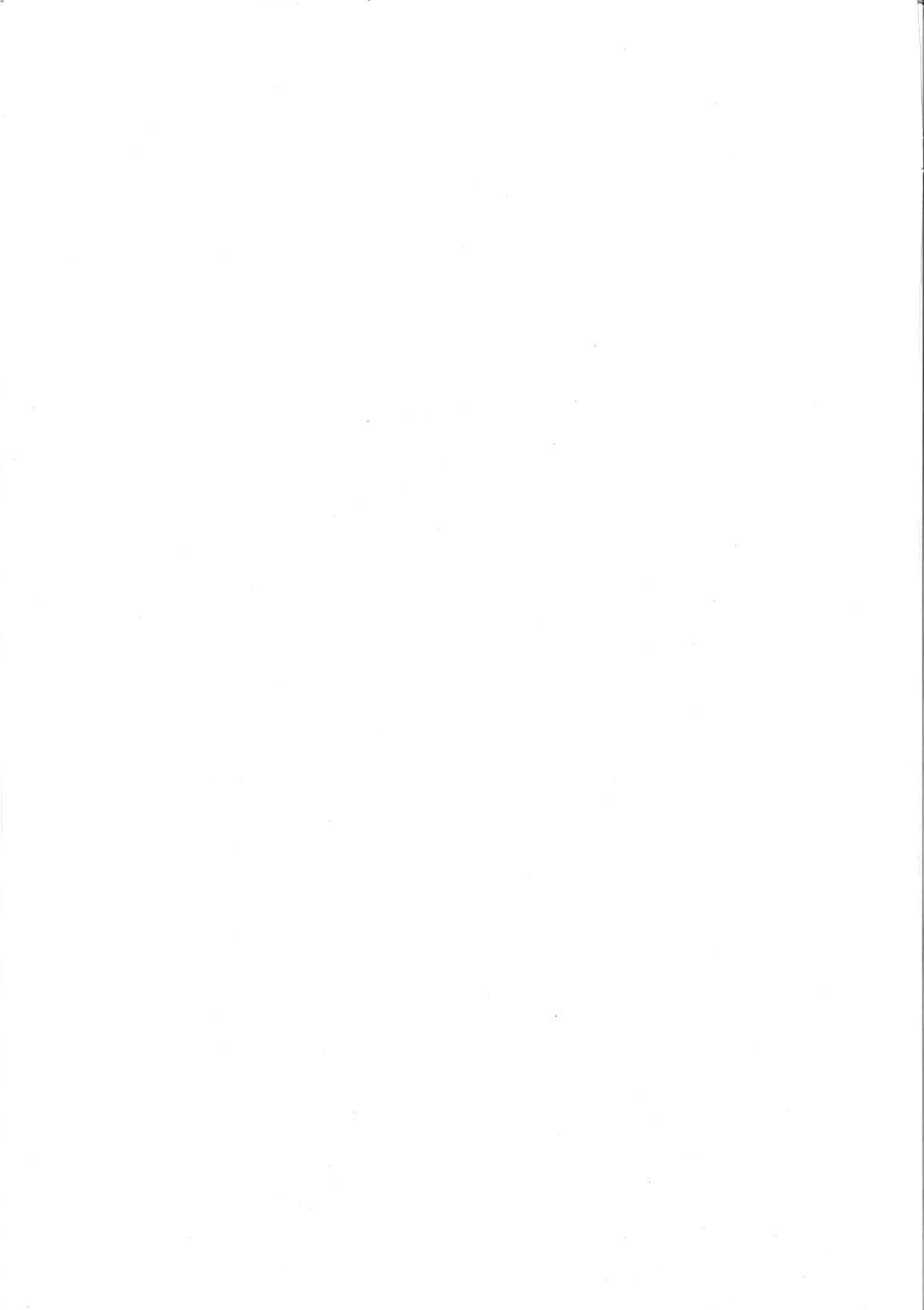




K地点 1住

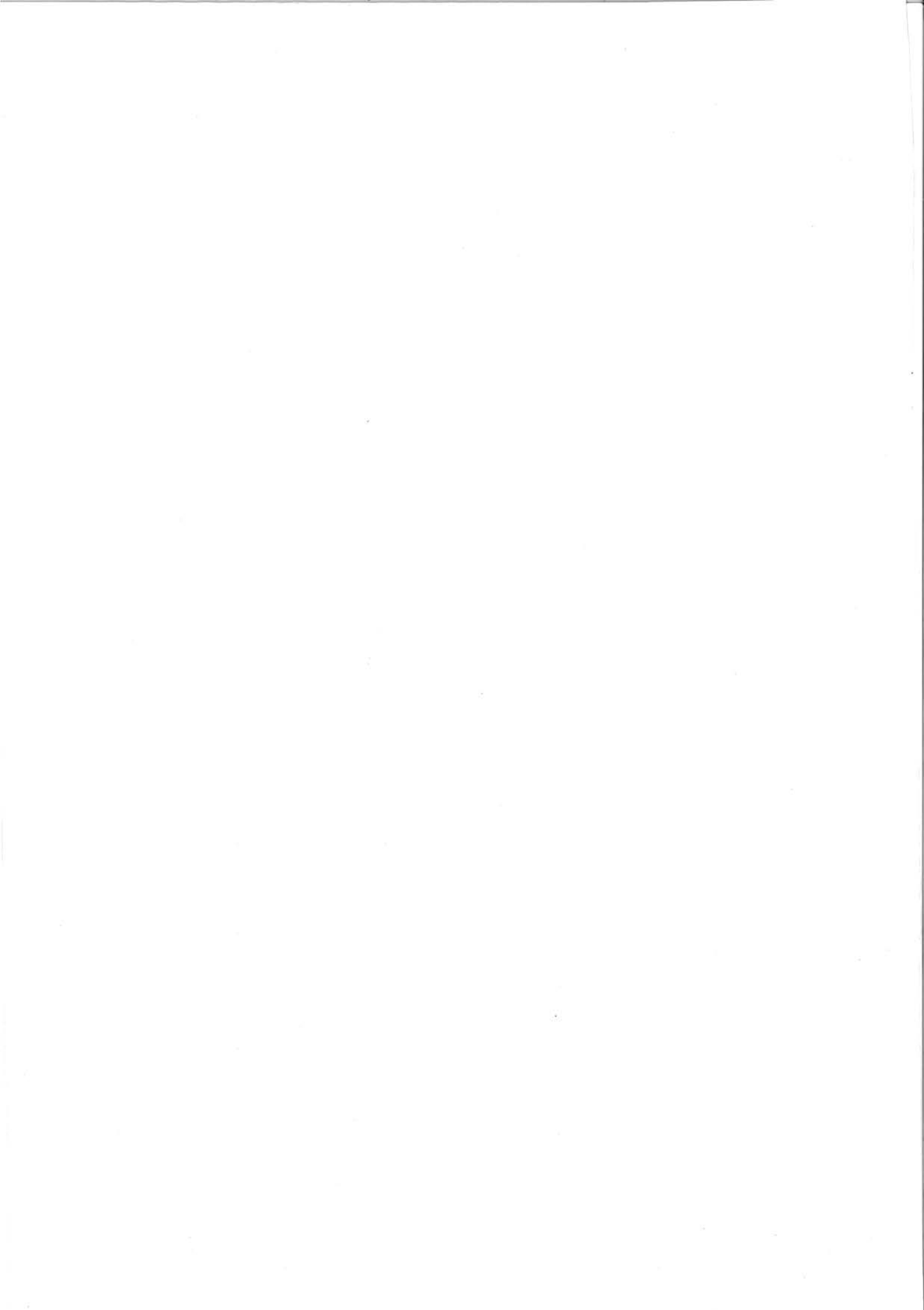






報 告 書 抄 録

ふりがな	ひるさわいせきぐん・かわうちさくBいせきぐん						
書 名	蛭沢遺跡群・川内迫B遺跡群						
副 書 名	工業用地造成に伴う発掘調査報告						
シリーズ名	原町市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第33集						
編著者名	斎藤直之・荒 淑人・藤木 海						
編集機関	福島県原町市教育委員会文化財課						
所在地	〒975-0012 福島県原町市三島町二丁目45番地 TEL 0244-24-5284						
発行年月日	西暦2003(平成15)年3月31日						
所収遺跡	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査積 (m ²)	調査原因
川内・B遺跡群	原町市	07206 00232	37° 39' 50"	141° 00' 50"	920507 ~ 961129	12350	工場用地造成
蛭沢遺跡群	原町市	07206 00233	37° 30' 40"	140° 59' 40"	920507 ~ 950325	5600	工場用地造成
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
川内・B遺跡群	製鉄遺跡	縄文時代 弥生時代 平安時代	遺物包含層 製鉄炉場 廃滓炭窯跡 木炭住居跡 竪穴住居跡		縄文土器 弥生土器 石器(打製・磨製) 土師器 須恵器 羽口 鑄型(獣脚・器物) 土製品・鉄製品		
蛭沢遺跡群	製鉄遺跡	平安時代	製鉄炉場 廃滓炭窯跡 木炭住居跡 竪穴住居跡		土師器 須恵器 羽口		



原町市埋蔵文化財調査報告書第 33 集

蛭沢遺跡群・川内迫B遺跡群

—工場用地造成に伴う発掘調査報告—

平成 15 年 3 月 31 日 発行

発 行 福島県原町市教育委員会
〒975-0012 福島県原町市本町二丁目 27 番地

印 刷 有限会社ライト印刷
〒975-0012 福島県原町市北新田字信田 370-1
